

京都府遺跡調査報告集

第173冊

新名神高速道路整備事業関係遺跡

下水主遺跡第1・4・6次

2 0 1 8

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



A・B地区全景(北から)



(1) 調査地全景 (A～C地区、北から)



(2) 調査地全景 (A～C地区、西北西から)



(1) B地区S D22全景(西から)



(2) B地区S D22全景(上が南)



B地区S D22護岸材検出状況(東から)



(1) B地区S D22全景(東から)



(2) B地区S D22全景(西から)



(1) B 地区 S D22断面 3 大形護岸材 E 南部断ち割り (東から)



(2) B 地区 S D22断面 3 大形護岸材 E 北部断ち割り＜種子層＞ (東から)

序

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年4月に設立されて以来、37年間にわたって京都府内の各地域に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

これらの調査成果を広く府民の皆様方にお伝えし、我々の祖先の歩んできた跡を多くの方々に知っていただくよう努めることが責務だと考えております。

本書は、平成24年度から26年度に西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施した、城陽市下水主遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書を学術研究の資料として、また、地域の歴史や埋蔵文化財への関心と理解を深めるために、ご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された西日本高速道路株式会社をはじめ、城陽市教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの皆様に厚くお礼申し上げます。

平成30年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 井 上 満 郎

例 言

1. 本書に収めた報告は下記のとおりである。

新名神高速道路整備事業関係遺跡

下水主遺跡第1・4・6次

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び報告の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調査期間	経費負担者	執筆者
下水主遺跡第1・4・6次	京都府城陽市水主大將軍・倉貝・宮馬場、寺田金尾・今橋	平成24年5月21日～ 平成25年3月8日、 平成25年4月22日～ 平成26年2月27日、 平成26年4月22日～ 平成27年2月27日	西日本高速道路株式会社関西支社	筒井崇史・ 高野陽子・ 関広尚世・ 福山博章・ 黒坪一樹・ 増田富士雄 ほか

3. 上記1事業2遺跡とも本部事務所(向日市寺戸町)及び新名神城陽事務所(城陽市寺田金尾・大畔)で整理・報告作業を実施した。なお、本部での整理・報告作業については、現地担当者の指示のもと調査課企画調整係が協力して実施した。

4. 本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。なお、現地調査及び過去の調査との整合性のため日本測地系を使用している場合もある。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

5. 土層断面等の土色や出土遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。

6. 本書の編集は、調査課担当者の編集原案をもとに、調査課企画調整係が行った。

7. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査課企画調整係主査田中彰が行なった。

本文目次

新名神高速道路整備事業関係遺跡平成24～26年度発掘調査報告	1
1. はじめに	1
2. 位置と環境	4
3. 調査の経過と調査の方法	9
4. 検出遺構	23
5. 出土遺物	97
6. 総括	220
7. 付編	247

挿図目次

下水主遺跡第1・4・6次

第1図	調査地及び周辺主要遺跡分布図	5
第2図	調査年度別調査区配置図	10
第3図	調査地区配置図	12
第4図	下水主遺跡・水主神社東遺跡全体地区割図	17
第5図	小地区割概念図	18
第6図	調査地基本層序柱状図	20
第7図	下水主遺跡1・4・6次調査遺構配置図	24
第8図	下水主遺跡A～C地区上層遺構(島畑)平面図	25
第9図	A地区島畑31・32平面図	27
第10図	A地区島畑31・32土層断面図	28
第11図	A～C地区中層遺構平面図	29
第12図	A地区井戸SE112実測図	30
第13図	A地区土坑SK197・239・335実測図	32
第14図	A地区柱穴群実測図1	34
第15図	A地区柱穴群実測図2	35
第16図	A地区溝SD349・350実測図	36
第17図	A地区溝SD351・353、土坑SK352・354実測図	38
第18図	B地区中央断ち割り土層断面図	40
第19図	B地区島畑33土層断面図	41

第20図	B地区島畑34・35平面図	42
第21図	B地区土坑S K15実測図	43
第22図	B地区溝S D16・土坑S K17・19実測図	44
第23図	B地区土坑S K17・19実測図	45
第24図	B地区下層遺構平面図	46
第25図	A・B・C地区下層遺構平面図	47
第26図	B地区土坑S K37・S K49実測図	48
第27図	B地区土坑S K42・溝S D78実測図	49
第28図	B地区S D22第1次調査地配置図	50
第29図	B地区S D22地区割図	51
第30図	B地区S D22遺物出土状況図	52
第31図	B地区S D22平面図及び西壁土層断面図	54
第32図	B地区S D22断面1実測図	56
第33図	B地区S D22断面2実測図	57
第34図	B地区S D22断面3実測図	59
第35図	B地区S D22断面3・南部土層拡大図	62
第36図	B地区S D22東壁断ち割り土層断面図	64
第37図	B地区S D22遺物出土状況割付図	66
第38図	B地区S D22遺物出土状況図 1	67
第39図	B地区S D22遺物出土状況図 2	68
第40図	B地区S D22遺物出土状況図 3	69
第41図	B地区S D22遺物出土状況図 4	70
第42図	B地区S D22水制遺構S W55・69実測図	71
第43図	B地区S D22水制遺構S W61実測図	72
第44図	B地区S D22土坑状落ち込みS X68実測図	73
第45図	B地区S D22土器溜まり検出状況図	73
第46図	B地区S D22土器溜まりS X23・24・29実測図	74
第47図	B地区S D22土器溜まりS X51実測図	75
第48図	B地区S D22土器溜まりS X51土器出土状況図	76
第49図	B地区S D22断面3(畦3)下層土器出土状況図	77
第50図	B地区S D22護岸施設S L70検出状況図	79
第51図	B地区S D22大形護岸材実測図	80
第52図	B地区S D22盛土遺構S W62実測図	82
第53図	B地区盛土遺構S W71・75土層断面図	83
第54図	B地区S D22水制遺構S W63実測図	84

第55図	B地区S D 22 水制遺構S W 64実測図	85
第56図	B地区S D 22木製品出土状況図	86
第57図	B地区S D 22完掘状況図	87
第58図	C 1区島畑37・38平面図・北壁土層断面図	89
第59図	C 2・3区島畑36・45平面図	91
第60図	C 3区北壁土層断面図	92
第61図	C 3区溝S D 05実測図	93
第62図	C 2・3区下層遺構平面図	94
第63図	C 2・3区溝S D 30・31土層断面図	95
第64図	C 2・3区土坑S K 06ほか実測図	96
第65図	弥生土器形式分類 1	98
第66図	弥生土器形式分類 2	99
第67図	土師器形式分類 1	101
第68図	土師器形式分類 2	102
第69図	土師器形式分類 3	104
第70図	土師器形式分類 4	105
第71図	土師器形式分類 5	106
第72図	出土遺物実測図 1 土器	107
第73図	出土遺物実測図 2 土器	109
第74図	出土遺物実測図 3 土器	110
第75図	出土遺物実測図 4 土器	111
第76図	出土遺物実測図 5 土器	112
第77図	出土遺物実測図 6 土器	113
第78図	出土遺物実測図 7 土器	115
第79図	出土遺物実測図 8 土器	116
第80図	出土遺物実測図 9 土器	117
第81図	出土遺物実測図 10 土器	118
第82図	出土遺物実測図 11 土器	120
第83図	出土遺物実測図 12 土器	121
第84図	出土遺物実測図 13 土器	122
第85図	出土遺物実測図 14 土器	124
第86図	出土遺物実測図 15 土器	126
第87図	出土遺物実測図 16 土器	127
第88図	出土遺物実測図 17 土器	128
第89図	出土遺物実測図 18 土器	130

第90図	出土遺物実測図19	土器	131
第91図	出土遺物実測図20	土器	133
第92図	出土遺物実測図21	土器	134
第93図	出土遺物実測図22	土器	136
第94図	出土遺物実測図23	土器	138
第95図	出土遺物実測図24	土器	140
第96図	出土遺物実測図25	土器	141
第97図	出土遺物実測図26	土器	143
第98図	出土遺物実測図27	土器	144
第99図	出土遺物実測図28	土器	145
第100図	有段口縁壺と高杯の変遷		148
第101図	山城地域における古墳時代土器編年の併行関係		150
第102図	木製品分類図		153
第103図	出土遺物実測図29	木製品	155
第104図	出土遺物実測図30	木製品	156
第105図	出土遺物実測図31	木製品	158
第106図	出土遺物実測図32	木製品	159
第107図	出土遺物実測図33	木製品	160
第108図	出土遺物実測図34	木製品	162
第109図	出土遺物実測図35	木製品	164
第110図	出土遺物実測図36	木製品	166
第111図	出土遺物実測図37	木製品	167
第112図	出土遺物実測図38	木製品	168
第113図	出土遺物実測図39	木製品	169
第114図	出土遺物実測図40	木製品	170
第115図	出土遺物実測図41	木製品	172
第116図	出土遺物実測図42	木製品	173
第117図	出土遺物実測図43	木製品	175
第118図	出土遺物実測図44	木製品	176
第119図	出土遺物実測図45	木製品	178
第120図	出土遺物実測図46	木製品	179
第121図	出土遺物実測図47	木製品	180
第122図	出土遺物実測図48	木製品	181
第123図	出土遺物実測図49	木製品	182
第124図	出土遺物実測図50	木製品	184

第125図	出土遺物実測図51	木製品	186
第126図	出土遺物実測図52	木製品	187
第127図	出土遺物実測図53	木製品	188
第128図	出土遺物実測図54	木製品	189
第129図	出土遺物実測図55	石器	191
第130図	出土遺物実測図56	石器	193
第131図	出土遺物実測図57	石器・土製品	194
第132図	出土遺物実測図58	土器	196
第133図	出土遺物実測図59	土器	198
第134図	出土遺物実測図60	土器	200
第135図	出土遺物実測図61	土器	202
第136図	出土遺物実測図62	土器	203
第137図	出土遺物実測図63	土器	204
第138図	出土遺物実測図64	土器	205
第139図	出土遺物実測図65	土器	206
第140図	出土遺物実測図66	土器	207
第141図	出土遺物実測図67	土器	208
第142図	出土遺物実測図68	土器	209
第143図	出土遺物実測図69	土器	210
第144図	出土遺物実測図70	土器	212
第145図	出土遺物実測図71	木製品	214
第146図	出土遺物実測図72	木製品	215
第147図	出土遺物実測図73	木製品	216
第148図	出土遺物実測図74	木製品	217
第149図	出土遺物実測図75	木製品	218
第150図	下水主遺跡A～C地区主要遺構変遷図(弥生時代～中世)		221
第151図	山城盆地における弥生時代中期後半～古墳時代前期前半の主要遺跡分布図		223
第152図	S D 22内種子(モモ種実)出土分布図		224
第153図	S D 22変遷図(弥生時代中期後葉～古墳時代前期前葉)		225
第154図	S D 22時期別堆積土層図		226
第155図	S D 22実測図(弥生時代中期)		228
第156図	S D 22土層断面3南部拡大図		229
第157図	下水主遺跡遺構変遷図1(弥生時代)		232
第158図	下水主遺跡遺構変遷図2(古墳時代)		234
第159図	下水主遺跡遺構変遷図3(飛鳥時代～中世)		236

付 表 目 次

付表 1	下水主遺跡調査次数一覧表-----	11
付表 2	水主神社東遺跡調査次数一覧表-----	11
付表 3	下水主遺跡調査地区別一覧表-----	13
付表 4	水主神社東遺跡調査地区別一覧表-----	16
付表 5	編年対照表-----	148
付表 6	下水主遺跡 S D22出土木材・種子 年代分析一覧-----	246
付表 7	出土土器観察表(弥生時代～古墳時代)-----	320
付表 8	出土木製品観察表-----	331
付表 9	出土土器観察表(古墳時代～中世)-----	337

図 版 目 次

巻頭図版 1 下水主遺跡第 1・4・6 次

A・B 地区全景(北から)

巻頭図版 2 下水主遺跡第 1・4・6 次

(1) 調査地全景(A～C 地区、北から)

(2) 調査地全景(A～C 地区、西北西から)

巻頭図版 3 下水主遺跡第 1・4・6 次

(1) B 地区 S D22 全景(西から)

(2) B 地区 S D22 全景(上が南)

巻頭図版 4 下水主遺跡第 1・4・6 次

B 地区 S D22 護岸材検出状況(東から)

巻頭図版 5 下水主遺跡第 1・4・6 次

(1) B 地区 S D22 全景(東から)

(2) B 地区 S D22 全景(西から)

巻頭図版 6 下水主遺跡第 1・4・6 次

(1) B 地区 S D22 断面 3 大形護岸材 E 南部断ち割り(東から)

(2) B 地区 S D22 断面 3 大形護岸材 E 北部断ち割り<種子層>(東から)

下水主遺跡第 1・4・6 次

図版第 1 調査地全景(A～C 地区、北西から)

図版第 2 調査地全景(A～C 地区、南西から)

- 図版第3 (1) A・B地区全景(北から)
(2) A・B地区全景(西から)
- 図版第4 (1) B地区全景(西から)
(2) B地区全景(上が南)
- 図版第5 (1) A地区上層遺構全景(北から)
(2) A地区中層遺構面遺構検出状況(北から)
- 図版第6 (1) A地区島畑31護岸杭列検出状況(南西から)
(2) A地区島畑32土層断面(南から)
(3) A地区調査区西壁土層断面(東から)
- 図版第7 (1) A地区中層遺構面(東半部)全景(北から)
(2) A地区中層遺構面(西半部)全景(北から)
- 図版第8 (1) A地区中層遺構面全景(北から)
(2) A地区中層遺構面中央部柱穴検出状況(南東から)
- 図版第9 (1) A地区中層遺構面北東部柱穴完掘状況(北西から)
(2) A地区中層遺構面中央部柱穴完掘状況(東から)
- 図版第10 (1) A地区中層遺構面北西部柱穴完掘状況(北西から)
(2) A地区中層遺構面北東部柱穴完掘状況(北西から)
(3) A地区中層遺構面中央部柱穴完掘状況(北東から)
- 図版第11 (1) A地区土坑S K 239全景(西から)
(2) A地区土坑S K 235遺物出土状況(北西から)
(3) A地区土坑S K 197掘削作業
- 図版第12 (1) A地区土坑S K 197全景(南西から)
(2) A地区土坑S K 335上層遺物出土状況(東から)
(3) A地区土坑S K 335下層遺物出土状況(東から)
- 図版第13 (1) A地区井戸S E 112上層遺物出土状況(北東から)
(2) A地区井戸S E 112下層遺物出土状況(南東から)
- 図版第14 (1) A地区井戸S E 112下層遺物出土状況(南東から)
(2) A地区井戸S E 112完掘状況(南東から)
- 図版第15 (1) A地区S E 112検出状況(北東から)
(2) A地区S E 112最上層掘削状況(北東から)
(3) A地区S E 112上層土層断面(北西から)
- 図版第16 (1) A地区S E 112上層土層断面(南東から)
(2) A地区S E 112上層遺物出土状況(南東から)
(3) A地区S E 112中層遺物出土状況(南西から)
- 図版第17 (1) A地区S E 112中層遺物出土状況(南東から)

- (2) A地区井戸 S E 112下層遺物出土状況(北西から)
(3) A地区井戸 S E 112下層遺物出土状況(西から)
- 図版第18 (1) A地区井戸 S E 112井戸枠全景(南東から)
(2) A地区井戸 S E 112井戸枠復元状況(南東から)
(3) A地区井戸 S E 112掘形半截状況(南東から)
- 図版第19 (1) A地区柱穴 S P 26土層断面(東から)
(2) A地区柱穴 S P 94土層断面(北から)
(3) A地区柱穴 S P 317土層断面(西から)
- 図版第20 (1) A地区柱穴 S P 150土層断面(西から)
(2) A地区柱穴 S P 170土層断面(南から)
(3) A地区柱穴 S P 119土層断面(南から)
- 図版第21 (1) A地区柱穴 S P 152土層断面(南から)
(2) A地区柱穴 S P 166土層断面(東から)
(3) A地区柱穴 S P 159土層断面(東から)
- 図版第22 (1) A地区柱穴 S P 158土層断面(西から)
(2) A地区柱穴 S P 190土層断面(南から)
(3) A地区柱穴 S P 156土層断面(東から)
- 図版第23 (1) A地区柱穴 S P 195土層断面(西から)
(2) A地区柱穴 S P 198土層断面(南から)
(3) A地区柱穴 S P 204土層断面(南から)
- 図版第24 (1) A地区柱穴 S P 172土層断面(東から)
(2) A地区柱穴 S P 232土層断面(西から)
(3) A地区柱穴 S P 233土層断面(西から)
- 図版第25 (1) A地区柱穴 S P 246土層断面(南から)
(2) A地区柱穴 S P 67土層断面(南から)
(3) A地区柱穴 S P 103土層断面(南から)
- 図版第26 (1) A地区柱穴 S P 126土層断面(東から)
(2) A地区柱穴 S P 235土層断面(西から)
(3) A地区柱穴 S P 294土層断面(西から)
- 図版第27 (1) A地区柱穴 S P 248土層断面(南から)
(2) A地区柱穴 S P 250土層断面(南から)
(3) A地区柱穴 S P 251土層断面(北から)
- 図版第28 (1) A地区柱穴 S P 256土層断面(西から)
(2) A地区柱穴 S P 260土層断面(南から)
(3) A地区柱穴 S P 300土層断面(南から)

- 図版第29 (1) A地区柱穴 S P 296土層断面(南から)
(2) A地区柱穴 S P 289土層断面(南から)
(3) A地区柱穴 S P 319土層断面(南から)
- 図版第30 (1) A地区柱穴 S P 309土層断面(北から)
(2) A地区柱穴 S P 330土層断面(東から)
(3) A地区柱穴 S P 337土層断面(北から)
- 図版第31 (1) A地区作業風景全景(南東から)
(2) A地区柱穴掘削作業風景(南東から)
(3) A地区遺構平面図作成作業風景(西から)
- 図版第32 (1) A地区溝 S D 349・350全景(北西から)
(2) A地区溝 S D 349・350(東半部)全景(北から)
- 図版第33 (1) A地区 S D 349・350完掘状況(南東から)
(2) A地区 S D 349遺物出土状況(北から)
(3) A地区 S D 349遺物出土状況(北西から)
- 図版第34 (1) A地区 S D 349遺物出土状況(北東から)
(2) A地区 S D 350a-a'土層断面(北西から)
(3) A地区 S D 350b-b'土層断面(南東から)
- 図版第35 (1) A地区 S D 351全景(南東から)
(2) A地区 S D 351a-a'土層断面(南東から)
(3) A地区 S D 351d-d'土層断面(南東から)
- 図版第36 (1) B地区島畑34・35全景(南東から)
(2) B地区島畑34素掘り溝検出状況(南から)
- 図版第37 (1) B地区東壁土層断面(南西から)
(2) B地区東壁土層断面(西から)
- 図版第38 (1) B地区島畑35検出状況(南から)
(2) B地区島畑34検出状況(南から)
(3) B地区島畑34護岸検出状況(南西から)
- 図版第39 (1) B地区溝状遺構 S D 02土層断面(南から)
(2) B地区島畑34西岸護岸杭列断面(西から)
(3) B地区島畑35南部素掘り溝検出状況(南から)
- 図版第40 (1) B地区溝 S D 16・土坑 S K 17全景(東から)
(2) B地区中層遺構面全景(南から)
- 図版第41 (1) B地区土坑 S K 17全景(南東から)
(2) B地区溝 S D 16全景(東から)
(3) B地区土坑 S K 38遺物出土状況(東から)

- 図版第42 (1) B地区島畑33土層断面(南東から)
(2) B地区島畑33土層断面(南から)
(3) B地区島畑33土層断面(北東から)
- 図版第43 (1) B地区下層遺構面全景(東から)
(2) B地区溝S D22検出状況(東から)
- 図版第44 (1) B地区溝S D22土層断面(西から)
(2) B地区土器溜まりS X34遺物出土状況(東から)
(3) B地区土坑S K49土層断面(東から)
- 図版第45 B地区S D22全景(西から)
- 図版第46 B地区S D22護岸材検出状況(東から)
- 図版第47 (1) B地区S D22全景(東から)
(2) B地区S D22全景(西から)
- 図版第48 (1) B地区S D22中央部検出状況(北西から)
(2) B地区S D22土層断面<断面1 南部上層>(北西から)
- 図版第49 (1) B地区S D22土層断面<断面2 南部上層>(南東から)
(2) B地区S D22土層断面<断面1 南部上層>(東から)
- 図版第50 (1) B地区S D22土層断面<断面1 南部護岸材D検出状況>(西から)
(2) B地区S D22土層断面<断面3 中央>(東から)
- 図版第51 (1) B地区S D22西壁土層断面<北部>(東から)
(2) B地区S D22西壁土層断面<南部>(東から)
(3) B地区S D22西壁土層断面<南部>(東から)
- 図版第52 (1) B地区S D22土層断面<断面1 南部>(西から)
(2) B地区S D22土層断面<断面1 南部肩部>(西から)
(3) B地区S D22土層断面<断面1 南部下層>(西から)
- 図版第53 (1) B地区S D22 4区古墳時代中期溝検出状況(東から)
(2) B地区S D22土層断面<断面3 (古墳時代中期)>(南東から)
- 図版第54 (1) B地区S D22土層断面<断面3 (古墳時代中期)>(東から)
(2) B地区S D22土層断面<断面3 須恵器出土状況>(東から)
- 図版第55 (1) B地区S D22土層断面<断面3 南部>(北東から)
(2) B地区S D22 4区下層検出状況(東から)
- 図版第56 (1) B地区S D22土層断面<断面3 中央下層(古墳時代前期)>(東から)
(2) B地区S D22土層断面<断面3 中央下層(古墳時代前期層位不整合面)>(東から)
- 図版第57 (1) B地区S D22土層断面<断面1 南部断ち割り遺物出土状況>(西から)
(2) B地区S D22土器溜まりS X23東部土器出土状況(東から)
(3) B地区S D22土器溜まりS X23東部土器出土状況(西から)

- 図版第58 (1) B地区S D22土器溜まりS X23出土状況(西から)
(2) B地区S D22土器溜まりS X23出土状況(上から南)
(3) B地区S D22土器溜まりS X24出土状況(北から)
- 図版第59 (1) B地区S D22土器溜まりS X25出土状況(東から)
(2) B地区S D22土器溜まりS X29出土状況(東から)
(3) B地区S D22下層土器出土状況(南から)
- 図版第60 (1) B地区S D22土器溜まりS X51検出状況(北東から)
(2) B地区S D22土器溜まりS X51検出状況(南東から)
- 図版第61 (1) B地区S D22土器溜まりS X51検出状況(北西から)
(2) B地区S D22土器溜まりS X51土器出土状況(北西から)
- 図版第62 (1) B地区S D22土器溜まりS X51検出状況(北西から)
(2) B地区S D22土器溜まりS X51土器出土状況(北西から)
(3) B地区S D22土器溜まりS X51土器出土状況(南から)
- 図版第63 (1) B地区S D22土器溜まりS X51上層土器出土状況(北から)
(2) B地区S D22土器溜まりS X51上層土器出土状況(南から)
(3) B地区S D22土器溜まりS X51下層土器出土状況(北から)
- 図版第64 (1) B地区S D22東壁断面(西から)
(2) B地区S D22東壁中央断面<水制遺構S W61杭検出状況>(西から)
- 図版第65 (1) B地区S D22 4区下層検出状況(西から)
(2) B地区S D22 4区下層検出状況(東から)
- 図版第66 (1) B地区S D22水制遺構S W61検出状況(南から)
(2) B地区S D22水制遺構S W61検出状況(北西から)
- 図版第67 (1) B地区S D22水制遺構S W61東壁杭検出状況(西から)
(2) B地区S D22水制遺構S W61東壁断ち割り(南西から)
(3) B地区S D22東部検出状況(西から)
- 図版第68 (1) B地区S D22 1区下層検出状況(東から)
(2) B地区S D22 1区下層検出状況(西から)
- 図版第69 (1) B地区S D22 1区護岸材A・D検出状況(北西から)
(2) B地区S D22土層断面<断面1北部>(西から)
- 図版第70 (1) B地区S D22土層断面<断面2>(北西から)
(2) B地区S D22 2区下層検出状況(北西から)
- 図版第71 (1) B地区S D22中央南部検出状況(北東から)
(2) B地区S D22土層断面<断面2中央>(東から)
(3) B地区S D22土層断面<断面2(土層サンプリング)>(南東から)
- 図版第72 (1) B地区S D22水制遺構S W69検出状況(東から)

- (2) B地区S D22 1区中央下層検出状況(西から)
- (3) B地区S D22水制遺構S W55検出状況(西から)
- 図版第73 (1) B地区S D22水制遺構S W55検出状況(東から)
- (2) B地区S D22大形護岸材B検出状況(東から)
- 図版第74 (1) B地区S D22 3区下層遺物出土状況(北東から)
- (2) B地区S D22 3区下層遺物出土状況(東から)
- (3) B地区S D22 3区下層遺物出土状況(北から)
- 図版第75 (1) B地区S D22 1区下層遺物出土状況(西から)
- (2) B地区S D22 1区下層土器(壺)出土状況(上が西)
- (3) B地区S D22 2区下層土器(甕)出土状況(上が西)
- 図版第76 (1) B地区S D22 3区下層土器(甕)出土状況(上が南)
- (2) B地区S D22 3区下層土器(甕)出土状況(北から)
- (3) B地区S D22 4区下層土器(壺)出土状況(北東から)
- 図版第77 (1) B地区S D22 3区下層<Ⅵ層>遺物(壺)出土状況(北から)
- (2) B地区S D22 1区下層遺物(甕)出土状況(東から)
- (3) B地区S D22 2区下層遺物(壺)出土状況(北から)
- 図版第78 (1) B地区S D22 4区下層<Ⅵ層下層>土器出土状況(北西から)
- (2) B地区S D22 4区下層<Ⅵ層下層>遺物(甕)出土状況(北東から)
- (3) B地区S D22 4区下層<Ⅵ層下層>遺物(甕)出土状況(北西から)
- 図版第79 (1) S D22S X51木製品(泥除け・舟形木製品)出土状況(南から)
- (2) S D22S X51木製品(泥除け)出土状況(南から)
- (3) S D22S X51木製品(舟形木製品)出土状況(南から)
- 図版第80 (1) S D22S X51木製品(曲柄又鋏身)出土状況(北から)
- (2) S D22下層木製品(曲柄又鋏身)出土状況(南から)
- (3) S D22下層木製品(泥除け)出土状況(北から)
- 図版第81 (1) S D22下層木製品(櫓)出土状況(北から)
- (2) S D22下層木製品(盤)出土状況(北東から)
- (3) S D22下層木製品(盤)出土状況(北から)
- 図版第82 (1) S D22下層木製品(槽)出土状況(北から)
- (2) S D22下層木製品(槽)出土状況(南から)
- (3) S D22下層木製品(椅子脚部)出土状況(西から)
- 図版第83 (1) S D22下層木製品(建築部材)出土状況(西から)
- (2) S D22下層木製品(壁材)出土状況(北から)
- (3) S D22下層木製品(梯子)出土状況(南から)
- 図版第84 (1) S D22下層木製品(板材)出土状況(北から)

- (2) S D22下層木製品(不明木製品)出土状況(北から)
- (3) S D22下層木製品(不明木製品)出土状況(南から)
- 図版第85 (1) S D22下層木製品(杭)出土状況(南西から)
- (2) S D22下層木製品(杭)出土状況(東から)
- (3) S D22下層木製品(杭)出土状況(北から)
- 図版第86 (1) B地区S D22土坑状落ち込みS X68検出状況(西から)
- (2) B地区S D22溝状落ち込みS X74検出状況(東から)
- (3) B地区S D22土層断面<断面3古墳時代最下層>(東から)
- 図版第87 (1) B地区S D22土層断面<断面3南部肩部>(西から)
- (2) B地区S D22土層断面<断面3北部肩部立ち上がり>(西から)
- (3) B地区S D22掘削作業(西から)
- 図版第88 (1) B地区S D22土層断面<断面3南部・S X52検出状況>(西から)
- (2) B地区S D22土層断面<断面3南部>(西から)
- 図版第89 (1) B地区S D22土層断面<断面3南部・氾濫流路>(西から)
- (2) B地区S D22土層断面<断面3南部・氾濫流路堆積層>(西から)
- 図版第90 (1) B地区S D22全景(東から)
- (2) B地区S D22土層断面<断面3>(東から)
- 図版第91 (1) B地区S D22土層断面<断面1>(西から)
- (2) B地区S D22土層断面<断面1北部>(西から)
- 図版第92 (1) B地区S D22全景(西から)
- (2) B地区S D22全景(西から)
- 図版第93 (1) B地区S D22 1区下層検出状況(東から)
- (2) B地区S D22 1・2区下層検出状況(南東から)
- 図版第94 (1) B地区S D22 1区下層検出状況(南から)
- (2) B地区S D22 2区下層検出状況(南から)
- 図版第95 (1) B地区S D22大形護岸材A・D検出状況(北から)
- (2) B地区S D22大形護岸材B・C検出状況(北から)
- 図版第96 (1) B地区S D22 2区中央部下層検出状況(西から)
- (2) B地区S D22 2区南部大型護岸材C・D検出状況(東から)
- 図版第97 (1) B地区S D22S W64検出状況(北から)
- (2) B地区S D22S W64杭検出状況(北から)
- 図版第98 (1) B地区S D22盛土遺構S W62北部基盤面上草木(上が北)
- (2) B地区S D22盛土遺構S W62北部基盤面上草木繊維(上が北)
- 図版第99 (1) B地区S D22下層東部・断面3検出状況(西から)
- (2) B地区S D22下層東部検出状況(西から)

- 図版第100 (1) B 地区 S D 22 盛土遺構 S W 62 検出状況 (北西から)
(2) B 地区 S D 22 盛土遺構 S W 62 東部断ち割り (北西から)
- 図版第101 (1) B 地区 S D 22 盛土遺構 S W 62 検出状況 (北から)
(2) B 地区 S D 22 盛土遺構 S W 62 中央部検出状況 (北東から)
- 図版第102 (1) B 地区 S D 22 盛土遺構 S W 62 東部検出状況 (北から)
(2) B 地区 S D 22 盛土遺構 S W 62 中央部検出状況 (北東から)
(3) B 地区 S D 22 盛土遺構 S W 62 検出状況 (東から)
- 図版第103 (1) B 地区 S D 22 盛土遺構 S W 62 粗朶下層 (南から)
(2) B 地区 S D 22 盛土遺構 S W 62 斧柄出土状況 (北から)
(3) B 地区 S D 22 盛土遺構 S W 62 斧柄出土状況 (上が南)
- 図版第104 (1) B 地区 S D 22 盛土遺構 S W 62 中央断ち割り (南西から)
(2) B 地区 S D 22 盛土遺構 S W 62 盛土下層断面 (西から)
- 図版第105 (1) B 地区 S D 22 盛土遺構 S W 62 盛土下層中央北部基底断面 (西から)
(2) B 地区 S D 22 盛土遺構 S W 62 盛土下層中央部基底断面 (西から)
- 図版第106 (1) B 地区 S D 22 2 区下層サルノコシカケ出土状況 (南東から)
(2) B 地区 S D 22 盛土遺構 S W 62 西部基底敷葉層 (北から)
(3) B 地区 S D 22 2 区下層サルノコシカケ出土状況 (南東から)
- 図版第107 (1) B 地区 S D 22 4 区下層・大形護岸材 E 検出状況 (北東から)
(2) B 地区 S D 22 断面 3 南部 (北東から)
- 図版第108 (1) B 地区 S D 22 断面 3 南部 (南東から)
(2) B 地区 S D 22 断面 3・大形護岸材 E 検出状況 (東から)
- 図版第109 (1) B 地区 S D 22 断面 3・大形護岸材 E 南部断ち割り (東から)
(2) B 地区 S D 22 断面 3・大形護岸材 E 北部断ち割り (東から)
- 図版第110 (1) B 地区 S D 22 断面 3・大形護岸材 E 直上砂層種子出土状況 (東から)
(2) B 地区 S D 22 断面 3・大形護岸材 E 検出状況 (北東から)
- 図版第111 (1) B 地区 S D 22 土層断面<断面 2 南部盛土層検出状況> (東から)
(2) B 地区 S D 22 土層断面<断面 3 盛土層検出状況> (北東から)
(3) B 地区 S D 22 大形護岸材 E 検出状況 (東から)
- 図版第112 (1) B 地区 S D 22 土層断面<断面 3 南部> (北東から)
(2) B 地区 S D 22 土層断面<断面 3 南部中央部> (東から)
- 図版第113 (1) B 地区 S D 22 土層断面<断面 3 南部氾濫流路層位①> (東から)
(2) B 地区 S D 22 土層断面<断面 3 南部氾濫流路層位②> (東から)
- 図版第114 (1) B 地区 S D 22 土層断面<断面 3 南部氾濫流路層位③> (東から)
(2) B 地区 S D 22 土層断面<断面 3 南肩部> (東から)
- 図版第115 (1) B 地区 S D 22 4 区南東部盛土遺構 S W 75 (南西から)

- (2) B 地区 S D 22 4 区南東部盛土遺構 S W 75 土層断面 (西から)
- 図版第116 (1) B 地区 S D 22 大形護岸材 E 検出状況 (北から)
- (2) B 地区 S D 22 大形護岸材 E 検出状況 (東から)
- 図版第117 (1) B 地区 S D 22 大形護岸材 E 基部検出状況 (西から)
- (2) B 地区 S D 22 大形護岸材 E 中央部検出状況 (西から)
- (3) B 地区 S D 22 大形護岸材 E 梢部検出状況 (東から)
- 図版第118 (1) B 地区 S D 22 大形護岸材 E 加工痕 (北東から)
- (2) B 地区 S D 22 大形護岸材 E 基部酸素同位体・年輪年代サンプル位置 (北東から)
- (3) B 地区 S D 22 大形護岸材 E 基部酸素同位体・年輪年代サンプル位置 (北から)
- 図版第119 (1) B 地区 S D 22 完掘状況 (西から)
- (2) B 地区 S D 22 完掘状況 (東から)
- 図版第120 (1) B 地区 S D 22 盛土遺構 S W 62 中央上層粗朶 (構築材)
- (2) B 地区 S D 22 盛土遺構 S W 62 東部上層粗朶 (構築材)
- (3) B 地区 S D 22 盛土遺構 S W 62 中央粗朶 (構築材)
- 図版第121 (1) B 地区 S D 22 護岸材引き上げ作業 (南東から)
- (2) B 地区 S D 22 大形護岸材
- 図版第122 (1) B 地区 S D 22 大形護岸材 (奥から F・E・D・B・A、右中央 C)
- (2) B 地区 S D 22 掘削作業 (北東から)
- (3) B 地区 S D 22 掘削作業 (西から)
- 図版第123 (1) B 地区 S D 22 掘削作業 (北西から)
- (2) B 地区 S D 22 掘削作業 (南東から)
- (3) B 地区 S D 22 中央部掘削作業 (南東から)
- 図版第124 (1) B 地区土坑 S K 42 検出状況 (東から)
- (2) B 地区土坑 S K 42 土層断面 (北西から)
- (3) B 地区土坑 S K 42 土層断面 (南東から)
- 図版第125 (1) B 地区土坑 S K 42 (南東から)
- (2) B 地区土坑 S K 42 床面焼土 (南東から)
- (3) B 地区土坑 S K 42 床面炭化物検出状況 (上が西)
- 図版第126 (1) B 地区 S D 78 (南東から)
- (2) B 地区 S D 78 土層断面 (南東から)
- (3) B 地区 S D 78 完掘状況 (北西から)
- 図版第127 (1) C 1 区全景 (南東から)
- (2) C 1 区島畑36 全景 (南から)
- (3) C 1 区島畑36・溝状遺構 S D 02 全景 (南西から)
- 図版第128 (1) C 2 区全景 (西から)

- (2) C 2 区全景(南西から)
- (3) C 2 区土坑 S K06遺物出土状況(南から)
- 図版第129 (1) C 3 区中層遺構面全景(北から)
- (2) C 3 区溝 S D05検出状況(南東から)
- (3) C 3 区溝 S D31遺物出土状況(南から)
- 図版第130 (1) C 3 区溝 S D31全景(北西から)
- (2) C 3 区溝 S D31全景(南東から)
- (3) C 3 区溝 S D30全景(南東から)
- 図版第131 (1) C 3 区溝 S D31d-d'土層断面(南東から)
- (2) C 3 区溝 S D31c-c'土層断面(南東から)
- (3) C 3 区溝 S D30f-f'土層断面(南東から)
- 図版第132 (1) C 2・3 区下層遺構面全景(上が南)
- (2) C 2・3 区下層遺構面全景(北から)
- 図版第133 出土土器 1
- 図版第134 出土土器 2
- 図版第135 出土土器 3
- 図版第136 出土土器 4
- 図版第137 出土土器 5
- 図版第138 出土土器 6
- 図版第139 出土土器 7
- 図版第140 出土土器 8
- 図版第141 出土土器 9
- 図版第142 (1)出土土器10
- (2)出土土器11
- 図版第143 (1)出土土器12
- (2)出土土器13
- 図版第144 (1)出土土器14
- (2)出土土器15
- 図版第145 (1)出土土器16
- (2)出土土器17
- 図版第146 (1)出土土器18
- (2)出土土器19
- 図版第147 (1)出土土器20
- (2)石製品 1 石器
- 図版第148 (1)石製品 2 石器

(2)石製品 玉類・土製品 土錘

図版第149 木製品 1

図版第150 木製品 2

図版第151 木製品 3

図版第152 木製品 4

図版第153 木製品 5

図版第154 木製品 6

図版第155 木製品 7

図版第156 出土土器21

図版第157 出土土器22

図版第158 木製品 8

図版第159 木製品 9

図版第160 樹種分析 1

図版第161 樹種分析 2

図版第162 樹種分析 3

図版第163 樹種分析 4

図版第164 (1)種実 モモ(佐々木由香氏提供)

(2)種実 クルミ(佐々木由香氏提供)

新名神高速道路整備事業関係遺跡

平成24～26年度発掘調査報告

1. はじめに

新名神高速道路整備事業に伴う発掘調査は、平成20年度から西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施している。新名神高速道路は、愛知県名古屋市を起点とし、兵庫県神戸市に至る総延長約174kmの高速道路で、既存の名神高速道路や京滋バイパス、近畿自動車道などと交通機能を分担することで、名神高速道路等の混雑を解消し、利用者の利便性の向上を目的として建設が進められているものである。また、大規模な災害や事故等による交通規制時には、名神高速道路等と相互に役割を補完することが期待されている。

新名神高速道路の予定路線のうち、京都府内では、宇治田原町・城陽市・京田辺市・八幡市の各市町を通過する路線として17.7kmが計画された。このうち、京奈和自動車道と第二京阪道路を接続することによる高速道路網の機能強化等を目的として、先行して事業認可が下りた城陽ジャンクション・インターチェンジ（以下、城陽JCT・ICと表記）から八幡京田辺ジャンクション・インターチェンジ（以下、八幡京田辺JCT・ICと表記）までの区間について、平成20年度から発掘調査を着手している。当該区間において調査の対象となる遺跡として、東から城陽市水主神社東遺跡、下水主遺跡、京田辺市門田遺跡、西村遺跡、向谷遺跡、向山遺跡、松井横穴群、八幡市女谷・荒坂横穴群、荒坂遺跡、御毛通古墳群、美濃山廃寺、美濃山廃寺下層遺跡の各遺跡が所在する。これらの遺跡については、現地の発掘調査終了後に整理作業を行い、順次、報告書を刊行しているところである。^(注1) なお、当該区間については、平成29年4月30日に全面開通に至った。

下水主遺跡は、木津川右岸の扇状地と埋没した微高地上に展開する。当遺跡は、当初、東西約540m、南北約760mが遺跡範囲と考えられており、表採遺物のみが知られていた。本事業に伴う調査の進展に伴い、縄文時代～古墳時代、平安時代～中世の遺構・遺物が検出されるにつれて、遺跡がさらに北側に広がることが明らかとなり、^(注2) 現状では、南北の広がりには約1,200mと認識されている。

本書は、城陽JCT・ICの建設に伴い、平成24～26年度に調査を実施した下水主遺跡第1・4・6次調査のうち、もっとも南に位置するA～C地区の調査について報告するものである。

現地調査にあたっては京都府教育委員会、城陽市教育委員会、京都府立山城郷土資料館をはじめ、各関係機関のご指導・ご協力をいただいた。また、地元自治会や近隣住民の方々には発掘調査へのご理解とご協力をいただいた。記して感謝します。

なお、調査にかかる経費は、全額、西日本高速道路株式会社関西支社新名神京都事務所が負担した。

(筒井崇史)

〔平成24年度現地調査体制〕

＜下水主遺跡第1次＞

現地調査責任者	調査第2課長	水谷壽克
現地調査担当者	調査第2課主幹調査第3係長事務取扱	石井清司
	同	主任調査員 戸原和人・竹原一彦・増田孝彦
	同	調査員 関広尚世
調査場所	城陽市水主倉貝、寺田金尾	
現地調査期間	平成24年5月21日～平成25年3月8日	
調査面積	3,360㎡(うち本報告に関わる分は1,770㎡)	

〔平成25年度現地調査体制〕

＜下水主遺跡第4次＞

現地調査責任者	調査課長	水谷壽克
現地調査担当者	調査課参事調査第3係長事務取扱	石井清司
	同	主任調査員 戸原和人・引原茂治・高野陽子・筒井崇史・村田和弘
	同	専門調査員 岡崎研一
	同	調査員 福山博章・関広尚世・大高義寛・山崎美輪・岡田健吾
調査場所	京都府城陽市水主大將軍・倉貝・宮馬場、寺田金尾・今橋	
現地調査期間	平成25年4月22日～平成26年2月27日	
調査面積	10,393㎡(うち本報告に関わる分は2,050㎡)	

〔平成26年度調査体制等〕

＜下水主遺跡第6次＞

現地調査責任者	調査課長	石井清司
現地調査担当者	調査課課長補佐兼調査第2係長兼調査第3係長	岩松 保
	調査課課長補佐兼調査第3係長 細川康晴	
	同	主 査 戸原和人・引原茂治・岡崎研一・筒井崇史
	同	副 主 査 石尾政信
	同	主 任 高野陽子・村田和弘
	同	調 査 員 福山博章・山崎美輪・酒井健治・渡邊拓也
調査場所	城陽市水主大將軍・倉貝・宮馬場、寺田金尾・今橋	
現地調査期間	平成26年4月22日～平成27年2月27日	
調査面積	16,520㎡(うち本報告に関わる分は1,600㎡)	

〔平成28年度調査体制等〕

整理作業責任者	調査課長	森 正
整理作業担当者	調査課課長補佐兼調査第3係長	岩松 保
	同 主 査	高野陽子・筒井崇史
整 理 期 間	平成28年4月1日～平成29年3月31日	

〔平成29年度調査体制等〕

整理作業責任者	調査課長	小池 寛
整理作業担当者	調査課参事調査第3係長事務取扱	岩松 保
	同 主 査	高野陽子
整 理 期 間	平成29年4月15日～平成30年3月31日	

2. 位置と環境

1) 地理的環境

下水主遺跡・水主神社東遺跡の所在する京都府城陽市は、京都府南部を北流する木津川の右岸に位置する。城陽市域の地形は、大きく西部の平野部と東部の山地・丘陵部に二分される。西部は木津川による河川堆積と度重なる氾濫によって沖積平野が形成され、現在は水田地帯が広がる。これまでの発掘調査の結果、現在の水田地帯の下には微高地や後背湿地が分布していることが明らかになっており、本来は起伏に富んだ地形であったと考えられる。一方、東部は鷲峰山山塊に連なる山地があり、山麓から沖積平野にかけての中間地帯には大阪層群からなる宇治丘陵（または城陽丘陵）が位置する。この丘陵部と沖積平野の境界には段丘が発達し、木津川の支流である大谷川、長谷川、青谷川などの小規模な河川によって形成された扇状地が広がる。このような段丘上や扇状地上には古代から中世にかけての集落が営まれた、丘陵上には多数の古墳が築造されている。また、城陽市の市街地に重複して、官衙遺跡や寺院などが営まれており、城陽市が地形上・歴史上で重要な位置を占めていたことがわかる。また、木津川周辺に形成された微高地には富野、枇杷庄、水主などの集落が営まれる。これらの集落の周辺に広がる後背湿地を中心に条里型地割が良好に遺存し、水田と土を盛り上げて畑作を行う島畑が分布している^(注3)。

2) 歴史的環境

下水主遺跡周辺に分布する主要な遺跡について概観する(第1図)。

旧石器時代の遺構は確認されていないが、芝ヶ原遺跡でナイフ形石器と舟底形石器が出土している。また、森山遺跡で出土したサヌカイト片もこの時期のものと推定されている。城陽市域における人びとの営みはこのころまで遡ると考えられる。

続く縄文時代では、横道遺跡(丸塚古墳周濠下層)で、前期後半の深鉢形土器を納めた土坑が検出されており、周辺に集落の存在が想定されている。また、森山遺跡では後期後半と考えられる円形の竪穴建物が規則的に配置された状態で検出されている。一方、晩期になると、沖積低地に立地する塚本東遺跡や下水主遺跡、水主神社東遺跡などで縄文土器が出土していることから、木津川流域の沖積低地が活動領域として利用されていたと考えられる。

弥生時代になると、木津川沿いに遺跡が広く分布するようになる。前期ではおもに木津川左岸に遺跡が分布するが、中期になると木津川右岸でも遺跡数が増加し、巨椋池周辺にも集落が営まれるようになる。城陽市域では、森山遺跡で中期後半の甕棺と後期後半の竪穴建物2棟が検出されている。また、新名神高速道路整備事業に伴う下水主遺跡の調査でも後期後半の竪穴建物が2棟検出されている。さらに芝ヶ原遺跡や正道遺跡などでは、遺構は検出されていないものの、中・後期の土器や石器が出土している。一方、沖積平野に位置する塚本遺跡や塚本東遺跡、水主遺跡などでは後期末から古墳時代初頭の土器が出土している。特に塚本東遺跡では、北東から南東に流れる溝から大量の庄内式土器が出土した。出土した土器には壺・甕・高杯・器台・鉢・手焙形土器など多様な器種が認められ、丹波・丹後地域の特徴を持つ土器も多数出土している。これらの遺跡は遺物の出土しか確認できないが、近隣には同時期の集落が存在することは間違いなかる



第1図 調査地及び周辺主要遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 宇治・田辺)

う。このように低地に集落が分布していたことは窺われるが、後期の南山城地域でみられる高地性集落は、城陽市域ではほとんど確認されていない。

古墳時代になると、南山城地域に多くの古墳が築かれるようになる。城陽市域における庄内式期のものとしては、芝ヶ原古墳や上大谷6・7号墳、長池古墳下層墳墓などが築造される。芝ヶ原古墳は、全長22.5m以上の前方後方形の古墳で、四獣形鏡や銅製腕輪、鉄製品、多数の玉類、土器などが出土している。前期には、南山城地域各地に前方後円墳が出現する。城陽市域においても北部の大谷川の周辺に、庄内式期から続く上大谷古墳群をはじめ、西山古墳群、尼塚古墳群が形成される。これらの古墳群は小規模であるが、前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳と多様な墳形の古墳が築造されている。

中期になると、城陽市の北半部に多くの古墳が集中するようになる。これらは久津川古墳群と総称されているが、大きく3つの支群(広野支群・久世支群・富野支群)に分かれる。このうち久世支群では、久津川車塚古墳や芭蕉塚古墳などの大型の前方後円墳が築造される。このほか、帆立貝形前方後円墳である丸塚古墳、方墳である梶塚古墳や青塚古墳、円墳である山道東古墳など、前方後円墳以外でも大規模な古墳が築造される。このように、城陽市域の古墳は、南山城地域の他地域の古墳と比べて規模の点で凌駕していると言える。

久津川車塚古墳は、埋葬施設として竜山石製の長持形石棺を使用し、副葬品として三角縁神獣鏡をはじめとする銅鏡、多数の玉類や石製模造品、刀剣類などが石棺に納められていた。また、石棺に付設された小石室からも甲冑等が出土している。遺物の年代から5世紀前半の築造と考えられる。この被葬者は、墳丘の規模、埋葬施設、副葬品のいずれから見ても中央の王権と密接な関係を持った首長と捉えられ、城陽市域のみならず、南山城地域全域をも支配していた大首長であったと考えられる。久津川車塚古墳に続く首長墳として芭蕉塚古墳がある。同古墳は5世紀中頃の前方後円墳で、墳丘から埴輪列や葺石が検出されている。ただ、芭蕉塚古墳は久津川古墳群最後の大型前方後円墳であるという点で、この首長系列の消長を示すものとして興味深い。

中期後半から後期にかけては、芝ヶ原古墳群、上大谷古墳群、芝山古墳群などで小規模な古墳が築造される。芝山古墳群は5世紀中頃から6世紀末頃にかけて造営されもので、小型の方墳から円墳へと変化していくことが明らかになっている。また、規模も新しい古墳ほど小型化していく。そして6世紀末には造墓活動を停止すると考えられている。城陽市域のこの時期の古墳の大半は木棺直葬墳であり、このころ全国的に爆発的に築かれる横穴式石室墳があまりみられない地域として注目される。城陽市域で横穴式石室を埋葬施設に持つ古墳は黒土1号墳、尼塚5号墳、上大谷12号墳、上大谷17号墳と数少ない。このうち黒土1号墳は、巨石を使用した全長約9.5mの両袖式の横穴式石室を内部主体に持ち、須恵器や土師器のほか、馬具や鉄刀、胡籙、鉄鎌、鏝などの金属製品が出土している。出土した須恵器から古墳時代後期後半頃の築造と考えられる。

古墳時代の集落遺跡はおもに市域東部の段丘上に営まれているが、あまり多く確認されていない。前期では芝山遺跡で竪穴建物1棟が検出されている。また、隣接する森山遺跡では方形周溝状遺構と竪穴建物が検出されており、方形周溝状遺構は豪族居館の堀の可能性が指摘されている。

中期前半には室木遺跡で小規模な竪穴建物が検出されている。滑石製臼玉とその未成品や欠損品が出土したことから、玉作りが行われた工房的な集落と考えられている。古墳時代後期の集落は城陽市域ではあまり確認されていないが、やや新しい時期の後期後半から飛鳥時代にかけての集落としては、芝ヶ原遺跡、正道遺跡、芝山遺跡、森山遺跡などで竪穴建物や掘立柱建物が検出されている。特に芝ヶ原遺跡では150棟以上の竪穴建物が検出されており、城陽市域におけるこの時期の最大級の集落である。

一方、文献資料により、飛鳥時代以前に城陽市域には栗隈県が置かれたと考えられている。県の実態は不明であるが、『日本書紀』仁徳天皇十二年十月条に「大溝を山背の栗隈県に掘」とあり、推古天皇十五年是歳条にも「山背国に大溝を栗隈に掘」と記載されている。この栗隈大溝を現在の古川に比定する説もあるが、発掘調査等では確認されていない。古墳時代から飛鳥時代にかけての木津川流域の沖積地における開発行為を物語る伝承であろう。

城陽市域は、古代律令制のもとでは山背国久世郡や綴喜郡に属していた。

飛鳥～奈良時代の遺跡としては、久世廃寺、平川廃寺、正道官衙遺跡などがある。久世廃寺は7世紀に創建された寺院で、塔を東に、金堂を西に置く法起寺式伽藍配置である。塔や金堂に遅れて講堂が造営されたと考えられている。その後、8世紀中頃に再整備が行われたようで、平城宮や恭仁宮で使用されたのと同じ軒瓦が出土している。出土遺物には、金銅製誕生釈迦仏立像のほか、唐三彩や新羅製の緑釉陶器などの海外の製品が含まれている。平川廃寺は8世紀に造営された寺院で、塔を西に、金堂を東に置く法隆寺式伽藍配置で、塔や金堂の基壇がよく遺存している。寺域の広がり、築地の痕跡などからはほぼ明らかとなっている。特に塔跡は一辺10.5mに復原され、地方寺院としては最大級の規模を誇り、国分寺の七重塔にも匹敵するものと考えられている。塔跡や金堂跡の周辺からは、塑像片が出土している。

正道官衙遺跡は当初、寺院跡と考えられていたが、大型掘立柱建物群が複数検出され、山背国久世郡衙跡と推定されるに至っている。これまで見つかった官衙遺構は大きく3時期に分かれる。Ⅰ期は総柱建物跡を主体に構成され、7世紀後半に位置づけられる。Ⅱ期は掘立柱建物を「コ」の字形に配置した役所風のもので、7世紀末～8世紀初頭に位置づけられる。この時期の遺構は大宝律令以前の久世「評」に伴う官衙の可能性が指摘されている。Ⅲ期は四面廂付きの東西棟建物中心にその周囲に掘立柱建物が広がり、南辺と西辺には築地が設けられ、南辺には門が設けられている。時期は8世紀前半～9世紀前半に位置づけられる。また、正道官衙遺跡では、瓦類を始め金箔の残る塼仏や相輪・水煙の一部など、寺院に関わる遺物が出土しており、官衙遺構に近接した場所に寺院の存在が推定されている。このほか、久世郡では、木津川東岸に古代の官道である北陸道や東山道が想定されており、芝山遺跡では、奈良時代から平安時代にかけての道路側溝と想定される遺構も検出されている。また、近接して官衙風の建物跡群を検出しており、文献資料にはみられないが、駅屋の可能性も指摘されている。

飛鳥・奈良時代になると、古墳時代までの竪穴建物主体の集落から、掘立柱建物主体の集落へと変化する。ただ、山城地域では他の畿内諸国にくらべて遅くまで竪穴建物が残ることが知られ

ている。城陽市域でも、芝ヶ原遺跡では飛鳥時代後半、正道官衙遺跡や横道遺跡では奈良時代まで竪穴建物が残るようである。これらの遺跡では竪穴建物と掘立柱建物が併存していた可能性が高い。このほか、奈良時代の掘立柱建物の集落としては芝山遺跡などがある。

この時期、城陽市西部の平野部には、条里制による方形の区画の遺構が明瞭に遺存する。条里とは、方一町(109m四方)を基本単位とする古代の農地区画であるとともに土地表示制度でもある。縦横六町分の一区画を「里」、里の列を「条」、方一町の区画を「坪」と呼んである土地の区画を表現するものである。今回の下水主遺跡・水主神社東遺跡の調査でも、復元された城陽市域の条里を参照しながら調査を行ったところがある。

平安時代以降の遺跡は顕著なものが少ないが、文献資料との比較からいくつか注目すべき事実がわかる。まず、鎌倉時代になると調査地周辺は、賀茂別雷神社、石清水八幡宮、元興寺などの寺社領となって寺田荘、富野荘、水主荘などの荘園が整備された。このころから現在まで、富野や水主などの集落周辺や、寺田集落の西側にはこの地域に特有の島畑が形成される。土を盛り上げた部分で畑作を行う一方、島畑と島畑の間の凹地では水田を行っていたと考えられる。

室町時代の応仁・文明の乱の動乱期には南山城地域が主要な戦場の1つとなったことから、在地の土豪たちが、枇杷庄城、外野(富野)城、水主城などを築造して防備を固めていた。水主氏の勢力基盤であった水主城は、木津川に近い現在の水主集落一帯に築かれた平城であるが、文献資料から山城国一揆の拠点であるとともに、当時の南山城地域支配のための要の城郭であったと考えられている。発掘調査では遺構は検出されていないため、城郭の構造は不明である。また、寺田環濠集落も応仁の乱ごろに防御を目的として形成されたものと考えられている。

江戸時代になると、水主村は綴喜郡に属し、天領として幕府の支配下に置かれた。調査地周辺では中世から現代にかけて、島畑を主体とする景観から水田を主体とする景観へと変化していたと考えられる。^(注4)

(筒井崇史)

3. 調査の経過と調査の方法

1) 調査に至る経緯

新名神高速道路の予定路線うち、京都府内では17.7kmが計画されており、城陽JCT・IC～八幡京田辺JCT・IC間(事業距離3.5km)については、平成20年度より発掘調査に着手している。

本書で報告する下水主遺跡は、新名神高速道路の城陽JCT・IC建設予定地に当たり、橋脚建設や盛り土造成の行われる範囲を主な対象として、発掘調査を実施し、城陽JCT・IC建設予定地の発掘調査は平成23年度に開始し、平成27年度まで継続して調査を実施した。発掘調査にかかる調査回数・調査地点・調査期間等については、第2図、付表1・2の通りである。調査期間が足掛け5か年に及んだため、整理作業は随時実施し、報告書についても、順次刊行してきた。本報告は、新名神高速道路整備事業の城陽JCT・ICの建設に関わる発掘調査報告書としては、『京都府遺跡調査報告集』第167冊、『同』第168冊に続く、第3冊に当たる。

2) 調査の経過

(1) 平成24年度調査の経過

平成24年度は、平成23年度に引き続き、水主神社東遺跡(第2次)の調査を実施するとともに、新たに下水主遺跡(第1次)の調査に着手した。下水主遺跡の調査では、まず、城陽JCT・ICの南西部に予定された盛り土造成地点を対象に調査を実施した。当該盛り土部分にA～C地区を設定し、このうちB1区の調査に着手した。また、平成24年度後半には、橋脚建設及び盛り土造成の工事が予定された地点4か所で調査を実施した(C1・D1・E1・E2区)。平成24年度に調査を実施した調査区のうち、B1・C1区以外の各調査区については報告済である。^(注5)

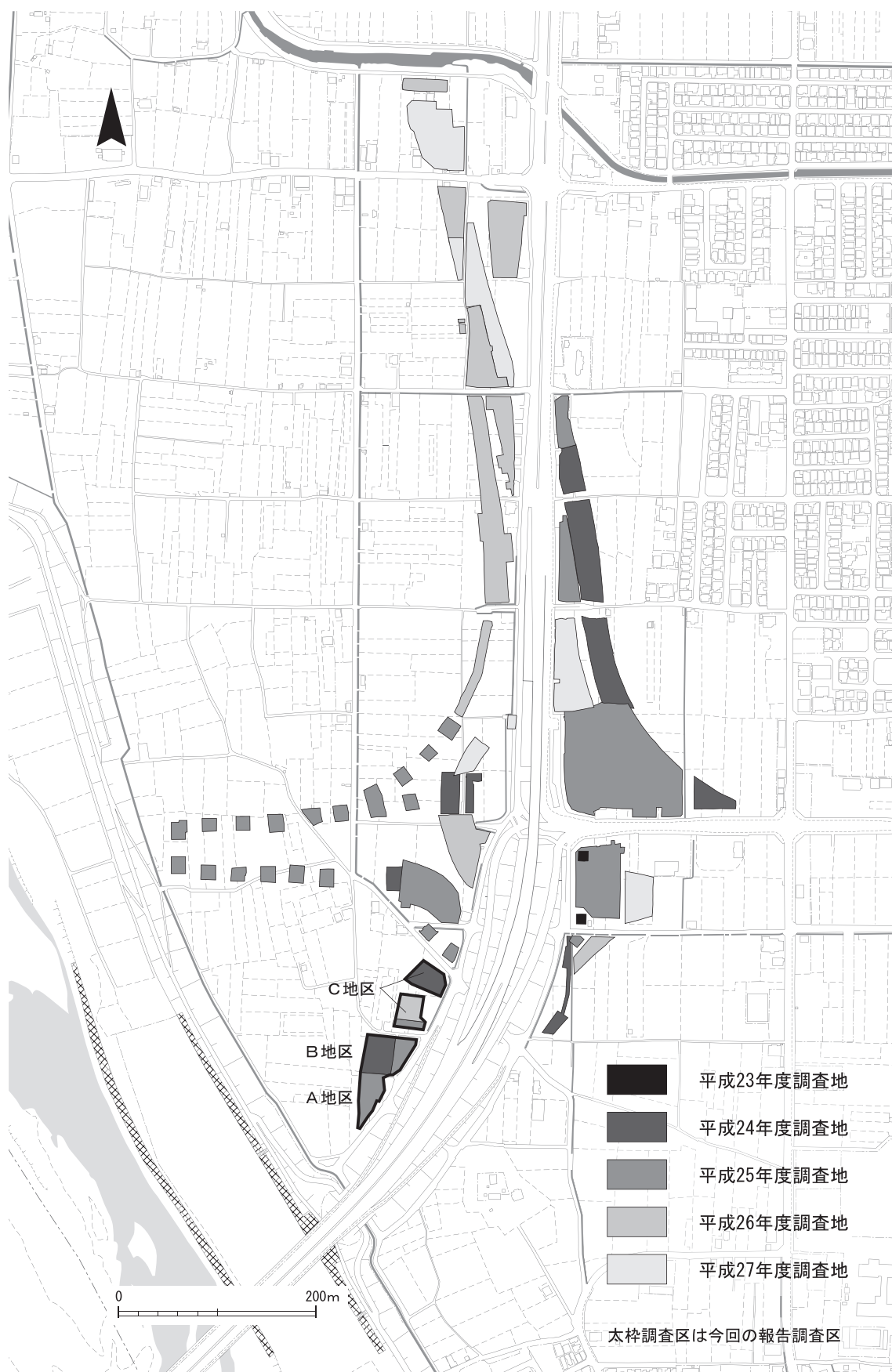
①B地区の調査 B1区の調査は平成24年5月21日に着手した。まず、遺構の概要等を把握するため、対象地に2か所の小規模な調査区を設けた。その結果、鳥畑2基が確認でき、対象地全域にまで調査区を拡張して調査を進めた。調査は重機で表土ならびに堆積層を掘削し、その後、人力で鳥畑を精査した。鳥畑の調査を終えた後に、下層遺構の調査として重機で鳥畑の除去を開始し、その後人力による精査を行った。その結果、古代の遺物が出土する遺構を検出した。さらに、その下層で古墳時代の遺物が出土する大規模な溝を確認した。溝の調査を進めると、大量の土器類と木材が出土したことから次年度に引き続き調査を実施することとなった。

②C地区の調査 C1区はB1区の北側に位置し、調査は平成24年10月9日に着手した。表土や堆積層を重機で除去し、その後人力による精査を行った。検出した各遺構の記録を行い、全景写真を撮影した後に断ち割りと埋め戻しを行い、平成25年1月30日に調査を終了した。

(2) 平成25年度調査の経過

平成25年度は、城陽JCT・ICの建設工事が本格化するのに合わせて、埋蔵文化財の調査も本格化し、下水主・水主神社東両遺跡を合わせて2万㎡を越える調査となった。昨年度に引き続き、下水主遺跡(第4次)・水主神社東遺跡(第5次)の調査を実施した。下水主遺跡第4次調査ではA～G地区を対象に調査を実施した。なお、B1区は平成24年度から引き続いて調査を実施した。

下水主遺跡第4次調査は、まずF地区から開始し、続いてD2・D4区の調査に着手した後、



第2図 調査年度別調査区配置図(1/6,000)

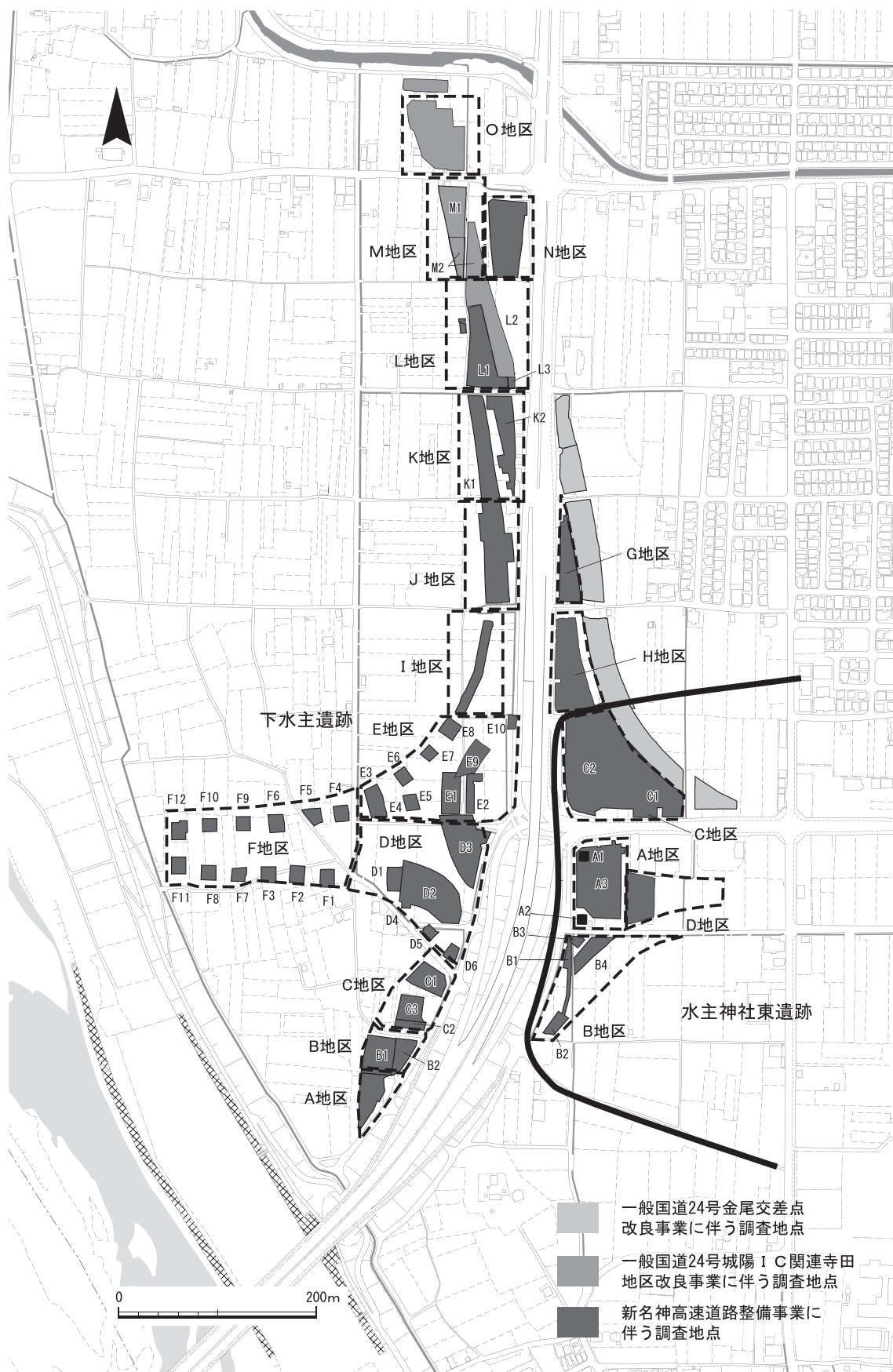
D5・D6区とE地区の調査を実施した。F地区の調査終了後、順次、G地区とA・B地区の調査に着手した。最後にC2区の調査を行った。なお、A・B地区において多数の遺構・遺物が検出されたことから、次年度も引き続き調査を行うこととした。そのほかの調査区については調査を終了した。一方、水主神社東遺跡第5次調査はA3区、B3区を対象に調査を実施し、終了し

付表1 下水主遺跡調査回数一覧表

調査年度	回数	調査地区	調査期間	調査面積	調査機関	報告書
平成24年度	第1次	B地区(B1区)・C地区(C1区)・D地区(D1区)・E地区(E1・E2区)	2012.5.21～2013.3.8	3,360㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016) 本報告書
	第2次	24号 A・B・C地区	2012.9.24～2013.3.8	5,570㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第163冊(2015)
平成25年度	第3次	24号 A北地区	2013.4.26～2013.9.3	500㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第163冊(2015)
	第4次	A地区・B地区(B1・B2区)・C地区(C3区)・D地区(D2・D4～D6区)・E地区(E3～E8区)・F地区(F1～F12区)・G地区	2013.4.22～2014.2.27	10,393㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016) 『京都府遺跡調査報告集』第168冊(2017) 本報告書
	第5次	—	2013.10.15～2013.10.22	530㎡	京都府教育委員会	『京都府埋蔵文化財調査報告書』平成25年度(2014)
平成26年度	第6次	A地区・B地区(B1・B2区)・C地区(C2区)・D地区(D3区)・I地区・J地区・K地区・L地区・M地区・N地区	2014.4.9～2014.3.6	17,110㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	本報告書 『京都府遺跡調査報告集』第173冊(2018)
	第7次	—	2014.9.19、10.8、12.8～12.10、12.12	636㎡	京都府教育委員会	『京都府埋蔵文化財調査報告書』平成26年度(2015)
平成27年度	第8次	L地区(L2区)・M地区(M2区)・O地区	2015.4.24～2015.10.9	6,000㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第170冊(2017)
	第9次	L地区(L3区)・E地区(E9・E10区)・H地区	2015.5.18～2016.2.3	3,260㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第174冊(2018)

付表2 水主神社東遺跡調査回数一覧表

調査年度	回数	調査地区	調査期間	調査面積	調査機関	報告書
平成23年度	第1次	A地区(A1・A2区)	2012.2.15～2012.3.14	200㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016)
平成24年度	第2次	B地区(B1・B2区)	2012.5.23～2012.9.27	630㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016)
	第3次	24号 E地区	2012.9.24～2013.3.8	800㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第163冊(2015)
平成25年度	第4次	24号 D地区	2013.4.26～2013.9.3	2,800㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第163冊(2015)
	第5次	A地区(A3区)・B地区(B3区)・C地区	2013.5.14～2014.1.8	11,375㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016)
平成26年度	第6次	B地区(B4区)	2014.11.19～2015.2.27	590㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第174冊(2018)
平成27年度	第7次	D地区	2015.11.24～2016.2.5	1,280㎡	(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	『京都府遺跡調査報告集』第174冊(2018)



第3図 調査区配置図(1/6,000)

た。平成25年度に調査を実施した調査区のうち、下水主遺跡のA～C地区以外の各調査区については報告済である。^(注6)

①A地区の調査 A地区は平成24年度に調査を実施したB地区の南側に位置し、平成25年9月20日に調査に着手した。上層遺構として島畑2基や溝状遺構2条などを検出した。また、島畑の断ち割り等を行ったところ飛鳥時代の土器が多数出土したことから、下層遺構として当該期の遺構が存在すると思われた。島畑の全景写真を撮影し、重機による島畑の盛り土の除去を行ったところ、下層遺構面の直上から飛鳥時代の土器が多数出土した。これらの土器は島畑の盛り土ないし遺物包含層に含まれていたものと推定される。これらの土器を取り上げるとともに、遺構面の精査を行い、井戸1基、土坑5基のほか、多数の柱穴を検出した。ただし、これらの柱穴群から明確な建物跡を復原することはできなかった。これらの柱穴がおおむね検出できた段階で空中写真撮影を実施した。その後、これらの完掘や記録作業を行った。さらに下層遺構として、古墳時代の遺構面の存在が確認されたため、次年度に古墳時代の遺構面の調査を実施することとなった。

②B地区の調査 平成24年度検出した古墳時代の大規模な溝の調査を平成25年11月8日に再開した。また、B1区の東隣に新たにB2区を設けて調査を開始した。B2区の調査は、まず、表土や堆積層を重機で除去し、その後人力による精査を行った。上層遺構として、島畑1基を検出

付表3 下水主遺跡調査地区別一覧表(新名神高速道路整備事業分)

調査年度	調査回数	調査地区	調査区	調査期間	調査面積	報告書
平成24年度	第1次	B地区	B1区	2012.5.23～2013.3.8	1,070㎡	本報告書
		C地区	C1区	2012.10.9～2013.1.30	700㎡	本報告書
		D地区	D1区	2012.11.28～2013.3.8	450㎡	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016)
		E地区	E1区	2012.12.10～2013.3.8	770㎡	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016)
			E2区	2012.12.18～2013.3.8	370㎡	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016)
平成25年度	第4次	A地区		2013.10.4～2014.2.27	940㎡	本報告書
		B地区	B1区	2013.11.1～2014.2.27	330㎡	本報告書
			B2区	2013.11.25～2014.2.27	580㎡	本報告書
		C地区	C2区	2014.1.20～2014.2.27	200㎡	本報告書
		D地区	D2・D4区	2013.5.7～2013.9.20	2,617㎡	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016)
			D5区	2013.9.9～2013.12.6 (中断期間あり)	150㎡	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016)
			D6区	2013.9.9～2013.10.22	180㎡	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016)
		E地区	E3・E4区	2013.7.17～2013.10.4	470㎡	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016)
			E5区	2013.8.6～2013.10.2	220㎡	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016)
			E6区	2013.8.6～2013.10.4	210㎡	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016)
			E7区	2013.8.23～2013.10.23	160㎡	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016)
			E8区	2013.8.23～2013.10.23	290㎡	『京都府遺跡調査報告集』第167冊(2016)

調査年度	調査回数	調査地区	調査区	調査期間	調査面積	報告書
平成 25 年度	第 4 次	F 地区	F 1 区	2013.5.21 ~ 2013.7.5	260㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 168 冊 (2017)
			F 2 区	2013.6.13 ~ 2013.8.23	255㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 168 冊 (2017)
			F 3 区	2013.6.11 ~ 2013.8.29	230㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 168 冊 (2017)
			F 4 区	2013.4.22 ~ 2013.6.12	218㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 168 冊 (2017)
			F 5 区	2013.6.6 ~ 2013.7.22	220㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 168 冊 (2017)
			F 6 区	2013.4.22 ~ 2013.7.22	265㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 168 冊 (2017)
			F 7 区	2013.4.22 ~ 2013.8.27	190㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 168 冊 (2017)
			F 8 区	2013.4.22 ~ 2013.7.8	220㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 168 冊 (2017)
			F 9 区	2013.5.9 ~ 2013.7.18	198㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 168 冊 (2017)
			F 10 区	2013.4.22 ~ 2013.7.18	185㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 168 冊 (2017)
			F 11 区	2013.5.7 ~ 2013.7.8	240㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 168 冊 (2017)
			F 12 区	2013.5.1 ~ 2013.8.30	275㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 168 冊 (2017)
		G 地区		2013.9.5 ~ 2013.11.14	1,290㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 167 冊 (2016)
平成 26 年度	第 6 次	A 地区		2014.4.9 ~ 2014.6.13	600㎡	本報告書
		B 地区	B 1・B 2 区	2014.4.9 ~ 2014.6.13	400㎡	本報告書
		C 地区	C 3 区	2014.4.22 ~ 2014.5.30	600㎡	本報告書
		D 地区	D 3 区	2014.11.5 ~ 2015.2.27	2,050㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 174 冊 (2018)
		I 地区		2014.4.21 ~ 2014.7.15	900㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 174 冊 (2018)
		J 地区		2014.6.18 ~ 2014.12.5	2,590㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 174 冊 (2018)
		K 地区	K 1 区	2014.4.23 ~ 2014.8.5	1,660㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 174 冊 (2018)
			K 2 区	2014.8.6 ~ 2014.10.30	1,460㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 174 冊 (2018)
		L 地区	L 1 区	2014.4.25 ~ 2014.10.30	2,620㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 174 冊 (2018)
		N 地区		2014.4.25 ~ 2014.12.5	2,420㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 174 冊 (2018)
平成 27 年度	第 7 次	E 地区	E 9 区	2015.11.5 ~ 2016.2.3	365㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 174 冊 (2018)
			E 10 区	2015.12.8 ~ 2016.2.3	115㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 174 冊 (2018)
		L 地区	L 3 区	2015.5.18 ~ 2015.6.29	110㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 174 冊 (2018)
		H 地区	H 1 区	2015.5.18 ~ 2015.10.19	1,500㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 174 冊 (2018)
			H 2 区	2015.8.24 ~ 2015.11.19	1,170㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第 174 冊 (2018)

するとともに、下層遺構として B 1 区で検出していた古墳時代の大規模な溝の延長部を確認した。B 1 区の古墳時代の溝の掘削を進めたが、大量の土器や木材等が出土したため、その出土状況の記録を行う必要が生じた。これに伴う記録作業に多大な時間を要したため、最終的に大溝の完掘にはいたらなかった。このため、引き続き次年度に調査を実施することとなった。

③C地区の調査 C地区の南端部に長さ30m、幅7.8mの調査区を設けて、平成26年1月20日から開始した。表土や堆積層を重機で除去し、その後人力による精査を行った。その結果、島畑2基を検出した。さらに下層遺構の調査として、弥生時代中期の溝や土坑などを検出した。各遺

構の記録を行い、全景写真を撮影した後、調査区の埋め戻しを行い、平成26年2月27日に調査を終了した。

(3)平成26年度調査の経過

平成26年度も前年度と同様に、埋蔵文化財の調査が2万㎡に達することとなった。昨年度に引き続き、下水主遺跡(第6次)・水主神社東遺跡(第6次)の調査を実施した。下水主遺跡第4次調査は、前年度からの継続となったA・B地区のほか、C3区・D3区・I～L・N地区の調査に着手した。A～D地区以外は、はじめて調査を実施する地区となる。

下水主遺跡第6次調査は、まずA・B地区の継続分から開始し、次いでC3区・I・K・L・N地区の調査に着手した。A～C地区の調査期間中の5月11日に現地説明会を実施し、258名の参加があった。A～C地区の調査が終了した後、新たにJ地区の調査に着手した。その後、I・K・L地区の調査終了後、D3区の調査に着手した。一方、水主神社東遺跡第6次調査は、下水主遺跡のL・K地区の終了後に、B4区の調査に着手した。平成26年度の調査は、下水主遺跡D3区と水主神社東遺跡B4区の調査でもって終了した。

なお、報告書については、平成24～26年度の調査のうち、多数の遺構・遺物を検出したA～C地区と、平成26年度に新たに着手したD・I～L・N地区とに大きく分けて報告することとした。後者は、平成27年度調査と合わせて別に刊行し、前者の調査区の報告が本報告書である。^(注7)

①A地区の調査 平成25年度調査に引き続き、古墳時代の遺構と飛鳥時代の井戸について調査を実施した。調査は平成26年4月9日に再開した。すでに検出している古墳時代の遺構の掘削と、出土した遺物等の記録作業を進めた。また、古墳時代以前の遺構の有無を確認するため、重機によって調査区全体を0.4mほど下げたが、新たな遺構等は確認されなかった。同時に調査を進めていたB・C地区の進捗状況に合わせて空中写真撮影を行った後、飛鳥時代の井戸の掘削を行った。井戸は建築部材等を転用したものであった。その後、記録の作業を行い、6月13日に調査を終了した。

②B地区の調査 平成25年度の調査に引き続き、古墳時代の大規模な溝の調査を実施した。調査は、A地区と同じく平成26年4月9日から再開した。まず、昨年度検出した遺物の記録作業を行った後、遺物等の取り上げを行い、その後周辺を掘り下げた。その結果、新たに検出した遺物の記録作業を行うなど、記録と掘削を繰り返した。この間に、出土した遺物を含む検出遺構の全景写真を行うとともに、検出した溝の性格や堆積状況などについて、有識者からご意見をいただきながら検討を加えた。溝の掘削を進めた結果、溝の南側には大規模な護岸が行われていたことが確認できた。出土した土器の検討も進み、古墳時代前期の護岸を有する大規模な溝と判断し、これをもとに5月11日に現地説明会を開催した。その後、溝の完掘や護岸材・遺物の記録や取り下げ作業を行なった。上述のようにA～C地区3か所の空中写真撮影を実施し、その後、護岸材の取り上げや図面等の補足を行い、6月13日に調査を終了した。

③C地区の調査 C3区は、昨年度に行ったC2区の北側に接して設定した調査区である。C2区の調査で確認されていた遺構の延長部の検出が期待された。調査は平成26年4月21日に着手

付表4 水主神社東遺跡調査地区別一覧表(新名神高速道路整備事業分)

調査年度	調査回数	調査地区	調査区	調査期間	調査面積	報告書
平成23年度	第1次	A地区	A1区	2012.2.15～2012.3.15	100㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第167冊(2016)
			A2区	2012.2.15～2012.3.15	100㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第167冊(2016)
平成24年度	第2次	B地区	B1区	2012.5.23～2012.8.7	200㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第167冊(2016)
			B2区	2012.6.4～2012.9.27	430㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第167冊(2016)
平成25年度	第5次	A地区	A3区	2013.10.1～2014.1.8	3,100㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第167冊(2016)
		B地区	B3区	2013.11.19～2013.12.17	100㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第167冊(2016)
		C地区	C1・C2区	2013.5.14～2013.12.12	8,175㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第167冊(2016)
平成26年度	第6次	B地区	B4区	2014.11.19～2015.2.27	590㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第174冊(2018)
平成27年度	第7次	D地区		2015.11.24～2016.2.5	1,280㎡	『京都府遺跡調査報告集』 第174冊(2018)

した。調査により、島畑1基や溝状遺構2条などを検出した。その後、重機による島畑の掘り下げを行い、時期は不明ながら、中層遺構として溝1条を検出した。これについての記録等を終えた後に重機で掘り下げを行い、弥生時代中期と考えられる溝を2条検出した。溝の南側については、若干の余地があったため、拡張を実施して調査を行った。その際、溝の上面とその付近から弥生時代中期の壺1点が出土した。これらの記録作業や取り上げ作業を行い、平成26年5月30日に調査を終了した。

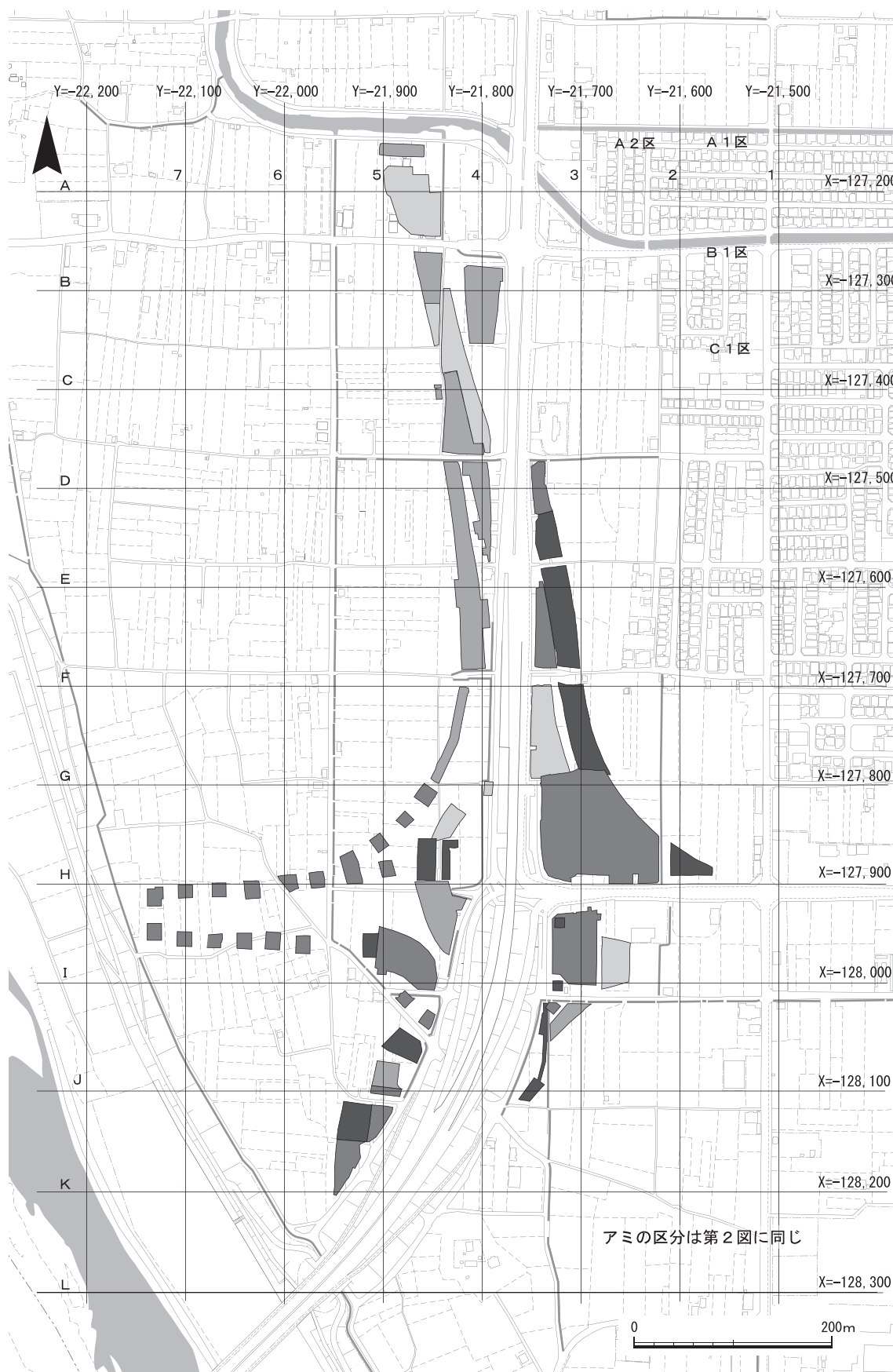
3) 調査の方法

調査にあたっては、A地区、B地区などの調査地区を設定し、その地区内に実際の調査を行った調査区を設定した(2項参照)。また、調査の対象となる範囲には、国土座標に基づいて地区割を設定した(3項参照)。

調査開始にあたっては、まず、調査区の設定及び基準点の設置作業を行った。その後、遺構面直上まで重機で表土を除去し、さらに人力による遺物包含層の掘削、遺構面の精査作業を行って遺構の検出に努めた。検出した遺構は、その位置を縮尺1/100の平面図に記録しながら、順次、掘削作業を行った。遺構の掘削を終えると、必要に応じて縮尺1/10ないし1/20の平面図や断面図、あるいは縮尺1/10ないし1/5の遺物出土状況図などの記録図面の作成を行った。並行して遺構や土層断面などの記録写真の撮影を行った。遺構面全体の調査を終えると、調査区ごとに全景写真を撮影した。さらに必要に応じて空中写真とそれによる図化作業を実施した。

また、下層遺構を確認した場合、上層遺構面から下層遺構面まで人力もしくは重機によって除去し、上記の作業を繰り返した。

検出した遺構には原則として各調査区ごとに1番から通し番号をつけ、遺構の性格を示す略号を付与した。略号は調査の進展に伴って変更することもあったが、遺構番号は変更しないようにした。使用した略号は、土坑：SK、溝：SD、柱穴・ピット：SP、不明遺構：SXである。本報告で使用した遺構番号は原則として調査時のものであるが、調査時に番号のなかった遺構に



第4図 下水主遺跡・水主神社東遺跡全体地区割図(1/6,000)

については、本報告作成時に新たに付与した。ただし、島畑の遺構番号については、調査時の遺構番号とは別に一般国道24号金尾交差点改良事業の調査報告^(注8)に始まる島畑の通し番号を付与した。なお、島畑番号の初出時に調査時の遺構番号も合わせて示した。

4) 調査地区の設定

調査対象地が広大であることから、調査対象地をいくつかの調査地区に分割して調査を進めることにした。この調査地区名は、平成24年度調査で一部使用をはじめたが、平成25年度の調査に際して、本格的に設定した。この「調査地区」は現行の市道等で区分したもので、面的な空間をさし、A地区、B地区、……、L地区、……というように、アルファベットで呼ぶこととした。この中に実際に調査を実施した「調査区」を設定し、複数の調査区がある場合はK1区、K2区と、アルファベットと数字の組み合わせで表すこととした。したがって、「○地区」と「○○区」は、異なるものをさす区分名称である。ただし、調査区が1つしかない場合は、「○地区」という名称を使用した(第3図)。

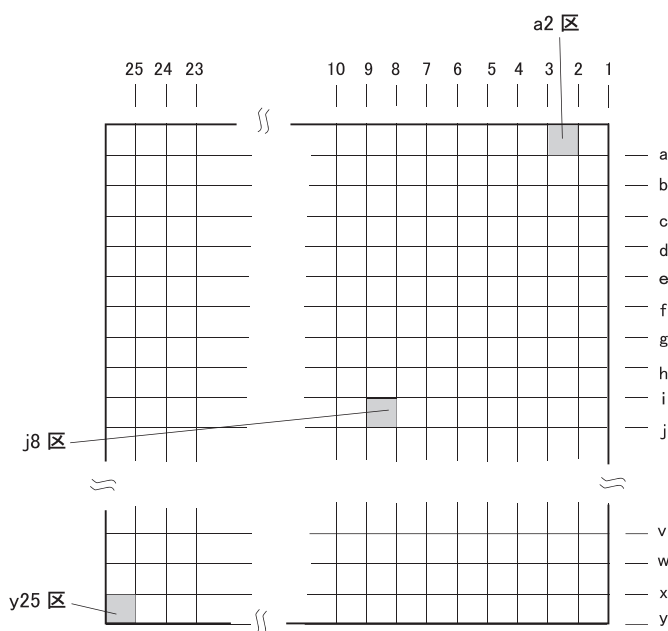
調査区の設定は、西日本高速道路株式会社の工事計画にしたがい、橋脚部分については、橋脚本体と施工に伴い掘削される部分を、また、盛り土部分については、実際の道路幅の範囲に限って発掘調査を行い、下層遺構等が検出された場合に必要に応じて盛り土造成範囲まで調査区を拡張することとした。

なお、平成26年度以降は、平成25・26年度の京都府教育委員会の試掘調査等の結果、下水主遺跡の範囲が北に広がったことから、新たな調査地区を追加した。

調査区ごとの調査期間や調査面積については、付表3・4にまとめた。

5) 地区割の設定

城陽JCT・ICの建設に伴う発掘調査では、上記の調査地区とは別に、検出遺構や出土遺物の位置



第5図 小地区割概念図

を記録する目的で、対象地全体を覆う地区割を国土座標(世界測地系)にもとづいて設定した。まず、対象地全体に100m四方の大区画を設定した(第4図)。大区画の基準線は南北・東西とも国土座標系に一致させ、 $X=-127,200$ 、 $Y=-21,500$ を起点とし、東西方向は東から1、2、3、……とし、南北方向は北からA、B、Cとし、両者の交点をA1、B2、……、H4、などとした。大区画の地区名は100m方眼の南東隅の交点の名称で表すものとした。この大区画の一边を25等分して4m四方の方眼を設定し、

小区画とした(第5図)。小区画の基準線も国土座標系と一致させ、東西方向は東から1、2、3、……、25とし、南北方向は北からa、b、c、……、yとし、両者の交点をa1、b1、c3、y25などとした。小区画の地区名も4m方眼の南東隅の交点の名称で表すものとした。Y軸座標の下2桁で表すと、1ラインは00m、25ラインは96mに当たる。また、X軸座標の下2桁で表すと、aラインは04m、yラインは00mに当たる。国土座標系にもとづく地区名は「G4-r9区」のように表記する。

なお、城陽JCT・ICの建設に伴う発掘調査では、多数の調査区を設けているが、100mを越える調査区はほとんどないため、大区画の地区割名を調査時に表記していないことが多い。

報告にあたっては、島畑をはじめ各遺構が検出された地区名を明記したが、遺構の規模が大きいものについては、一部の地区名に代表させて表記した。また、個々の遺構図には小地区割の基準となるライン名を表記した。

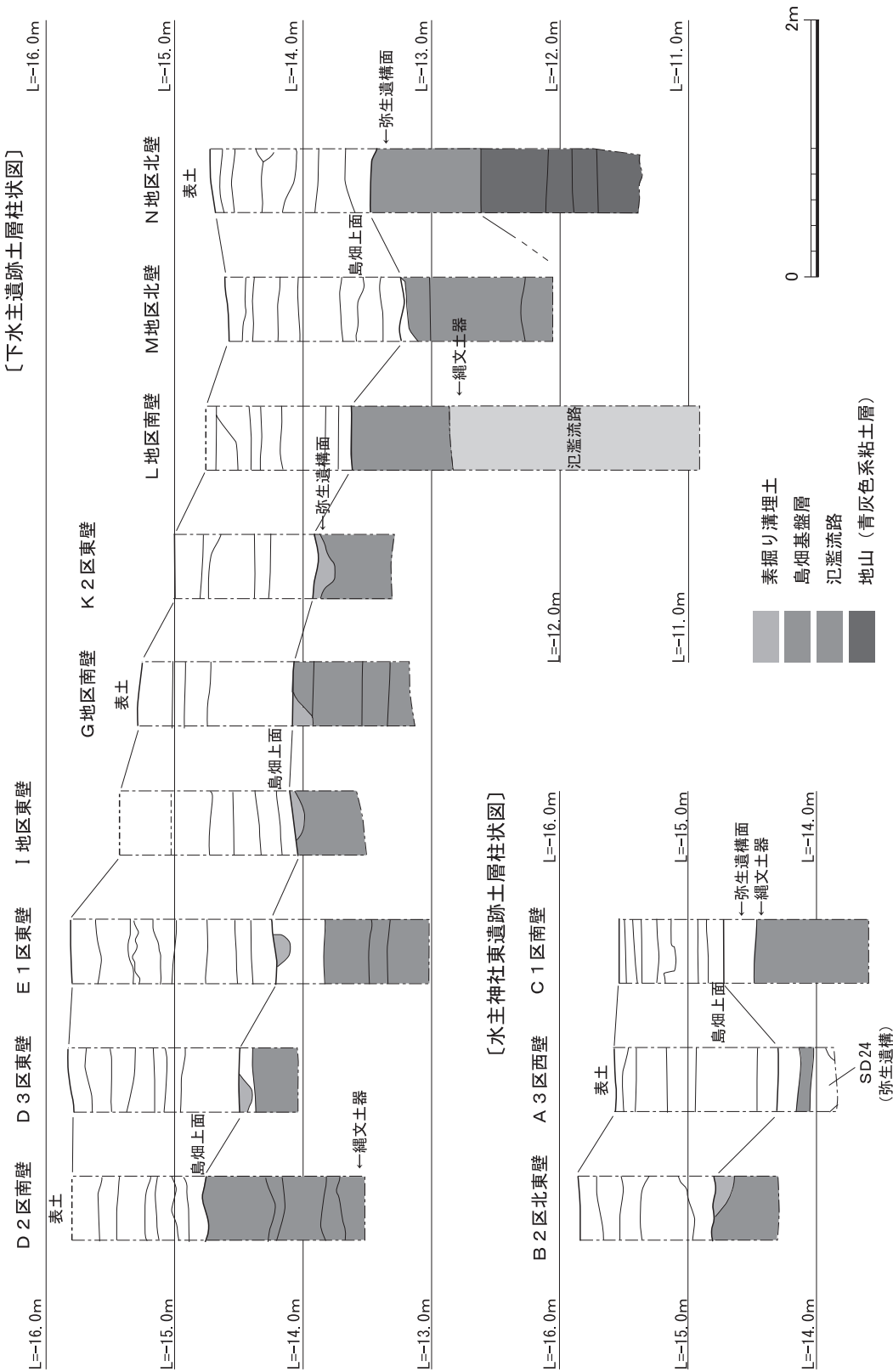
6) 基本的な層序

ここでは、平成23年度から平成27年度までの調査成果をふまえて、調査対象地全体の基本的な層序について報告する。また、個々の調査区の層序については、各調査区の項で記述する。

まず、調査前の状況を概観しておく。調査前の土地利用は、基本的に水田、もしくは水田面よりも1m前後高くなった高まりを利用した畑地が広がっていた。後者が、いわゆる「島畑」である。城陽市に所在する島畑では、江戸時代から大正時代にかけて広範囲に綿や果樹栽培などが行われていた。寺田地区の国道24号(大久保バイパス)よりも西側には、現在も寺田イモやイチジクなどの栽培を行う島畑が多く存在している。また、文化庁の『農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究』(平成15年度)では、「畑地景観」の種別で、城陽市所在の「木津川流域の島畑」が掲げられている。調査対象地周辺には、国道24号(大久保バイパス)や京奈和自動車道城陽インターチェンジなどがあり、これらと並行もしくは交差するように新名神高速道路ならびに城陽JCT・ICが建設されることになった。

次に現在の水田面の標高に付いて確認しておきたい。南北方向に見て行くと、下水主遺跡O地区付近で15.0m、同L地区付近で14.6m、同H地区付近で15.4m、同D地区付近で15.7m、同B地区付近で16.0mである。一方、東西方向に見て行くと、水主神社東遺跡C地区付近で15.6m、同A地区付近で15.6m、下水主遺跡D地区付近で15.7m、同F地区西端で15.6mである。現水田面の標高からみると、南北方向では、下水主遺跡L地区付近が最も低く、この付近から北と南に向かって徐々に高くなる。そして、木津川に最も近い下水主遺跡B地区付近が最も高い。一方、東西方向では、あまり大きな変化が見られず、おおむね平坦である。いずれにしても下水主遺跡B地区付近がもっとも高くなることが指摘できる。

次に第6図に示した柱状図をもとに調査対象地の土層の状況について概観する。おおむね現水田に伴う厚さ10~20cmほどの耕作土や床土が認められる。この下に淡黄色砂層・浅黄色砂層・青灰色砂質土などの砂層を主体とする堆積層がある。これらは調査地点によって厚さが異なる(20~80cm)ほか、砂層が確認されなかった調査地点もある。この砂層は木津川の氾濫等によるもの



第6図 調査地基本層序柱状図(1/50)

と推定されるが、砂層の堆積した時期や回数などの詳細は不明である。この下に青灰色粘質土・灰色シルト・緑灰色シルトなどのシルトないし粘質土が堆積する。これらは島畑の溝状遺構に堆積したもので、最終的には島畑そのものの上面にまで達していることが多い。これらを除去すると、島畑が検出される。

島畑は土層断面の観察によると、中世前半(13世紀前後)に形成され、おおむね同一地点で、溝の堆積土を掘削し、それを島畑の上部に盛り上げることを繰り返していたことが明らかになっている。島畑は、中世に形成された後、近世のある段階まで継続して営まれたようである。その後、島畑の周囲に広がる溝状遺構が、洪水等に伴う砂層やシルト質系の堆積土によって埋没していると考えられ、多くの島畑でそれを覆うような堆積層が確認されている。これ以降、島畑の周囲が水田に変化していったと考えられる。ただ、その具体的な時期は明らかになっていない。

初期の島畑の多くは、それ以前から存在する比較的安定した地層を削り込んで溝状遺構を形成し、いわば安定した地層を掘り残して島畑を形成している。島畑の基盤層は灰黄色シルト混じり細砂・暗灰黄色粘質土・オリーブ灰色シルトなどの粘質土やシルトが主体となる。最も初期の島畑上面の標高は、水主遺跡O地区付近で14.0m、同L地区付近で13.6m、同H地区付近で14.1m、同F地区西端で14.5m、同D地区付近で14.5m、同B地区付近で14.7mである。一方、水主神社東遺跡C地区付近で14.4m、同A地区付近で14.4m、同B地区付近で14.8mである。したがって、島畑の上面の標高は、おおむね現水田面の標高に対応した高低差を読み取ることができる。このことは、島畑形成当時の小規模な地形の起伏が現在の水田面の形成に、多少なりとも影響を与えていることを示しているといえる。

ところで、島畑は安定した地層を掘り残して形成されるため、島畑の上面、もしくは島畑の上部を10～30cm掘り下げることで下層の遺構が検出される場合がある。ここで検出される遺構の多くは弥生時代から古代にかけてのものである。また、溝状遺構の底で、こうした遺構や遺物包含層が確認されることはあまり多くないが、A地区の調査では多数の柱穴を溝状遺構の底で検出した。これに対して下水主遺跡L地区付近では、島畑を完全に除去した下層で、縄文時代の旧地形を検出した。

最後に、先にもふれたが、基盤層は基盤層は灰黄色シルト混じり細砂・暗灰黄色粘質土・オリーブ灰色シルトなどの粘質土やシルトである。この粘質土やシルトの下層の状況を確認するため、北の下水主遺跡N地区から南の下水主遺跡A地区まで、何か所かで断ち割り等を実施して青灰色粘土を確認した。青灰色粘土の上面はおおよそ標高12.0～12.5mであることから、上述の黄褐色系粘質土が形成される以前の水成堆積による粘土層と考えられる。

7) 報告書作成作業について

下水主遺跡・水主神社東遺跡の報告書の作成にあたっては、調査を終えた調査区から順次、整理作業に着手した。整理作業は、まず、出土遺物の台帳登録と洗浄を行った。洗浄の終わった遺物は、注記や接合を行った。今回の報告では、下水主遺跡A～C地区合わせて整理箱にして253箱の土器や石器等が出土した。また、500点を超える木製品や加工材などが出土した。これらは、

古墳時代前期を中心に、弥生時代中期から中世までに位置づけられる。注記や接合が終了すると、報告書に掲載すべき遺物を選別し、実測や拓本を行った。

また、現地で作成した実測図をもとに、遺構図のレイアウト作業を行い、トレース作業に着手した。遺構図の作成にあたっては、原則、以下のような基本方針のもと作成した。調査区の遺構配置図は縮尺1/500、島畑平面図は縮尺1/200、土層断面図は縮尺1/100、溝は縮尺1/100で、土坑・柱穴等は縮尺1/40ないし1/20、遺物出土状況図は縮尺1/20で、それぞれ作成した。

城陽JCT・ICの建設に伴う下水主遺跡・水主神社東遺跡の報告書は、平成27年度、平成28年度にそれぞれ1冊ずつ刊行した(『京都府遺跡調査報告集』第167・168冊)。平成29年度は残る2冊の報告書刊行を行うものである。なお、城陽JCT・ICの建設に伴う発掘調査は平成27年度をもって終了している。

本報告書に関する基本的な整理作業や、土器や木製品などの遺物の実測、遺構図のトレース作業、木製品などの写真撮影などは、おおむね平成28年度までに終了した。実測した遺物のうち、復元可能なものについては石膏による復元を実施した。復元できた遺物や破片資料の遺物について、写真撮影を行い、遺物写真図版として掲載した。平成29年度は、本文の執筆をはじめ、写真図版の作成や観察表の作成等を行い、さらに報告書の編集作業を行った。なお、最終的に本報告に掲載した遺物は1009点である。

本報告のうち、事実報告は、現地調査を担当した高野陽子・筒井崇史・福山博章のほか、古式土師器の一部を桐井理揮(現京都府教育委員会)が、木製品の一部を高橋 悠(元立命館大学大学院文学部博士課程前期)がそれぞれ執筆し、全体の文章の調整等を高野・筒井が行った。また、弥生土器は長友朋子(立命館大学文学部教授)、吉村慎太郎(立命館大学大学院文学部博士課程前期)が執筆した。総括は、自然化学分析の成果を受け、各担当者間の意見を調整した上で、高野・筒井両名でまとめた。

(筒井崇史)

4. 検出遺構

1) A地区の検出遺構

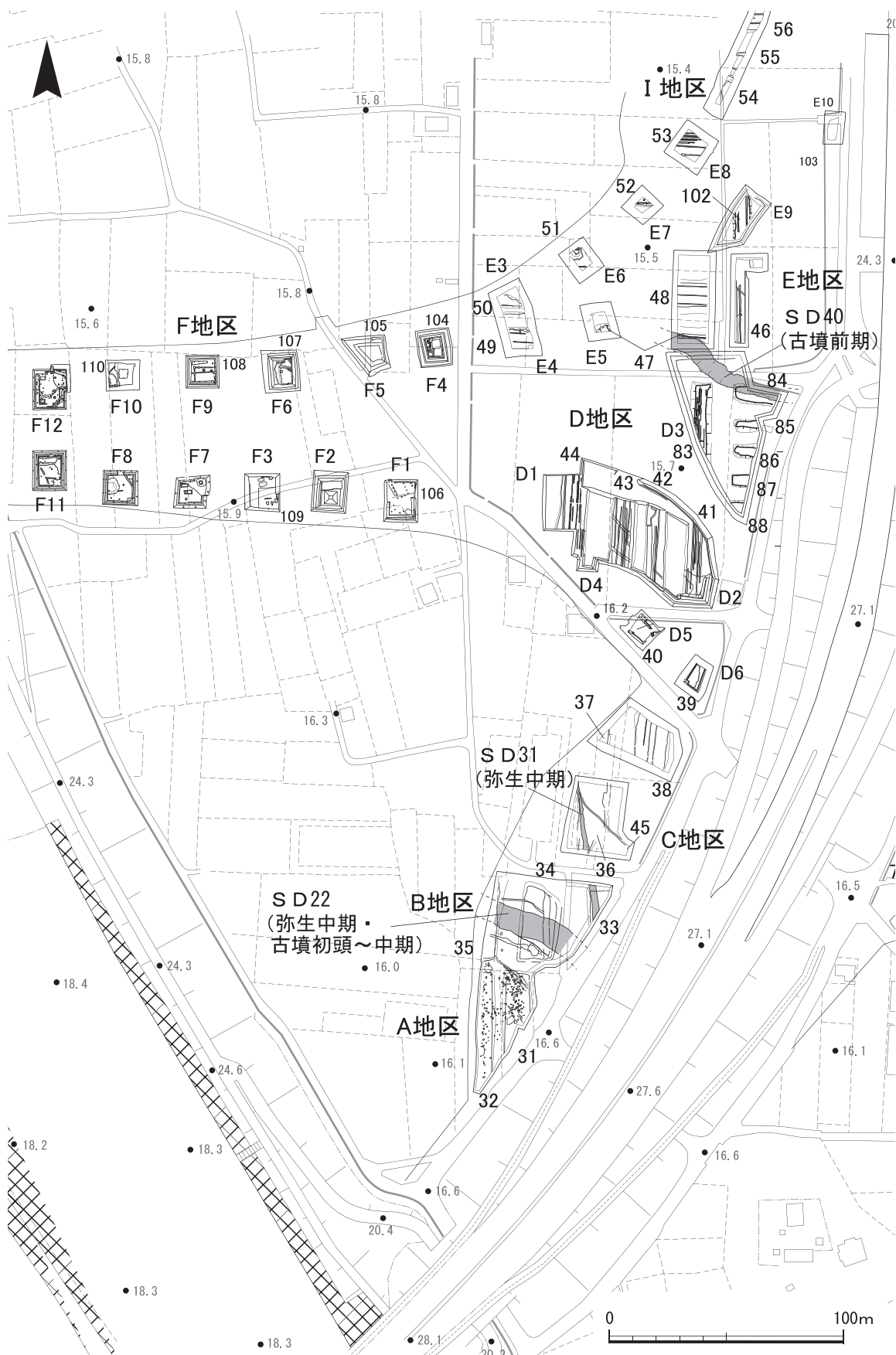
(1) 調査区の概要と基本層序

A地区は、城陽JCT・ICの建設に伴う発掘調査区としては最も南西に位置する。北側にはB地区が位置する。調査区はおおむね南を頂点とする三角形に近い形状を呈する。全長約55m、北辺の幅約26mで、北東角を欠く形状の調査区である。現地表面の標高は、調査区西半部はおよそ16mで、東半部は1段高くなっており、およそ16.4mである。調査の結果、上層・中層・下層の3面の遺構面を確認した。現地表下0.5～0.9mで、上層遺構として、中世から近世にかけての島畑^(注9)2基、溝状遺構3条などを検出した(第8図)。島畑を0.7m前後掘り下げた結果、中層遺構として、おもに飛鳥時代から奈良時代初めにかけての井戸1基、土坑5基のほか、柱穴300基以上などを検出した(第11図)。中層遺構の柱穴群は、島畑に伴う溝状遺構の底面でも多数検出した。中層遺構面を検出するための島畑の掘り下げの過程で大量の飛鳥時代の土器が出土した。中層遺構面から約0.1m掘り下げたところ、下層遺構として古墳時代前期の溝3条を検出した(第24図)。これらは島畑の下層で検出したもので、溝状遺構に延びる部分では、溝底の一部を検出したにとどまる。なお、A・B両調査区の間には畦等を設けず一体の調査区として調査を進めた。調査面積は上・中層(第4次調査)で940㎡、下層(第6次調査)で600㎡である。出土した遺物は整理箱40箱である。

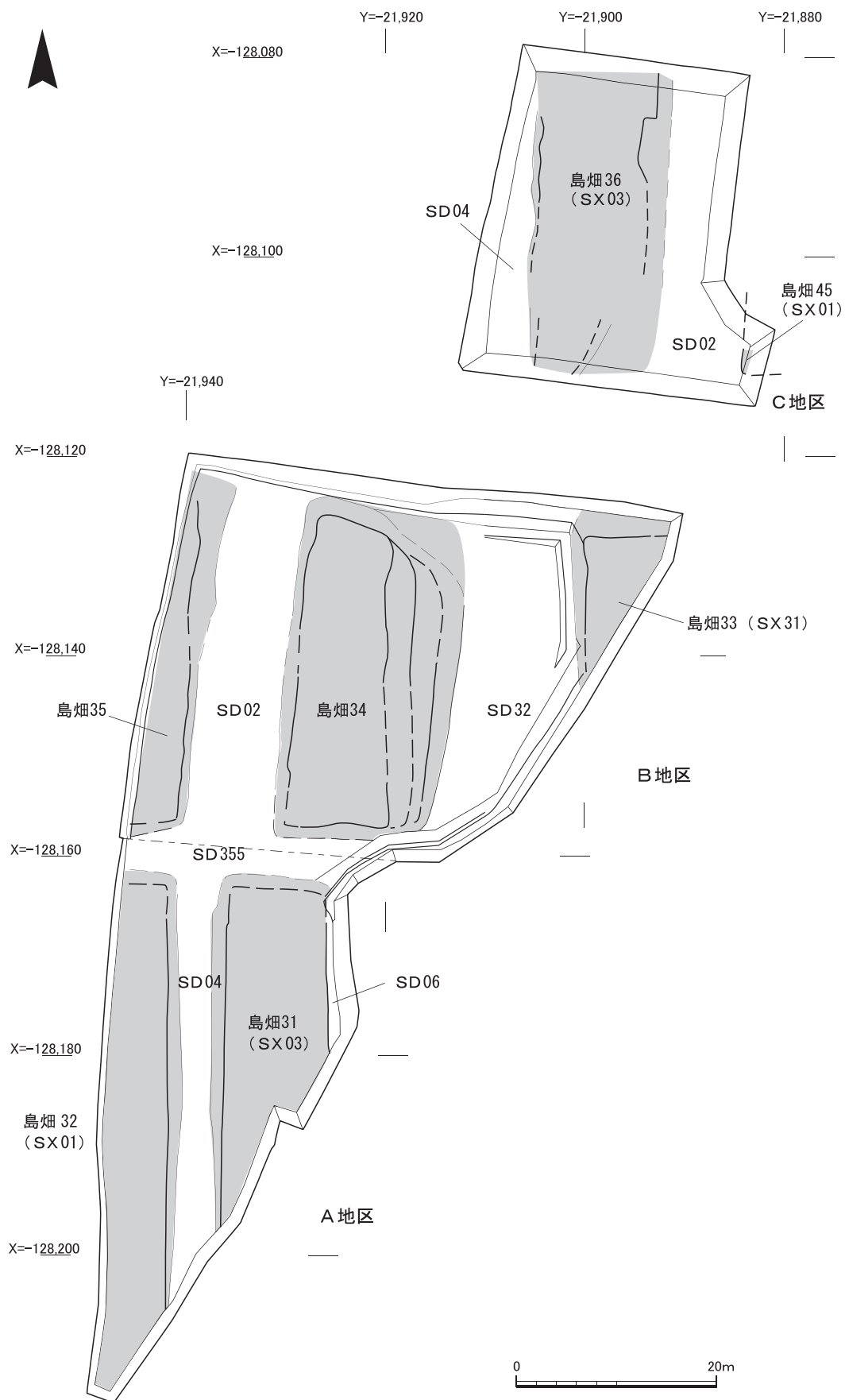
基本的な層序(第10図)は、耕作土や床土、上部に堆積した層などを除去すると、黄褐色を主体とする島畑と灰色系の粗砂を主体とする溝状遺構を確認した。島畑の部分では、盛土のほか、黄褐色極細砂や灰オリーブ色シルトなどから飛鳥時代を主体とする大量の土器が出土し、同時期の整地層ないし遺物包含層と推定される。一方、溝状遺構では灰色や灰黄色、浅黄色などの粗砂ないし細砂の堆積が主体であり、他の溝状遺構でみられるような粘性の高いシルト層の堆積がほとんどみられなかった。このため、滞水していた状況は想定しにくい。また、土層断面図からは最初期の島畑の上層側に溝状遺構の埋土などを盛り上げて島畑の拡張していることも確認できる。これらの下層に基盤層として灰色ないし灰オリーブ色のシルトが広がる。

(2) 上層遺構

島畑31(S X03)(第9図) 調査区の東半部で検出した(K5-p8区ほか)。南北方向の島畑であるが、北端部は溝状遺構S D345との関わりが不明瞭であった。調査区東辺付近が東側に位置する溝状遺構S D06の西肩に当たる。島畑の土層断面の観察(第10図上段)によると、基底部である灰オリーブ色粘土混じりシルト(9層)の上部に灰オリーブ色シルトや黄褐色シルト混じり細砂など(6～8層)の層序が確認でき、6層上面が最初期の島畑である。ただし、後述するように8層からは大量の飛鳥時代の土器が出土したことから、これは島畑の盛土ではなく、それ以前の整地層や遺物包含層と考えられる。島畑の規模は、検出長34.1m、上面検出幅10.3m、基底部検出幅12m、高さ0.7m前後である。島畑の上面の標高はおよそ15.5mである。島畑上面では、南北方向の素掘り溝S D05を検出した。S D05は検出長17.1m、幅2.5m、深さ0.2m前後である。埋土は



第7図 下水主遺跡1・4・6次調査遺構配置図(1/2,500)



第8図 下水主遺跡A～C地区上層遺構(島畑)平面図(1/600)

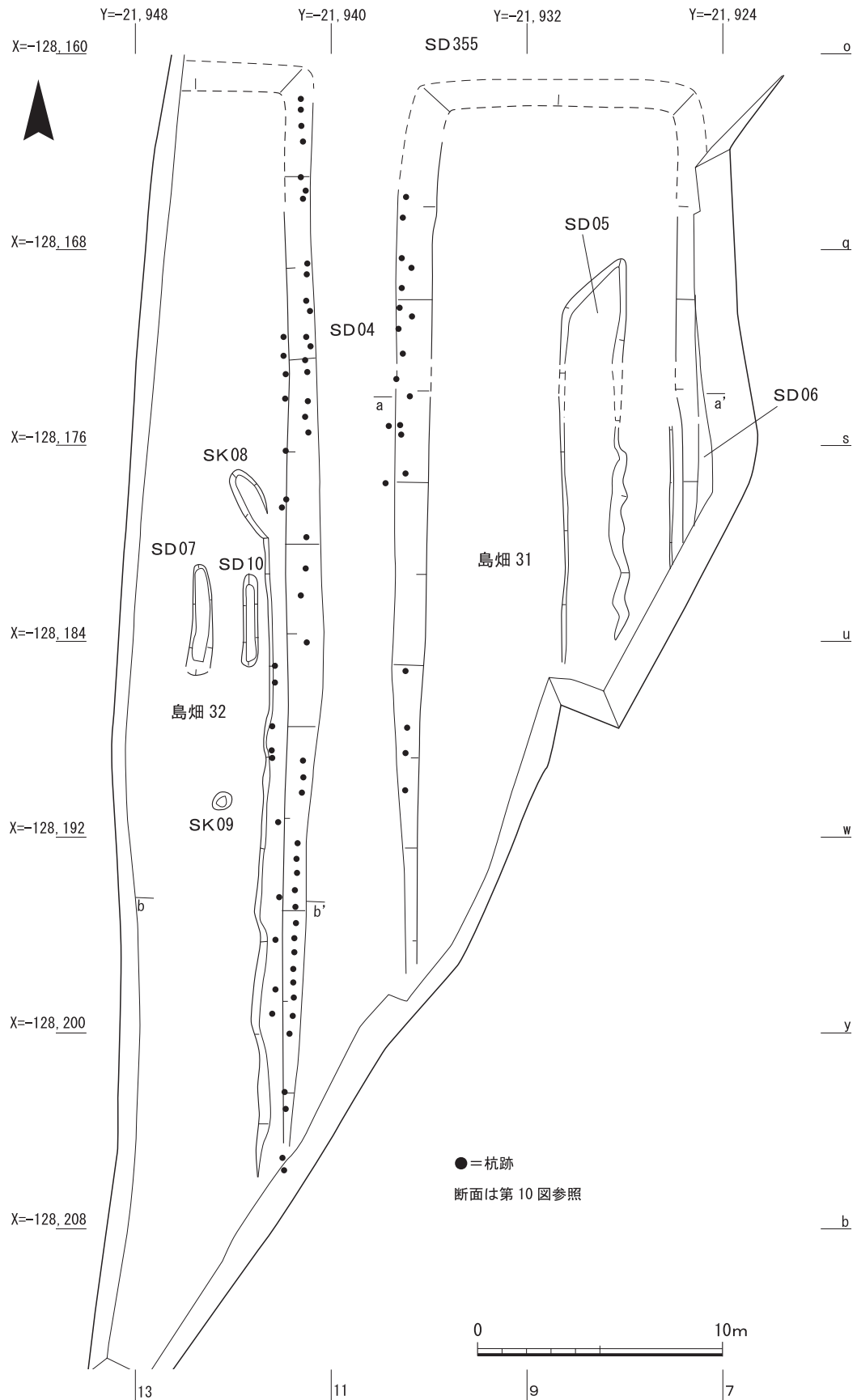
灰色細砂で、近世以降に島畑上で掘削された溝と考えられる。幅が広いことから耕作に伴うものではなく区画溝である可能性が高い。また、島畑の西側の斜面では、護岸のために打たれた杭を多数確認した(図版第6-(1))。なお、施工された時期は検出した層位から近世以降と推定される。遺物は土師器や須恵器、青磁、陶器などが出土した。時期は中世前半であろう。

島畑32(S X01)(第9図) 調査区の西半部で検出した(K5-p11区ほか)。南北方向の島畑であるが、島畑31と同様、北端部は溝状遺構 S D345との関わりが不明瞭であった。東半部を確認したもので、西半部は調査区外となる。島畑の土層断面の観察(第10図下段)によると、基盤層である灰色極細砂混じりシルト(17層)の上部に灰黄色極細砂やにぶい黄褐色細砂など(13~16層)の層序が確認できる。14・16層からは、島畑31同様、飛鳥時代の土器が出土することから、島畑の盛土ではない可能性が高い。島畑の規模は、規模は検出長52.0m、上面検出幅6.6m、基底部検出幅8.1m、高さ0.7m前後である。島畑の上面の標高はおよそ15.5mである。島畑上面では、南北方向の素掘り溝2条(S D07・10)と土坑2基(S K08・09)検出した。S D07・10は全長4m前後、幅0.5~0.9m、深さ0.15m前後である。S K08は長楕円形を呈し、全長3.0m、幅1.0m、深さ0.1m前後である。土坑ではなく素掘り溝の可能性もあるが、島畑の主軸に対して斜行するため、土坑と判断した。S K09はほぼ円形を呈し、直径0.8m前後、深さ0.25m前後である。また、島畑の東側の斜面では、島畑31同様、護岸のために打たれた杭を多数確認した。施工された時期も同じく近世以降と推定される。遺物は土師器や須恵器、陶器などが出土した。時期は中世前半であろう。

溝状遺構 S D04(第9図) 島畑31と島畑32の間で検出した(K5-p10区ほか)。南北方向の溝状遺構である。溝状遺構の土層断面の観察(第10図下段)によると、基盤層である灰色極細砂混じりシルト(17層)の上部に、灰色粗砂(12層)やにぶい黄色細砂混じり粗砂(11層)の洪水に由来すると考えられる砂層の堆積があり、その上部に島畑の盛土と考えられる褐色細砂(10層)がある。その上部に若干の間層を挟んで浅黄色粗砂(6・7層)の、やはり洪水に由来すると考えられる粗砂層の堆積がある。この上部に島畑の盛土と思われるにぶい黄褐色粗砂(5層)がある。その上部には洪水に由来すると考えられる浅黄色粗砂(4層)や灰色細砂混じり粗砂(1層)などが堆積する。このように洪水による堆積と、その上部に安定した土砂による盛土を行うことが繰り返されて島畑が形成されていることが確認できる。規模は検出長約44m、幅5.8~6.0m、深さ0.8m前後である。遺物は、島畑31寄りでは12~13世紀の青白磁小壺蓋破片1点が出土したのをはじめ、須恵器や土師器、陶器などのほか、北宋銭が出土した。時期は中世前半であろう。

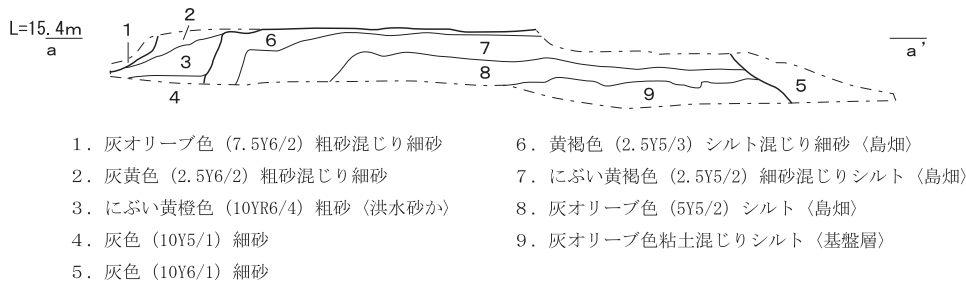
溝状遺構 S D06(第9図) 島畑31の東側、調査区東辺に重複して検出した(K5-q7区ほか)。南北方向の溝状遺構である。島畑31の土層断面の観察(第10図上段)によると、埋土は灰色細砂(5層)などである。検出長13.1m、検出幅0.7~1.2m、深さ0.6m以上である。遺物は土師器や須恵器、瓦器、陶器などが出土した。時期は中世前半であろう。

溝状遺構 S D355(第9図) A地区の島畑31・32とB地区の島畑34・35の間で検出した(K5-o6区ほか)。東西方向の溝状遺構である。溝状遺構の底面は、基盤層である灰オリーブ色粘土混じりシルトや飛鳥時代の整地層ないし遺物包含層と思われる灰オリーブ色シルトなどを掘り込ん

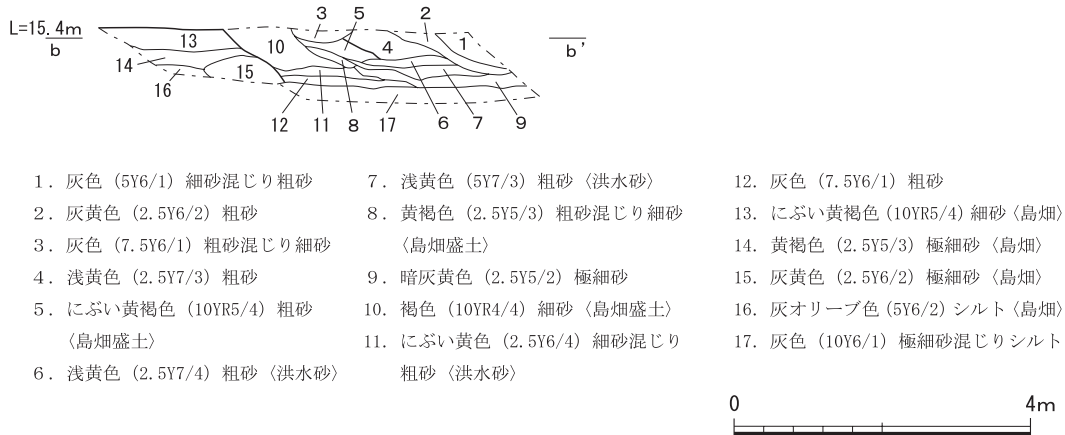


第9図 A地区島畑31・32平面図(1/250)

〔島畑 31 土層断面〕



〔島畑 32 土層断面〕



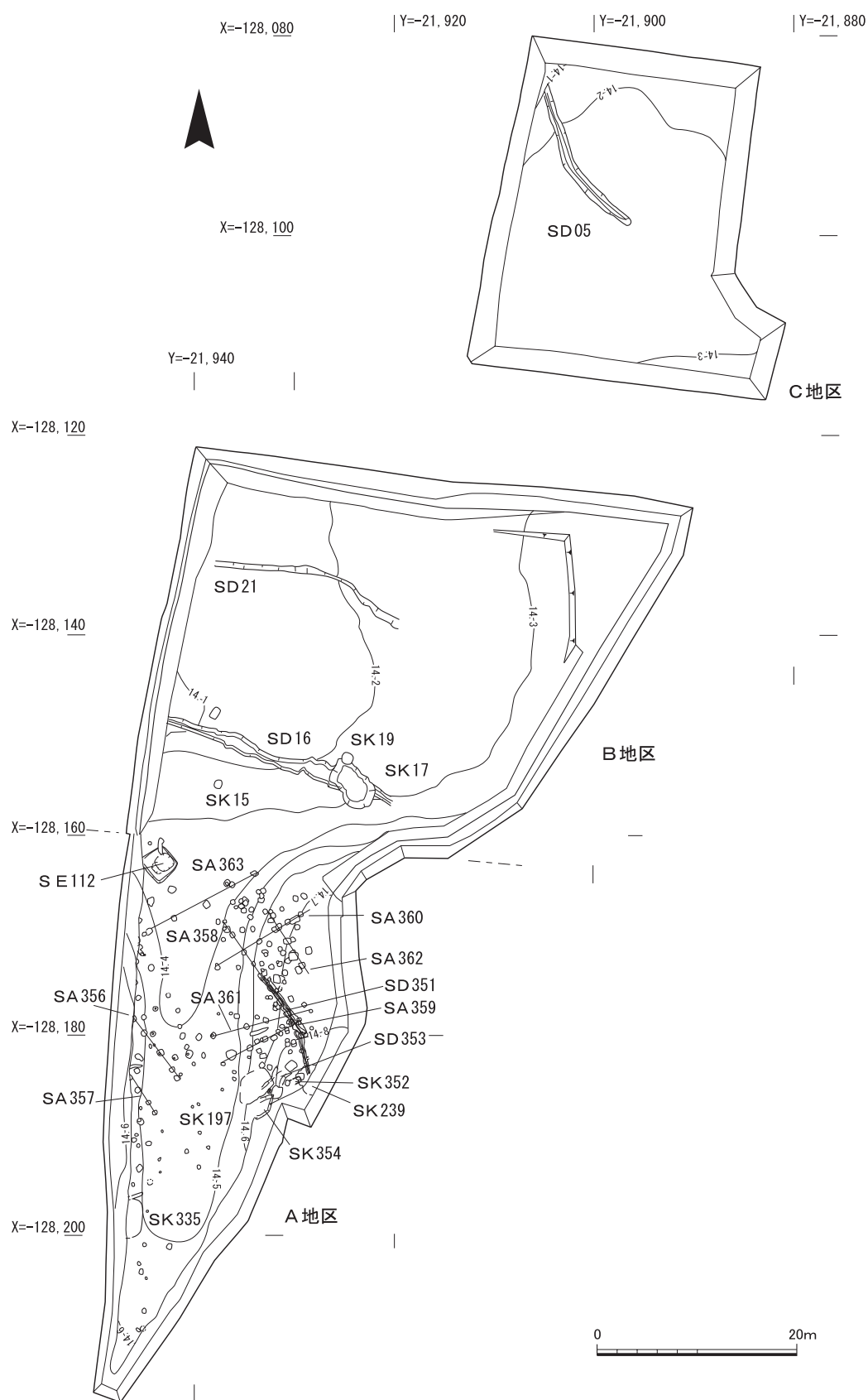
第10図 A地区島畑31・32土層断面図(1/100)

で形成されている。規模は検出長29.5m、推定幅7.8m、深さ0.7m前後である。遺物は土師器が少量出土したのみである。時期は周辺の遺構と同じく中世前半であろう。

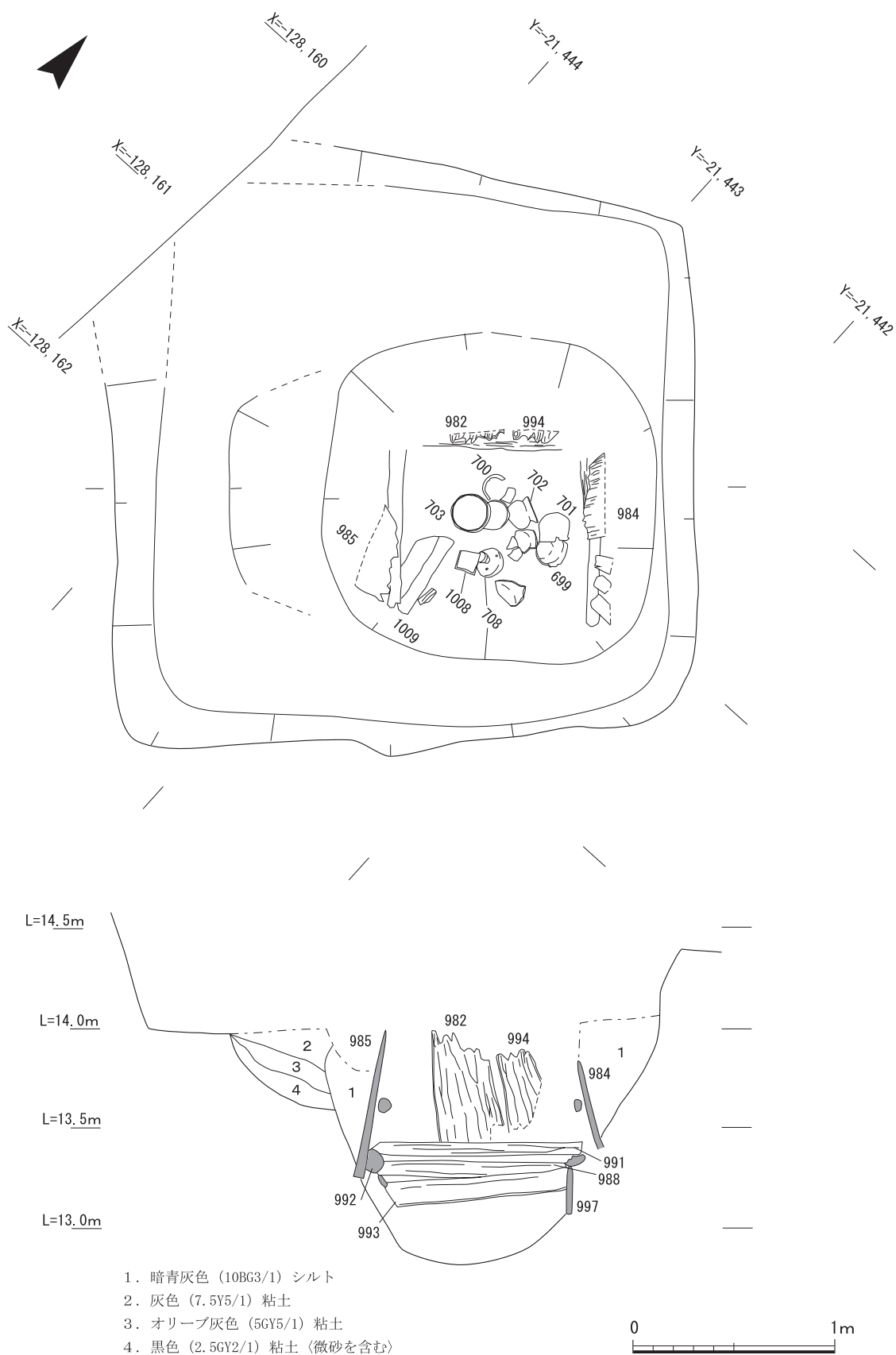
(2) 中層遺構

井戸SE112(第12図) 調査区北部で検出した(K5-p11区ほか)。一辺3.3m程度の方形掘形を持ち、深さは検出面から1.3mである。井戸掘形の四辺は上述の柱穴群とほぼ同じように、北に対して42°西に振る。井戸掘形内には建築部材等を転用した井戸枠が方形に組まれていた。井戸枠は内法の一辺が1.0m前後の方形を呈する。なお、井戸底の標高は12.7mである。

井戸枠は、四隅に柱を立てない構造で、最下部に長さ90～100cm、幅20cm前後、厚さ2.5～4.4cmの板材を北西片を除く三方に、北西片には長さ104cm、直径9～13cmの丸太材を利用して、方形に組んでいる。その上部に断面円形の丸太を各辺4～5本ずつを井桁状に組んで基部とする。その背後に縦板を立てていく構造である。縦板を固定するための横棧を使用するが、基部最上段の丸太から約0.2m上で検出した。検出したのは1段分のみである。横棧に使用されていたのは丸太材で、長さ90cm前後、直径8cm前後である。ただ、横棧の固定方法は十分確認できなかった。基部を構成している丸太は、直径7～10cm、長さ90～110cmのもので、樹皮が残存していたものもある。また、丸太のほかに、建築部材を転用した板材も使用されていた。丸太は隣り合う辺を組み合わせるため、材の一部を大きく抉ってお互いが組みやすくなるように削り込みをいれている。基部の高さは0.35～0.45mである。



第11図 A～C地区中層遺構平面図(1/600)



第12図 A地区井戸S E112実測図(1/30)

縦板は、一辺に2～4枚ずつ立てられていた。縦板は残存長56～85cm、幅15～55cmである(第145図、第147図994、第147図1006・1007)。縦板のなかには井戸枠とは関係ない扉の軸がみられるものもある(第145図982～985)ことから、扉材などの建築部材を転用したと考えられる。

井戸の底には、曲げ物や礫敷などの遺構・遺物は認められなかった。

一方、掘形は、検出面から0.4～0.5mほど下がったところで、幅0.4mほどの犬走り状の平坦面がみられ、掘形そのものは一辺2.2mほどと、一回り小さくなる。この掘形は、最下部に据えられた板材の上部に向かって斜めに掘られている。最下部の板材は方形に組まれているため、板材の上部までは広く掘ったものの、板材は井戸の底として必要な範囲のみを掘削したと考えられる。

井戸枠内の埋土は、全般的に灰オリーブ色シルトないしオリーブ黒色シルトが多い。遺物の出土状況から、埋没に至るまで、いくつかの段階があったと考えられる。最下層では、木の葉や種子などの植物遺存体も多く認められた。井戸の掘形埋土は暗青灰色シルト(1層)を基本とするが、南西側の土層断面では灰色粘土や黒色粘土などの堆積(2～4層)が認められることから、2～4層が埋まったあとに、再掘削している可能性がある。

遺物の出土状況としては、井戸枠内の上層からは、板状の木製品(第147図995・996・1000、第148図1002～1004、第14図1005)や須恵器・土師器片(第132図697・704・706)などが出土した。板状木製品は井戸枠の一部として使用されていたものか、井戸の埋没の過程で廃棄されたものかは断定できなかった。井戸枠の下層から土師器甕7点と須恵器平瓶1点(第132図699～703・708)がまとまって出土した。また、曲げ物の底板なども出土した(第149図1008・1009)。いずれも井戸の廃棄に伴って投棄されたものであろう。時期は飛鳥時代であるが、より詳しい時期は出土した器種に偏りがあるため不明である。

なお、S E 112は飛鳥時代の井戸であるが、井戸枠の一部に建築部材を転用しており、井戸の造営以前にこれらを利用した建物が建っていた可能性もある。

土坑 S K 197(第13図) 調査区中央部、やや東寄りで検出した(K5-u9区ほか)。平面形は不整形な形状を呈する。南北3.0m、東西2.6m分を検出した。深さは0.2～0.3mである。埋土は大きく2層に分かれ、上層が明灰黄色細砂、下層が灰黄色極細砂で、ともに炭化物を含む。埋土からややまとまった土師器杯A・皿A・甕、須恵器杯H蓋・杯G・同蓋・皿・壺などが出土した(第134図737～747)。時期は飛鳥時代中頃から後半と考えられる。

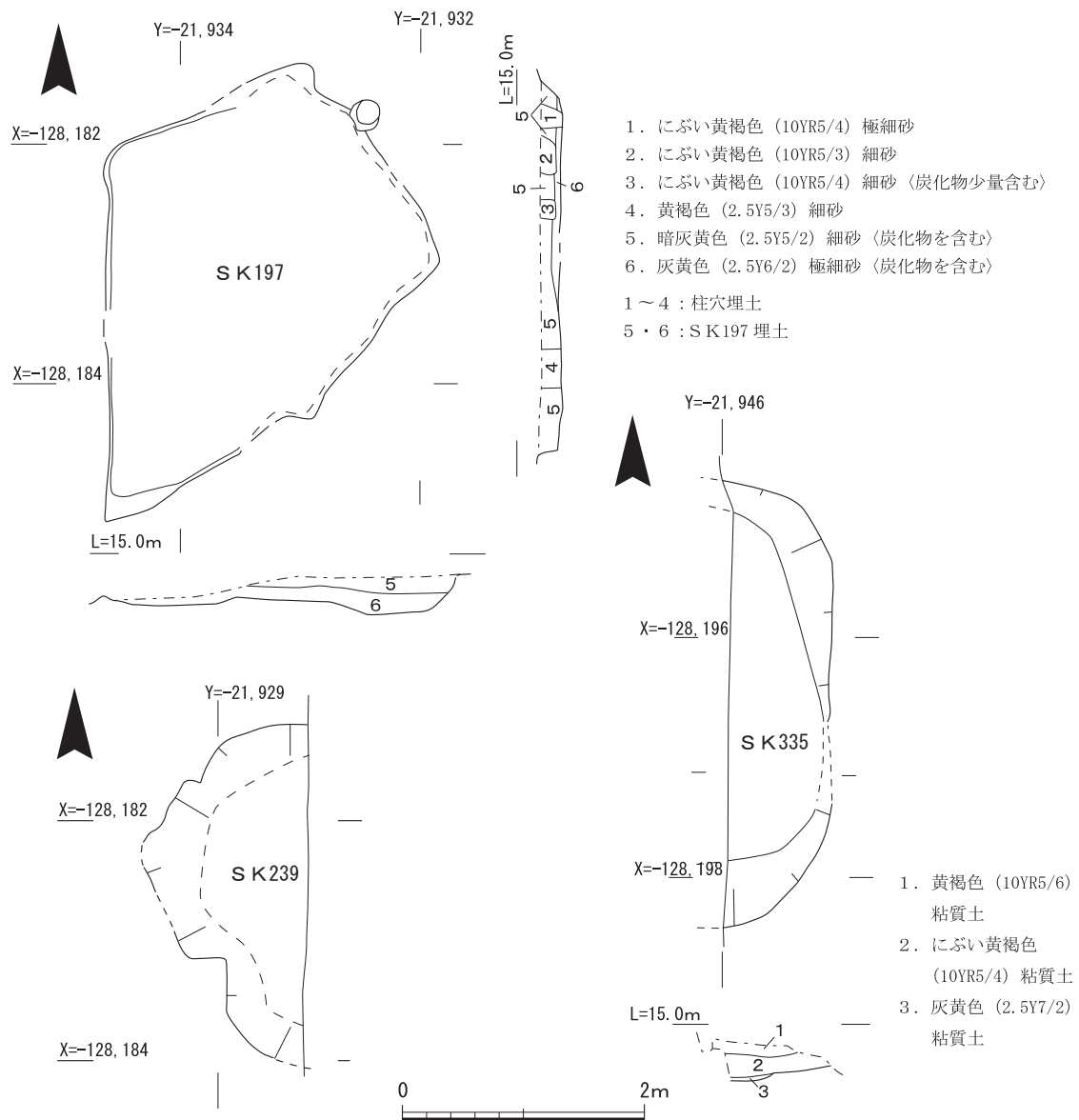
土坑 S K 335(第13図) 調査区南部で検出した(K5-x12区ほか)。平面形は隅丸方形状を呈するが、遺構の西辺は調査区外となる。南北3.5m、東西1.0m、深さ0.3mである。埋土は上層が黄褐色粘質土、下層がにぶい黄褐色粘質土である。下層には炭が少量混じる。埋土からややまとまった土師器甕・高杯脚部・甑、須恵器杯H・同蓋などが出土した(第133図725～734)。時期は飛鳥時代前半と考えられる。

土坑 S K 239(第13図) 調査区中央部、やや東寄りで検出した(K5-u8区ほか)。平面形は不整形な形状を呈する。南北3.0m、東西2.6m分を検出した。深さは0.2m前後である。埋土は黄灰色極細砂である。埋土から土師器鍋、須恵器杯Hなどが出土した(第134図735・736)。時期は飛

鳥時代前半と考えられる。

土坑 S K 352 (第13図) 調査区中央部、東辺付近で検出した (K5-v8区)。平面形は隅丸方形を呈するが、南西側は断ち割りを行ったため確認できなかった。長辺0.7m、短辺0.5mである。深さは0.1m前後である。埋土はにぶい黄褐色シルトである。小規模な土坑であるにもかかわらず、埋土から土師器杯ないし碗、須恵器杯H・同蓋などの土器が出土した (第133図710～713)。時期は飛鳥時代前半と考えられる。

土坑 S K 354 (第13図) 調査区東壁の中央部付近で検出した (K5-v9・w9区)。溝状の遺構の可能性もあるが、ここでは土坑として報告する。形状は不整形で、長軸2.4m、短軸1.7m、深さ0.25m前後である。埋土はにぶい黄褐色シルトである。埋土からややまとまった遺物が出土した。土師器杯C・甕、須恵器杯H・同蓋などが出土した (第133図714～724)。時期は飛鳥時代前半と



第13図 A地区土坑 S K 197・239・335実測図(1/60)

考えられる。

以上の土坑群は、土色の変化が認められたため、土坑として調査、報告するが、実際には整地層もしくは包含層から多数の土器群が出土していることから、場合によってはこれらの土坑群が整地の際の1単位である可能性も考えられる。

柱穴群(第14・15図) 300基以上の柱穴を検出した。一辺0.7m、深さ0.45mの比較的大型の柱穴が多く見られる。柱痕や柱あたりを明瞭に確認できるものが多い。しかし、建物として組み合わせるのが確認できず、直線状に並ぶ柱穴列を7条復元した(S A 356～363)。ただ、図示した7条の柱穴列もあくまでも復元の一案に過ぎず、確定的なものではない。これらの柱穴列から、北に対して15～36°西に主軸を振る掘立柱建物や柵などの存在が想定できる。すべての柱穴からではないが、土師器片や須恵器片が出土している。時期を明らかにできない資料も多いが、おおよそ飛鳥時代に位置づけられる。なお、これらの柱穴には、先行する柱穴等が廃絶したのち、整地を行ってから新たに柱穴を掘削しているものがある。この整地層、または遺物包含層を中心に飛鳥時代の須恵器杯H・杯G、土師器碗・杯・皿などが大量に出土した(第135～139図)。

柱穴列 S A 356(第14図) 調査区中央部、西辺寄りで検出した(K5-t12区ほか)。柱穴 S P 28・27・22・20・100から構成され、小規模な柱穴である S P 25も含まれるかもしれない。全長は7.2m以上である。北に対して36°西に振る。柱穴は、一辺0.5～0.6mの方形のものが多く、深さは0.3～0.5mである。柱穴間の間隔は1.1～2.5mで、ややばらつきがある。

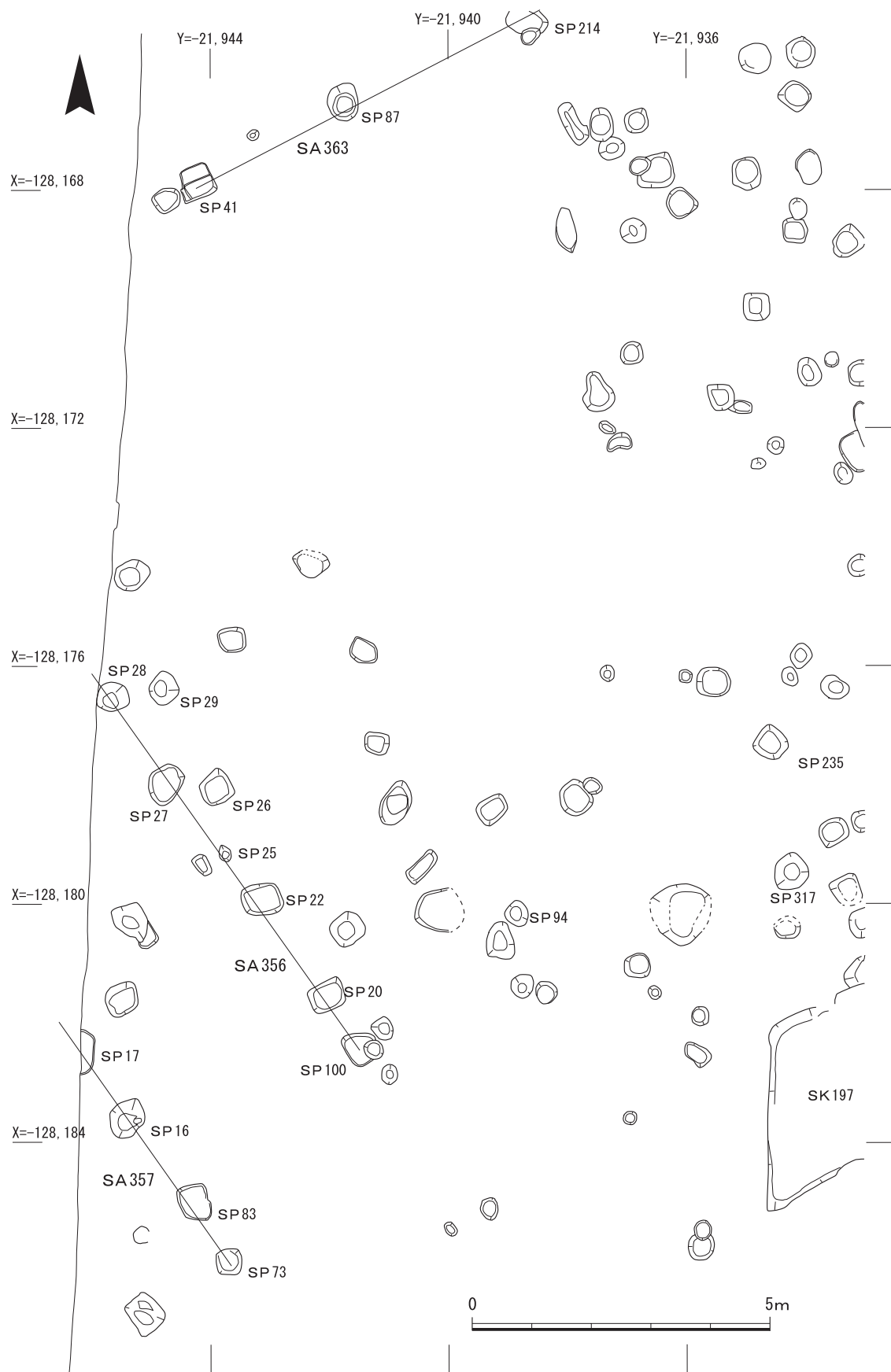
柱穴列 S A 357(第14図) 調査区中央部、西辺寄りで検出した(K5-u12区ほか)。柱穴 S P 17・16・83・73から構成される。全長は4.2m以上である。北に対して36°西に振る。柱穴は、一辺0.4～0.6mの方形のものが多く、深さは0.1～0.3mである。柱穴間の間隔は1.1～1.8mで、ややばらつきがある。

柱穴列 S A 358(第15図) 調査区北半部、やや東寄りで検出した(K5-r9区ほか)。柱穴 S P 122・300・109・208・181・161・148・168から構成され、今回検出した柱穴列では全長13.7mと、最も長い。柱穴間の間隔は1.0～2.0mであるが、1.5～1.7mに多く集まる。北に対して35°西に振る。柱穴は、一辺ないし直径が0.4～0.7mの方形または円形のものが多く、深さは0.2～0.3mである。

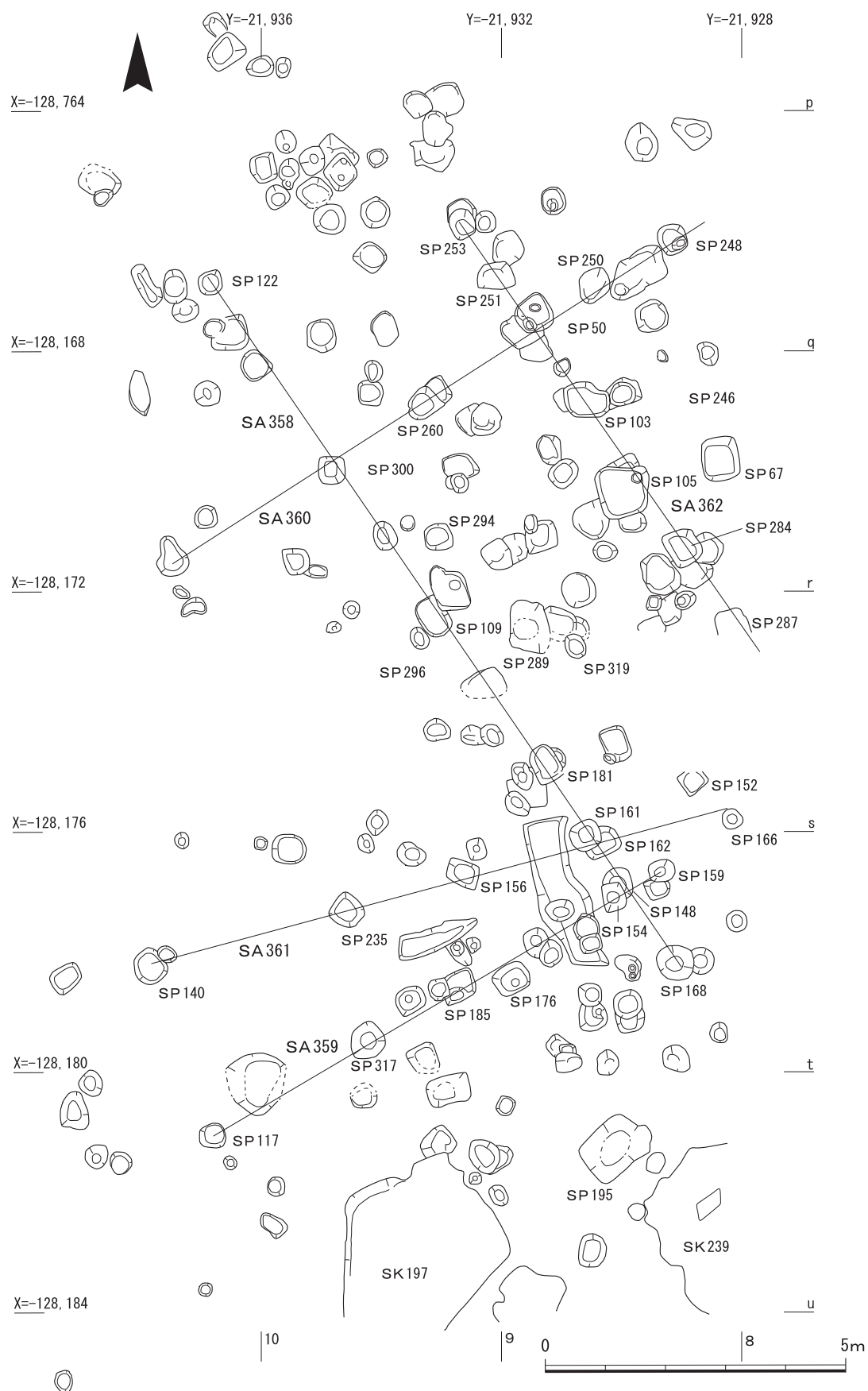
柱穴列 S A 359(第15図) 調査区中央部、東寄りで検出した(K5-t8区ほか)。柱穴 S P 159・154・75・185・317・117から構成される。全長は8.6mである。北に対して31°西に振る。柱穴は直径0.4～0.6mの円形が主体で、深さは0.2～0.3mである。柱穴間の間隔は0.9～3.0mで、S P 317とS P 117の間が長い、主体的な間隔が1.5m前後であることから、間に柱穴が1つあった可能性はある。

柱穴列 S A 360(第15図) 調査区北半部、やや東寄りで検出した(K5-q8区ほか)。柱穴 S P 248・250・260・300から構成される。ただし、S P 300は、柱穴列 S A 358に伴うものかもしれない。全長は9.8mである。北に対して32°西に振る。柱穴は一辺0.4～0.5mの方形のものが多く、深さは0.1～0.4mである。柱穴間の距離は1.5～3.1mで、ややばらつきがある。

柱穴列 S A 361(第15図) 調査区中央部、やや東寄りで検出した(K5-t8区ほか)。柱穴 S P



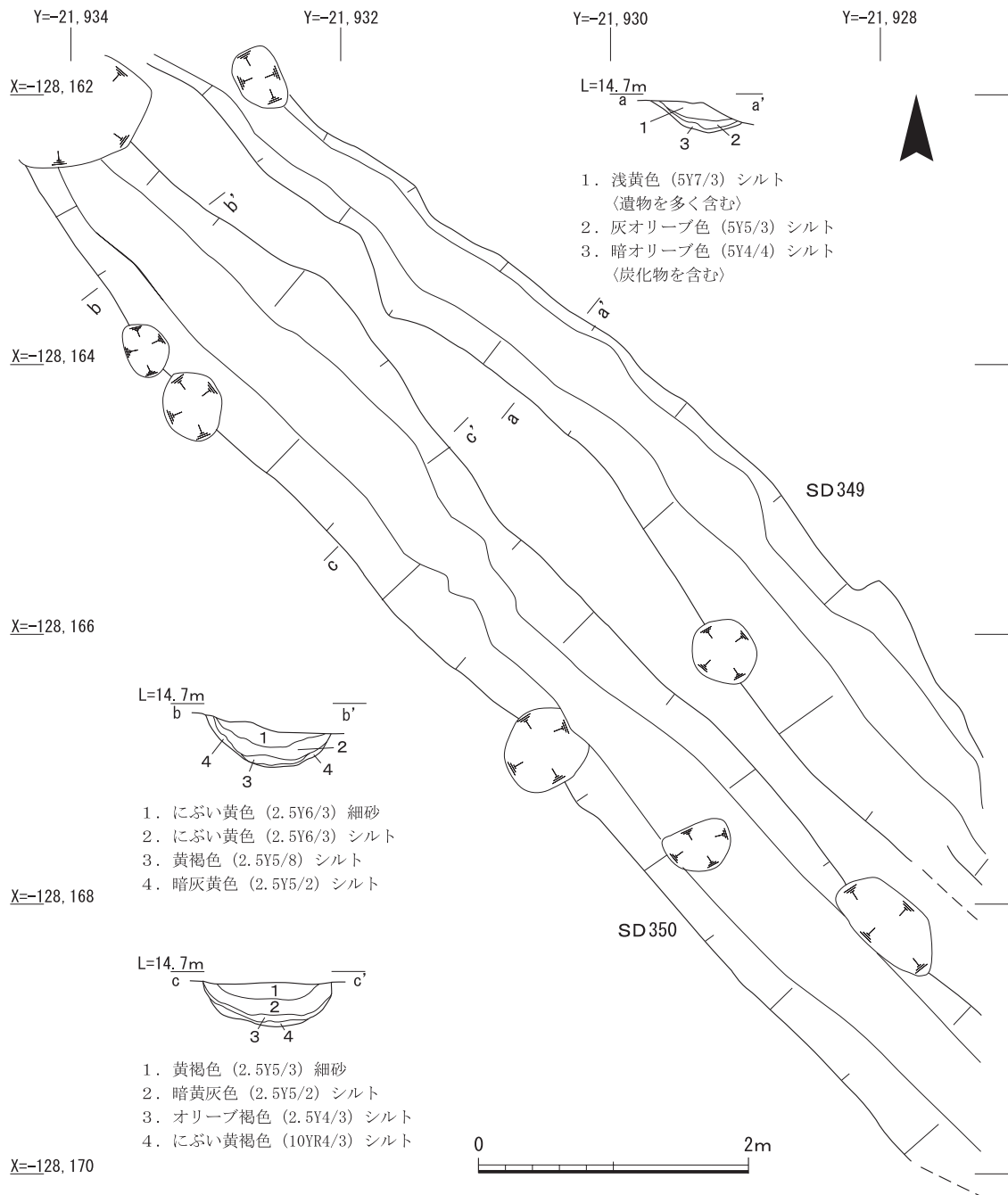
第14図 A地区柱穴群実測図1 (1/100)



第15図 A地区柱穴群実測図2 (1/100)

166・162・156・235・140から構成される。全長は10.0mである。北に対して15°西に振り、ほかの柱穴列とは主軸の方位が大きく異なる。柱穴は一辺0.4～0.6mの方形のものが多く、深さは0.1～0.2mである。柱穴間の間隔は2.1～3.4mで、S P 235とS P 140の間が長いものの、他の間隔はほぼ均等である。

柱穴列 S A 362 (第15図) 調査区北半部、東寄りで検出した (K5-r8区ほか)。柱穴 S P 253・



第16図 A地区溝S D349・350実測図(1/50)

50・103・105・284・287から構成され、柱穴 S P 251 も含まれるかもしれない。全長は 8.1m 以上である。北に対して 33° 西に振る。柱穴は一辺 0.4～0.6m ほどの方形のものが多く、深さは 0.2～0.3m である。柱穴間の間隔は 1.6～1.7m で、ほぼ均等である。

柱穴列 S A 363 (第14図) 調査区北部、西寄りで検出した (K5-p9区ほか)。柱穴 S P 62・214・87・41 から構成されるが、S P 214 は柱穴列の軸線から若干ずれる。全長は 12.0m である。北に対して 28° 西に振る。柱穴は一辺 0.5～0.6m の方形のものが多く、深さは 0.2～0.3m である。柱穴間の間隔は 2.8～3.2m で、ほぼ均等である。

(3) 下層遺構

溝 S D 349 (第16図) 調査区の北東部で検出した (5K-q7区ほか)。北に対して 40° ないし 50° 西に振る。検出長 10.6m、幅 0.6～1.0m、深さ 0.2m である。埋土は大きく 3 層に分かれ、上層は浅黄色シルト、中層は灰オリーブ色シルト、下層は暗オリーブ色シルトで、下層には炭化物が混じる。遺物は上層から古墳時代前期の土器が多数出土した (第72図 8～第73図 26)。すぐ南西側でほぼ同じ方向に流れる溝 S D 350 を検出した。溝 S D 349 の時期は B 地区で検出した溝 S D 22 とほぼ同時期の古墳時代前期である。

溝 S D 350 (第16図) 調査区の北東部、溝 S D 349 のすぐ南側で検出した (5K-r7区ほか)。北に対して 42° 西に振る。おおむね S D 349 とほぼ同じ方向に流れ、直接的な重複関係は認められないものの、溝状遺構 S D 355 を検出した地点まで両溝を延長すると重なるため、両者は重複関係にあったと考えられる。ただし、両者の新旧関係は明らかでない。検出長 12.3m、幅 1.0～1.3m、深さ 0.3～0.4m である。埋土は大きく 4 層に分かれ、上から黄褐色細砂、暗黄灰色シルト、オリーブ褐色シルト、にぶい黄褐色シルトである。遺物は土師器の破片が出土したのみである。時期は、出土した土師器片や S D 349 との関係から古墳時代前期と推定される。

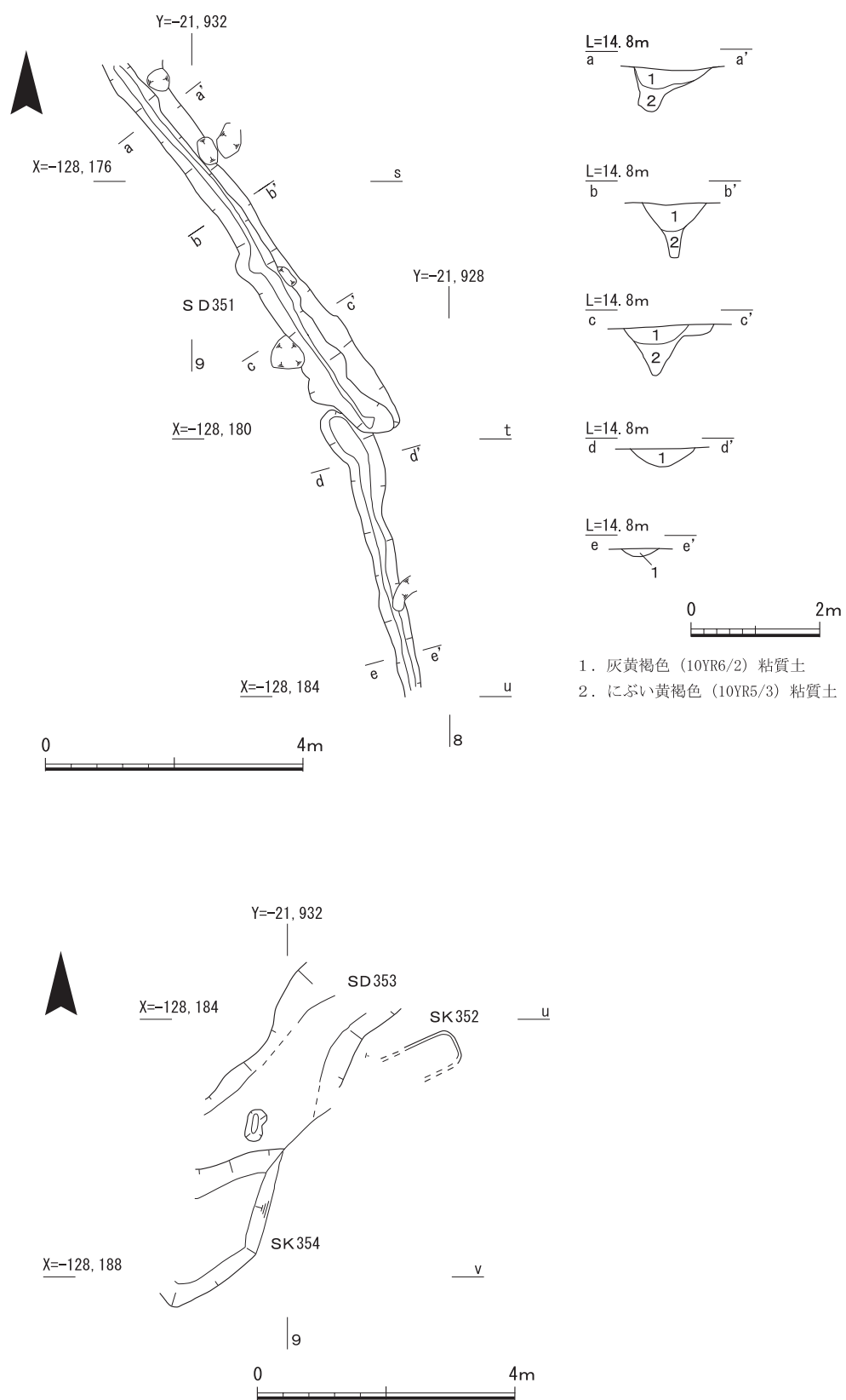
溝 S D 351 (第17図) 調査区の中央、東寄りで検出した (5K-s8区ほか)。直接つながらない部分もあるが、検出長 11.1m、幅 0.3～0.7m、深さ 0.35m である。断面形は漏斗状である。埋土は大きく 2 層に分かれ、上層が灰黄褐色粘質土、下層がにぶい黄褐色粘質土である。遺物は土師器片が出土した。時期は古墳時代前期と推定される。

柱穴列 S A 364 (第25図) 調査区南部で検出した (K5-q10区ほか)。柱穴 S P 123・163・177・171 から構成される。必ずしも一直線に並ばないが、古墳時代の遺物がこれらの柱穴に限って出土することから、柱穴列として復元した。全長は 13.8m である。北に対して 32° 西に振り、近接する溝 S D 349・350 とおおむね同じ方位である。柱穴の深さは 0.2m 前後である。遺物は、各柱穴から弥生土器甕や土師器高杯・有段鉢などが出土した。時期は古墳時代前期と考えられる。

2) B 地区の検出遺構

(1) 調査区の概要と基本層序

A 地区の北側に接して位置する。平面形は北辺約 50m、南辺約 26m、南北の長さ約 38m の台形状を呈する調査区である。現地表面の標高はおおよそ 15.8m である。現地表下 1.0～1.1m で、上層遺構として鳥畑 3 基、溝状遺構 3 条を検出した (第 8 図)。また、鳥畑を除去すると、中層遺構とし



第17図 A地区溝SD351・353、土坑SK352・354実測図(1/100・1/50)

て飛鳥時代から平安時代にかけての溝2条、土坑4基などを検出した。中層遺構面に伴う遺物包含層、もしくは整地層からは大量の飛鳥時代の土器群が出土した。中層遺構面を0.1～0.2m下げると、調査区の中央に、南南東から北北西に延びる流路状の遺構を1条検出した。また、周辺の精査を進めると、下層遺構面の検出した同一面で弥生時代中期の土坑1基などを検出した。さらに下層遺構の流路状遺構を完掘すると、その下層でも弥生時代中期の流路を確認することができた。調査面積は1610㎡である。出土した遺物は整理箱207箱である。また、500点を超える木製品・加工材などが出土した。

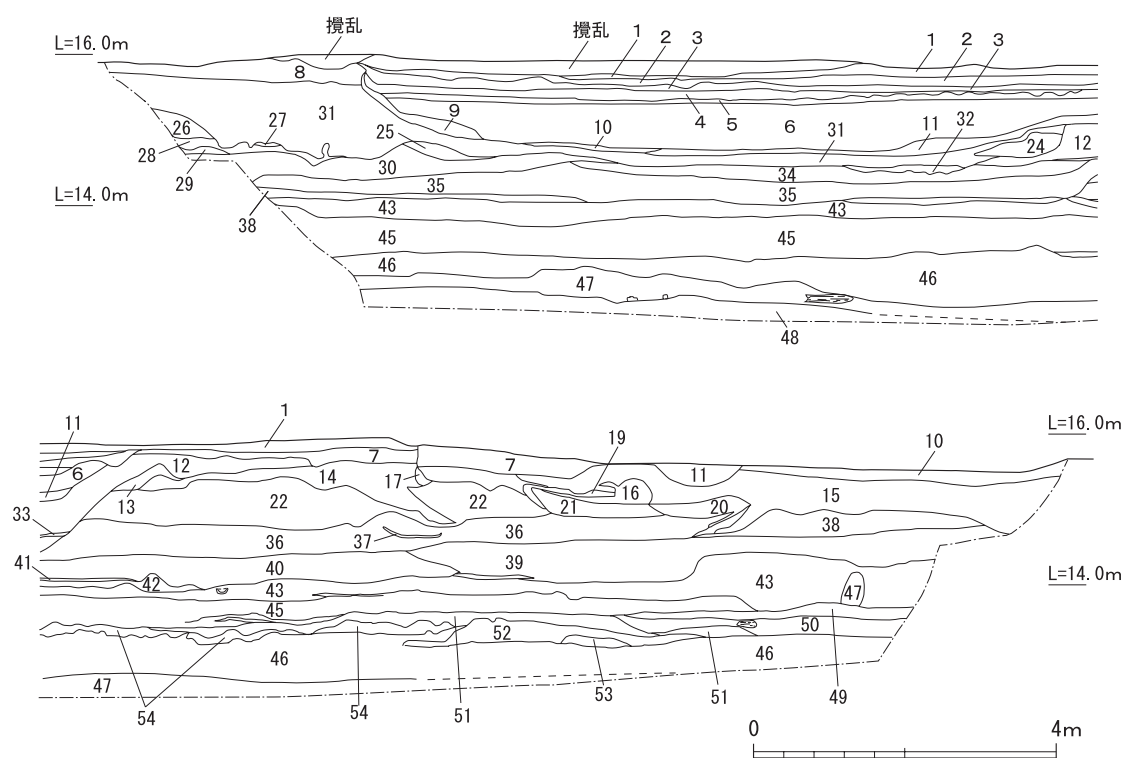
基本的な層序(第18図)は耕作土と思われる黒褐色粘性砂質土(1層)や灰色砂質土(10層)などの下層は、西部では厚さ10cmほどのほぼ水平な堆積層(2～5層)が認められるのに対して、東部では層序の乱れがあり、黄褐色砂質土(14・15層)などがある。両者の違いは、下層の遺構の状況にもおおむね対応している。まず、西部では1～5層の下層は黒灰色粘性砂質土(6層)で、溝状遺構S D02の埋土である。その下層は、暗灰色シルトや灰色シルト(31・34・35層など)が再び水平に堆積している。これらはS D02の下層埋土と考えられるが、特に35層は島畑35の下層にも延びていく。東部では土層の乱れが島畑の盛土と考えられる黄褐色～灰褐色砂質土(12層)や灰褐色～赤褐色細砂(22層)などの下層にまで達している。この下層には黄褐色～暗褐色粘質土(36層)や暗灰色シルト(39層)、暗褐色粘質土(40層)などがあり、より古い島畑と考えられる。

ただし、これらの層序からは飛鳥時代から平安時代にかけて遺物が出土しているため、盛土ではなく当時の堆積層、つまり遺物包含層の可能性が高い。これらの下層に当たる暗灰色粘質土(43層)より下層の白色細砂や黄褐色砂が混じる暗灰色粘質土ないし黒褐色シルト(44～48層)は、下層遺構として検出した溝S D22の埋土である。43・45層では古墳時代中～後期の須恵器や子持ち勾玉が出土している。

また、45層よりも下層では古墳時代前期の布留式土器とともに木製品や加工木などが多数出土している。

(2)上層遺構

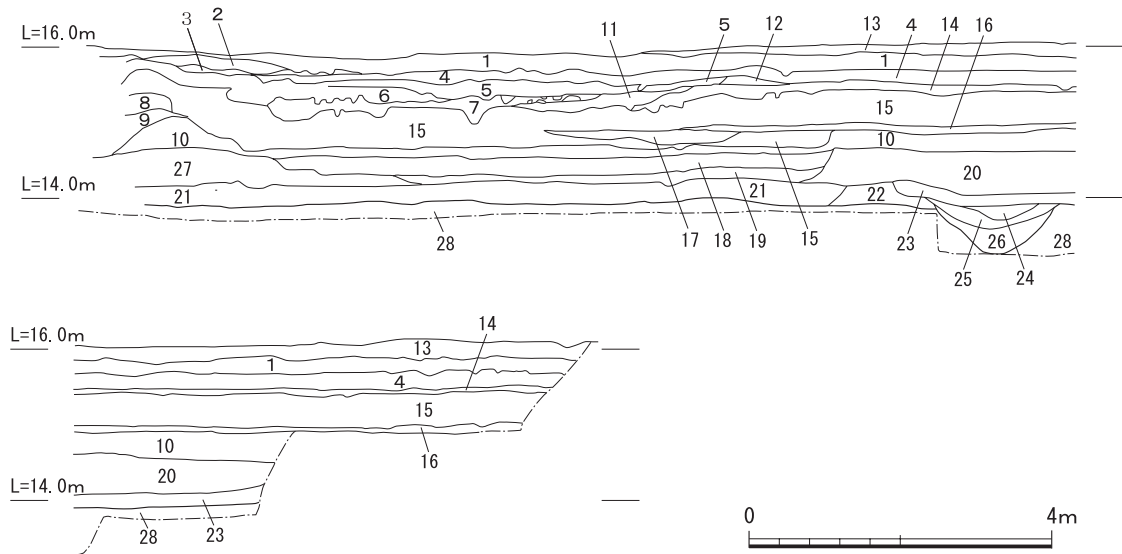
島畑33(S X31)(第8図) 調査区の北東隅で検出した(K4-h24区ほか)。島畑は一部しか確認していないが、南北方向の島畑と推定される。島畑の断面観察(第19図下段)によると、基盤層であるオリーブ黄色シルト(28層)の上部に、弥生時代中期の溝S D18を覆う灰オリーブ色細粒砂～シルト(23層)があり、これも基盤層といえる。この上部には暗灰黄色シルト(20層)の厚い層序があり、この上面が最初期の島畑と考えられる。20層からは遺物が出土せず、詳細な時期は不明で、かつ自然堆積かどうかとも断定できなかった。さらに20層の上部に暗緑灰色細粒砂(10層)があり、これも島畑とみられる。この上部に薄い間層を挟んで、島畑33・34、溝状遺構S D32を覆う灰オリーブ色細粒砂～粗粒砂(15層)が広く堆積する。規模は検出長13.1m、基部検出幅9.1m、上面検出幅7.9m、高さ1.1mである。島畑上面の標高はおよそ15.0mである。島畑上面では素掘り溝を検出しなかった。遺物も出土しなかったため、時期は不明であるが、周辺の調査成果から中世と考えられる。



- | | |
|-----------------------------|--------------------------|
| 1. 黒褐色粘性砂質土 | 28. 灰色砂質土 |
| 2. 明褐色～暗青灰色砂質土 | 29. 赤褐色細砂 |
| 3. 灰色砂 | 30. 緑灰色粘質土 |
| 4. 黄灰色細砂 | 31. 暗灰色シルト〈灰色砂混じり〉 |
| 5. 灰色～暗灰色粘質土 | 32. 暗灰色シルト〈灰色砂混じり〉 |
| 6. 黒灰色粘性砂質土〈灰色粘土混じり、SD02埋土〉 | 33. 灰色細砂 |
| 7. 灰色～青灰色粘性砂質土 | 34. 暗灰色シルト |
| 8. 赤褐色～灰褐色粘質土〈黒灰色粘土ブロック混じり〉 | 35. 灰色シルト |
| 9. 灰色粘質土と黄褐色粘質土の互層 | 36. 黄褐色～暗褐色粘質土 |
| 10. 灰色砂質土 | 37. 灰色細砂 |
| 11. 赤褐色～黄褐色砂層 | 38. 暗灰色シルト〈褐色砂混じり〉 |
| 12. 黄褐色～灰褐色砂質土 | 39. 暗灰色シルト〈細砂混じり〉 |
| 13. 赤褐色砂質土〈灰色粘土ブロック混じり〉 | 40. 暗褐色粘質土〈黄褐色細砂混入〉 |
| 14. 黄褐色砂質土 | 41. 暗褐色粘質土 |
| 15. 黄褐色砂質土〈褐色砂質土混じり〉 | 42. 暗褐色粘質土〈黄褐色砂混じり〉 |
| 16. 青灰～褐色細砂〈暗灰色粘土混じり〉 | 43. 暗灰色粘質土〈白色細砂混じり〉 |
| 17. 灰色～赤褐色細砂 | 44. 暗灰色粘質土 |
| 18. 灰褐色細砂～暗青灰色シルト | 45. 暗灰色粘質土〈青色～黄褐色砂混じり〉 |
| 19. 赤褐色シルト～黒灰色細砂(ラミナ) | 46. 黒褐色シルト〈有機質混じり〉 |
| 20. 褐色細砂・灰褐色細砂(ラミナ) | 47. 黒褐色シルト〈灰色砂互層、有機質混じり〉 |
| 21. 暗青灰色細砂〈灰色細砂混じり〉 | 48. 黒褐色シルト |
| 22. 灰褐色～赤褐色細砂(ラミナ) | 49. 暗青灰色粘質土 |
| 23. 黄灰色細砂〈灰褐色シルト混じり〉 | 50. 黒灰色シルト |
| 24. 褐色砂質土〈黄褐色砂質土混じり〉 | 51. 暗灰色粘質土 |
| 25. 灰色～黄褐色細砂 | 52. 暗灰色シルト |
| 26. 褐色砂質土〈灰色砂混じり〉 | 53. 暗灰色細砂 |
| 27. 褐色砂質土〈灰色砂混じり〉 | 54. 灰色細砂 |

第18図 B地区中央断ち割り土層断面図(1/100)

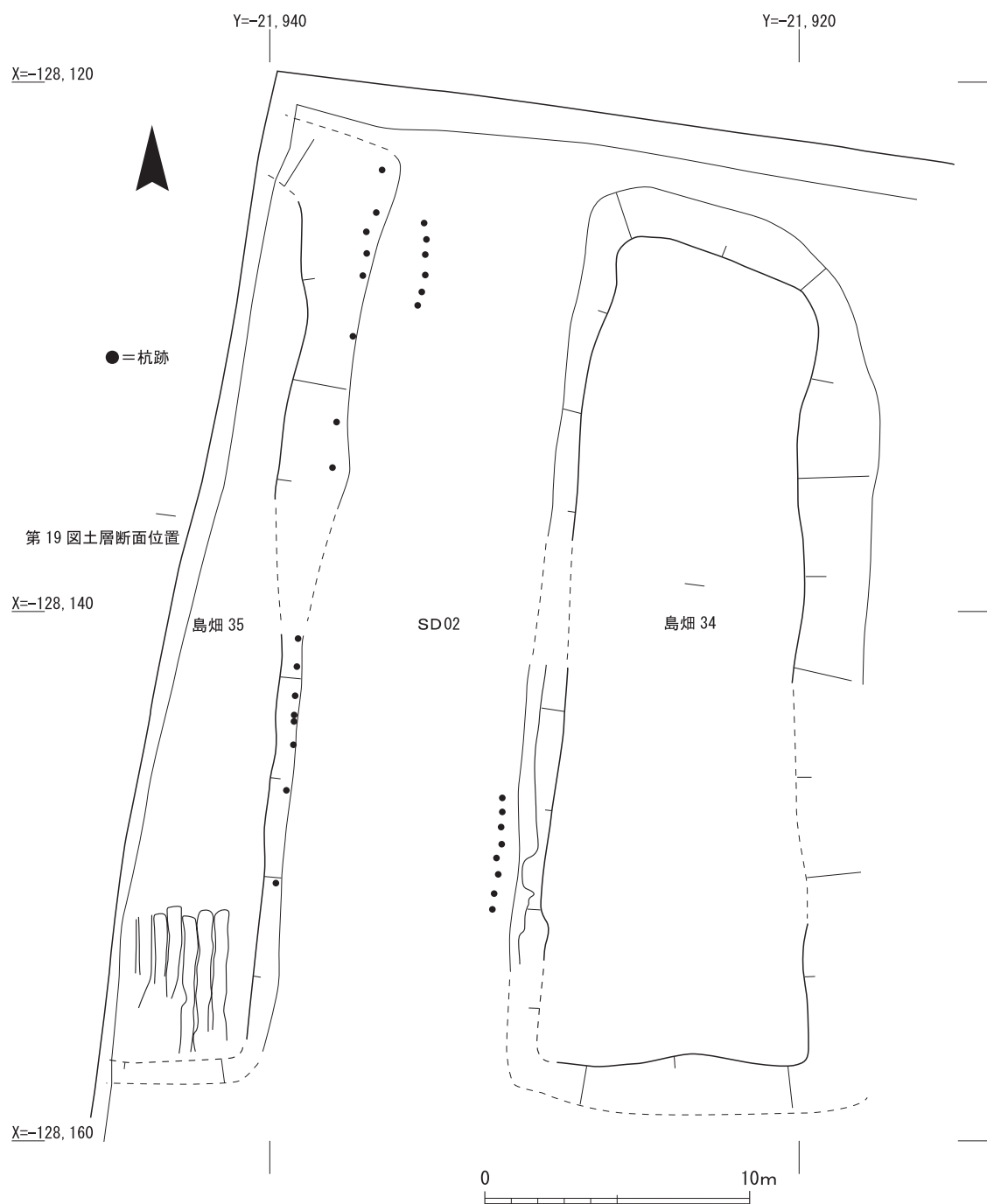
島畑34(第20図) 調査区のほぼ中央で検出した(K5-h4区ほか)。南北方向の島畑である。島畑の断面観察(第18図)によると、溝S D22の最終埋土である暗灰色砂質土(43層)の上部に堆積した暗灰色シルト(39層)や暗褐色粘質土(40層)を島畑の基盤層としていと考えられる。39・40層からは飛鳥時代の遺物が出土しており、このころの遺物包含層と考えられる。黄褐色ないし暗褐色粘質土(36層)の上面が最初期の島畑に当たると考えられる。この36層からも奈良時代の遺物が出土しており、このころの遺物包含層である可能性がある。また、36層の東側の暗灰色シルト(38層)も最初期の島畑を構成する層序であろう。36・38層の上部には灰褐色～赤褐色細砂(22層)や黄褐色砂質土(15層)などの層序が認められるが、盛土によるものなのか自然堆積によるものなのか、断定できなかった。22層の上部がかなり攪乱されているが、原因等は不明である。なお、第19図の暗灰黄色シルト(20層)や暗緑灰色細粒砂(10層)などが島畑34の盛土に当たると考えられる。規模は検出長34.5m、基部幅12.6m、上面幅8.8m、高さ0.5mである。島畑上面の標高はおよそ15.0mである。島畑の上面には後世の攪乱等が認められたものの、素掘り溝等は確認できなかった。遺物は須恵器や土師器、陶器などが出土した。詳細な時期は不明であるが、周辺の調査成果から中世と考えられる。



- | | |
|--|------------------------------|
| 1. 黄灰色 (2.5Y4/1) 中粒砂 | 15. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 細粒砂～粗粒砂 |
| 2. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細粒砂～中粒砂 | 16. 緑灰色 (10GY5/1) 砂質土 シルト |
| 3. 暗灰黄色 (2.5Y4/3) 細粒砂～シルト (2層を少し含む) | 17. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粗粒砂 |
| 4. 灰色 (7.5Y5/1) 細粒砂～粗粒砂 | 18. 灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト |
| 5. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 細粒砂～中粒砂 | 19. オリーブ灰色 (10Y4/2) シルト |
| 6. 灰色 (10Y4/1) シルト | 20. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト |
| 7. 浅黄色 (5Y7/3) 粗粒砂～極粗粒砂 (6層をブロックとして含む) | 21. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト |
| 8. 暗オリーブ色 (5Y4/4) 細粒砂～中粒砂 | 22. 灰色 (10Y4/1) シルト |
| 9. オリーブ黒色 (10Y3/2) 細粒砂～中粒砂 | 23. 灰オリーブ色 (10Y4/1) 細粒砂～シルト |
| 10. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 細粒砂 | 24. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 細粒砂～シルト |
| 11. 暗緑灰色 (7.5GY3/1) シルト | 25. 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト |
| 12. 灰白色 (5Y7/2) 粗粒砂 | 26. 灰色 (7.5Y5/1) 砂質土 |
| 13. 黒褐色 (2.5Y3/2) 中粒砂～粗粒砂 | 27. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) シルト |
| 14. 暗オリーブ褐色 (5GY3/1) 中粒砂～シルト | 28. オリーブ黄色 (5Y6/3) シルト (基盤層) |

第19図 B地区島畑33土層断面図(1/100)

島畑35(第20図) 調査区の西辺で検出した(K5-f10区ほか)。南北方向の島畑である。島畑の断面観察(第18図)によると、島畑34と同様、溝SD22の最上層である暗灰色粘質土(43層)の上部に溝状遺構SD02の埋土と考えられる灰色シルト(35層)が一旦堆積した後、その上部には緑灰色粘質土(30層)、灰色砂質土(28層)、褐色砂質土(26層)などの堆積が認められる。これらの上部、特に島畑35の東側について、大きく削平されたのか、層序の乱れがあり、暗灰色シルト(31層)が厚く堆積する。30層の上部が最初期の島畑と考えられる。溝状遺構SD02の堆積層との関わりから、島畑34と島畑35の間には形成時期に時間差が存在すると考えられる。規模は全長35.2m、基



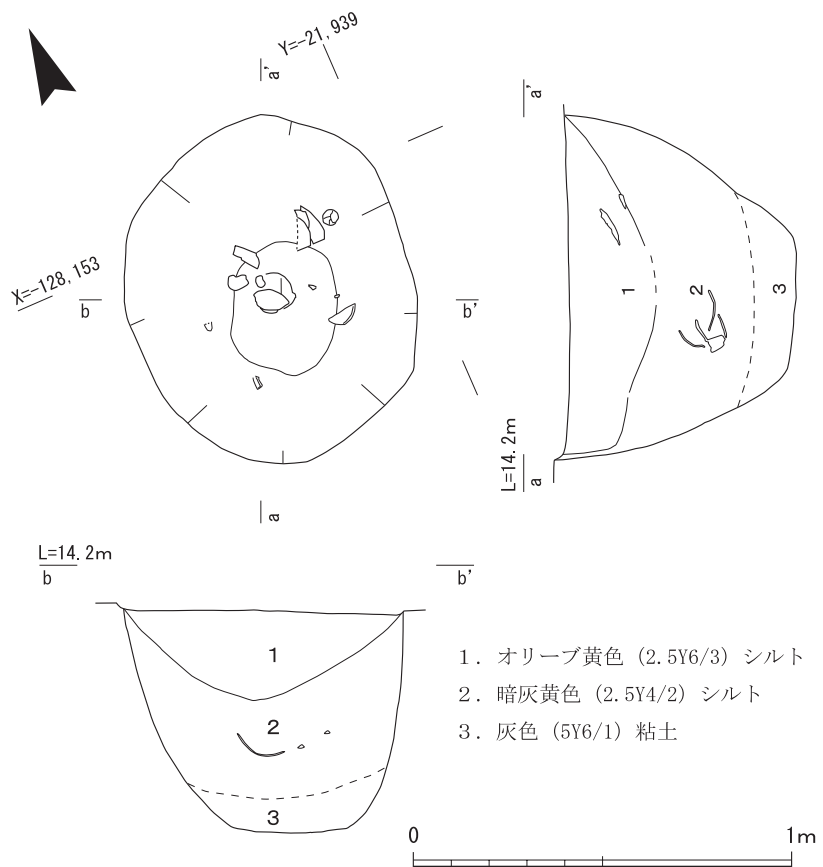
第20図 B地区島畑34・35平面図(1/250)

部検出幅6.2m、上面検出幅4.9m、高さ0.4mほどである。島畑上面の標高はおよそ14.7mである。島畑の大半は調査区外に延びるため全容は不明である。島畑上面では、南端付近で南北方向の素掘り溝を7条検出した。この素掘り溝は検出長2.7～5.0m、幅0.4～0.5m、深さ0.05～0.15mである。素掘り溝の埋土は灰色細砂である。島畑の南半部の東側斜面には多数の杭痕が認められた。護岸のためのものであろう。遺物は土師器や須恵器、陶器などが出土した。詳細な時期は不明であるが、周辺の調査成果などから中世のものと考えられる。

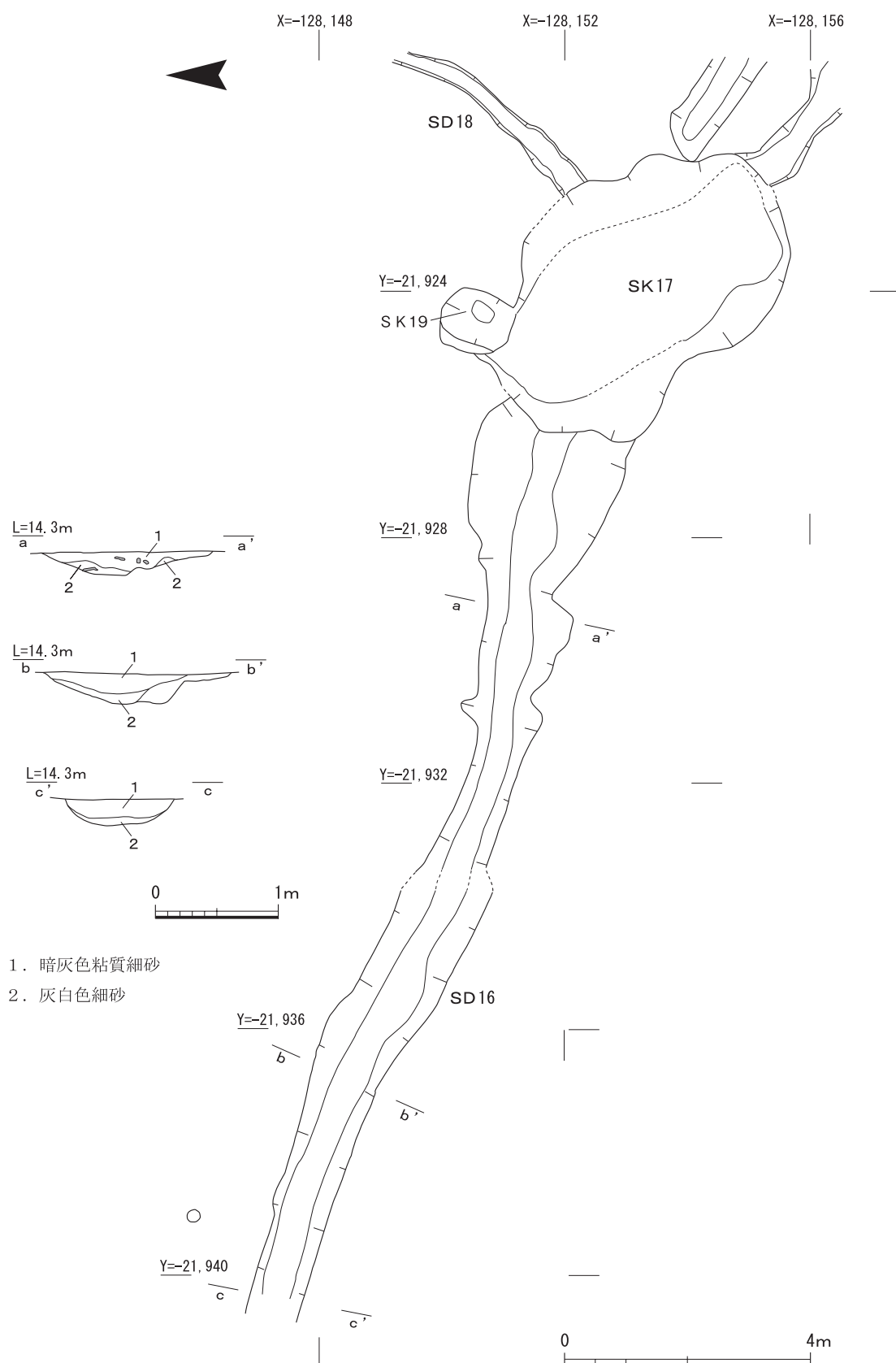
溝状遺構 S D 02 (第20図) 調査区の西半部、島畑34と島畑35の間で検出した(K5-f8区ほか)。溝状遺構の土層断面観察(第18図)によると、島畑34が形成された後の堆積層である灰色シルト(35層)や暗灰色シルト(34層)があり、島畑35はこれらの堆積層の上部に形成されている。島畑35の形成後の堆積層としては暗灰色シルト(31層)や赤褐色～黄褐色砂(11層)などがある。最も新しい堆積層として黒灰色粘性砂質土(6層)が厚く堆積している。規模は検出長35.0m、幅11.3m、深さ0.5m前後である。島畑の裾や底面には杭跡が多数確認された。島畑の崩落などを防ぐための護岸用の杭と考えられる。遺物は土師器や須恵器、瓦器、陶器などが出土した。時期は中世前半である。

溝状遺構 S D 32 (第8図) 調査区の東半部、島畑33と島畑34の間で検出した(K5-h2区ほか)。溝状遺構の土層断面観察(第19図)によると、基盤層であるオリーブ黄色シルト(28層)の上部に灰オリーブ色シルト(21層)

が堆積するが、21層の上部に島畑34・35が形成されることから、それ以前の堆積と考えられる。この上部に S D 32 の堆積層として、オリーブ灰色シルト(19層)や灰オリーブ色シルト(18層)、暗灰黄色粗粒砂(17層)などがある。これらの上部に S D 32 だけでなく、島畑34や島畑35も覆うように灰オリーブ色細粒砂～粗粒砂(15層)が広く堆積している。規模は検出長28.4m、幅12.6m、深さ0.7mである。遺物は土師器や須恵器、瓦器、陶器などが出



第21図 B地区土坑 S K 15実測図(1/20)



第22図 B地区溝SD16・土坑SK17・19実測図(1/100)

土した。詳細な時期は不明であるが、中世前半であろう。

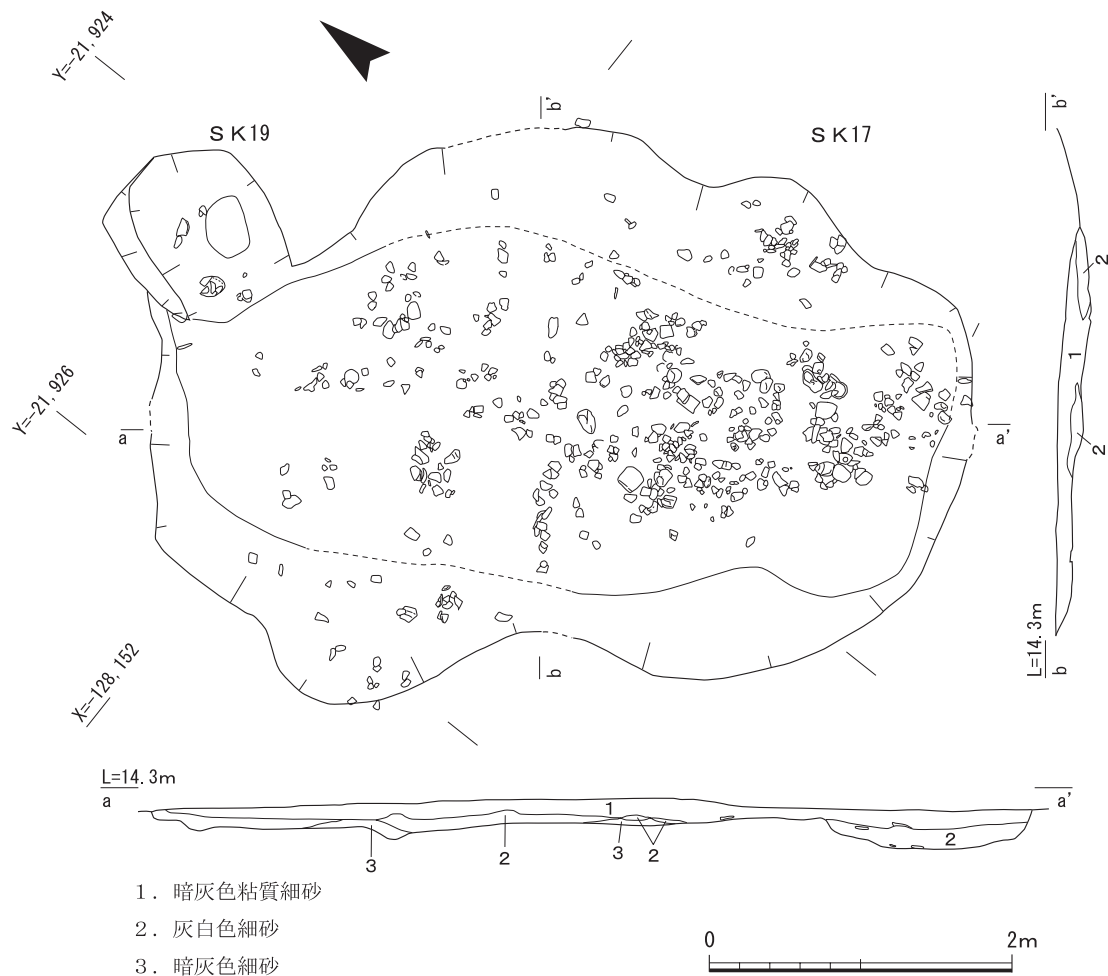
(3)中層遺構

後述する溝S D22がほぼ完全に埋没した上面とその周辺で飛鳥時代の遺構を検出した。検出した遺構としては溝や土坑などがある。また、1基だけであるが、平安時代の土坑を検出した。

土坑S K15(第21図) 調査区の南半部中央で検出した(K5-n10区)。平面形はやや楕円気味の円形を呈し、長軸0.9m、短軸0.75m、深さ0.6mである。埋土は大きく3層に分かれ、上からオリーブ黄色シルト(1層)、暗灰黄色シルト(2層)、灰色粘土(3層)である。

遺物は黒色土器碗や土師器皿などが出土した。時期は、出土した黒色土器から平安時代中期(10世紀代)と考えられる。

溝S D16(第22図) 調査区の南半部で検出した(K5-m7区ほか)。後述する土坑S K17と重複するが、前後関係がなく、埋土も一致するので、同時期の遺構と思われる。検出長22.4m、幅0.9~2.3m、深さ0.5m前後である。埋土は大きく2層に分かれ、上層が暗灰色粘質細砂、下層が灰白色細砂である。遺物は土師器鉢や須恵器杯H・杯G・杯B・甕などが出土した(第142図919~928)。時期は飛鳥時代後半である。



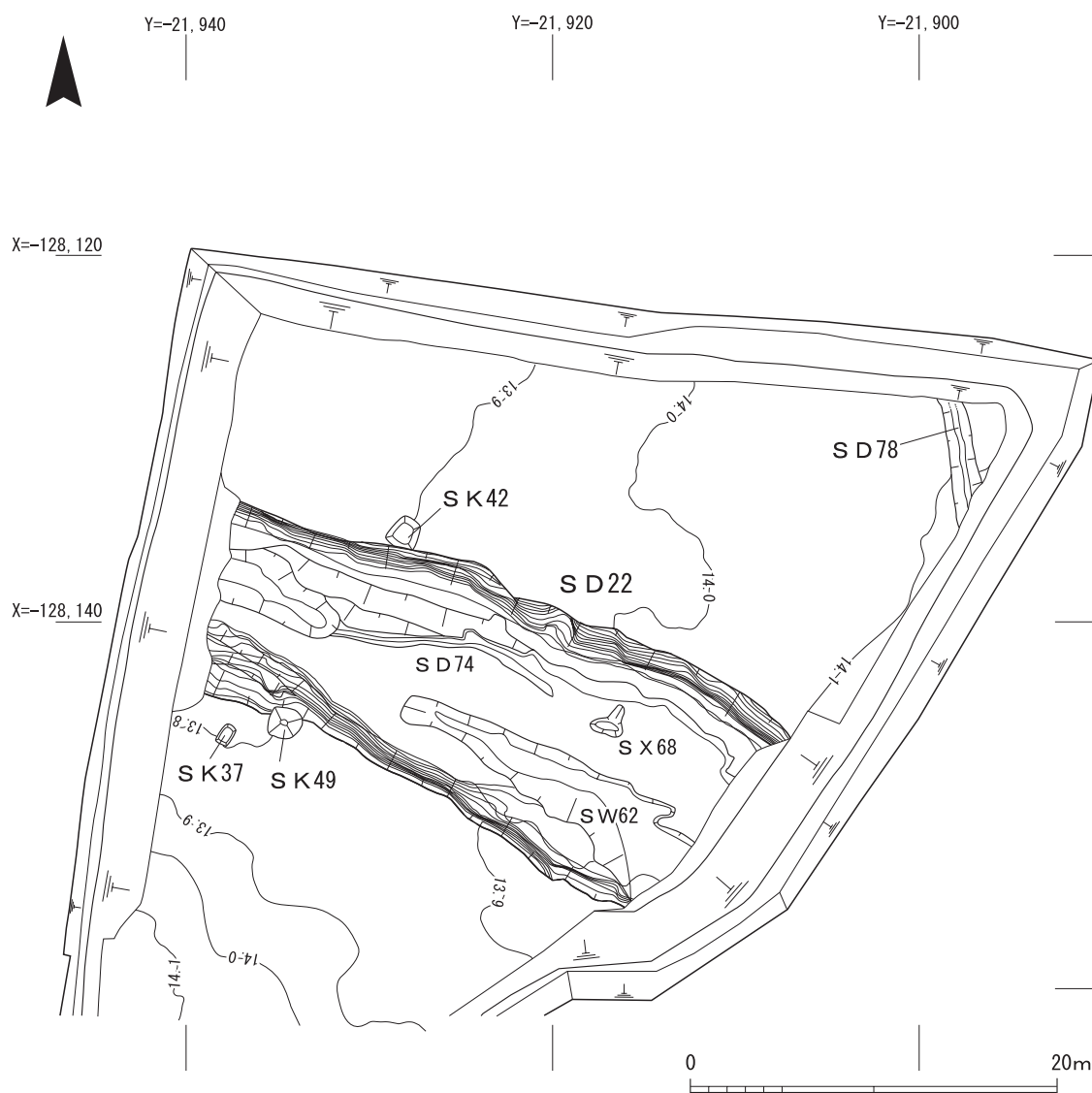
第23図 B地区土坑S K17・19実測図(1/50)

土坑S K 17(第22・23図) 調査区南半部で検出した。平面形はやや不整形な楕円形を呈し、長軸5.5m、短軸3.3m、深さ0.2mを測る。埋土はS D 16と同じ堆積で、部分的に最下層として暗灰色細砂が認められる。遺物は土師器杯A・杯C・皿A・甕・甌、須恵器杯H・杯G・杯B・壺・硯・甕などが出土した(第140図869～第141図918)。時期は飛鳥時代後半である。

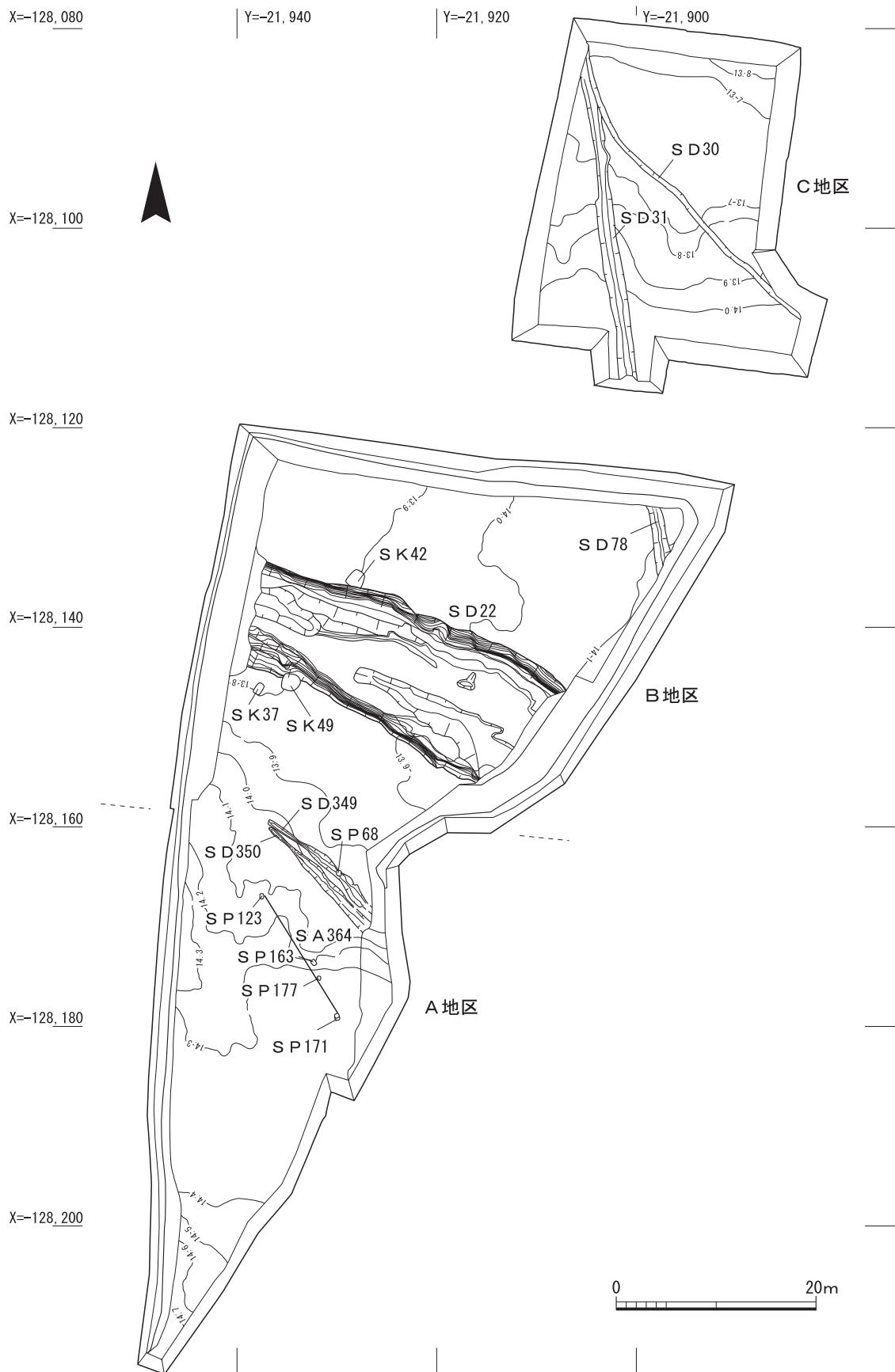
土坑S K 19(第23図) 土坑S K 17の北東部に接して検出した。平面形はやや歪な円形を呈し、長軸1.2m、短軸1.0m、深さ1.0mである。埋土は暗褐色粘質土である。埋土から須恵器杯身や壺の体部などが出土した。時期は古墳時代後期後半と推定される。(筒井崇史)

3) 弥生時代～古墳時代の遺構

B地区の下層遺構(第25図)は、古墳時代の遺構として、古墳時代初頭と古墳時代後期と推定される土坑2基を検出し、さらに、古墳時代初頭～古墳時代後期の溝1条を検出した。また、弥生時代の主な遺構として、弥生時代中期後葉の土坑1基と、同時期と推定される溝1条、さらに古墳時代の溝の下層遺構として弥生時代中期後葉の大規模な流路1条を検出した。包含層中から、



第24図 B地区下層遺構平面図(1/400)



第25図 A・B・C地区下層遺構平面図(1/600)

縄文時代晩期の突帯文土器の小片が出土したが、縄文時代の遺構は確認されなかった。

以下、時代ごとに、各遺構について詳述する。

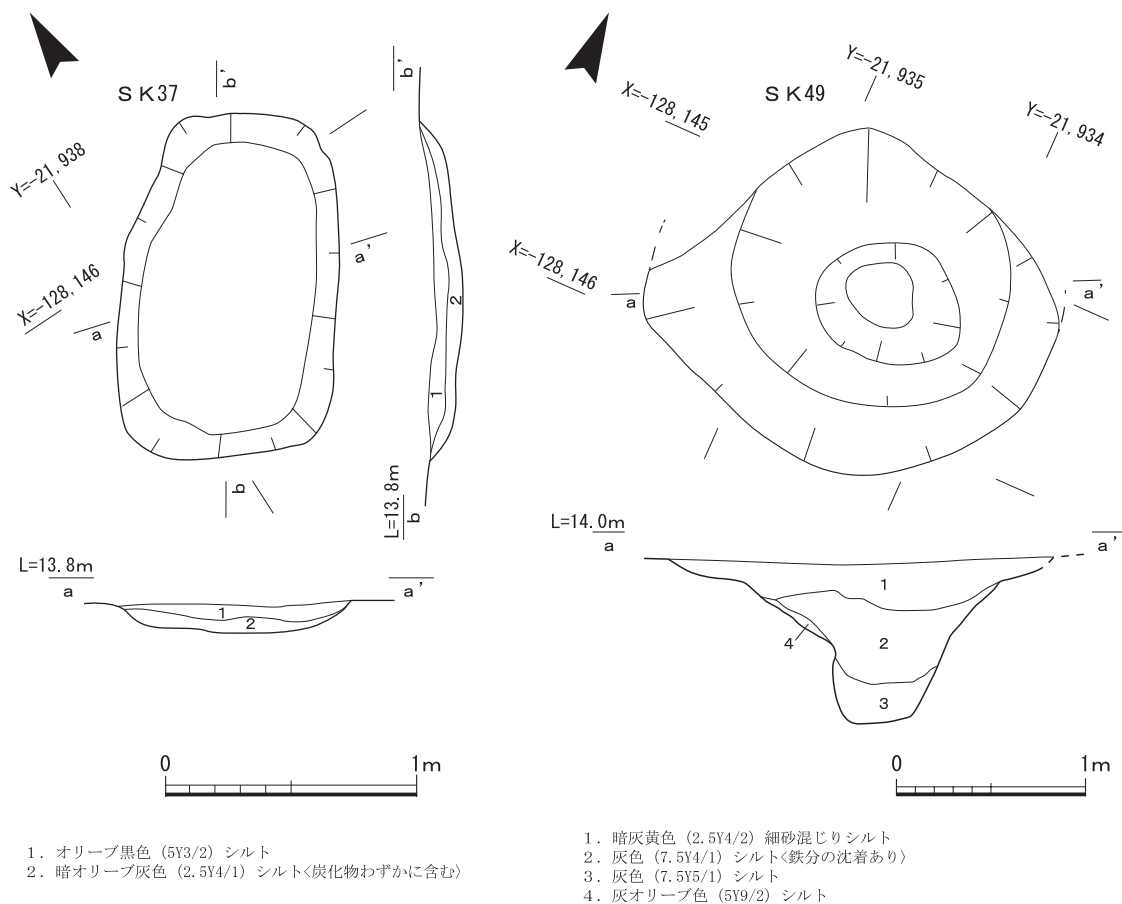
(1) 古墳時代の遺構

土坑 S K 37 (第26図) B地区の南西で検出した方形の土坑である。長さ1.2m、幅0.75mを測る。遺構の残存状況は悪く、上層は大きく削平されているとみられる。検出面での深さは、約5～10cmを測る。底部はやや起伏があり、オリーブ黒色シルトを埋土とする。土坑内から土師器高杯の小片が出土した。出土土器から、時期は古墳時代初頭と推定される。

土坑 S K 49 (第26図) B地区西部で、S D 22に接して検出した歪な方形の土坑あるいは井戸である。飛鳥時代の整地層の除去後に検出したもので、S D 22の肩部を一部削平して掘削されている。規模は、3.2m×3.8mを測り、深さは0.9mを測る。断面は漏斗状を呈し、下層で窄まる形状をなす。中央部はほぼ垂直に深く掘り込まれ、埋土は灰オリーブシルトを基調とする。最深部は湧水点に達せず、溜め井戸の可能性がある。遺物は出土していないが、層序や土層から、時期は古墳時代後期以降とみられる。

(2) 弥生時代の遺構

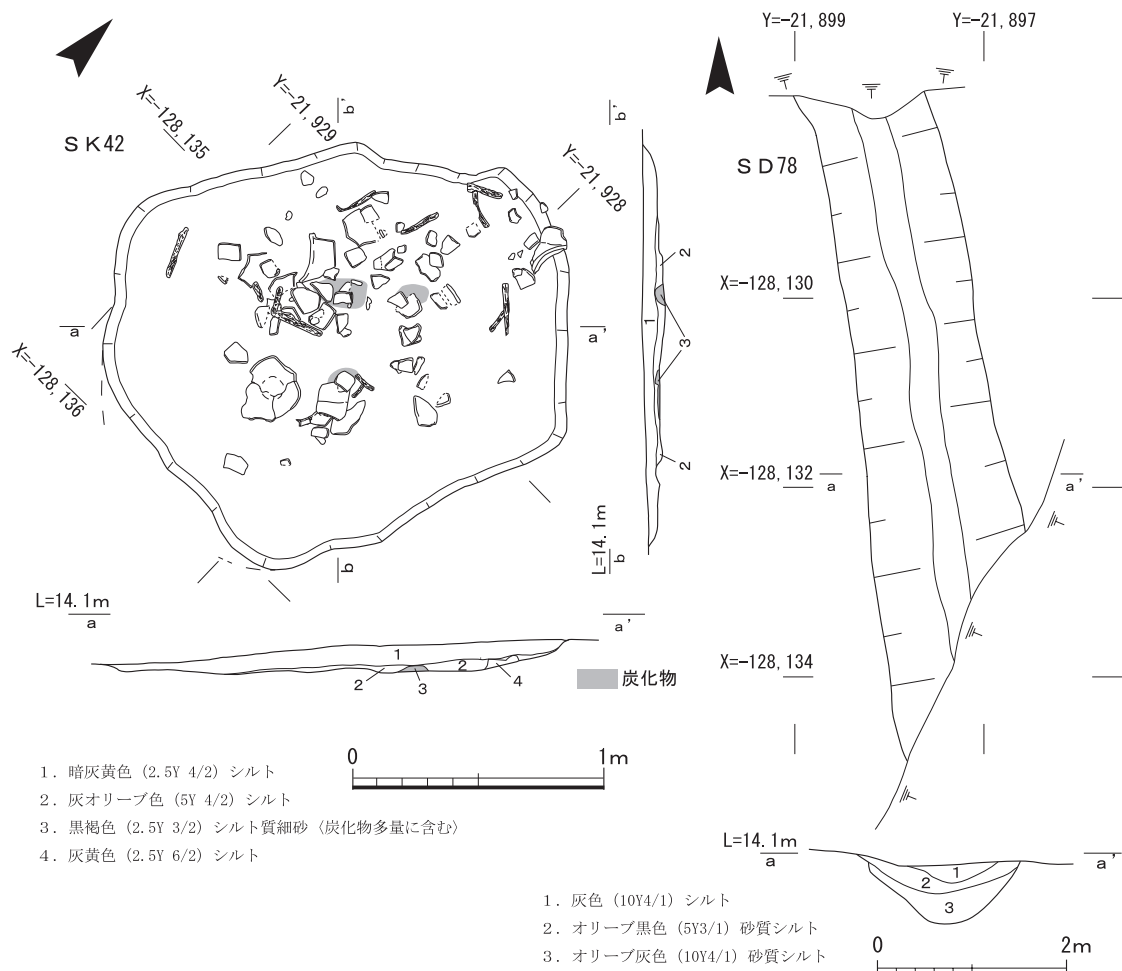
土坑 S K 42 (第27図) 調査区の北西で、検出した歪な方形の土坑である。長さ2.1m、幅1.8m、



第26図 B地区土坑 S K 37・S K 49 実測図(1/40・1/30)

検出面での深さは0.2mを測る。S D22の北肩部で確認し、土坑上層の一部をS D22によって削平される。土坑の底部には、一部に被熱痕跡があり、埋土から焼土や炭化物が出土した。土坑内から多数の土器片が出土しているが、整理作業の過程で、弥生土器の大形甕1点に復元できることが判明した。甕の各部位は不規則に散在して出土したことから、土器棺として使用され、埋納されたものではないとみられる。また、甕の体部には2次的な被熱痕跡とみられる色調の変化が確認される。こうした点から、破碎された甕が土坑内で被熱を受けたと推定され、火を使用する土器祭祀に関わる土坑の可能性がある。出土した甕は、大形の瀬戸内系甕であり、弥生時代中期後葉に帰属する。

溝S D78(第27図) B地区北東端で検出した溝である。南東から北西からへ斜行する溝であり、北壁から東壁にむけて約7mにわたって検出した。規模は、幅1.8m、深さ0.7mを測る。溝底の標高は、中央部で13.3mを測り、調査区内での溝の勾配は極めて緩やかで平坦である。断面は逆台形状を呈し、埋土は、灰色シルトやオリーブ黒色砂質シルトを基調とする。埋土下層には、細かな基盤土に由来する小粘土塊が含まれ、人為的に掘削された溝と推定される。遺物は確認されないが、古墳時代初頭以前の層序にあり、C地区のS D31の南東延長上にあることから、同一



第27図 B地区土坑S K42・溝S D78実測図(1/30・1/125)

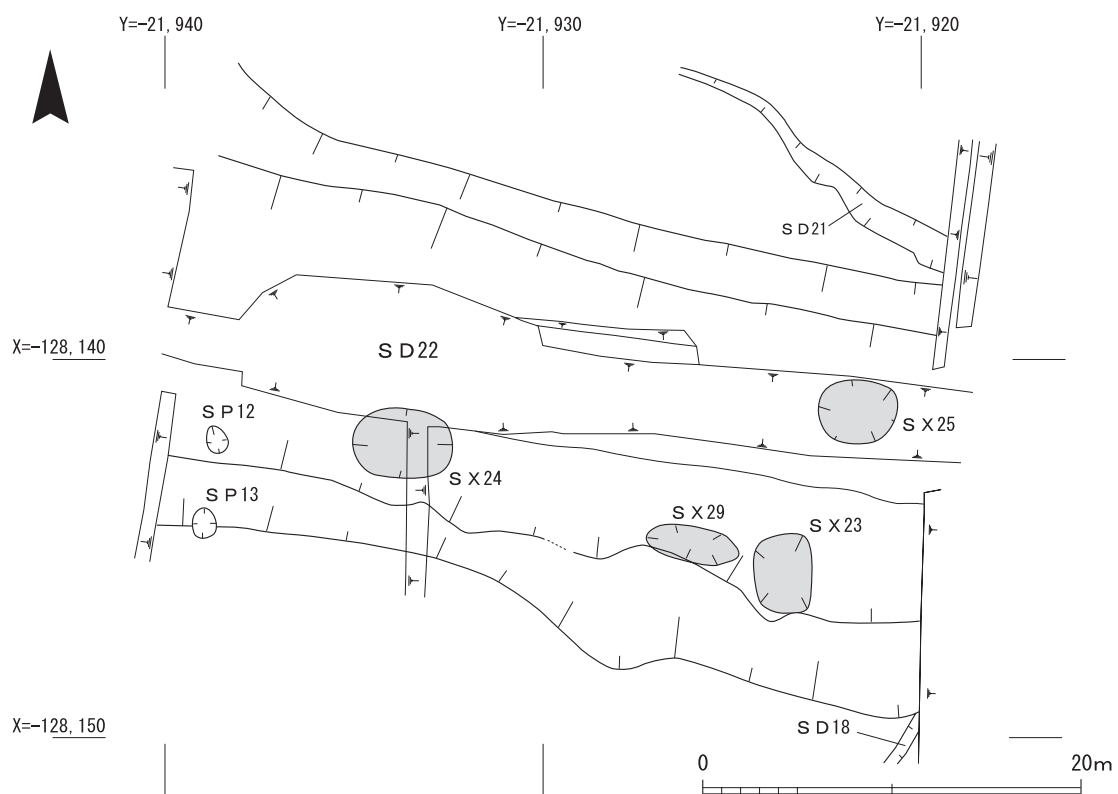
の溝とみられる。S D31は、地勢に沿って、北西から南東へ掘削された溝であり、出土遺物から、時期はS D22とほぼ同時期の弥生時代中期後葉と推定される。S D78は、検出地点からさらに南東の地点でS D22から分岐し、S D31へ続く溝と推定される。

(3) 弥生時代～古墳時代の遺構 S D22の調査

B地区北部で検出したS D22は、調査区西に位置する木津川の分流となる「氾濫流路」の(付編1 参照)^(注10)一つであり、弥生時代中期の自然流路の一部を護岸した流路である。S D22は、護岸によって自然流路の一部に改変を加えられたものであり、人為的に管理された流路である。その後、弥生時代後期には一旦埋没するが、ほぼ同じ位置で古墳時代初頭に再掘削される。こうした点から、S D22のとくに自然流路としての性格をもつ弥生時代の流路について記述する場合には「流路S D22」とし、古墳時代に人為的に掘削された溝について記述する場合には「溝S D22」として、詳述することにした。

平成24年に第1次調査を実施し、S D22の平面的な輪郭を確認し、部分的な掘り下げを行った(第28図)。さらに、平成25年度の第2次調査において、その下層を掘削し、平成26年度の第6次調査で、その東側を拡張して調査を進めた。

第1次調査においては、S D22の中央から木津川寄りの西側を対象とした。当初は、その輪郭が判然とせず、S D22は、自然の落ち込みと判断された。調査区全体に広がる沼状の落ち込みの可能性が考えられたため、中央部でサブトレンチを設定して、調査の進展のなかで、のちに東西



第28図 B地区S D22第1次調査地配置図(1/400)

方向の溝と判明する S D22の掘り下げが進められた。

サブトレンチは、S D22の中央部に南北幅約 4 m、東西18mにわたって設定したものである。一部で断ち割り調査を実施し、標高12.6mのレベルまで掘削した。掘り下げの過程で、おもに弥生時代中期後半から古墳時代後期の多量の土器が出土し、層位(第18図)に従って、遺物の取り上げを実施した。また、サブトレンチの下層では、東西 5 か所に土器群が集中する土器溜まりを確認した。

第 1 次調査のサブトレンチの層位のうち、S D22の埋土は、標高14.1mで検出された第43層以下であり、その上層に接する第40層では、おもに飛鳥時代の陶器 T K217型式以降の土器群が出土している。第43層は、層厚0.4～0.5mを測り、陶器 T K43型式併行期の須恵器を包含する。古墳時代後期の層位と推定され、暗灰色粘質土とされる。第46層は約13.3mで検出し、12.7mまで層厚0.6～0.7m測る。古墳時代前期前葉(佐山Ⅲ - 1 型式)^(注11)の土器をおもに包含する。第46層の直下の層である第47層は、約12.8mで検出し、層厚0.2～0.3mを測る。第47層中から出土した土器群は、古墳時代前期初頭～前期前葉(佐山Ⅱ - 4 型式～Ⅲ - 1 型式)の土器を多量に含む層位である。第48層は、最下層であり、約12.6mで確認された層位である。第47層とはほぼ同時期の古墳時代前期初頭～前期前葉(佐山Ⅱ - 4 型式～佐山Ⅲ - 1 型式)に帰属する。また、第45～47層の各層位に、弥生時代中期後半の土器群が包含されるが、第 1 次調査の中央部の断ち割りでは、弥生時代中期後半の遺物のみを包含する層位は確認されておらず、S D22の中央部は、最下層まで古墳時代初頭に再掘削されたとみられる。



第29図 B地区 S D22地区割図(1/300)



第30図 B地区 S D 22遺物出土状況図(1/160)

このように、S D22は、平成24年の第1次調査の最終段階において大規模な流路ないしは溝であることが判明した。第1次調査の成果を受け、平成25年の第4次調査では、第1次調査の段階に掘削途中で終了した下層部分の調査を実施するとともに、さらに平成26年の第6次調査で東側を拡張し、上流部の調査を実施した。

S D22からは、弥生時代中期後半～古墳時代後期に至る多量の土器が出土している。また、下層埋土は湿潤な層位を形成し、多量の自然木や木製品などの植物遺体が良好な状態で遺存していた。S D22の第2・6次調査にあたっては、出土遺物の取り上げのための区割りを設定した(第29図)。A・B地区全体図における一辺4mのメッシュをかけた区割りを踏襲している。また、堆積状況を観察するために南北方向の3本の畦(断面1～3)を設定し、畦に区切られた地区を調査の進展に合わせて、西から順に1～4区とした。

a) 規模と概要

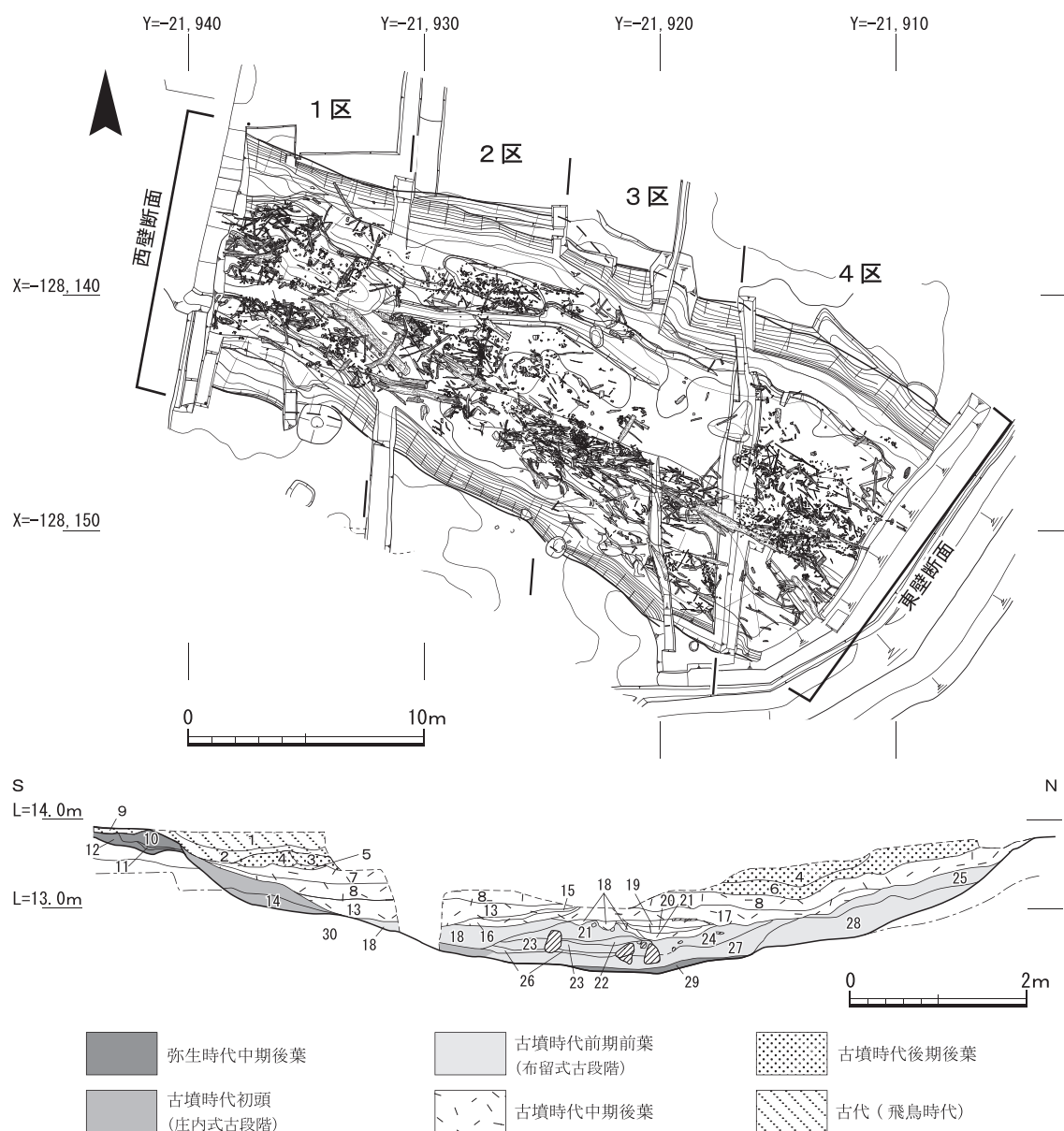
S D22の規模は、中央部で幅12.0m、調査区西部で約10.5m、調査区東部約13.7mを測り、長さ31mにわたって検出した。断面の形状は平坦面の広い逆台形状をなし、検出面の標高は、中央部で標高14.1m、深さは1.8mを測る(第31図)。底面は、明青灰色シルト質粘土を基盤とし、中央部で標高12.4m、上流側となる東端で12.4m、下流側となる西端で12.3mを測る。傾斜勾配は緩く、地勢に沿って東から西へ緩やかに流下し、西に位置する木津川本流に合流した流路とみられる。弥生時代中期後葉末から古墳時代後期まで、ほぼ同じ場所において埋積と再掘削を繰り返し、徐々に北に位置を変えながら、断続的に使用された水路と推定される。検出面における形状は、上流側の東部で幅広く、下流側の西部で狭隘な状況が確認されたが、これは断面の土層観察から、流路は上流側よりも下流側となる西側で、弥生時代中期と古墳時代初頭の溝がより大きく重複していたことによることが判明した。

b) 各層位と堆積環境

第2・6次調査では、S D22の掘削にあたって、東西約32mの流路に、約7～9mごとに南北の畦を3か所で設定し(第31図)、その断面観察によって堆積状況を確認した(第32～34図)。

流路に設定した土層断面のうち、第4次調査で設定した断面1と断面2は、第1次調査における中央部の断ち割り調査や遺構掘り下げにより、すでに掘削されている部分が多いため、いずれも中央部上層の断面図を欠いている。しかしながら、第6次調査では、S D22の東部を拡張し、あらたに断面3を設定して掘削を進めたため、最上層から最下層までの層位を連続して検証することが可能となり、層序や堆積環境を極めて良好に把握することができた。こうした点を踏まえて、以下、断面3で確認される層序を基準として、S D22の堆積状況を詳述したい(第34・35図)。S D22の堆積状況について、断面3では上層にS D22の埋没後に堆積した飛鳥時代以降の層位が堆積し、S D22検出面までの長期的な堆積状況を層序と同時に確認することができるため、こうした層位について、さきに述べておきたい。

断面3(第34図)は、上層から順に、第1・2層は、暗緑灰色細砂混じりシルト・暗灰黄色細砂混じりシルトの堆積層であり、近世の耕作土層とみられる。層厚約0.4mを測る。第3・4層は、



S D22 西壁土層断面図

- | | |
|---------------------------------------|---|
| 1. オリーブ黒色 (5Y 3/2) シルト | 15. 黄灰色 (2.5Y 4/1) シルト |
| 2. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) シルト
〈酸化鉄褐色粒を含む〉 | 16. 灰黄色 (2.5Y 6/2) 中砂 |
| 3. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) シルト | 17. オリーブ黒色 (5Y 3/2) シルト質細砂 |
| 4. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) シルト | 18. オリーブ黒色 (7.5Y 3/1) シルト 〈土器・植物遺体多く含む〉 |
| 5. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) シルト | 19. オリーブ黒色 (7.5Y 3/1) シルト |
| 6. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 極細砂 | 20. オリーブ黒色 (10Y 3/2) シルト 〈径2～3cm大のシルト塊含む〉 |
| 7. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト | 21. 暗オリーブ灰色 (2.5GY 3/1) シルト |
| 8. 灰色 (5Y 4/1) シルト質極細砂 | 22. 暗オリーブ灰色 (2.5GY 4/1) シルト |
| 9. 褐灰色 (10YR 5/1) シルト質細砂 | 23. 灰黄色 (2.5Y 7/2) 粗砂 〈径1～2cm大の花崗岩小礫含む〉 |
| 10. オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) 極細砂～細砂 | 24. 暗オリーブ灰色 (5GY 3/1) シルト質細砂 〈植物遺体含む〉 |
| 11. 黄褐色 (2.5Y 5/3) シルト質細砂 | 25. 灰色 (10Y 4/1) シルト |
| 12. 黄褐色 (2.5Y 5/4) 極細砂 | 26. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 中砂 〈遺物遺体特に多く含む〉 |
| 13. 黄灰色 (2.5Y 4/1) シルト | 27. 灰色 (10Y 4/1) シルト |
| 14. オリーブ黒色 (5Y 3/1) 細砂 | 28. オリーブ黒色 (7.5Y 3/2) シルト質細砂 |
| | 29. 灰色 (10Y 6/1) 中砂～粗砂 〈遺物遺体含む〉 |
| | 30. オリーブ灰色 (5GY 5/1) 粘土 |

第31図 B地区 S D22平面図及び西壁土層断面図(1/300・1/80)

暗灰黄色細砂混じりシルト・灰オリーブ色細砂混じりシルトからなり、層厚約0.3mを測る中世遺物包含層である。いずれも鳥畑を中心とした耕作土層とみられる。第5層はS D22埋没後の窪地に堆積した層位であり、南から北にかけて厚く、最も深いところで層厚約0.4mを測る。第5層の下位は緩やかに下るが、上面はほぼ水平に平坦化しており、人為的に整地された層位の可能性が高い。層中には、飛鳥時代の土器の小片を多量に含む。以上から、S D22の上面は、古墳時代後期以降、窪地状を呈していたとみられるが、飛鳥時代に整地されたことにより、湿地化していた状況は、完全に解消されたとみられる。

第5層以下は、S D22の埋土に相当する層位である。S D22の層位については、層序、土色、粒度、挟在物や、層位内の土器相、人為的な堆積層の有無などをもとに、層群として捉えるように努めた。埋積状況から、大きく7群の層群に分けることができる。層群1は、古墳時代後期後半、層群2は、古墳時代中期後葉、層群3・4は、古墳時代初頭～前期前葉、層群5～7は、弥生時代中期後葉と推定される。

以下、各層群の様相を上層から順に詳述したい。

〔S D22層群〕

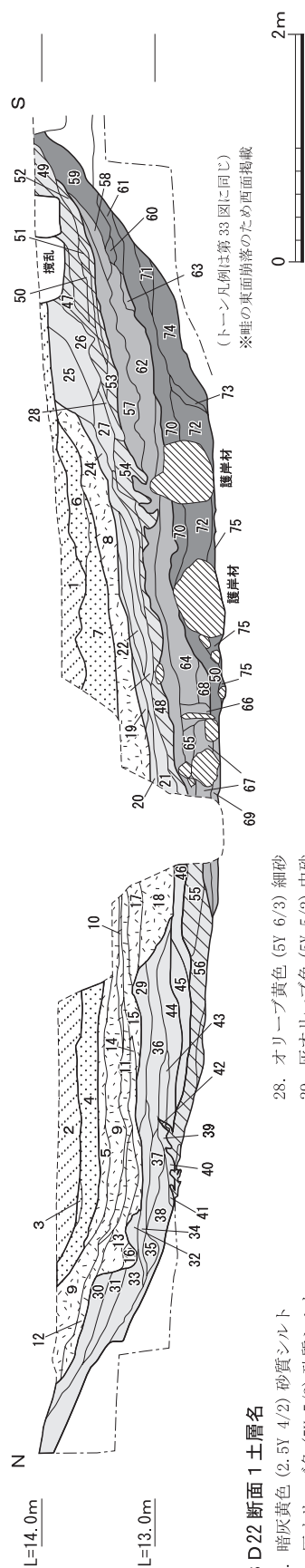
層群1 (第34図) 第6・7層に対応する。主たる層位である第6層は灰色シルト、第7層は黒褐色シルト質細砂である。検出面からの深さは、約0.8mを測る。第7層は、シルトの堆積であり、滞水環境にあったとみられるが、上位に堆積する第6層には、緑灰色シルトの小土粒が多量に含まれており、人為的に攪乱された層位であるとみられる。第7層は、色調・土質やレベルから、第1次調査の断ち割りの第43層(第18図)に対応し、古墳時代後期後葉と推定される層群である。

層群2 (第34図) 第8層～13層に対応する。層群2は、さらに上層(第8・9層)と下層(第10～13層)に2分され、下層はオリーブ黒色シルトを基調とした層位からなる。また、層群2の最下層にあたる第12・13層の検出面からの深さは、約1.2mを測る。

第11～13層は、層中にいずれもシルトの小土塊を含み、人為的に再掘削された層位とみられる。また、遺物を包含し、第12層中から若干の須恵器や杭等の加工木や自然木が出土している。出土土器は、おおよそ陶器TK23型式に帰属し、古墳時代中期後葉の層位と推定される。一方、その上位には、第8層のオリーブ灰色シルト混じり中砂が堆積するが、この層は旧木津川本流に由来する砂層堆積であり、「氾濫流路」として増水時に本流から逆流して運ばれた層位とみられる。S D22は古墳時代中期後葉に再掘削されるが、洪水砂層が堆積し、埋没したとみられる。

S D22の第1次調査では、上層掘削中に子持勾玉(第131図684)が出土している。編年的にはおおよそ古墳時代中期後半に位置付けられる資料であり、層群2の下層の堆積時期の遺物として整合的である。子持勾玉は他の玉製品と異なり、集落祭祀と関連づけられる遺物である。木津川本流と結ぶ集落の基幹水路としての役割をもつS D22に対する集落祭祀が行われた可能性を示すものである。

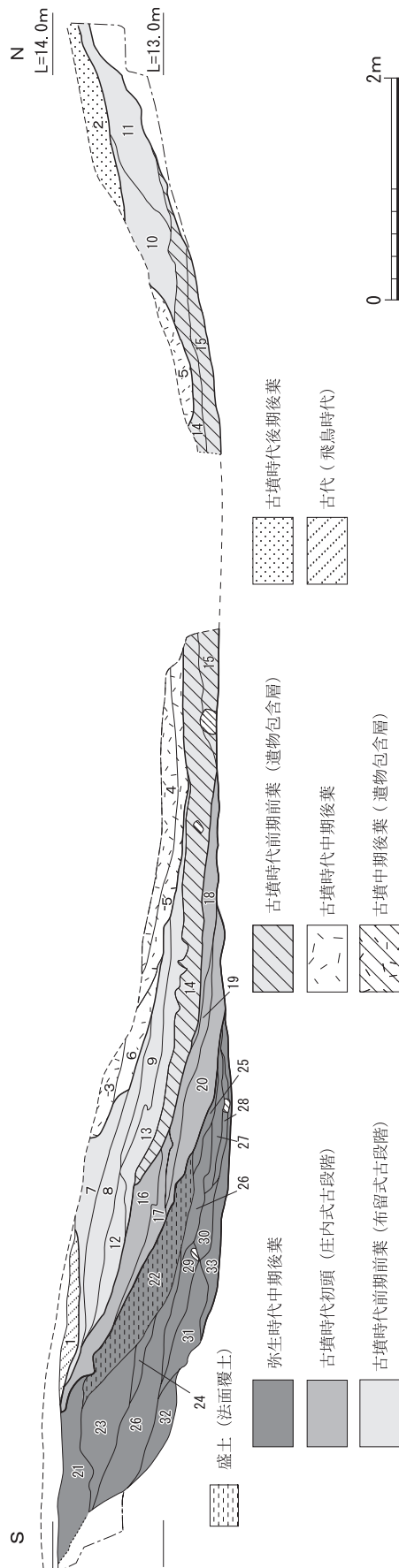
層群3 (第34図) 第14層から第20層に対応する。層群はさらに、上層と下層の層群に分けることが可能で、南肩部から流れ込む鍵層となる第19層の黒褐色極細砂と、同時期に流路中央で堆積



SD22断面1土層名

- | | | |
|--|--|---|
| 1. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 砂質シルト | 28. オリーブ黄色 (5Y 6/3) 細砂 | 55. 灰色 (5Y 4/1) シルト+オリーブ黒色 (7.5Y 3/2) シルト |
| 2. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 砂質シルト | 29. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 中砂 | 56. オリーブ黒色 (5Y 2/2) 砂質シルト 〈植物遺体を多く含む〉 |
| 3. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) シルト | 30. 黒褐色 (2.5Y 3/1) 砂質シルト | 57. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 中砂 |
| 4. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 砂質シルト | 31. オリーブ黒色 (5Y 3/2) シルト | 58. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 砂質シルト |
| 5. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 極細砂 | 32. 灰色 (7.5Y 5/1) 砂質シルト | 59. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 砂質シルト |
| 6. オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 砂質シルト | 33. 灰オリーブ色 (7.5Y 5/2) 砂質シルト 〈褐色粒を含む〉 | 60. 灰色 (10Y 4/1) 砂質シルト |
| 7. 黄褐色 (2.5Y 5/3) 砂質シルト | 34. 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 極細砂～細砂 | 61. 黄灰色 (2.5Y 4/1) シルト 砂質シルト |
| 8. 灰色 (7.5Y 4/1) 砂質シルト | 35. オリーブ黒色 (7.5Y 3/2) シルト 混じり細砂 | 62. 灰色 (5Y 4/1) 細砂 〈木片や種子等の炭化物を含む〉 |
| 9. 黄灰色 (2.5Y 4/1) 砂質シルト | 36. 灰色 (5Y 4/1) シルト 混じり細砂 〈植物遺体を含む〉 | 63. 黄灰色 (2.5Y 4/1) シルト
〈灰白色細砂をラミナ状に含む〉 |
| 10. オリーブ黒色 (5Y 3/2) 砂質シルト | 37. オリーブ黒色 (5Y 2/2) シルト 混じり細砂 〈植物遺体を多く含む〉 | 64. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト 混じり中砂 |
| 11. 黒褐色 (2.5Y 3/2) 砂質シルト | 38. オリーブ黒色 (5Y 3/1) 中砂+緑灰色 (10G 5/1) シルト | 65. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト 混じり中砂 〈植物遺体を多量に含む〉 |
| 12. 暗黄灰色 (2.5Y 4/2) 細砂 | 39. 緑灰色 (7.5Y 5/1) 細砂～中砂 | 66. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) シルト 混じり細砂 |
| 13. 灰色 (5Y 4/1) 砂質細砂 〈径 2 cm 大のシルト偽礫を含む〉 | 40. オリーブ灰色 (5GY 5/1) シルト | 67. 灰黄色 (2.5Y 6/2) 中砂 |
| 14. オリーブ黒色 (2.5Y 3/2) 砂質シルト | 41. 緑色 (5GY 4/1) シルト+オリーブ黒色 (7.5Y 3/2) シルト | 68. オリーブ黒色 (5Y 3/2) シルト 混じり細砂
〈植物遺体を多量に含む〉 |
| 15. 黒褐色 (2.5Y 3/1) 砂質シルト | 42. 緑灰色 (7.5G 5/1) シルト | 69. 灰色 (5Y 4/1) シルト 混じり細砂 〈植物遺体を含む〉 |
| 16. 黄灰色 (2.5Y 4/3) シルト 〈炭化物を含む〉 | 43. 灰色 (7.5Y 4/1) 細砂 | 70. 灰色 (5Y 4/1) シルト 混じり細砂 〈植物遺体を多量に含む〉 |
| 17. オリーブ黒色 (5Y 3/2) シルト | 44. 暗緑灰色 (7.5GY 4/1) 細砂 | 71. 緑灰色 (7.5GY 5/1) 粗砂～中砂 |
| 18. 黄灰色 (2.5Y 4/3) シルト 〈炭化物を含む〉 | 45. 黒灰色 (2.5Y 3/2) シルト 混じり細砂 | 72. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト 混じり中砂 〈植物遺体を含む〉 |
| 19. 灰色 (10Y 4/1) シルト 〈粘性強い〉 | 46. 明青灰色 (5BG 7/1) シルト | 73. 灰色 (7.5Y 4/1) 細砂 |
| 20. オリーブ黒色 (5Y 3/2) シルト | 47. オリーブ褐色 (2.5Y 4/4)+灰色 (5Y 5/1) 砂質シルト | 74. 暗緑灰色 (7.5GY 4/1) 細砂 |
| 21. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト 〈白色粘土を含む〉 | 48. 黒褐色 (10YR 3/1) シルト 〈灰色砂ブロック・木片・種子を含む〉 | 75. オリーブ黒色 (7.5Y 3/2) シルト 混じり細砂 |
| 22. 灰色 (10Y 4/1) シルト 〈灰白色細砂を含む〉 | 49. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) シルト 〈灰白色細砂を多く含む〉 | |
| 23. 灰色 (5Y 4/1) シルト | 50. 灰オリーブ色 (7.5Y 4/2) 細砂 | |
| 24. 灰色 (2.5Y 5/1) 細砂 | 51. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 細砂 | |
| 25. オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 細砂 | 52. オリーブ褐色 (2.5Y 4/4) ～灰色 (5Y 4/1) 砂質シルト | |
| 26. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 極細砂 | 53. 黄灰色 (2.5Y 4/1) 砂質シルト | |
| 27. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 細砂 | 54. 灰色 (2.5Y 5/1) 細砂 〈径 3 ～ 5 cm 大のシルト偽礫を含む〉 | |

第32図 B地区SD22断面1実測図(1/60)



S D22 断面 2 土層名

1. 灰褐色 (10YR 5/1) 細砂
2. にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 極細砂
3. 灰黄褐色 (2.5Y 6/2) 極細砂
4. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 細砂
5. 暗オリーブ色 (5Y 4/3) 砂礫混じりシルト
6. 灰色 (10YR 5/1) シルト
7. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) シルト質極細砂
8. 灰色 (10YR 4/1) 極細砂
9. 灰色 (5Y 4/1) 砂質シルト
10. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト質極細砂～細砂
11. 灰オリーブ色 (10Y 4/1) シルト質細砂 (上半部に鉄分沈着)
12. 黒褐色 (2.5Y 3/1) 極細砂
13. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 細砂+灰オリーブ色 (5Y 4/1) シルト (層厚 1～2cm のラミナ状堆積)
14. 黒褐色 (2.5Y 3/2) 砂混じりシルト
15. オリーブ黒色 (5Y 3/1) シルト混じり中砂
16. 灰白色 (5Y 7/1) 細砂+オリーブ黒色 (5Y 3/2) シルト (層厚 3～4cm のラミナ状堆積)
17. オリーブ黒色 (5Y 3/2) シルト
18. 灰黄色 (2.5Y 3/2) 粗砂
19. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) シルト
20. オリーブ黒色 (5Y 3/1) 砂質シルト粘質土 (古墳時代初頭遺物包含層)
21. 灰オリーブ (10YR 4/2) 極細砂～細砂
22. 緑灰色 (10G 6/1) 粘土 (断面 3 第 64 層 (法面覆土) に対応する層位、上位に灰色 (10YR 4/1) 細砂～極細砂を含む)
23. 灰色 (5Y 4/1) 細砂
24. 灰色 (7.5Y 4/1) 砂質シルト
25. 灰色 (10Y 4/1) 極細砂～細砂
26. 灰色 (5Y 4/1) 極細砂
27. 灰白色 (10Y 7/1) 粗砂
28. オリーブ黒色 (10Y 3/1) シルト (植物遺体を含む)
29. 暗オリーブ灰色 (5GY 4/1) 極細砂～細砂
30. 灰色 (7.5Y 4/1) 極細砂+灰白色 (7.5Y 8/1) シルト～灰色 (7.5Y 6/1) シルト
31. 灰色 (5Y 4/1) シルト+浅黄色 (5Y 7/3) 粗砂
32. 黄灰色 (2.5Y 4/1) 砂シルト混じり細砂
33. オリーブ灰色 (2.5Y 6/1) 中砂

第33図 B地区 S D22断面 2 実測図 (1/60)

したとみられる第20層、さらにその上位に堆積する第17層(オリーブ黒色シルト質極細砂)をあわせて、下層として把握することができる。層群3は、検出面から最深部まで、深さ約1.7mを測る。

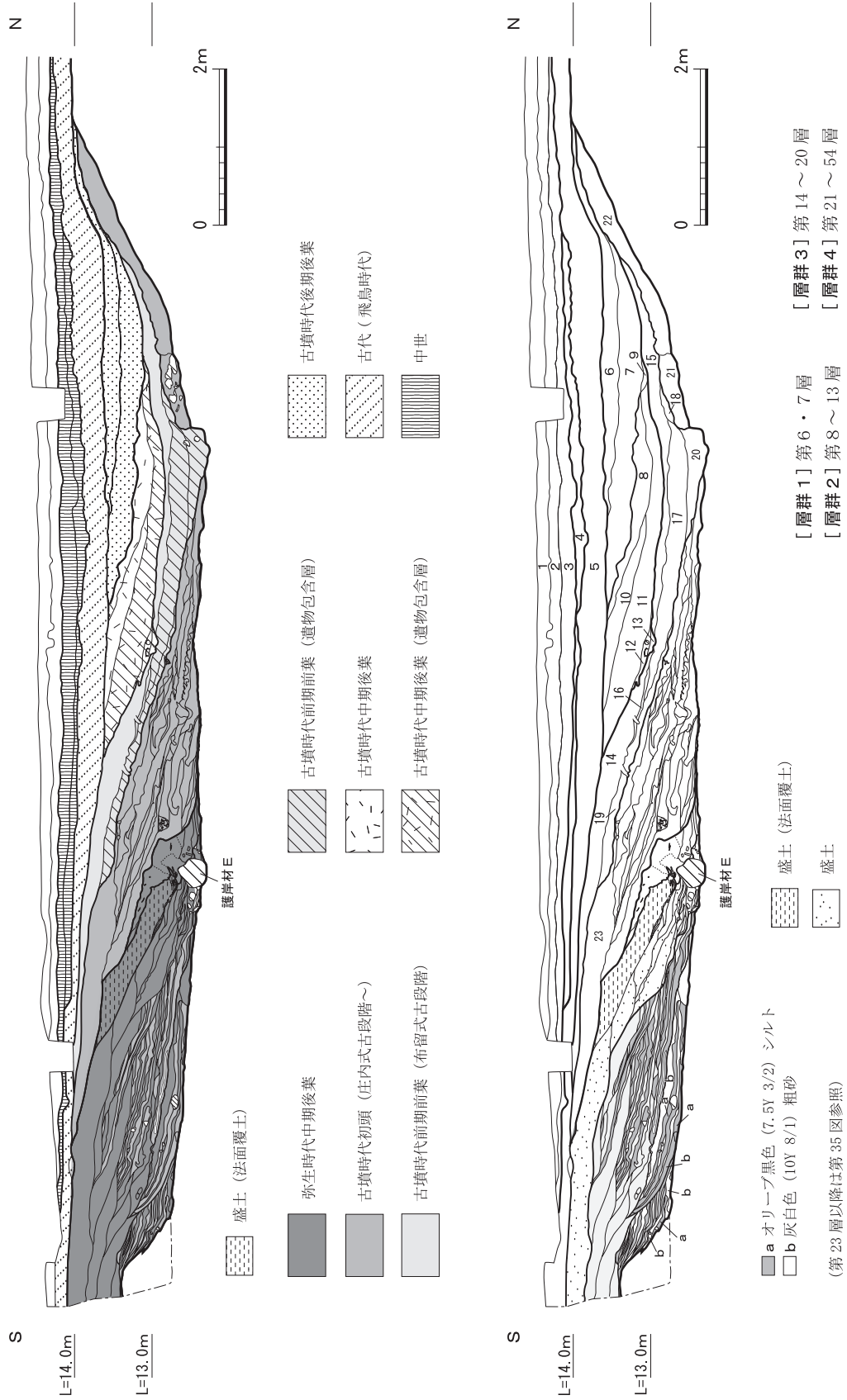
下層の出土土器は、いずれも佐山Ⅱ-4型式~同Ⅲ-1型式に併行し、古墳時代前期初葉~古墳時代前期前葉に帰属する層位と判断される。一方、上層には、第15層のオリーブ黒色シルト質細砂、第14層の灰オリーブ色細砂の順に堆積するが、これらの層位から遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

第19層は多量の土器を含む鍵層となる層位であり、断面1・2にも確認される層位である(Ⅳ層)。南肩標高13.7m付近から、流路中央にむけて緩やかに傾斜して流れ込み、流路中央付近の標高12.7m付近で擾乱され、終息する。また、流路中央最下層で確認される第20層は、層序や出土遺物から、第19層と同時期に堆積した連続する層位と推定される。層群4を上層から切り込み、基盤土を一部抉るように掘削されたもので、黒褐色シルト混じり極細砂中に、基盤土の細かな小土塊を含み、人為的に再掘削された層位と推定される。また、第17層には部分的に薄いラミナ層を含み、水流があったとみられるが、間断があり、滞水と流水を繰り返した環境が窺える。一方、第19層はシルト性の堆積でないことから、この時期の流路の水位は第19層が終息するラインよりも下位にあり、水深は約0.5~0.6m程度の浅いものであったと推定される。また、第19層中からは、多量の土器のほか、燃えさしなどの木製品や多量のモモ核などが出土した。断面1の西側には、祭祀関連遺物が出土した土器溜まりS X51が接し、第19層はこれに連続する層位として捉えることができる。遺物は、流路中央の水際に向けて肩部から廃棄された状況を示すと考えられる。いわゆる水辺の祭祀と呼ばれる、浄水儀礼に関連するものであろう。

第19層の上層には、灰オリーブ色細砂が堆積し、同層位には草本類の管茎痕跡が顕著であることから、古墳時代前期中葉以降は埋積が進み、古墳時代中期後葉(層群2)に再掘削されるまで、周辺は草本類が繁茂する環境であったと推定される。

層群4(第35図) 第21~54層に対応する。第36層を境にして、上層と下層に分かれる。上層では、土器や木製品等の遺物を多量に含む一方、下層では土器の出土量は大きく減少する。層厚0.9mを測り、砂層とシルト層に薄いラミナ層や植物遺体が挟在し、複雑な堆積環境が看取される。

まず、下層について、第46層は、前述した弥生中期の堆積層である層群5を急激な角度で切り込み、細かな小土塊を層中に含むことから、人為的な再掘削のラインを示すとみられる。再掘削は、基盤に達しており、中央部へむけて平坦な溝底部を形成している。また、第44層のシルト層上層には、不規則な帯状の灰黄色中砂層が堆積しているが、この中砂については、旧木津川の河川砂に由来するイベント性の堆積物であり、旧木津川の洪水時に水流が逆流して河川砂が流入した「氾濫流路」の状況を示すとされる^(注12)。また、中位で確認される第37層の灰白色中砂は、上層にむけて引き延ばされ、巻き込まれたような構造がみられる。火炎状のこうした層位は、西側の断面2、断面3でもほぼ同じ層序で確認され、SD22下層のほぼ全体で観察される鍵層(V層)となっている。含水量が多い地盤の土壌が、地震などによって揺らされた場合に生じる構造に類似するとされる一方、水分を多く含む軟弱な地盤においては、周囲からの強い圧力によって生じると^(注13)



第34図 B地区 S D22断面 3実測図(1/80)

B地区S D22 断面3土層名

1. 暗緑灰色 (7.5GY 4/1) 細砂混じりシルト
2. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 細砂混じりシルト
3. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 細砂混じりシルト
4. 灰オリーブ色 (7.5Y 4/2) 細砂混じりシルト
5. 暗褐色 (10YR 3/3) シルト
6. 暗オリーブ灰色 (5GY 4/1) シルト混じり細砂
7. 黒褐色 (2.5Y 3/1) シルト
8. オリーブ灰色 (7.5Y 5/2) シルト混じり中砂
9. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 細砂
10. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト
11. オリーブ黒色 (5Y 3/1) シルト質極細砂<粘性強い、最下面にわずかに粗砂、径2～3cmの灰オリーブ色 (7.5Y 4/2) 粘土偽礫を多く含む、人為的な造作の影響がみられる層位>
12. 灰オリーブ色 (7.5Y 4/2) シルト混じり細砂<須恵器・木杭出土、若干の植物遺体を含む>
13. オリーブ黒色 (10Y 3/2) シルト<径1～2cmの偽礫含む>
14. 灰オリーブ色 (5Y 6/2) 細砂<草木類の根茎痕跡、径1～3cmの偽礫含む>
15. オリーブ黒色 (5Y 3/2) シルト質細砂<14層に比べ植物遺体多く含む、アシ・ヨシなど管茎植物の植物遺体含む、緑灰色 (7.5GY 5/1) シルト偽礫をわずかに含む>
16. 緑灰色 (10GY 6/1) シルト<植物遺体を含まず>
17. オリーブ黒色 (7.5Y 3/1) シルト質極細砂<植物遺体わずかに含む、土器を含む層>
18. 緑灰色 (7.5GY 5/1) 細砂混じりシルト
19. 黒褐色 (2.5Y 3/1) シルト混じり極細砂<土器多量に含む、炭化物を多く含む、植物遺体(種子)出土>
20. 黒色 (7.5Y 2/1) シルト<木材多く含む>
21. 暗オリーブ灰色 (2.5GY 4/1) シルト<粘土塊を含む>
22. 暗緑灰色 (10GY 4/1) シルト<均質なシルト、上位に管茎植物の成育痕、鉄分を多く含む黄変>
23. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 細砂
24. 灰色 (5Y 6/1) シルト混じり中砂<一部に灰色シルトをマール状に不規則に含む、上面から圧力を受けたものか、層位に乱れがみられる>
25. 黒褐色 (2.5Y 3/1) シルト質極細砂
26. 灰色 (7.5Y 5/1) シルト
27. 灰白色 (7.5Y 8/1) 中砂<遺物・植物遺体含む>
28. オリーブ灰色 (10Y 5/2) シルト混じり細砂～中砂<一部中砂が不規則に入る>
29. オリーブ灰色 (10Y 5/2) 細砂混じりシルト
30. オリーブ黒色 (7.5Y 3/1) シルト
31. 灰色 (10Y 4/1) 細砂混じりシルト
32. オリーブ黄色 (7.5Y 6/3) 極細砂
33. オリーブ灰色 (10Y 5/2) 細砂
34. 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 砂混じりシルト
35. オリーブ黒色 (5Y 3/2) 砂混じりシルト
36. オリーブ黒色 (10Y 3/1) 砂混じりシルト<一部極細砂がラミナ状に入る、下部にシルト、上部に極細砂を多く含む>
37. 灰白色 (5Y 8/2) 中砂
38. 灰オリーブ色 (7.5Y 7/1) 細砂
39. 灰白色 (7.5Y 7/1) 中砂<下部に灰色 (7.5Y 6/1) 中砂をラミナ状に薄く挟む>
40. 暗オリーブ灰色 (2.5GY 3/1) シルト<下部に灰色ラミナ層を薄く挟む>
41. 灰黄色 (2.5Y 6/2) 中砂<薄い灰色 (7.5Y 6/1) シルトが不規則に縞状に入る>
42. 灰オリーブ色 (7.5Y 5/3) 中砂
43. オリーブ黒色 (7.5Y 3/2) シルト<強粘質のシルト、灰黄色 (2.5Y 6/2) 細砂が部分的に混じる>
44. オリーブ黒色 (7.5Y 3/1) シルト<灰オリーブ色 (7.5Y 6/2) 中砂層が部分的に薄く入る>
45. オリーブ黒色 (7.5Y 3/1) シルト+灰白色 (5Y 7/2) 中砂<マール状に不規則な層位の乱れ、上部から圧力を受けたものか>
46. オリーブ黒色 (7.5Y 3/1) 細砂混じりシルト
47. オリーブ黒色 (7.5Y 2/2) シルト<下部に灰黄色 (2.5Y 6/2) 中砂が薄い層状に入る>
48. 灰白色 (7.5Y 8/1) 粗砂～中砂<木津川起源とされる洪水砂層、氾濫流路の流れ込み層>
49. オリーブ黒色 (10Y 3/2) 中砂混じりシルト<灰オリーブ色 (7.5Y 6/2) 中砂が不規則に混じる>
50. 灰色 (10Y 4/1) シルト+灰白色 (7.5Y 7/2) 粗砂～中砂<木枝等の植物遺体を含む>
51. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) シルト<均質なシルト、最下部に径2～3cmの炭化材含む>
52. 灰白色 (5Y 7/2) 粗砂～中砂+灰オリーブ色 (7.5Y 4/2) シルトの互層<53層に比べ砂層多い>
53. オリーブ黒色 (5Y 3/1) シルトと灰白色 (5Y 7/2) の互層
54. オリーブ黒色 (10Y 3/1) 砂混じりシルト
55. オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 中砂<種子・木枝等の植物遺体を多量に含む、管茎植物の植物遺体を含む>
56. 灰黄色 (2.5Y 6/2) 中砂<種子等植物遺体、白色砂混じる、管茎植物の植物遺体を含む>
57. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) シルト混じり中砂<多量に種子等の植物遺体、管茎植物の植物遺体を含む>
58. 灰色 (10Y 4/1) 中砂<植物遺体をほとんど含まず均質>
59. 灰オリーブ色 (7.5Y 6/2) シルト混じり粗砂<径1～2cmのシルト偽礫を含む>
60. 灰白色 (7.5Y 7/1) 粗砂<一部鉄分が浸透し黄変、木津川の洪水時の氾濫による流入砂層、古墳時代初頭土器包含層>
61. 灰色 (10Y 6/1) 中砂
62. 灰色 (10Y 5/1) 砂混じりシルト<灰黄色 (2.5Y 6/2) 中砂を不規則に含む、遺物・植物遺体(種子)含む>
63. 灰色 (7.5Y 6/1) シルト混じり細砂～中砂<一部に灰色シルト (7.5Y 6/1) を薄くラミナ状に挟む>
64. 緑灰色 (10G 6/1) 粘土<護岸材盛土(法面覆土)、部分的に灰黄色中砂含み、下面に縞状に灰白色砂層が入る、一部層位が崩れ偽礫となる、上面から圧力を加えられたものか>
65. 灰黄色 (2.5Y 7/2) 中砂<64層に上部から人為的な圧力が加えられたことにより、下部にひび割れが生じ、水分と中砂が流入したもの、鉄分多く含む>
66. 灰色 (7.5Y 5/1) シルト
67. 灰色 (7.5Y 5/1) シルト混じり細砂～中砂<灰黄色 (2.5Y 7/2) 中砂を縞状に含む>
68. 灰色 (7.5Y 4/1) シルト

- | | |
|---|--|
| 69. オリーブ黒色 (7.5Y 3/1) シルト | 82. 灰色 (7.5Y 6/1) 細砂混じりシルト |
| 70. オリーブ灰色 (5GY 5/1) 細砂 | 83. 灰白色 (7.5Y 7/1) 細砂混じりシルト |
| 71. 灰色 (10Y 6/1) <中砂～細砂+オリーブ黒色 (7.5Y 3/1) シルトの互層> | 84. 灰色 (10Y 6/1) 細砂混じりシルト |
| 72. オリーブ黒色 (10Y 3/1) シルト | 85. 灰色 (10Y 5/1) シルト |
| 73. オリーブ灰色 (10Y 3/2) 細砂混じりシルト | 86. 明オリーブ灰色 (2.5GY 7/1) シルト |
| 74. 明オリーブ灰色 (2.5GY 7/1) 中砂～細砂<鉄分含み黄変> | 87. オリーブ灰色 (2.5GY 5/1) 細砂混じりシルト |
| 75. 灰白色 (10Y 7/1) 中砂<薄いラミナ状の層理をなす> | 88. 灰色 (7.5Y 6/1) 細砂混じりシルト<灰黄色 (2.5Y 7/2) 中砂を縞状に含む> |
| 76. オリーブ黒色 (7.5Y 3/1) 中砂混じりシルト | 89. 灰色 (10Y 6/1) 細砂混じりシルト<灰黄色 (2.5Y 7/2) 中砂をブロック状に含む> |
| 77. 灰色 (7.5Y 4/1) 中砂 | 90. 明オリーブ灰色 (5GY 7/1) シルト |
| 78. 灰色 (5Y 6/1) 細砂混じりシルト | 91. オリーブ灰色 (5GY 6/1) シルト |
| 79. オリーブ黒色 (7.5Y 3/1) 細砂混じりシルト | 92. オリーブ黒色 (10Y 3/1) シルトに灰色 (7.5Y 6/1) 中砂が混じる<植物遺体含む、径5～10cmの木材含む> |
| 80. 灰白色 (10Y 8/2) 粗砂～中砂 | |
| 81. 灰白色 (7.5Y 7/1) 細砂混じりシルト | |

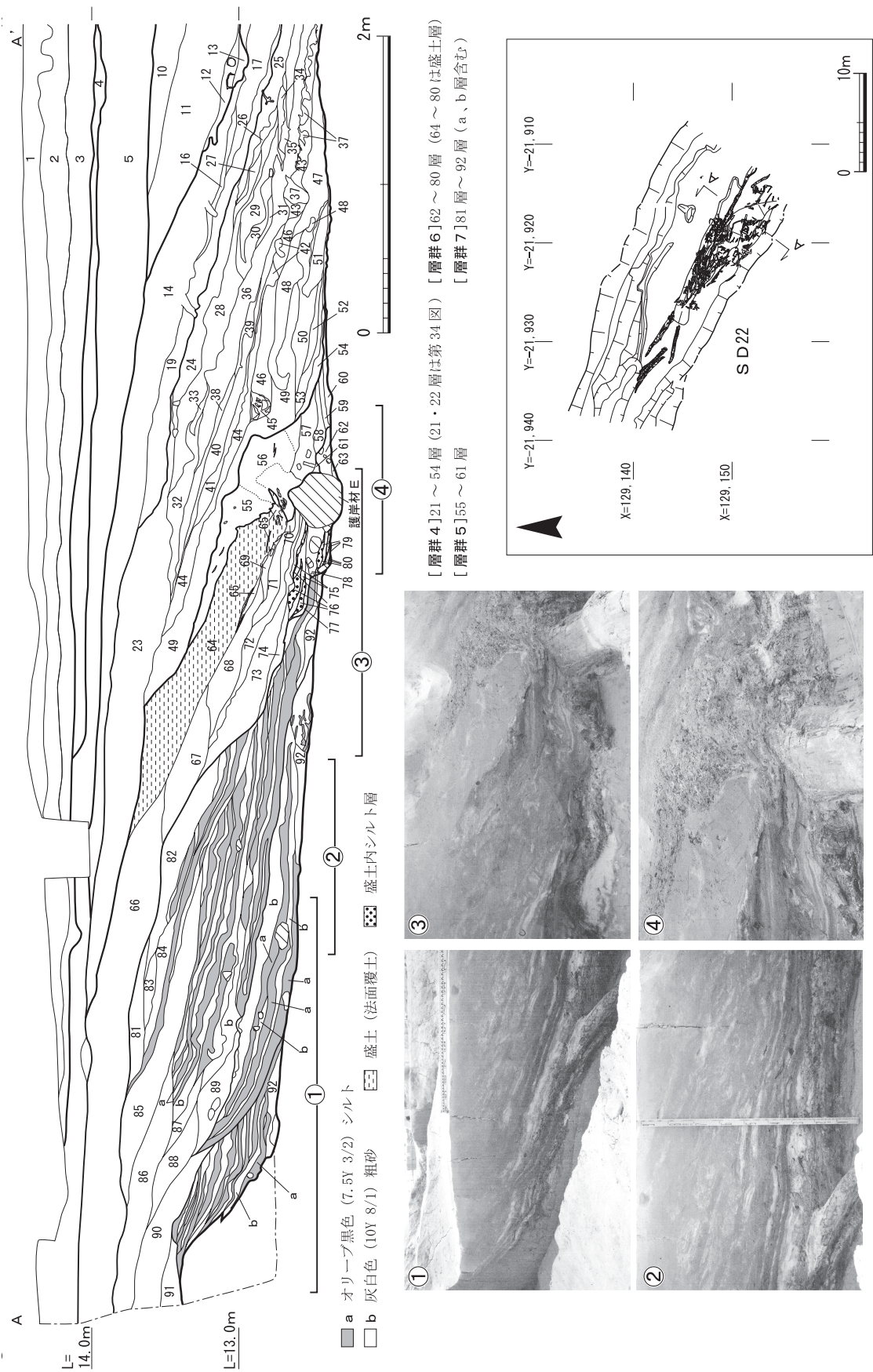
もされ、今後の検討が課題となる。

第36層から上位の第35層から第24層は、オリーブ灰色シルトや灰色シルト混じり中砂からなる。層位間には、旧木津川本流に由来するとみられる灰色砂をレンズ状に部分的に含む部分があり、増水時には本流から水流が逆流して流れ込む状況であったとみられる。第44層から第47層には、大小のシルト塊が含まれ、人為的な攪乱を受けた層位とみられる。第36層以下の層位では、第54・55層中には土器を包含し(Ⅵ層及びⅥ層下層)するが、いずれも古墳時代初頭の佐山Ⅱ-1～2式に併行するものである。出土遺物の総量は少ないが、水路として大きく活用された段階とみることができる。

この層位から出土した木材については、酸素同位体比年輪年代分析測定(付編2参照^(注14))を実施し、A.D.162の年代が得られている。また、同層位(Ⅵ層)から出土した土器(第81図127)の体部に付着した炭化物について、ウイグルマッチング法による加速器質量分析(以下、AMS分析)(付編3参照^(注15))を実施し、65～176calAD(2 σ 、91.0%)の年代値を得ている。両者の数値については、放射性炭素年代の日本における1、2世紀の年代値の特殊性を考慮すると、ほぼ一致する数値とされている^(注16)。

層群5(第35図) 南肩部の護岸がなされたのちに堆積した、流路の使用時の埋土の層位であり、第55～61層が対応する。55～57層は、自然堆積層となる淡青灰色を基調とした粗砂に多量の本枝や種子を挟在する層位である。これらの層位は、前述した人工的な盛土とみられる第64層の直上に堆積するが、護岸材Eと接する層位下層の部分では、第64層の先端部が跳ね上がり、砂層を巻き込むように堆積する状況が観察できる。このことから、流路の水量は多く、護岸材Eが強い水圧を受ける緩衝となっていたとみられる。

層群5から土器は確認されなかったが、第53層中の木枝を試料として、AMS法による年代分析を実施した(付編3)。また、これらの種子について、層位ブロック単位の水洗とフローティングによって種子構成の分析を実施した(付編4^(注17))、3calBC～77calAD(2 σ 、90.0%)の年代値を得ている。



第35図 B地区S D 22断面3・南部土層拡大図(1/40、1/60)

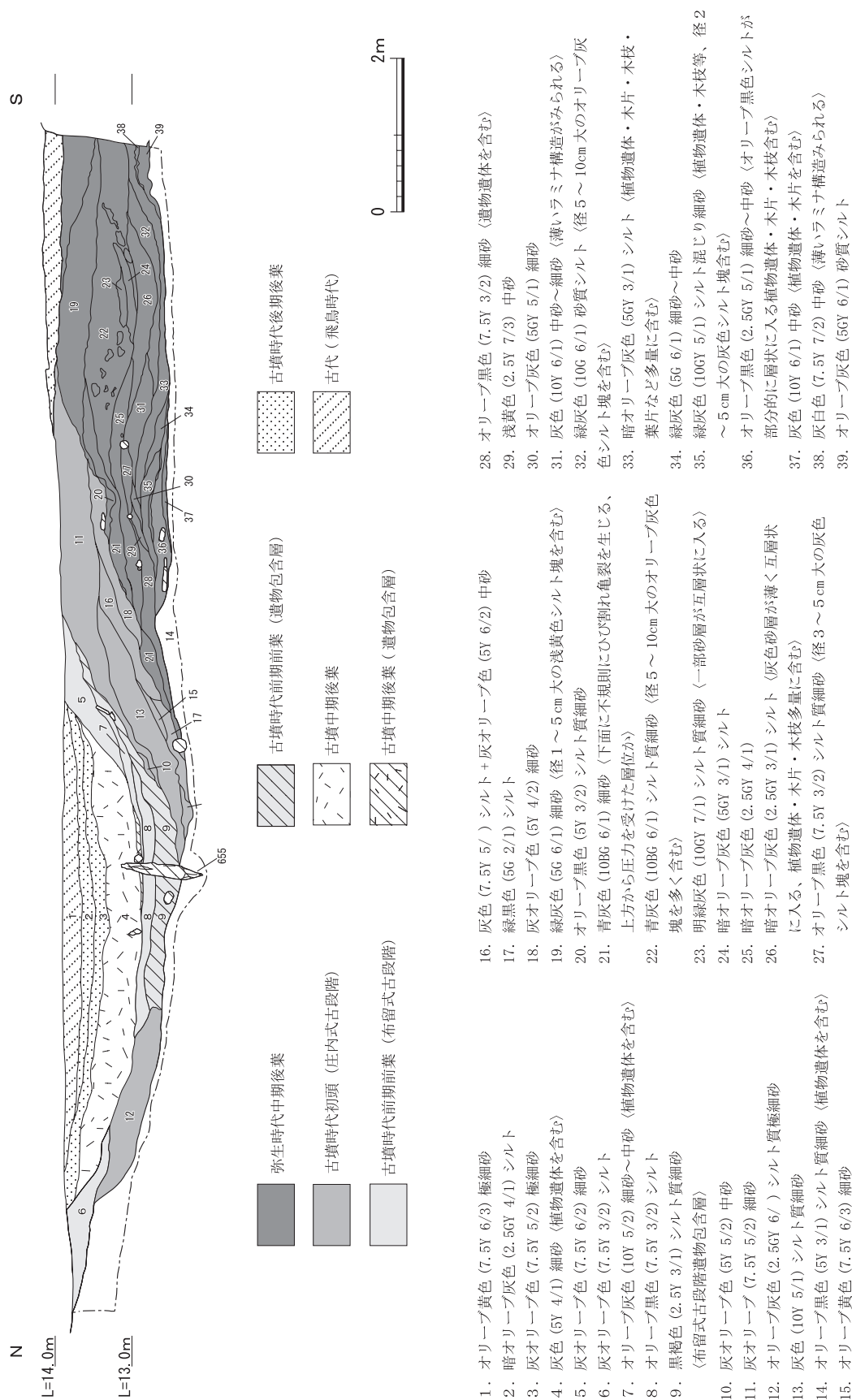
層群 6 (第35図) 第62～80層に対応する。層群 6 は、護岸材 E の南側上部にみられる突き固められた盛土層とみられる緑灰色粘土層 (第64層、法面覆土) と、南側にみられるいわゆる敷葉遺構に対応する層群 (第75～79層)、さらに護岸の上層盛土とみられる層位 (第66～74層) に分かれる。また、護岸材 E は、流路と並行に南肩部基盤上に埋置されており、西側で検出した他の護岸材 (護岸材 A～D) のように上層の攪乱は見られず、護岸材の原位置を保っており、護岸がなされた当初の状況を知ることができる。層群 6 の検出面から最深部までの深さは、約1.8mである。

まず、護岸材 E の設置に伴う層群のなかで、その最上位にある第64層の緑灰色粘土は、層中に灰黄色中砂を小ブロック状あるいはレンズ状の薄い層として含み、人為的な盛土層と推定される。その層位は、護岸材 E 上層の堆積層全体を最終的に覆うように盛土がなされるが、護岸材 E の直上では、上方から圧力をかけられたことにより、層位の下方の一部が崩れ、その小ブロックが擬礫となり、周囲に細かく拡散したものとされる (第35図、巻頭図版 6 (2)^(注18))。護岸材 E は、水流を受ける攻撃面側からの盛土層の保護材としての機能を持っていたとみられる。

護岸材 E の背後の基盤直上に、浅い掘り込みがあり、この部分にシルトと砂層の互層が堆積するが、この層位には多量の細木や葉・枝類が挟在する。これらは前述した層群 1 でみられたシルトと砂層の自然堆積による互層と異なり、層位の攪乱がみられ、粘土・シルトの小ブロック等が確認される。こうした特徴から、シルトと粗砂や細木や草本類を積み重ねたこの層群は、護岸材 E に密着して背後の流路肩側に形成された人為的な盛土層と推定される。護岸材 E に並行して設置された径10cm前後の細木とともに、多量の枝葉類が含まれ、護岸材の背後に粗朶を敷き、圧力をかけて締め固め、護岸材を固定し、盛土の基礎を補強した層位とみられる (第37図)。こうした護岸の基礎工法は、いわゆる「敷葉工法」として知られる古代の土木工法に類するものである。^(注19) 「敷葉工法」とは、盛土の下層に枝や葉などの天然材料を敷き、盛土基盤の補強や盛土内の排水や圧密促進などを行う土木技術であり、古代における軟弱地盤の沈下防止工法として知られるものである。^(注20)

「敷葉工法」と推定される堆積状況が観察される層群の上層には、シルトと砂層の互層が堆積するが、これらも攪乱やシルト粘土の小ブロックが認められ、いずれも人為的になされた盛土層とみられる。その最上部に前述した緑灰色シルトの堆積層が下層の盛土層の全体を覆うように積土されている。

層群 6 からは、遺物は出土していないが、護岸材 E の酸素同位体比年輪年代分析と AMS 法による年代分析を実施した (付編 2・3)。護岸材 E は、樹種分析によって、樹種はエノキ属であることが判明している (付編 7)^(注21)。酸素同位体比年代分析の対象とした資料サンプルは、樹皮は残存していなかったが、その最外年輪は辺材のなかでも外皮に近い部分であるとされ、AD.1 の年代値を得た。また、AMS 法による分析では、ウイグルマッチングによる分析を実施し、54BC～10AD (2 σ) の年代値を得ており、異なる 2 種の方法における分析値のおおよそ一致を見ている。さらに、断面 3 の東側約 1 m の地点で採取した、いわゆる敷葉遺構とみられるシルト層中の木葉の集積から 1 点を AMS 法による分析の対象とし、39cal BC～63cal AD (2 σ) の分析値を



第36図 B地区S D22東壁断ち割り土層断面図(1/80)

得ている。層群6の層位中から出土した護岸材や種子、あるいは対応する層位中の葉の木葉の測定値はいずれも紀元前後にあり、層群6はおおよそ弥生時代中期後葉～末の年代観を示すと考えられる。

なお、層群6の基底に据えられた護岸材Eは、主要な枝木が除去されたもので、人為的に伐採され、枝木を除去した加工材とみられる^(注22)。

層群7 (第36図) 第81～92層(第35図)及びa・b層に対応する。層群7には、青灰色粘土を基盤土とし、オリーブ黒色シルトと灰白色粗砂の互層からなる層群のまとまり(以下、層ユニットとする)が4群以上認められる。また、層群7の上部には、よく締まった灰白色細砂混じりシルトや灰色細砂混じりシルトが確認される。層群7の下層に堆積するシルト砂の互層となる各層ユニットは、10層前後の層から形成される。こうしたシルトと粗砂の互層は、本流路が自然流路として形成され、後述される「氾濫流路」(付編1参照)としての性格をもつものであったことを示すとされる。すなわち粗砂層は、洪水時に本流路が合流する旧木津川の氾濫によって、流路を逆流して堆積した層位であり、シルト層は洪水終息後に堆積した層位とされ、比較的短期間の間に逆流と終息を繰り返し、一つの層ユニットが形成されたと推定される。

層群7から遺物は出土していないが、細木や、木枝類などの植物遺体が粗砂層中に多数含まれており、その一つを資料としてAMS法による年代分析を実施した。分析の対象としたものは、流路底部から約10cm上位の粗砂層から出土した、径約15cm、長さ約1mの木材であり、分析の結果の41calBC～57calAD(2 σ 、95.4%)の年代を得ている。

c) SD22に伴う古墳時代の遺構

古墳時代の遺構としては、水制遺構SW55、SW61、SW69がある。

水制遺構SW55 (第42図) 流路中央部の護岸材Bの北側で、検出した杭列と横木や打ち込み杭等からなる水制遺構である。杭は丸杭を使用し、流路に直交して0.2～0.3mおきに打設される。杭列の西側(下流側)に約0.3m離れて、径5cm前後、長さ約1mの細木が設置され、細かな縦木の残片の合間に2か所の細木による打ち込みがみられる。流路に直交して構築されていることから、流路内に段差を設けるなど、水流を調節する水制遺構と推定される。検出面で、佐山Ⅱ-3型式に併行する土器が出土しており、古墳時代初頭から前期にかけての遺構と推定される。

水制遺構SW61 (第43図) 流路中央の東壁周辺で検出した立杭と横板材などから構成される構築物と推定される。径約2.5mの範囲で検出したもので、立杭は4本を確認し、うち2本は、東壁から検出した。東壁から検出した杭は、長さ0.9m、径15cmを測る太杭であり、基盤面の青灰色粘土まで深く打ち込まれている。また、横板材は、長さ約0.7～1.5m、幅10cm前後のものを中心に、8本が出土している。板材は流路底面で規則性なく出土し、杭も大きく傾いているものを含むため、水流により破壊されたとみられる。周囲及び材の間隙から、佐山Ⅱ-3型式～Ⅲ-1型式の土器が出土し、古墳時代前期前葉の遺構と推定される。

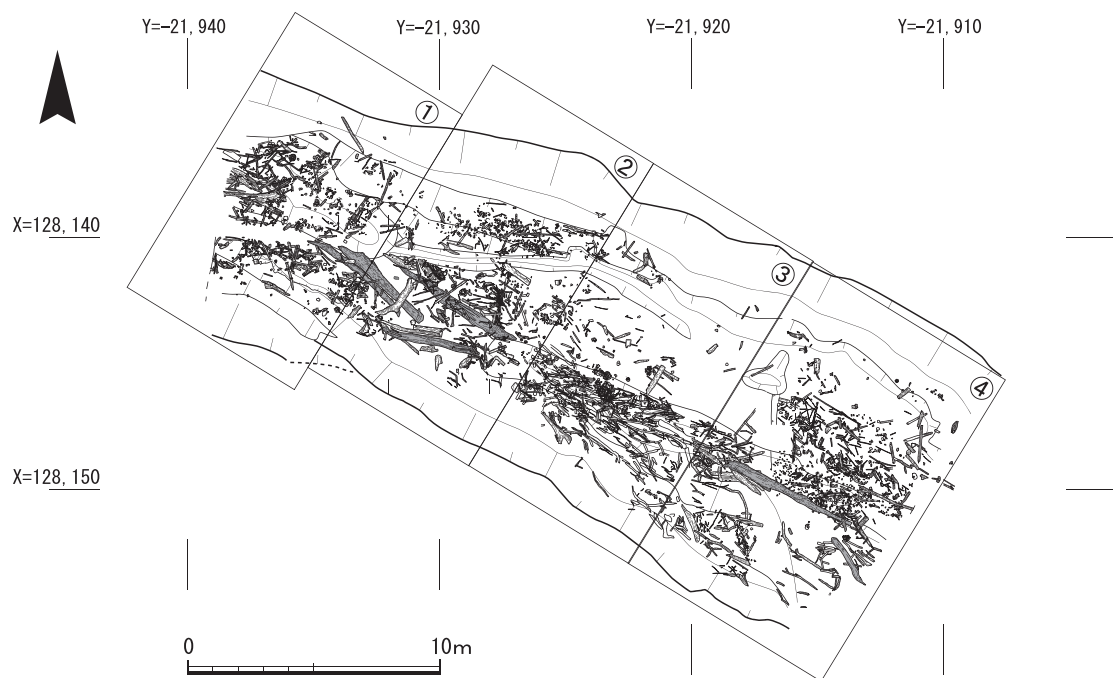
水制遺構SW69 (第42図) SD22の東端で検出した杭列である。3本の杭が3、溝と並行に30～40cmの間隔をあけ、打設されていたものである。杭の長さは、30～50cmを測り、約45°～50°

の角度で打ち込まれていた。水流を制御するためのものとみられる。

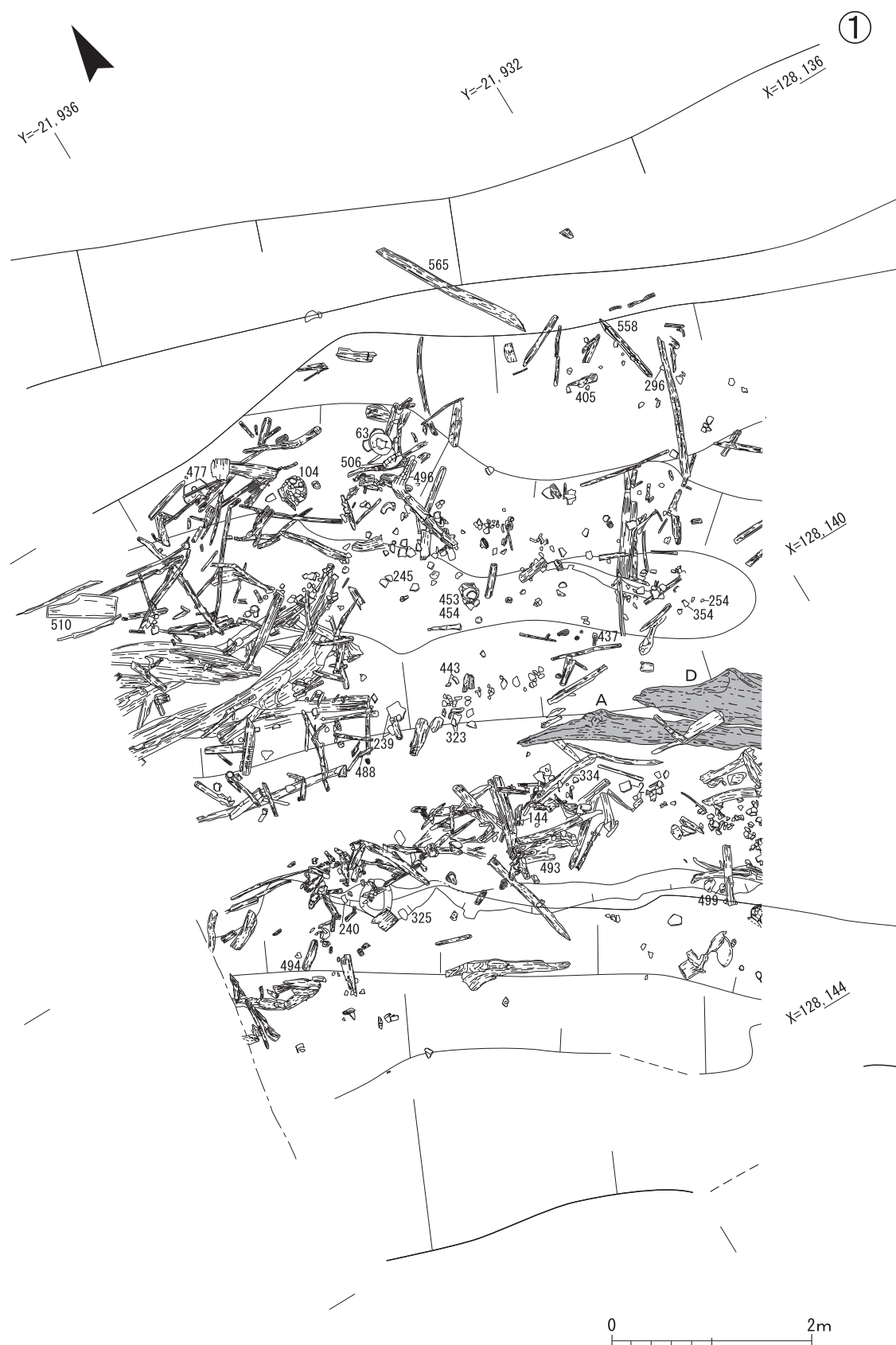
土坑状落ち込み S X 68 (第44図) 流路北東部の基盤土上で検出した。長さ1.8m、幅1.7mを測る不整形の土坑である。南側は楕円形状に落ち込み、炭化物・木片を多量に含む黒褐色シルト層を埋土とする。埋土から出土した土器小片が出土し、古墳時代前期前葉の落ち込みと推定される。

溝状落ち込み S X 74 (第57図) 底面となる基盤土上で、流路北岸に平行して、約20mにわたって検出した溝状の落ち込みである。中央東側寄りから約13mまでは、幅約0.7～1.0m、深さ約0.5mと浅く、さらに西壁に向けて、約7mの範囲では最大幅約3.3m、深さ0.3～0.5mと規模が大きくなる。東側の底面は浅く不規則であり、埋土は暗灰色シルト混じり粗砂とすることから、水量が低下した段階に水流によって自然に形成された落ち込みとみられる。一方、規模の大きな西側の落ち込み部分は、埋土に基盤土に由来する粘土小塊が部分的に含まれることが西壁断面で確認され、人為的に再掘削された部分とみられる。土器溜まり S X 56は、S X 74の検出面で確認したもので、佐山Ⅲ-1型式に帰属する。埋土中にも同時期と推定される土器を含むことから、古墳時代前期前葉の落ち込みと推定され、流路の基盤まで古墳時代前期前葉に掘削が行われていることが明らかとなった。

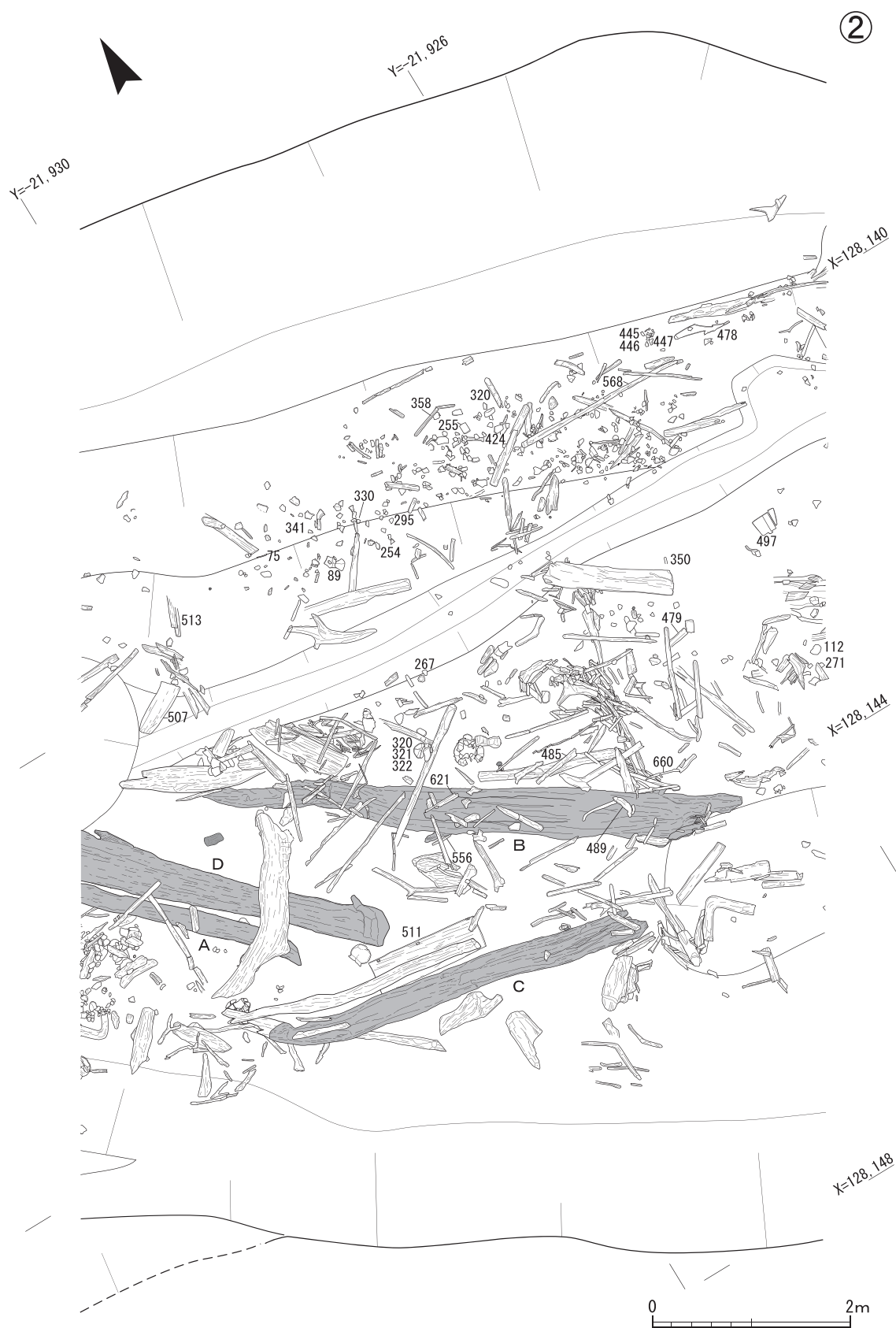
各土器溜まり出土の土器は残存率が高く、流路内の土器溜まり S X 23～29として一括して取り上げたものである。これらのうち、とくに S X 23は、赤彩された土器や、一部を意図的に穿孔したとみられる土器や口縁部を打ち欠いた土器を含み、土器供献儀礼に関わる土器群と推定されるもので、古墳時代前期前葉の一括性の高い土器群である。土器溜まり S X 24・25は赤彩や穿孔される土器は含まれていないが、一括廃棄された土器群とみられる。土器溜まりは東西に点在することから、土器供献は繰り返し行われたと推定され、この段階には水路としての機能よりもむしろ



第37図 B地区 S D 22遺物出土状況割付図 (1/300)



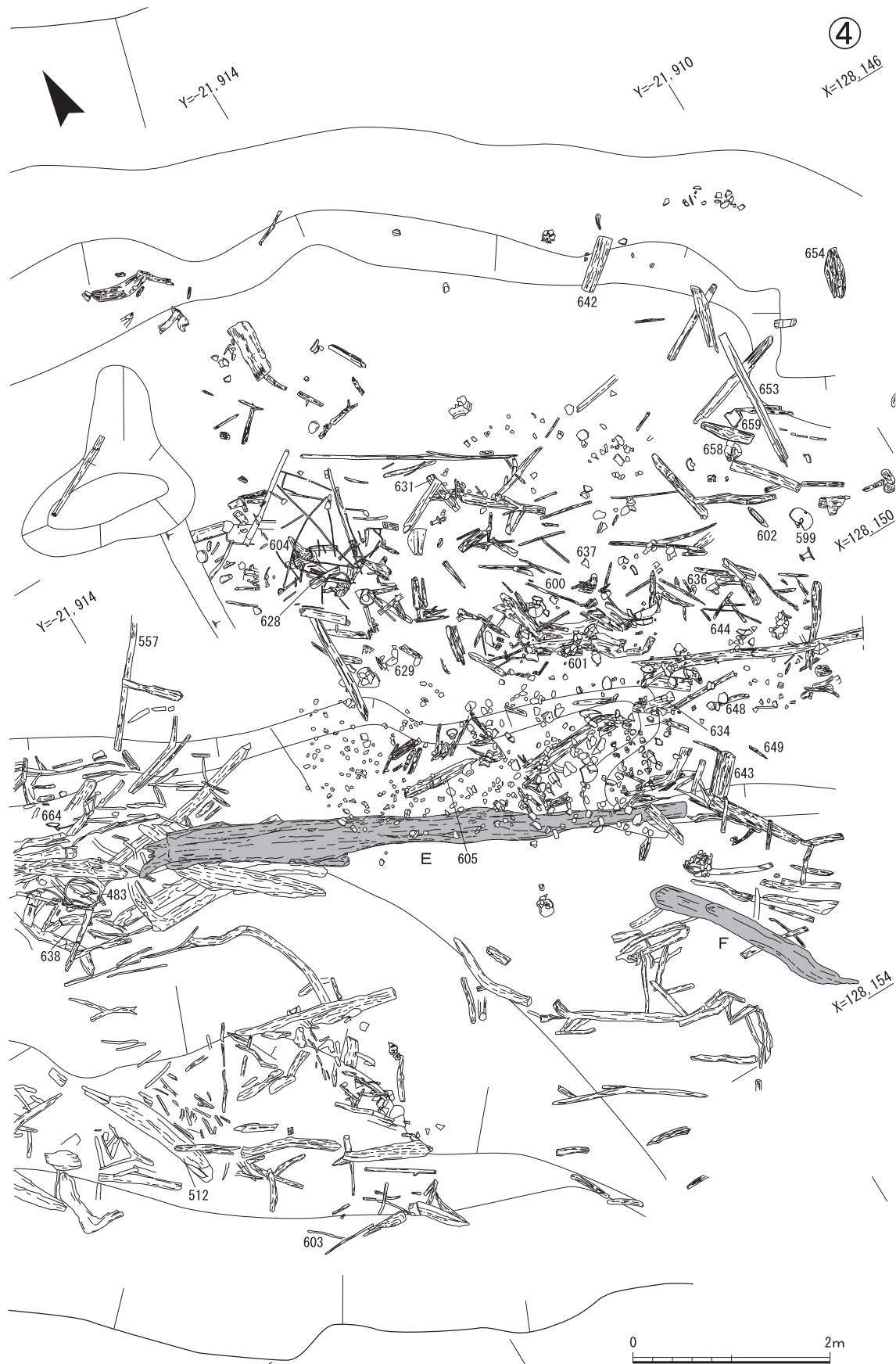
第38図 B地区S D22遺物出土状況図1 (1/60)



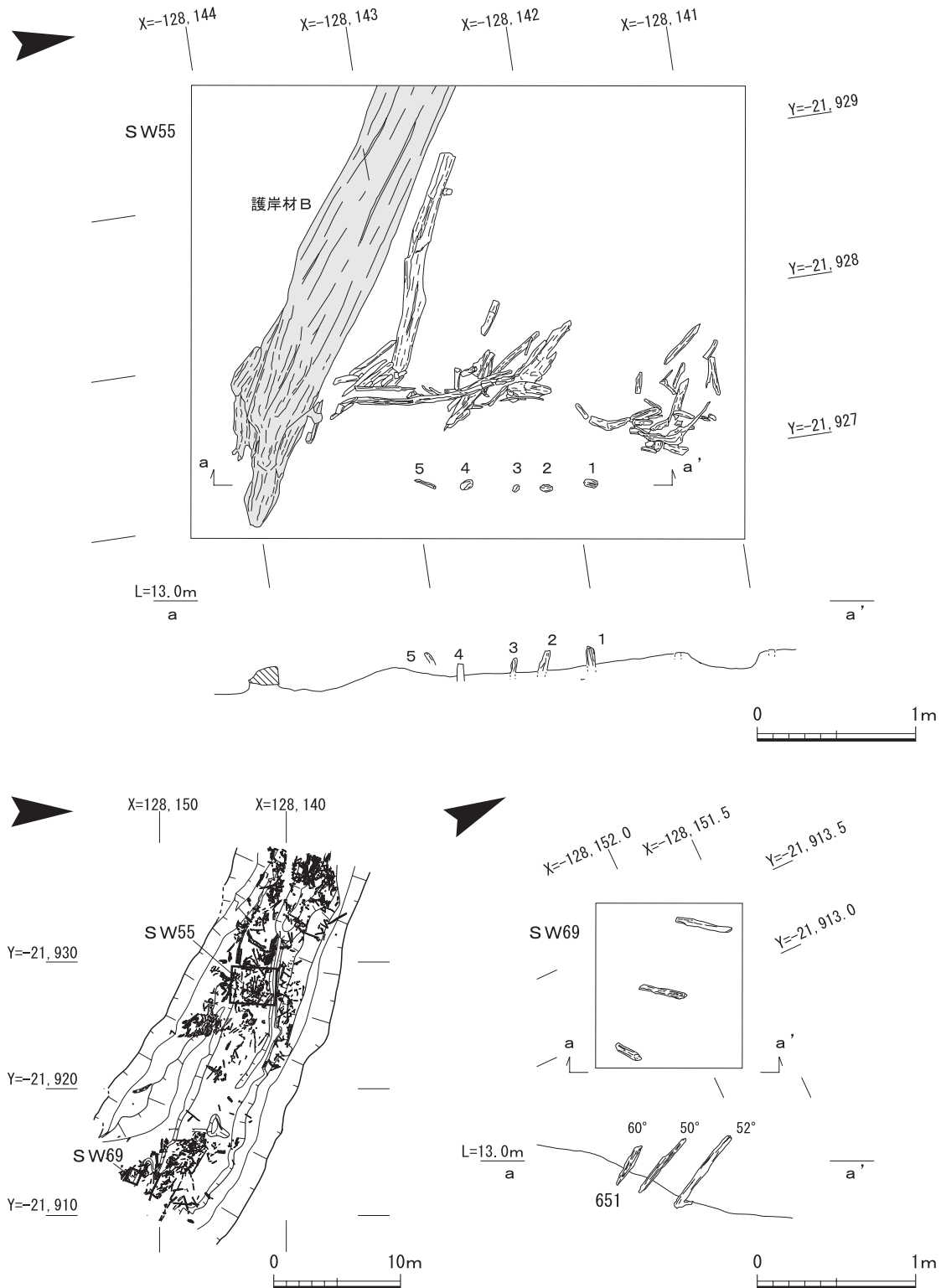
第39図 B地区 S D22遺物出土状況図2 (1/60)



第40図 B地区S D22遺物出土状況図3 (1/60)



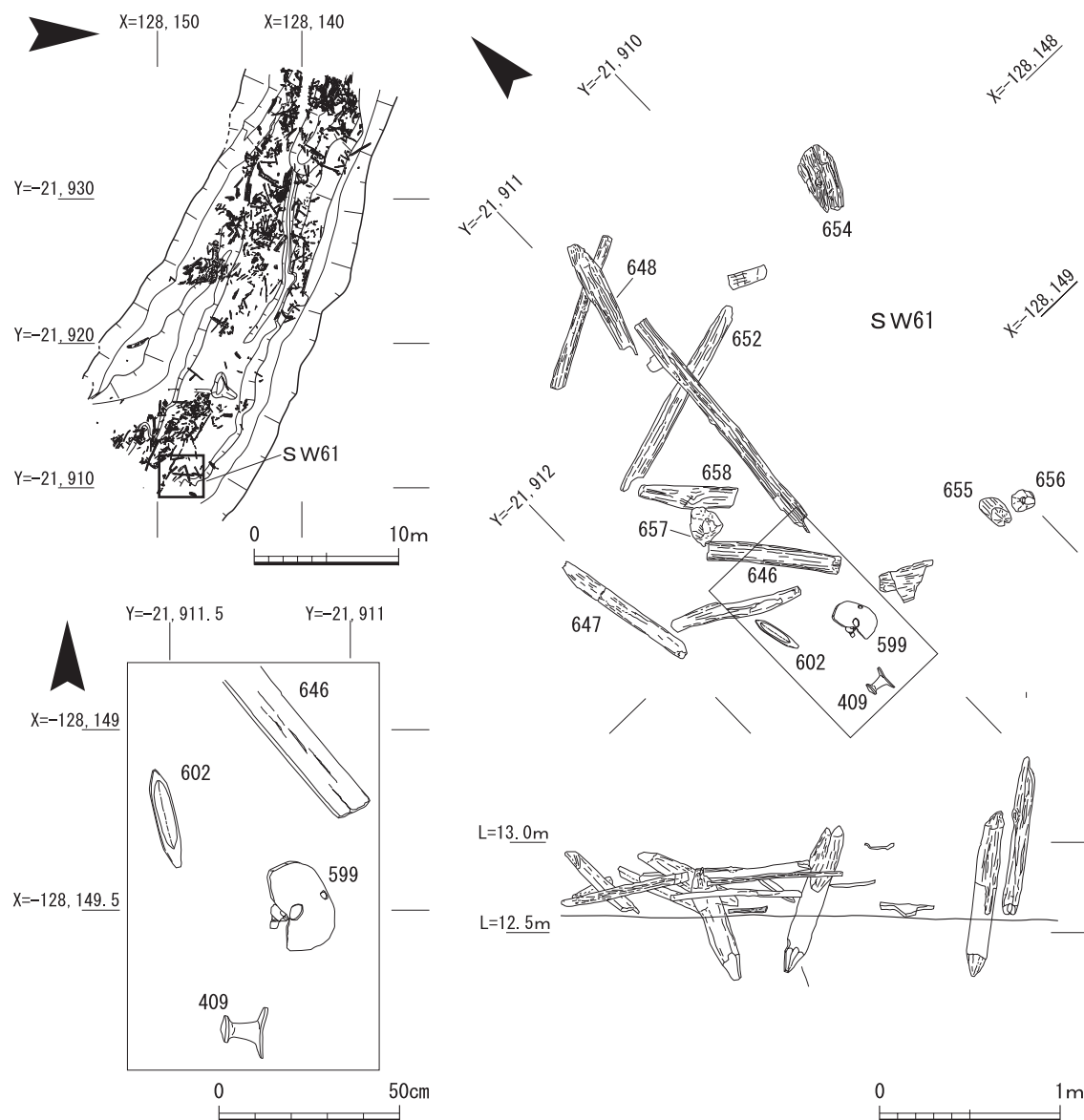
第41図 B地区S D22遺物出土状況図4 (1/60)



第42図 B地区SD22水制遺構SW55・69実測図(1/40)

ろ、土器供献儀礼を伴ういわゆる浄水祭祀の場としての性格が濃いものであったと推定される。

土器溜まりSX23(第46図) SD22の南東部で検出した土器溜まりである。土器群は、幅約4.2m、長さ約4.5mの範囲に拡がる。SD22の検出面から約1.2m下の標高約12.5m付近で検出し、SD22の南肩部から投棄あるいは廃棄されたものとみられる。土器組成は、直口壺・甕・高杯・

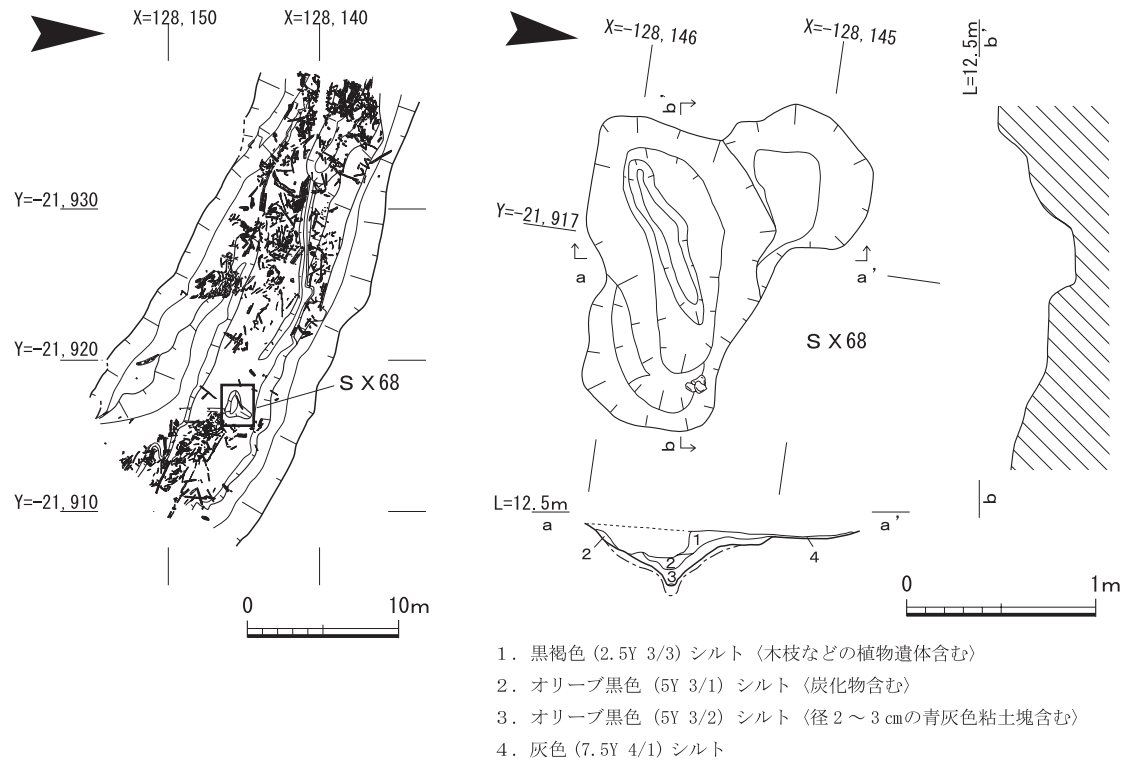


第43図 B地区S D22水制遺構SW61実測図(1/40)

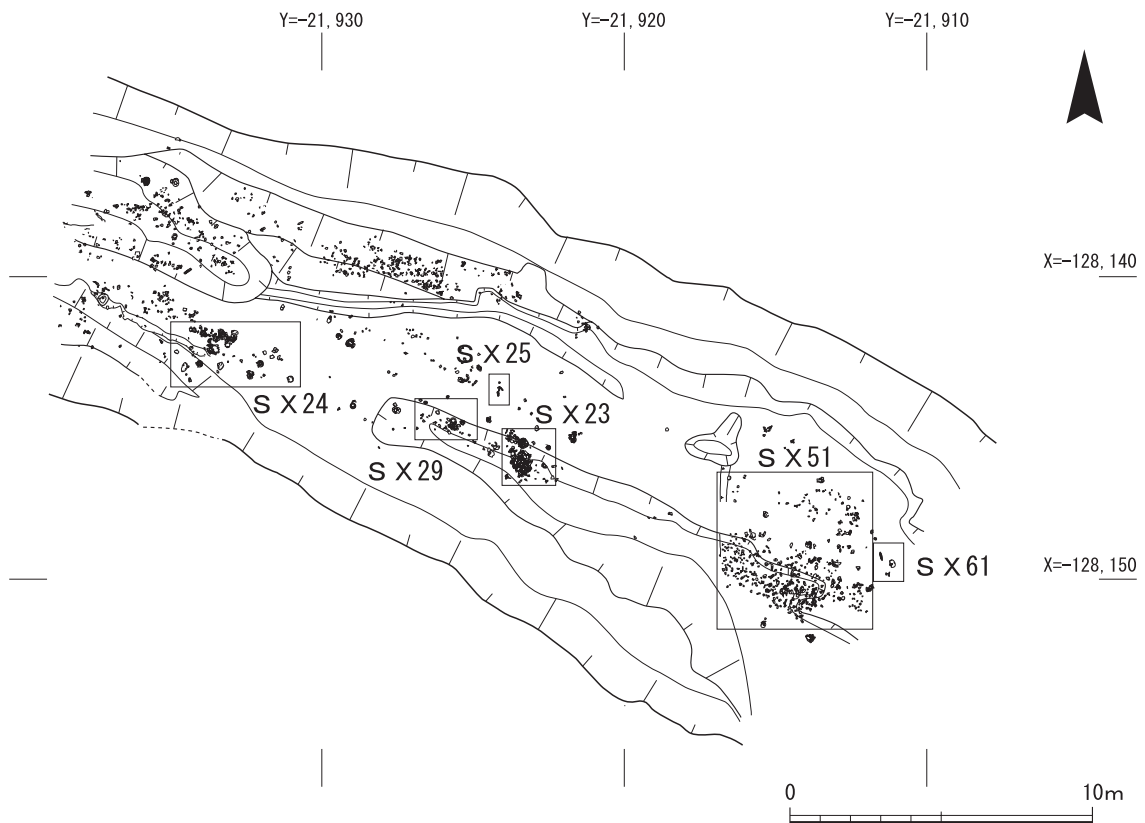
小形丸底鉢等が出土し、総数20個体以上が出土している。壺は口頸部を意図的に打ち欠いたものがあり、甕には体部に穿孔された個体がある。また、小形丸底鉢は、赤色顔料を塗布して焼成したとみられるものが含まれる。古墳時代前期前葉の佐山Ⅱ－4段階の土器群である。

土器溜まりS X24(第46図) S D22の南西部で検出した土器溜まりである。土器群は、幅2m、長さ3mの範囲に拡がり、S D22の検出面から約1.3m下の、標高12.4m付近で検出した。南肩部から投棄あるいは廃棄されたものとみられる。土器組成は、直口壺、甕、高杯等10個体以上からなるが、山陰系甕のほか、河内産とみられる角閃石を多量に含む胎土をもつ大形壺の一部が出土している。^(注24)古墳時代前期前葉の佐山Ⅱ－4段階の土器群である。

土器溜まりS X25(第45図) S D22の東部で検出した土器溜まりである。1次調査のサブトレンチ内で検出した。S D22の中央部下層で確認したものであり、幅1.5m、長さ2mの範囲

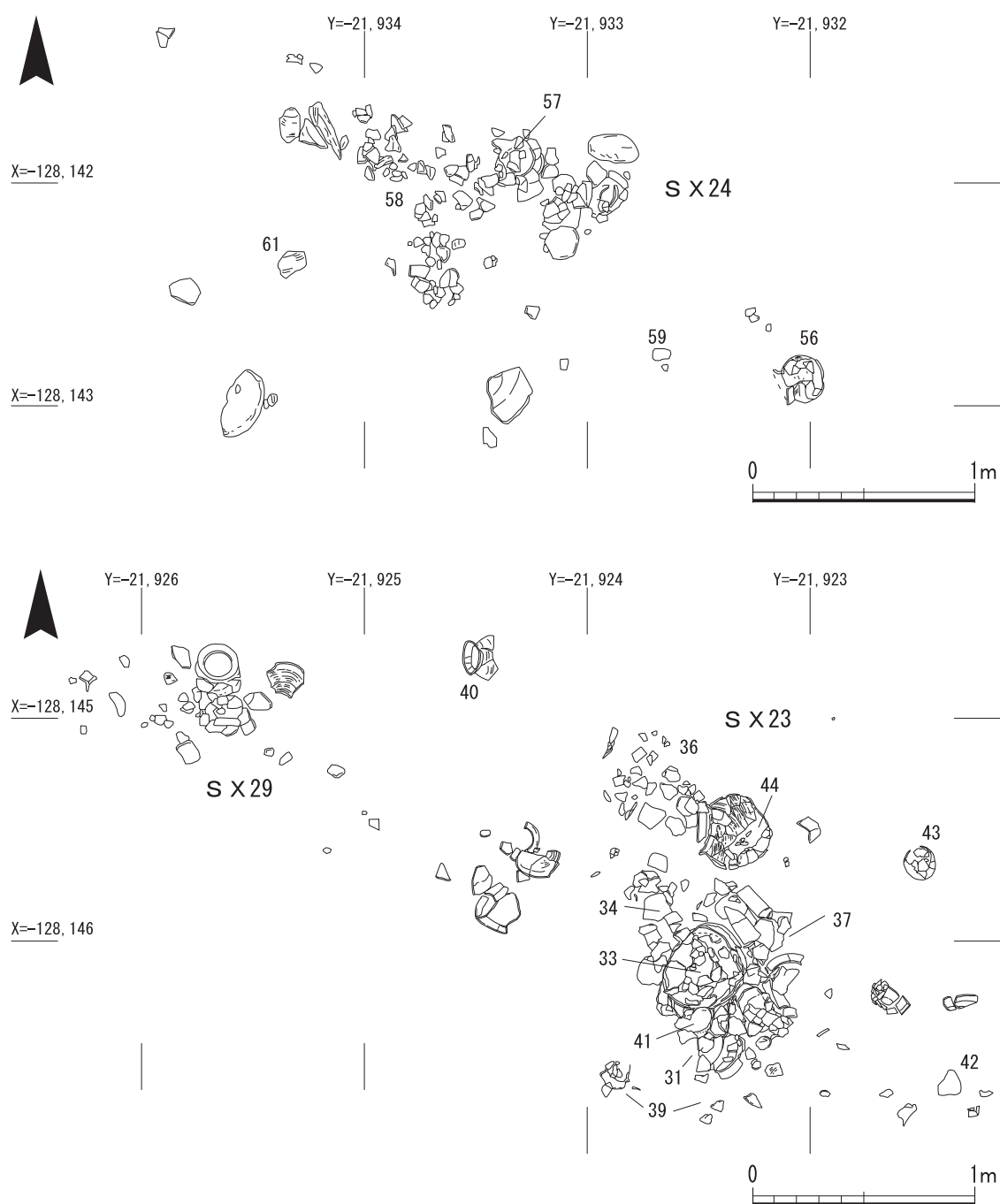


第44図 B地区S D22土坑状落ち込みS X68実測図(1/40)

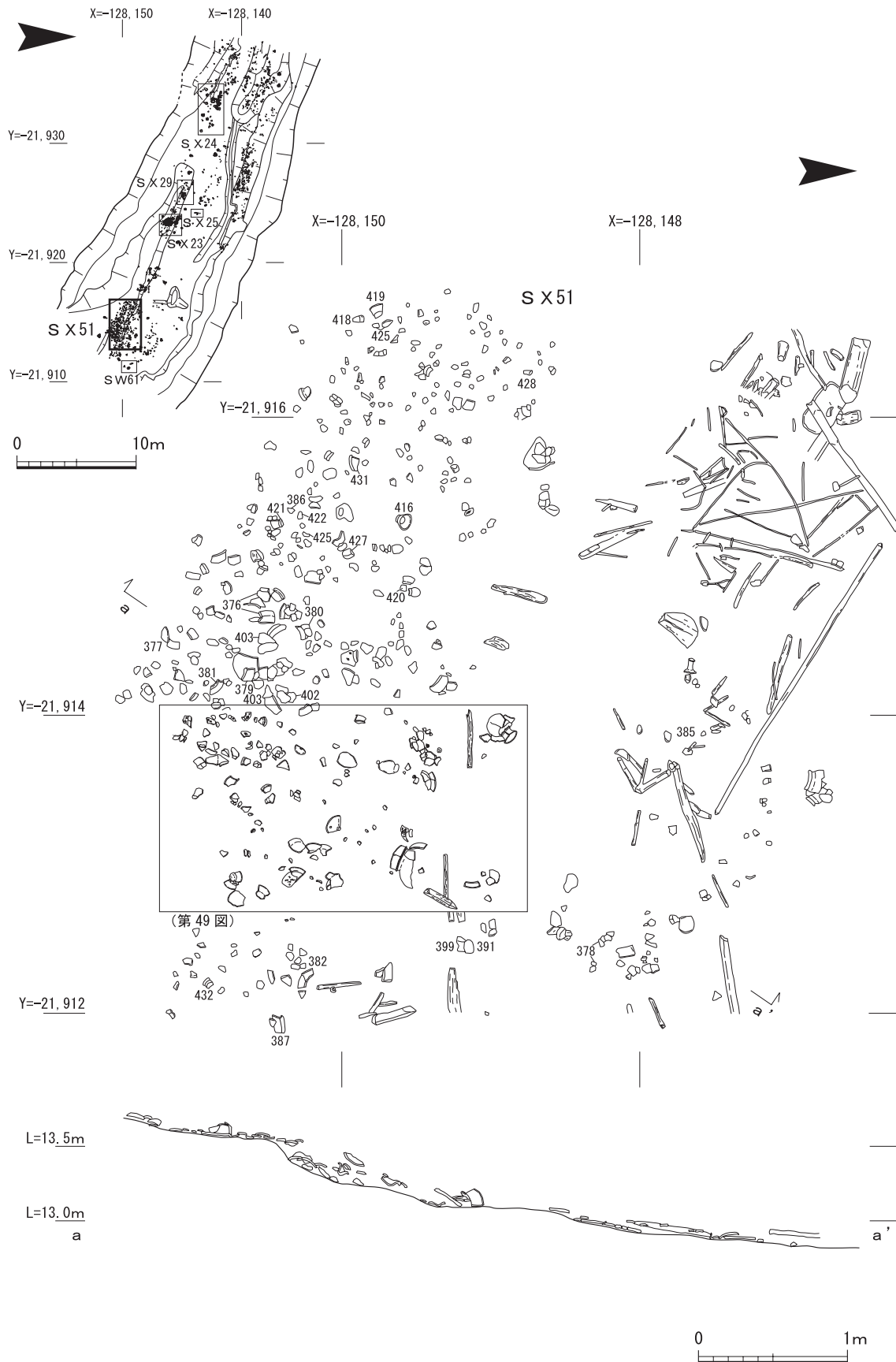


第45図 B地区S D22土器溜まり検出状況図(1/250)

に5点以上の土器が出土したものである。土器群のレベルは標高約12.3m付近にあり、S D22の検出面から約1.2~1.4m下に位置する。土器組成は、二重口縁壺、直口壺、甕を主体とする。全体に残存率が良好ではなく、南肩部から投棄された状況は何えないことから、底部の落ち込みに集積した土器群とみられる。時期は、古墳時代前期前葉の佐山Ⅲ-1段階(布留式古段階)の土器群である。他の土器溜まりは、いずれも庄内形甕が甕の比率の60%を超えるが、当遺構では布留形甕のみで構成され、時期的にも新しい様相を呈する。S D22は古墳時代前期中葉(佐山Ⅲ-2段階、布留式中段階)には水路としての機能を失うとみられることから、廃絶する前の古墳時代



第46図 B地区S D22 土器溜まり S X 23・24・29実測図(1/30)



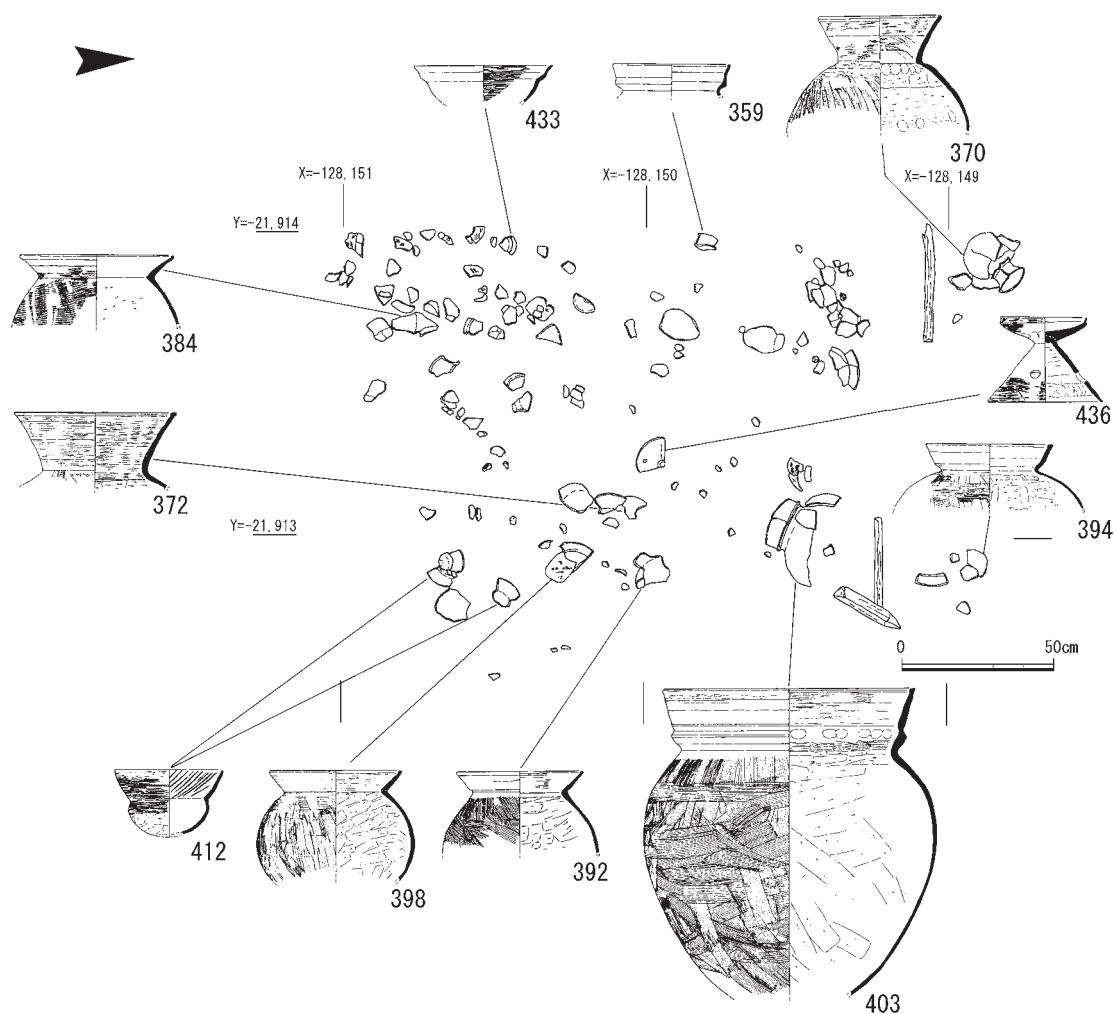
第47図 B地区SD22 土器溜まりS X51実測図(1/40)

前期前葉における最終段階の土器群とみることができる。

S D22は、古墳時代前期中葉～中期前半までの土器群を含まず、この間は埋積が進行し、水路としての機能は完全に失われていたとみられる。

土器溜まり S X29 (第45図) S D22中央部の、S X23の西側で検出した土器溜まりである。土器群は、長さ2 m、幅1.5 mにわたって拡がり、S X23と同様の標高12.5 m付近で検出した。S X23と検出層位は同じ暗灰色シルト層であり、同時期にS D22の南肩部から投棄ないしは廃棄されたものと推定される。土器組成は、甕を主体とし、高杯が含まれる。古墳時代前期初葉の佐山Ⅱ-4段階の土器群である。

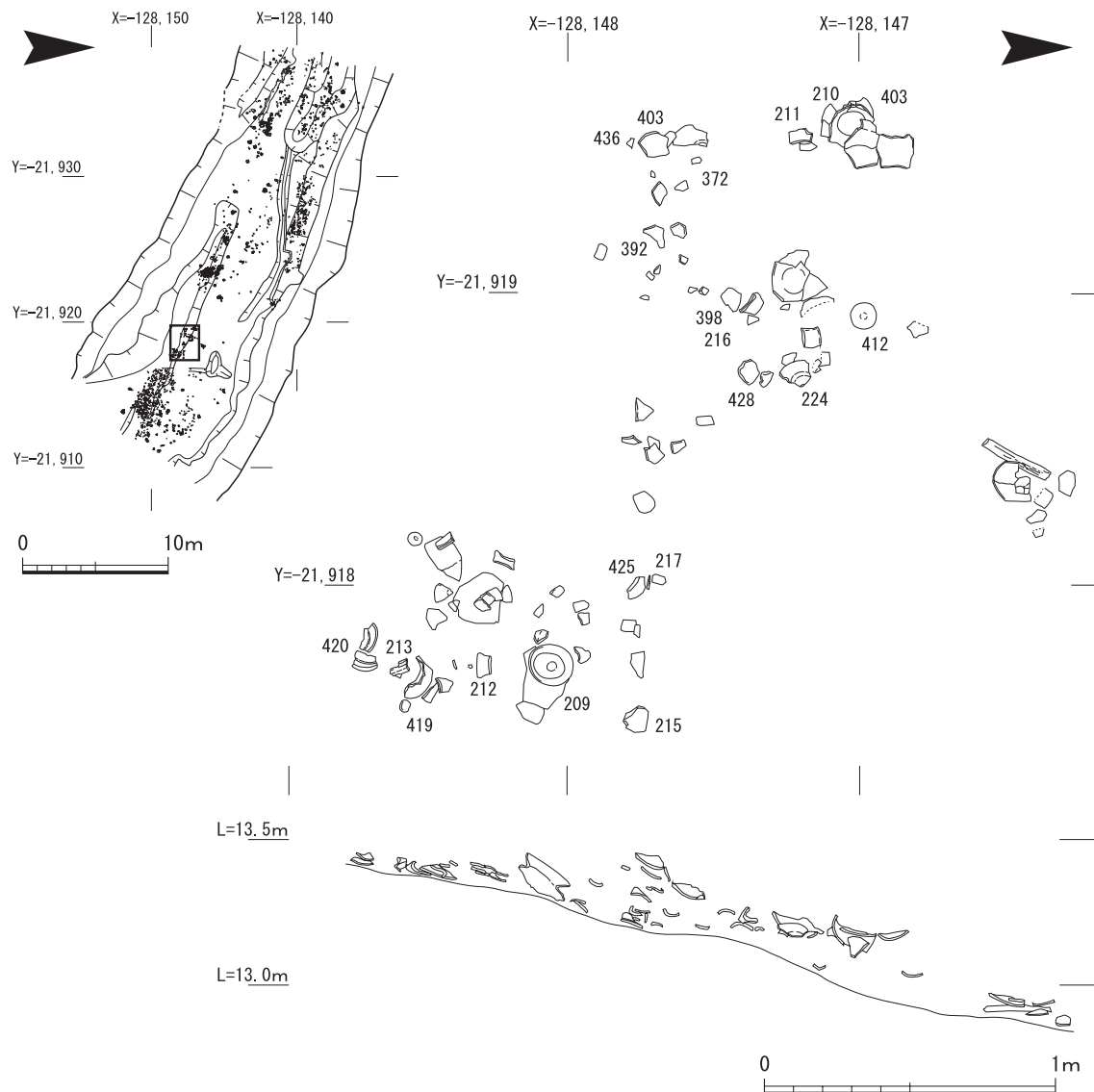
土器溜まり S X51 (第47・48図) S D22南東部で検出した土器溜まりである。南肩の傾斜面の上部から下部にむけて、長さ約5 m、幅約4 mの範囲で検出した土器群である。一部折り重なるように出土し、厚さ約0.2～0.3 mの層中に多量に土器を含む。流路南肩部から中央にむけて廃棄(あるいは投棄)された土器群とみられる。遺物の出土状況は、斜面の上位と下位で大きく異なる。上位の肩部周辺では、土器は細片化して出土したが、約2 m下がった斜面下半では、土器の残存状況はきわめて良好で、磨耗した状況もみられず、土器が廃棄された早い段階に埋没した可



第48図 B地区 S D22 土器溜まり S X51土器出土状況図(1/25)

能性が高い。また、流路肩部周辺の土器と、斜面下半部の土器が約2m離れて接合する資料があることから、土器は長期にわたって廃棄が繰り返されたものではなく、短期間のうちに廃棄されたものとみられる。一方、斜面の最下部では土器の集積はみられず、まばらな状況となり、水流に洗われた可能性がある。おおよそ基盤面からの高さ約0.4m以下であり、流路の水位を推定する参考となる高さになろう。層位中には、全体に炭化物や種子を多量に含む。種子のなかでは、栽培植物とされるモモ類の種子が圧倒しており、一部欠損しているものを含め、500点以上のモモ核が出土した。^(注25)これらのなかには、人為的に一部を打ち欠いたものがみられる。

S X51の出土遺物は、土器では壺・甕・高杯・小形丸底壺・小形丸底鉢・小形器台等が含まれるが、特に小形精製土器である小形丸底鉢と小形丸底壺の比率が他の地点に比較して極めて高く、S X51出土土器量全体のおおよそ1/3を占める。また、山城地域ではかに例をみない在地産とみられる庄内系のタキ成形技法による超大形甕や山陰系の大形甕が共伴している。こうした点から、大形容器と杯となる小形祭式土器がセットで用いられ、祭儀等による使用の終了にあたって、



第49図 B地区S D22断面3(畦3)下層土器出土状況図(1/25)

流路に廃棄されたと推定される。

また、木製品では、有頭棒や棒状製品の先端部に被火による一部炭化がみられる燃えさしが出土している。周辺の堆積土の一部を洗浄した結果、細かなチップ状の木片が多量に出土し、それらのなかには一部炭化がみられ、かがり火などに用いられた材の可能性がある。

S X51では、層位中から炭化物とともに小形祭式土器を中心とした多量の土器が出土していること、また栽培植物とされるモモの種子が多量に出土し、S X51の性格は古墳時代前期前葉のいわゆる水辺のまつりに関わるものと考えられる。被火によって一部炭化した木製品が含まれることから、火を用いたまつりとして、夜間に行われた可能性が高いものと推定される。

d) S D22に伴う弥生時代の遺構

弥生時代中期の流路S D22は、自然河川の河岸を護岸した水路である。弥生時代の流路部分は、南岸のみが遺存し、南岸に沿って、大規模な護岸遺構S L70^(注26)を検出した。また、流路基盤上では、杭列S W63などを検出した。

護岸遺構S L70(第50図) 護岸遺構S L70は、自然流路の南肩部に構築された盛土による土手状の護岸遺構である。S D22の東部で約16m以上にわたって検出したものである。流路中央東寄りから東端にかけて盛土部が残存し、基底幅約4.5～5 mを測る。盛土頂部は後世の削平を受けるが、検出面における高さは約1～1.2mを測る。盛土部分は流路肩部から一段下がり、緩やかな勾配を保ち、水路前面へ向けて傾斜する。護岸遺構S L70は、大形樹木を枕木とする盛土遺構S W71と、いわゆる「敷葉遺構」の盛土遺構S W62、S W75などから構成され、盛土の状況は地点によって大きく異なる。

護岸材とみられる長さ4～5 mの大形樹木は、5本が出土したが(第51図)、うち東側で出土した護岸材Eが原位置を保つ。西側で出土した4本(護岸材A～D、S X72)のうち、護岸材Bは、護岸材Eとおおよそ直線上にならび、原位置を大きく移動していないとみられるが、護岸材A・Dについては、集積している状況がみられる(第50図)。護岸材BとEは東西に列状にならび、その間に盛土遺構S W62が構築され、一帯の護岸施設を構成していたと考えられる。

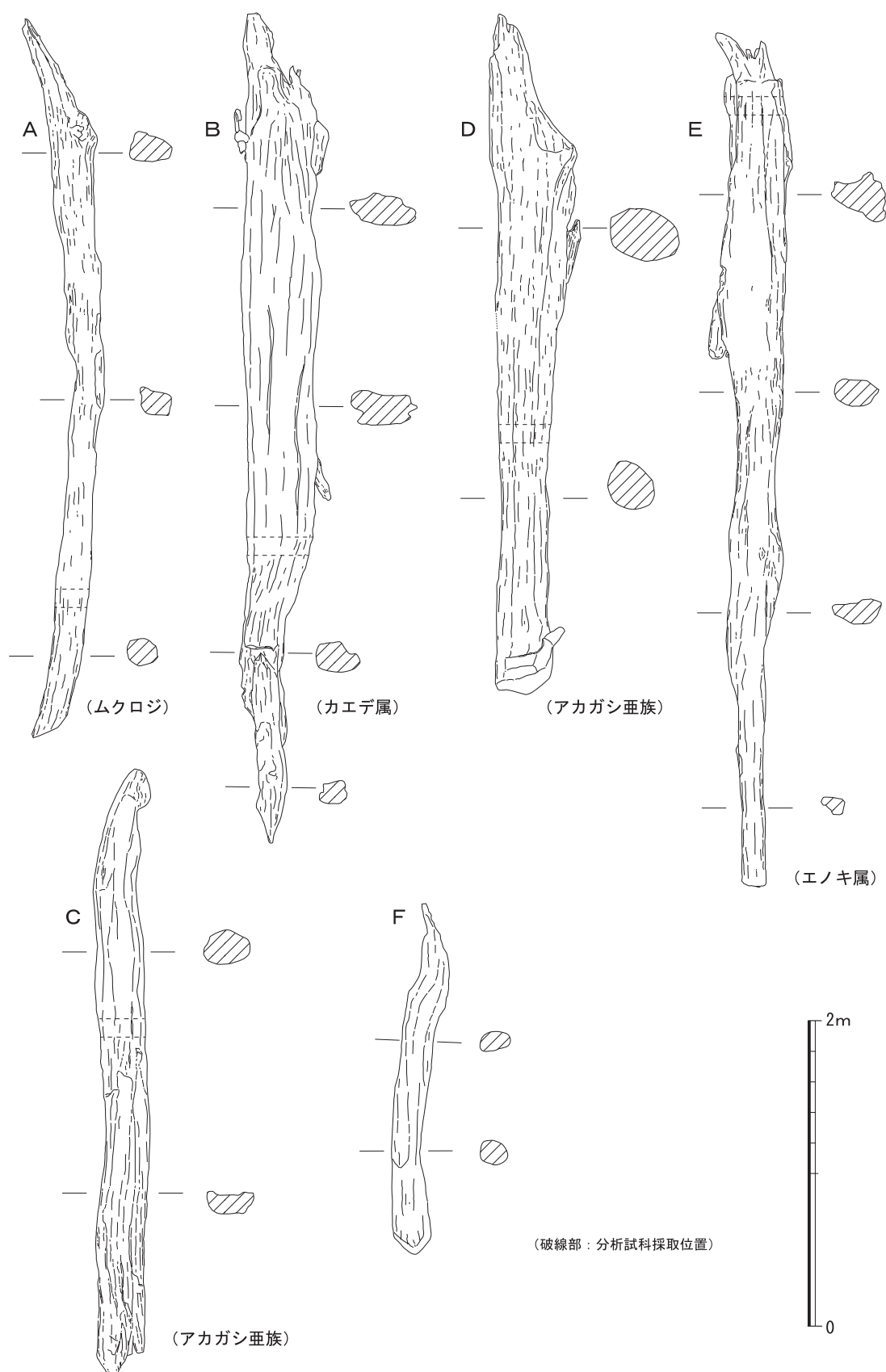
S W62の東側で検出した、大形樹木(護岸材E)を枕木とする盛土遺構S W71は、前述したように、大形護岸材を川底の基底に据え、後方に粗朶等を用いて固定し、上層に盛土をして構築したものである。上層は緑灰色粘土を用いて硬く固め、攻撃面を保護している(法面覆土)。張り出し状の盛土層であるS W62は、いわゆる「敷葉遺構」^(注27)とされる盛土部分であり、上面の構造材として用いられた横木のレベルで高さ約0.7～0.8mを測り、さらに盛土がなされる。こうしたことから、南岸の護岸は、川底の基底から約1 m以上の高さを持つものであったとみられる。

大形護岸材の敷設 流路基盤上に、長さ4～6 mの大形丸太材を流路と平行に列状に検出した。これらは(A～E)、堤状を呈する護岸遺構S L70の基盤を強化し、より強固に構築するために人為的に敷設された護岸材とみられる(3節-(b)参照)。完全に埋設されたものではなく、護岸材の内側の盛土の流出を防ぎ、水衝緩和の役割を担っていたものと推定される。また、いずれも枝打ちされ、一部加工がみられる。



(a-a', b-b' 第53図)

第50図 B地区S D22 護岸施設S L70検出状況図(1/120)



第51図 B地区S D22大形護岸材実測図(1/40)

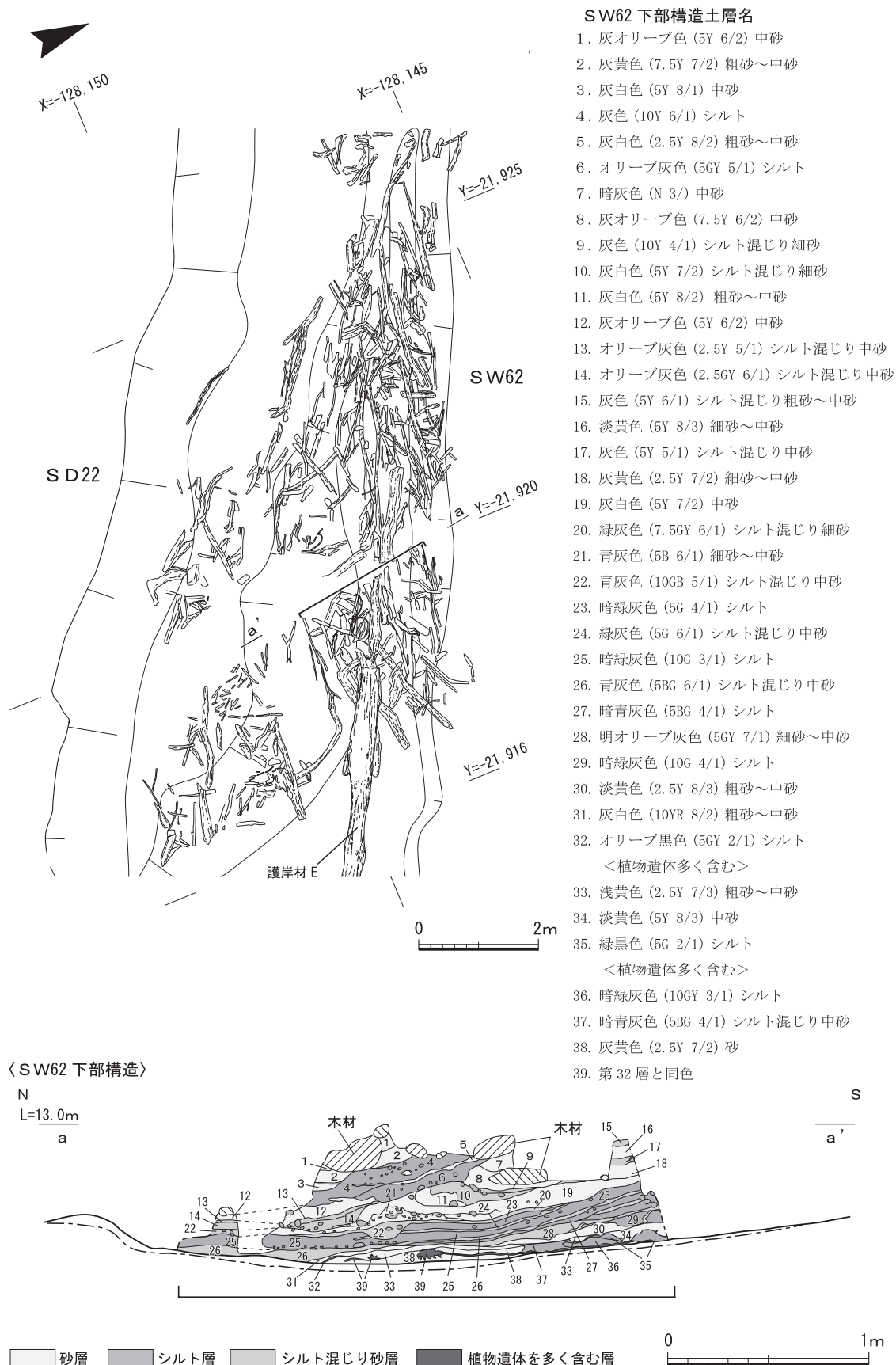
護岸材E 護岸材Eは、護岸遺構S L 70の南東部で検出した護岸材のなかで最も大きな材である。流路と並行に南肩部基盤上に埋置されており、西側で検出した他の護岸材のように（護岸材A～D）上層が古墳時代の層位により攪乱された様相は見られず、前節で詳述したように、設置された原位置を保っているとみられる。護岸材Eは、長さ5.6mを測り、幹径は基部周辺で残存する最大径35cmを測る。基部側は、根張りの一部まで含まれ、枝や根張りの多くは丁寧に除去され、自然木を一部加工して用いている。^(注28) 樹種はエノキ属であり、年輪数75本を数える芯持材である。また、幹の一部に虫害によるとみられる径2～3mmの小孔が認められることから、あらたに伐採した樹木でなく、倒木して数年を経た樹木を護岸材として使用している可能性がある。護岸材Eは、設置された原位置を保つと考えられる材であり、護岸工の時期を検討する上で重要な資料であるため、酸素同位体比年輪年代測定（付編1）と¹⁴C放射性炭素年代測定を実施した。放射性炭素年代測定は、加速器質量分析法（AMS法）のウィグルマッチングによる（付編2）。酸素同位体比年輪年代測定では、残存する最外年輪の年代がA D. 1年とされた。また、ウィグルマッチング分析では89–135cal A D（95.4%）とされている。

護岸材A～D 護岸材A～Dは、流路西部で集積するように出土した。A・Dは、根側を下流となる西に向け、Dの西側の一部はAに覆るように出土した。護岸材A・D・Bについては、材の上部や間隙に古墳時代前期の洪水砂層が混じり込み、古墳時代の再掘削の段階に攪乱を受け、設置された当初の位置から移動しているとみられる。ただし、Cは東部で検出した設置当初の位置を保つ護岸材Eと同様に、流路の南岸寄りですべて検出し、基盤上で検出していることから、大きく移動したものではないと推定される。

護岸材A～Dは、一か所に集積しているが、本来は流路の南岸に沿って、東西に並列して設置されていたものと考えられる。A～Dのうち、Cは、上面の一部が古墳時代初頭の層位に接し、基本的には弥生時代中期と推定される層位のなかにあり、南岸の立ち上がり部分で出土していることから、設置された当初の位置をほぼ保っている可能性が高い。また、CとDは後述するように同一樹木とみられることから、大形の材として使用しているDを水流の攻撃面側となる北側の基礎として設置し、その控えにミカン割り状に細く割られたCを用いたと推定する。また、Dについても同様に、幹径が太いDを水流の攻撃面側の基礎として使用し、幹径が細いAは控え材として使用されたものと推定する。

流路の最も西側で出土した護岸材Aは、長さ4.7m、最大径19cmを測る。樹種はムクロジの芯持材で、年輪数61本を数える。護岸材Aと北側に併行して、出土した護岸材Dは、長さ4.5m、最大径27cmを測る。樹種はアカガシ亜族で年輪数20本を数える。Bは、長さ5.5m、最大径33cm、年輪数は70年を数えるカエデ属である。護岸材Bの南側で検出した護岸材Cは、長さ4.0mのアカガシ亜族で、年輪数20本を数える。Cは、Dと同種の樹木で、年輪数も等しく、一本の材を半裁、あるいはミカン割りして使用したものとみられる。

盛土遺構S W 62（第52図） 流路S D 22の南岸に構築された堤（土手）状の遺構である。S D 22の中央南部で検出した南岸肩部の護岸盛土とみられる遺構である。盛土の構築材に樹木・草本・

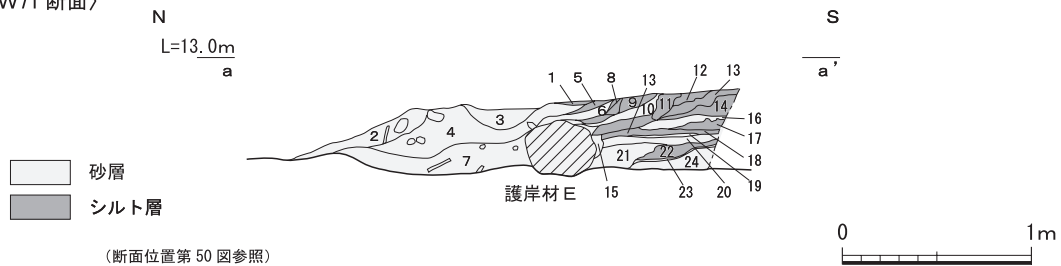


第52図 B地区 S D22 盛土遺構 SW62実測図(1/30、1/100)

木葉等の天然素材が使われており、基底部の規模は、長さ9m、幅は3.5mを測り、高さは中央部で約0.7～1.0mを測る。

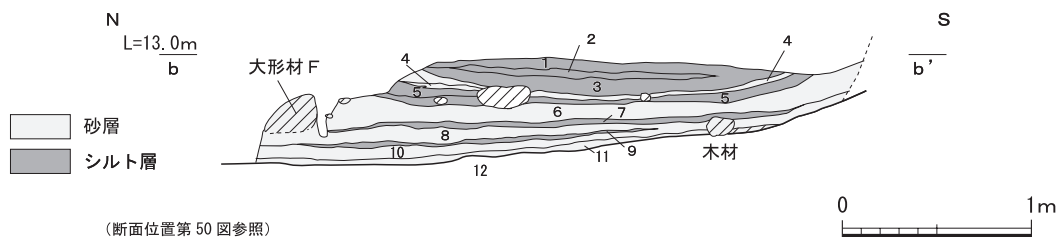
盛土の構造は、まず、流路の基盤を浅く掘り下げ、流路底部の基盤上に、草本類が敷かれたとみられる。北西端では、基盤上に敷かれた草本類が部分的に残存していた(図版98・106)。全体には、草本類、木葉、木片等の有機物を含むオリブ黒色シルト層が最下層に確認され、この層位の上位に、層厚約0.3～0.4mの暗緑灰色シルトと灰白色砂層の互層が堆積する。これらの層位

〈SW71 断面〉



- | | |
|---|--|
| 1. 灰オリブ色 (7.5Y 6/2) シルト〈全体に均質〉 | 14. オリブ黒色 (7.5Y 3/1) シルト混じり極細砂
〈13層に近似、灰色砂不規則に含む〉 |
| 2. 灰色 (7.5Y 5/) シルト質極細砂 | 15. オリブ灰色細砂 |
| 3. 灰色 (10Y 6/1) 中砂～粗砂 | 16. 灰白色 (7.5Y 7/1) 粗砂 |
| 4. 灰色 (10Y 6/1) 中砂〈細かな植物遺体を多量に含む〉 | 17. 灰色 (10Y 5/1) シルト〈植物遺体含まず〉 |
| 5. オリブ灰色 (10Y 4/2) シルト | 18. 灰色 (7.5Y 5/1) シルト質中砂〈植物遺体多量に含む、
種子・木葉・木板など、22層に比べ少ない〉 |
| 6. 灰白色 (7.5Y 8/1) 粗砂 | 19. 灰色 (10Y 6/1) 中砂〈薄く縞状に入る〉 |
| 7. 灰色 (7.5Y 5/1) 中砂〈遺物遺体わずかに含む〉 | 20. 灰色 (10Y 5/1) シルト質混じり中砂～粗砂 |
| 8. 暗オリブ灰色 (2.5Y 4/1) | 21. 灰色 (7.5Y 5/1) 粗砂 |
| 9. オリブ灰色 (5GY 5/1) 粗砂～中砂 | 22. 灰色 (10Y 4/1) シルト混じり極細砂〈植物遺体多く含む〉 |
| 10. オリブ灰色 (10Y 6/2) 極細砂～中砂〈細かな偽礫含む〉 | 23. オリブ黒色 (10Y 3/1) シルト |
| 11. 灰色 (5Y 4/1) シルト混じり細砂〈不規則にマーブル状を呈する〉 | 24. 灰色 (7.5Y 7/1) 粗砂～中砂〈植物遺体含まず〉 |
| 12. 浅黄色 (2.5Y 7/3) 細砂〈不規則に一部マーブル状を呈する〉 | |
| 13. オリブ黒色 (7.5Y 3/1) シルト | |

〈SW75 断面〉



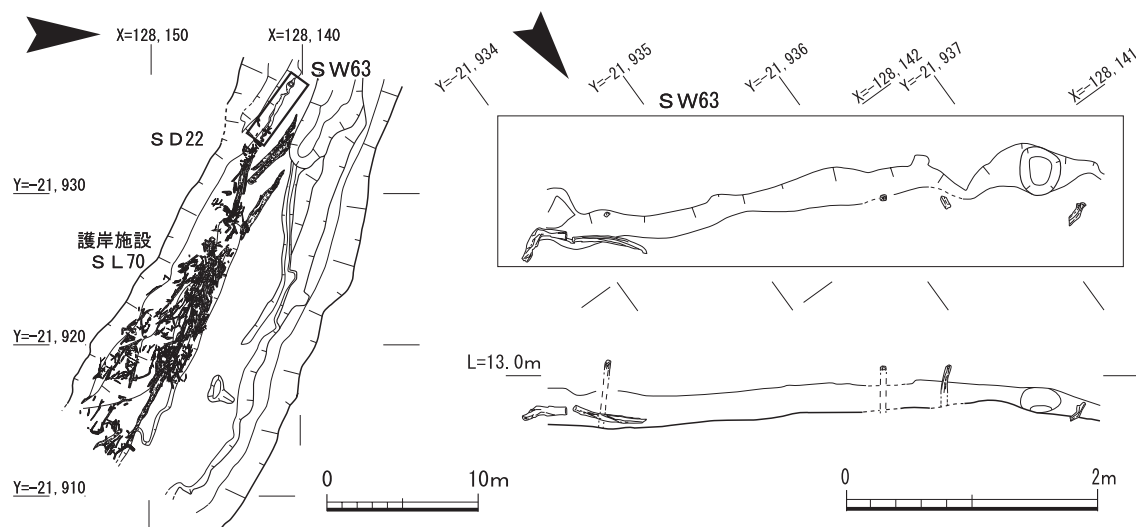
- | | |
|---|--|
| 1. オリブ黒色 (7.5Y 2/2) シルト | 7. オリブ灰色 (2.5GY 5/1) シルト |
| 2. 灰白色 (10Y 7/1) 中砂～粗砂 | 8. 灰白色 (10Y 7/1) 中砂〈一部互層状をなす〉 |
| 3. オリブ黒色 (7.5Y 3/2) シルト | 9. 黒色 (7.5Y 2/1) シルト〈植物遺体含む、木葉などの
薄い植物遺体からなる〉 |
| 4. 白色 (10Y 7/1) 中砂 | 10. 灰色 (10Y 6/1) 中砂 |
| 4+. 灰白色 (10Y 7/1) 粗砂 | 11. オリブ灰色 (5GY 5/1) シルト |
| 5. オリブ黒色 (10Y 3/1) シルト〈植物遺体・木枝等多量に含む、
下層に植物遺体径5～10cm大の材含む〉 | 12. 青灰色 (5BG 6/1) 粘土〈基盤土層〉 |
| 6. 灰白色 (7.5Y 7/1) 中砂 | |

第53図 B地区盛土遺構SW71・75土層断面図(1/40)

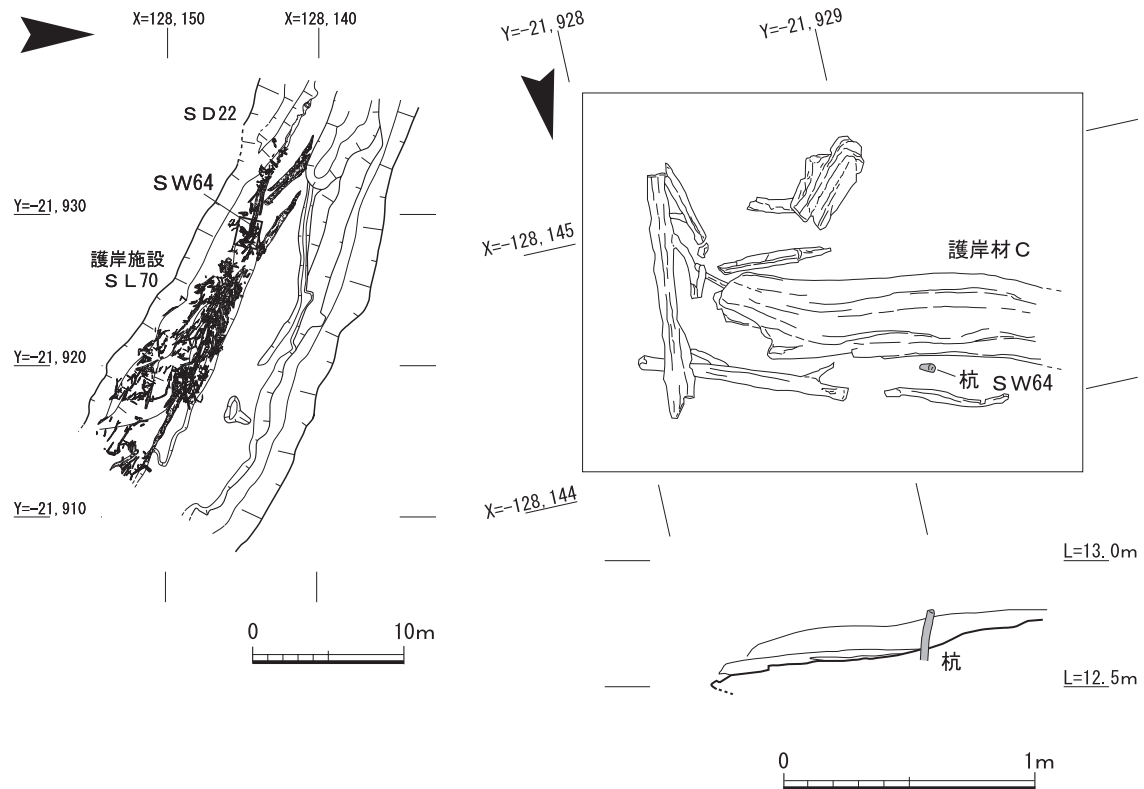
には、細かなシルト塊が含まれ、人為的な盛土であるとみられる。また、径5cm前後の細木が多量に含まれることから、こうした粗朶を埋め込みながら、東西方向に流路の南岸に沿ってシルトと砂質土層を互層状に積み上げたものと推定される。粗朶の多くは自然木であるが、一部に枝が伐採されたものを含み、^(注29)加工がみられるものがある。また、基盤から高さ0.4m以上の上層には、幹径20～30cmのより大形の横木が芯材として用いられており、盛土の構造材とみられる。樹種は、樹種分析の結果、ヒノキ、アカガシ、クリなどが用いられていることが判明している。

S W62の西端の基盤土上で、木葉が薄く圧縮された層位と、基盤土に草本を敷き詰めた層位(第52図)を部分的に確認した。流路底部に敷設材として草本類・木葉を敷くことは、地盤と盛土という土質の異なる層位を分離して、盛土層と軟弱地盤との相互の混合を防ぎ、盛土の軟弱化や滑り破壊を防止し、地盤の強化が図られたと考えられる。また、S W62の盛土下層が透水性の低いシルトと透水性の高い砂層の互層となっている点については、粘土質の層位に砂質土層を組み合わせることによって、排水性が高められ、自然圧密が促進させる効果が得るためと推定される。こうした工法は、前近代までの築堤の基本技術とされるものでもあり、そのなかにさらに粗朶を組み込むことでさらに盛土の安定性や強度の補強が図られたとみられる。以上の点から、S W62はいわゆる「敷葉工法」によって盛土されたとみることができる。S W62は、ほとんど土器を包含していないが、盛土中の構造材として用いられた横木のうち数点を酸素同位体比年代分析、AMS分析を実施し(付編2・3参照)、おおよそ弥生時代中期後半に比定される大形護岸材を用いた護岸の構築時期と同様な年代値を得ている。

盛土遺構 S W75 (第53図) 4区南西で検出した盛土遺構である。護岸材Eの東で、東西は東壁まで3m以上、南北約3.5mの範囲で、人為的な盛土とみられる高さ約1.1mのシルトと砂層の



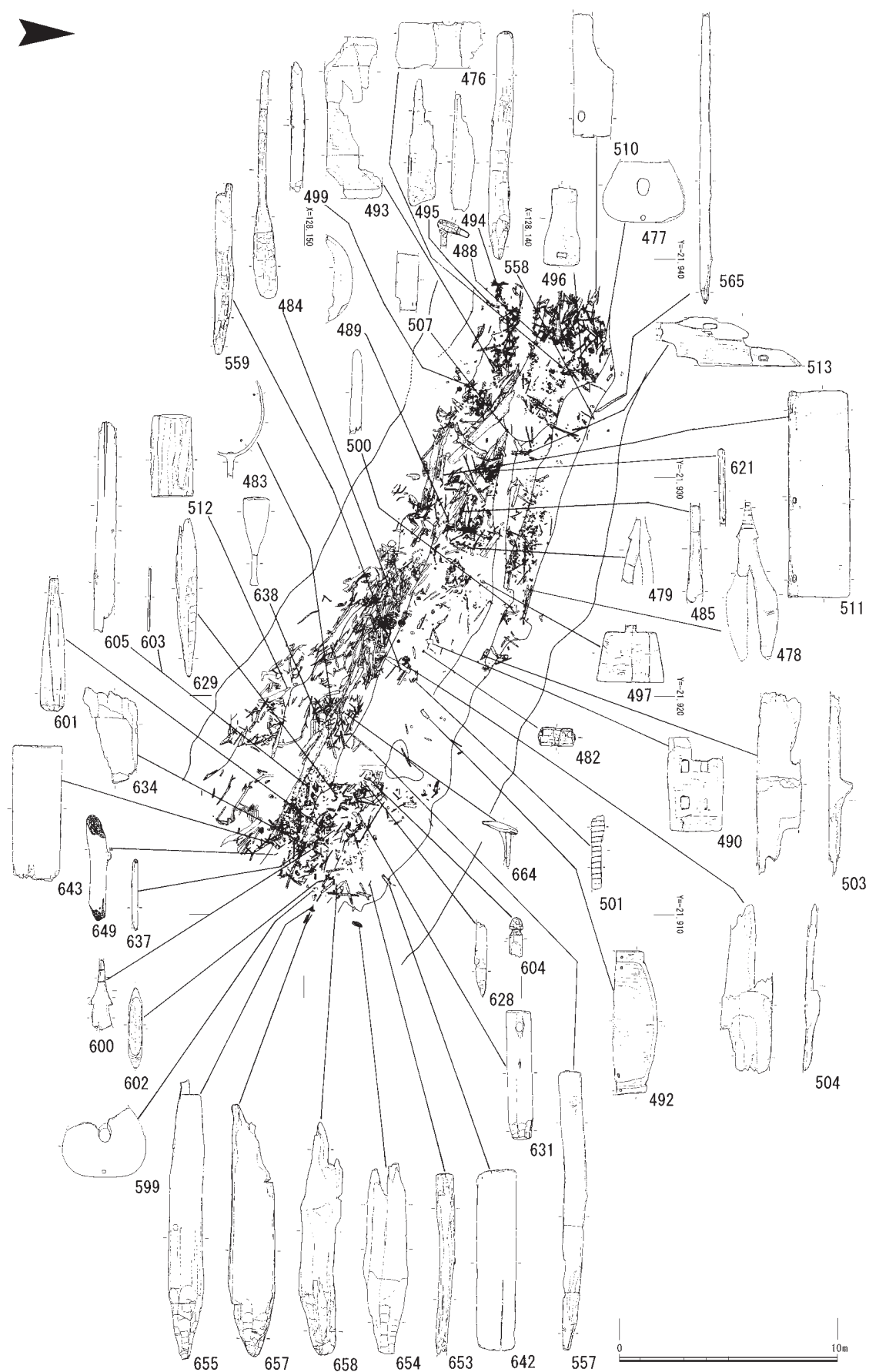
第54図 B地区 S D22 水制遺構 S W63(1/40)



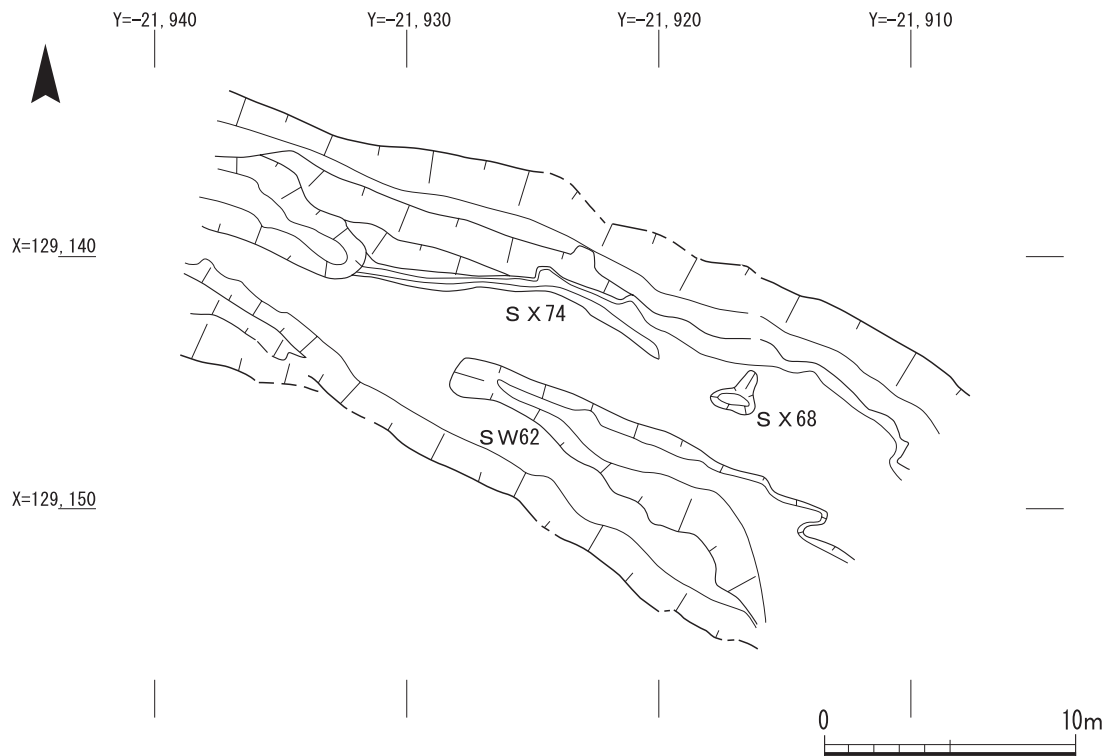
第55図 B地区SD22 水制遺構SW64実測図(1/40)

互層を検出した。浅く掘り込まれた基盤上に、木葉、木片等の有機物や炭化物を含む黒色シルト層(第53図)が堆積し、その上位に木葉などの植物遺体を多量に含むオリブ黒色シルトを検出した。さらに灰白色粗砂を挟み、上層に幅5～10cmのシルトと粗砂の互層が確認される。シルト層中には、径3～5cmの細木が流路に平行して包含される。またシルト層中、粗砂層中には、細かな基盤土に由来するとみられる小粘土塊が含まれ、人為的な盛土であることが明らかである。木葉や木片等の天然素材を盛土の下層とし、護岸の盛土層が強化されたいわゆる「敷葉遺構」と考えられる。盛土層からは、遺物は出土していないが、西側に隣接する護岸材Eの設置に先行する層位にあるため、弥生時代中期後葉の盛土と推定される。

水制遺構SW63(第54図) SD22西部の南岸の立ち上がりで流路に平行して検出した。流路に沿って基盤土を断面「L」字状に掘り下げ、平坦面をつくり、杭を打設したものである。長さ4.5mを測り、深さは0.2mを測る。杭は、一部、流失している可能性があるが、0.6～1.1mの間隔で、不規則に4本の丸杭を確認した。杭の長さは、0.3～0.4mを測る。これらは、古墳時代前期の層位では確認されず、最下層掘削中に検出したことから、弥生時代中期の遺構とみられる。護岸に伴う遺構とみられる。SW63の東側には、約1.5m離れて護岸材Cが出土したが、両者は流路に沿って東西に並び、ほぼ直線上に位置する。護岸材Cは、護岸材Dの控えに埋設された補強材と推定するもので、SW63についても同様に、護岸材設置のための基盤土掘り下げにともなう遺構である可能性が高い。SW63の約1.5m北側の流路中央寄りでは護岸材Aが出土し、こうした材が本来、SW63に固定されていた可能性がある。



第56図 B地区S D22木製品出土状況図



第57図 B地区S D 22完掘状況図(1/300)

水制遺構 S W 64 (第55図) S D 22と平行して南岸寄りで検出した護岸材Cの北東で、Cに接して検出した杭である。杭は、垂直に打ち込まれた状態で検出した。長さ0.3mの丸杭であり、護岸材Cの北東部を固定する杭とみられる。このことから、護岸材Cは設置された当初の位置をほぼ保っていると思われる。

土器溜まり S X 73 (第50図) S D 22南東の盛土遺構 S W 62の南側で検出した土器溜まりである。流路南岸の立ち上がりであり、基盤上で約1mの範囲に集積して出土したものであり、盛土遺構 S W 62に先行する層位にある。瀬戸内系大形甕や凹線文系の小形甕など3～4個体の一部であり、完形の土器は含まれていない。弥生時代中期後葉の土器群である。

S D 22からは、1200点以上の大量の土器や、500点以上の製品や加工木を含む木製品が出土しているが、遺物の約8割以上は古墳時代初頭～古墳時代前期前葉に帰属する。

古墳時代の流路内からは、多量の土器と木製品が出土した。土器は、古墳時代初頭から古墳時代前期前葉(佐山Ⅱ-1型式～佐山Ⅲ-1型式併行)の時期幅があり、とくに古墳時代前期初葉(佐山Ⅱ-4型式併行)に最も出土量が増加する。出土土器には、布留形甕A、S字甕、受口状口縁甕、内彎口縁壺、短頸壺、無頸壺、複合口縁壺、広口壺、有稜高杯、椀状高杯、庄内形甕、単純口縁甕、短頸壺、小形無頸鉢、直口壺、手焙形土器等を含む。搬入土器としては、庄内大和形甕や、小片のため図化し得なかったが、庄内河内形甕が含まれ、ほかに、東海系、吉備系、北近畿系、北陸系、近江系、阿波系、讃岐系、山陰系土器など、遠隔地を含む多地域との交流が認められる。

木製品はすべて下層から出土した。建築部材、網杵、櫓、直柄横鋏、曲柄又鋏、泥除け、匙木製品、杓子形木器、容器脚、木錘、ミカン割材、竪杵、横鋌、斧柄、舟形、剣形、盾、盤、もえ

さし、サルノコシカケ、腰掛、竪杵、掛矢、枷、紡績具、梯子、樹皮製品、槽、板、杭、有頭棒、布巻具、漁労具、火錐臼、等が出土した。さらに、炭化・被火のみられる材、原材・残材・割材が多量に出土し、これらも含めた樹種鑑定を付編4に掲載する。

また、多量の種子が出土し、古環境を復元する上で、極めて良好な資料を得ている。この点については、理化学分析として、巻末に掲載している。種子のなかで注目されるのは、モモ核が多量に出土したことであり、埋土を水洗した結果、560個以上の種子を採取できた。古墳時代初頭の水辺の祭祀に関わる資料として注目される。
(高野陽子)

3) C地区の検出遺構

(1) 調査区の概要と基本層序

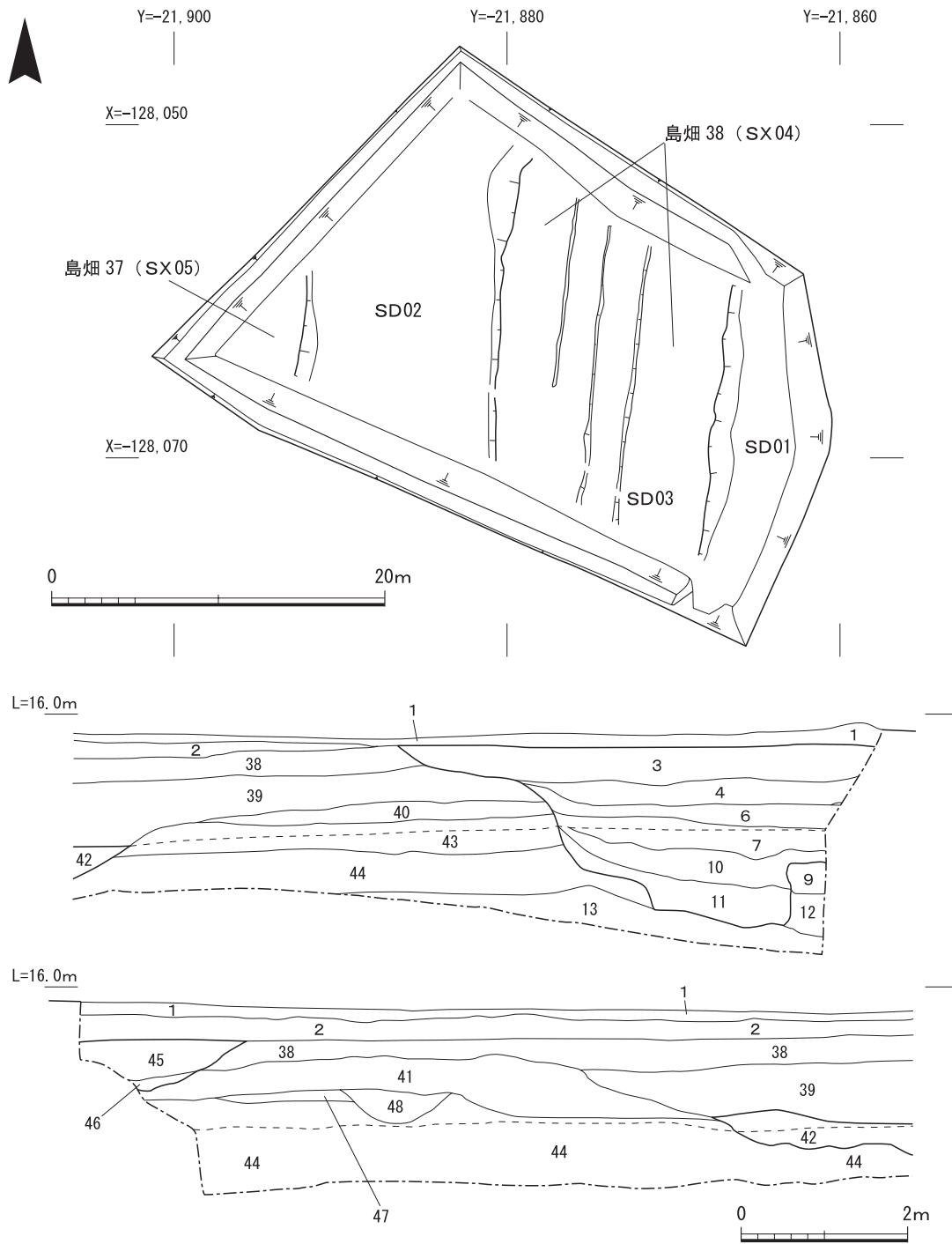
C地区は、B地区の北側に位置する。平成24～26年の各年度に調査区を1か所ずつ設けて調査を実施した。それぞれC1区、C2区、C3区として調査を進めたが、C2区に接してC3区を設けたため、両者は合わせて報告する。

平成24年度に調査を実施したC1区は、C地区の北半部に設定した調査区である。北辺24m、南辺40m、短辺26mの台形状を呈し、北西－南東方向に延びる。現地表下約1mで、島畑2基と溝状遺構2条を検出した(第58図)。平成25年度に調査を実施したC2区は、C地区の南端に設定した調査区である。長辺30m、短辺8mの細長い調査区である。現地表下約1mで島畑2基と溝状遺構2条を確認した。また、島畑上面から約1.0～1.2m下で、下層遺構として、弥生時代の溝1条、土坑1基、小規模なピット3か所などを検出した(第62図)。平成26年度に調査を実施したC3区は、C2区の北側に接して設定した調査区である。長辺24m、短辺23mのほぼ正方形に近い形状を呈する。現地表下約1mで、C2区と同一の島畑1基と溝状遺構2条を確認した。島畑上面から約8m下で、弥生時代よりも新しく、中世の島畑よりも古い溝を1条検出した。さらに約0.5m下げて弥生時代の溝2条を検出した。各調査区とも現地表面は標高15.9m前後である。最終的な調査面積は3地点合わせて1,500㎡である。出土した遺物は整理箱にして6箱である。

基本的な層序をC3区の北壁土層断面(第60図)で説明すると、耕作土と思われる暗オリーブ色砂質土(1層)の下層に、厚さ10～30cmのにぶい黄色ないし灰オリーブ色の砂質土など(2・6層など)がある。この下層のうち、西側では新しい島畑の可能性があるにぶい黄色砂質土(16層)以下、オリーブ褐色砂質土(19層)、黄褐色砂質土(23層)などが堆積する。23層の下層で最古段階の島畑を確認した。一方、東側では、厚さ10～20cmほどの黒褐色砂質土(44層)、黄灰色砂質土(45層)、褐灰色砂質土(46層)などが堆積している。これらが溝状遺構の埋土を形成している。

(2) C1区の調査

島畑38(SX04)(第58図) 調査区東半部で検出した(J4-o17区ほか)。南北方向の島畑である。島畑の断面観察(第58図)によると、基盤層である暗オリーブ褐色微砂(44層)を整形して島畑を形成している。この上部に部分的な盛土の可能性がある暗オリーブ褐色微砂(47層)や暗褐色微砂(43層)が見られる。この上部から素掘り溝が掘られていることから、43層上面が最初期の島畑と考え



- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1 オリーブ黒色 (5Y2/2) 細砂土〈表土〉 | 12 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 粘質土〈地山漸移層〉 |
| 2 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 細砂土〈表土〉 | 13 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粗砂 |
| 3 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細砂土〈SD01埋土〉 | 38 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂 |
| 4 灰色 (5Y4/1) 粘質土〈SD01埋土〉 | 39 明褐色 (7.5YR5/6) 微砂 |
| 6 オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 微砂〈SD01埋土〉 | 40 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粘質土〈島畑〉 |
| 7 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 微砂〈SD01埋土〉 | 41 暗オリーブ色 (5Y4/4) 粘質土 |
| 9 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粘質土〈微砂混じる〉 | 42 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘質土〈SD03埋土〉 |
| 10 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 微砂〈SD01埋土〉 | 43 暗褐色 (10YR3/4) 微砂〈島畑〉 |
| 11 オリーブ灰色 (5GY6/1) 粘質土〈SD01埋土〉 | 44 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 微砂〈地山漸移層〉 |

第58図 C1区島畑37・38平面図(1/400)・北壁土層断面図(1/80)

られる。この上部には暗オリーブ色粘質土(41層)、オリーブ褐色粘質土(40層)、明褐色微砂(39層)、にぶい黄褐色細砂(38層)などの層序が認められる。検出長24m、基部幅15.2m、上面幅13.0m、高さ0.5mである。島畑上面の標高はおよそ14.7mである。島畑上面では、南北方向の素掘り溝S D03を検出した。S D03は島畑のほぼ中央を南北方向に延びる。検出長17.2m、幅2.6m、深さ0.5m前後である。埋土は黄褐色粘質土(42層)である。島畑38では、溝S D03を中心に土師器片や陶器片などが出土した。詳細な時期は不明であるが、周辺での調査成果から中世と推定される。

島畑37(S X05)(第58図) 調査区西端で検出した(J4-o24区ほか)。南北方向の島畑と推定される。島畑の断面観察(第59図)によると、灰オリーブ色シルト(19層)や灰オリーブ色粘質土(20層)などを基盤層とし、オリーブ色シルト(37層)、褐色シルト(33層)、オリーブ褐色微砂などの上面が島畑と考えられる。ただし上部からの攪乱が著しく詳細は不明である。島畑の盛土としては、にぶい黄褐色細砂(38層)や褐色微砂(25・24層)などが盛られていく。検出長6.4m、上面検出幅3.6m、基部検出幅4.8m、高さ0.5mである。島畑上面の標高はおよそ14.2mである。島畑上面で素掘り溝は検出しなかった。遺物は土師器片などが出土した。詳細な時期は不明であるが、周辺での調査成果から中世と推定される。

溝状遺構S D01(第58図) 調査区東辺で検出した(J4-p17区ほか)。南北方向に延びる。溝状遺構の土層断面観察(第58図)によると、基盤層である暗オリーブ褐色粗砂(13層)や暗オリーブ褐色微砂(44層)を掘り込んで形成されている、埋土は、下からオリーブ灰色粘質土(11層)、灰オリーブ色微砂(10層)、暗オリーブ灰色微砂(7層)、オリーブ灰色微砂(6層)、灰色粘質土(4層)などが堆積している。検出長17.2m、検出幅3.6m、深さ0.5m前後である。溝の東半部は調査区外となるが、南北方向に延びると考えられる。断面観察によると、掘り直された可能性と考えられる。遺物は須恵器片などが出土した。詳細な時期は不明であるが、周辺での調査成果から中世と推定される。

溝状遺構S D02(第58図) 調査区西半部で検出した(J4-m21区ほか)。南北方向に延びる。溝状遺構の土層断面観察(第58図)によると、基盤層である灰オリーブ色シルト(19層)や灰オリーブ色粘質土(20層)の上部に形成された最初期の島畑に対して、黄褐色シルト(18層)が堆積する。この上部に暗オリーブ色シルト(36層)の盛土が行われ、灰オリーブ色シルト(17層)や褐灰色細砂(16層)が堆積する。この堆積に対して褐色微砂(24層)の盛土が行われた後には暗灰黄色粗砂(15層)や暗オリーブ褐色粗砂(13層)などが堆積している。このように島畑の盛土と溝状遺構の堆積が交互に繰り返されているようすが確認できる。検出長20.8m、幅12.0m、深さ0.5~0.7m前後である。先述の溝状遺構S D01と同様に、中世以降、ほぼ同じ位置で溝状遺構が存在したのであろう。遺物は土師器片や瓦器片などが出土した。詳細な時期は不明であるが、周辺での調査成果から中世と推定される。

(関広尚世・筒井崇史)

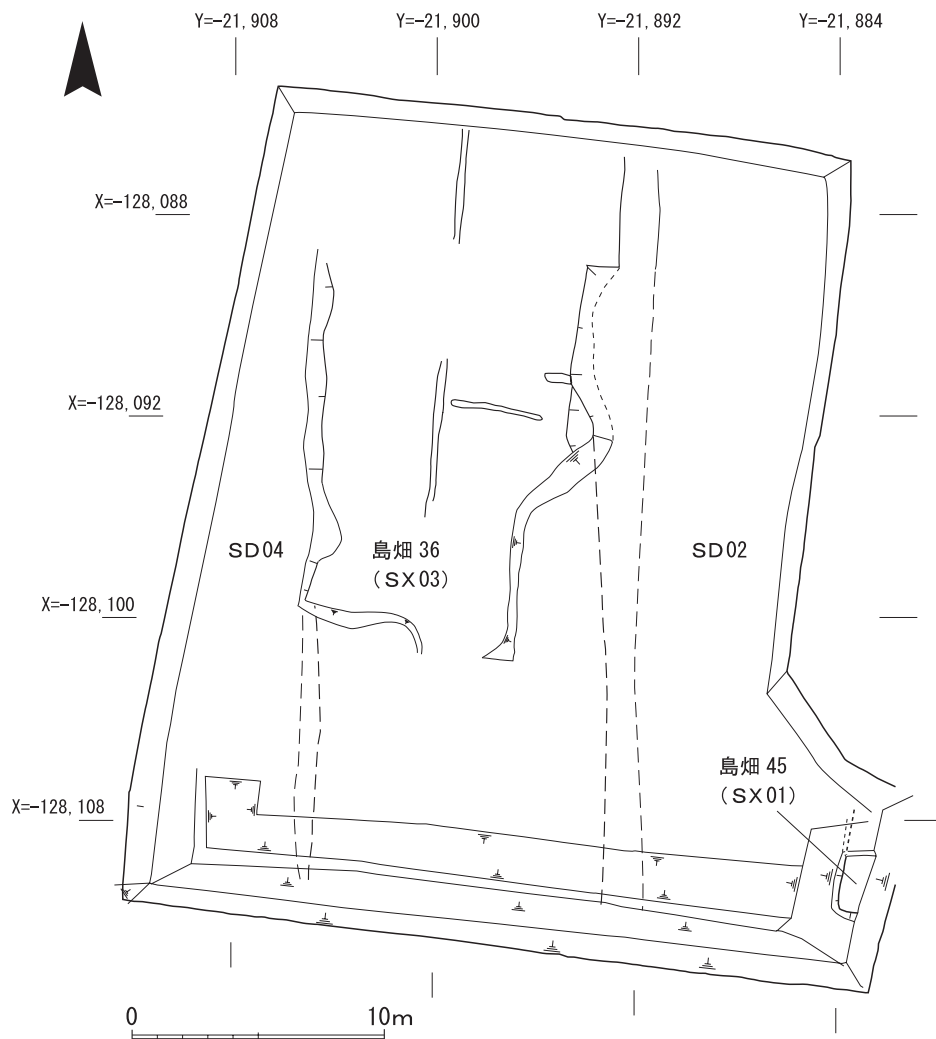
(3) C2・C3区の検出遺構

①上層遺構

島畑36(SX03)(第59図) 調査区の西半部で検出した(J4-v24区ほか)。南北方向の島畑である。島畑の検出長32.1m、基部幅13.7m、上面幅11.5m、高さ0.6~0.7mである。遺物は土師器や瓦器などが出土した。時期は中世前半である。南側のB地区で検出した島畑33・34とは対応しないので、C地区とB地区の間に溝状遺構の存在が想定される。

島畑45(SX01)(第59図) 調査区の南東端で検出した(K4-c21区)。南北方向の島畑と考えられるが、平面的にごく一部を確認したもので、詳細は不明である。島畑は基盤層である灰オリーブ色シルトを整形して形成されている。検出長2.4m、検出幅1.3m、高さ0.3mである。明らかに島畑45に伴う遺物は出土しなかった。詳細な時期は不明であるが、周辺の調査成果から中世のものと推定される。

溝状遺構SD02(第59図) 調査区の東半部(J4-u12区ほか)、島畑36と島畑45の間で検出した。検出長28.2m、検出幅4.4m、深さ0.6m前後である。埋土は黄灰色粘質土や褐灰色粘質土である。



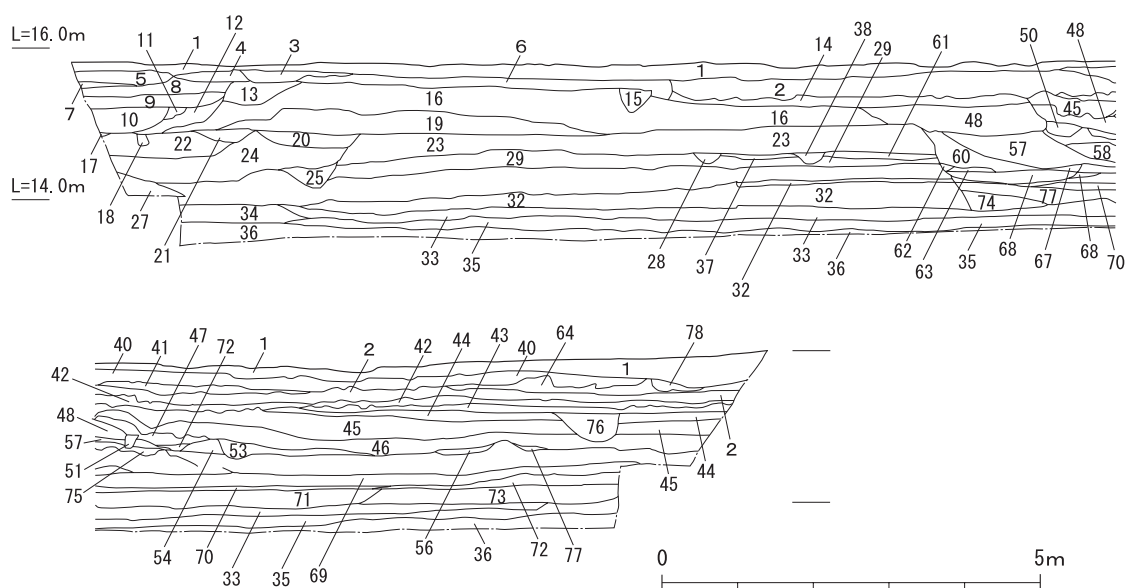
第59図 C2・C3区島畑36・45平面図(1/300)

埋土からは土師器や瓦器等が出土しており、時期は中世前半である。

溝状遺構 S D04 (第59図) 調査区の西端で検出した (J5-v2区ほか)。検出長25.5m、検出幅4.5m、深さ0.5m前後である。遺物は土師器片や瓦器片などが出土した。詳細な時期は不明であるが、周辺の調査成果から中世と推定される。

②中層遺構

溝 S D05 (第61図) 調査区のほぼ中央を北西から南東に向かって延びるように検出した (J4-



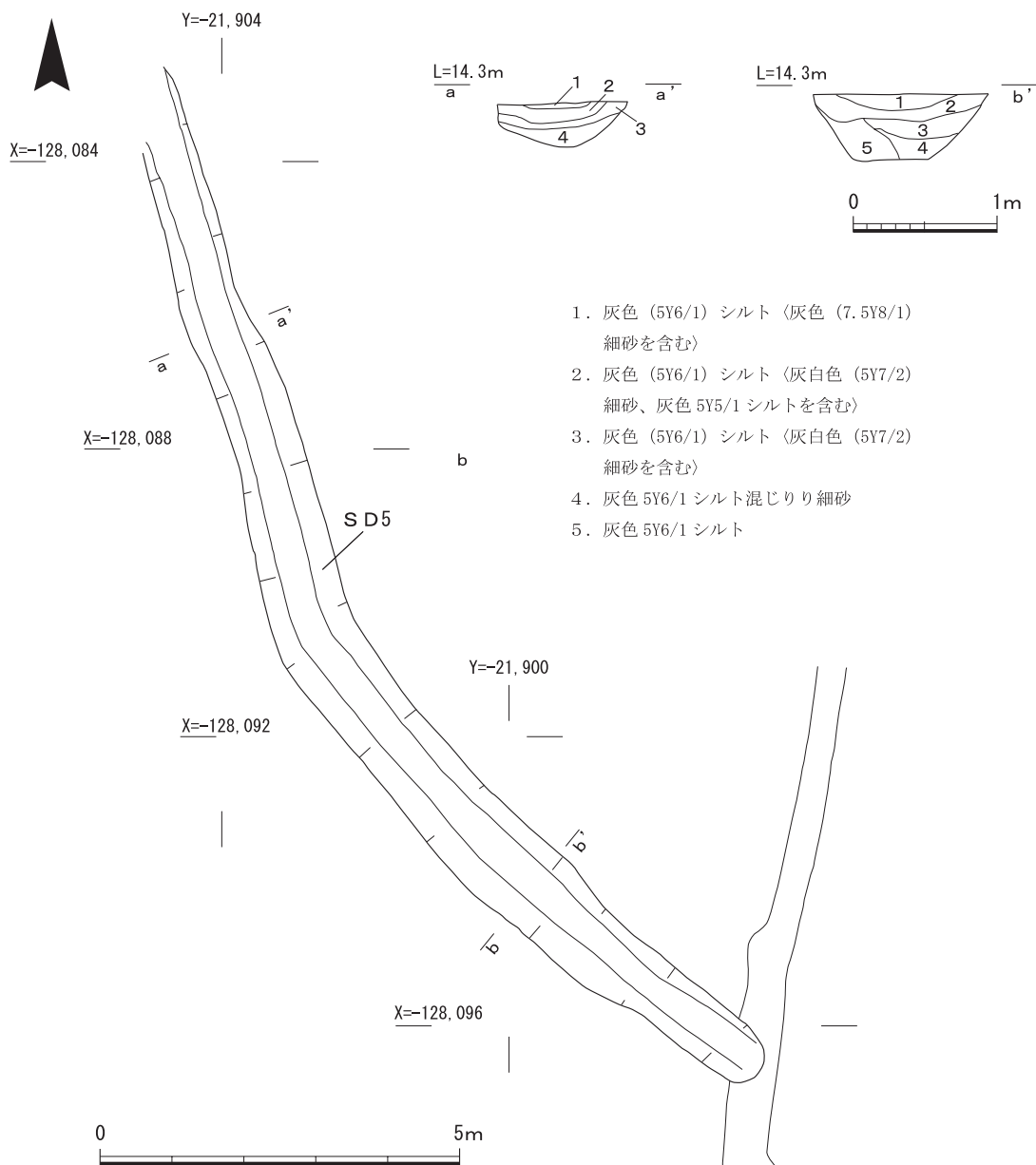
- | | | |
|--------------------------|--------------------------|--------------------------|
| 1. 暗オリーブ色 (5Y4/3) 砂質土 | 26. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) | 51. 褐灰色 (10YR4/1) 砂 |
| 2. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 細砂 | 27. 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト | 52. 褐灰色 (10YR5/1) 砂 |
| 3. オリーブ褐色 (2.5Y6/4) 砂質土 | 28. 暗オリーブ色 (5Y4/4) シルト | 53. 灰色 (5Y4/1) 砂質土 |
| 4. 暗オリーブ色 (5Y4/4) 砂質土 | 29. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂質土 | 54. 褐灰色 (10YR4/1) 砂 |
| 5. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 細砂 | 30. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト | 55. 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質土 |
| 6. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 細砂 | 31. 暗オリーブ色 (5Y4/3) シルト | 56. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂 |
| 7. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細砂 | 32. 灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト | 57. 灰黄褐色 (10YR5/2) 細砂 |
| 8. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質土 | 33. 褐灰色 (10YR4/1) シルト | 58. 褐灰色 (10YR5/1) 砂 |
| 9. 黄灰色 (2.5Y5/1) 細砂 | 34. 暗褐色 (10YR3/1) シルト | 59. 黄褐色 (2.5Y5/6) 砂 |
| 10. 黄灰色 (2.5Y4/1) 細砂 | 35. にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト | 60. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 砂 |
| 11. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質土 | 36. 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト | 61. 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土 |
| 12. 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂 | 37. にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト | 62. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト |
| 13. 黄褐色 (10YR5/6) 砂 | 38. 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂質土 | 63. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト |
| 14. 明黄褐色 (10Y7/6) 細砂 | 39. 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂質土 | 64. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土 |
| 15. 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂質土 | 40. 灰白色 (2.5Y7/1) 砂質土 | 65. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土 |
| 16. にぶい黄色 (10YR6/4) 砂質土 | 41. 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質土 | 66. 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土 |
| 17. 灰色 (5Y4/1) 砂 | 42. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) | 67. 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質土 |
| 18. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 砂 | 43. 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂 | 68. 灰黄褐色 (10YR4/2) 砂質土 |
| 19. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂質土 | 44. 黒褐色 (2.5Y3/1) 砂質土 | 69. 黒褐色 (10YR3/1) シルト |
| 20. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂 | 45. 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質土 | 70. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト |
| 21. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂 | 46. 褐灰色 (7.5YR4/1) 砂質土 | 71. にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト |
| 22. 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂 | 47. 褐灰色 (10YR4/1) 砂質土 | 72. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト |
| 23. 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土 | 48. 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土 | 73. 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト |
| 24. 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂質土 | 49. 黄褐色 (2.5Y5/6) 細砂 | 74. 黒褐色 (10YR3/1) シルト |
| 25. 黄褐色 (2.5Y5/3) シルト | 50. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂 | 75. 明黄褐色 (10YR7/6) シルト |

第60図 C3区北壁土層断面図(1/100)

u2区ほか)。南西端は溝状遺構 S D02によって削平されている。検出長16.5m、幅0.8～1.1m、深さ0.6～0.9mである。溝底はわずかに南東側が低く、水は北西から南東に向かって流れていたと考えられる。溝の断面は逆台形状を呈する。埋土は灰色シルトで分層が可能である。遺物は出土しなかったため、時期は不明である。上層ならびに下層遺構の時期から、古墳時代から古代に収まると推定される。

③下層遺構

溝 S D30 (第62・63図) 調査区のほぼ中央を北西から南東に向かって延びるように検出した(J4-u4区ほか)。後述する溝 S D31と重複し、S D30の方が新しい。検出長35.2m、幅0.5m前後、深さ0.15～0.25mである。溝の断面は逆台形を呈する。埋土は、およそ上層が黒褐色系シルト、中層が灰色系シルト、下層が灰オリーブ色系シルトである。遺物は出土しなかったため時期は、

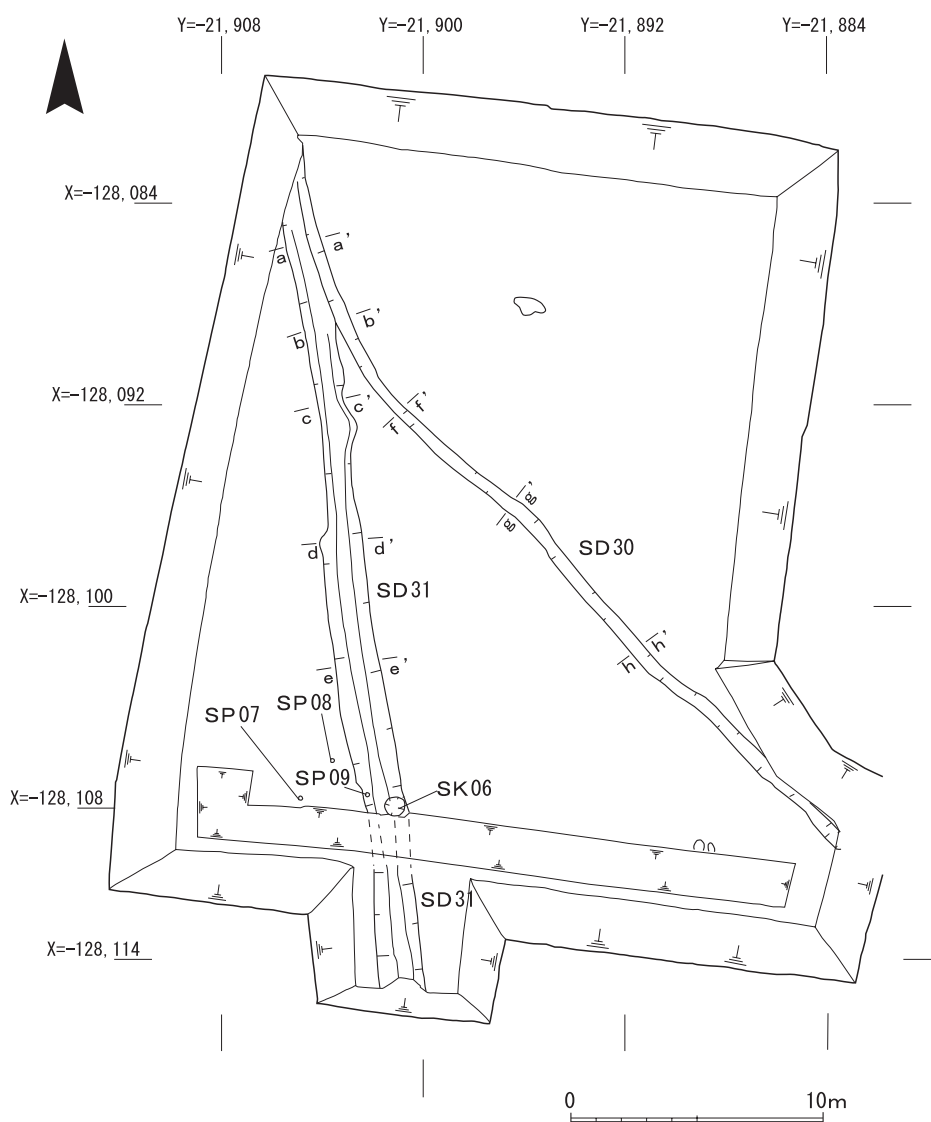


第61図 C 3区溝 S D05実測図(1/100・1/50)

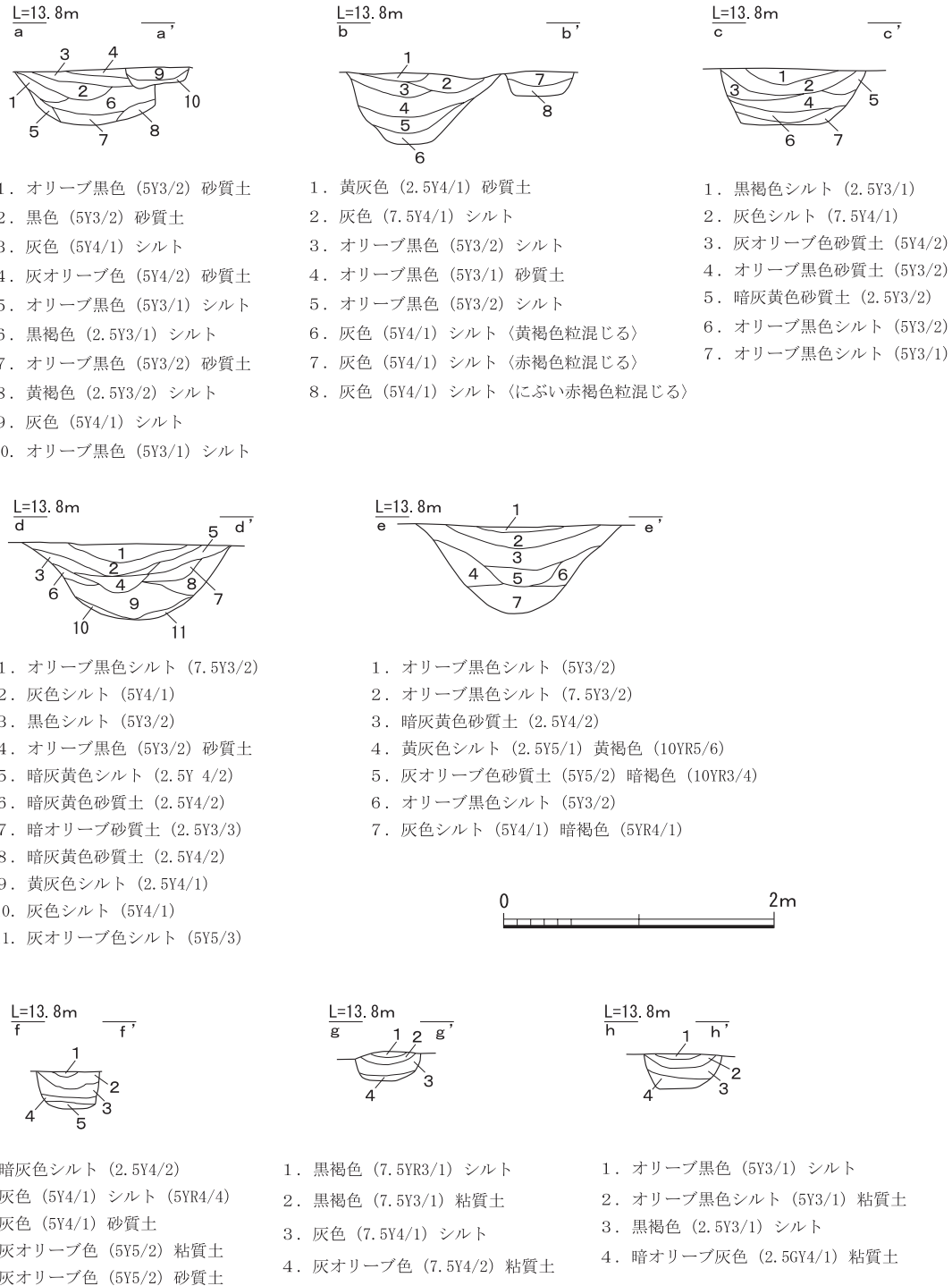
弥生時代中期か、それよりも新しいと考えられる。

溝 S D 31 (第62・63図) 調査区のほぼ中央を北北西から南南東に向かって延びるように検出した(J4-u2区ほか)。上述の溝 S D 30と重複し、S D 31の方が古い。調査区の南辺の一部を南に拡張して、可能な限り S D 31の検出に努めた。検出長32.0m、幅1.0~1.8m、深さ0.4~0.65mである。溝の断面は逆台形ないしやや緩い「V」字状を呈する。B地区の北東隅で検出した溝 S D 18も同一の溝と考えられ、総延長は50mに達する。埋土は上からオリーブ黒色系シルト、暗灰黄色砂質土、灰オリーブ色砂質土、灰色シルト(断面e-e')などである。遺物は南端部を拡張した地点で、弥生時代中期の壺がまとまって出土した。また、C 2 区の調査範囲でも弥生土器の細片が出土した。時期は弥生時代中期後半である。後述する土坑 S K 06は S D 31の埋没後に掘削されている。

土坑 S K 06 (第64図) 調査区の南端、溝 S D 31と重複して検出した(K5-b1・c1区)。平面形はほぼ円形を呈する。直径0.9m、深さ0.7mである。埋土は灰色シルトで分層が可能である。遺物は弥生時代中期の土器が少量出土した。時期は弥生時代中期後半である。



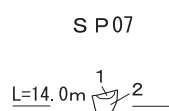
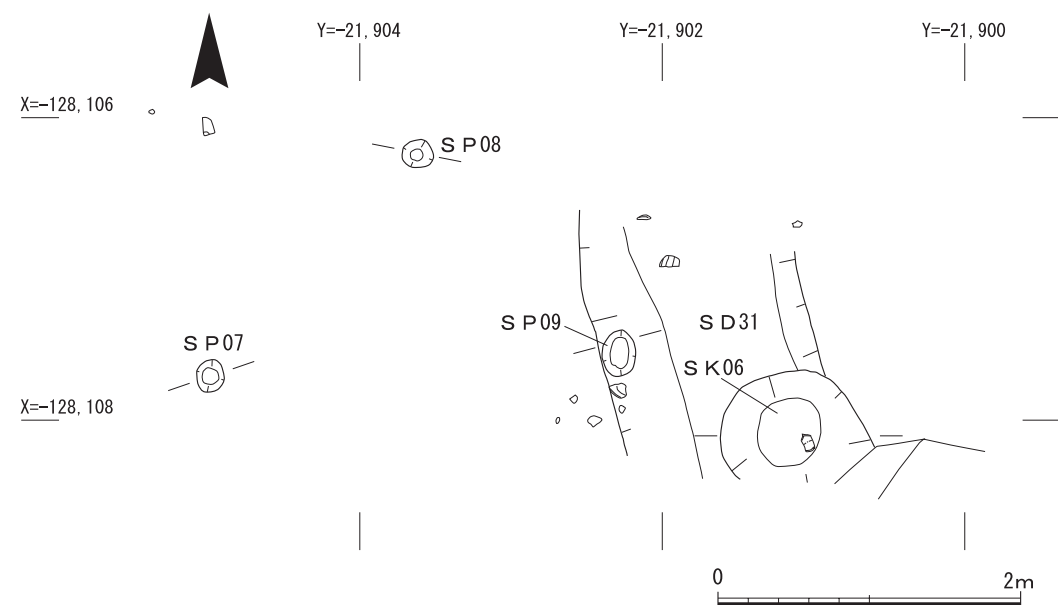
第62図 C 2・3 区下層遺構平面図(1/300)



第63図 C 2・3区溝 S D30・31土層断面図(1/50)

ピット S P07・08・09 (第64図) いずれも調査区の南西部で検出した (K5-b1・b2区)。直径0.15m前後、深さ0.1m前後の小規模なピットである。埋土は上層が褐灰色シルト、下層が灰色シルトである。遺物は土器の細片が出土したものの、詳細な時期は不明である。周辺で検出した遺構と同じく弥生時代中期のものと考えられる。

(筒井崇史)

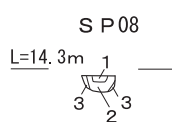


SP07

1. 褐灰色シルト (7.5YR5/1)
灰白色微細砂 (10YR8/2) 混じる
2. 灰色シルト (N6/)
灰白色微細砂 (10YR8/2) 混じる

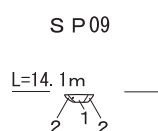
SP09

1. 灰色シルト (N5/)
2. 灰色シルト (5Y6/1)

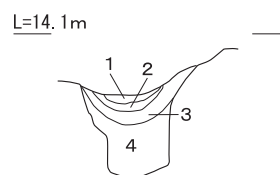


SP08

1. 褐灰色シルト (7.5YR5/1)
灰白色微細砂 (10YR8/2)
多く混じる
2. 灰色シルト (N6/)
灰白色微細砂混じる
3. 灰色シルト (2.5Y6/2)



SK06



SK06

1. 灰色シルト (N6/1) 炭化物多く混じる
2. 灰白色シルト (N7/1) 炭化物混じる
3. 灰白色シルト (N7/1) 灰白色 (7.5Y8/1)
微細砂、炭化物少し混じる
4. 灰色シルト (N41) 炭化物わずかに混じる

第64図 C2・3区土坑SK06ほか実測図(1/50)

5. 出土遺物

下水主遺跡 A～C 地区の調査では、約4,650㎡を対象とし、弥生時代中期から飛鳥時代を中心に、土器や木製品に加えて、さらに石製品、土製品が出土している。多量の土器と木製品が出土した。出土遺物の総量は、整理箱総数約700箱以上を数える。

出土遺物のうち、弥生土器は、B 地区流路 S D 22 と C 地区の溝 S D 31 を中心にして出土し、整理箱数約15箱が出土した。古墳時代の土器は、おもに A 地区の溝349と B 地区の溝 S D 22 から出土し、整理箱数約250箱以上が出土した。また、飛鳥時代以降の土器は、整理箱数約50箱が出土している。木製品は、おもに A 地区の飛鳥時代の井戸と、B 地区の弥生時代中期から古墳時代前期の S D 22 から出土したものである。S D 22 からの木製品の量は極めて多く、一部加工をした材を含めると約500点以上が出土し、山城地域のなかでも過去に例をみない量の木製品が出土した。石製品は、B 地区の弥生時代～古墳時代の流路から、約20点が出土した。石製品には、弥生時代の石鏃や、砥石等の玉作り関係遺物や、古墳時代の滑石製玉類を含む。土製品は、古墳時代～飛鳥時代の漁撈具である土錘が出土している。

(高野陽子)

1) 弥生時代～古墳時代の遺物

(1) 土器

① 土器の形式分類

i) 弥生土器の分類

器種には壺・甕・高杯・器台・鉢・台付鉢・台形土器がある。壺と甕が主体であり、その他の器種は数点が確認されるだけである。今回出土した土器の多くは破片であり、全形を知り得るものは限られている。そのため、分類をするにあたってなるべく多くの資料を網羅的に扱うことができる要素に着目した。また近江系や生駒西麓産などといった他地域産のものも確認されているが、本報告ではこれらも含めたうえで分類を行う。

以下では、まず土器の分類を行ったうえで、今回出土した土器についてその概要を述べる。

a. 壺 壺には広口壺・短頸壺・有段口縁壺・細頸壺・水差形土器がある。小型と中型のものが確認される。

広口壺 口縁部が外反する壺。口縁端部を上下に拡張するものが多く、他にも下方に垂下するものがある。胴部は球形である。口頸部の形態により分類する。

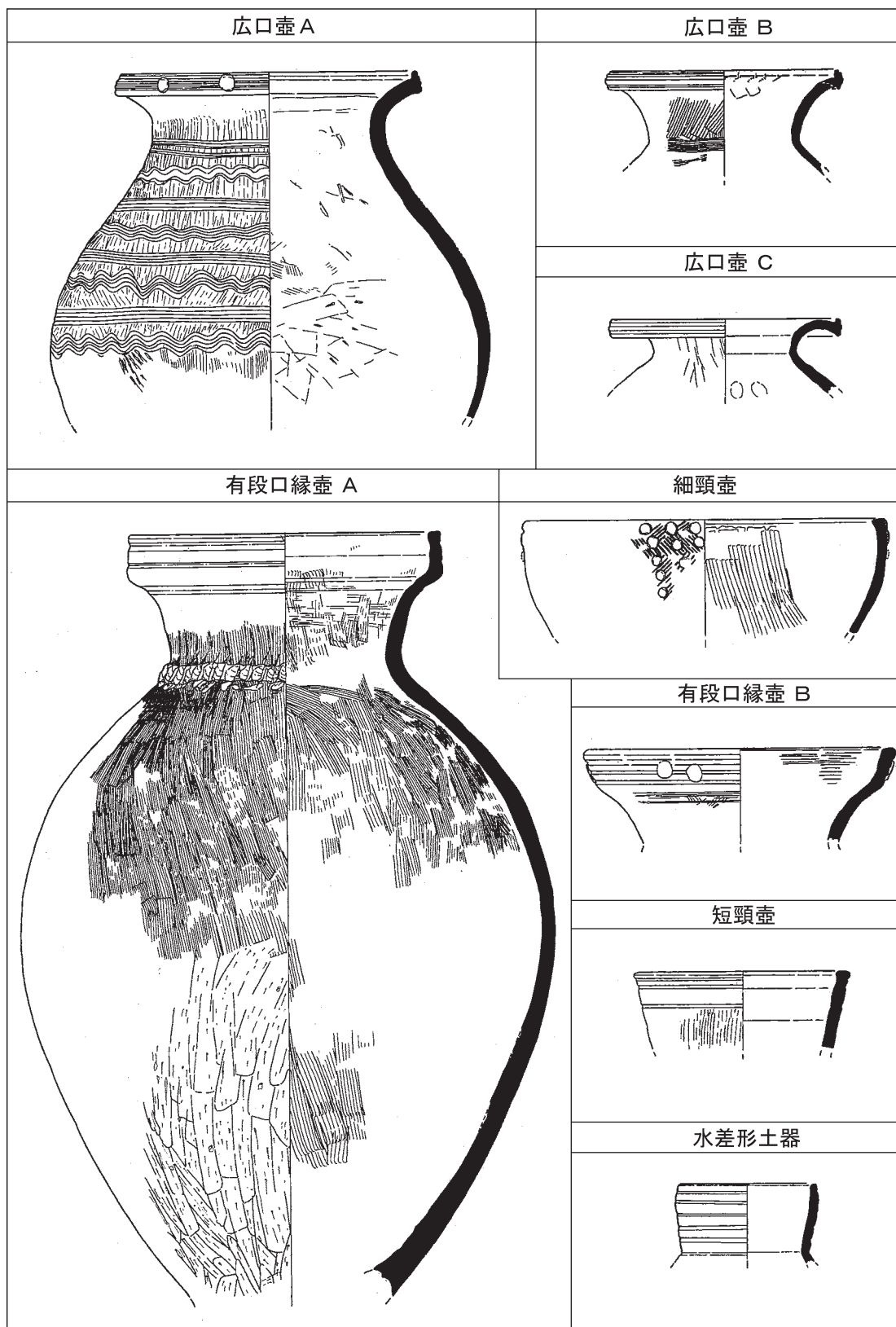
広口壺 A 太い頸部をもち、口縁部は短く外反するもの。頸部から胴部にかけて櫛描直線文や櫛描波状文を施す。

広口壺 B 頸部は締まり、そこから上方に向かってゆるく外反するもの。

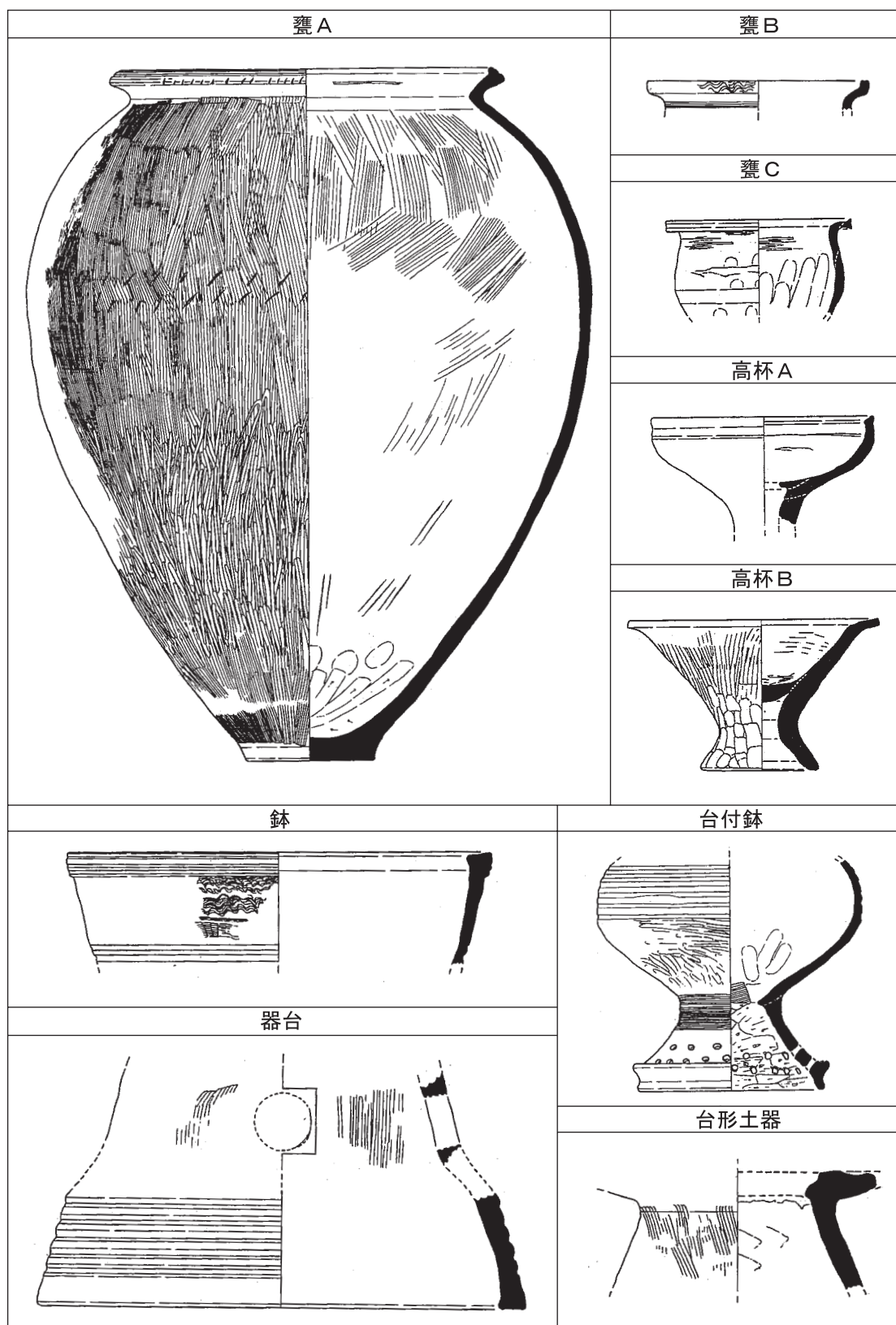
広口壺 C 頸部は締まり、口縁部は強く外反して水平近く広がるもの。

短頸壺 口縁部から頸部にかけて直立し、短い頸部をもつ壺。口縁部に凹線文を施す。

有段口縁壺 直立する受口状の口縁部に倒卵形の胴部をもつ壺。口縁部には凹線文や円形浮文、刻みなどを施す。頸部には突帯を付し、その上に刻みや列点文を施すものがある。全形を知りう



第65図 弥生土器形式分類 1



第66図 弥生土器形式分類 2

るものがわずかなため、口縁部形態により分類する。

有段口縁壺A 口縁部の屈曲が強く、そこから頸部に移行するもの。

有段口縁壺B 口縁部の屈曲が弱く、口縁部から頸部への移行が緩やかなもの。

細頸壺 口縁部は内湾し、細い頸部をもつ壺。櫛描列点文・円形浮文を施す。

水差形土器 口縁部は内湾しながら上方に伸び、挟りをもつ壺。口縁部に凹線文を施す。本来は把手が付くものと考えられるが、本遺跡では確認されていない。

b. 甕 小型・中型・大型すべてが揃う。多くは口頸部の破片であるため、口頸部の形態により大きく2つに分類する。

甕A 口縁部は上下に拡張し、頸部は明瞭な屈曲をもつ。端部に凹線文や刻み、櫛描列点文を施す。いわゆる瀬戸内系の甕である。小型・中型・大型すべて確認される。

甕B 受口状の口縁部をもつ近江系の甕である。小型1点のみの出土である。端部に櫛描波状文を施す。

甕C 口縁部を上下に拡張し、頸部の屈曲は緩やかである。胴部は丸みをもつ。小型のみ確認される。

c. 高杯 全形を知り得るものは1点のみである。口縁部の形態により2つに分類する。

高杯A 椀形の口縁部をもつもの。凹線文を施す。

高杯B 水平に伸びる口縁部をもつもの。

d. 器台 裾部のみの出土である。裾部は内湾しながら下に広がり、端部を拡張する。凹線文を施す。透孔はすべて円形である。

e. 鉢 台のつかない鉢である。段状の口縁部をもち、凹線文や櫛描波状文などを施す。

f. 台付鉢 球形の鉢部にハの字状の脚部が付く。脚部に多数の円孔を穿つ。

g. 台形土器 回転台形土器とも呼ばれるがここでは台形土器と呼ぶ。台部に「ハ」の字状の脚部が付く。1点のみの出土である。

(吉村慎太郎)

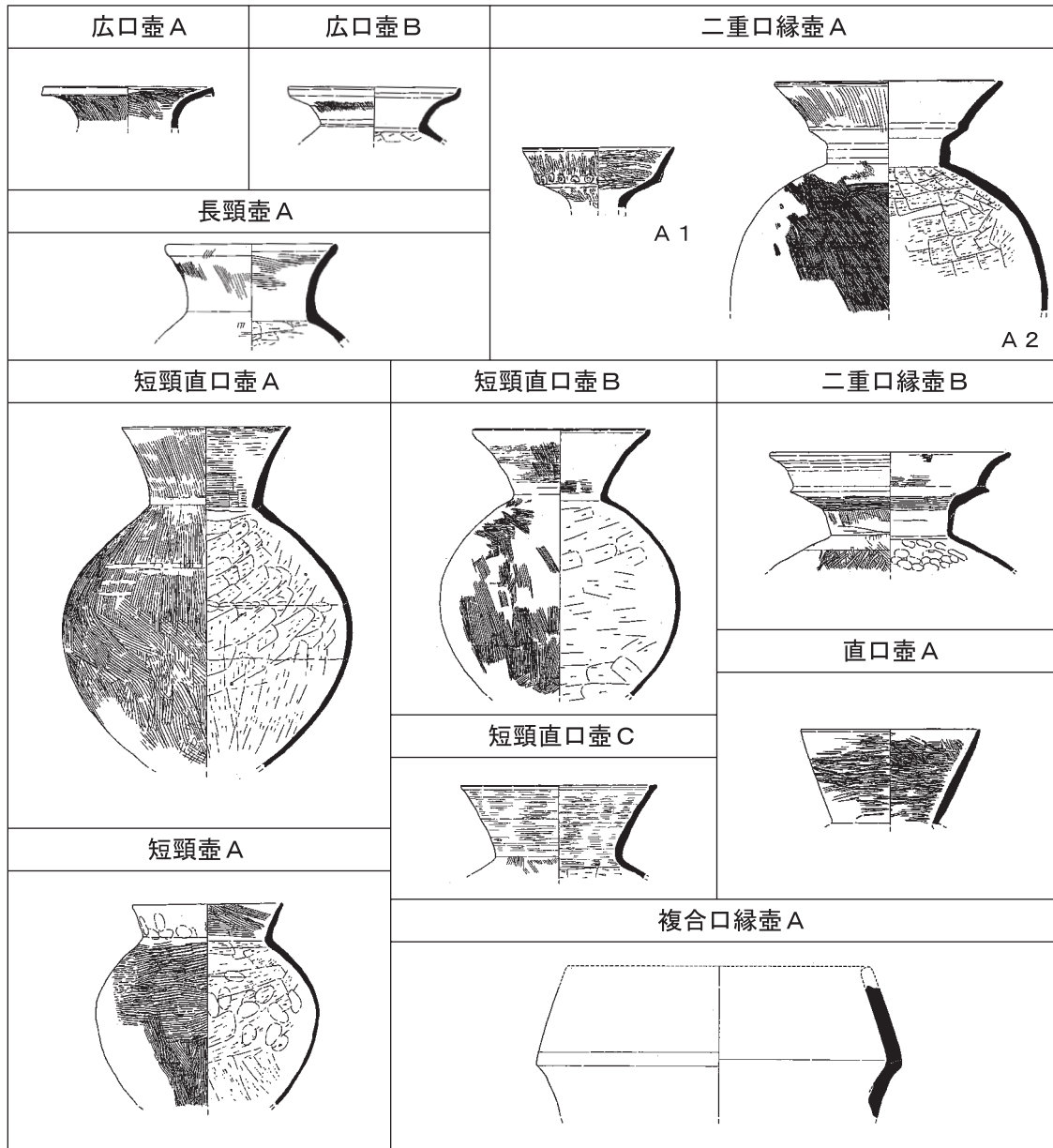
ii) 古式土師器の分類

古墳時代初頭～古墳時代前期の出土土器の分類は、基本組成をなす器種を中心とする。器種組成における外来系土器の扱いについては、山陰系土器など器種によって基本組成の一端を構成するものがあり、分類に加えている。分類にあたっては、土器形式に加え、各属性の系統的な視点を重視したものとする。

a. 壺 壺には、広口壺・二重口縁壺・直口壺・短頸直口壺・短頸壺・有段口縁壺がある。壺の分類のなかで、特に直口壺と短頸直口壺については、拡張する口縁部をなす壺のうち、口縁部の高さが、器高の2分の1以下のものを直口壺とし、口縁部の高さが、器高の2分の1以上のものを短頸直口壺とする。

広口壺

広口壺A 口縁部が大きく開き、端部に面をなすものを広口壺Aとする。広口壺Aのうち、口



第67図 土師器形式分類 1

縁端部の手法によって、垂下口縁をなすもの A 1 とし、口縁端部を立ち上げるもの A 2 とする。

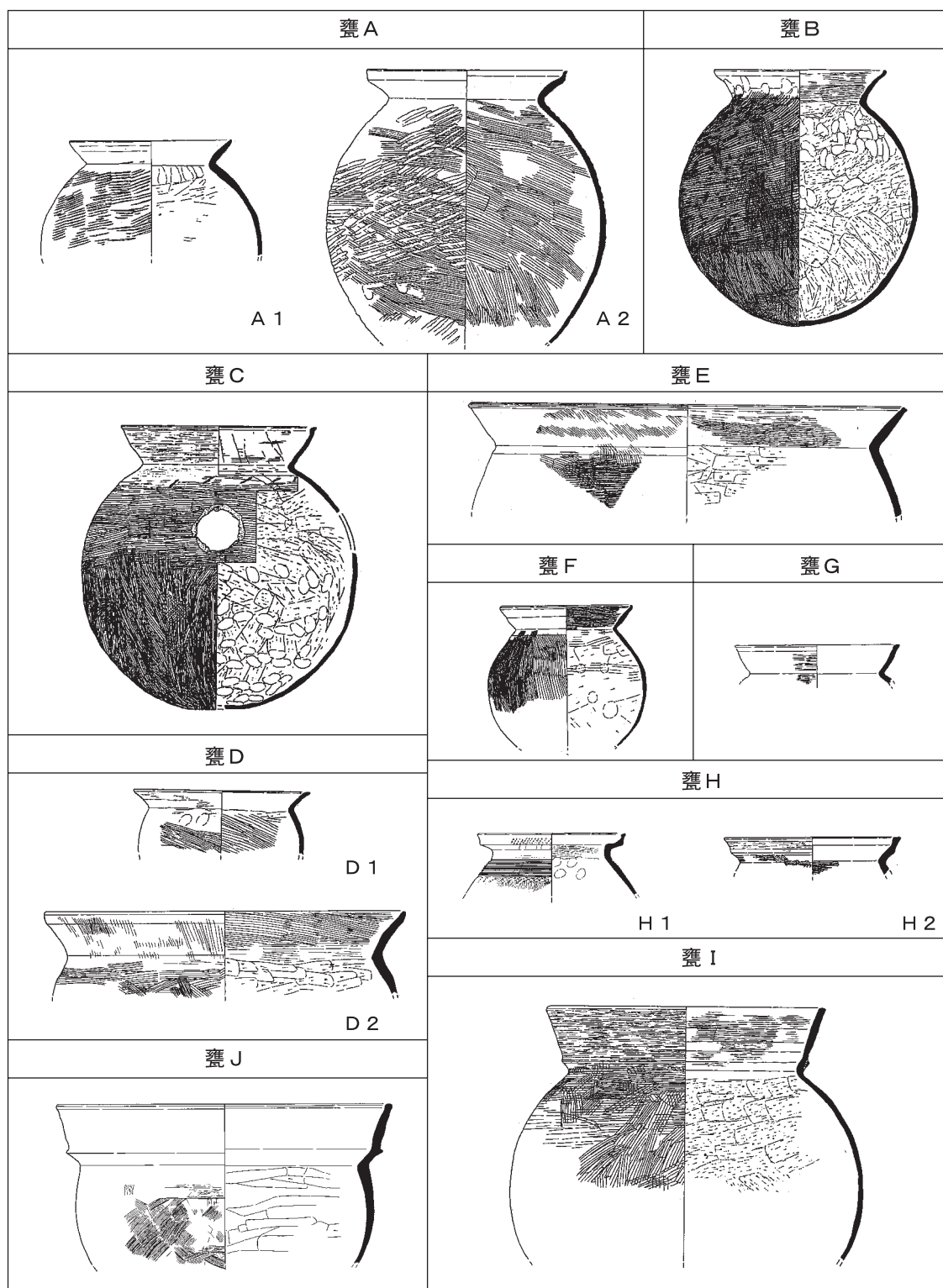
二重口縁壺

二重口縁壺 A 直立気味に立ち上がる頸部に大きく直線的に開く口縁をなす。いわゆる畿内系二重口縁壺である。二重口縁壺 A のうち、庄内系の加飾要素をもつものを A 1 とし、無文の二重口縁壺を A 2 とする。

二重口縁壺 B 直立気味に立ち上がる頸部に大きく外反する口縁をなす。口縁部は、受部の一端に接合し、受部端部は擬口縁状を呈する。外面の基本調整はミガキ、肩部内面に指頭圧痕を連続して施す。阿波系の二重口縁壺である。

直口壺

直口壺 A 口縁端部を丸く単純におさめるものを直口壺 A とする。



第68図 土師器形式分類 2

短頸直口壺

短頸直口壺 A 直線的に伸びる口縁をなし、口縁端部を丸くおさめるものを短頸直口壺 A とする。

短頸直口壺 B やや外反気味に立ち上がる口縁をなし、口縁端部を上方に摘み上げる。庄内系

の短頸直口壺である。

短頸直口壺C 直線的に伸びる口縁をなし、口縁端部を内面下方に肥厚させる。

短頸壺

短頸壺A く字状の単純口縁をなし、口縁端部を丸く単純におさめる壺である。

有段口縁壺

有段口縁壺A 口縁部に段をなし、2次口縁が内傾する大形の壺である。

b. 甕 甕には、いわゆる第V様式系とされる弥生系甕と、庄内形甕・布留形甕のほか、「く」字状の口縁(以下、単純口縁とする)をなす甕、受口状口縁甕、複合口縁甕がある。系統的な把握が必要となるため、調整技法を踏まえた分類を提示する。

甕A 単純口縁をなし、外面をタタキ成形する弥生系甕である。口縁部の形態によって、丸くおさめるものをA1類、端部を摘み上げ、面をなすものをA2類とする。

甕B 単純口縁をなし、口縁端部を摘み上げる甕のうち、外面を細かな条痕のタタキ成形により、内面にケズリを施す庄内形甕を甕Bとする。甕Bのうち、甕の口縁部がやや外反気味に立ち上がり、外面に右上がりの細かな条痕のタタキを施す山城の在地系庄内形甕を甕Bとする。^(注29)内面は、頸部までケズリを施す。^(注30)いわゆる「庄内播磨形甕」と呼称されるものである。B1類には、口縁端部に2つの手法があり、沈線を施すものをa手法、施さないものをb手法とする。

甕C 口縁部が内湾気味に立ち上がる単純口縁をなし、口縁端部を内側に肥厚させる布留形甕である。外面は、肩部に横方向のハケを施すことを基調とし、内面は頸部屈曲部の下方までケズリを施す。

甕D 単純口縁をなすハケ調整の甕である。甕Dは、口縁端部を丸くおさめるD1と、端部を摘み上げ面をなすD2がある。D1は、内面ハケ調整を基調とし、D2は内面ケズリ調整を基調とする。D1は、弥生系甕の系統を引き、D2は庄内系甕の系統を引くとみられる。

甕E 単純口縁をなし、体部外面は右上がりのタタキ成形による甕である。内面にケズリを施す。タタキの条痕は細かく、山城地域の在地系庄内形甕B1類のタタキ成形手法aを踏襲する超大形甕である。

甕F 単純口縁をなし、口縁端部を摘み上げる甕のうち、外面縦ハケ調整による甕である。いわゆる「布留傾向甕」、あるいは「布留影響甕」とされる甕である。

甕G 内湾気味に立ち上がる単純口縁をなす甕のうち、口縁端部をわずかに外方に引き出す甕である。

甕H 受口状口縁をなす近江系甕である。体部内外面ともにハケ及びナデ調整を基調とする。甕Hのうち、外面に直線文や列点文が施される加飾性を伴う甕をH1類とし、無文の甕をH2類とする。

甕I 複合口縁をなす山陰系甕である。倒卵形の体部をなす。体部は斜めハケ調整ののち、肩部に横方向のハケを施す。また、体部内面はケズリ調整を基調とする。

甕J 複合口縁の甕である。体部は、器高が低く、鉢に近い形状をなす。山陰系甕の口縁形態

をなすが、吉備に多く分布する傾向があり、山陰系甕の変容形とみられる。

c. 高杯 高杯は、全体の形状の不明なものが多いが、杯部のみが出土しているものについても、手法によって、系統的な把握ができるものは、分類の対象とする。特に、調整手法となるミガキに特色があり、系統的な把握を行う上で重要な属性となる。縦方向のやや幅の広いミガキは、弥生系高杯の基本調整であり、これをミガキ a 手法とする。また、古墳時代以降、ミガキ手法は横方向が主体となるが、吉備系高杯に由来するとされる畿内系高杯のミガキは幅の細い緻密なミガキであり、一方、山陰系高杯のミガキはやや幅の広いことを特色とする。前者を b 1 手法、後者を b 2 手法とする。

高杯 A 屈曲して斜め上方に直線的に延びる杯部をなし、脚部は裾部で緩やかに大きく開く形態をなす。畿内系高杯にみる裾部の明瞭な屈曲はみられず、庄内系高杯との折衷的な要素をもつ。

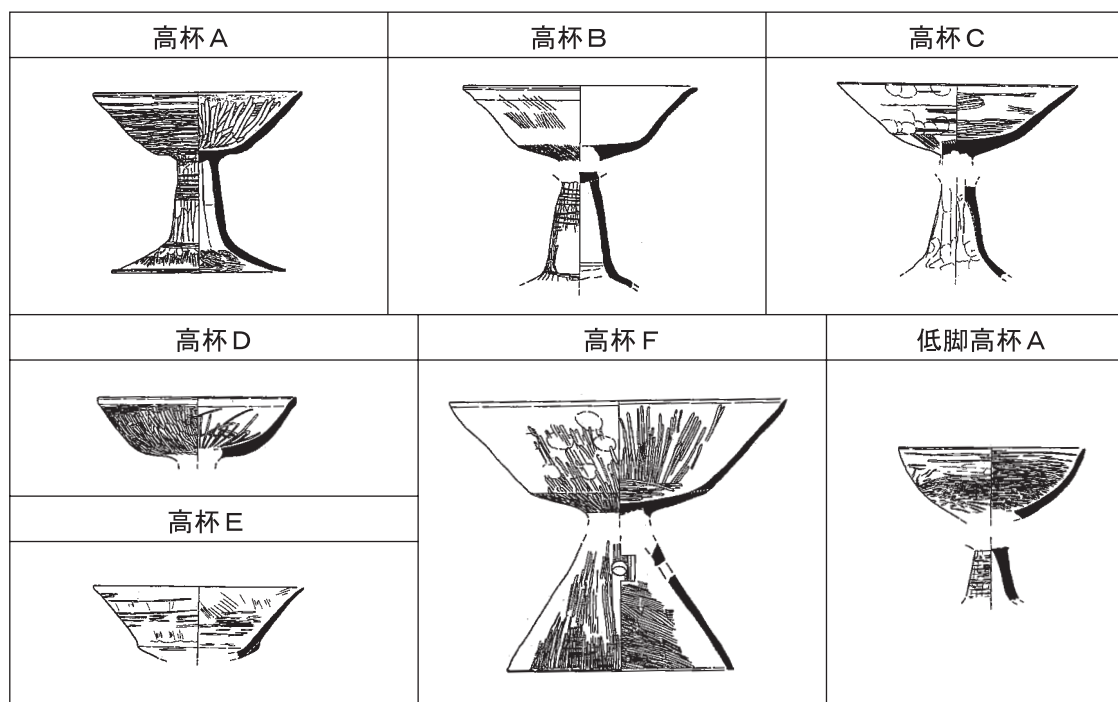
高杯 B 高杯 A と同様な杯部をなすが、脚部は裾部で明瞭な屈曲をなし、大きく開く形態をなす。いわゆる畿内系高杯であり、布留式以降の主たる形式である。

高杯 C 杯部は明瞭な屈曲をもたず、口縁部が緩やかに立ち上がる形態をなすものである。杯部中央外面に刺突痕が認められる高杯である。山陰系高杯であり、ミガキはやや幅広の横方向の b 2 手法による。

高杯 D 杯部に明瞭な屈曲を持たず、やや丸みをもつ浅い杯部をなす高杯である。ミガキ手法は、幅の広い縦ミガキを特徴とする弥生系の a 手法による。

高杯 E 杯部は深く、屈曲して斜め上方に大きく延びる形態をなす。杯部の内外面に横方向の a 手法によるミガキを施す。畿内庄内系高杯に特徴的な形態の一つである。

高杯 F 屈曲して大きく開く深い鉢状の杯部をもち、ハ字状に開く脚部をなす。東海系高杯で



第69図 土師器形式分類 3

あり、杯部内外面ともにミガキ手法は縦方向の a 手法による。

高杯 G 椀状の杯部をなし、裾部が屈曲して大きく開く低脚の高杯である。杯部内外面、脚部外面ともに、ミガキ手法は b 1 手法による。

d. 鉢

鉢 A 単純口縁をなす鉢である。体部外面は、ハケ調整による粗製の鉢である。

鉢 B 受口状口縁をなす鉢である。肩部に櫛描直線文・同列点文を施す近江系鉢である。

e. 手焙形土器

手焙形土器 A 鉢部口縁が、受口状口縁をなすものである。近江系の手焙形土器である。鉢部肩部に櫛描直線文・同列点文を施すものを A 1 とし、蔽部に斜格子文による線刻がみられるものを A 2 とする。

手焙形土器 B 単純口縁をなす無文の鉢部に、無文の蔽部を接合するものを B とする。

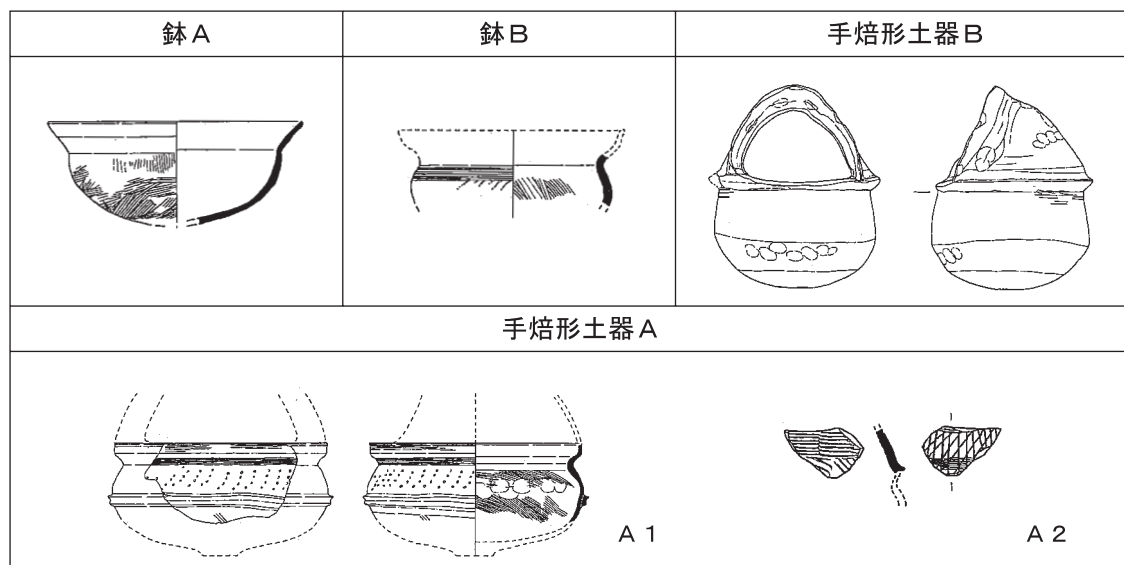
f. 小形器種 壺・鉢等の小形器種のうち、口径が器高を凌駕するものを小形丸底鉢とする。

小形丸底鉢 A 頸部に明瞭な屈曲がみとめられる丸底の鉢のうち、口頸部が長く拡張するものを小形丸底鉢 A とする。口縁部の拡張の度合い、すなわち頸部から口縁端部までの高さ(口頸部高)が器高に占める比率によって、分類が可能である。口頸部高が口径の 2 分の 1 以上のものを A 1 類とし、2 分の 1 以下のものを A 2 類とする。^(注31)

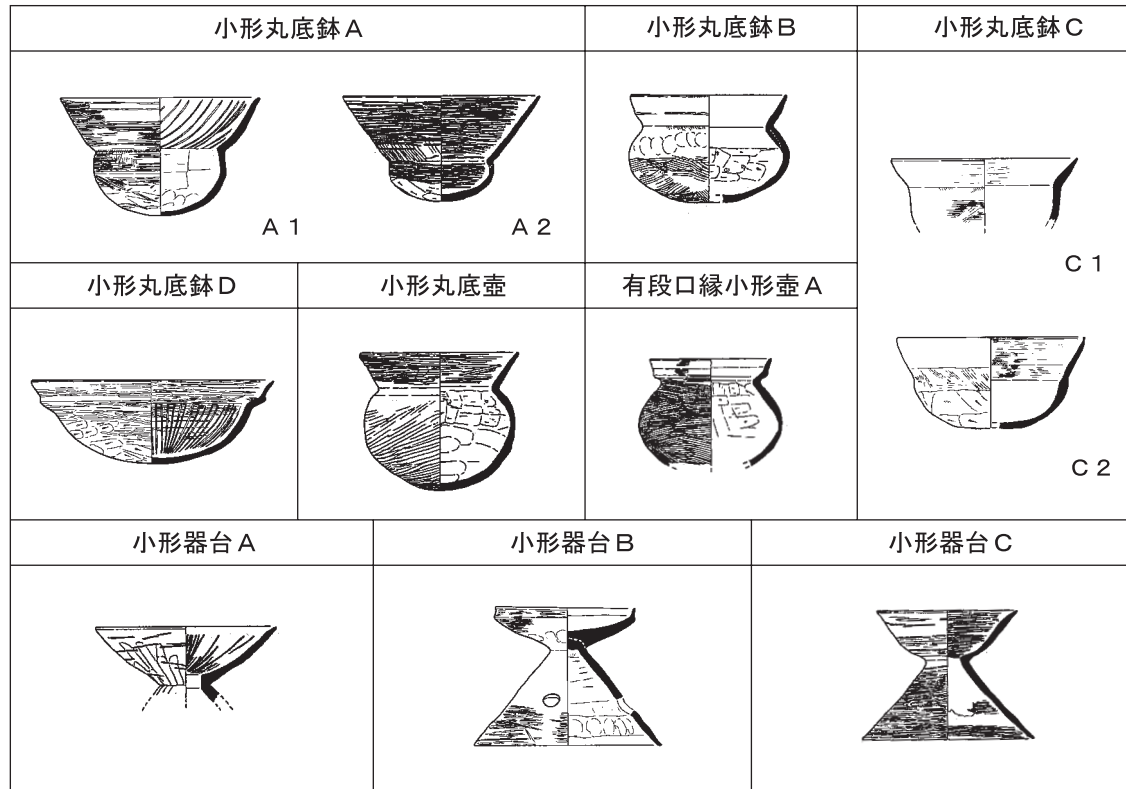
小形丸底鉢 B 頸部に明瞭な屈曲がみとめられる丸底の鉢のうち、口頸部の拡張が短く、3 分の 1 以下のものを小形丸底鉢 B とする。

小形丸底鉢 C 頸部の屈曲は浅く、口縁部が短く立ち上がる鉢である。屈曲が明瞭で、調整はミガキを基調とする精製品を C 1 とし、頸部にハケ調整痕・粘土積み上げ痕を残す粗製品を C 2 とする。

小形丸底鉢 D 有段口縁をなし、体部は浅く扁平な鉢である。体部内外面にミガキを施すこと



第70図 土師器形式分類 4



第71図 土師器形式分類5

を基調とする。有段口縁の受部幅が口縁部よりも長く、上方に拡張するものをD 1 類とし、短くとどまるものをD 2 類とする。

小形丸底鉢 鉢・鉢等の小形器種のうち、器高が口径よりも大きいものを小形丸底鉢とする。

小形丸底鉢 A 器高が低く、やや扁平な体部をなすものを小形丸底鉢 A とする。

小形丸底鉢 B 器高が高く、丸みを帯びた体部をなすものを小形丸底鉢 B とする。

有段口縁小形壺

有段口縁小形壺 A 口縁部に段をなすものを有段口縁小形壺 A とする。

小形器台 受部の形態を中心に分類する。

小形器台 A 大きく斜め上方に開く受部をなす中空の小形器台である。中空となる円孔が、厚みを持ち、面をなすものを小形器台 A とする。受部はやや内湾気味に立ち上がる。

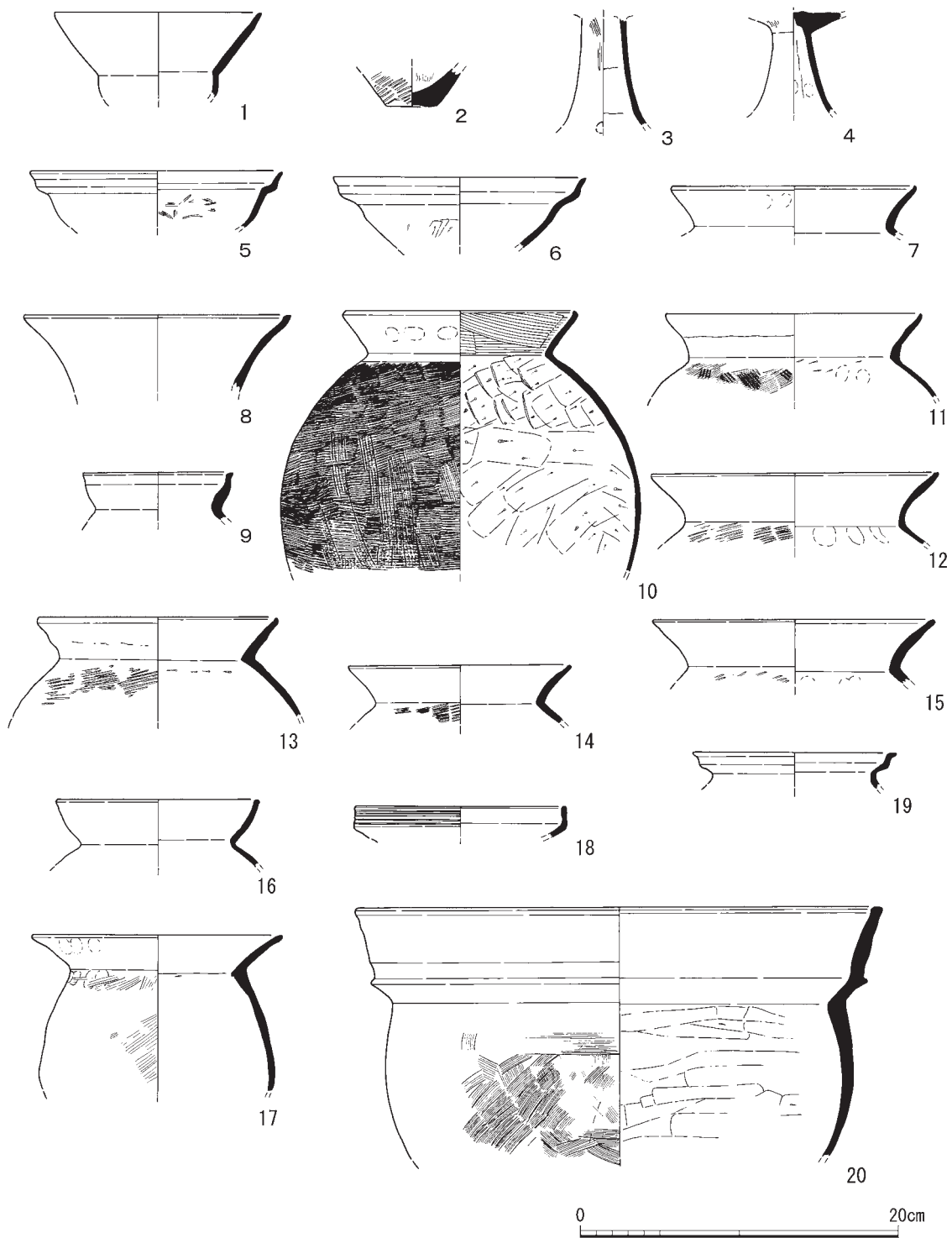
小形器台 B 受部に平坦な面を形成し、口縁端部を立ち上げる小形器台である。

小形器台 C 斜め上方に立ち上がる受部をなす中空の小形器台である。中空となる円孔に厚みをもたないもので、布留式期に定式化するいわゆる「X」字形の小形器台である。

(高野陽子)

② A 地区出土の土器 第2・6次調査

柱穴 S P 68 (第72図 1) 口縁部が大きく開く小形丸底鉢 A 2 である。口縁内面に一部放射状のミガキが認められる。おおよそ古墳時代前期前葉の佐山Ⅱ式-4 式~同Ⅲ式-1 式に帰属するとみられる。



第72図 出土遺物実測図1 土器(1/4)

1 : SP68 2 : S P 123 3 : S P 163 4 : S P 171 5 : SP177 6 : SP248 7 : SP238 8~20 : SD349

柱穴S P 123(第72図2) 弥生系の甕Aのタタキ成形を施す底部である。底部輪台技法によって作られたものである。古墳時代初頭の佐山Ⅱ式前半に帰属するとみられる。

柱穴S P 163(第72図3) 高杯の脚部である。脚部径は大きく、器壁は薄く、緩やかに裾部が開くタイプとみられる。一部タテ方向のミガキが認められることから、およそ古墳時代初頭の

佐山Ⅱ式に併行する高杯とみられる。

柱穴 S P 171 (第72図4) 山陰系の高杯Cの脚部である。杯部背面中央に刺突痕が認められる。佐山Ⅱ式後半～佐山Ⅲ式前半の古墳時代前期前葉に帰属するとみられる。

柱穴 S P 177 (第72図5) 小形精製器種の有段鉢Dである。内面に一部ミガキが認められる。佐山Ⅱ式後半～佐山Ⅲ式前半の古墳時代前期前葉に帰属するとみられる。

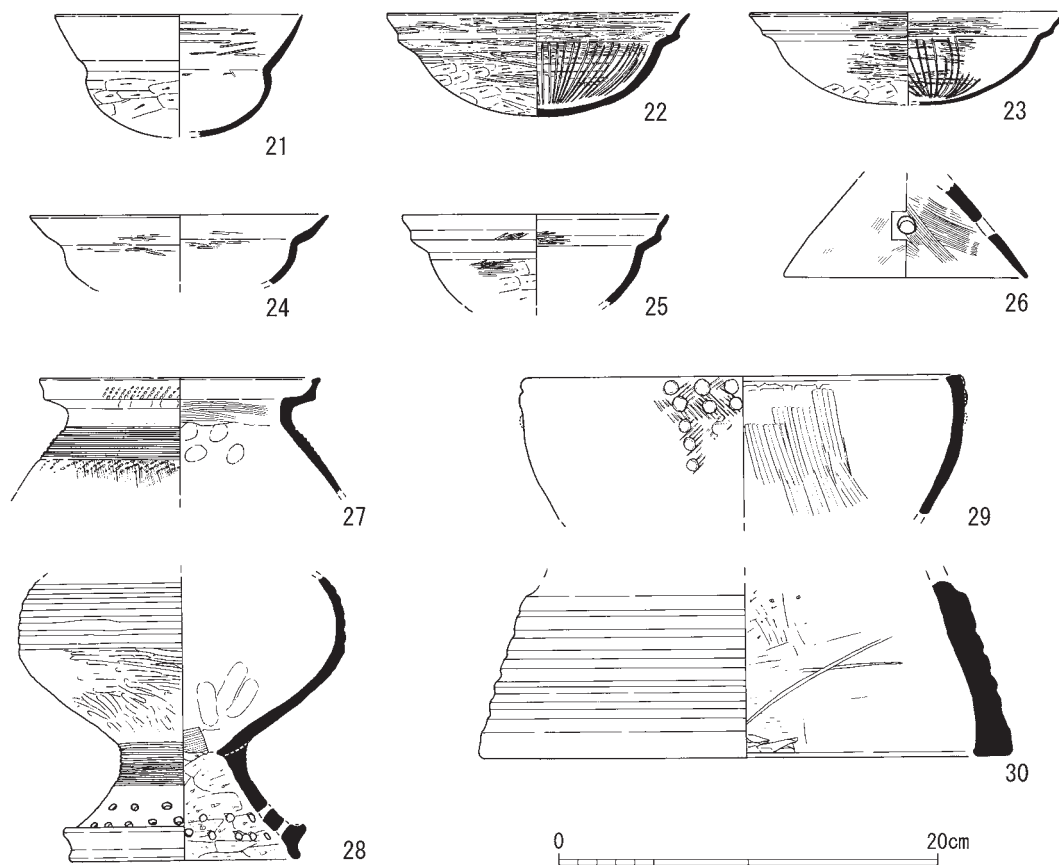
柱穴 S P 238 (第72図7) 庄内形甕の口縁部である。古墳時代前期前葉の佐山Ⅱ式末～同Ⅲ式前半に帰属するとみられる。

柱穴 S P 248 (第72図6) 小形丸底鉢Dの口縁部である。佐山Ⅱ式後半～佐山Ⅲ式前半の古墳時代前期前葉に帰属する。

溝 S D 349 (第72図8～20・第73図21～26) 8は、直口壺Bの口縁部である。9は、口縁端部が受口状を呈する甕の口縁部である。端部が外方へわずかに引き出され、近江系土器の影響を受けた甕とみられる。10～15は、庄内形甕B1である。いずれも、右上がりの細かいタタキ痕を残し、口縁部を緩やかに外反させて立ち上げる山城地域に特有な庄内形甕である。口縁部外面に、粘土接合痕を残す個体が見られる(11・13)。成形時に、口縁部までタタキあげ、一旦乾燥工程を経る弥生形甕にみられる成形手法の影響とみられ、山城地域の庄内形甕の特徴となっている。16は、単純口縁の口縁端部を外方に引き出す甕Gである。内湾気味に口縁部を立ち上げることから、布留形甕から派生した形式と考えられる。17は、ナデ肩の外面ハケ調整の単純口縁甕である。胎土から搬入土器の可能性がある。18は、口縁部に細かな擬凹線を施す吉備系甕である。19は、外面が無文化した近江系甕Hである。この形式の甕は、布留式最古段階からみられるものである。20の甕Jは、山陰系の複合口縁をなす甕であり、布留式古段階の基本組成を構成する器種である。吉備でも多量に生産されるもので、搬入品の可能性が高い。21は、小形丸底鉢A1、22～25は、有段口縁の小形丸底鉢D2である。22・23は、いずれも繊細な筋状の暗文状のミガキを施す。いずれも口縁部受部は短く立ち上がる。26は、小形器台の脚である。溝 S D 349は、庄内形甕が甕の組成の中心である一方、小形丸底鉢が小形精製土器の定式化以降のものであり、布留形甕の派生とみられる甕Gや、無文化した甕Hが含まれることから、おおよそ古墳時代前期前葉の佐山Ⅲ-1型式に比定される資料である。

A地区包含層(第73図27～30) 27は、近江系の甕H1である。口縁部外面に櫛描列点文を、肩部に同直線文・同列点文を施す。近江北部系とされる形態であり、弥生時代後期末～古墳時代初頭に帰属する。28～30は、弥生土器である。28は、A地区包含層中から出土した台付鉢である。体部に5条以上の凹線文を施し、脚部に2段に円形のスカシ孔を穿孔する。脚部端部を跳ね上げる瀬戸内系の台付鉢である。29は、角閃石を多量に含む暗褐色の胎土をもつ河内産の細頸壺である。口縁外面に縦に連珠状の円形浮文を付す。30は、器台の脚裾部である。外面に7条の凹線文を施し、内面に一部ケズリが認められる。やや内湾気味に立ち上がる脚をなす。いずれも弥生時代中期後葉と推定される。

(高野陽子)



第73図 出土遺物実測図2 土器(1/4)

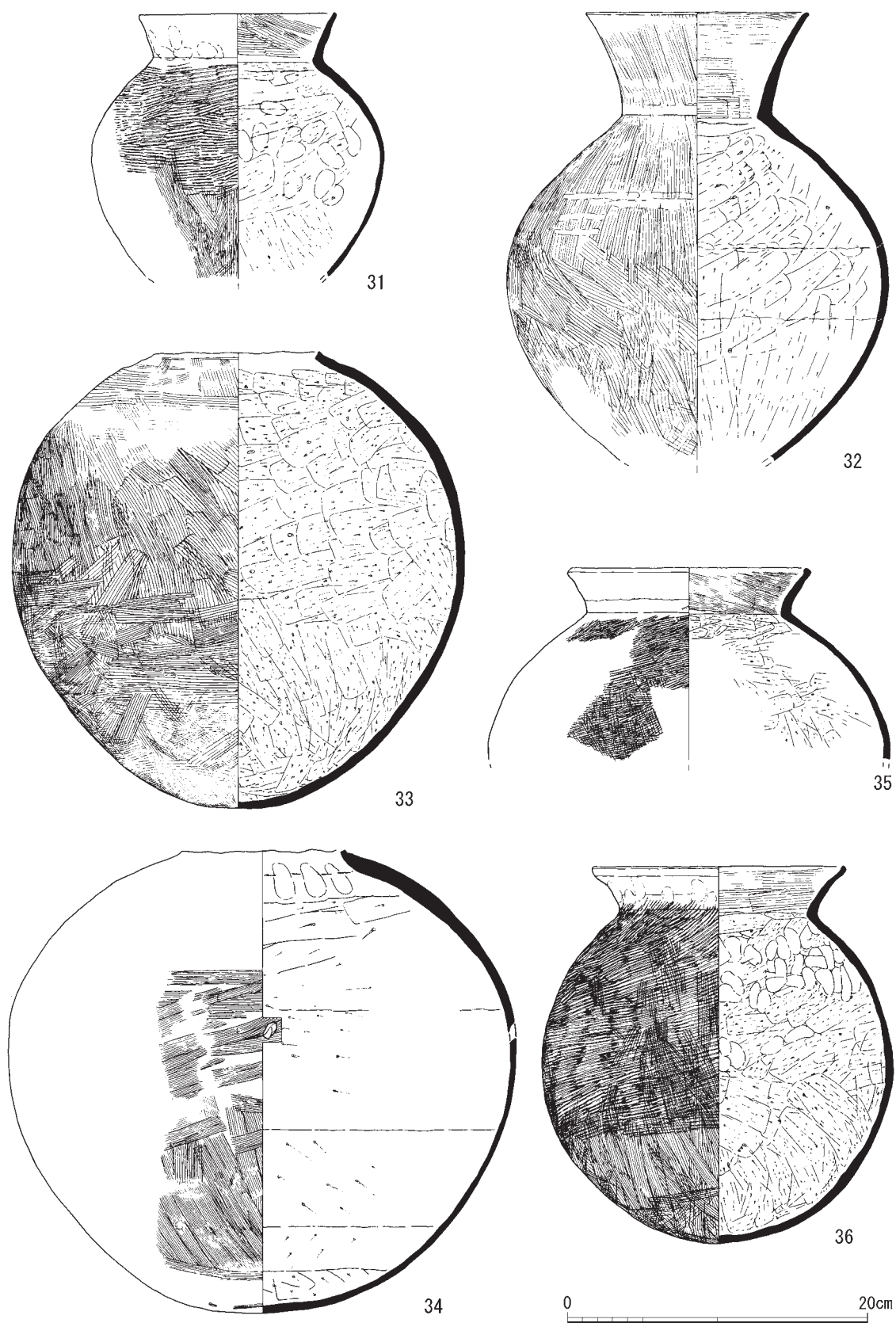
21～26：SD349 27～30：A地区包含層

③B地区出土の土器

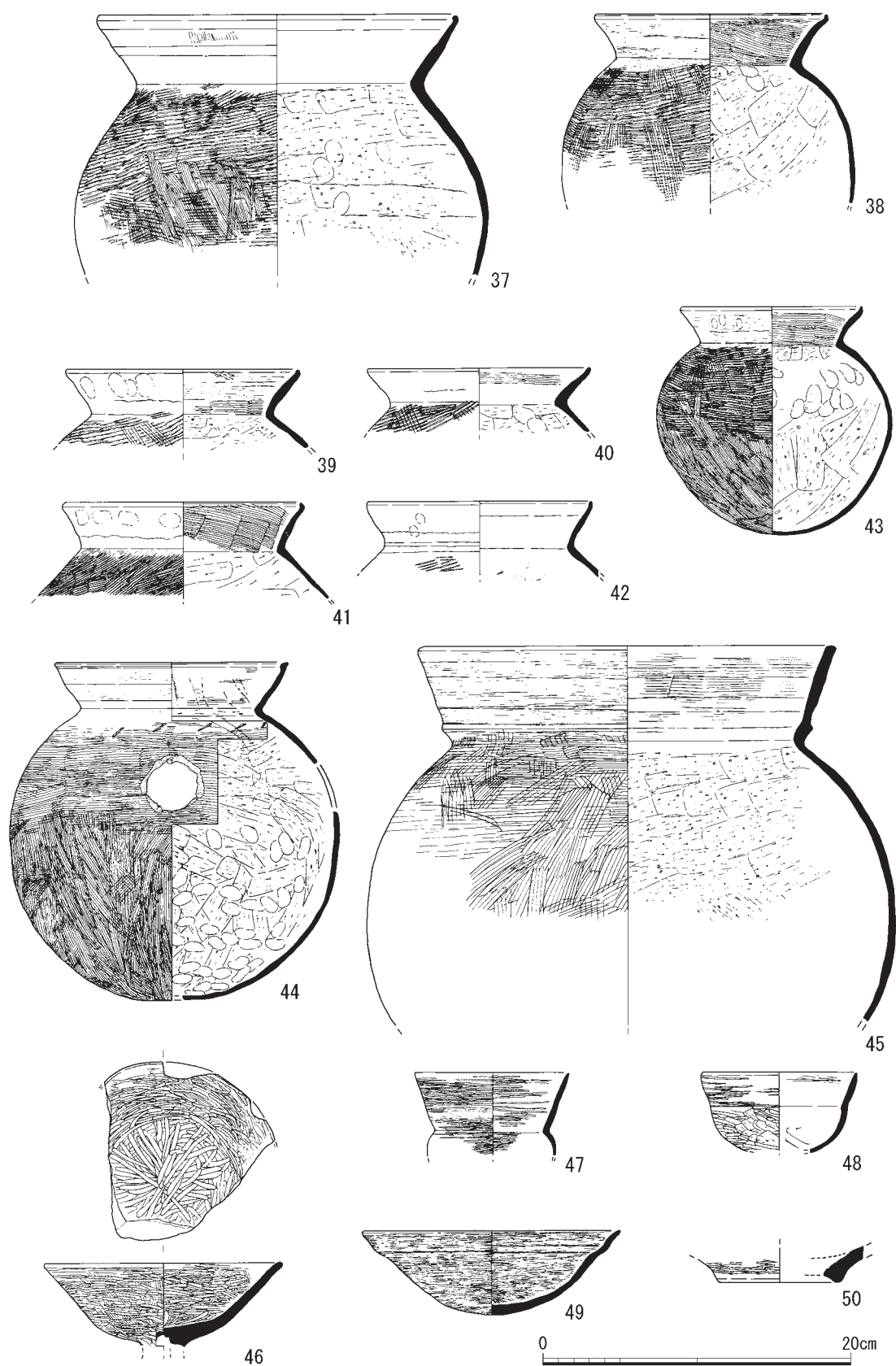
i)第1次調査

a)SD22内土器溜まり

土器溜まりS X23(第74図31～36・第75図37～50) 31は、外面は庄内系のタタキ成形による短頸壺Aである。32は、短頸直口壺Aである。口縁端部の調整手法は単純におさめるタイプで、弥生系の長頸壺にかわって、新たに古墳時代前期初葉に成立する形式である。体部下半に外面から打ち欠きとみられる穿孔がある。33・34は、短頸直口壺とみられる。ほぼ完形であるが、口縁部が意図的に打ち欠かれ、体部に中位に穿孔が施される。35～42は、甕Bとする庄内形甕である。口径は、16cm前後を基本とするが、口径23cmの大形品(37)や、口径12cm前後の小形品(43)がある。いずれも、口縁部が緩やかに外反して立ち上がる形態を示し、胎土は浅黄色～にぶい黄橙色を呈するもので、山城地域にみられる特徴的な庄内形甕^(注32)である。口縁部外面に粘土積痕が認められるものが多いことも特徴である。山城地域では、庄内形甕は、佐山Ⅱ-4型式以降に、大形品や小形品が出現し、法量による規格が明瞭になる。44は、布留形甕である。肩部に直線文と列点文が施され、穿孔が施される。45は、山陰系の大形甕である。46は、杯部は深く、緩やかに立ち上がる山陰系高杯Cである。横方向の丁寧なミガキが施され、47は小形丸底鉢A1、48は小形丸底鉢Bである。49は、有段の小形丸底鉢Dである。

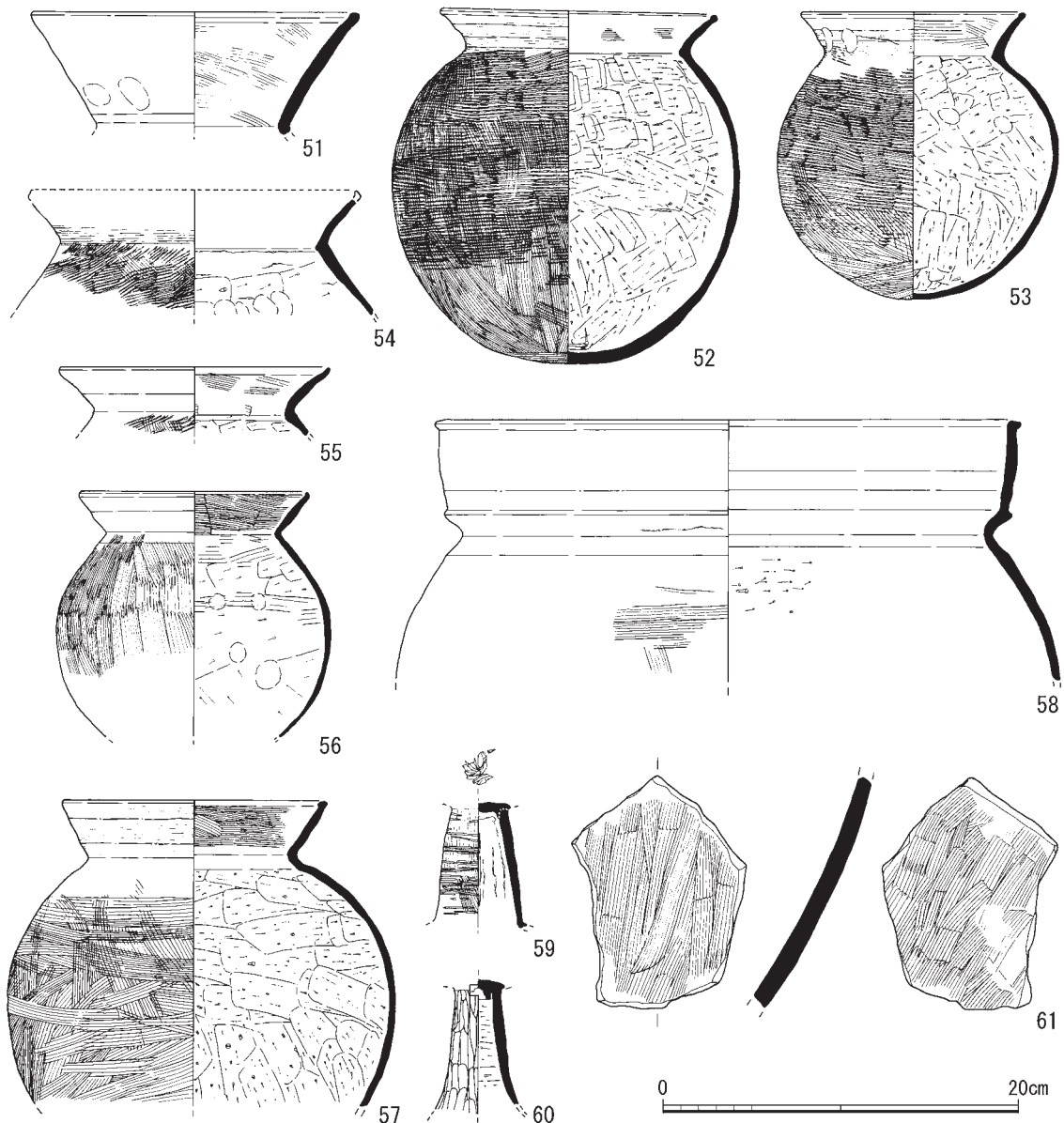


第74図 出土遺物実測図3 土器(1/4)
31~36 : S D22(S X23)



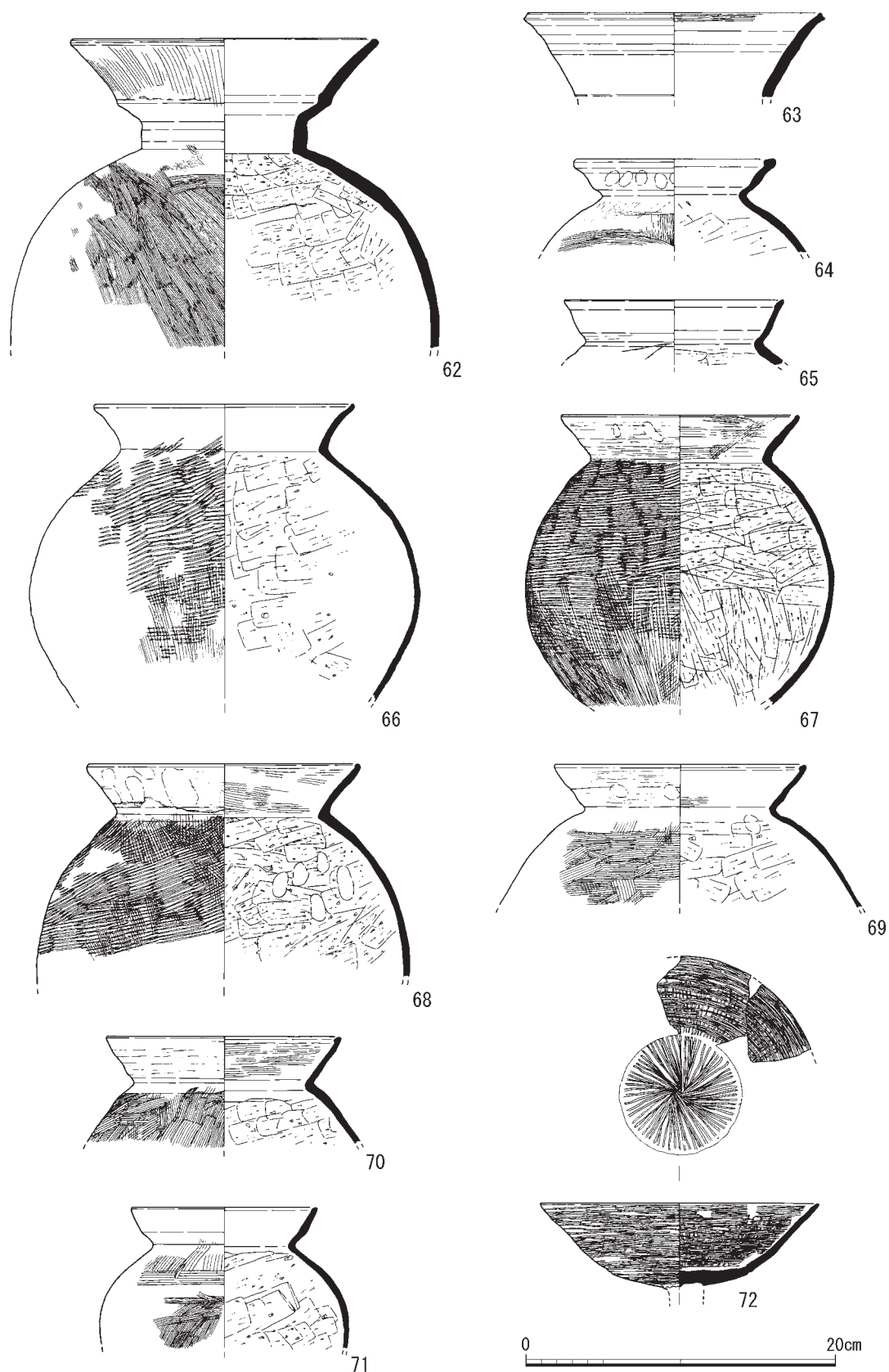
第75図 出土遺物実測図4 土器(1/4)
37~50: S D22(S X23)

土器溜まり S X24(第76図51～61) 51は、布留系の短頸直口壺Cである。52～55は、庄内形甕Bである。いずれも山城地域に特徴的な口縁部が外反して立ち上がるタイプである。56は、外面ハケ調整の甕Gである。口縁端部は摘み上げ、庄内系の甕の口縁形態をなす。57は、布留系の甕Cである。口縁端部内面が水平方向に肥厚し、肩部に直線文を施すもので、最古式の布留形甕である。58は、山陰系の大形甕の搬入品とみられる。肩部に直線文を施す古式の甕である。59は、高杯の脚部で、横方向の細かいミガキを施す庄内式併行期以降に盛行する畿内系高杯である。また、60の高杯脚部は縦方向の幅の広いミガキを施すもので、弥生系の古式の高杯である。61は、角閃石を多量に含む特徴的な胎土をもつ壺体部で、河内産あるいは讃岐系の壺とみられる。SX24の出土土器は、庄内形甕が優勢で、弥生系の要素を残す高杯などを含むことから、古墳時代初頭の佐山Ⅱ－4型式に併行する資料である。



第76図 出土遺物実測図5 土器(1/4)

51～61: S D22(S X24)



第77図 出土遺物実測図6 土器(1/4)
62～65 : S D 22(S X 25) 66～72 : S D 22(S X 29)

土器溜まり S X25 (第77図62～65) 62は、大形の畿内系二重口縁壺Aである。筒状の頸部をもち、2次口縁が短く斜め上方に立ち上がるものである。63は短頸直口壺Aで、64・65は布留形甕である。帰属時期は、二重口縁壺の頸部径が大きく、外面ハケ調整であることや、布留形甕を基本とし、口縁端部の形態もやや厚みをなすものや(64)、内面下方に肥厚するもの(65)からなることから、古墳時代前期前葉の佐山Ⅲ－1型式に帰属する。

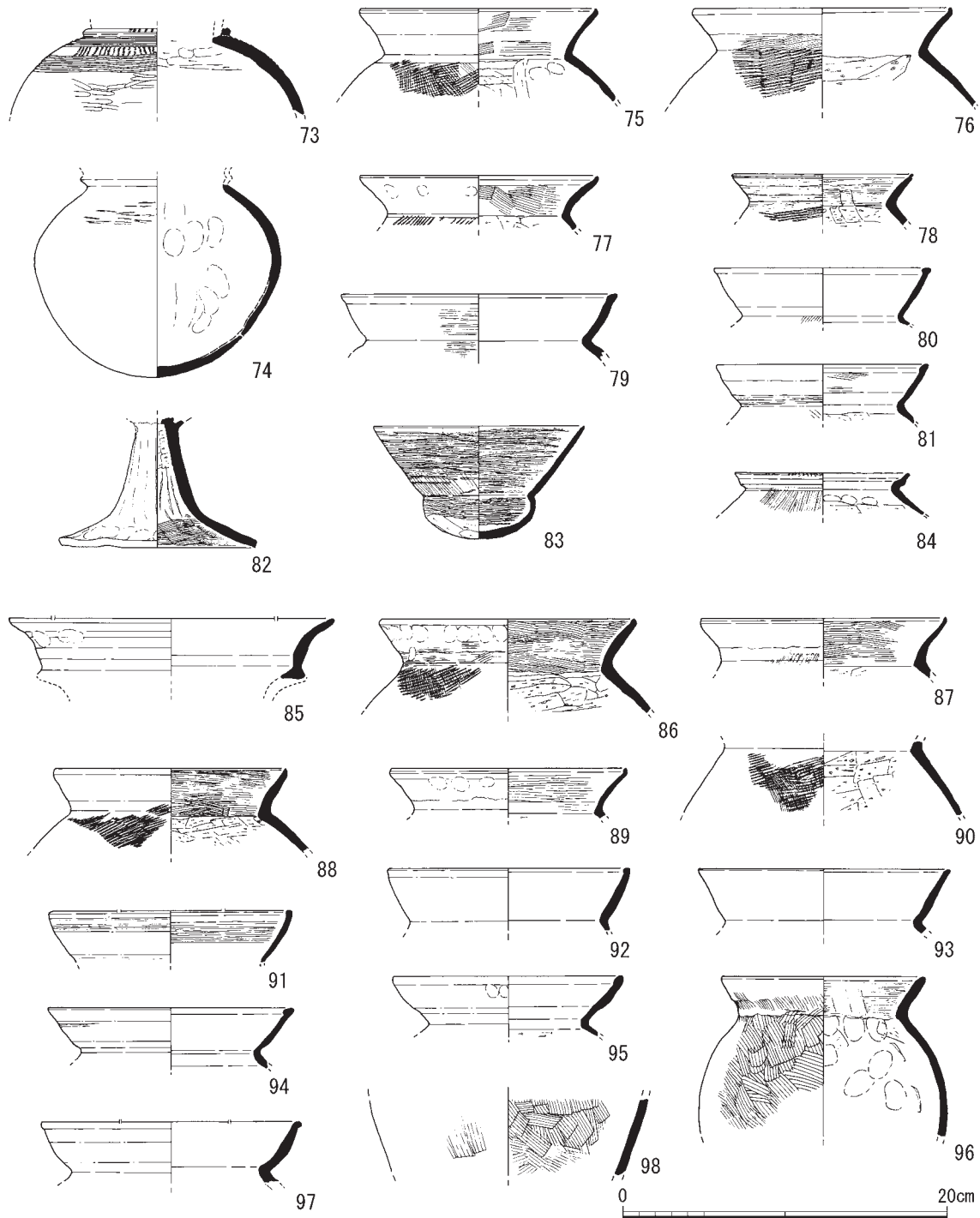
土器溜まり S X29 (第77図66～72) 66～68は、庄内形甕Bある。いずれも口縁部が外反して立ち上がる山城の地域的な甕である。66は、体部が大きく張り、口縁外面下部までタタキが施される手法や、67は口縁外面に粘土積痕を残す手法がみられる。いずれも山城の庄内形甕に特徴的にみられる手法である。69～71は、布留形甕Cである。69・70は、口縁部が長く拡張し、端部は内面に水平方向に肥厚する古式の特徴をなす。71は、肩部外面に直線文を施す布留形甕Cである。破片の一部を図化したものだが、直線文の上から刺突文が施されることより、列点文として肩部を巡るタイプとみられる。72は、畿内系高杯の杯部である。杯部外面に細かな横方向のミガキを施す。杯部内面には、横方向と縦方向のミガキを重ねて施し、さらに底部に放射状の丁寧なミガキが施される。SX29の帰属時期は、まず、高杯の杯部Bが深く、精緻なミガキを施すことに加え、甕の組成比において、庄内形甕と布留形甕がほぼ拮抗する点、さらに布留形甕のなかに、拡張が短く厚みを保つやや新しい様相を示す甕が含まれることなどから、佐山Ⅱ－4型式～佐山Ⅲ－1型式に併行する資料とみられる。

b) S D22層位 (第78～80図)

47層 (第78図73～84) 73は、加飾壺の体部である。直線文と列点文を施す東海系の文様構成をもつ加飾壺である。74は、肩部が大きく張る壺の体部とみられる。口縁部を欠損するが、擬口縁部分に段をなすことや、体部の形状から、山陰系複合口縁壺とみられる。75～78は庄内形甕Bである。いずれも口縁部が外反して立ち上がる山城の地域的な庄内形甕である。76は、口縁部外面下部までタタキ成形を施し、粘土の輪積痕が認められる。79～81の布留形甕は、口縁部が長く、拡張する古相を示すものと(80)と、やや短く、端部内面下方に拡張するもの(79・81)がある。82は、裾部が緩やかに広がる高杯の脚部である。83は、小形丸底鉢A2であり、内外面に丁寧にミガキを施す。84は、東海系のS字甕B類である。

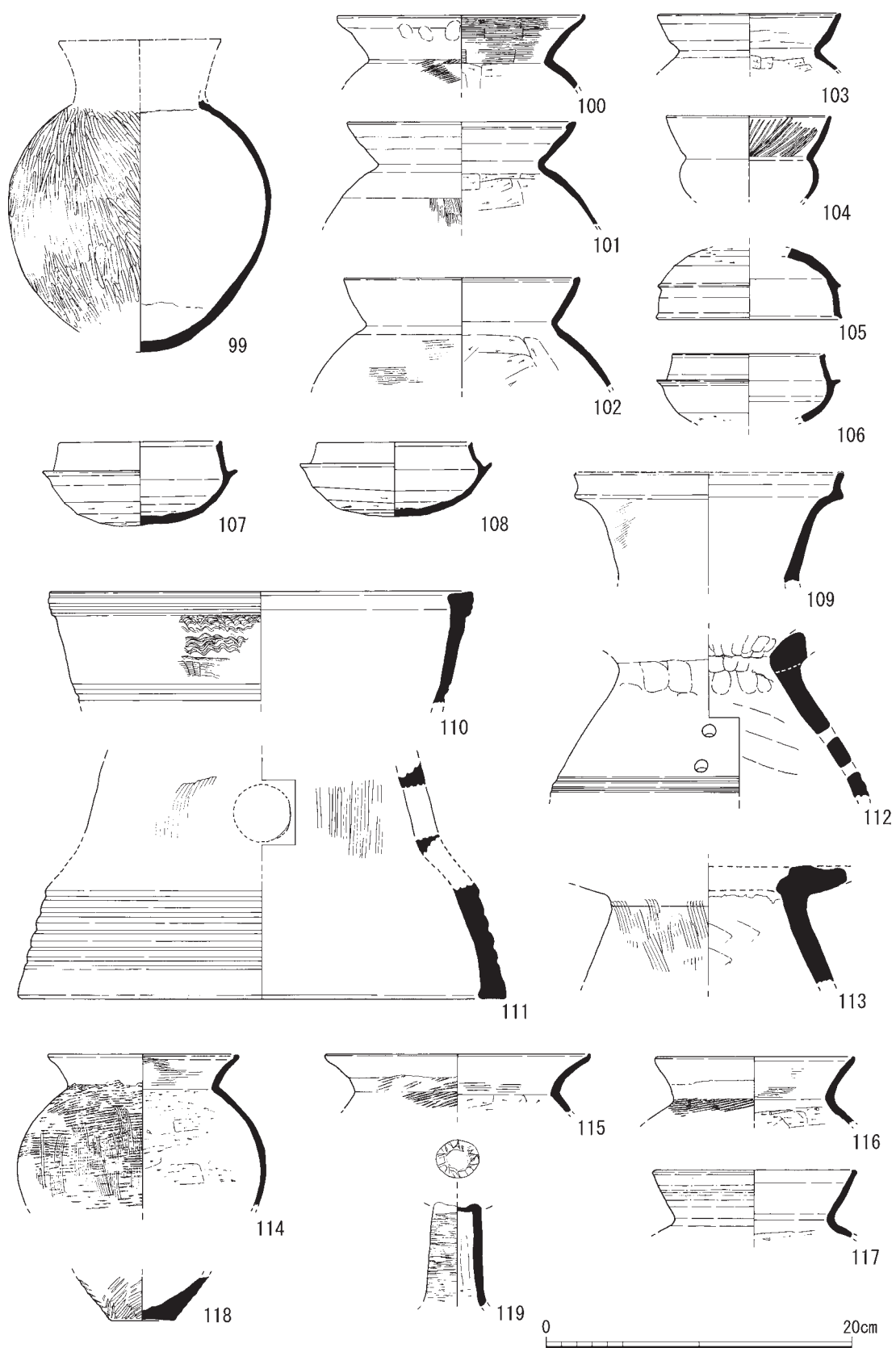
以上、47層の出土土器は、庄内形甕の法量分化が明確となる小形品を含むことや、小形のS字甕B類が含まれること、また布留形甕の口縁部形態に口縁部内面下方に肥厚する新しい要素がみられることから、おおそ佐山Ⅱ－4式から佐山Ⅲ－1式に併行するものとみられる。

46層 (第78図85～98) 85は、阿波系二重口縁壺で、搬入品とみられる。86～90は、庄内形甕Bである。91から95は、布留形甕Cである。96は、単純口縁甕である。器壁は厚く、体部外面は斜め横方向の粗いハケ調整を残す。口縁部外面下半には、体部へ向けた縦方向のハケ工具痕が残される。体部は短いストロークで施されたハケ調整を特色とすることや、色調は暗橙灰色を呈することから、在地系土器には見られない特徴を呈する。東海以東の地域からの搬入土器とみられる。98は、壺の体部下半と推定される。角閃石を多量に含み、色調は暗褐色を呈する搬入土器で



第78図 出土遺物実測図7 土器(1/4)
73～84：S D 22 (47層) 85～98：S D 22 (46層)

ある。古墳時代前期の角閃石を含む胎土を特徴とする土器は河内産と讃岐産が知られるが、当資料は、器壁は薄く、河内産の壺とみられる。46層は、庄内形甕が甕の構成比の約3割程度を占め、布留形甕が約5割を占める。阿波系の壺が含まれる一方、甕には新しい要素があり、口縁部外面の下部に強い横方向のナデを施す布留形甕C(95)や、内湾気味に立ち上がる口縁部に端部を外方へ引き出す甕G(97)などがある。こうした点から、おおよそ佐山Ⅲ-1式併行の古墳時代前期前

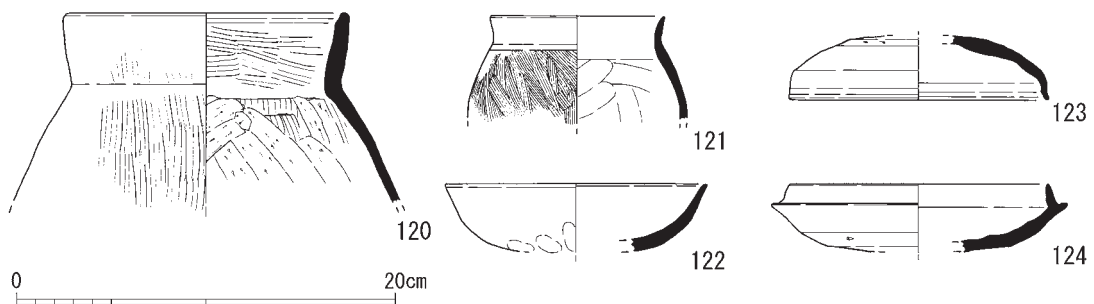


第79図 出土遺物実測図8 土器(1/4)
99~108 : SD22 (45層) 109~124 : S D22 (43層)

葉を中心とする土器群と推定される。

45層（第79図99～108） 45層は、古式土師器を多く包含するが、出土土器の総量の約20%程度が、陶邑T K 23型式に併行する須恵器である。出土土器から、層位の帰属時期はおおよそ古墳時代中期後葉と推定される。99は、壺形土器の体部である。口頸部を意図的に打ち欠かれ可能性が高い。100は、庄内形甕B、101・102は布留形甕C、103は単純口縁甕である。104は、小形丸底鉢である。99～104までの土器はいずれも古墳時代前期に帰属する。105は、須恵器の杯蓋で、106～108は杯身である。杯蓋は、口径が小さく、稜が明瞭で、天井部は高く、丁寧なヘラケズリを施す。口縁端部はわずかに外方に引き出され、内面に明瞭な段をなす。106～108の杯身は、口径は10cm前後と引き締まり、口縁の立ち上がりは高く、深い杯部をなす。また、いずれも口縁端部内面に明瞭な段をなす。

43層（第79図109～124・第80図120～124） 出土土器の約10%程度は須恵器である。おおよそ陶邑T K 43型式に併行する資料であり、層位は古墳時代後期後葉に位置づけられる。弥生時代中期～古墳時代前期の土器を包含する。109は、二重口縁壺である。頸部が長く拡張し、短い2次口縁を付するもので、東海以東の地域に由来する土器とみられる。110～113は、弥生中期土器で、110は鉢の口縁部である。口縁部は粘土を貼付け段状にし、その上に沈線文を施す。内外面の調整は不明である。口縁部には上から櫛描波状文帯2帯、櫛描簾状文帯1帯、凹線文2条以上を施す。111は器台の胴部から裾部にかけての破片である。胴部下半に円形の透孔を穿つ。外面にはタテハケ調整がわずかに残る。裾部は内湾しながら外方へ広がり、凹線文5条を施す。内面胴部下半の調整はタテハケである。112は脚部片である。上下2列の小さな透孔を穿つ。裾部には凹線文2条以上施す。内面には円盤充填をしていたと考えられる剝離痕が確認される。113は台形土器である。台部と考えられる部分は平坦な面を形成していることから台付の器種とは区別される。台部は粘土を充填することにより形成されたと考えられるが、充填した粘土は剝離しその痕跡が確認されるだけである。台部外面はナデ調整である。脚部外面にはタテハケ調整を施す。114～119は、古墳時代初頭から前期前葉を中心とする土器である。庄内形甕は、いずれも山城地域に特徴的な甕B（114～116）であり、口縁部が長く拡張する布留形C（117）等を含む。118は、弥生系の甕底部であり、119は細かな横方向のミガキを特徴とする畿内系高杯とみられる。120・

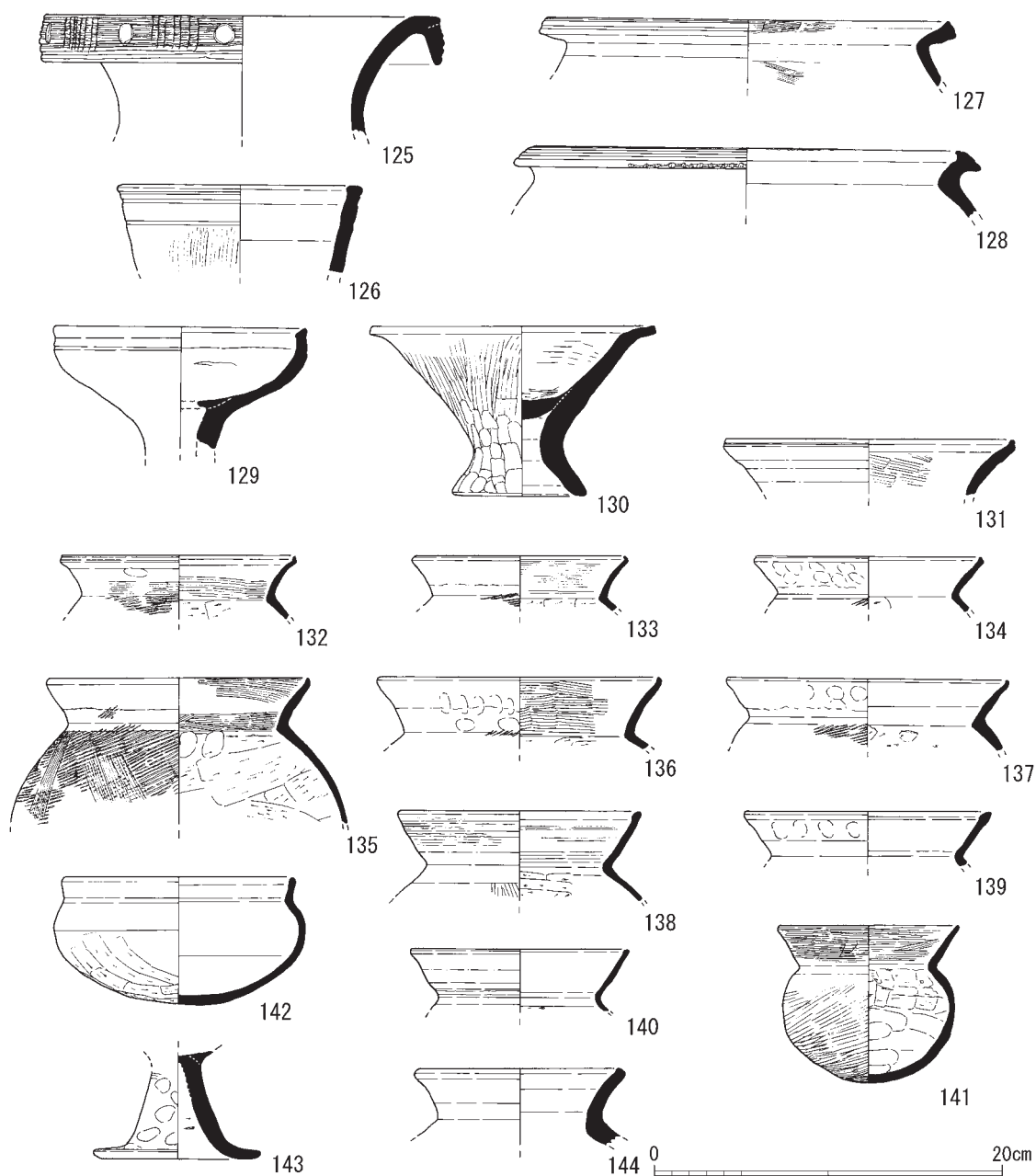


第80図 出土遺物実測図9 土器(1/4)
120～124：S D 22（43層）

121は、単純口縁の甕であるが、口縁部はやや直立気味に立ち上がり、体部外面は粗い縦方向のハケが施され、内面にケズリが施される。122は、椀形の土師器杯で、内外面をナデ調整される。123は須恵器杯蓋、124は杯身である。杯蓋は口縁部から天井部への変化点に、沈線状の稜はすでに認められないが、口縁部内面にはわずかに段をなす。また、杯身は、口縁部の立ち上がりは浅く、端部を丸く収めるが、杯口唇部径は小形化しておらず、底部にヘラケズリが施される。

S D22内(第81図125～144) 125～144は、帰属時期の明らかな層位別取り上げによるものではないが、S D22から出土した土器である。

125は広口壺Aの口縁部である。口縁部は外側に広がり、内面は口縁部端面付近で面をもつ。



第81図 出土遺物実測図10 土器(1/4)

125～144 : S D22

口縁端部は下方に大きく垂下し、端面には凹線文を6条施したのち、円形浮文とキザミを交互に配す。内外面の調整はナデである。126は短頸壺の口縁部と考えられる。凹線文を3条施す。外面にはタテハケ調整がわずかに残る。内面はナデ調整を施す。灰白色を呈することから、東部瀬戸内からの搬入の可能性がある。127は中型の甕Aの口縁部である。口縁端部はわずかに肥厚させ、頸部は強く屈曲する。内面の調整はヨコハケである。

128は中型の甕Aの口縁部である。127同様、頸部に強い稜をもつがやや厚手である。口縁端部は上下に拡張し、端面に凹線文3条、下端には刻みを施す。129は高杯Aの口縁部から脚部にかけての破片である。口縁部に凹線文を2条施す。外面の調整は摩滅のため不明である。杯部内面にはヘラ等の工具痕が残る。杯部底面は円盤を充填することにより成形されたものと考えられるが、充填した円盤は欠落している。130は高杯Bである。脚部の広がり小さい。外面の調整は杯部ではタテハケ、脚部ではユビオサエである。杯部内面はヨコハケ調整である。脚部にはヨコケズリ調整を施す。杯部底面は円盤充填法により成形される。

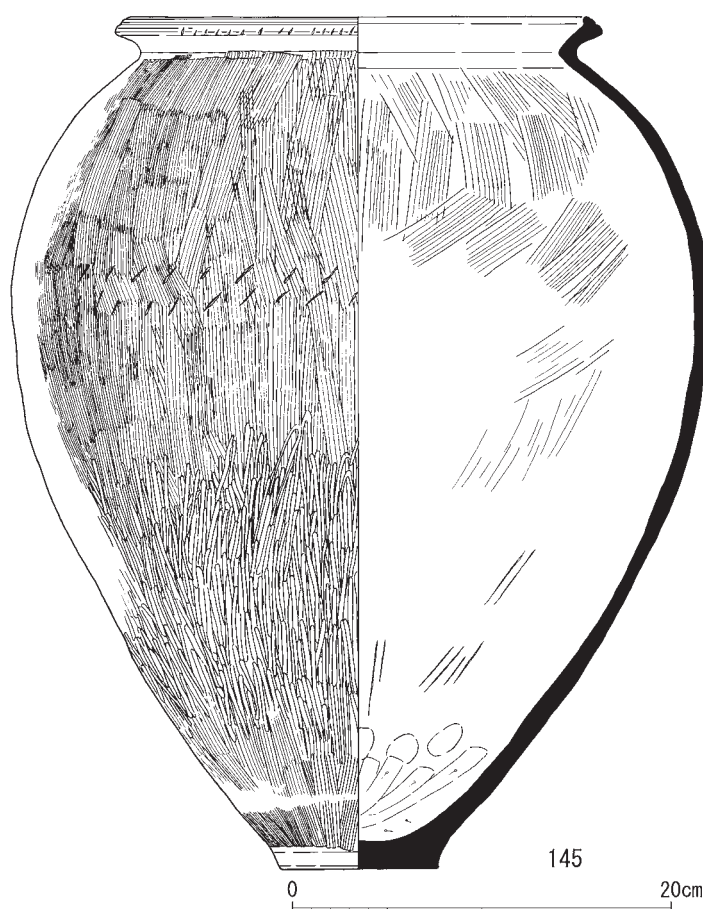
131～137は、庄内形甕である。いずれも在地系の庄内形甕である。131・132は、口縁部外面に沈線を施すことを特色とする。口縁部に沈線を施す庄内形甕は、播磨地域の甕の地域的特徴として指摘されるものであるが、山城の庄内形甕においても特徴的に認められるものであり、在地産と推定される。138～140は、布留形甕である。器壁が薄く、口縁部が長く拡張するもの(138)や、口縁端部に厚みを持たせて肥厚するもの(139)、口縁端部をわずかに肥厚させるもの(140)がある。141は、外面ハケ調整による小形丸底壺である。142は、土師器埴である。器高に比して口径が大きくやや扁平な丸形の体部をなす。器壁は内外面をおもにナデ調整によるが、外面下半にケズリが認められる。口縁部は短く内湾気味に立ち上がり、器壁は薄く、胎土は、混和材が極めて少ない精良な胎土をもつ。焼成は堅緻で、色調は暗褐色を呈し、形態・胎土・色調ともに在地産土器にみられない特徴をなす。同種の形態。特徴をもつ土器は、奈良市周辺の平城京下層遺跡で確認しており、^(注33)こうした地域で生産され、搬入された土器とみられる。共伴関係から、陶邑編年TK23型式に併行する時期の年代観が与えられるとされ、S D22第45層の時期に帰属する資料とみられる。143は、土師器高杯の脚部で、裾部が短く外方に開くことを特徴とする。古墳時代後期後半の資料と推定され、S D22第43層の時期に該当するものであろう。144は、須恵器短頸壺の口縁で、短く外反する口縁をなす。143と同様、第43層の古墳時代後期後半に帰属する資料とみられる。

(高野陽子・吉村慎太郎)

ii)第2次・6次調査

a.縄文・弥生時代の土器

土坑 S K 42 (第82図145) 145は完形で中型の甕Aである。口縁部はわずかに上下に拡張し、端面に凹線文、下端に刻みを施す。胴部最大径は胴部中位よりやや上側にあり口径を大きく凌ぐ。胴部に列点文を2段にわたって配す。外面の調整は全体をタテハケ後、底部から胴部下半にかけてタテミガキ調整を施し、最後に底部周辺をナデ調整し整える。内面の調整は底部から口縁部をタテハケ調整後、口縁部にヨコナデ調整を施す。底部にはユビオサエ調整が残る。



第82図 出土遺物実測図11 土器(1/4)
145: S K 42

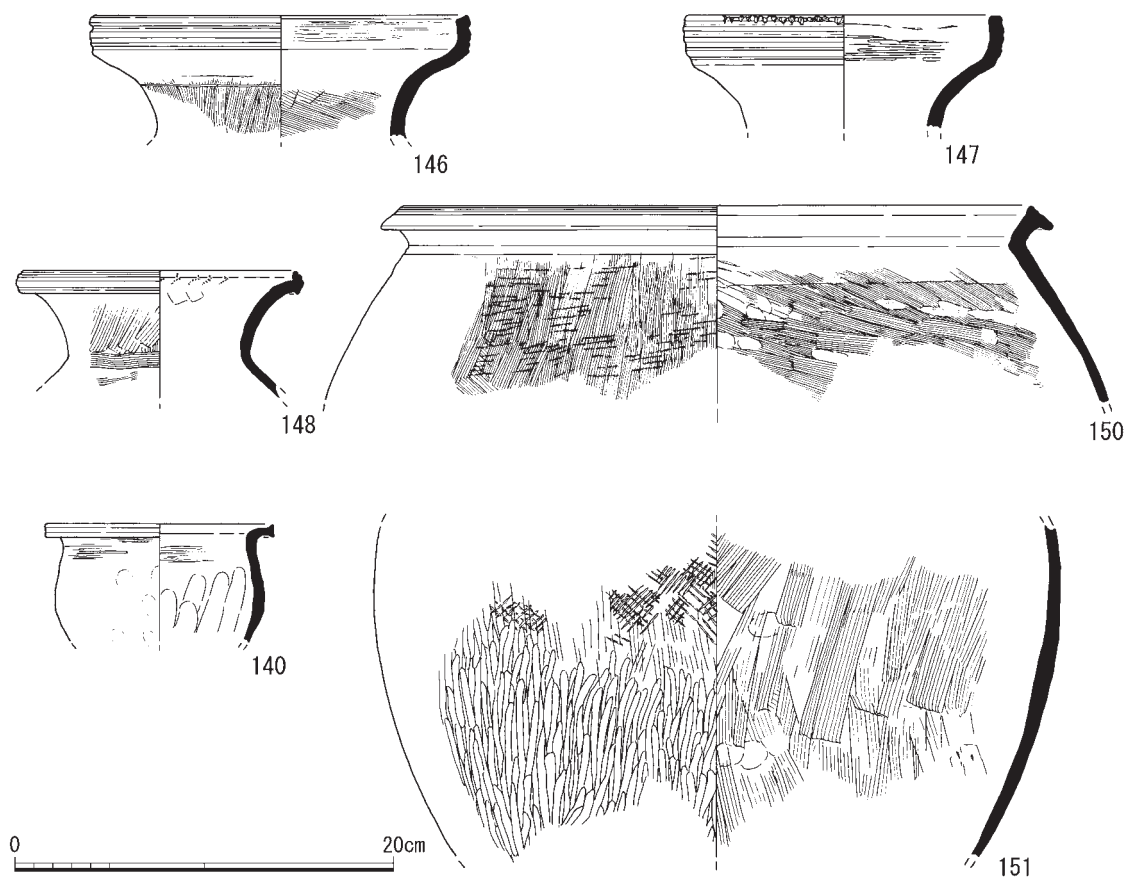
S D22西壁断面最下層(第83図146) 146は有段口縁壺Aの口縁部である。口縁部の立ち上がりは短く、そこに凹線文を3条施す。口縁部の調整は内外面ともナデ調整である。頸部外面はタテハケ調整、内面はナナメハケ調整である。

S D22 3区護岸材E周辺(第83図147) 147は有段口縁壺Aの口縁部である。口縁部に凹線文4条、端部に刻みを施す。外面の調整はナデ調整である。内面の調整はケズリ後ヨコナデ調整を施したものと考えられる。

S D22土器溜まり S X73(第83図148~151) 148は広口壺Bの口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部外面にススが付着していることから煮

沸に利用されていたと考えられる。口縁部は上下に拡張し、凹線文を施す。外面口縁部から頸部にかけてタテハケ後、頸部から胴部にかけて櫛描直線文を2帯以上施す。口縁部内面に櫛描列点文を施す。内面の調整はナデである。149は小型の甕Cである。口縁部端部は鋭く上下に拡張する。胴部は丸みをもつ。外面は指押さえ調整後ナデ調整を施す。内面には強いナデ調整を施す。外面全体にススが付着する。150は大型の甕Aである。頸部は強く屈曲し、口縁端部を上下に拡張する。頸部から胴部にかけての外面の調整はヨコ方向のタタキ後タテハケであり、内面はナナメハケ調整である。151は甕の胴部片である。外面には櫛状のススが付着する。外面の調整は上半をタタキ後、タテハケでタタキの痕跡を消している。下半はケズリ調整を施し、最後に下半をタテミガキ調整で仕上げる。内面の調整はタテハケであり、わずかに指押さえも確認できる。

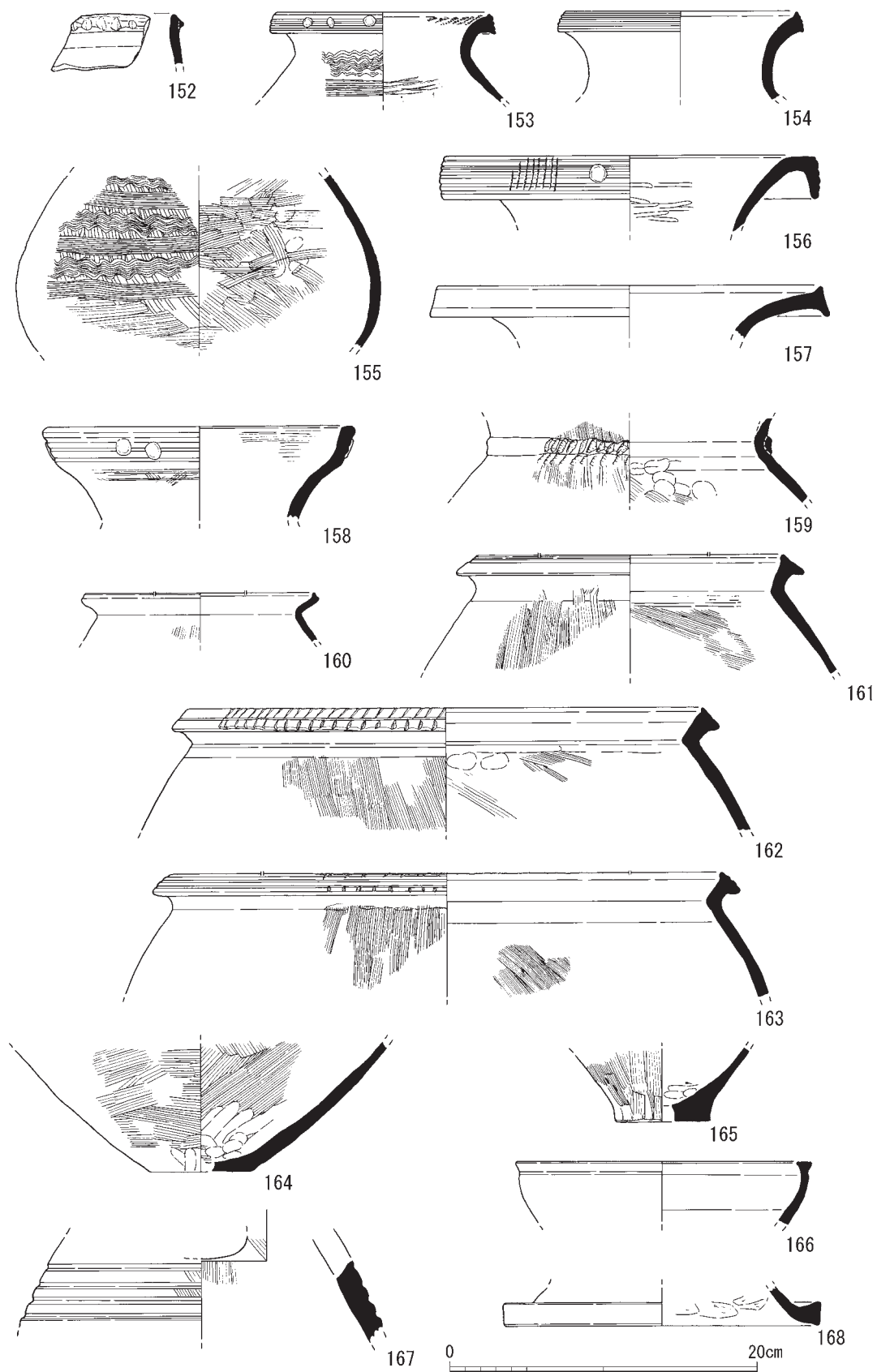
S D22内(第84図152~168) 152は縄文時代の深鉢の口縁部である。端部付近に突帯を貼付け、その上から棒状の工具で押し付け波状にする。内外面の調整は不明である。153は広口壺Aである。口縁部は上下に広がり、端部に凹線文と円形浮文を施すが、浮文は剥離しており痕跡のみ確認できる。頸部には櫛描波状文帯1帯、櫛描直線文帯1帯を施す。口縁部内面には櫛描状の工具による列点文が施される。154は広口壺Aである。口縁部端部に凹線文4条を施す。内外面の調整は



第83図 出土遺物実測図12 土器(1/4)

146：S D22(西壁断面最下層) 147：S D22(3区護岸材E周辺) 148～151：S D22(S X73)

ナデである。155は広口壺の胴部片と考えられる。外面は胴部上半をタテハケ調整後、下半にヨコハケ調整を施す。文様は櫛描波状文帯3帯、櫛描直線文帯3帯を交互に施す。内面はヨコ・ナナメハケ調整を施す。156は広口壺の口縁部である。口縁部は端部を大きく垂下させ、そこに凹線文6条を施し、刻みと円形浮文を交互に配す。外面の調整はナデである。内面の調整は不明である。157は広口壺の口縁部である。端部は粘土を付加し、上下に拡張する。内外面の調整は摩滅のため不明である。158は有段口縁壺Bである。口縁部から頸部への移行は緩やかである。口縁部に凹線文3条と2個1組の円形浮文を施す。159は有段口縁壺の頸部と考えられる。粘土帯を付加し、その上を櫛状の工具により刻みを施す。その下にはさらに櫛描列点文を施す。外面の調整はタテハケである。内面はナナメハケ調整、指押さえ調整を施す。160は小型の甕である。口縁部はナデ調整後、端部を上方につまみあげる。外面頸部付近にタテハケ調整が確認できる。162は大型の甕Aである。口縁端部を上下に拡張し、沈線文1条と櫛状工具による刻みを2段施す。頸部はくの字状に強く屈曲する。外面は胴部をタテハケ調整後、口縁部をヨコナデする。内面は胴部にナナメハケ調整、指押さえ調整を施す。163は大型の甕Aである。口縁端部をヨコナデにより上下に拡張したのち、凹線文3条と刻みを2段にわたって施す。内外面の調整はハケである。



第84図 出土遺物実測図13 土器(1/4)
152～168：S D22内

164は底部片である。外面の調整はヨコハケとナデである。内面はナナメハケ調整後、下半にナデ調整を施す。165は底部片である。外面にタテハケ調整を施す。内面にケズリ調整の痕跡が残る。166は高杯Aの口縁部と考えられる。端部付近は強いヨコナデ調整により凹む。

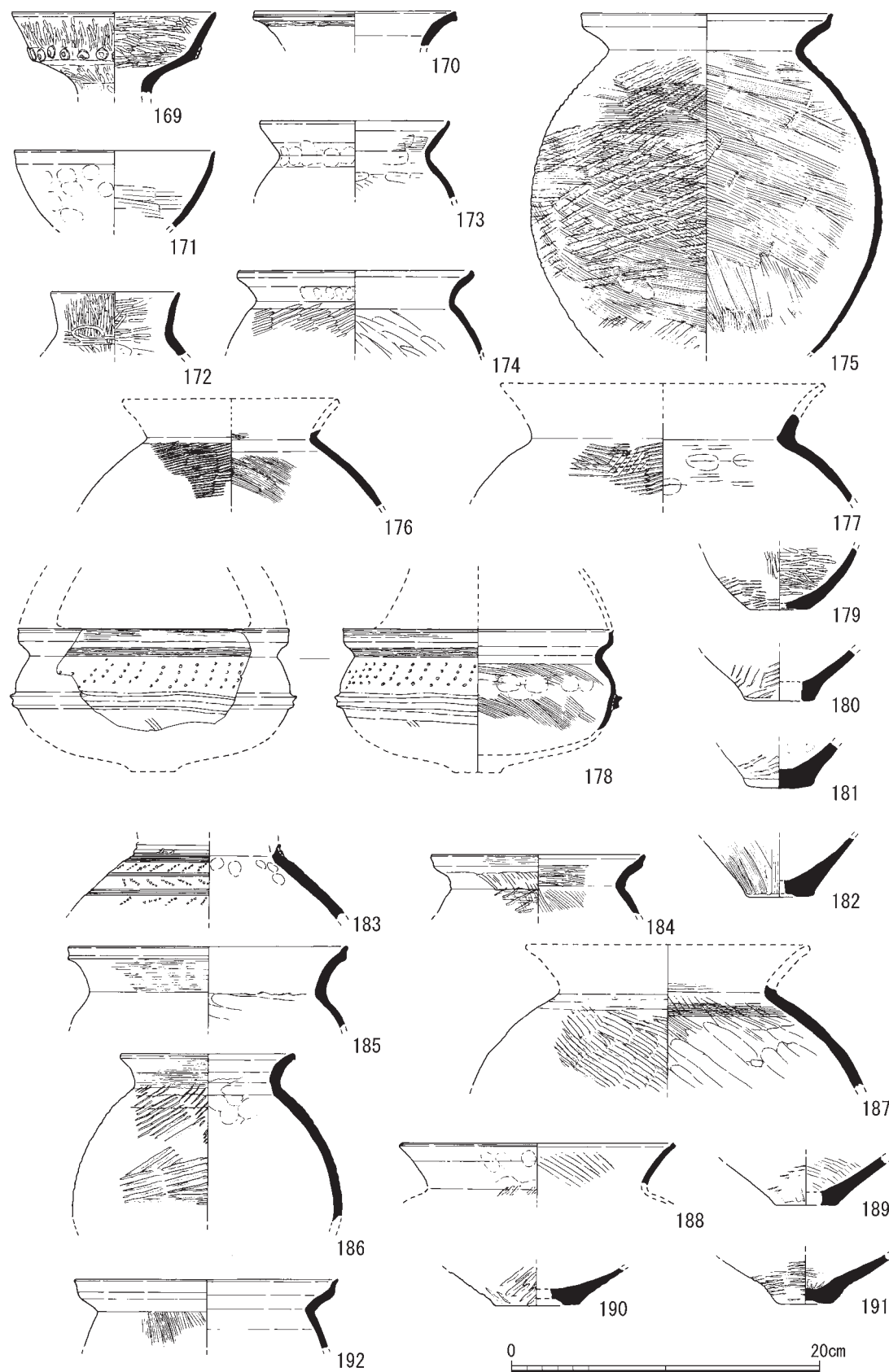
167は器台裾部片である。凹線文を4条以上施す。円形の透孔を穿つ。外面の調整はタテハケである。内面の調整は上半がタテハケ、下半はナデである。168は脚部片である。端部を肥厚させ、上下に拡張する。内面にヨコ方向のケズリ調整を施す。

(吉村慎太郎)

b.古墳時代の土器

S D22 S D22の出土土器については、出土層位によって、最下層、下層、中層、上層の順に報告する。最下層は、第6次調査において、4区掘り下げの際に、断面3との対応により、層位的取り上げが可能となったものである。各断面(断面1～3)で確認された、古墳時代初頭の土器を含む暗灰オリーブ色シルト層を各区に共通する層位としてⅥ層とし、さらに一括性の高い一群を最下層①として報告する。また、下層①・②は、第4・6次調査において、古墳時代前期前葉の多量の土器を出土した灰オリーブ黒色砂混じりシルト層から出土した土器群である。各区に共通する層位としてⅣ層とし、下層出土土器として取り扱うものである。中層①・②出土土器も同様に、第4・6次調査の灰オリーブ色(第35図14層)に対応し、上層については、オリーブ黒色シルト質極細砂(第35図11層)から出土したものである。

最下層①<4区Ⅵ層下層>(第85図169～182) 169～192は、4区Ⅵ層のなかでも下層に相当する層位から出土した。169は、畿内系二重口縁壺A1である。口縁部外面に円形浮文を施す。170は、広口壺の口縁とみられる。端部に沈線を巡らせる。171は、いわゆる内湾口縁壺の口頸部である。東海地域からの搬入品とみられ、廻間編年Ⅱ式後半に帰属するものであろう。^(注34)172は、短頸壺の口縁である。174～177は、いずれも弥生系タタキ成形甕である。174・175の甕Aは、外面に粗いタタキを施し、内面にハケのちナデ調整を施す。174は、口縁端部をわずかに摘み上げるが、175は端部を上方に立ち上げ、面をなすことを特徴とする。175は、体部のタタキ成形ののちに、全体に斜めハケ調整が施される。畿内の弥生系単純口縁甕には、タタキ成形甕とハケ調整甕の2類があるが、本例は折衷的な要素をもつ甕である。176・177は、タタキ成形甕である。176は、細筋のタタキを特徴とする。また、177は内面に一部ケズリがみとめられ、いずれも弥生系甕のなかで新しい要素をもつものである。178は、手焙形土器である。口縁端部は、受口状口縁をなし、薇部は欠損するが、鉢部との明瞭な接合痕を残す。体部外面は中位に突帯をめぐらせ、肩部に櫛描刺突列点文を施す。全体に器壁は薄く作られ、鉢部は深く、手焙形土器のなかでも古式の特徴をもつ。色調は在地系土器とは異なり、灰白色を呈し、近江地域からの搬入品とみられる。179～181は、弥生系タタキ成形甕の底部である。また、182は、弥生系ハケ調整甕の底部である。179・182は、いずれも底部中央に径約1cmの穿孔が認められる。最下層②の帰属時期について検討しておきたい。資料群の甕は、庄内形甕を含まず、弥生系タタキ成形甕だけで構成されるが、その特徴として、甕の口縁端部を立ち上げ、面をなすものが半数を占める。こうした特徴は、お



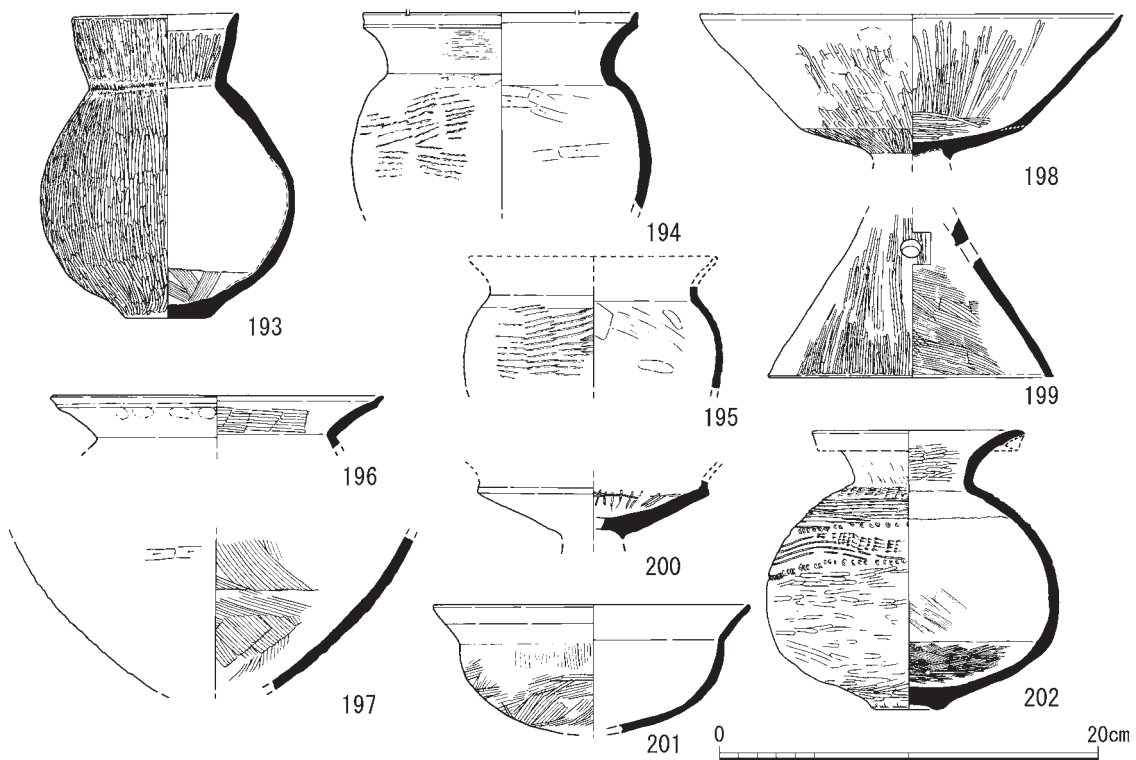
第85図 出土遺物実測図14 土器(1/4)
 169～182：S D22最下層① 183～192：S D22最下層②

もに佐山Ⅱ式以降の甕にみられるものであり、およそ佐山Ⅱ式前半に帰属するものと言える。さらに、手焙形土器の形態から、編年的な位置づけをより絞り込むことが可能である。178の手焙形土器は、佐山Ⅱ-2式の標準資料となる近江系手焙形土器よりも、受部及び鉢部形態が深く、文様構成にも弥生後期の近江系鉢の文様要素を残す。編年的にはより古式に位置づけられることが可能であり、その帰属時期を佐山Ⅱ-1式とみることができよう。

4区Ⅵ層下層資料については、175の甕A2の体部外面に著しく炭化物が付着しており、炭化物の一部をAMS年代分析の対象とした(付編3参照)。また、4区Ⅵ層出土の木製品についても酸素同位体比年輪年代分析を実施しており、AD.162年の年代値を得ている(付編2参照)。

最下層②<4区Ⅵ層>(第85図183~192) 183は、肩部に直線文と刺突列点文を交互に施す加飾壺の肩部である。刺突列点文を特徴とすることから、東海系の加飾広口壺の肩部と推定される。色調は、橙色(7.5YR6/8)を呈し、搬入土器と推定される。183~188は、弥生系タタキ成形甕Aである。口縁端部を立ち上げ、端面に面をなすもの(184・185)と、単純に丸くおさめるもの(186~188)がある。187は、左上がりのタタキ成形を特徴とする。いわゆる第V様式系甕は、小形器種の成形技術から一部に右上がりのタタキ成形甕^(注35)がみられることを除けば、右上がりのタタキ成形を基本とし、山城地域でもほとんど例外は確認されない。左上がりのタタキ成形は、播磨周辺の弥生系甕に一定比率確認され^(注36)、本例も摂津から播磨にかけての地域から搬入された可能性がある。189~191は、弥生系タタキ成形甕の底部である。190・191は、窪み底をなし底部輪台技法によるとみられる。192は、4区護岸材北側のⅥ層中から出土したものである。外面タテハケ調整、内面にケズリを施す北近畿系の有段口縁の甕である。口縁外面の立ち上がりは浅く、外面をナデ調整する甕であり、北近畿系土器の分布域のなかでも南部にあたる、北丹波から西丹波にかけての地域に由来するものと推定される。4区Ⅵ層②出土の資料は、4区Ⅵ層①と甕の基本組成はほぼ同様であり、また弥生系タタキ成形甕も庄内式古段階に顕在化する口縁端部に面をなすタイプが組成の一端を構成することから、古墳時代初頭の佐山Ⅱ-1~2式に併行する資料とみられる。共伴する北近畿系土器についても、北近畿土器編年西谷Ⅲ式^(注37)におおよそ位置づけられるものであり、対応関係に齟齬は無く、畿内庄内式古段階に併行する資料であろう。

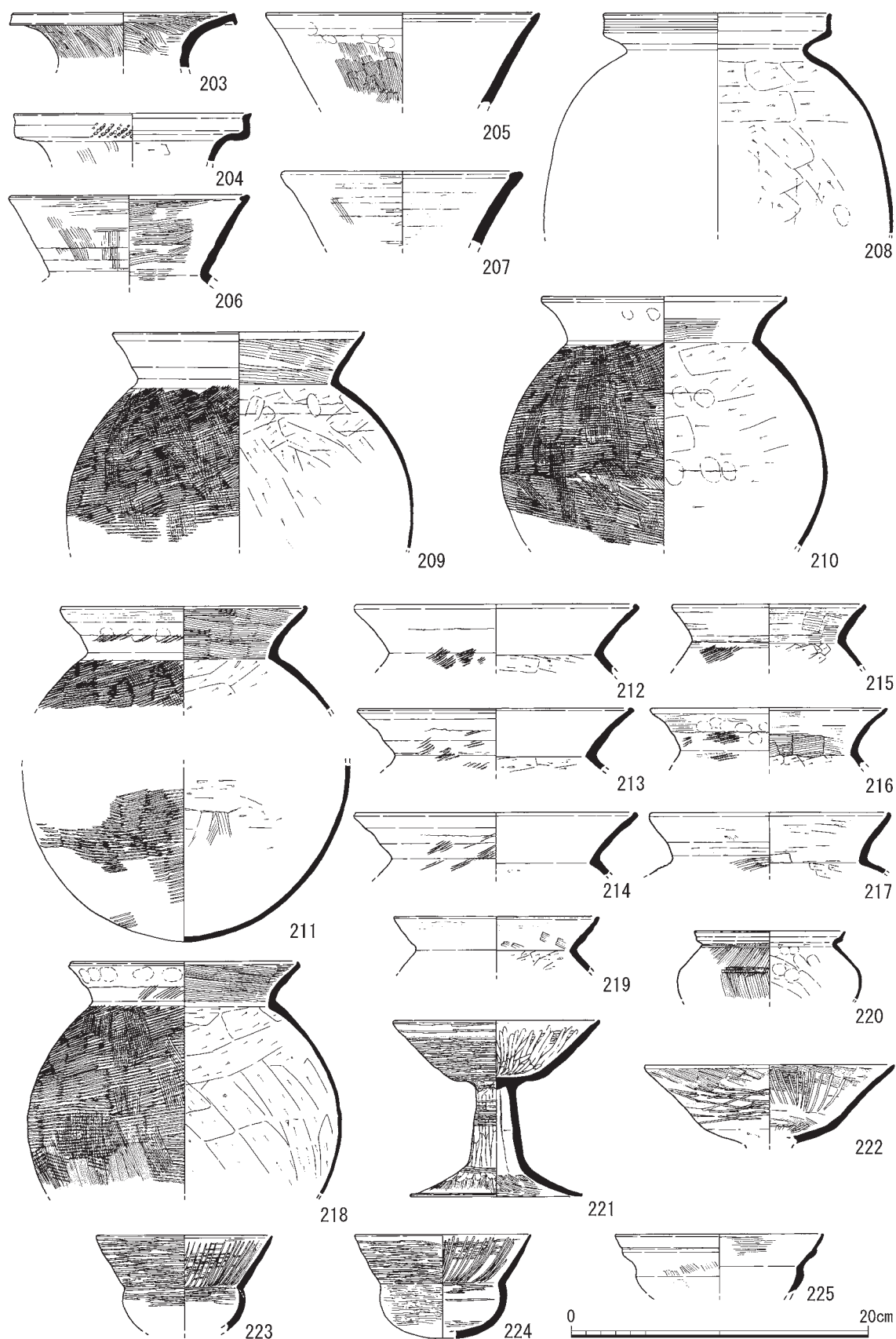
最下層~下層(第86図193~202) 193は、3区南岸の盛土層から出土した。口縁部が内湾して短く立ち上がることを特徴とする、いわゆる内湾口縁壺とよばれる東海系土器である。色調は、橙褐色を呈し、搬入土器と推定される。194・195は、弥生系タタキ成形甕である。口縁端部を立ち上げ、端面に面をなすものである。196は、単純口縁甕である。197は、壺形土器の体部である。内面にハケ調整を施す。198は、高杯杯部が深く大きく開き、内外面に丁寧な縦方向のミガキを施す。199は、高杯脚部が直線的に大きく開き、やや内湾する裾部をなす。外面には、縦方向のミガキが施され、内面にハケ調整を施す。198・199は、接合点はみられず、出土地点も異なるが、いずれもにぶい黄橙色(10G6/1)を呈し、同一個体と推定される。東海系の搬入土器とみられる。200は断面2(畦2)の中央最下層から出土した。受部に段をなす器台あるいは高杯の一部である。受部中央に、焼成前の穿孔があり、中空の器台とみられる。色調は、にぶい黄橙色を呈し、近江北部地



第86図 出土遺物実測図15 土器(1/4)
193～202：S D22最下層～下層

域からの搬入土器の可能性が高い。201・202は断面3（畦3）周辺の基盤上から出土した。201の鉢Aは、短く屈曲して開く口縁部をなす。体部外面にハケ調整を残す粗製品である。202の壺は、口縁端部を一部欠損するが、垂下口縁をなすとみられる広口壺である。下膨れの体部を特徴とする。体部上半は加飾され、肩部に櫛描列点文、刺突文、直線文等を施す。色調は橙色を呈する。東海地域からの搬入土器とみられる。最下層出土遺物には、搬入土器のなかでも、特に東海系土器が優勢である。庄内式期前半におけるこうした組成の有り方は、纏向遺跡など、畿内の主要遺跡で指摘されるところであり、当遺跡も同様の傾向がみられる。

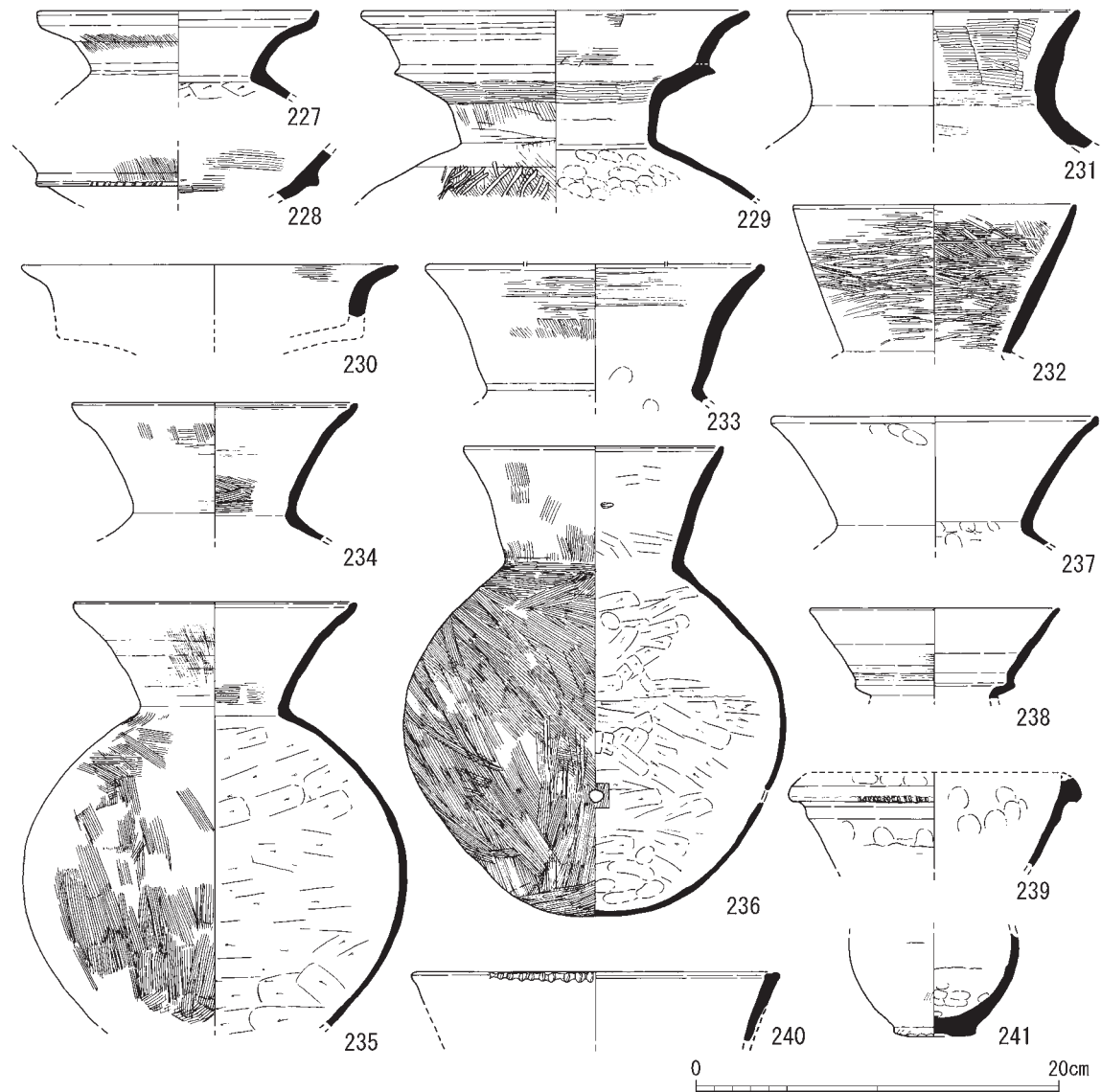
下層①<4区(断面3)>(第87図203～225) 203は広口壺Aである。口縁端部に面をなし、端部を下方に引き出す。内外面ハケ調整を施す。204は、近江系受口状口縁甕である。口縁部の立ち上がりは深く、外面に櫛描列点文を施す。205～207は、布留系の短頸口縁壺Cである。208は、有段口縁の吉備系甕^(注38)である。口縁部外面に細かなハケを施す。外面は、磨耗が著しいが、一部にミガキを残し、内面はケズリを施す。吉備土器編年におけるX a期、下田所式期^(注39)に併行する資料とみられる。209～218は、庄内系の甕Bである。219は、布留系の甕Cである。220は、東海系のS字甕である。東海廻間S字甕分類による。いわゆるS字甕B類の小形品である。東海地域のS字甕は、畿内土器編年の布留式以降に小形化したものが盛行するが、本例は口縁部端面に刻みが施されることから、S字甕A類の要素を残す。東海土器編年の廻間Ⅱ式後半に帰属し、佐山Ⅱ-4式におおよそ併行するものとみられる。221は、杯部が屈曲して立ち上がり、脚部は明瞭な稜を



第87図 出土遺物実測図16 土器(1/4)
203~225 : SD22下層①

持たず、裾部が緩やかに開く高杯Aである。杯部に稜には、沈線が施され、畿内庄内系の高杯とみることができる。外面は、横方向のミガキ調整が施される一方、杯部内面には縦方向のミガキが施され、弥生系高杯の要素を残す。佐山Ⅱ式後半に帰属するものとみられる。222は、杯部が屈曲して立ち上がる畿内系高杯Bである。223・224は、小形丸底鉢Aである。口縁部外面に横方向の精緻なミガキを、内面に横方向のち、縦方向の放射暗文状のミガキを施す。225は、小形丸底鉢Eである。有段口縁をなすが、頸部を上方に拡張するタイプで、有段口縁小形鉢のなかでも定式化する以前のものとして、編年的にはより古相を示す。^(注41)

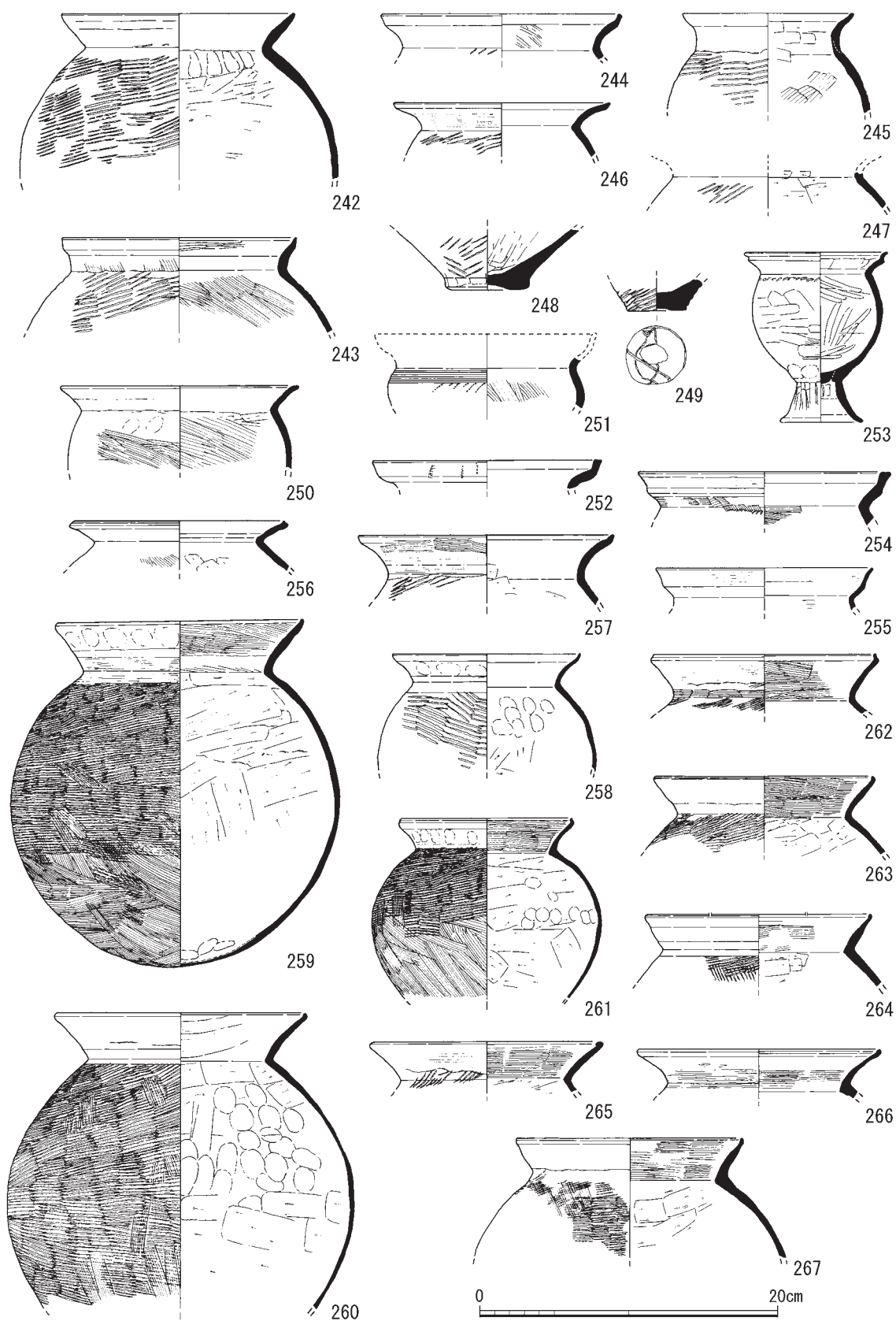
下層②<1～4区> (第88図～第91図227～317) 227～241は、壺である。227は、広口壺Bで、口縁部が大きく開き、端部を上方に立ち上げ、端部に面をなすことを特徴とする。228は、二重口縁壺の口縁部とみられる。2次口縁外面に細かな刻みが施される。東海系土器に多くにみられ



第88図 出土遺物実測図17 土器(1/4)

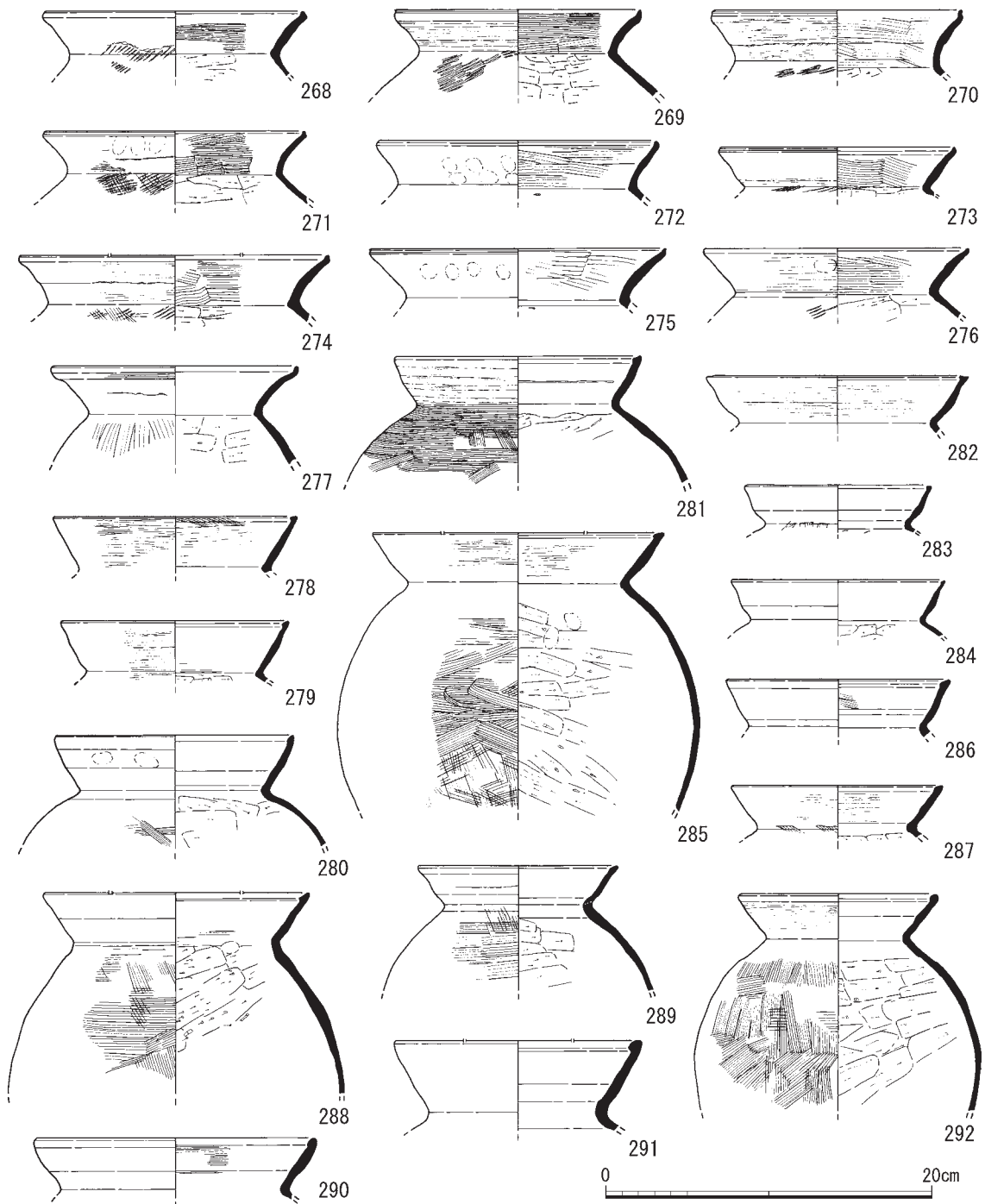
227～241：S D22下層②

る加飾要素である。229・230は、阿波系の二重口縁壺Bである。頸部は直立気味に立ち上がり、2次口縁は大きく外反する。擬口縁の上端で2次口縁を接合し、外面には条線が部分的に認められる。器壁は、頸部を薄く仕上げ、口縁部を厚く作り出すことを特徴とする。肩部外面は細かなミガキを斜交して施し、内面に指頭圧痕を連続して施している。色調は、暗橙褐色を呈し、内面に意図的に炭素を吸着させることを特色とする^(注42)。阿波地域からの搬入土器とみられるが、小片を含めて3個体以上を確認しており、個体数の少ない二重口縁壺の組成の一端を構成している。阿波編年の黒谷川Ⅲ-1式^(注43)におおよそ帰属し、古墳時前期前葉の佐山Ⅲ-1型式に併行する。230は、阿波系の二重口縁壺Bの口縁部である。2次口縁が強く外反させ、内面に炭素を吸着させている。色調は、にぶい橙色を呈する。232は、直口壺Aである。直線的に延びる口縁部を特徴とする。233・234・235・237は、短頸直口壺Bである。口縁部上半をやや外反させ、端部を上方に立ち上げる。庄内形甕の口縁部成形手法に類似するもので、山城地域に特徴的な短頸直口壺である。236は、短頸直口壺Aである。口縁部は直線的に延び、端部を丸くおさめる。238は、山陰系複合口縁壺Aの口縁部である。239は、口縁端部を拡張し、端部外面に刻みを施す直口壺である。搬入土器とみられ、東海以西の地域と推定する。240は、端部下端に刻みを施す甕の口縁部で、いわゆる淡路系とされる甕の文様要素に類する。241は、小形壺ないしは甕の底部である。底部はリング状の粘土積み痕を残し、輪台技法によるとみられる。242～292は、甕である。242～247は、弥生系のタタキ成形甕である。単純口縁をなし、口縁端部を丸くおさめる甕AⅠ(242・246)と、口縁端部に面をなす甕A2(243～245)があるが、組成の主体は甕A2によって構成され、弥生系タタキ成形甕の終息期の様相を示す。248・249は、弥生系タタキ成形甕の底部である。248は、窪み底を呈し、249はリング状の輪積み痕を残す。249の外面には沈線状の圧痕とヘラ描きによる線状痕が認められる。250は、単純口縁をなす内外面ハケ調整の甕DⅠである。251は、口縁部を欠損するが、近江系受口状口縁をなす鉢の一部とみられる。肩部に櫛描直線文と列点文が施される。252は、受口状口縁をなす近江系甕の口縁部である。口縁部外面に櫛描きによる列点文を施す。253は、小形台付甕である。肩部に櫛描列点文を施し、近江系土器の文様系統に属するが、口縁部の2次口縁は薄く短く引き出され、東海系S字甕の端部形態に類すること、またS字甕と同様に脚台をもつことから、近江・東海系の折衷土器とみることができる。色調は橙褐色を呈する。254は、受口状口縁をなす甕HⅡである。広義の近江系土器であるが、頸部の屈曲は近江系と異なり明瞭で、外面に近江系の文様要素を伴わず、ナデ調整で仕上げることから、折衷的な要素を持つ土器である。山城を含めた近江周辺地域の所産であろう。255は有段口縁甕で、外面に擬凹線文を施す。有段口縁甕には北陸系土器と北近畿系土器があるが、本例は、口縁上半を外方に緩やかに外反させ器壁を薄く仕上げることから、北陸系土器とみられる。256は、口縁端部を上方に摘み上げ、端面に沈線を施す単純口縁甕である。体部外面はハケ調整による。瀬戸内地域からの搬入品と推定される。257～267は、庄内形甕Bである。259・260～276は、口縁が外反して立ち上がり、右上がりの細い条痕のタタキ成形を行う甕BⅠである。259・262・263・265・267・270・271・273・274には、口縁部外面に粘土接合痕が明瞭に残り、頸部にタタキ成形痕が一部に



第89図 出土遺物実測図18 土器(1/4)

242~267: S D22下層②



第90図 出土遺物実測図19 土器(1/4)

268～292：S D22下層②

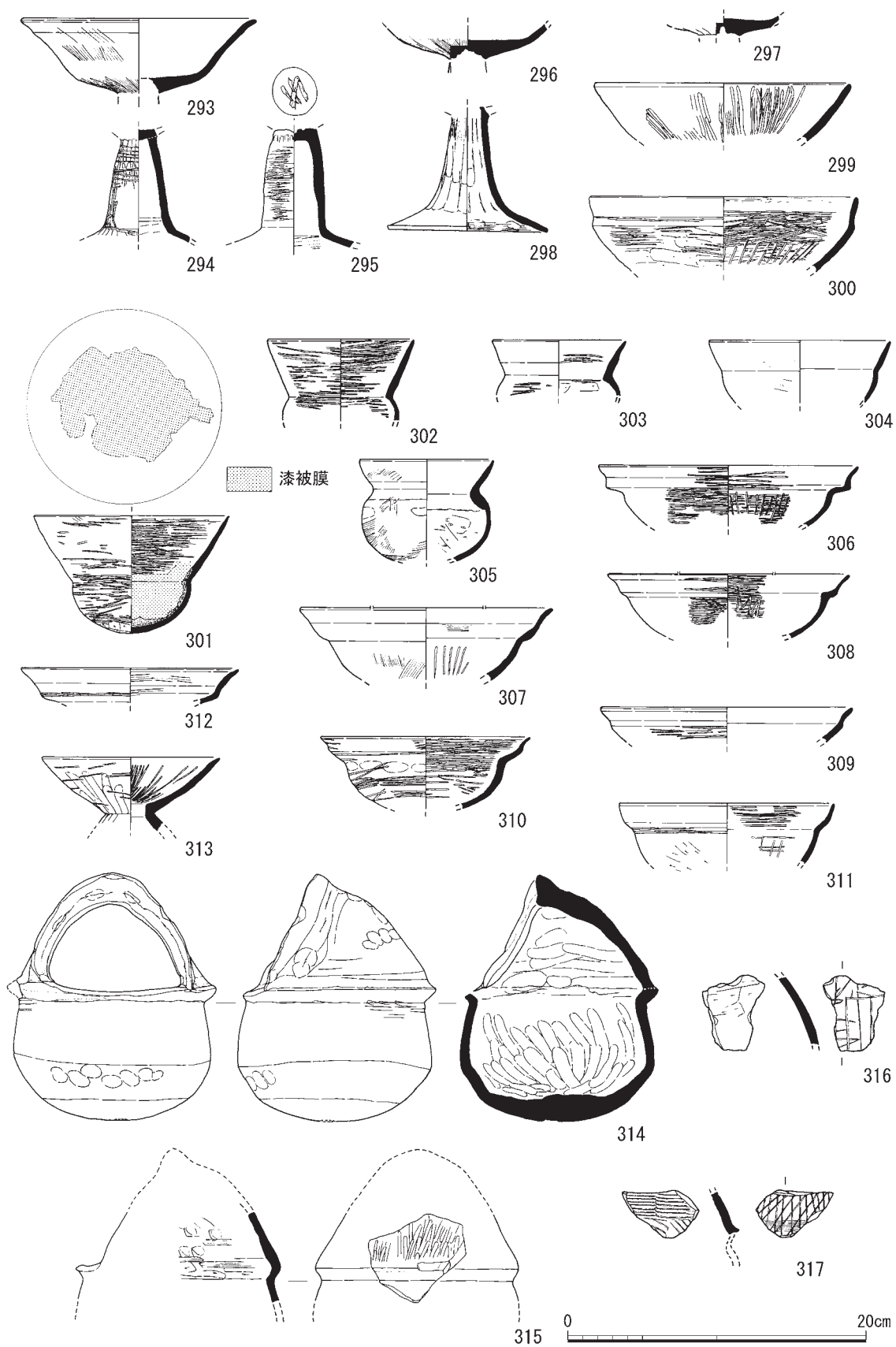
みとめられる、甕Bの特色となっている。258は、いわゆる庄内大和形甕である。左上がりの粗いタタキ成形を特徴とし、色調は暗褐色を呈する。下層出土土器のなかには、角閃石を多量に含む暗褐色の甕体部が含まれ、庄内河内形甕と推定されるが、小片のため、図化することはできなかった。庄内大和形甕B2と同様に、極めて少量であるが、搬入されている^(注44)。277は、甕Fである。口縁部が外反して立ち上がり、端部を摘みあげる。形態は庄内形甕を踏襲するが、調整は異なり、外面に斜め縦方向のハケを施す。いわゆる「布留傾向甕」あるいは「布留影響甕」とされるもの^(注45)^(注46)

であり、布留最古段階に特徴的にみられる形式である。281～290は、布留形の甕Cである。口縁端部の形態にはバリエーションがみられるが、頸部が直線的に立ち上がるもの a 1 手法 (278) と、内湾気味に立ち上がるもの a 2 手法 (281～291)、端部内面をほぼ水平に折り返し肥厚させる b 1 手法 (278)、やや上方に折り返し肥厚させる b 2 手法 (282・283)、端部内面を斜め下方に折り返す b 3 手法 (279～281、284～291) がある。布留式以降の基本手法である a 2 手法と b 3 手法を組み合わせたものが基本となるが、布留式最古相の手法である a 1・b 1 手法を組み合わせるもの (278) が含まれる。

293～300は、高杯である。293は、高杯Bの杯部で、294・295は高杯Bの脚部である。296・297は、高杯Cの杯部で、脚部との接合面となる外面中央に刺突痕がみられる山陰系高杯である。298は、脚部に稜をなさず、緩やかに裾部が広がる形態をなす。外面にハケ調整を残すことから、高杯Cの脚部と推定される。299は、深い杯部をなす高杯の杯部とみられる。内外面に縦方向のミガキを残し、東海系高杯Fと推定される。300は、杯部が屈曲して上方に立ち上がる高杯の杯部である。口縁部外面に横方向の精緻なミガキを施し、一部ヘラ状工具による圧痕がみとめられる。内面は横方向のミガキののち、暗文状に縦方向の精緻なミガキが施される。胎土は精良で、色調は灰白色 (10G6/1) を呈する。吉備系土器の搬入品とみられ、吉備編年の才の町 I 式古相、^(注47)佐山Ⅱ-1式に位置づけられる資料である。畿内における吉備系土器の最古段階の資料として、^(注48)河内地域の八尾市中田遺跡刑部土坑出土例が知られるが、ほぼ併行するものであろう。

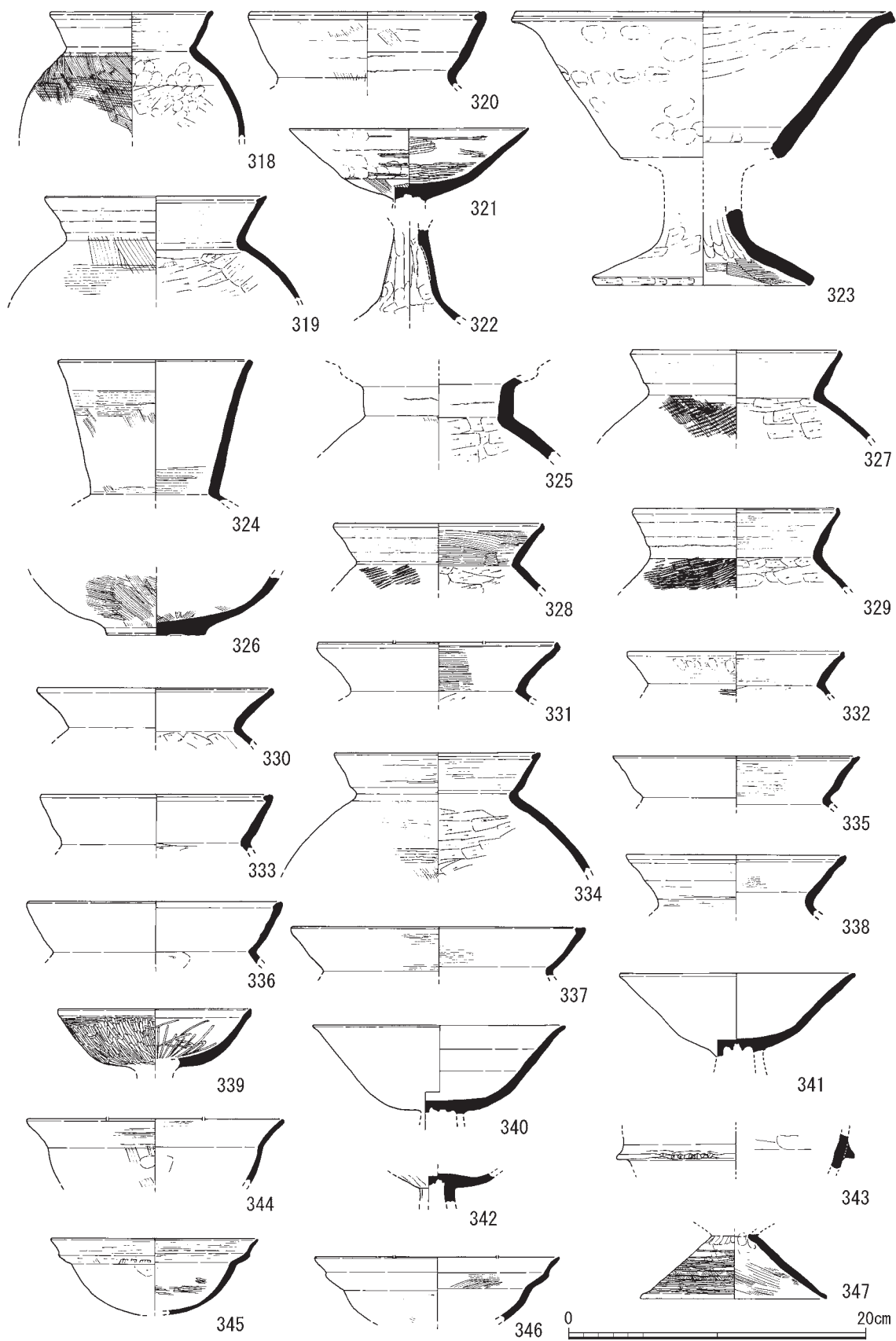
301～311は、小形丸底鉢である。301・302は、小形丸底鉢Aである。いずれも内外面に横方向の精緻なミガキを施す。301は、口縁部が大きく開く鉢で、体部内面全体に漆とみられる黒色被膜が付着する。漆の容器として2次的に転用されたものであろうか。302は、口縁部がやや上方に立ち上がる鉢である。303・305は、口縁部が短く立ち上がる小形丸底鉢Cである。304は、小形丸底鉢D 1 である。口縁部が短く立ち上がる小形丸底鉢のうち、頸部径が大きく、器高を凌駕する。306～311は、有段口縁をなす小形丸底鉢のうち、頸部を短く引き出す E 2 である。頸部は、斜め上方に引き出すものを基本となすが、水平に近い角度で引き出し、明瞭な段をなすものがある (307)。312は、小形壺ないしは、小形丸底鉢の口縁部とみられる。端部をわずかに上方に引き出す。313は、中空の小形器台Aである。口縁部径は、12cmと大きく、深い受部をなす。314～317は、いずれも手焙形土器である。314・315は無文のタイプで、鉢部は単純に外反する単純口縁に蔽部が接合する手焙形土器Bである。316・317は、手焙形土器A 2 である。いずれも蔽部の一部であり、近江系手焙形土器に特徴的な竜文とされる線刻が認められる。

S D 22下層出土土器は、各区第Ⅳ層を広い範囲で取り上げたもので、S D 22出土遺物の全体の4割以上がこの層位から出土した。土器群の帰属時期は、庄内形甕Bが比率の上では拮抗する状況で出土していること、また短頸直口壺のなかでも、庄内系の口縁形態を維持する短頸直口壺Bが顕著であることや、手焙形土器Cを含むことから、およそ古墳時代前期初葉の佐山Ⅱ-4式を中心とする資料とみられる。下限については、布留形甕の口縁部形態に、新しい要素である口縁部内面下方に拡張するものが増加することより、古墳時代前期前葉の佐山Ⅲ-1式とみること



第91図 出土遺物実測図20 土器(1/4)

293~317 : S D22下層②



第92図 出土遺物実測図21 土器(1/4)

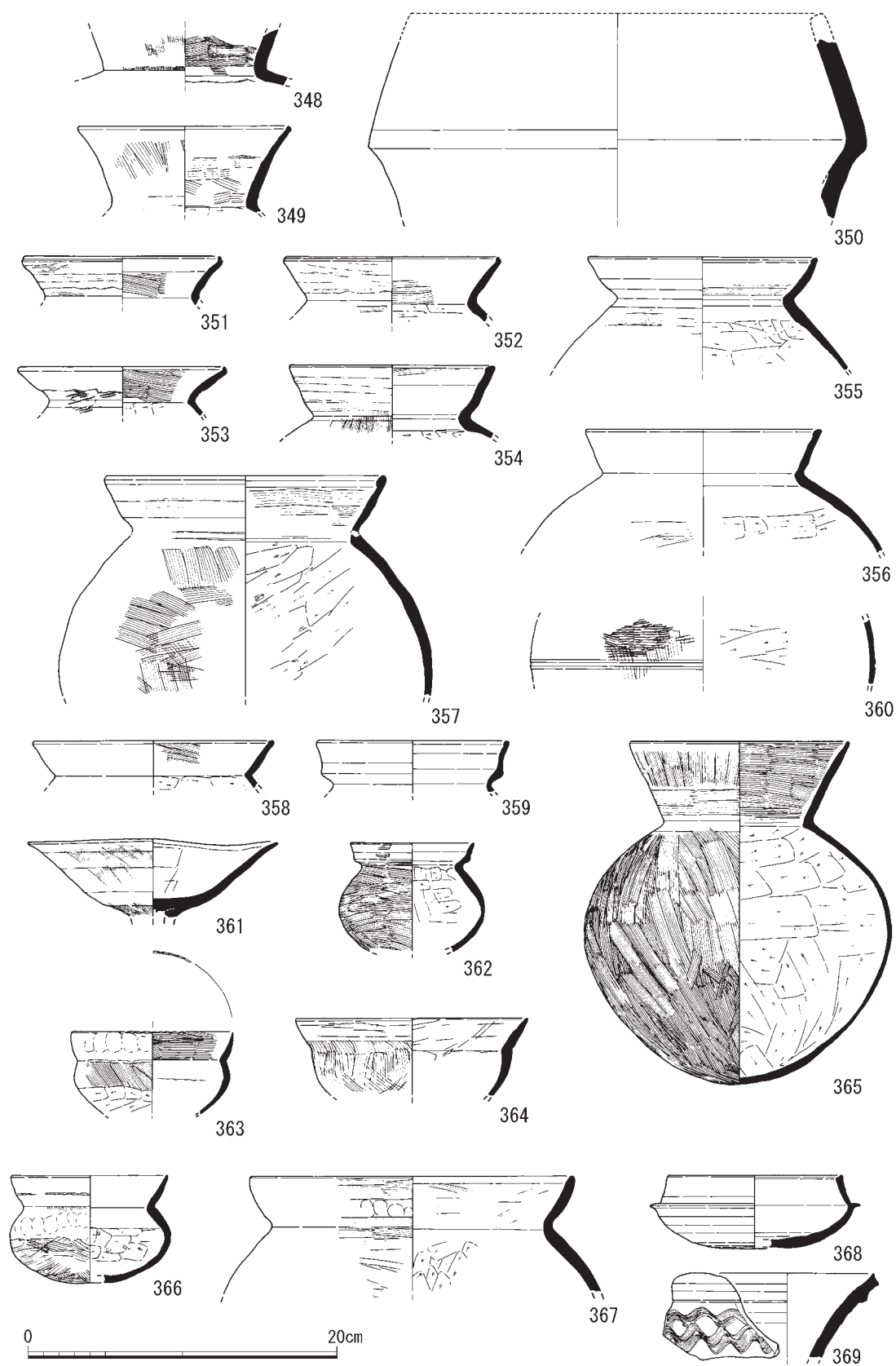
318～347：SD22中層①

が可能である。同層位には、近江系鉢や吉備系高杯、弥生系タタキ成形甕など古墳時代初頭の佐山Ⅱ-1～2型式に併行する土器群が含まれるが、こうした土器群は、先行する時期の第Ⅳ層に伴う土器群とみられ、再掘削に伴い、包含されたものであろう。

S D22下層資料には、多様な系統の土器がみられ、東海系土器、吉備系土器、阿波系土器、讃岐系土器、近江系土器、山陰系土器、北陸系土器に加え、大和・河内地域から搬入された土器が含まれる。このうち、吉備系高杯(300)は、畿内への搬入品として極めて類例の少ないものであり、近畿地方中枢地域のなかでも、河内の一部地域と並び、古墳時代初頭の最も早い時期に搬入されたものである。山城地域では、向日市東土川西遺跡で同時期の吉備系甕が出土し、木津川から淀川流域に搬入される古墳時代初頭の吉備系土器として注目されるものである。^(注49)

中層①<4区(断面3)>(第92図318～347) 318は、単純口縁をなすハケ調整甕である。口縁端部をやや外方に引き出す。山城地域の単純口縁甕は、内面ハケ調整を施すが、この資料は内面をケズリ調整し、肩部内面に指頭圧痕を施す。色調は在地系土器と異なる灰白色を呈し、能登を中心とした北陸地域からの搬入品の可能性が高い。319・320は、布留形甕Cである。口縁内面を下方に肥厚する手法Bによる。321・322は、接合点は確認できないが、同一個体とみられる高杯Cである。杯部中央の背面に刺突痕を残す山陰系高杯である。323は、深い杯部を特徴とする高杯である。杯部口縁を外方に引き出し、脚部は、裾部で大きく開く。全体に厚手の作りで、杯部内面に幅の広いミガキが認められる。層位は、3層以上にわたり、広い範囲で破片が接合したもので、古墳時代中期後半の所産とみられる。324は、直口壺Aである。頸部が直線的に長く拡張する。325は、筒状の頸部をなす二重口縁壺A2である。326は、下膨れの体部をなす壺の底部である。体部外面ハケ調整で、底部は平底をなす。327～332は、庄内形甕Bである。327・329は、口縁部に粘土接合痕を明瞭に残す。333～338は、布留形甕Cである。339は、高杯Eで、杯部内外面に縦方向のミガキを施す。340～342は、山陰系高杯Cである。杯底径が広く、杯部が深いもの(340)と、杯部がやや浅く底径の広いもの(341)があるが、山陰系高杯のなかでは、前者がより古相を示す。343は、鉢の体部とみられる。突帯にキザミを施す。344は、鉢Aである。体部外面にハケ調整を施す粗製の鉢である。345・346は、有段口縁をなす小形丸底鉢Eである。345はE2類で、頸部が短く口縁部につながるものである。346はE1類で、頸部は長く拡張し、頸部よりも短い口縁をなす。345は定型化したタイプで、口径の縮小化が顕著であり、小形丸底鉢E類のなかでも新しい段階のものである。347は、中空のいわゆるX字形小形器台の脚部である。小形丸底鉢E類とセットで出土する傾向の高い器種である。347は、器高が低く、小形器台のなかでも新しい要素をもつことから、345の小形丸底鉢E2類と組み合わせる可能性が高い資料である。

中層②<1～4区>(第93図348～366) 348は、二重口縁壺Bの頸部とみられる。阿波系二重口縁壺に特徴的な頸部内面の炭素の吸着が認められる。暗赤褐色を呈し、阿波地域からの搬入土器とみられる。349は、短頸直口壺Bの口縁部である。内外面にハケ調整を施す。351～353は、庄内形甕Bである。354～357は、布留形甕Cである。358は単純口縁をなす甕Gで、口縁端部を外方に肥厚させる。359は、山陰系の複合口縁甕Iである。口縁端部内面を肥厚させる。360は小片



第93図 出土遺物実測図22 土器(1/4)
348～366：S D22中層② 367～369：S D22上層

であるが、突帯状の粘土帯を巡らせる甕の体部と推定される。一部にタタキ成形痕をみとめるもので、近江系甕と畿内の弥生系タタキ成形甕の折衷的要素をもつ甕である。361は、高杯Cである。362は、有段口縁の小形壺Aである。外面にハケ調整を施し、山陰系土器の系統を引く。363は、小形丸底鉢Cである。体部外面のハケ調整を1次調整としたのち、下半部に丁寧なケズリを加える。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部に細かなキザミを施すもので、近江湖北地域のいわゆる長浜甕^(注50)の分布地域に由来する資料と推定する。364は小形丸底鉢D 1である。頸部の屈曲は浅く、頸部径は大きく、緩やかに短く立ち上がる口縁形態をなす。内外面をハケ調整する粗製の小形鉢である。365は、短頸直口壺Aである。直線的に延びる口縁をなし、口縁端部は丸くおさめる。体部外面、口縁部内外面に細かなハケ調整を、体部内面にはケズリを施す。布留系の調整手法をもつ壺である。366は、小形丸底鉢Cである。器高に比して、口径が大きく、口縁部は短く立ち上がる。体部は深く丸みをもち、外面をハケのちナデ調整する。

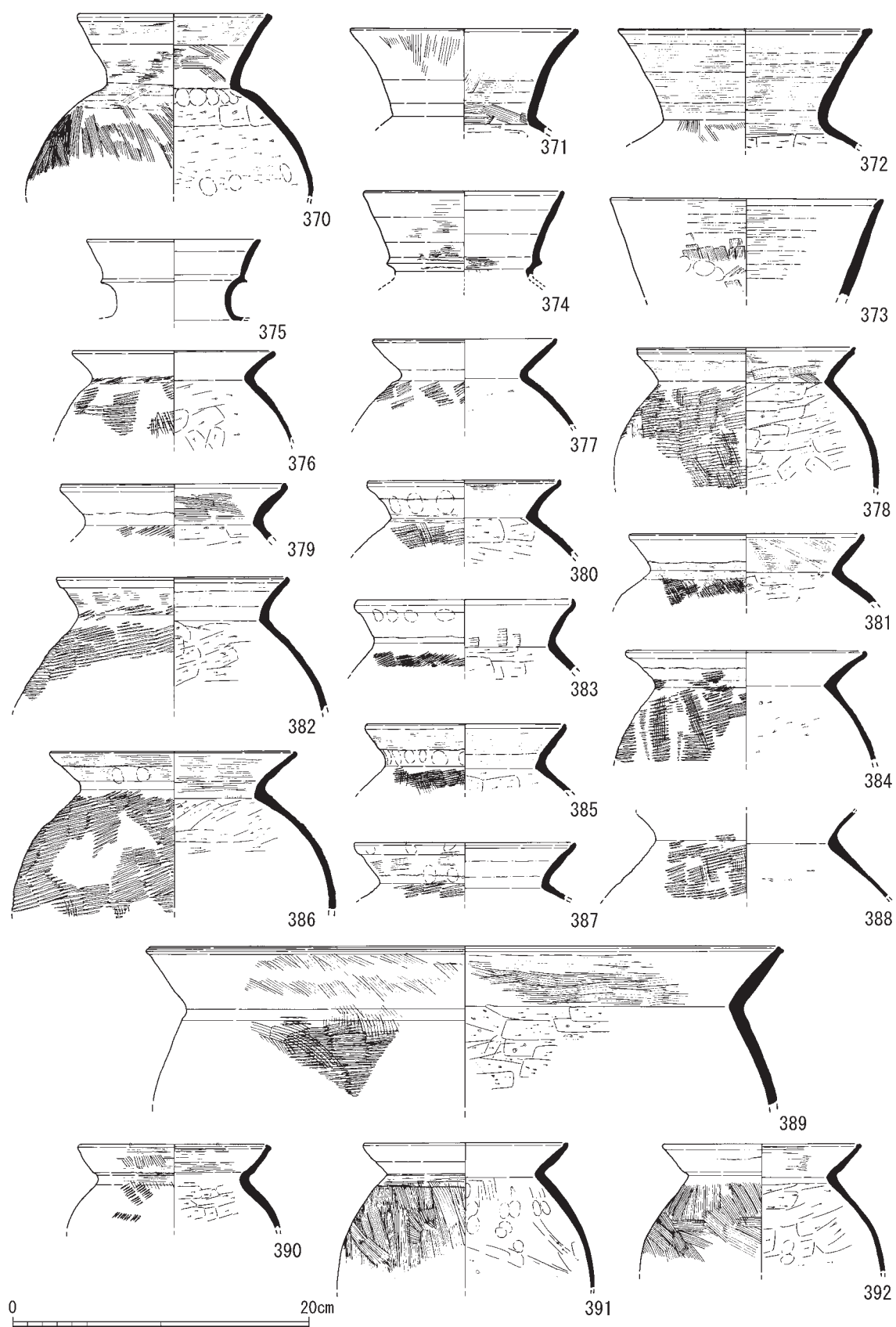
中層の帰属時期は、布留系甕の口縁部が厚みを増し、端部を下方に折り返す特徴をもつものが主体となることや、山陰系技法による高杯Cの杯部が浅くなり、杯部底部径の縮小傾向が強まること、小形精製器種を保管する小形壺類が調整方法においてハケ調整を基本とし、粗製品を中心としていることなどから、佐山Ⅲ-1式に帰属する資料とみることができよう。搬入土器である讃岐系有段口縁壺などの形態からも齟齬はない。

上層(第93図367～369) 367は、単純口縁をなす甕である。口縁端部内面には布留形甕にみられる明瞭な肥厚はみとめられないが、内傾する面をなす。肩部にはヨコハケを施し、体部内面をケズリで仕上げる。布留系甕の系統を引く資料である。368は、須恵器杯身である。口縁部の立ち上がりは深く、口縁端部内面に段をなす。杯底部外面には丁寧な回転ヘラケズリが施される。おおよそ陶邑TK23型式に併行する資料とみられる。368は、断面3の層位的位置を確認できる資料であり、第12層中から出土している(第35図)。369は、須恵器大甕の口縁部である。端部外面に1段の稜をなし、緻密な2条の波状文を施す。焼成は極めて堅緻で、色調は暗青灰色を呈する。おおよそ陶邑TK23型式を前後する時期の資料と推定される。

土器溜まり S X 51(第94図370～第96図436) S X 51は S D 22の中でまとまって完形率の高い土器が出土した土器溜まりである。

壺は量的には少なく、図化しえたのは370から375の6点のみである。370から372は布留系の短頸直口壺Cである。口縁部から肩部まではヨコナデで成形し、体部外面はハケで仕上げる。口縁部形態には単純に丸く収めるものと372のようにやや肥厚させるものがある。374はいわゆる山陰系の二重口縁壺である。375も山陰系の複合口縁壺であるが、丸い体部が取り付く小形のものであろう。

376から403は甕である。甕には庄内形甕B(376～388)、布留形甕C(393～399)外面をハケ調整で仕上げる甕D(390～392)のほか、庄内系の大形甕E(389)、外来系のもの(400～403)などがある。甕Bには右上がりのタタキで、口縁端部に沈線をもつ甕B 1 a、沈線を持たず面を持たせるように整形するB 1 bがあり、両者の比率はほぼ拮抗する。いずれの型式も佐山遺跡や内里八丁遺跡



第94図 出土遺物実測図23 土器(1/4)

370~392 : S D22(S X51)

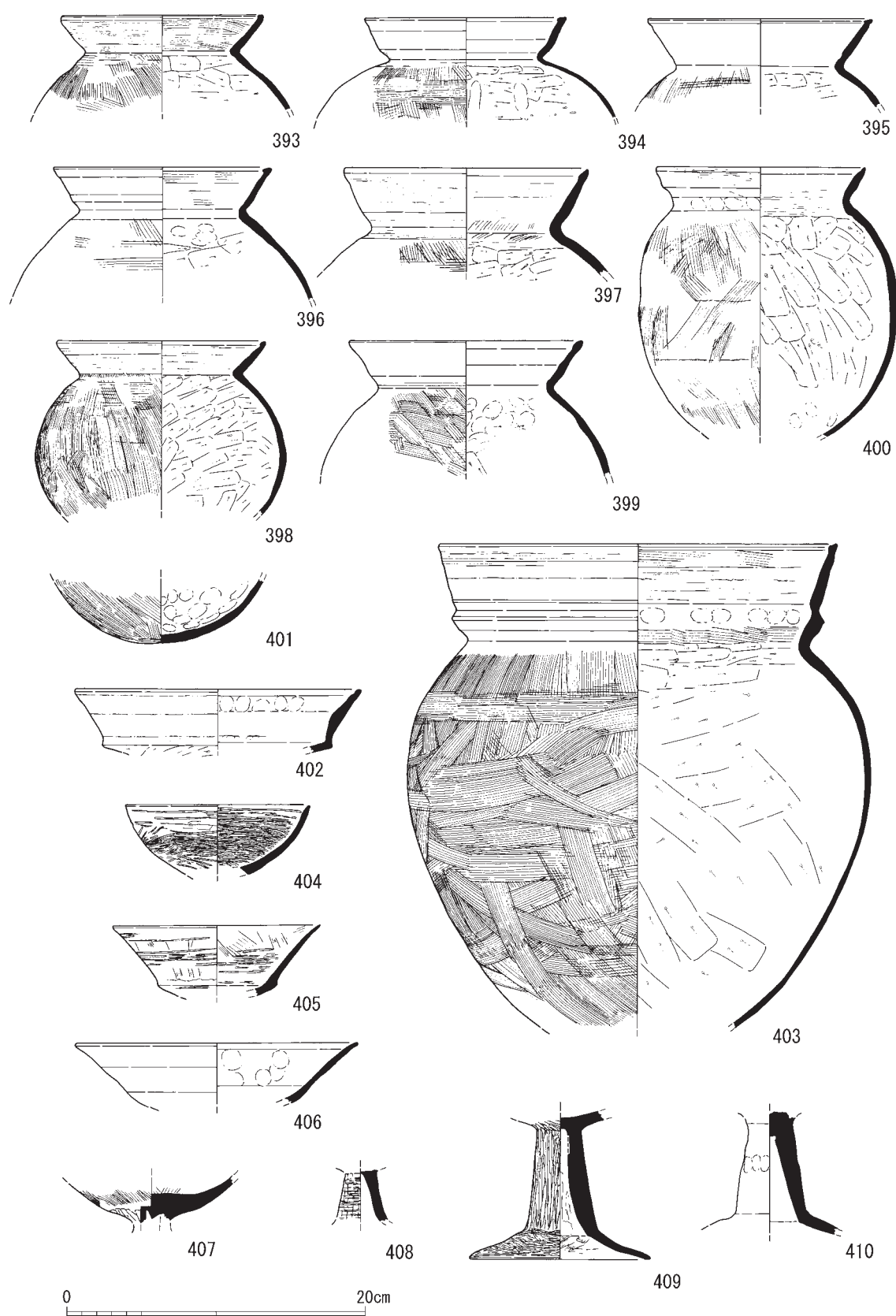
など巨椋池南岸で多くみられる山城産のものと共通点が多く、S X51から出土したものも多くは地元で生産されたものであろう。ほぼすべての甕Bは体部をタタキによって成形する際に口縁部の途中までタタキ出すことによって作り出しており、口縁部中位以上は一定の乾燥工程を経た後に接合されている。そのため、やや長く外反する口縁部には粘土接合痕を残すものが多く、接合の際の指頭圧痕が顕著に観察される。内面は頸部直下まで時計回りのケズリを施すものがほとんどだが、376、377のようにナデによって器壁を整えるものもある。389も庄内形甕の範疇の中で理解できるものであるが、口縁部径が42cm以上に復元することができる超大形品である。多くの甕Bとは違って口縁部はタタキ出しによらず、ヨコナデによって整形される。

390から392は甕Fである。390はやや厚手のものであり、外面にはわずかにタタキの痕跡を認める。393から399は甕Cとした布留形甕である。口縁端部の形状には、わずかに内側に肥厚させるもの(393、396、398、399)やわずかに上方へ拡張させるもの(397)、面を持たせるもの(394)、外突させるもの(395)などのバリエーションがみられる。外面の調整をみても、肩部にヨコハケが施された定型化したもの(394～396)がみられる一方で、398のように体部上位にタタキを残すものもある。なお、口縁部形状のバリエーションと内外面の調整技法には相関関係は見られず、安定しない。389は形態は甕Cと共通するが内面に指頭圧痕を多くのこし、搬入品である可能性も残る。

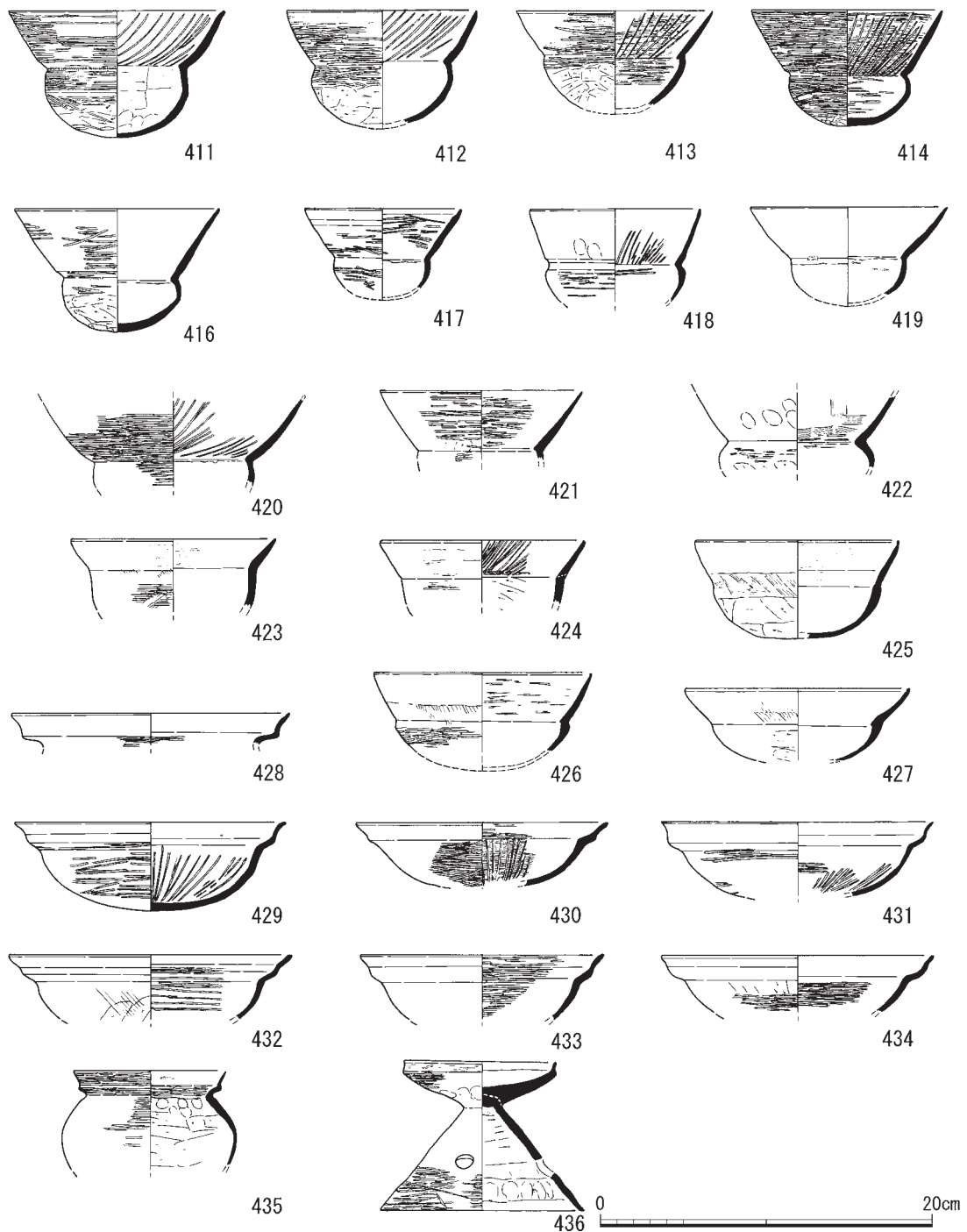
400は内湾気味の口縁部をもち、口縁端部をつまみ上げる甕である。体部外面はハケで仕上げる。体部内面は縦方向のケズリがみられるが、頸部直下までは及んでいない。湖北地域から能登などにかけて類似した器形のものが散見するが、搬入品かどうかは不明である。401から403は複合口縁を持つ山陰系の甕Iである。401は底部のみであるが、内面に多く指頭圧痕を残す特徴などから、複合口縁甕の底部であろう。403は口径26.5cm、胴部最大径31cmを測る大形のものであり、肩部にはハケによる横方向の調整が施される。

404から410は高杯である。404は椀形の低脚高杯の杯部である。内外面とも緻密なヨコミガキが施され、にぶい黄橙色の胎土をもつ。中部瀬戸内系のものであろうか。405は高杯Eである。やや小型化した杯部には幅2～3mmほどの横方向のミガキが施される。406・407は山陰系の高杯Cである。406はヨコナデで仕上げられた粗雑なものである。407は杯底部外面に棒状工具による刺突が残る。408から410は高杯脚部である。それぞれ408は低脚高杯、409は高杯D、410は高杯Cのものであろう。

411から434は小形丸底鉢類を示した。先に示した型式分類に従うと、411から423が小形丸底壺A、424から427が小形丸底壺C、428から434が小形丸底鉢Dである。411から413は小形丸底壺A 1としたもので、体部高が口頸部高を凌駕するものである。413は体部上半は緻密なミガキを施し、体部下半はケズリで仕上げる。内面は緻密なミガキが施された後、黒化処理がなされており、黒色を呈する。口縁部と体部の屈曲部には接合時の痕跡として1mm程の突起が残る。同じような痕跡は小形丸底鉢A 1の一部やC 2にもみられる。414から419は体部高が口頸部高を下回る小形丸底壺A 2である。製作技術には2者が認められ、414や419のように非常に精製された胎土で製作



第95図 出土遺物実測図24 土器(1/4)
393~410 : S D22(SX51)



第96図 出土遺物実測図25 土器(1/4)
411~436 : S D22(SX51)

され、内外面ともに緻密なミガキを施すものと、やや粗製のものがある。419精製された胎土で製作されており、明赤色を呈する。内外面とも緻密なミガキで仕上げられる。421も精製品であり、内面には放射状のミガキが施される。内外面とも黒化している。

417は内外面とも細筋のミガキが施されるものの、一次調整のナデが顕著に残り、口縁部は凹凸が著しい。口縁端部は内面からの強いナデによってわずかに上方に拡張されている。422も外

面に凹凸を残すものであり、口縁部外面には指頭圧痕が残る。420は胎土に粗砂を含む黄橙色を呈する粗製品である。調整は摩滅のため不明瞭であるが、口縁部と体部の間には接合痕が残る。423は頸部径10cmを測るやや大型のものである。胎土にはわずかに砂粒を含むが、緻密なミガキで仕上げられる。内面には放射状のミガキが施されている。

425から427は粘土接合痕を明瞭に残し、外面をハケで仕上げる粗製の小形丸底鉢C 2である。425は体部外面下半にケズリを施し、やや内湾する口縁部を持つ。いっぽう、426、427は口縁部に粘土接合痕を残すことでは類似するものの、体部下半の最終調整はハケで仕上げており、ハケによって体部上位に見られる屈曲部を作り出す。425は同じ南山城地域の佐山遺跡などでも一定量見られる形式であり、小形丸底鉢A・Dと親縁性が高いのに対し、426、427は明らかに製作技術を異にしており、小形器種ではなくむしろ甕・壺の製作技術が用いられた可能性が高いと考えられる。

428から434は小形丸底鉢D 2とした、いわゆる有段口縁鉢である。色調は428から432は赤系、433・434は浅黄色を呈し、放射状の暗文は前者にしか伴わないようだが、両者の間に大きな製作技術の違いは認められない。429は唯一完形に復元することができたもので、やや深い杯部をもつ。内外面とも緻密なミガキを施し、内面には放射状の暗文が見られる。430も口縁部と体部の体部の間は明瞭に屈曲する稜を有する。また、口縁端部には黒色の付着物が認められる。432は体部外面下半にわずかにケズリの痕跡が認められる。胎土にはわずかに砂粒を含む、やや粗製のものである。433・434は浅黄色の胎土をもつ一群である。ともに摩滅のため明瞭ではないものの、内外面ともにミガキで仕上げていると思われる。

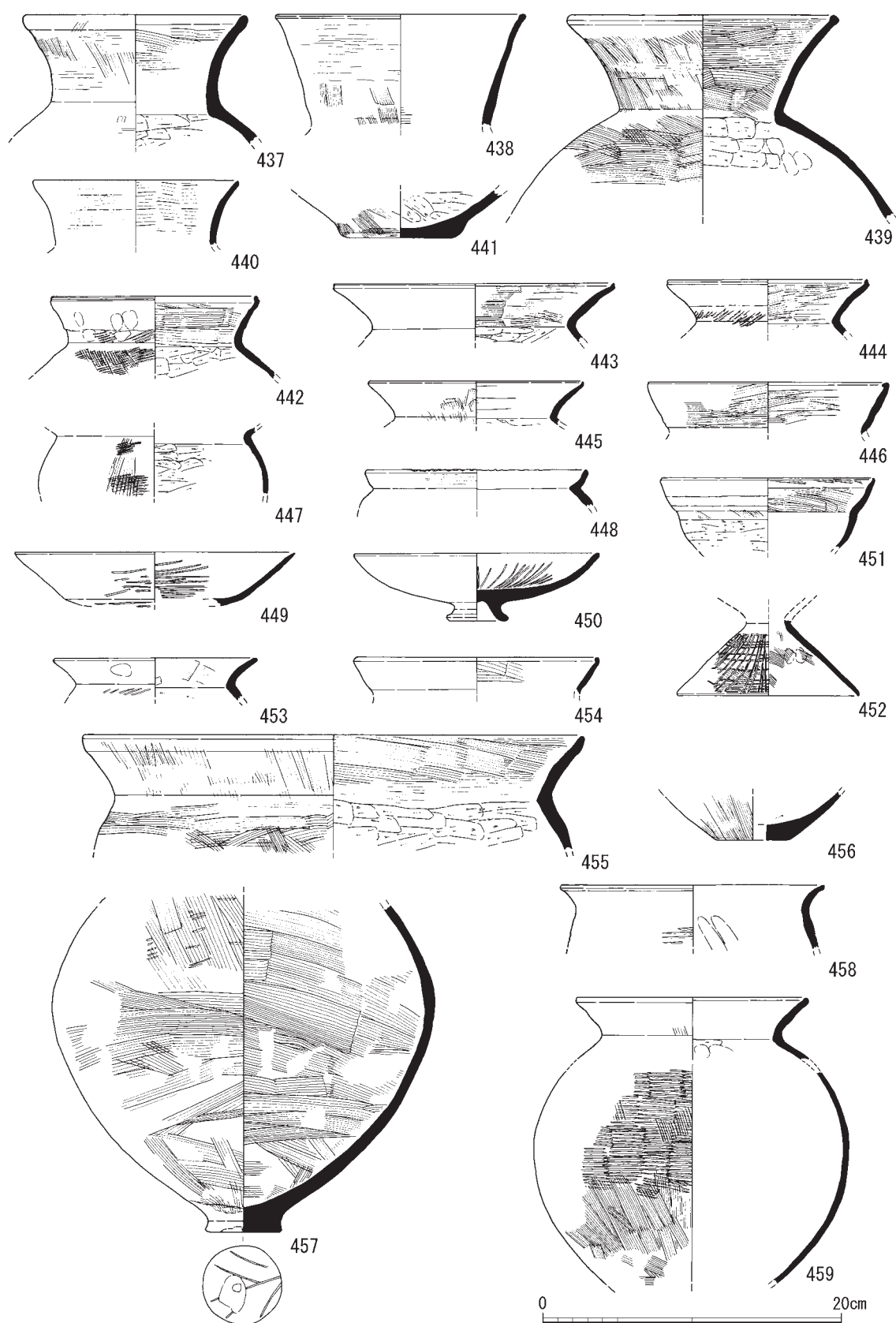
435は球胴状の体部に有段口縁を持つ小形壺Aである。外面には口縁部まで緻密なミガキが施されている。内面下半はケズリ、上半にはナデあるいは指頭圧痕が残る。中部瀬戸内系のものだろうか。436は皿状の受部をもつ中実の小形器台Bである。受部、脚部とも外面には緻密なヨコミガキが施される。脚部には3方向に円形の透かしが穿たれている。

S X51の土器群はやや時間幅を想定する必要はあろうが、おおむね佐山ⅢA－1期に比定される。

土器溜まりSX56 (第97図437～452) 壺は長頸壺、直口壺などがある。437は長頸壺である。器壁は厚く、口縁端部は上方に拡張する。東海系の可能性がある。439は布留系の短頸直口壺Cである。ハケで仕上げられた口縁部に、やや内側に肥厚させる口縁端部をもつ。440は短頸壺の口縁部だろうか。ヨコナデによって成形されている。

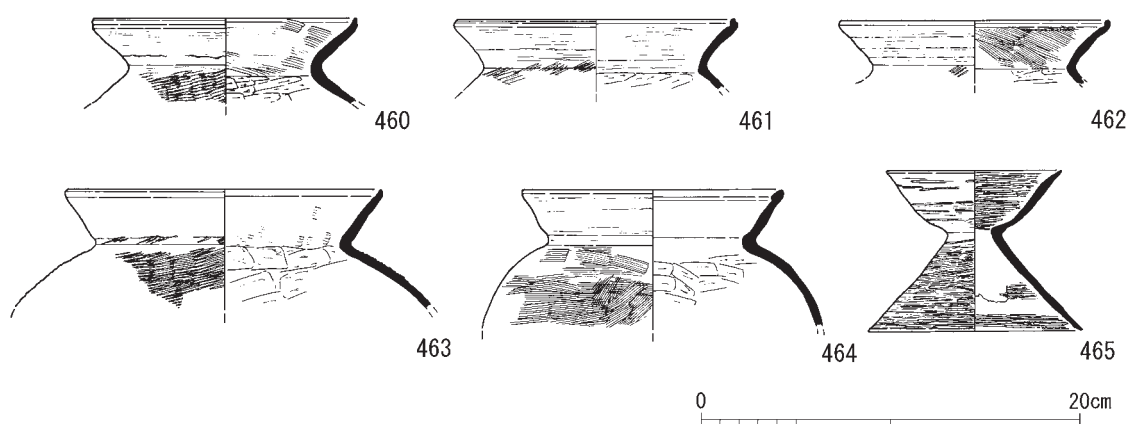
442から448は甕である。442から445は庄内系の甕Bである。442は頸部上までタタキ出しで成形されるもので、口縁端部には沈線をめぐらせる。446は布留系の甕Cである。447は甕、もしくは壺の肩部だろうか。内面にはケズリによる段がつけられている。

450は山陰系の低脚杯である。451は小形丸底鉢C 2である。口縁部の立ち上がりの整形が不明瞭であり、小形丸底鉢C 1に近い器形となっており、両者の親縁性を示している。体部外面下半はケズリによって稜が作り出されている。なお、内外面ともミガキ調整は見られない。452はX



第97図 出土遺物実測図26 土器(1/4)

437～452 : S D 22(S X 56) 453～456 : 同(S X 57) 457 : 同(S X 60) 458・459 : 同(S W 61)



第98図 出土遺物実測図27 土器(1/4)

460～465：S D 22(S W 61)

字形を呈する精製の小形器台Cの脚部である。S K 56は、437など若干古相を示す遺物も存在するものの、佐山Ⅲ－A 1期を中心とする土器群であろう。

土器溜まりSK57 (第97図453～456) 453は甕Aである。わずかに体部にタタキが観察される。454は甕Bである。端部は明瞭につまみ上げ、面を持たせる。455は復元口径33cmを測る大形の甕口縁部である。456は壺の底部であろうか。外面にはミガキが見られる。なお、454、456は角閃石、雲母片を含有する暗褐色の胎土で作られた生駒西麓産のものである。今回の調査では多くの庄内形甕が出土しているが、明確に河内から搬入されたとわかるものは少なく、S D 22から出土した中では454のほか、図化の困難な小片等の3点のみであった。S K 57の土器群は明確に時期を示す遺物は出土しなかったが、河内産の庄内形甕の存在から庄内式中段階、佐山Ⅱ－3期に位置づけられよう。

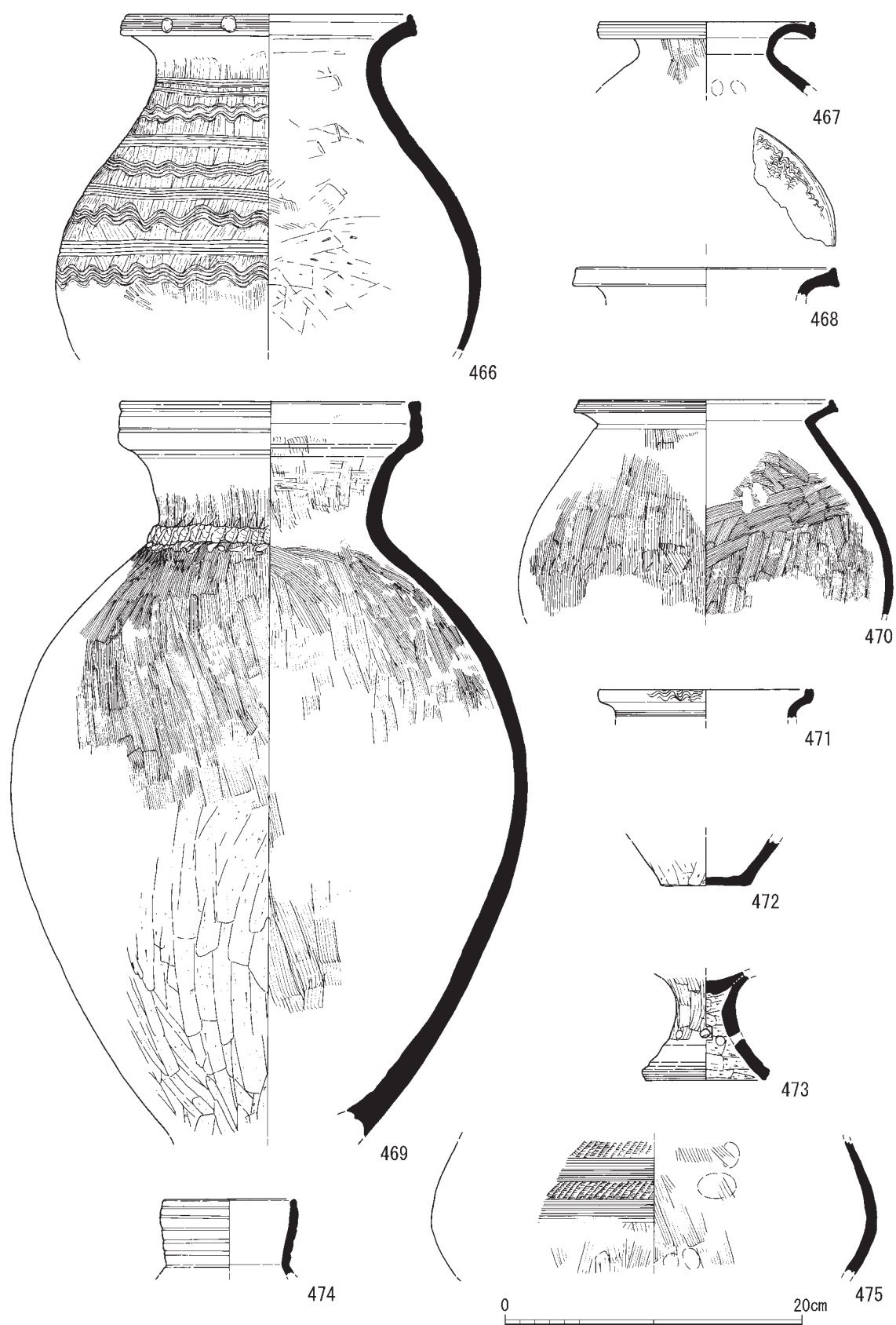
土器溜まりSK60 (第97図457) 図化しえたのは甕1点のみである。口縁部を欠くが、やや球胴化した体部に突出した上げ底気味の底部を持つ。タタキ成形の後、内外面とも入念なハケで仕上げられる。

水制遺構SW61 (第97・98図458～465) 458は口縁部を緩く外反させる異形の甕である。459は細筋の平行タタキで成形される甕である。内面のケズリは頸部直下まで及んでおらず、やや不明瞭な稜をもつ、いわゆる庄内大和形甕と呼ばれる甕である。460から463は甕B 1である。いずれもタタキ出しで頸部上までを成形した後、口縁端部を貼り付ける、地元産のものであろう。口縁端部に沈線を持つB 2 (460・461) と、面を持たせるもの (462・463) がある。464は布留系の甕Dである。465は中空の「X」字形小形器台Cである。S K 61の土器群は定型化した甕D及び小形器台Cの存在から、佐山Ⅲ－A 1期に位置づけられよう。

(高野陽子・桐井理揮)

④C地区出土の土器

溝S D 31 (第99図466～475) 466は広口壺Aである。口縁部はわずかに上下に広がり、端部に



第99図 出土遺物実測図28 土器(1/4)
466～475 : S D31

凹線文3条を施文後、円形浮文を貼付ける。胴部には櫛描直線文帯4帯、櫛描波状文帯4帯を交互に配す。外面の調整はタテハケであり、胴部最大径付近に左上がりタタキの痕跡が一部残る。内面の調整は胴部中位にヨコ方向のケズリを、上位にはハケ調整を施す。467は広口壺Cである。口縁端部を上下に拡張し、凹線文を2条施す。外面はタテハケ調整後、口縁部にナデ調整を施す。内面は胴部上半に指押さえが確認される。468は広口壺の口縁部である。口縁端部を上下に拡張する。口縁部内面には櫛描波状文を施す。内外面の調整はナデである。469は有段口縁壺Aである。底部を一部欠損するもののほぼ完形に近い。口縁部はほぼ直立し、凹線文を2条施す。内外面の調整はナデであり、端部はやや凹む。頸部には粘土を貼付け、その上に櫛状工具により刻みを施し、さらにその下には櫛描列点文を施す。外面の調整は胴部上半から頸部にかけてタテハケ後、底部から胴部中位程までタテ方向のケズリ調整を施す。内面の調整は一部摩滅により不明瞭なものの、全体にタテハケ調整を施していたものと考えられる。470は小型の甕Aである。外面全体にスガが付着する。口縁部は上下に拡張し、端部に凹線文を2条施す。胴部最大径付近にはヘラ状の工具により列点文を施す。外面の調整はタテハケ後、口縁部をヨコナデ調整する。内面はタテ方向とナナメ方向に幾度か方向を変えながらハケ調整を施す。471は受口状の口縁部をもつ近江系の甕Bである。小型である。口縁部に櫛描波状文を施す。頸部には凹線文を2条施す。内外面の調整はヨコナデである。472は底部である。外面の調整はタテ方向のケズリである。内面の調整は摩滅のため詳細は不明である。473は高杯の脚部である。円形の透孔を6方向に穿っていたものと考えられる。外面の調整は透孔を挟んで上側ではタテハケ調整、下側はナデ調整である。内面の調整はヨコ方向のケズリである。脚端部は拡張せずそのまま終息し、そこに凹線文を2条施す。杯部底面は円盤充填法により成形される。474は水差形土器の口縁部である。口縁部に抉りをもつ。口縁部には凹線文6条を施す。内外面の調整はナデである。475は壺の胴部片である。文様は上から順に櫛描列点文と櫛描直線文を交互に施す。外面の調整はタテハケ後ナデで、下半はケズリ調整である。内面の調整はタテハケ後、ナデとユビオサエである。

(吉村慎太郎)

⑤弥生時代中期土器と各遺構の編年的位置

小林行雄によって弥生土器編年の枠組みが提示されたのち、発掘によって増加していく資料をもとに各地域で詳細な土器編年の確立が試みられた。そして、下水主遺跡の位置する山城地域においては、森岡秀人が『弥生土器の様式と編年』^(注51)で、最初の総合的な枠組みを提示している。中期については、森岡は凹線文出現以降をⅣ様式とし、それを3時期に細分した。ただし、この時点では資料数が十分ではなかったため、のちに若林邦彦が市田斉当坊遺跡や東土川遺跡の新出資料を山城地域の標準資料と位置づけ、近畿地方の全体的な編年を提示した。^(注52)若林編年では、凹線文出現以降の近畿地方の中期後半が、4つの時期に細分されており、山城地域ではその前半が1時期にまとめられ、後半が他地域と同じく2時期になっている。この点が中期後半を3つに等分した森岡編年と異なっている。一方、市田斉当坊遺跡の標準資料の位置づけについては、松野元宏が報告書で示した編年と若林編年とで大きく異なっている。^(注53)付表5に各編年の基準資料を示し

たとおり、見解の一致をみていない状況といえよう。そのため、下水主遺跡の中期土器の詳細な時期認定を行うには、前述の各編年を再整理し、弥生時代中期後半の編年を新たに提示する必要がある。

中期後半は凹線文が出現した時期であり、佐原編年^(注54)におけるⅢ様式後半以降にあたる。凹線文は、地域によりその普及度が異なるという特徴をもつ。^(注55) 櫛描文器種も継続する山城地域では、凹線文に加え、変化の早い器種の属性変化により変遷をとらえるのが適切だと考えられる。そこで、今回、有段口縁壺と水平口縁高杯に着目した。2種とも、Ⅱ様式に出現してⅣ様式の終りに衰退する短命な器種であり、他器種と比べて変化が明瞭である。一括資料の充実した市田斉当坊遺跡の土器でその変遷を追うことが可能であり、それを示したのが第100図になる。なお、凹線文出現以降を、ここではⅣ様式と呼称する。

まず、有段口縁壺は大型品として登場し、頸部が短く、口縁部の屈曲が明瞭である。頸部には粘土紐を巻き付け、指を押し付けて施文する。ところが、Ⅲ様式になると口縁部の屈曲がやや緩やかなものも出現し始め、Ⅲ－2様式には大型品の口径が小さくなるとともに、中型品が出現する。さらに、Ⅳ様式になると凹線文が口縁部に施文されるようになり、頸部の粘土帯の施文には指に代わり櫛状工具が使用されるようになる。Ⅳ－2様式には口縁部の屈曲が緩やかになり、胴部最大径の位置も上位から中位に下がって肩の張らない形態へと変化する。Ⅳ－3様式になると、頸部の粘土紐が省略される。胴部はハケ調整が省略され、タタキ目が表出するものもみられるようになる。

次に、水平口縁高杯は初期には水平な口縁の端部が垂下しないのが特徴であった。脚部は裾にむかってなだらかに広がり、内面のケズリ調整は顕著ではない。Ⅲ様式には内面のケズリ調整により薄い裾部と、ケズリ調整の及ばない分厚い柱状部をもつ脚部が現れる。Ⅳ様式になると、杯部の口縁端部を垂下させるようになる。Ⅳ－2様式では脚部の柱状部は長くなく、内面の上方までケズリ調整が及ぶ。ところがⅣ－3様式になると、杯部の口縁端部が垂下し、長くなった脚柱状部に沈線を連ねた文様が施されると同時に、裾部は穿孔され、加飾化される。内面のケズリは裾部に限定され、裾端部を強調するようになる。中期までは手間をかけて食器がつけられたといえよう。

以上の変遷を踏まえて、市田斉当坊遺跡の一部の土器を標準資料とした編年を提示する(付表5)。この二種の土器を含む一括資料の他器種の様相も考慮し、下水主遺跡の中期土器の時期を特定してみよう。

S D22(43層) 鉢の口縁部と頸部、器台の脚部、台の裾部に凹線文のあることから、出現期よりは新しいⅣ－2様式に位置づけられる。

S D22(1次調査) 甕Aの胴部は口径を大きく凌駕する。広口壺の口縁部の垂下も著しい。直口壺と椀形高杯の口縁部には凹線文が施される。これらから、凹線文出現期よりも下ると理解される。130の高杯は、杯部の水平部分が発達しておらず、脚部も短い特異な形態であるが、脚部内面は全体的に削られている。Ⅳ－2～3様式の様相ととらえられる。

付表5 編年対照表

森岡1990		若林2003		松野2004(市田齊当坊)	長友
IV-1	大畠方形周溝墓SD0107古、SK0113古 神足6号方形周溝墓SX-1058、北溝底 神足SB-2801	中期後半様相1	市田齊当坊 方形周溝墓SD99	IV-1	SKB776 SKB297 SEC111
IV-2	大畠1次方形周溝墓SD-0107新 大畠土壙SK-0113新 今里(長岡京83次)HトレSK-8380 雲宮下層 上里西ノ口地点SD-4804 3層		東土川SD336012	IV-2	SHC80 SHC92
IV-3	中久世C地区溝3 狐谷横穴群土壙	様相2新	市田齊当坊SHC92	IV-3	SKC478a STA97 SD99 SDC25
					SHC92 STA97 SKC162 SKC478a

	有段口縁壺 (大型)	(中型)	水平口縁高杯
II 3			
III 1			
III 2			
IV 1			
IV 2			
IV 3	1～3 : SDC513 (2-3) 4 : SKB165 (3) 5 : SKB845 6・7 : SDC114 8 : SKB1164 9 : SKB776 10 : SKB1197 11・13 : SDC99 12 : SHC80 14 : SKC162 15・16 : SHC92		

第100図 有段口縁壺と高杯の変遷

S K42 大型の甕A 1点である。胴部は口径を大きく凌駕するものの、胴下部のミガキ調整は丁寧に密に施されていることから、IV－3様式までは下らず、IV－2様式と理解される。

S D22西壁護岸材下層 有段口縁壺の口縁部である。口縁部に凹線文が数条施され、わずかに残る頸部には、粘土帯が貼り付けられていないので、IV－3様式とするのが妥当だろう。

S D22同3区護岸材周辺 有段口縁壺の口縁部である。口縁部の形態と文様が護岸材下層出土品と類似しており、IV－3様式と理解される。

土器溜まりS X73(4次・6次調査) 小型甕149は内外面をナデ調整している。在地の典型的な調整方法ではないが、胴部がわずかに頸部をこえる程度のふくらみであり、頸部の屈曲が弱いことから、IV－3様式までは下らない。全体的には、広口壺の口縁部に凹線文が施され、大型甕は胴部が膨らんでいることから、IV－2様式と理解される。

S D22(4・6次調査) 152のみ時期が異なる。縄文時代の突帯文の深鉢である。広口壺は口縁端面に凹線文を施し、口縁下端部が垂下するものもある。有段口縁壺の口縁部は段が緩やかで凹線文が連続して施される。別個体だが、粘土紐の巻かれた頸部があり、櫛状工具で施文されている。以上の点から、IV－2様式に比定される。甕は胴部最大径が口径を超える幅をもち、口縁端面には凹線文が施される。器台の脚部には凹線文があり、脚端部が拡張される。椀形高杯の杯部の口縁部に凹線文が施されている。これらの点からもIV－2様式との理解が整合的である。

S D31 広口壺には口縁部に凹線文が施されており、IV様式の範疇にある。有段口縁壺の屈曲部は緩やかな形態を呈し、粘土紐を巻いた頸部は櫛状工具で施文されることから、IV－2様式に位置づけられる。水差し形土器の口縁部には連続した凹線文が施されている。甕Aの胴部最大径は口径を大きく凌駕するが、ハケ調整が省略されず丁寧に仕上げ調整されている。脚部も低く、ケズリ調整を上方まで施している。これらの特徴から、全体としてIV－2様式との理解が妥当であろう。

以上より、下水主遺跡出土の弥生土器はIV－2・3様式の時期幅で理解される。搬入品の有無についてみると、生駒西麓産細頸壺1点、近江系甕1点が明らかな外来品として理解される。465の広口壺は内面ケズリ調整が施されている点でやや特異であるものの、直線文と波状文を交互に施す文様構成は在地の範疇で理解される。明らかな外来品と識別できる土器は、この時期5%を超えないのが通常であり、標準的な様相を呈しているといえる。

(長友朋子)

⑥古墳時代初頭～前期の土器と各遺構の編年的位置

i)山城地域の古式土師器編年

今回の調査では、A・C地区を中心に、多量の古式土師器を出土した。おもな遺構は、A地区溝S D349とB地区溝S D22の資料であり、小破片を含めると古墳時代初頭から前期にいたる約1200点以上の土器を出土している。各遺構の時期を把握し、その変遷を明らかにするため、山城地域のなかでの、古式土師器編年をみておきたい。

山城地域の古式土師器編年については、國下多美樹が乙訓地域を中心にした資料から庄内併行

		佐山 (高野) 2003	山城 (森岡) 1990	山城 (吹田) 2003・2006	南近江 (伴野) 2003	近江 (中居) 2010	東海 (赤塚) 1997・2002	纏向 (豊岡) 1999	大和 (寺沢) 1986	山城地域周辺資料
弥生時代後期	前葉		V-1	I期	古	1	八王子宮 I			中臣遺跡52次1号住居 木津城山遺跡SX05 長法寺遺跡SD22808 岡崎遺跡2号墓 燈籠寺遺跡SH03・06 今里遺跡SB1223・SK1222 谷山遺跡SH03 備前遺跡SD01 和泉式部町遺跡SH12 中臣遺跡67次SK2 木津川河床遺跡SH10 水垂遺跡SD101 中臣遺跡67次SE7 水垂遺跡SD98 大切遺跡SD01 馬場遺跡SE10823 鴨田遺跡SX2401 鴨田遺跡SK3007 下植野遺跡SH395677 雲宮(下八ノ坪)遺跡SD5308 雲宮(古市森本)遺跡SD1702 棕ノ木遺跡4次SH01 中海道遺跡SH09
	中葉						II			
	後葉	1	V-2	II期	V 中	2	山中 I	1 2 3		
	末	2	V-3	III期	新 5	1	山中 II	1 2 3		
		3	V-4	IV期	6	2	廻間 I	0 1 2 3	纏向1類	
		4	V-5	V期	1	3	古新 4	1 2 3	纏向2類	
	古墳時代初頭	1	VI-1	VI期	2	1	廻間 II	4 1 2 3	纏向3類	
		2		VII期	古 1	III 1	松河戸 I	4	纏向4類	
		3 古新		VIII期	2	IV 2	同 II	1 2 3 4	纏向5類	
		4		IX期	3					
古墳時代前期	佐山 II 式				古 2					布留0
	佐山 III 式	1 A 2 B 1 古新 2			中 4 新 5 6					布留1 布留2 布留3 布留4古

第101図 山城地域における古墳時代土器編年の併行関係

期の細分案を提示して先鞭をつけたが、さらに森岡秀人が弥生時代後期の編年につづき、「終末期」の土器群として、京都市中臣遺跡や向日市東土川西遺跡など、河内地域や吉備地域などの搬入土器を含む資料群を提示し、「第VI様式」と位置づけている。^(注57) 森岡は、第VI様式は新古に分けられると予見し、その後こうした編年を受けて、吹田直子が山城地域編年として弥生時代後期から古墳時代前期にいたる編年案を提示している。^(注58)

庄内併行期の基準資料となる一括資料が限られるなかで、2003年の久御山町佐山遺跡の調査では、弥生時代後期後半から古墳時代前期にいたる大量の土器が出土し、弥生後期末から庄内式初頭、さらに布留式にいたる基準資料を得ることができた。一括資料における詳細な時間列を把握することができる資料群であり、古式土師器編年案を提示したところである。^(注59) そこで明らかになったことは、多くの地域が庄内形甕を搬入するなかで、山城地域では、地域内で大量に庄内形甕を生産しているという点、さらに、庄内形甕の生産が急激に活発化する時期は、佐山II-4式であり、畿内中枢地域では布留形甕の生産がはじまり、庄内形甕の生産がピークを過ぎるとされた段階(寺沢編年布留0式、米田河内編年庄内IV式期)にあたるという点である。すなわち、山城地域の庄内形甕の生産は、畿内における庄内形甕の生産体制が、変換期を迎える段階にあたに大きく展開することが明らかとなった。

布留式成立以前となる佐山II-4式に先行する土器相は、従来、山城地域の当該期の変遷を辿ることのできる一括資料に恵まれず、庄内式から布留式への変換期の土器編年を困難なものにし

ていた。しかしながら、佐山遺跡の一括資料群のなかで、山城地域の庄内形甕の地域生産に先行して、河内産庄内形甕が組成の主体を占める段階(佐山Ⅱ－3型式)を設定できることが明らかとなり、庄内式併行期から布留式期に至る土器編年を細別することが可能となった。

下水主遺跡の調査では、溝SD22を中心に、佐山Ⅱ式後半を前後する時期の土器が多量に出土しており、本報告では山城地域における古式土器器編年の基準として佐山土器編年を用いる。他地域との併行関係は、第101図に示すとおりである。

ii) 検出遺構の時期

SD22からの出土土器は、大きく4時期に分けられる。前節で明らかにされた①弥生時代中期後葉と、②古墳時代初頭～前期前葉の土器群、③古墳時代中期後葉の土器群、④古墳時代後期後葉の土器群である。古墳時代の②、③の土器群は、再掘削された溝に伴う土器であり、④の土器群は、溝状の落ち込みに廃棄されたものであったとみられる。このうち、土器量が最も多い段階は、②の古墳時代初頭から前期前葉であり、弥生時代中期の埋没した流路上を大規模に人為的に再掘削した溝に伴う土器群である。その量は、破片を含めると1200点を超えており、SD22出土土器の総量の約8割を占めている。佐山編年に照らして、本報告の中心となっているSD22出土土器を中心に、編年的な位置づけを明確にしておきたい。

溝SD22 第Ⅵ層 再掘削されたSD22の最下層の土器群を「第Ⅵ層下層」とした。4区における一括性の高い資料である。その組成は、小形の定式化しない口縁部外反度の強い古式の二重口縁壺に、タタキ成形による弥生形甕、広口壺、手焙形土器等を含む。甕は、いわゆる畿内第Ⅴ様式系のタタキ成形による甕が組成の主体であり、これに若干の弥生系のハケ調整甕などが含まれる。甕の内面調整は、いずれもヘラケズリ調整はみられず、庄内形甕は含まれない資料群である。畿内庄内式土器編年は、庄内式初頭の土器群の位置づけに、庄内形甕の成立をもって位置づける見解と、^(注62)小形精製器種である小形器台の成立をもって位置づける見解があるが、佐山編年では、小形器台が含まれる資料群が、庄内形甕が搬入される資料群に先行することを遺跡の一括資料のなかで提示している。庄内式初頭の土器群の位置づけに、庄内形甕に先行して小形器台が成立している段階が想定され、SD22第Ⅵ層はこうした時期の資料であり、おおよそ佐山Ⅱ－1式に位置づけることができる。廻間Ⅱ式古相の東海系の内湾口縁壺の存在や高杯、北近畿系とみられる有段口縁甕や、近江系の中でも古式の形態を示す手焙形土器の存在など、搬入土器の併行関係からみても整合的である。

この層位から採取した樹木の1点を、酸素同位体比年輪年代の対象とし、A.D.162年の年代値を得ている。また、土器175(第85図)の炭化物の加速器質量分析(AMS分析)も同時に実施した(付編2・3参照)。

溝SD22下層 下層資料は、SD22出土土器の主体となる土器群である。溝全体を通じて、区ごとに広い範囲での取り上げを行った土器群である。堆積層については、各区における土質が異なる部分も多く、繰り返し小規模な掘削がなされたり、あるいは洪水時の水位の上昇などが影響しているとみられる。一括性をもつ資料群ではないが、溝の存続期間を知ることでできる資料

群である。

土器構成は、Ⅵ層下層にみる弥生系タタキ成形甕が極めて少なく、出土した甕のうち、庄内形甕が約60%、布留形甕約30%、その他搬入を含む甕が約10%という構成であり、庄内形甕が他を圧倒している。庄内形甕については、山城地域に特徴的な形態をもつ甕B1が主体である。庄内大和形甕については、わずかながら確認されるが(第89図258)。庄内河内形甕についても、実測が困難な甕小片が搬入されているが、極めて少量に留まる。在地産とみられる庄内形甕が甕の組成の中心をなす一方、布留形甕が増加し、口縁端部が下方に肥厚するものがみられる。また、小形丸底鉢にも、口縁部の立ち上がりや口径が小さくなるものが含まれ、無文の手焙形土器Bが出現している。こうした点から、S D22下層資料の時期は、およそ佐山Ⅱ-4式～佐山Ⅲ-Ⅰ式に該当する資料とみられる。

溝S D22の上限を検討するうえで、参考となる資料は、搬入土器の吉備系高杯(第91図300)である。吉備編年X a期、才の町式に帰属する資料であり、畿内では搬入例は極めて少なく、河内地域の八尾市中田遺跡刑部土坑出土資料^(注64)などをあげるにすぎない。刑部土坑資料は、米田河内編年の庄内式期Ⅰ期に比定されるものであり、前述した第Ⅵ層下層資料の時期と齟齬なく、古墳時代初頭におけるS D22の再掘削段階の資料が含まれたものとみられる。他にも、近江系鉢(第89図251)についても、弥生系甕の文様を踏襲し、庄内併行期最古相に併行するものであり、同様な指摘ができる。溝S D22下層の出土土器群から、再掘削段階のS D22の存続期間として、佐山Ⅱ-1式～佐山Ⅲ-1式(古墳時代初頭～前期前葉)と比定することができよう。

(高野陽子)

(2)木製品

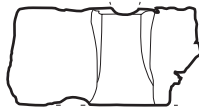

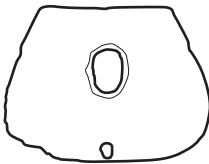


















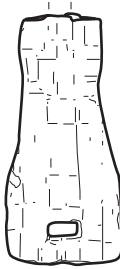













①S D22出土

溝S D22の調査において出土した木製品は農具、漁撈具、工具、容器、楽器、武器、武具、雑具、祭祀具、建築部材、板材や割材などの加工痕を残す加工木、護岸材に用いられた木材、自然木など、多量の木製品が出土した。全ての木製品は溝S D22下層より出土し、弥生時代中期及び古墳時代前期の年代にあたる。木製品及び加工木は702点出土した。整理作業の過程では自然木を含めた1192点を計測し、木製品や加工木を中心に193点の図化を行った。木製品の種別や部分名称は、『木器集成図録 近畿原始篇』^(注65)(上原1993)を参考にし、第102図に分類を整理した。また、加工木については加工精度の高い板、加工痕を残し、製作・製材途中と考えられる板材、割材や小径木の芯持丸木材に面取りを行い、棒状に作り出した棒材、芯持丸木材(丸太)に加工を施す加工木(芯持材)、原木を分割した割材に分類した。

以下、分類表に基づいて報告を行う。

a. 農具(第103図476～第104図～482) 農具は直柄横鋤(476)、泥除け(477)、又鋤(478～481)、木錘(482)の合計12点が出土している。

直柄横鋤 476は農具の直柄横鋤身である。1区より出土した。使用者から見て左端と柄孔より上部を欠損している。柁目材を用いる。平面は長方形を呈する。柄孔の周囲には隆起を作り出

農具										
直柄横鍬		曲柄又鍬	泥除け		竪杵	横槌	目盛板	木錘		
										
工具		運搬具	漁撈具		容器			楽器		
斧柄		舟	網杵	櫂	盤	盒子	槽	琴		
縦斧	横斧									
										
武器・武具			祭祀具		雑具					
盾	剣鞘	剣形	陽物形	舟形	指物椅子	発火具		有頭棒	もえさし	
						火錐杵				
						火錐臼				
建築部材					杭	加工木				
梯子	垂木	壁材	柱根	部材		板	板材	棒材	割材	芯持丸木材
										

第102図 木製品分類図

す。隆起は刃部から柄孔に向かって高くなり、最大高2.2cmを測る。柄孔の周囲は擦り減っており、使用痕であると考えられる。

泥除け 477は農具の泥除けである。1区より出土した。上部を欠損する。平面は下ぶくれの不整円形を呈する。榫目材を用いる。本体中央部には長径6.0cm、短径3.6cmの楕円形の柄孔を穿孔する。下端の中央部には長径2.0cm、短径1.4cmの楕円形の孔を穿つ。樹皮などで泥除けと柄を緊縛するための孔である。

曲柄又鋤 478・479は農具の曲柄又鋤のナスビ形鋤身である。榫目材を用いる。加工痕を残さず、全体を平滑に仕上げる。後面端部は面取りを行い、稜を作り出す。前面は平坦に仕上げる。側面の笠部の突出は弱い。後面軸部には圧痕が確認でき、柄との接合の緊縛痕であると考えられる。478は3区より出土した。刃部の片側を欠損する。笠部から刃部の外形はくびれ部を作り出した後にさらに湾曲する形態を呈する。側面形は刃先に向かって厚みを減じる。479は2区より出土した。笠部と刃部の一部のみが残存する。刃部の平面形態は中ほどを境として、上半は笠部まで外反し、下半は緩やかに内湾する。

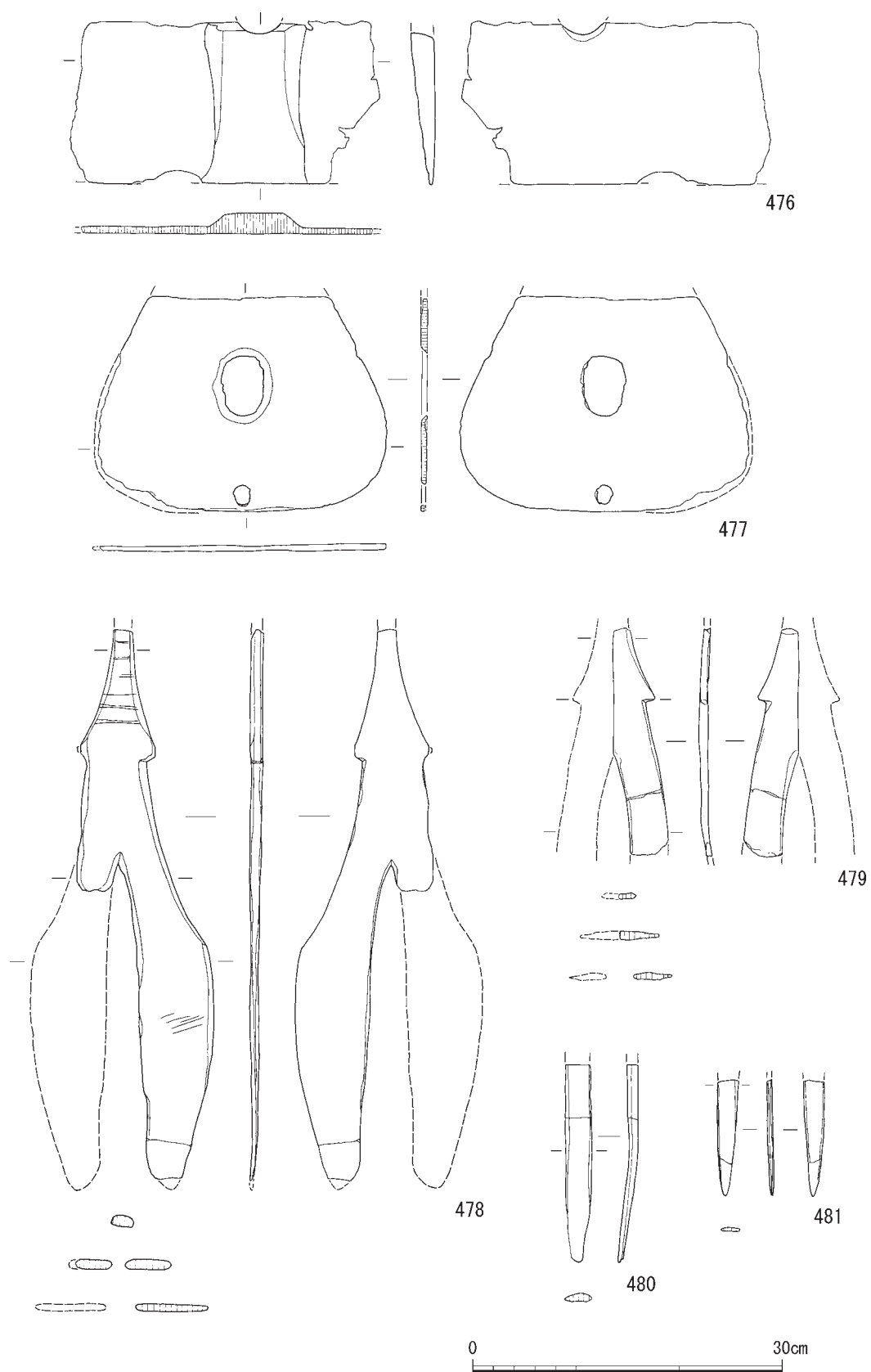
又鋤 480・481は農具の又鋤である。刃部のみ残存する。榫目材を用いる。平面形は刃先に向かって幅を減じ、先端を尖らせる。側面端部を面取りし、前面と後面を作り分けている。480は2区より出土した。側面形は刃先に向かい幅を減じながら、前面側に湾曲する。481は3区より出土した。

木錘 482は農具の木錘である。3区より出土した。芯持丸木材を用いる。断面は楕円形を呈する。両側の小口部分には加工痕と切断の際に折り取った突起を残す。本体の中央部分を削り、紐を懸けるための浅い溝を作り出す。溝は幅1.8cm、深さ0.4cmを測る。溝内部には加工痕を残す。また、表面には鋭利な刃物で切り込まれた斜め方向の細い加工痕を密に残す。

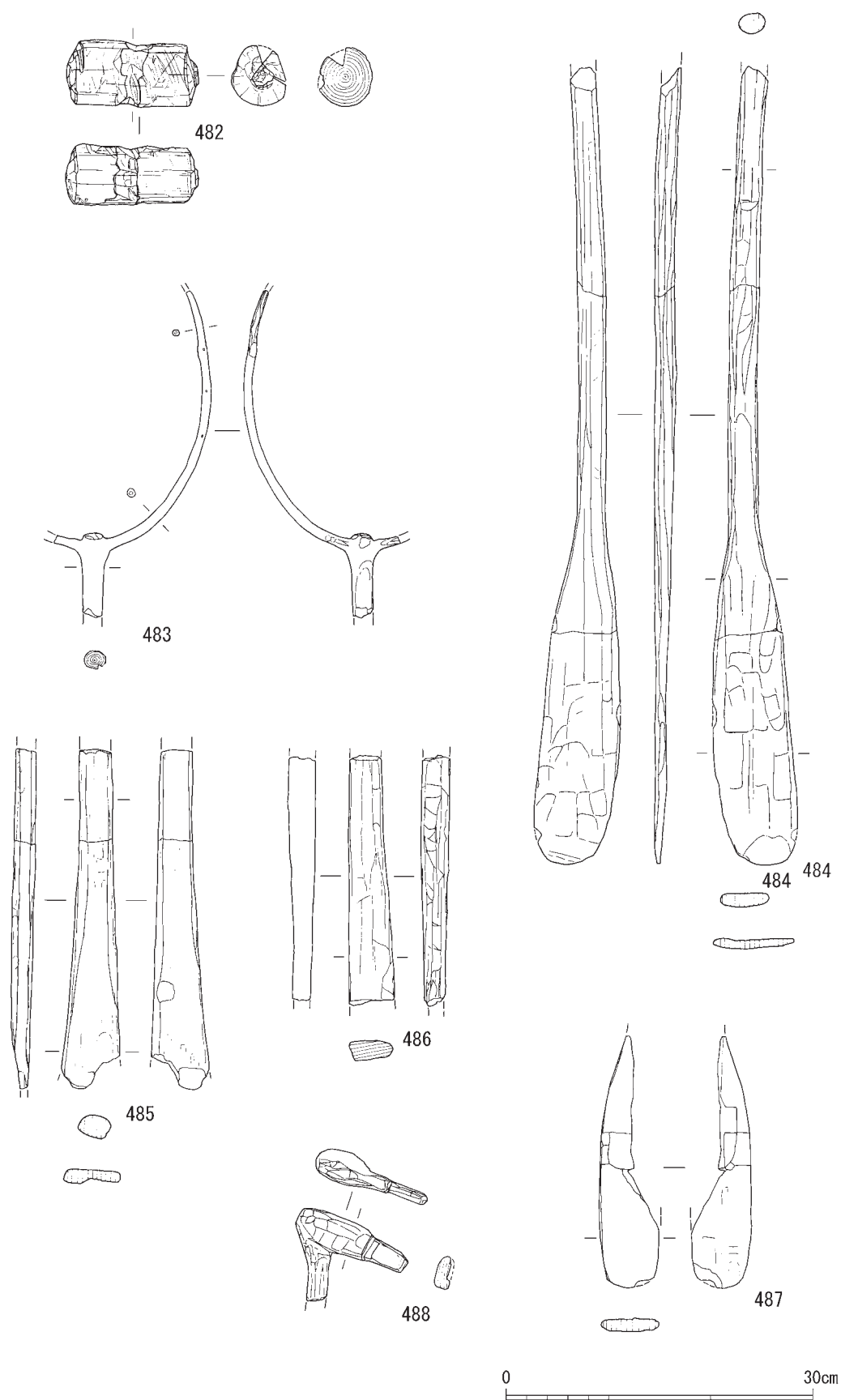
b. 漁撈具(第104図483～487) 漁労具は網杵1点(483)、櫂4点(484～487)の合計5点が出土している。

網杵 483は漁撈具の網杵である。4区より出土した。柄の大半と杵の片側を欠損する。三つ又に枝分かれした枝材(芯持丸木材)を利用している。又木の先端部には加工を施す。網杵の形態は楕円形に復元される。杵部には直径0.2cmの網掛け用の穿孔を3か所施す。網掛けの使用痕は不明瞭である。

櫂 484～487は漁撈具の櫂である。484は3区より出土した。柄の先端部が欠損する。榫目材を用いる。身に加工痕を残す。柄は面取りし、全体を平滑に仕上げる。一木で製作しており、身と柄の間にくびれ部を作り出す。平面形は柄から身の境で緩やかに幅を広げる。側面形は身に向かって厚みを減じ、柄は面取りを行い断面円形に作り出し、身の断面は扁平な長方形に作り出す。485は2区より出土した。櫂の柄から身へ至る部分である。榫目材を用いる。一木で製作し、加工痕を残さず、全体を平滑に仕上げる。平面形は柄から身に向かって幅を広げ、くびれ部を作り出す。側面形は身に向かって幅を減じる。柄は面取りを行い断面円形に作り出し、身の断面は扁平な長方形に作り出す。486は1区より出土した。櫂の柄である。榫目材を用いる。平面形は柄



第103図 出土遺物実測図29 木製品(1/6)
476～481：SD22下層



第104図 出土遺物実測図30 木製品(1/6)
482～488：SD22下層

から身に向かって幅を広げる。側面形は身に向かって幅を減じる。平面と側面に面取りを行った加工痕が認められる。全面が黒色に炭化している。487は3区より出土した。櫓の身である。板目材を用いる。平面形は身の先端に向かって幅を広げる。側面形は身の先端に向かって厚みを減じる。身の先端部分を削って薄く加工する。断面は扁平な長方形に作り出す。

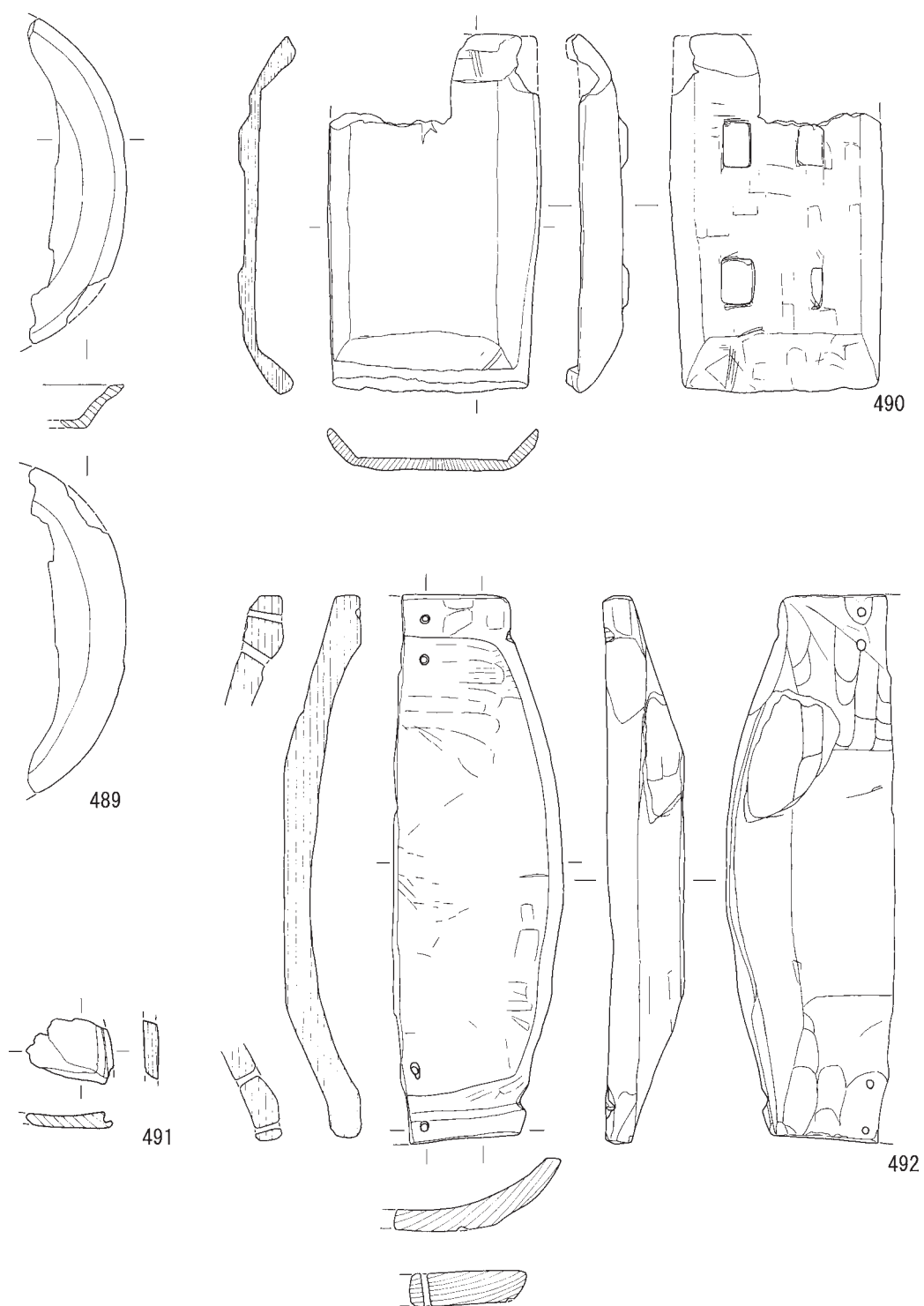
c. 工具(第104図488) 488は工具の手斧縦斧の膝柄である。1区より出土した。斧台側面の一部と握り部を欠損する。枝の又木を削り出して一木で製作している。握り部には木の心を残す。斧台には細かい方形の加工痕を残し、握りには軸に沿って長細い加工痕を残す。斧台の斧身装着部分には段差を作り出し、先端に向けて厚みと幅を減じ平坦に作り出す。袋状鉄斧を装着していたと考えられる。

d. 容器(第105・106図489～495) 容器は盤2点(489・490)、盒子1点(491)、槽4点(492～495)が出土している。

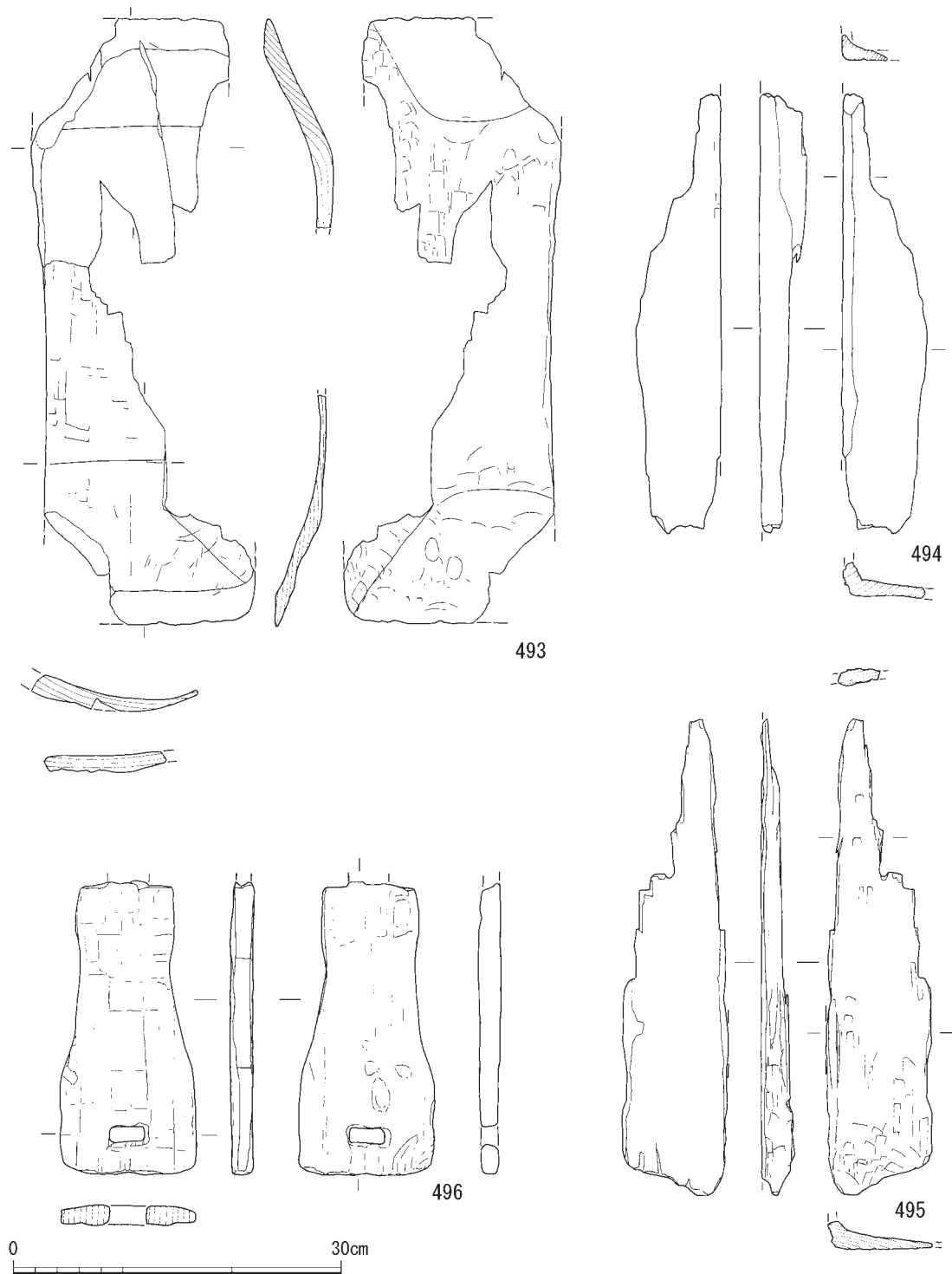
盤 489は盤である。3区より出土した。口縁部と底部の一部が残存する。口縁部は楕円形に復元される。横木取りの材を削り貫いて製作している。口縁部は面取りし、平坦面を作り出す。外面の底部立ち上がりから口縁部にかけて外反する形態に作り出す。490は盤である。3区より出土した。平面は長方形を呈する。短辺片側の口縁部から底部を欠損する。内面は加工痕を残さずに丁寧に仕上げられているが、外面と底面には加工痕を残す。横木取りの材を削り抜いて製作する。口縁部は内外面ともに全て面取りし、短辺側には幅広の平坦面を作り出す。内面の立ち上がりは鈍角に作り出し、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。外面長辺側の立ち上がり部は湾曲する形態に作り出すが、外面短辺側の立ち上がり部は鈍角に作り出し、側面を平坦に仕上げる。底部は平坦であるが、本体を削り出し、木目と平行する長方形の低い脚台を4か所に作り出す。脚台は短辺2.4cm、長辺4.0cm、高さ0.6cmを測る。脚部の1か所は半分欠損している。

盒子 491は盒子の底部である。1区より出土した。追柂目材を用いる。内外面は加工痕を残さず、平滑に仕上げる。底部側縁には本体と組み合わせる溝を穿つ。溝は幅0.4cm、深さ1.0cmを測る。

槽 492は槽である。3区より出土した。全体の半分を欠損する。横木取りの材を削り抜いて製作する。内外面ともに加工痕を残す。平面の長辺側は弧状を呈するが、短辺側は直線的に作り出す。口縁部は内外面ともに全て面取りし、平坦面を作り出す。口縁部外面の短辺側のみ幅広の平坦面を作り出す。内面の立ち上がり部は長辺側、短辺側ともに湾曲する形態に作り出す。外面長辺側の立ち上がり部は鈍角に作り出し、斜めに立ち上がり、側面を平坦に仕上げる。底部は平坦である。両短辺の長辺側側面にはV字形の切込みを施す。切り込みの表面には紐状の圧痕が確認できる。直径0.4cmの穿孔を短辺両側の破損部の4か所に施す。切り込みと穿孔を用いて樹皮などで破損した容器を綴じ合わせ、補修して再利用したと推測される。493は槽である。1区より出土した。平面は長方形を呈する。長辺側の口縁部から底部を欠損する。横木取りの材を削り抜いて製作している。内外面ともに加工痕を残す。短辺側の口縁部は内外面ともに面取りし、平坦面を作り出す。内面の立ち上がりは長辺側、短辺側ともに湾曲する形態に作り出すが、外面長

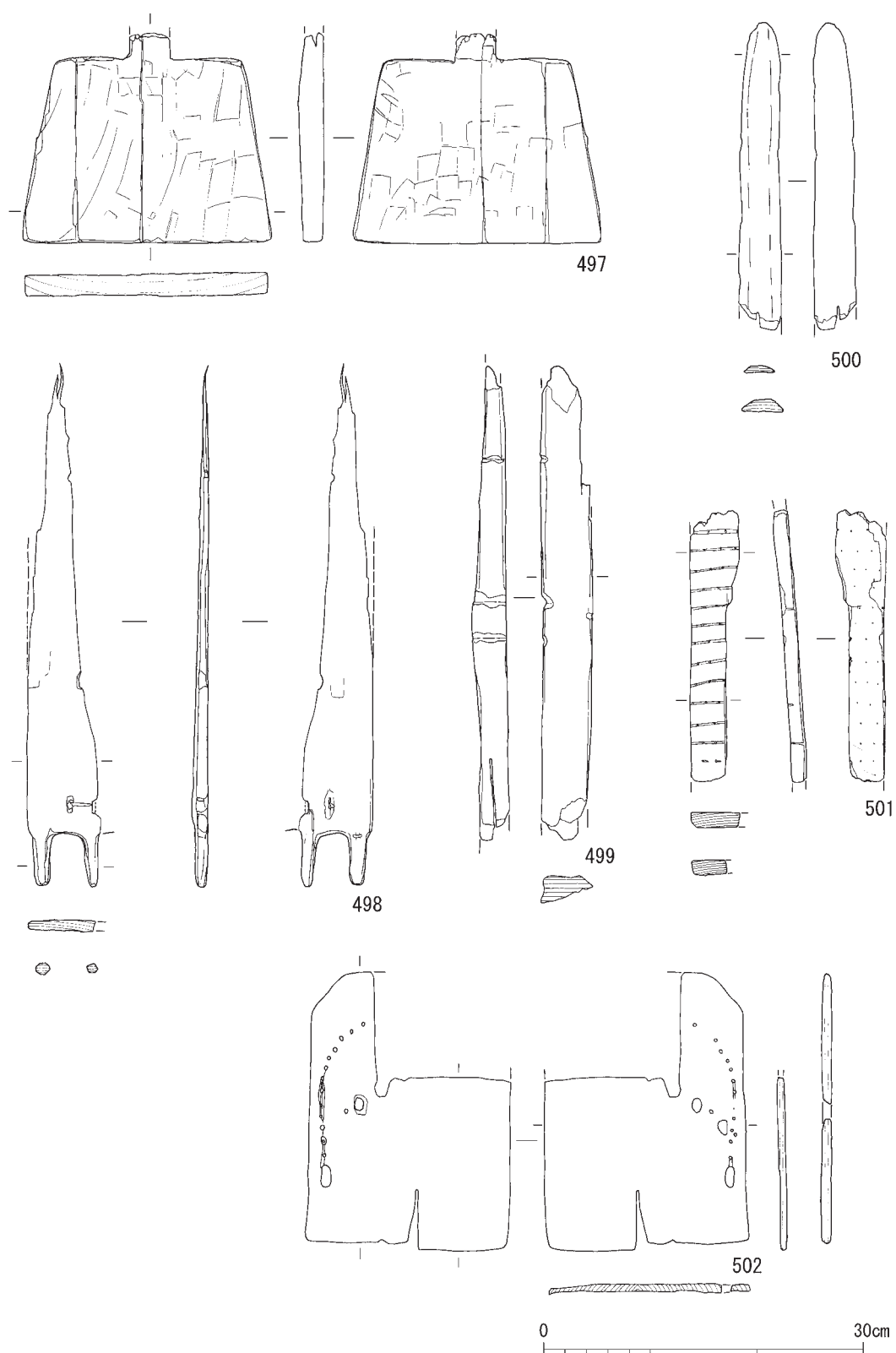


第105図 出土遺物実測図31 木製品(1/6)
489～492：SD22下層



第106図 出土遺物実測図32 木製品(1/6)
493～496：SD22下層

辺側の立ち上がりは鈍角に作り出し、直線的に立ち上がる。側面は平坦に仕上げる。底部は平坦である。494・495は槽である。いずれも1区より出土した。底部と立ち上がりの一部のみが残存する。横木取りの材を削り抜いて製作している。底部は平坦に仕上げる。底部外面と側面には細かい加工痕を残す。外面の立ち上がりは鈍角に作り出し、直線的に立ち上がるが、内面は湾曲す



第107図 出土遺物実測図33 木製品(1/6)
497～502：SD22下層

る形態に作り出す。494・495は同様の形態を呈すること、出土位置が近接することから、接合関係はないが同一個体であると考えられる。

e. 指物椅子(第106・107図496・497) 496は雑具の指物椅子脚部である。1区より出土した。上端部の柄部分を欠損する。柾目材を用いる。全面に長方形の荒い加工痕を残す。上部は炭化している。平面形は中間部分がくびれる形態を呈する。下部には長辺3.8cm、短辺2.2cmの隅丸長方形の孔を穿孔する。椅子脚部に棧を通すための柄穴であると考えられる。縦断面形は長方形を呈するが、横断面形は蒲鉾形を呈しており、表裏面を作り分けている。497は雑具の指物椅子脚部である。3区より出土した。板目材を用いる。平面は台形を呈する。全面に長方形の荒い加工痕を残す。上端部に長辺3.8cm、短辺2.6cmの長方形の柄を作り出す。

f. 楽器(第107図498) 498は楽器の琴である。上板のみ残存する。共鳴槽を持つ槽作りの琴であると考えられる。板目材を用い、前面を平滑に仕上げる。断面は長方形を呈するが表面部分はずかに湾曲し、表裏面を作り分ける。櫛形が2か所残存しており、長さ4.8cm、幅1.4cm、厚さ1.2cmを測る。櫛形の上部には2か所に方形の穿孔を施す。方形の孔と樹皮を用いて綴じ合わせており、樹皮は孔内部で3枚重なった状態で残存している。

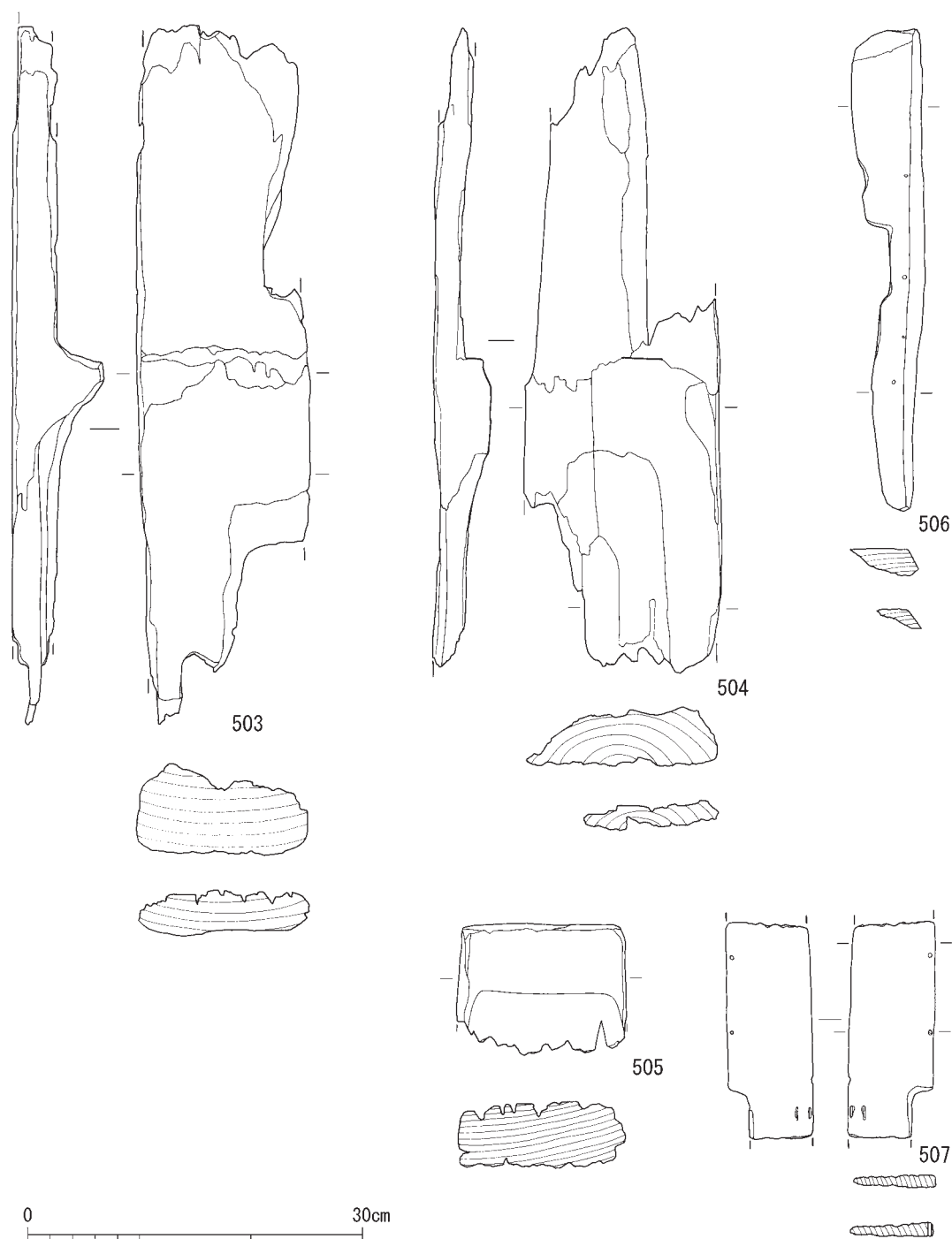
g. 発火具(第107図499) 499は雑具の火錐臼である。1区より出土した。両端部を欠損する。板目材を用いる。表面には荒い加工痕を残す。長辺の側面片側には幅0.6～1.0cmの火錐穴が3か所確認できる。本体の一部は被熱を受けて炭化している。

h. 祭祀具(第107図500) 500は祭祀具の武器形、鉄剣を模造した剣形木製品である。3区より出土した。剣身部分のみ残存している。板目材を用いる。剣身部分は全面に細かい加工痕を施し、面取りを行う。先細りの形状を呈し、先端を丸く仕上げる。鎬部分は作り出さない。断面の下部は平坦であるが、上部は半円形を呈し、表裏を作り分けている。

i. 武具(第107図501・502) 501は盾である。3区より出土した。板目材を扁平な長方形に加工している。直径0.2～0.1cmの孔が全面に穿孔されている。孔は片面から穿孔されており、表面と裏面では直径が異なる。孔は縦方向に1.6～2.0cm、横方向に1.2～1.6cmの間隔で穿孔されており、規則的に配列されている。短辺方向に擦れた痕跡が認められることから、横方向に紐を通していたと考えられる。紐を通すことにより、木材の歪みを防止するとともに、本体を補強する。一部の孔では、孔の中に紐が残存している。表面全体は黒色を呈するが、紐を通した部分は木肌を露呈しており、明瞭に確認できる。

502は武具の盾である。平面長方形を呈し、短辺側を欠損する。板目材を用いる。加工痕は認められず、全面を平滑に作り出す。端部を斜めに加工する。大・小の穿孔を規則的に施す。大径孔は楕円形であり、長径1.4cm、短径1.0cmを測り、4か所に穿孔され、円弧状に配列される。小径孔は径0.3cmで13か所に穿孔される。小径孔の配置は円弧状に配置されるが、長辺側では直線に変化する。小径孔をつなぐように圧痕が確認でき、糸を通して補強していたと考えられる。

j. 建築部材(第108・109図503～512) 建築部材は梯子3点(503～505)、部材3点(506・507・510)、垂木2点(508・509)、柱根1点(512)の合計9点が出土している。



第108図 出土遺物実測図34 木製品(1/6)
503～507：SD22下層

梯子 503～505は建築部材の梯子である。503は3区より出土した。縦木取りの芯持丸木材を削り込んで製作している。両端部を欠損し、足掛け部分のみ残存する。足掛けの側面形は上部を直角に仕上げ、下部を斜めに削り込んで作り出す。裏面は平坦に作り出す。両面に被熱を受け炭化している。504は3区より出土した。縦木取りの芯持丸木材を削り込んで製作している。両端部を欠損し、足掛け部分のみ残存するが、足掛け部分の先端を欠損する。足掛けの側面形は上部を直角に仕上げ、下部を斜めに削り込んで作り出す。裏面は平坦に作り出す。裏面の一部は被熱

を受け炭化している。503に比べて足掛けの突出は弱く、下部の挟りは直線的である。505は梯子の足掛け部分である。1区より出土した。裏面は剝離しており、梯子本体から足掛け部分のみが剝離した状態である。平面と小口面は長方形を呈する。

部材 506は建築部材である。1区より出土した。片側と側面部分を欠損する。欠損部ははがれたような状態となっている。板目材を用いる。平面は平坦に作り出す。断面は不定形な台形を呈し、側面は厚さを違えて、片側を斜めに作り出す。欠損しているが、長辺7.0cmの隅丸方形の柄穴を作り出す。小口面は斜めに作り出し、加工痕を残す。507は建築部材である。2区より出土した。追柂目材を用いる。平面は長方形を呈するが、側面片側を逆L字形に加工する。断面は台形を呈し、側面端部を作り分けている。長辺片側の2か所に直径0.4cmの円形の穿孔を施す。また、長辺1.5cm、短辺0.3cmの長方形の穿孔を施し、穿孔内には樹皮が残存する。樹皮を用いて別の部材を綴じ合わせていたと考えられる。他の部品と組み合わせて使用した部材と考えられる。

垂木 508は建築部材の垂木である。2区より出土した。片側を欠損する。芯持丸木材を用いる。断面は円形もしくは縦長の楕円形を呈し、部位により作り分けている。先端を円頭形に作り出し、荒い加工痕を残す。509は建築部材の垂木である。1区より出土した。片側を欠損する。芯持丸木材を用いる。平面形は屈曲しており、原木の屈曲をそのまま利用している。表面は面取りし、加工痕を残す。小口面は加工して斜めに作り出す。小口面のみ黒く炭化している。

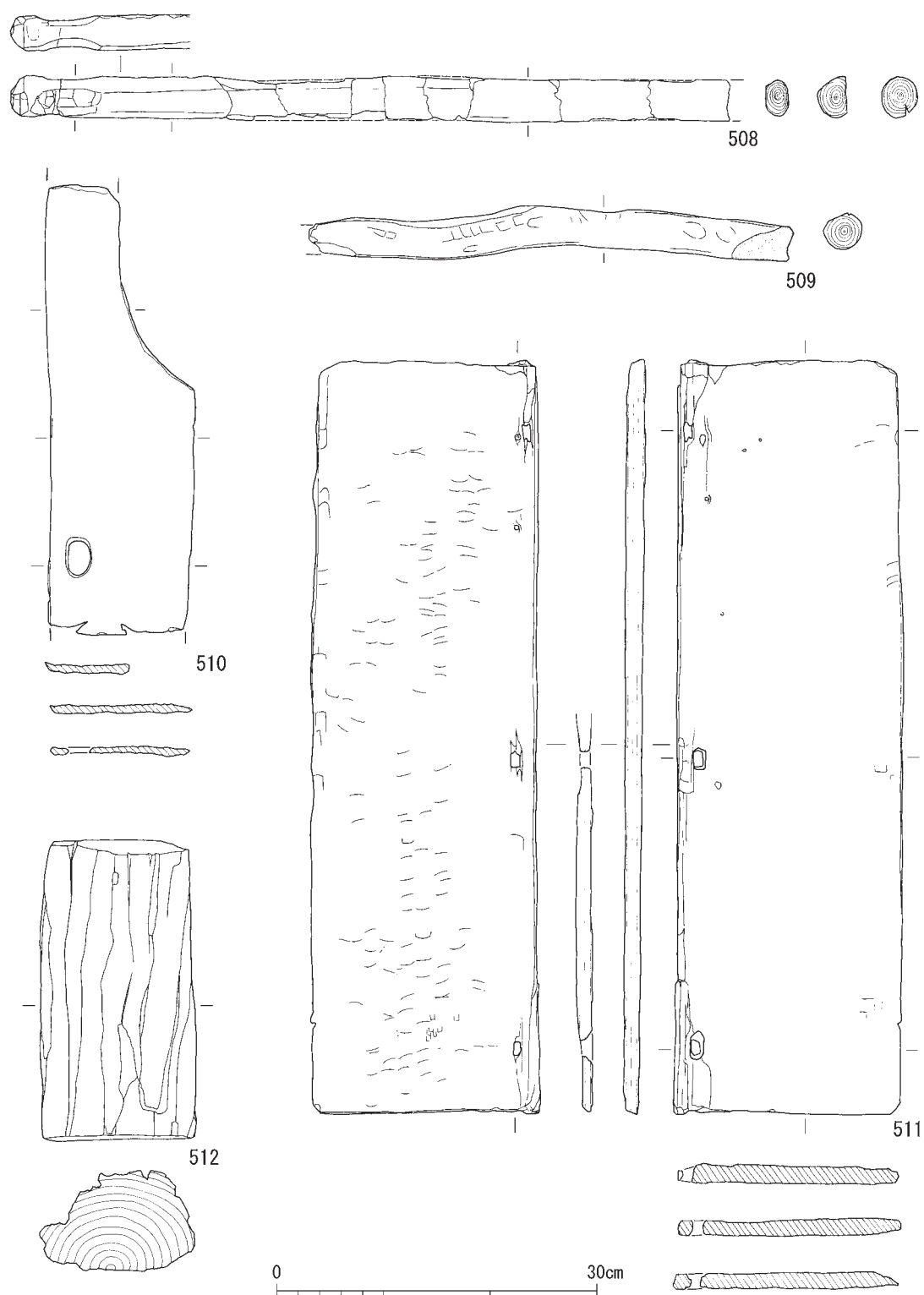
部材 510は建築部材である。1区より出土した。柂目材を用いる。全面に加工を施し、平滑に仕上げられている。断面は長方形を呈し、扁平な板状を呈する。平面の片側のみ内湾する形状に作り出す。長径2.2cm、短径2.0cmの楕円形の柄孔を穿孔する。

壁材 511は建築部材の壁材である。2区より出土した。板目材を用いる。不明瞭ではあるが、全面に荒い加工痕を残す。平面は長方形を呈する。長辺の片側には長辺1.8cm、短辺1.2cmの長方形の穿孔を3か所施す。断面は扁平な台形を呈し、側面片側を斜めに作り出す。

柱根 512は建築部材の柱根である。3区より出土した。芯持丸木材を半割した割材を用いる。表面は面取りし、平滑に仕上げる。

k. 運搬具 (第110図513) 513は運搬具の舟である。両端を欠損する。板目材を用いる。側面端部は面取りし、全面に加工を施して平坦に仕上げる。断面は台形を呈し、わずかに湾曲する。側面の形態を作り分ける。3か所に隅丸長方形の柄孔を作り出す。柄孔は、長辺3.2cm、短辺2.0cmと長辺4.8cm、短辺1.6cmを測る。他の1か所は短辺2.8cmを測るが、長辺は破損のため不明である。形態や側面の湾曲の角度から、舟の舷側部分と考えられる。

l. 加工木板材 (第110～112図514～538) 514～538は加工木の板材である。いずれも平滑に仕上げ、側面は面取りを行い丁寧に仕上げる。木取りは、柂目材(524・526・531・537)4点、追柂目材(519・530)2点、板目材(514～518・520～523・525・527～529・532～536・538)の19点であり、板目材が大半を占める。514は2区より出土した。平面は長細く材の一部を湾曲させる形態を呈する。側面は湾曲する。515は平面に細長い痕跡が確認できるため、作業台として使用され

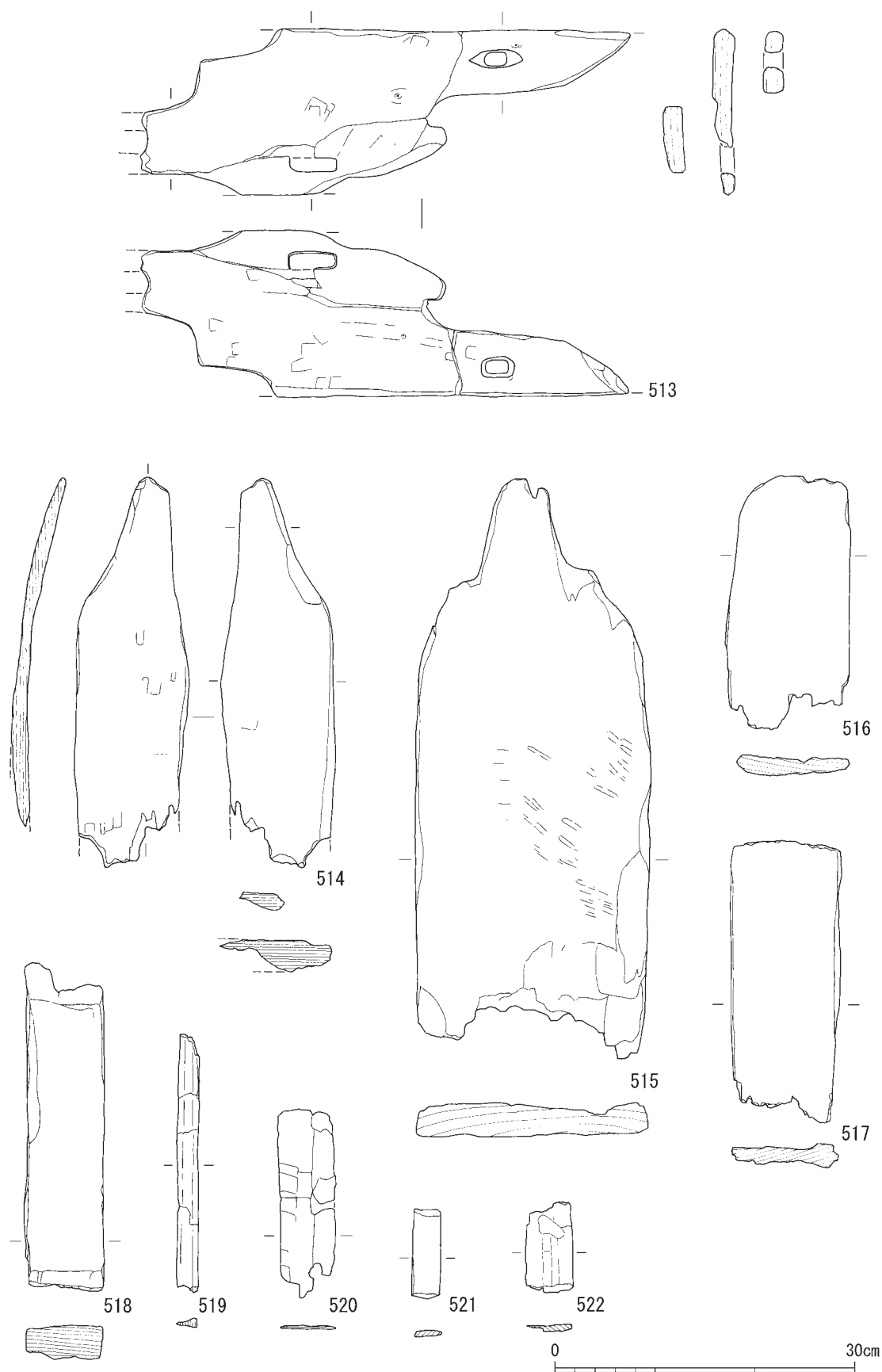


第109図 出土遺物実測図35 木製品(1/6)
508～512：SD22下層

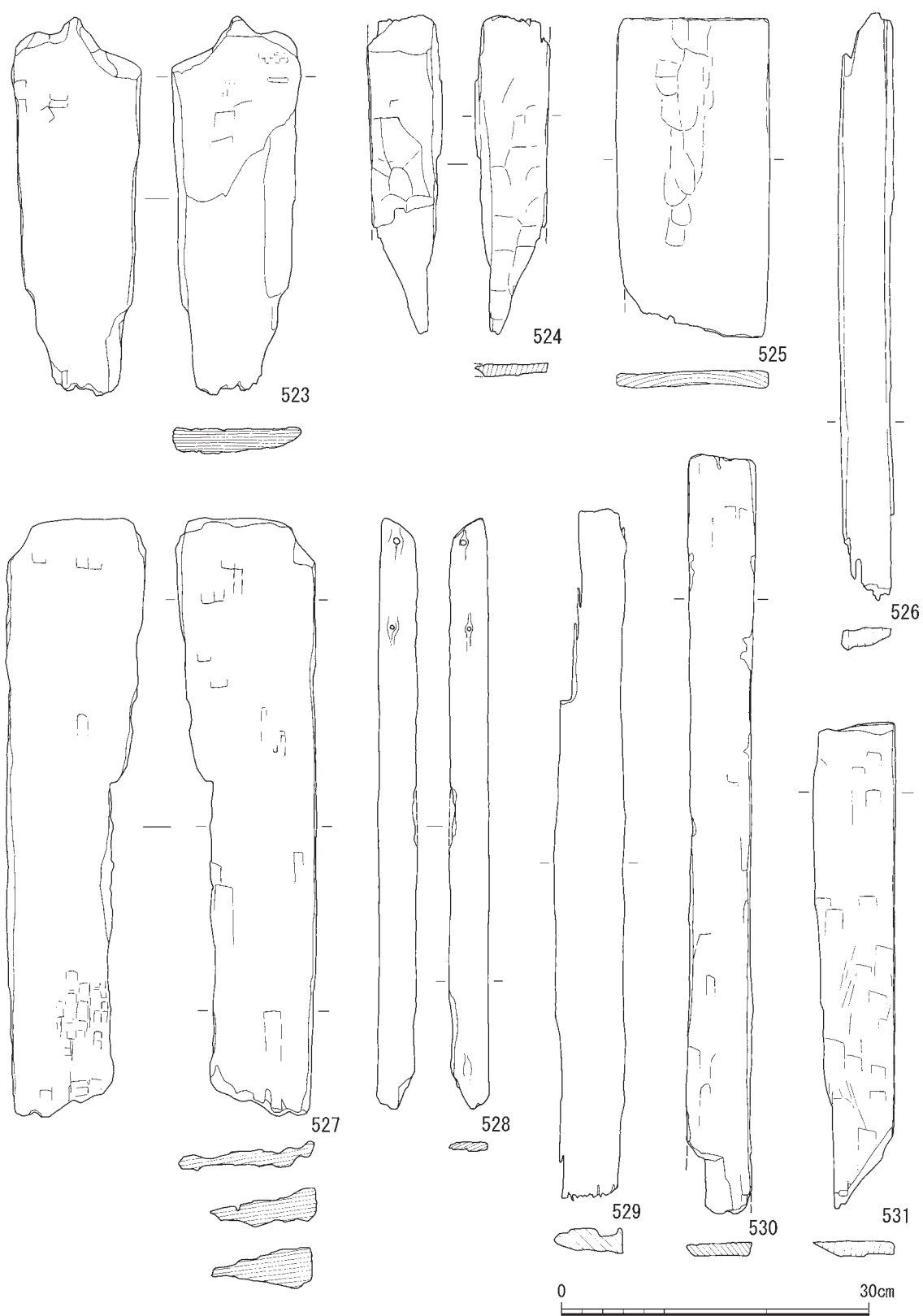
た可能性も考えられる。516・517は平面を平滑に仕上げ、側面を面取りする。518は両端部を片側から加工し、斜めに切断されている。全面に加工痕が確認できる。519は板の破片である。520は側面の片側を逆L字形に加工する。521は小口面と側面に加工痕が確認できる。522は板材の破片である。523は3区より出土した。加工痕は不明瞭。片側の小口面は炭化している。524は両面に荒い加工痕が認められる。525は4区より出土した。端部の一部を欠損する。526は両端を欠損する。側面を面取りする。527は両面に加工痕が確認できる。528は節が抜けた孔が確認できる。529は1区より出土した。530は両端を欠損する。加工痕は不明瞭である。531は片側の小口面と側面を加工し、斜めに作り出す。壁材や床材などの建築部材の可能性も考えられる。532は表面に鋭利な刃物によって切り込まれた加工痕が認められる。片側の端部には使用痕と考えられる圧痕が認められる。533は両端部を欠損する。表面には加工痕が明瞭に認められる。534は2区より出土した。片側の小口面を加工して尖らせる。535は片側を欠損する。536は4区より出土した片側の端部は被熱により炭化している。537は不明瞭であるが加工痕を残す。538は両端部と側面の一部を欠損する。板目材を用いる。全面に加工を施し、平面長方形の平滑な板状に仕上げる。側面には一对の加工を施し、くびれ部を作り出す。

m. 有頭棒（第112図539～542） 539～542は雑具の有頭棒である。合計4点が出土した。いずれも片側を欠損し、先端と軸部の一部が残存する。539は2区より出土した。芯持ち丸木材を用いる。先端に加工痕を残す。断面は円形を呈する。先端部は円形に作り出し、端部を突出させる。くびれ部から下の棒材部分は徐々に幅を広げて作り出す。540は1区より出土した。全面に荒い加工痕を残す。芯持ち丸木材を用いる。先端部は円形に作り出し、端部を突出させる。先端の断面は楕円形を呈するが、そのほかの部分の断面は円形を呈する。541は1区より出土した。柾目材を削り出して製作する。有頭部にわずかに加工痕を残す。有頭部の突起部分は平坦に作り、片面のみ段を作り出す。突起部分の断面は隅丸方形を呈するが、くびれ部より下部は楕円形を呈する。542は1区より出土した。節持の芯持ち丸木材を用いる。全面を面取りし、断面は縦長の楕円形を呈する。先端を円頭形に作り出し、荒い加工痕を残す。軸部が長いため、建築部材の垂木もしくは運搬具の天秤棒の可能性が考えられる。

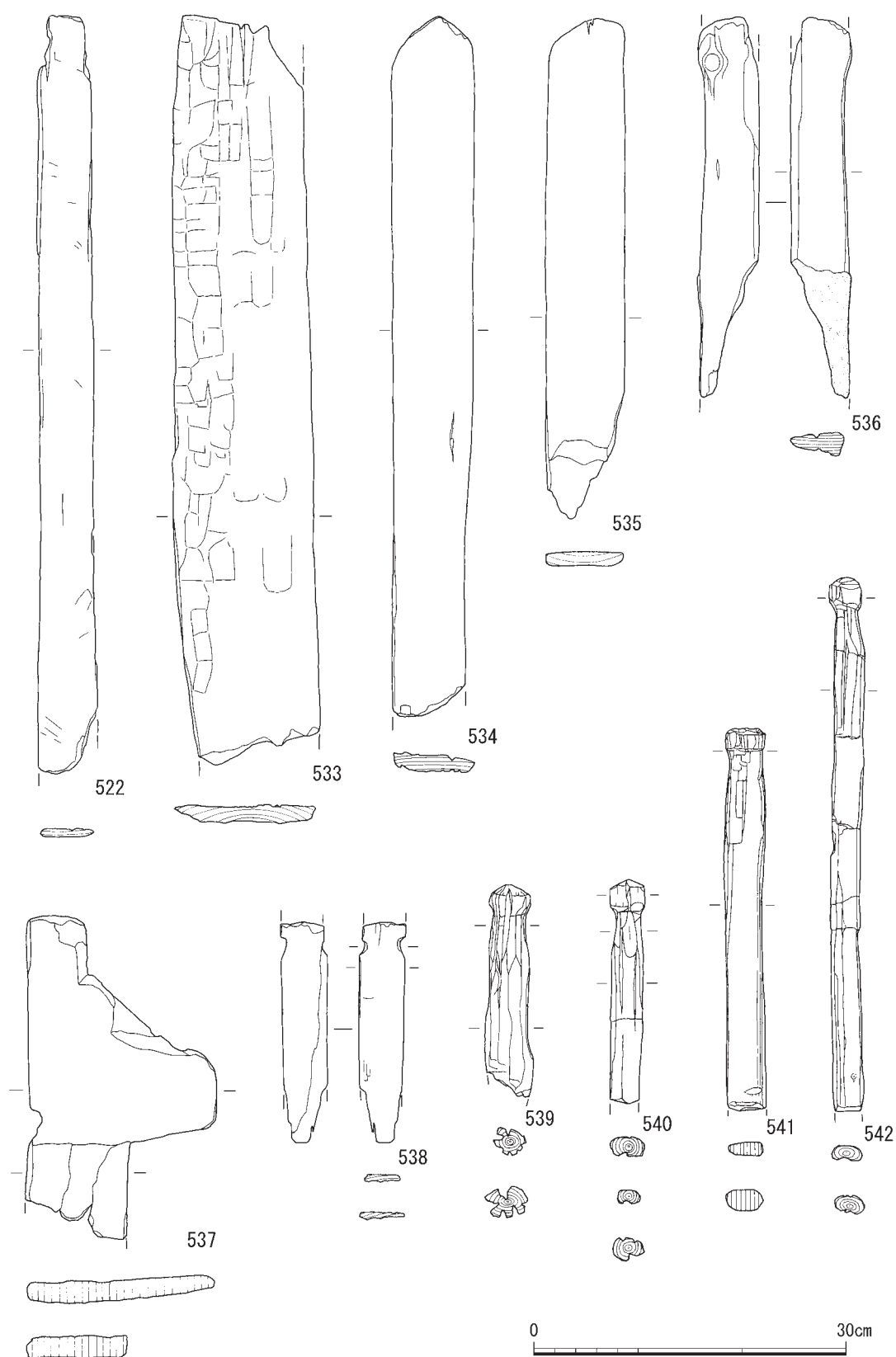
n. 不明木製品（第113図543～547） 543～547は不明木製品である。組み合わせて使用する製品の部材の一部であると考えられる。543は両端を欠損する。割材を削り出す。平面は長方形、断面は楕円形を呈する。面取りをおこない、全面を丁寧に加工している。建築部材などの棧の可能性はある。544は1区より出土した。片側を欠損する。割材を削り出し、全面に加工を施し、断面円形の棒材として加工されている。平面は欠損部から端部にかけて径を減じて製作されている。農具などの柄と考えられる。545は3区より出土した。片側を欠損する。断面は円形を呈する。割材を削り出し、全面に加工を施し、丁寧に仕上げる。平面は欠損部から先端部にかけて幅を減じて製作されている。先端部は円頭形に作り出し、長辺1.8cm、短辺1.0cmの長方形の柄穴を作り出す。546は2区より出土した。両端を欠損する。割材を削り出して製作する。平面は長方形、断面は隅丸長方形もしくは楕円形を呈する。長辺1.6cm、短辺0.5cmの長方形の柄穴を作り出す。



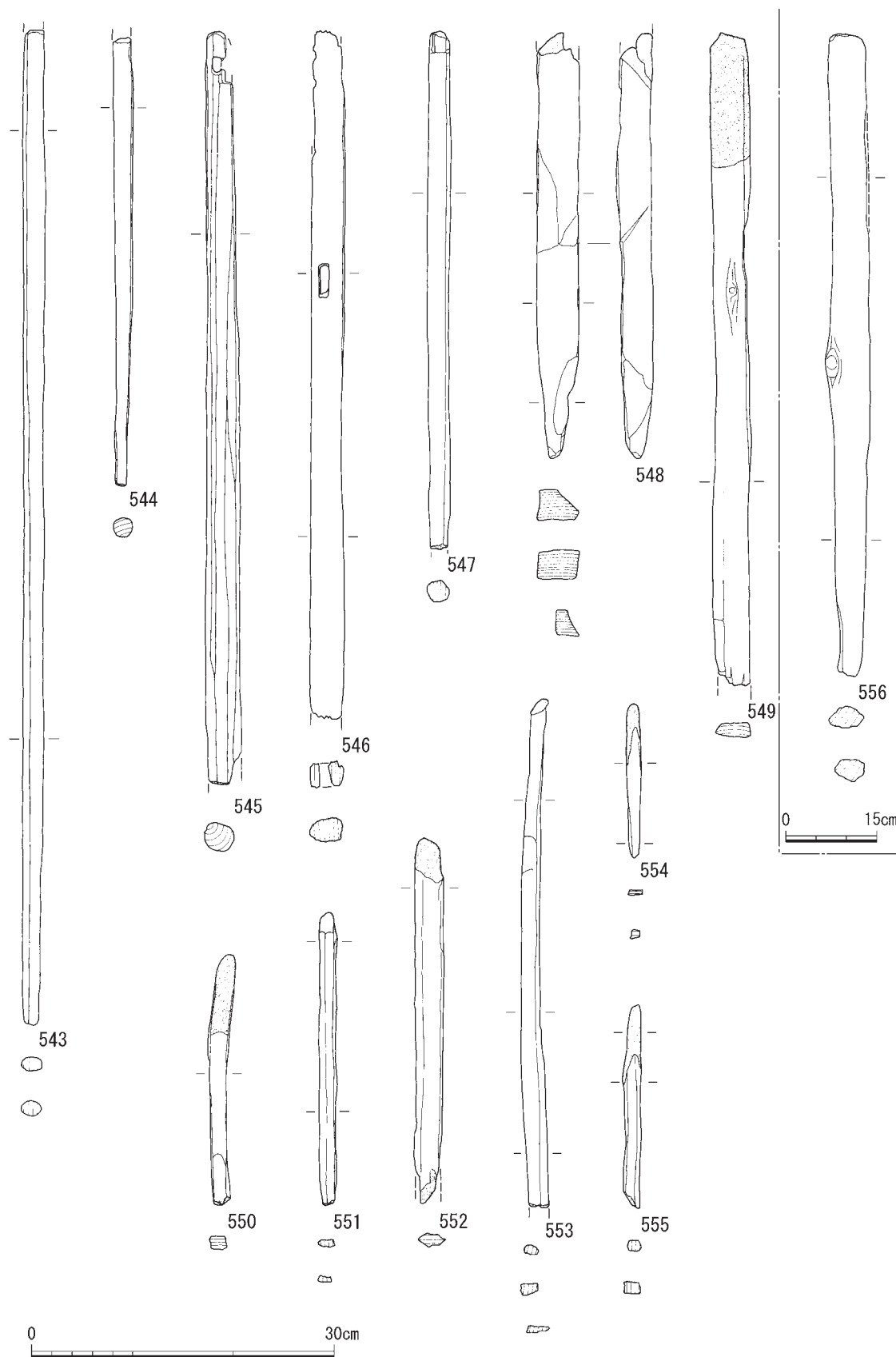
第110図 出土遺物実測図36 木製品(1/6)
513～522：SD22下層



第111図 出土遺物実測図37 木製品(1/6)
523～531：SD22下層



第112図 出土遺物実測図38 木製品(1/6)
532～542：SD22下層



第113図 出土遺物実測図39 木製品(1/6)
543～555：SD22下層



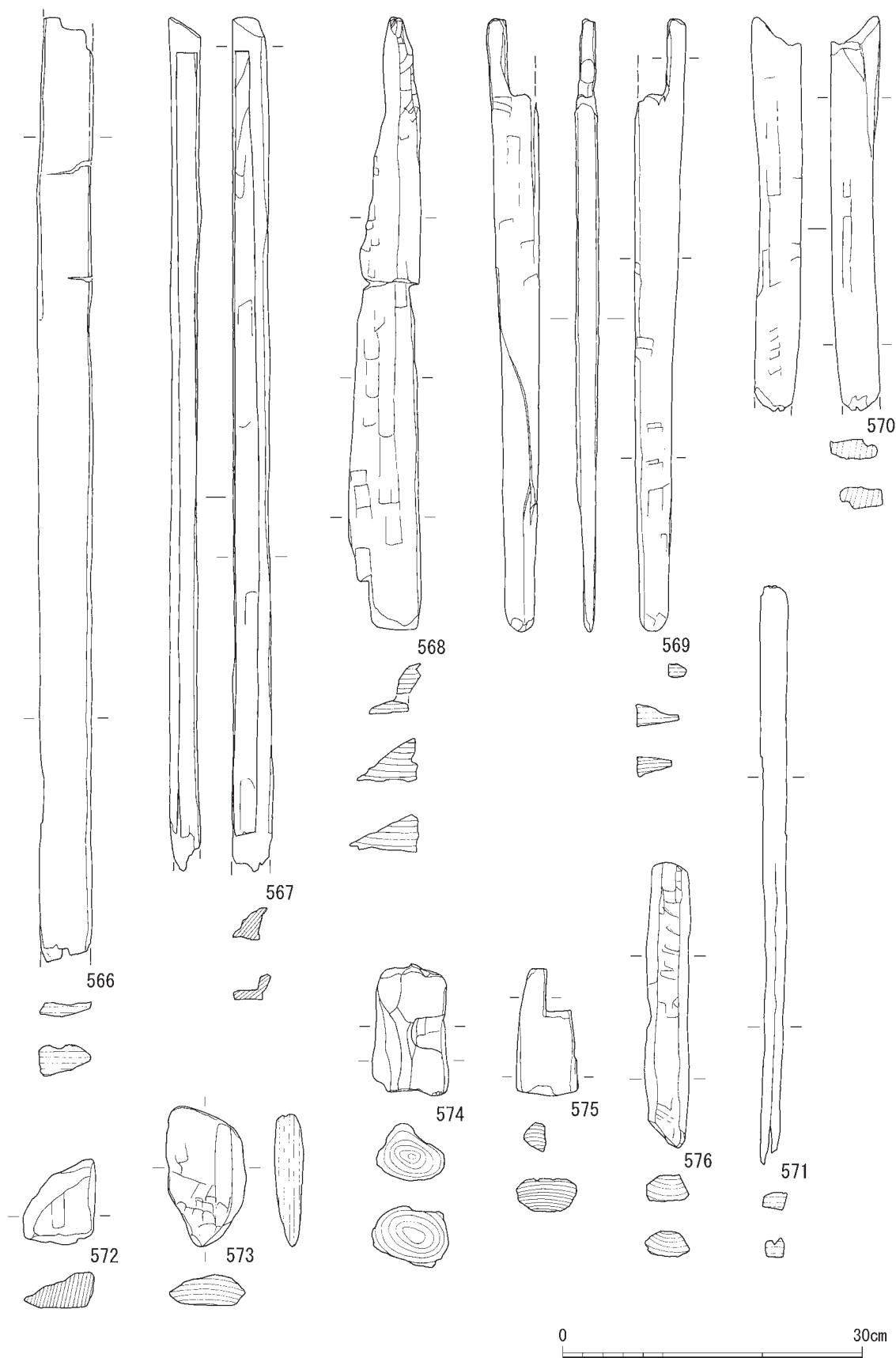
第114図 出土遺物実測図40 木製品(1/6)
557～565 : SD22下層

547は3区より出土した。断面は楕円形を呈する。割材を削り出し、全面に加工が施され、丁寧に仕上げられている。先端には方形の段を作り出す。段の下部には使用痕と考えられる痕跡が確認できる。下端部は幅を減じ、先細りになる。

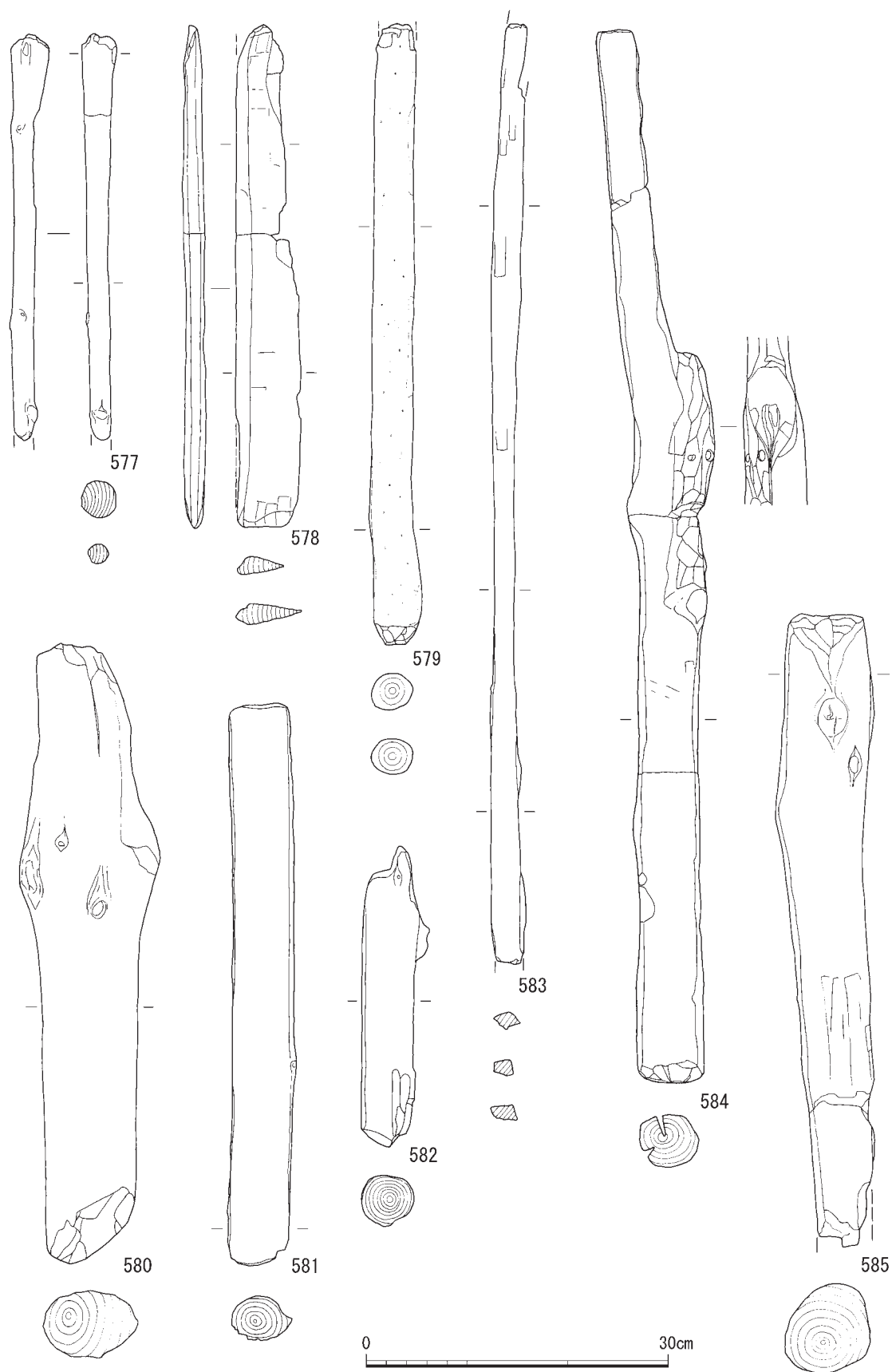
o. もえさし(第113図548～555) 548～555は雑具のもえさしである。合計8点出土した。端部に被熱による炭化が確認できる。割材を用いており、小口面に加工痕を残す。木製品製作の際に生じた割材や加工材の破片などの残材を使用したと考えられる。548は割材を削り出す。側面には面取りを施す。下端には加工痕を残す。先端の小口面は被熱により炭化している。549は1区より出土した。割材を削り出し、全面に面取りを施す。先端は被熱により炭化している。溝S D22下層出土では最大のもえさしである。550は2区より出土した。両端部分が被熱により炭化している。先端の小口面は薄く削られている。下端の小口面は円頭形に整形し、加工痕を残す。551は1区より出土した。先端が被熱により炭化している。552は2区より出土した。全面に面取りを施し、断面は不整形な六角形を呈する。先端の小口面には加工が施され、被熱により炭化している。553は3区より出土した。先端の小口面には加工が施され、被熱により炭化している。554は4区より出土した。先端が被熱により炭化している。555は先端が被熱により炭化している。下端は鋭利な刃物で斜めに作りだされている。

p. 杭(第113～114図556～565) 556～565は杭である。合計10点出土した。556は2区より出土した。先端部を欠損する。割材を削り出し、全体に面取りを行うが、節を残す。上端部の小口面は平坦にし、加工痕を残す。557は4区より出土した。節持ちの芯持丸木材を用いる。先端を加工して尖らせる。表面には樹皮が残存している。側面形は杭上部から先端にかけて幅を減じる。558は1区より出土した。節持ちの芯持丸木材を用いる。節には枝を取り払った加工痕が確認できる。上端は半球状に作り出す。先端は加工して尖らせる。559は3区より出土した。上端部を欠損する。芯持丸木材を用いる。原木の形状が反映され、中ほどでやや屈曲する。上部には樹皮が残存しているが、下部から先端部にかけては全面に荒い加工痕を残す。560は2区より出土した。芯持丸木材を用いる。上部には樹皮が残存しているが、下部から先端部にかけては全面に荒い加工痕を残す。加工痕は重複しており、複数の方向から加工が行われている。側面形は杭上部から先端にかけて幅を減じる。561は2区より出土した。小径木の芯持丸木材を用いる。表面には樹皮が残存している。562は2区より出土した。上部を欠損する。割材を削り出す。側面形は上端から先端部にかけて幅を減じて製作される。563は1区より出土した。上部を欠損する。芯持丸木材を用いる。側面形は下端に向かって湾曲する。全面に加工痕を残す。564は1区より出土した。割材を用いる。表面に虫食い穴が確認できる。565は1区より出土した。上端部を欠損する。節持ちの割材を用いる。先端の加工痕には刃こぼれ痕が確認できる。

q. 不明木製品(第115図566～570) 566～570は不明木製品である。いずれも組み合わせて製作する木製品の部材であると考えられる。566は3区より出土した。板目材の板である。両端を欠損する。平面は縦長の長方形を呈する。側面は面取りを施す。567は1区より出土した。片側を欠損する。割材を削りだして製作する。全面に加工が施され、丁寧に仕上げる。先端の小口面



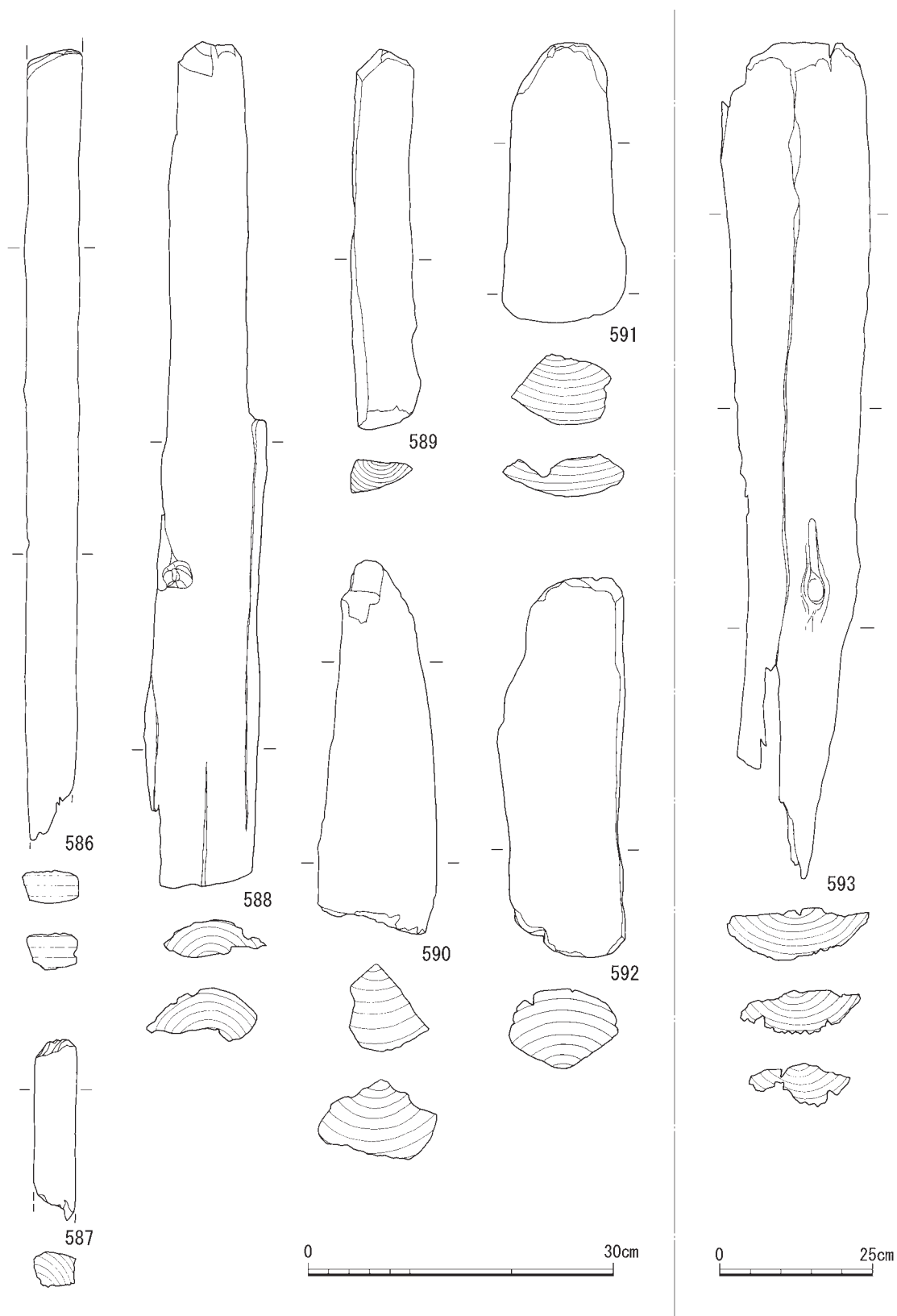
第115図 出土遺物実測図41 木製品(1/6)
566～576：SD22下層



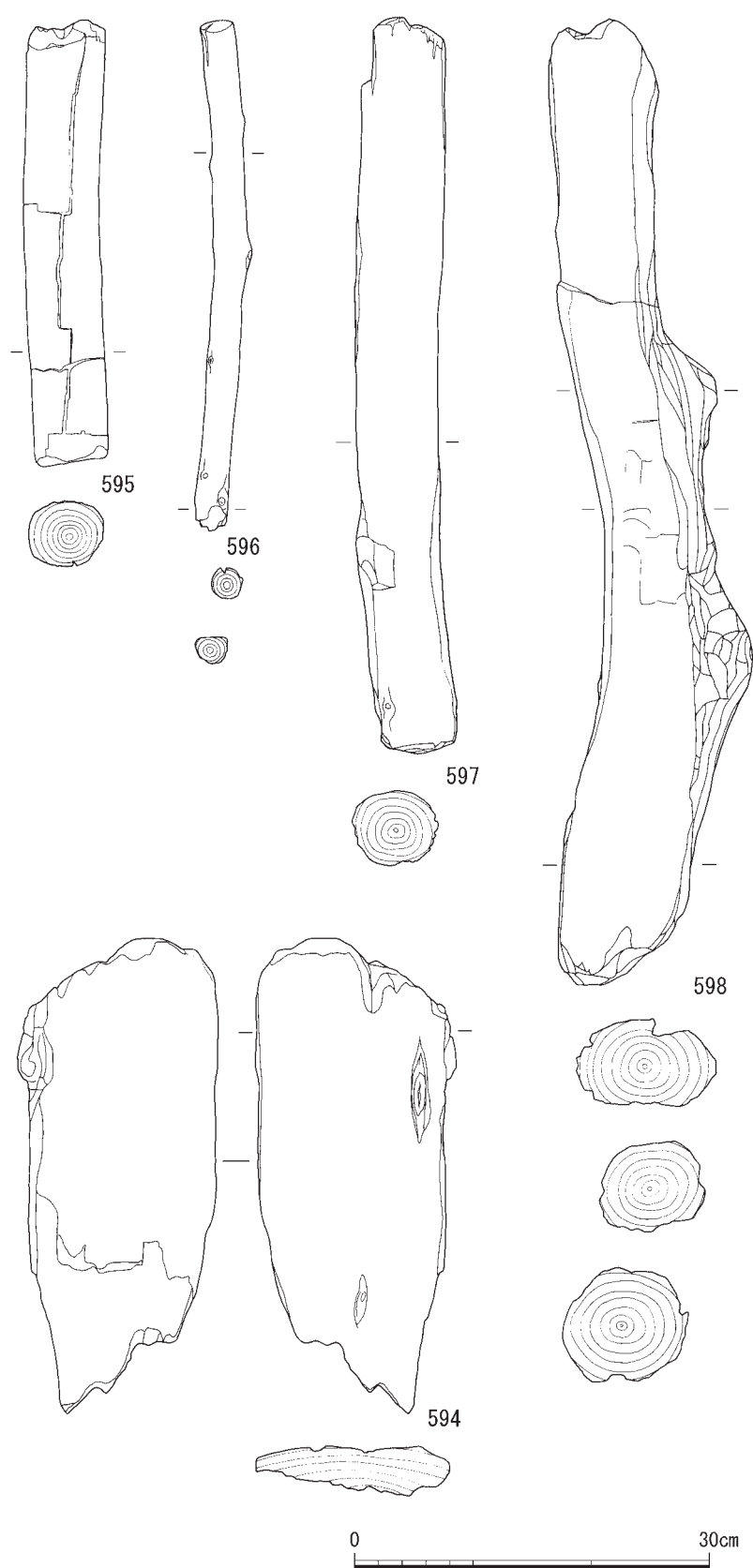
第116図 出土遺物実測図42 木器(1/6)
577～585 : SD22下層

は斜めに加工する。側面を削り込み、断面三角形の溝状に作り出す。568は2区より出土した。柁目材を用いる。片側を欠損する。全面に加工痕を残す。断面は三角形を呈しており、側面片側を薄く作り出す。側面の一部に削り込みを行うが、劣化のため判然としない。全面に被熱を受け炭化している。569は2区より出土した。割材を削り出して製作する。先端を加工して長方形の穿孔を行ったか、二本の突起部を作り出すと考えられるが、破損のため不明瞭である。対面の小口面は円頭形に作り出す。全面に加工痕を残す。断面は台形を呈し、側面の幅を作り分けている。570は1区より出土した。割材を削り出し製作している。側面片側に削り込みを施す。

r. 加工木(第115～118図571～598) 571～598は加工木である。加工木は板材、棒材、割材、芯持丸木材(丸太)が出土した。形態や法量は様々である。樹皮を残す材、芯持丸木材の表面と小口面に加工痕を残す材、板状に製材する材が出土しており、原材から製品に近い材までが存在し、加工精度は様々である。571は棒材の加工木である。割材を削り出して加工している。572は板材の加工木である。柁目材の両面を平滑に仕上げる。573はみかん割材である。表面に複数の異なる加工痕が確認できる。574は芯持丸木材の加工木である。側面の樹皮を剥いで、小口部分を荒く加工している。劣化により心材部分が抜けて空洞になっている。側面の片側には隅丸長方形の削り込みが行われる。削り込みは本体を貫通しない。削り込みの内面には破損面が確認でき、削り込みの短辺側に軸があったと考えられる。木錘の可能性が考えられる。575は割材の加工木である。片側の端部小口面にL字形の削り込みを行う。576はみかん割材である。加工痕が残る部分と樹皮が残る部分が明確に確認できる。柁目材に加工途中の割材であると考えられる。577は棒材の加工木である。割材を削りだして製作する。全面を面取りすることで、断面円形の棒材に加工する。端部は円頭形に作り出し、棒材部分との境には段を作り出す。製品の柄の可能性が考えられる。578はみかん割材である。側面の一部を欠損する。全面に加工痕を残す。柁目材に仕上げる途中のみかん割材である。579は芯持丸木材の加工木である。先端の小口面には加工が行われ、円頭形に作り出す。一部剥離しているが、全面に樹皮を残す。580は節持ちの芯持丸木材の加工木である。片側の小口面は鋭利な刃物で斜めに切断されている。581は節持ちの芯持丸木材の加工木である。両端を欠損する。全体に面取りを行い、断面は楕円形を呈する。棒材として作り出していることから、建築部材の垂木もしくは天秤棒の可能性もある。582は節持ちの芯持丸木材の加工木である。表面と片側の小口面に加工を施す。583は割材の加工木である。不明瞭であるが加工痕を残す。584は節持ちの芯持丸木材の加工木である。小口面に加工痕を残す。節部分には枝を払い整形した加工痕が認められる。585は節持ちの芯持丸木材の加工木である。全面に面取りを行い、小口面に加工痕を残す。586・587は割材の加工木である。割材を削り出し、平滑に仕上げる。588～594はみかん割材である。588は節を残す。小口面に加工痕が認められる。原木を1/2に分割している。589は原木の樹皮側を割った材である。小口面に加工痕を残す。590は原木を1/4に分割している。591は片側の端部が炭化している。原木を1/4に分割している。592は原木を1/4に分割している。593は原木を1/2に分割している。594は原木の樹皮側を割った材である。595～598は節持ちの芯持ち丸木材の加工木である。節部分には枝を取り払った加工痕が確



第117図 出土遺物実測図43 木製品(1/6・1/10)
586～593：SD22下層



第118図 出土遺物実測図44 木製品(1/6)
594～598 : SD22下層

認できる。全面に面取りを行う。小口に加工痕が認められる。

② S X 51 出土 (第119～122図599～633)

S X 51からは農具の泥除け 1 点 (599)、曲柄又鋤身 1 点 (600)、竪杵 1 点 (601)、編台目盛板 1 点 (605)、祭祀具の舟形木製品 1 点 (602)、陽物形木製品 1 点 (604)、雑具の火錐杵 1 点 (603)、もえさし 2 点 (620・621)、杭 2 点 (628・629)、加工木の板 6 点 (606～610・626)、板材 6 点 (611～616)、棒材 5 点 (618・619・622・623・627)、割材 3 点 (624・625・630)・芯持材 3 点 (631～633)、不明木製品 1 点 (617) が出土した。

泥除け 599は農具の泥除けである。上部から柄穴部分を欠損する。平面は下ぶくれの不整円形であり、側面は湾曲する形態を呈する。柁目材を用いる。本体中央部には短径3.8cmの柄穴を穿孔する。下端の中央部には長辺1.6cm、短辺1.4cmの隅丸方形の孔を穿つ。樹皮などで泥除けと柄を緊縛するための孔である。

曲柄又鋤 600は農具の曲柄又鋤のナスビ形鋤身である。軸部の突出部と刃部を欠損し、笠部のみ残存する。柁目材を用いる。後面と側面の境界は面取りを行う。前面は平坦に仕上げる。後面軸部には圧痕が確認できる。柄との接合の緊縛痕であると考えられる。笠部の突出が弱い形態を呈する。

竪杵 601は農具の竪杵である。片側を欠損する。心持丸木材を削り出す。搗き部は円柱状を呈する。搗き部先端は使用のため擦り減っている。搗き部から握部へは径を減じて細くなる。握部には細かい加工痕を残す。

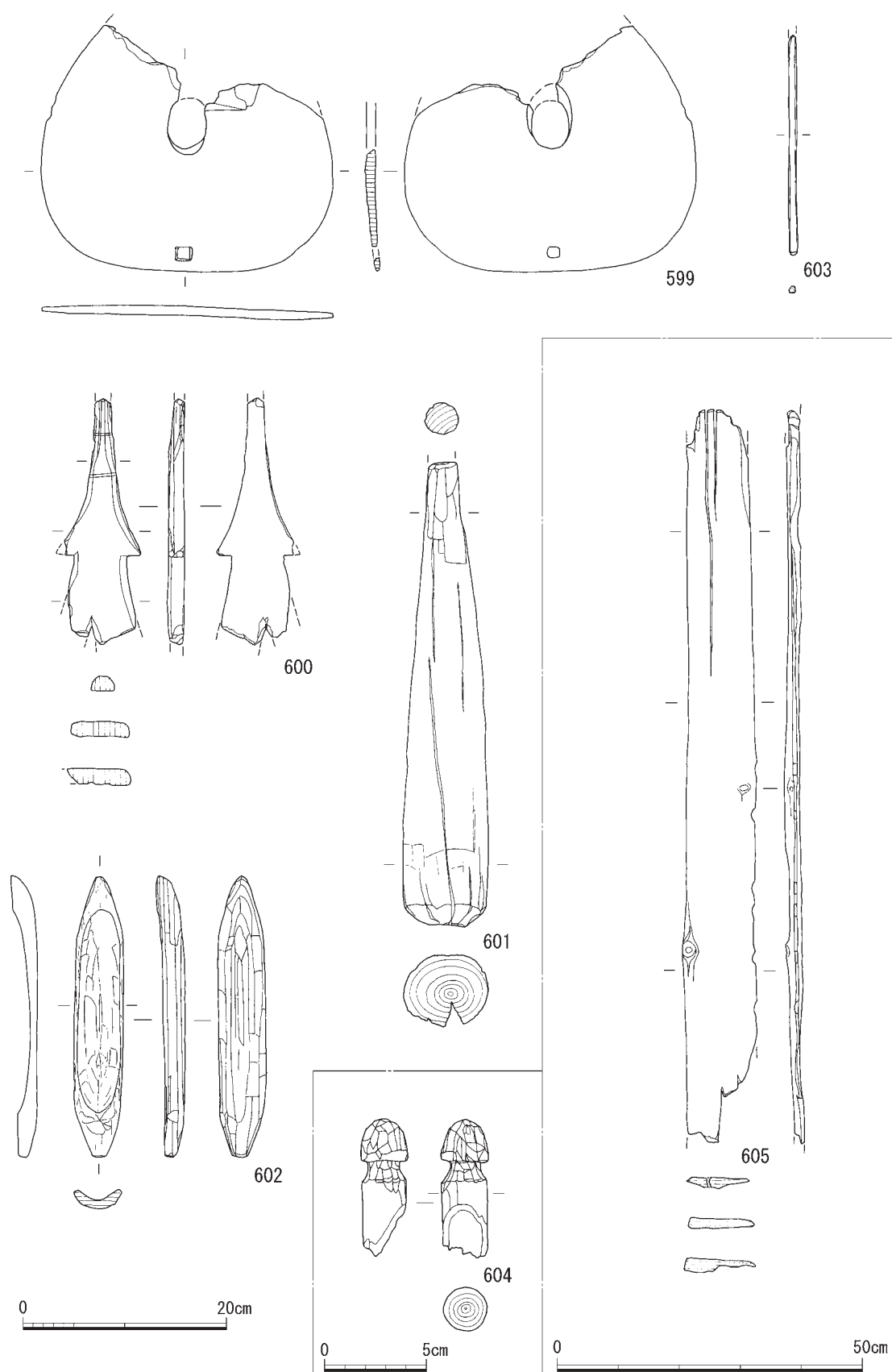
舟形木製品 602は舟形木製品である。横木取りの割材を削り出す。内面は荒い加工痕を残すが、外面は細長い加工痕を残す。外面側端の立ち上がり部分にも加工痕が見られる。平面形の端部は一方が鋭角、他方は直線を呈することから、船尾と船首をつくり分けている。内面の削り込みには船首と船尾側を円形に作り出し、胴の間部分は直線に作り出す。外面底部である船底部分は平坦に作り出す。

火錐杵 603は雑具の火錐杵である。片側を欠損する。断面は円形を呈する。割材を削り出し、全面に面取りを行い棒状に加工する。先端は使用のために炭化している。

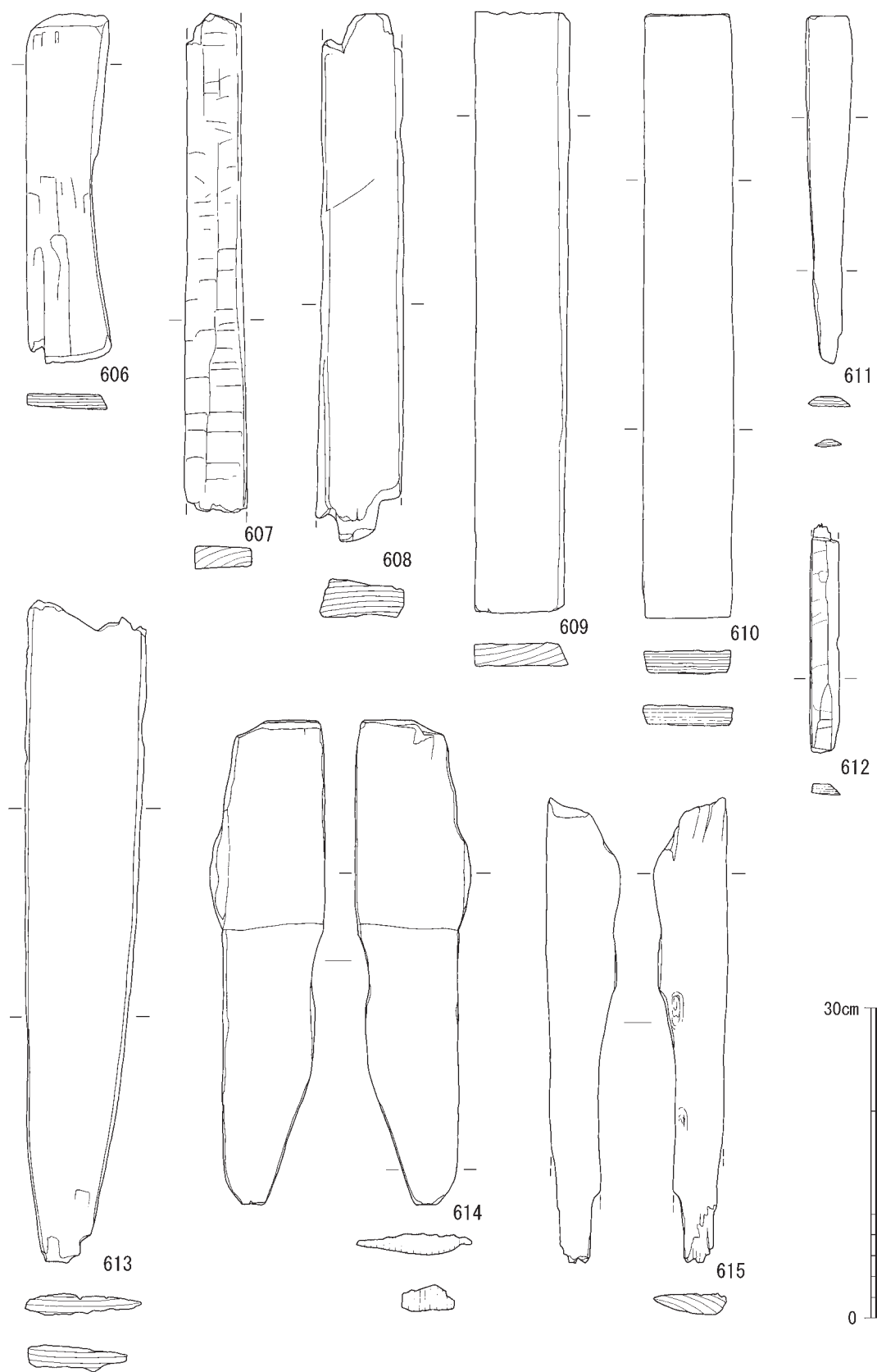
陽物形木製品 604は祭祀具の陽物形木製品である。芯持丸木材を用いて、先端部を加工し、半球形に作り出す。軸部との境はくびれ部を作り出す。先端部からくびれ部には細かい加工痕が認められる。下端部は鋭い刃物で切り込み、折り取って切断されている。

編台目盛板 605は農具の編台目盛板である。両端部を欠損する。平面は長方形を呈し、断面は台形を呈する。節持ちの板目材を用いる。長辺0.6cm、短辺0.2cmの断面「U」字形の刻みを施す。刻みは等間隔に施されない。

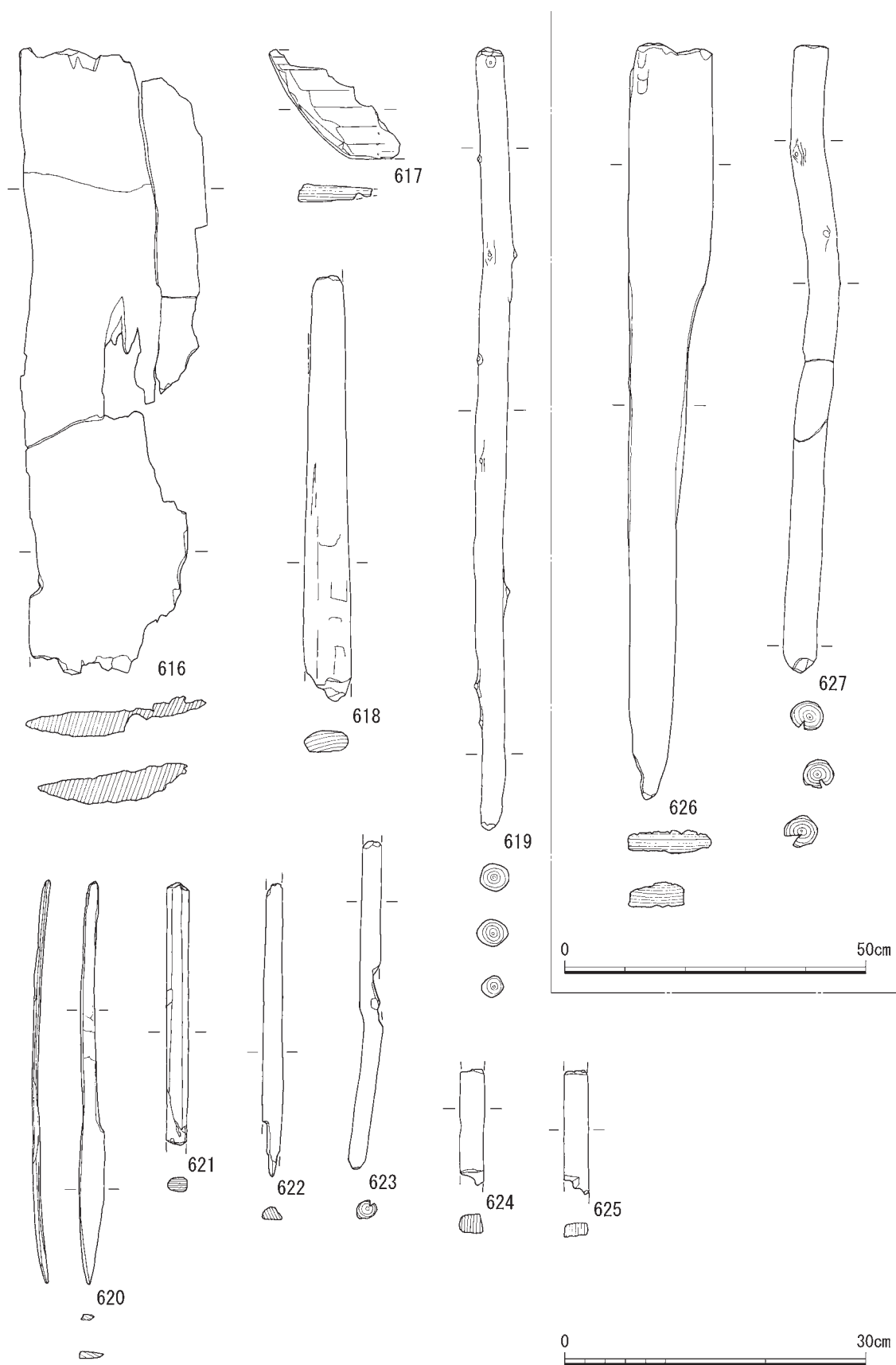
加工木 606～610は加工木の板である。全て板目材である。側面と小口面には面取りを行い、全面を平滑に仕上げる。加工精度は高い。606・607・610は表面に幅広の荒い加工痕が認められる。611～616は加工木の板材である。611は板目材である。表面に鋭利な刃物で加工された細長い加工痕が認められる。612は片側の端部を欠損する。柁目材である。表面には幅広の加工痕が認め



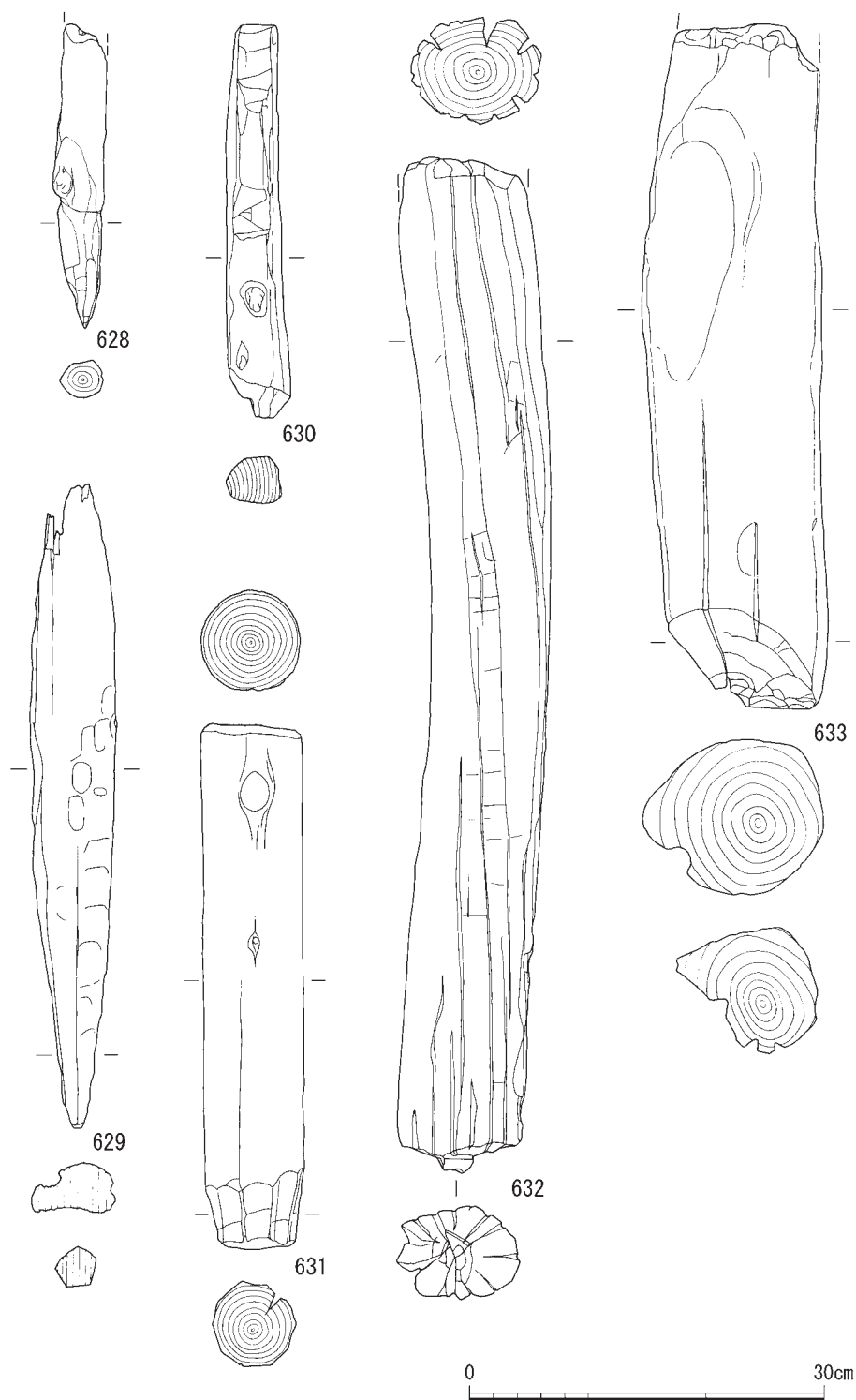
第119図 出土遺物実測図45 木製品(1/3・1/6・1/10)
594~605: SD22(SX51)



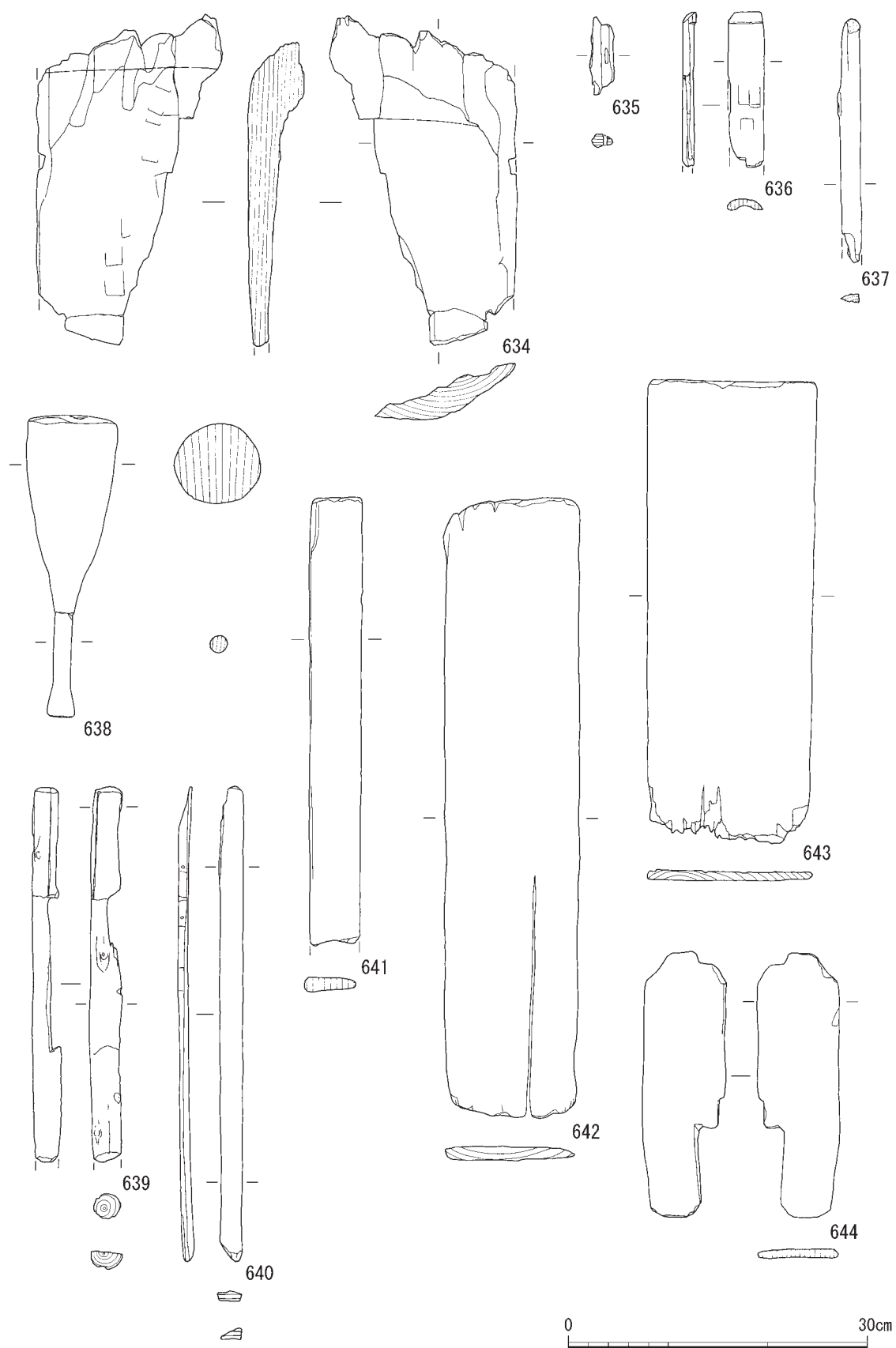
第120図 出土遺物実測図46 木製品(1/6)
606～615 : SD22(SX51)



第121図 出土遺物実測図47 木製品(1/6・1/10)
616～625 : SD22(SX51)



第122図 出土遺物実測図48 木製品(1/6)
628～632 : SD22(SX51)



第123図 出土遺物実測図49 木製品(1/6)

634~644 : SD22(SW61)

られる。小口面と片側の側面を斜めに加工する。613は板目材の先端を加工して尖らせる。矢板として使用されたと考えられる。614は柂目材である。615は追柂目材である。614・615は表面には幅広の加工痕が認められ、平面が不定形なため、製作もしくは製材途中の加工木であると考えられる。616は加工痕が明瞭ではないが、製材途中の加工木であると考えられる。617は加工木の板材である。柂目材を用いる。残存部分は半円形を呈する。断面は長方形を呈する。内外面には等間隔の加工痕を残し、側面も加工する。形態から容器の蓋もしくは底部であると考えられる。618・619は加工木の棒材である。618は両端を欠損する。割材を用いる。全面に加工を施し、側面は面取りを行い、断面は楕円形を呈する。619は片側を欠損する。節持ちの芯持丸木材を用いる。枝を取り払い、面取りを行う。

もえさし 620・621は雑具のもえさしである。620は板目材を用いる。平面部分は面取りを行った加工痕が認められる。小口は加工しており、被熱を受けて炭化している。621は割材を削り出して棒状に加工する。面取りを行った細長い加工痕が認められる。小口は加工しており円頭形に突出させる。小口のみ被熱を受けて炭化している。

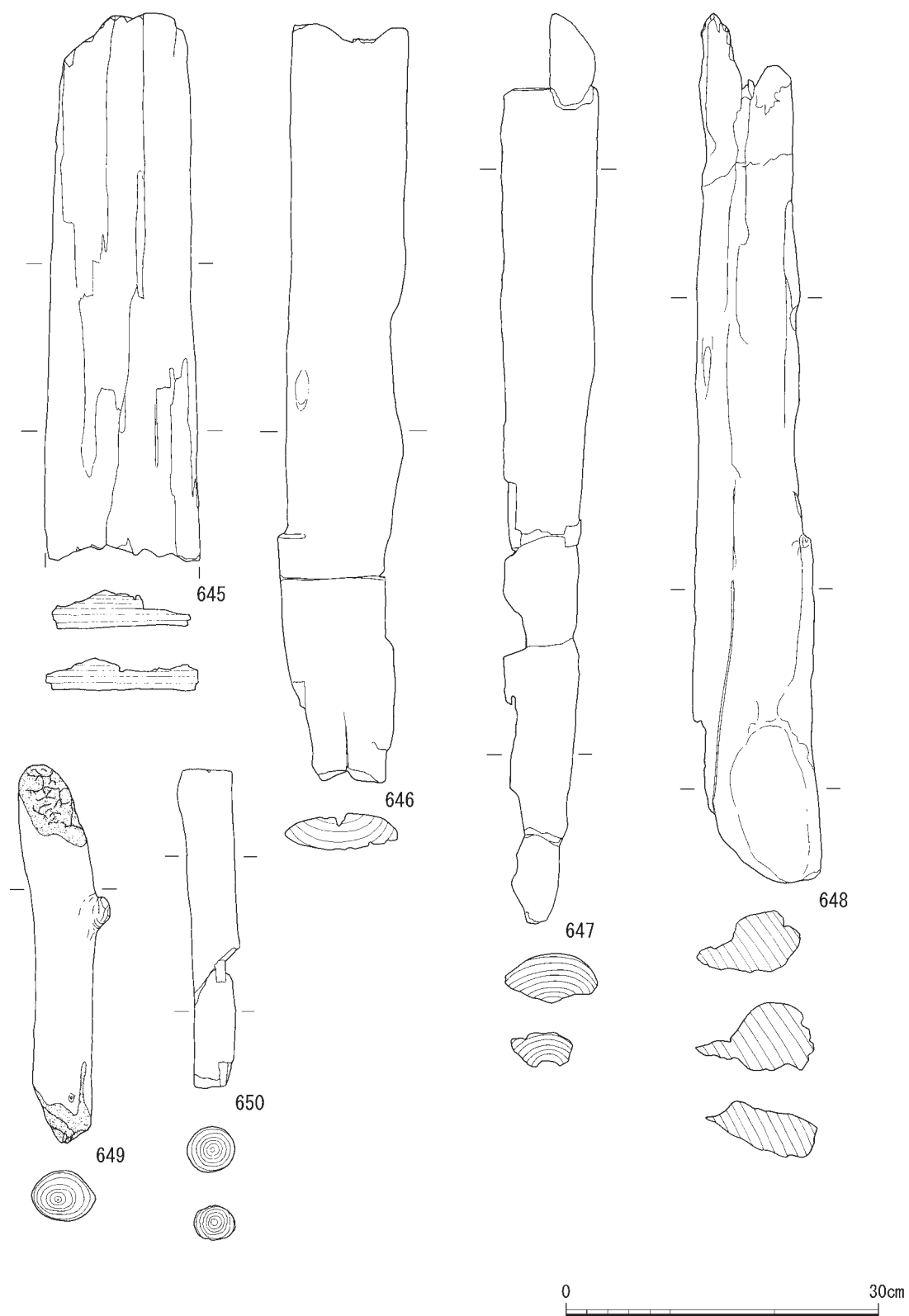
加工木 622～625は加工木の棒材である。622は割材を削り出す。全面に面取りを行う。623は節持ちの芯持丸木材を用いる。平面形は屈曲しており、原木の形態を反映する。枝を払い、全面に面取りを行っている。小口を加工し、突出させる。624・625は両端部を欠損する。割材を削り出し、平断面ともに長方形に作り出し、側面に面取りを行う。形態から火錐臼の可能性も考えられる。626は加工木の板である。板目材である。側面を面取りし、平面は平滑に仕上げる。建築部材などの可能性も考えられる。627は加工木の棒材である。節持ちの芯持丸木材を用いる。平面形は屈曲しており、原木の形態を反映すると考えられる。枝を取り払い、面取りを行うが、わずかに樹皮が残る。小口にも加工を施し、片側は先端を突出させる。

杭 628・629は杭である。いずれも上端部を欠損し、先端を加工して尖らせる。628は節持ちの芯持丸木材を用いる。629は割材を用いる。

加工木 630～633は加工木である。630は片側を欠損する。割材を用い、全面に鋭利な刃物による加工痕が残る。端部小口面は平坦に作り出す。欠損部は被熱を受けて炭化している。631は節持ちの芯持丸木材を用いる、節には枝を払った加工痕が確認できる。上端部の小口面は平坦に仕上げ、端部を面取りする。先端部は幅広の鋭利な工具で削り出し、くびれのように作り出し、先端は平坦に仕上げる。杭や建築部材の可能性が考えられる。632は芯持丸木材の全面に加工痕を残す。片側の小口面には樹皮側から樹心へ向けて伐採痕が確認できる。伐採の際に折り取った突起を残す。633は芯持丸木材を全体に面取りし、全体を平滑に仕上げる。端部小口面を加工する。製作途中の原材もしくは建築部材の柱根の可能性も考えられる。

③ S W61出土木製品(第123～126図634～659)

S W61からは容器の槽1点(634)、武器の剣鞘1点(636)、雑具のもえさし1点(637)、農具の横槌1点(638)、加工木の棒材2点(639・640)、板4点(641～644)、板材2点(645・651)、割材4点(646～648・652)、芯持材2点(649・650)、杭7点(653～659)、不明木製品1点(635)が出土した。



第124図 出土遺物実測図50 木製品(1/6)
645～651 : SD22(SW61)

槽 634は容器の槽である。体部から底部の一部のみが残存する。本来の形状は平面長方形を呈していたと考えられる。横木取りである。外面に加工痕を残す。底部は平坦に作り、内外面の立ち上がり部は長辺側、短辺側ともに湾曲する形態に作り出す。

不明木製品 635は不明木製品である。長径1.7cm、短径0.4cmの楕円形の穿孔を施す。紐を通して結合する孔であると考えられる。容器などの一部であると考えられる。

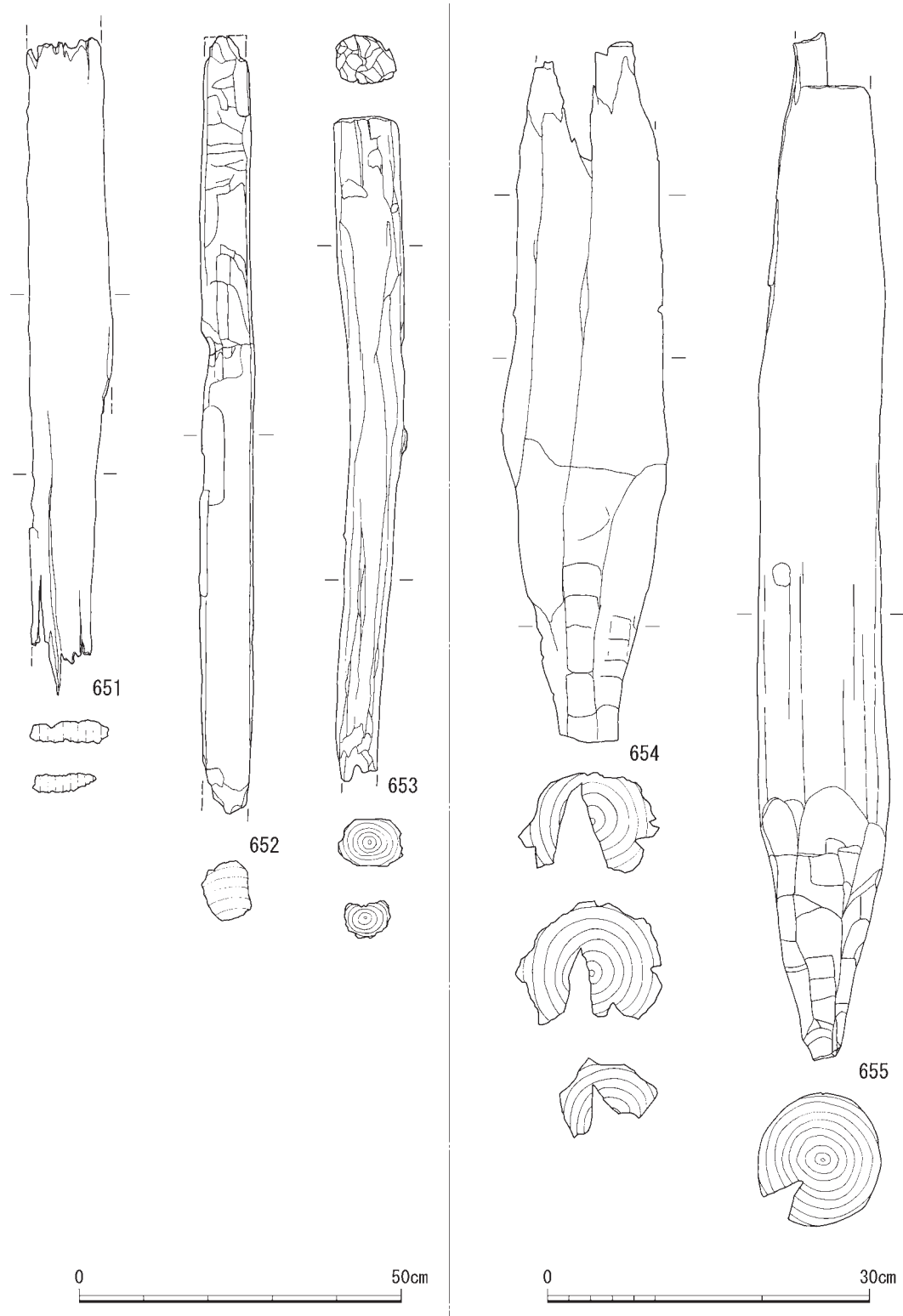
鞘 636は武器の鞘である。鞘尻に当たり、鞘口側を欠損する。断面は倒卵形を呈する。柾目材を用い、外面に加工痕を残す。鞘尻には幅1.0～0.4cm、高さ0.4cmの段を作り出す。段の上端部である小口面は平面、側面ともに斜めに加工する。段の下端には緊縛痕が確認できることから、段の下部より紐などを巻いて固定する二枚合わせ式の鞘である。内面は剥離しており、残存状態は良好ではないが、杏仁形に削り貫いて製作していることから、剣鞘であると考えられる。

もえさし 637は雑具のもえさしである。片側を欠損する。割材の小口面を加工し、円頭形に作り出す。先端は被熱を受けて炭化している。

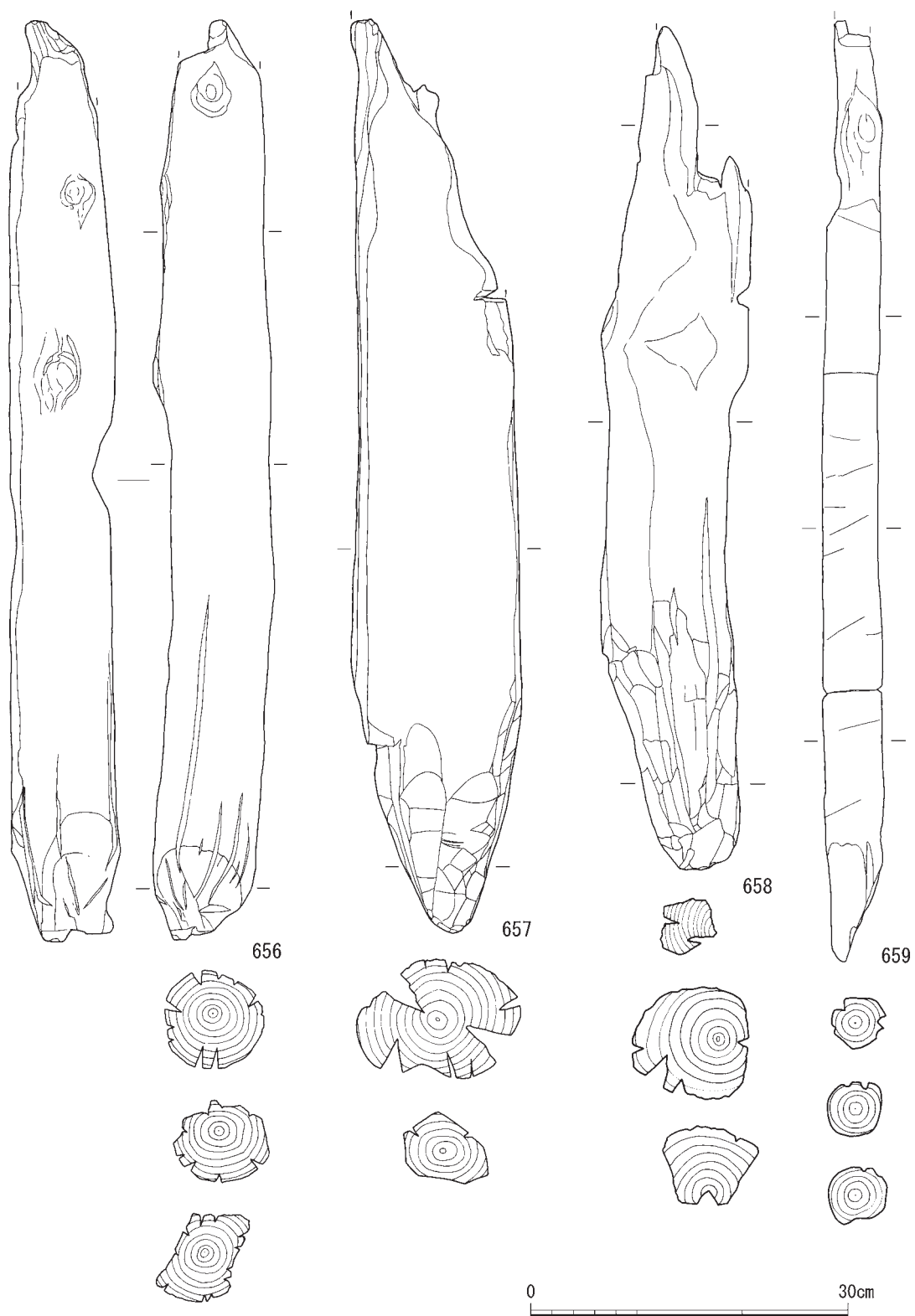
横槌 638は農具の横槌である。割材を横木取りし、削り出して製作している。敲打部と握り部の区分は作り出さない。敲打部から握り部にかけては幅を減じて作り出す。握り端部では幅を広げて端部を作り出す。敲打部に使用痕は確認できない。

加工木 639・640は加工木の棒材である。639は節持ちの芯持丸木材を用いる。側面の一部を欠損する。小口面は平坦に仕上げる。全面に面取り加工を施し平滑に仕上げる。本体中央部の側面から削り込みを行い、組み合わせるための段を作り出す。部材であると考えられる。640は扁平な方形の棒材である。片側を欠損する。欠損部は剥離しており、一部が炭化している。割材を全面に加工を施し平滑に仕上げる。小口面は斜めに作り出す。全面にわずかに加工痕が残る。641～644は加工木の板である。いずれも全面に加工を施し、加工痕を残さずに丁寧に製材する。641は柾目材を用いる。片側の小口面は内湾する形態に作り出す。642～644は板目材である。壁材や床材などの建築部材の可能性も考えられる。645は板目材の加工木である。平面片面は平滑に仕上げ、板として完成しているが、対面には凹凸を残し、鋭利な刃物で削った幅広の加工痕が確認できる。製作途中もしくは再加工の途中と考えられる。片側の端部は被熱により炭化している。646～648は割材の加工木である。646は不明瞭であるが、全面に加工痕を残す。647は小口面に加工痕を残す。全面に被熱を受けて炭化している。648は両端部の小口面に加工痕が残る。端部片側は炭化している。649・650は芯持丸木材の加工木である。649は枝を払った節を残す。両端部を加工しており、炭化している。650は小口面に伐採痕を残す。651は板目材の加工木である。側面の一部のみが残存する。加工痕は認められず、両面を平滑に仕上げる。652は割材の加工木である。両端部を欠損する。全面に面取りを行い、断面は多角形を呈する。平面に荒い加工痕と鋭利な刃物により切り込んだ加工痕が認められる。面取りを行った後に平面の加工を行っていることから、建築部材を転用し、再加工した可能性も考えられる。

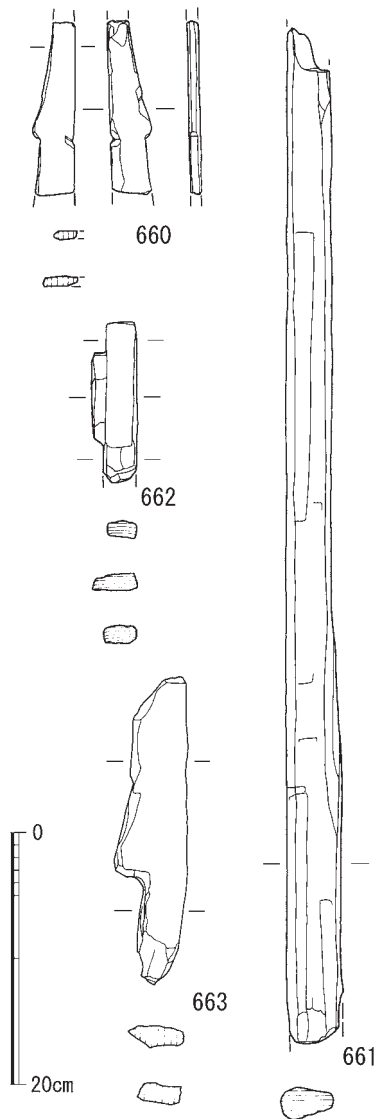
杭 653～659は杭である。653・659は小径木の芯持丸木材を用いる。653は下端部を欠損する。上端部小口面は加工を施し平坦に仕上げる。659は上端部を欠損する。先端は側面の一方向から



第125図 出土遺物実測図51 木製品(1/6・1/10)
651～655 : SD22(SW61)



第126図 出土遺物実測図52 木製品(1/6)
656～659 : SD22(SW62)



第127図 出土遺物実測図53
木製品(1/6)

660・661：S D22(SX56) 662：同S
X68 663：S W69663：S W69

削り出し、斜めに加工して尖らせる。654～658は大径木の芯持丸木材を用いる杭である。いずれも上端部を欠損する。先端は幅の広い加工痕が認められ、鋭利な刃物で加工し、尖らせる。直立した状態で出土し、溝S D22底部に打ち込まれた状態であった。直径9.6～15.6cmを測る大型の杭であることから、栈橋や橋などの構造物を構築していた可能性が考えられる。

④ S X56出土木製品(第127図660・661)

S X56からは農具の曲柄鋤1点(660)、不明木製品1点(661)が出土した。660は農具の曲柄鋤である。いわゆるナスビ形鋤身である。笠部のみ残存する。柁目材を用いる。後面端部は面取りを行い、稜を作り出す。前面は平坦に仕上げる。661は不明木製品である。両端を欠損する。平面は長方形、断面は楕円形を呈する。割材を用いる。わずかに加工痕が残る。面取りを行い、全面を平滑に仕上げる。栈木などの部材であると考えられる。

⑤ S X68出土木製品(第127図662)

S X68からは加工木(662)1点が出土した。662は割材の加工木である。片側を欠損する。全面に加工を施し、側面の一方を突出させた形状に作り出す。

⑥ SW69出土木製品(第127図663)

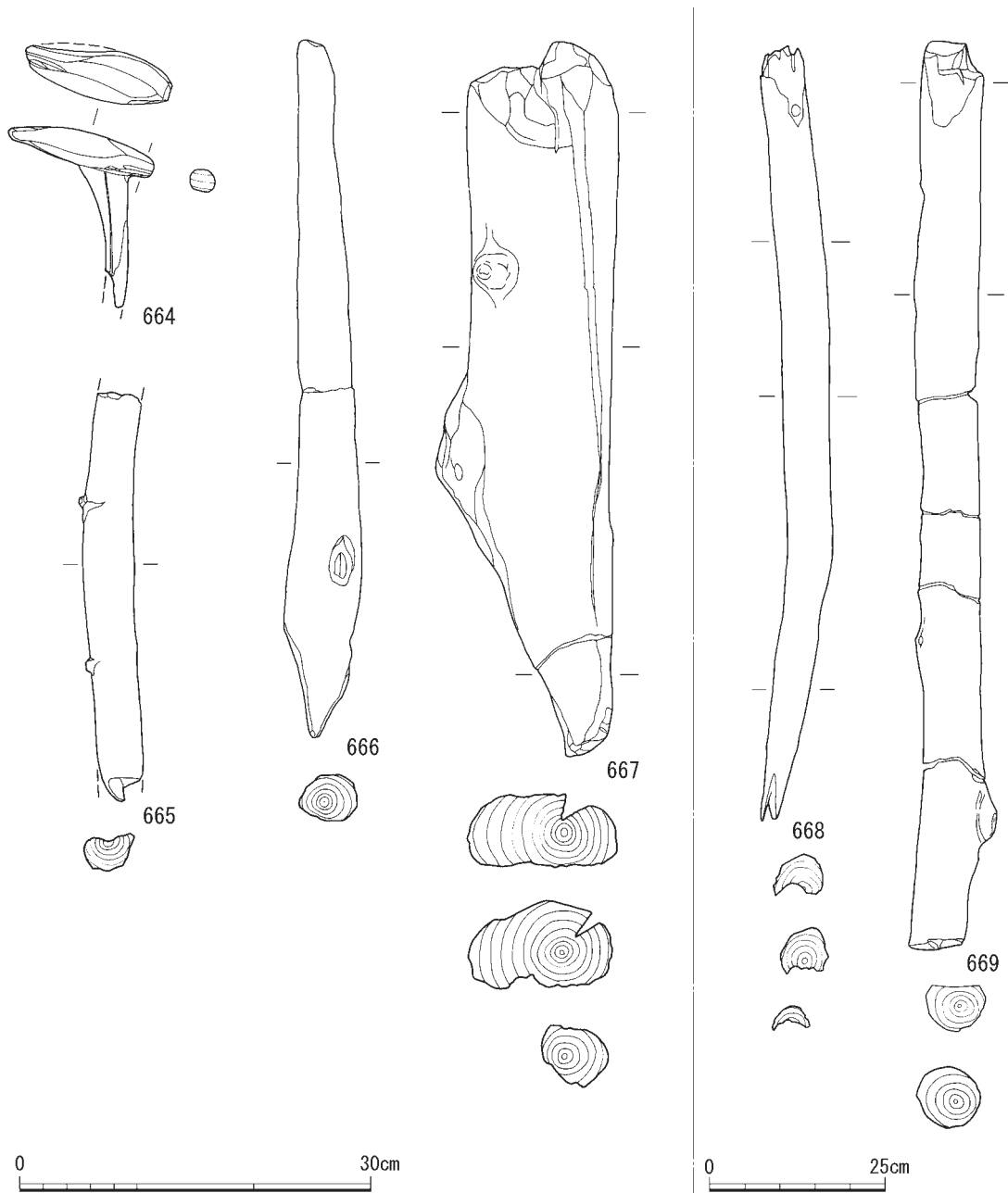
663は加工木の割材である。両端部を欠損する。SW69からは斜めに打設された状態で木材3点が出土した。割材の加工木を杭として利用したと考えられる。

⑦ S W62出土木製品(第128図664～669)

S W62からは工具の手斧膝柄1点(664)、加工木5点(665～669)が出土した。

手斧膝柄 664は工具の手斧横斧の膝柄である。斧台の一部と握り部を欠損する。枝の又木を削り出して一木で製作している。斧台部には細長い加工痕を残す。斧台部は平面、側面ともに湾曲した形態を呈する。斧台と握り部の境界では握り部の幅を太く作り出している。斧台は握りに対して斜めに作り出されており、握りを境にして鈍角と鋭角を呈する。斧身の装着痕は確認できない。

加工木 665～669は加工木である。665・668は加工木の棒材である。芯持丸木材を用い、全面に面取りを行い平滑に仕上げる。666・667は切断痕を残す加工木である。節持ちの芯持ち丸木材を用いる。節部分では枝を払った加工痕が確認できる。小口面には樹皮側から芯に向けた荒い加



第128図 出土遺物実測図54 木製品(1/6・1/10)
664～669：S D 22(S W 62)

工痕と折り取った切断痕が認められる。669は節持ちの芯持ち丸木材の加工木である。面取りを行い全面を平滑に仕上げる。建築部材の柱根の可能性も考えられる。

⑧小結

以上のように、S D 22下層からは多様な木製品が出土した。S D 22の時期は、S W 62が出土土器や層位から弥生時代中期後葉とし、その他の遺構は、古墳時代初頭～前期前葉と推定される。

農具は直柄横鋤身、泥除け、曲柄鋤身が出土しており、いずれも本体の厚さは薄く作り出す。泥除けは側面形が直線的なものとゆるやかに湾曲するものがあり、柄孔周辺には隆起を作り出さない。また、泥除けの下部に柄との緊縛のための穿孔を施す。曲柄鋤のナスビ形鋤身は笠部の突

出が低くなっている。以上のような特徴は、弥生時代後期から古墳時代前期にみられる農具の形態を呈する(上原1993)。他の農具では木錘、目盛り板が出土しており、編具の生産が行われていたと考えられる。

さらに、運搬具の舟材、漁撈具の櫂、網杵が出土した。近隣に位置する木津川を利用した漁撈、運搬活動を反映していると評価できる。

建築部材は梯子、垂木、壁材、柱根が出土した。これらの建築部材は高床建物に使用される部材である。また、梯子には被熱痕がみられる。周辺の集落に高床建物が存在し、火災によって消失した建築部材を投棄した可能性が考えられる。

祭祀具は舟形、陽持形、剣形の3点が出土した。全て形代の木製品である。さらに、楽器の琴が出土しており、溝S D22における祭祀に用いられたと考えられる。舟形、陽持形はSW61より出土していることから、SW61付近のS D22上流において祭祀が執り行われたと想定される。また、武具の盾、武器の剣鞘、雑具の指物椅子が出土しており、これらも祭祀に用いられた木製品である可能性も考えられる。このような祭祀具、武器・武具の出土から、祭祀を執り行い、S D22を維持・管理していた上位階層者の存在が指摘できる。^(注66)

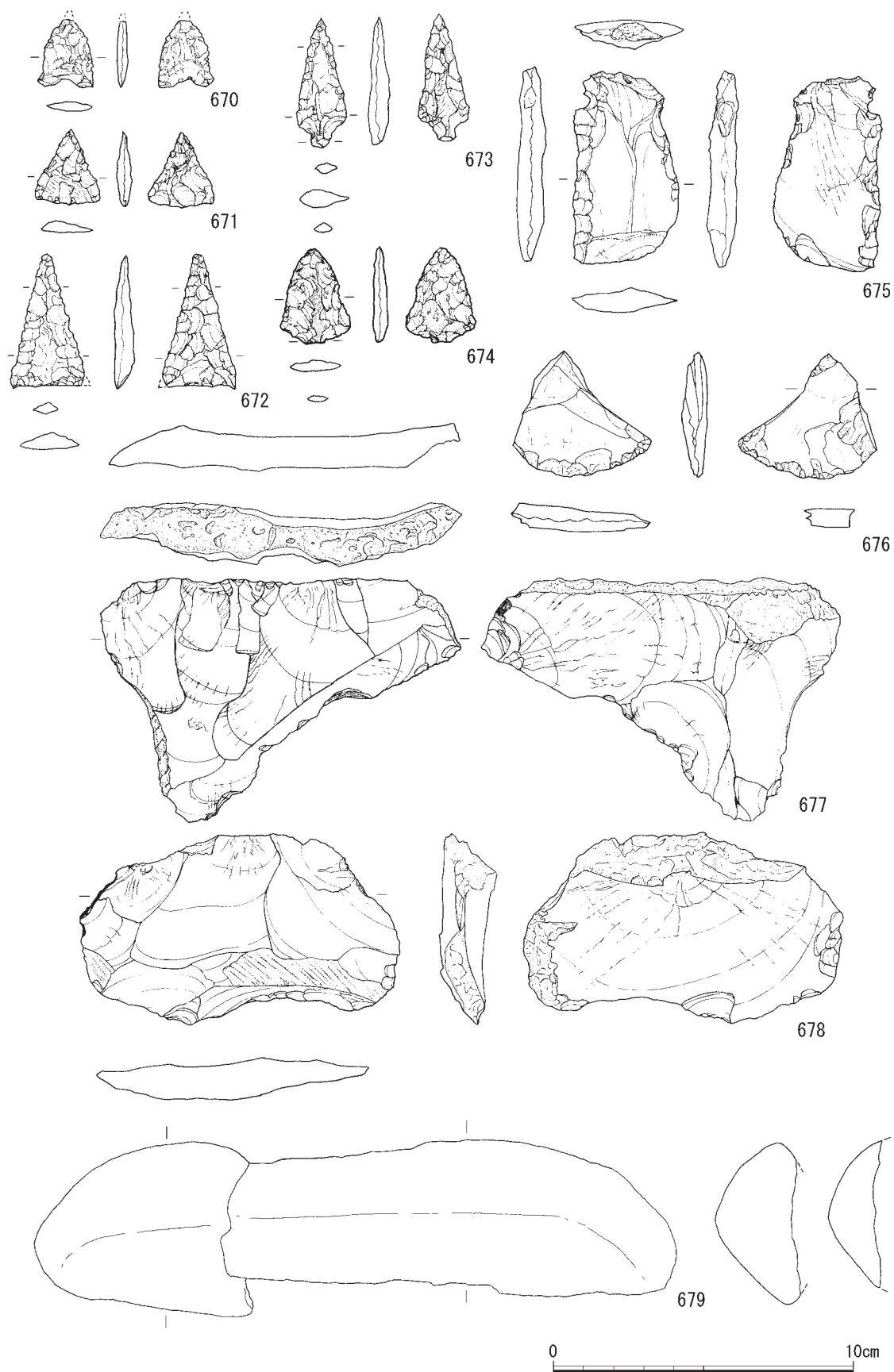
溝S D22下層において出土量が最も多いのは加工木であり。伐採痕を残す材、原木を1/2、1/4に分割した割材、製材途中の割材、板材など、木材の加工に伴う材が数多い点の特筆される。加工木は樹皮を残したままの材、製材途中の割材、製作によって生じたと考えられる材、製材を行った板や棒材が出土しており、加工度の低い木材から高い木材まで、木製品製作に関わる木材が出土している。今回の調査では、器種が特定できる未製品を検出することができなかったため、木製品製作の具体的な実態は不明であるが、下水主遺跡溝S D22上流域に位置する集落では伐採木を分割し、製材までを行う木製品製作を指摘できる。また、加工木は小径木の材を加工した芯持丸木材や割材が大半を占めており、木製品製作に用いる木材の選択を行い、小径木においても木取り可能な製品を製作していたと考えられる。さらに、小型の工具手斧柄の出土や補修された槽の出土からも一定程度の木製品製作技術を有していたことが考えられる。

このように、下水主遺跡周辺には木製品生産を行う集落が想定される。城陽市西側の沖積低地の木津川右岸に近接する立地環境から、城陽市東側の山林から木材を調達するほかに、木津川上流域で伐採した木材を木津川の水運により入手し、製作を行っていたことも想定される。溝S D22出土木製品は下水主遺跡周辺における木津川と沖積低地を利用した生産活動や祭祀行為を物語っている。
(福山博章・高橋 悠)

(3)石製品・土製品

①弥生時代の石製品(第129図670～第130図683)

石鏃 670は、凹基式の形態をもつ。先端を若干欠損している。薄い素材で浅く平坦な剝離で全体を成形している。石材はサヌカイトである。残存長さ2.2cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm、重量1.8gを測る。B地区包含層中から出土した。671は、三角形鏃である。欠損はない。やや厚みをも



第129図 出土遺物実測図55 石器(1/2)
670 : B地区包含層 671~679 : B地区S D22

つ素材で、周縁からの粗い剥離で全体を整った形態に仕上げている。石材はサヌカイトである。長さ2.5cm、幅2.1cm、厚さ0.5cm、重量1.5gを測る。S D 22下層から出土した。672は、縦長の三角形鏃である。先端部と片側基部を若干欠損する。基部及び両側縁に押圧による整美な剥離を施している。主要剥離面側でない片側表面中央にもとの素材面を残している。石材はサヌカイトである。残存長さ4.5cm、残存幅2.4cm、厚さ0.6cm、重量6gを測る。S D 22下層から出土した。673は、有茎鏃である。茎部先端を若干欠損するがほぼ完形品である。厚みのある素材で、縁辺からの丁寧な剥離により成形されている。裏面にもととの素材面がみられる。石材はサヌカイトである。長さ4.2cm、幅1.6cm、厚さ0.7cm、重量4.5gである。S D 22・4区Ⅵ層から出土した。674は、基部に欠損がみられるが、有茎鏃である。幅広の比較的薄い剥片を用い、周縁からの剥離により丁寧に成形している。石材はサヌカイトである。残存長さ3.1cm、幅2.3cm、厚さ0.45cmを測る。出土地点は、S D 22・4区Ⅵ層である。

削器 675は、幅広の縦長剥片を素材とする抉りをもつ削器である。抉りは打面に近い両側縁辺から入り、浅いが明瞭にみられる。抉り部及び刃部となる縁辺部の剥離は表裏とも整っている。中間から下方に湾曲する部分は未加工のままとされ、ここには刃こぼれ状の使用痕が確認される。石材はサヌカイトである。全体に黒灰色を呈し、風化はあまりすすんでいない。長さ6.4cm、幅3.5cm、厚さ0.9cm、重量25.8gを測る。676は、横長剥片を素材とする削器である。左右を大きく欠損している。湾曲する下辺を刃部とし、表裏に細かな剥離がみられる。石材はサヌカイトで、残存長さ4.6cm、幅4.2cm、厚さ0.8cmを測る。S D 22から出土した。

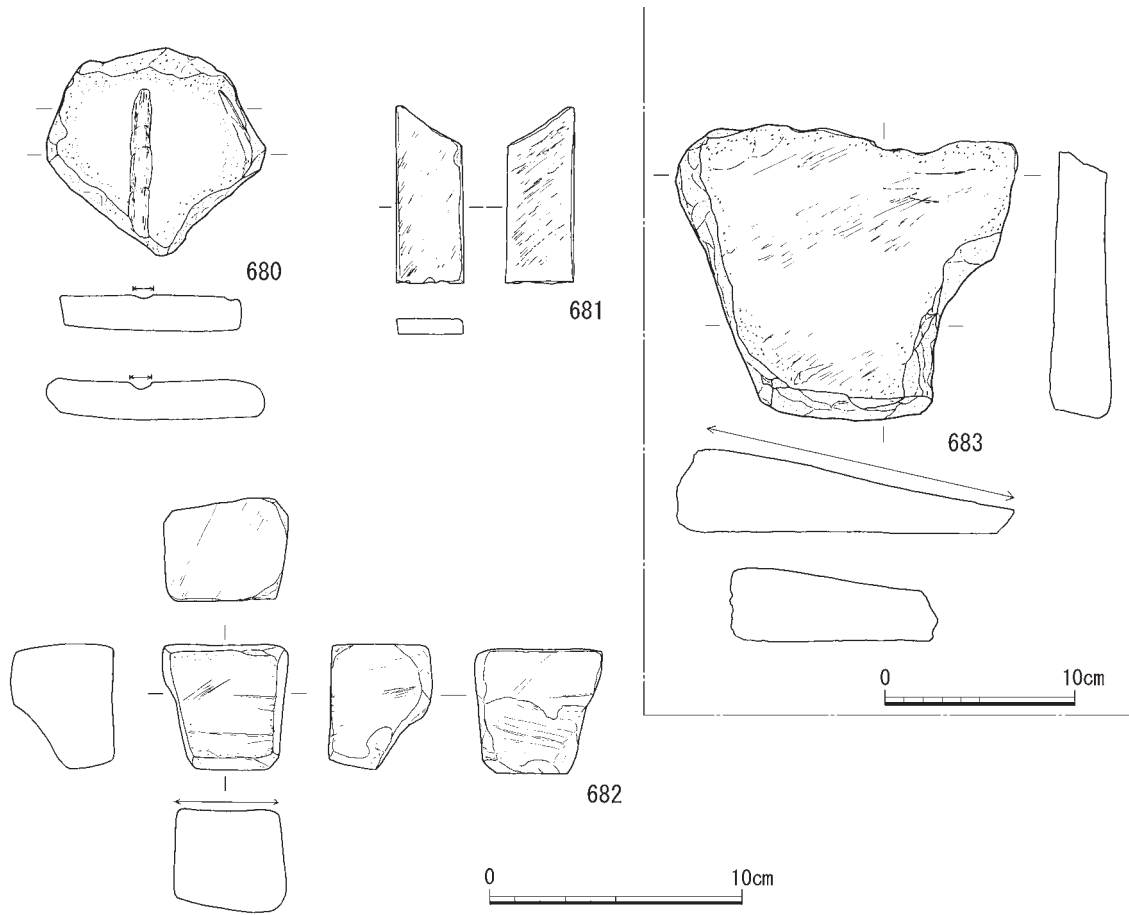
石核 677は、厚みのある板状の薄片を素材とする石核である。自然面を打面にその縁辺から打撃し、片方の面で複数の幅広剥片を剥離している。またもう片面の下方左側面においても、幅広薄片を剥離した痕跡がある。石材はサヌカイトである。長さ8.1cm、幅12cm、厚さ2cm。B-S D 22の整地層（飛鳥時代）から出土した。678は、やや楕円形に整った横長薄片を素材とする石核である。上辺の自然面を打面に、背面側で横長及び幅広剥片を少なくとも3枚剥離している。石材はサヌカイトである。長さ6.4cm、幅10.1cm、厚さ1.9cmを測る。出土地点はS D 22（第1次調査）である。

搬入石材 679は、磨製石器の素材、あるいは玉作りの石鋸などの素材となる結晶片岩である。加工の痕跡は認められない。本遺跡近隣では産出しないもので、紀ノ川流域等が考えられる搬入石材である。長さ21.4cm、幅5.7cm、厚さ2.8cmを測り、S D 22下層から出土した。

以上、石器類に関してはすべて弥生時代中期以前のものとみられる。あえて打製の技術で製作された5点の石鏃は、いずれも中型から大型のもので、縄文時代以来の小形で狩猟用のものとは一線を画しているといえる。サヌカイトの風化度からも矛盾しない。なお産地であるが、肉眼判断で670の石鏃のみ金山産で、他は二上山サヌカイトであろう。2点の削器と2点の石核も二上山産である。

（黒坪一樹）

玉砥石（第130図） 680は、B地区第1次調査S D 22下層から出土した砂岩製砥石である。扁平な石材の中央に、断面「U」字形の筋状の砥面が1条形成されている。長さ8.2cm、厚さ



第130図 出土遺物実測図56 石器(1/3・1/4)
680・681：S D22下層 682：S D22内 683：S D22(S W61)

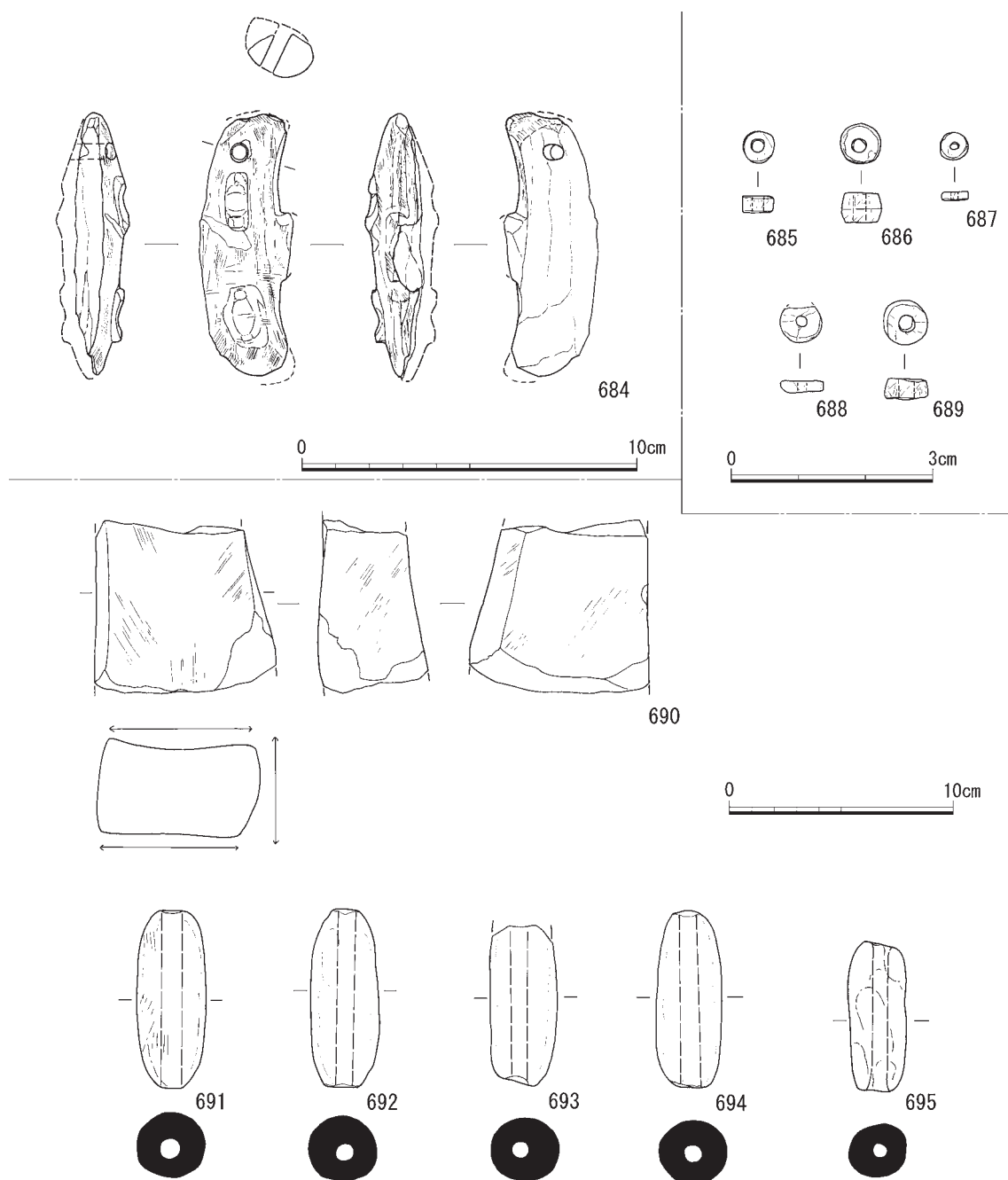
1.5cm、重さ140gを測る。また、砥面は、長さ6.0cmの筋状を呈し、幅0.7cmを測る。古墳時代の再掘削された層位から出土したもので、弥生時代中期の玉砥石と推定される。

石鋸(第130図) 681は、B地区第1次調査のS D22下層から出土した。一部を折損しているが、下面は丸みを帯び、使用痕とみられる擦痕がみられる。石材は、紅簾片岩であり、玉作りに用いられる石鋸とみられる。長さ7.0cm、幅2.6cm、重さ24.8gを測る。古墳時代に再掘削された層位から出土したが、形状から弥生時代中期の石鋸と推定される。

砥石(第130図) 682は、直方体状の厚みのある形状をなす砥石である。砥面は1面にみられ、細かな擦痕が認められる。幅4.5cm、厚さ5.0cmを測り、砂岩を石材とする。第1次調査において、S D22から出土した。683は、水制遺構S W61から出土した砥石である。扁平な形状をなし、長さ18.0cm、厚さ4.4cmを測る。平坦面の片面を砥面として使用し、細かな研磨痕が認められる。

②古墳時代の石製品

子持勾玉(第131図) 684は、第1次調査B地区中央セクション下層(S D22)から出土した子持勾玉である。折損し、ほぼ半面を残す。残存長7.88cmを測り、復元長は約8.0cmと推定される。残存幅最大2.8cmを測り、全体に丸みをもつ。復元幅は約2.5cmと推定される。子玉は、脊側に1か所、腹側に1か所、さらに側面に2か所を削り出し、計4個を数える。子玉の表現は、やや



第131図 出土遺物実測図57 石器・土製品(1/1・1/2・1/3)

684～689：B地区S D22(第1次) 690：同S D22 同S K17 691～694：同S D22 695：同S K17

崩れが認められ、子玉の頭部と尾部の削り出しは浅く、突出しない。材質は、滑石製とみられ、暗青灰色を呈する。頭部に孔1点を穿孔し、孔径は4.6cmを測る。

子持勾玉は、石製祭具の一種であり、全国的にみて総数300以上の出土例が確認されている。しかしながら、出土状況が明確でないものが多く、単独で出土する例が多いため、編年の位置づけの難しい資料として知られる。従来の研究では、子持勾玉の編年的な位置づけのなかで出現段階とされる資料は、陶邑古窯址群TK73型式に平行する京都府山開1号墳出土の子持勾玉であり、

目と嘴の表現がなされる。古式の子持勾玉は、脊側－腹側－側面の子玉が4—3—1のものを基本とし、各子玉が個別に整っているものが編年的には古い要素とされ、大阪府カトンボ山古墳の古墳第Ⅳ期の石製模造品を共伴する子持勾玉が最も古式の資料として位置づけられている。古墳時代後期以降の子持勾玉は、全体に丸みを失い、扁平な形状を呈し、断面が長方形となるとされる。また、子玉は、製作技法の簡略化が進み、数が減少して、まとまって削り出され、腹側の子玉は、方形の突起状になることが指摘される。

本例は、扁平化せず、全体的に丸みを保ち、古墳時代後期以降の子持勾玉にはみられない編年的に古い要素をもつ一方、子玉は数が減少し、突出しない点など、新しい要素がみられる。また、勾玉の「C」字形の湾曲がやや弛緩しており、おおよそ古墳時代中期後半の資料とみることができよう。S D 22の古墳時代における再掘削の時期が、陶器TK23型式併行とみられることから、再掘削の段階に溝S D 22に伴う集落祭祀のなかで用いられた子持勾玉であったと推定される。

小玉(第131図) 685～689は、滑石製の小玉である。685は、B地区1次調査中央セクション45層(S D 22)から出土した。径0.48cm、厚さ0.25cmを測る。孔径は、0.2cmを測る。686は、B地区B地区第1次調査中央セクション43層(S D 22)から出土した。径0.6cm、厚さ0.71cmを測り、厚みをもつ。孔径は、0.2cmを測る。687はS D 22第1次調査中央部から出土した。径0.33cm、厚さ0.17cmを測る。孔径はやや小さく、0.1cmを測る。688は、B地区第1次調査中央部(S D 22)から出土した。一部を折損する。径0.6mm、厚さ0.2cmを測る。689は、B地区第1次調査S D 22から出土した。径0.64cm、厚さ0.36cmを測る。孔径は、大きく0.25cmを測る。色調は、灰色(N7/0)を呈する。

砥石(第131図) 690は、B地区S K 17から出土した方形の砥石である。長方形の断面をなし、長さは7.7cm、幅8.1cm、厚さ3.8cmを測る。色調は、灰白色(7.5Y 7/2)を呈し、アブライト製の砥石とみられる。

③古墳時代の土製品(第131図691～695)

691～695は、土錘である。691は、B地区第1次調査S D 22から出土した。長さ8.0cm、厚さ3.5cmを測る。孔径は1.0cmを測り、橙褐色を呈する。重さ73gを測る。692は、B地区S D 22中央セクション43層から出土した。長さ8.5cm、厚さ3.1cmを測る。孔径は0.8cmを測り、重さ70gを測る。693は、S D 22から出土した。長さ7.3cm、厚さ3.0cm、孔径は0.7cmを測り、694は、S D 22から出土した。長さ7.9cm、厚さ3.1cm、重さ67gを測る。孔径は0.7cmを測る。695は、B地区第1次調査S K 17下層から出土した。長さ6.7cm、幅2.6cmを測る。孔径0.5cmを測る。焼成は良好である。

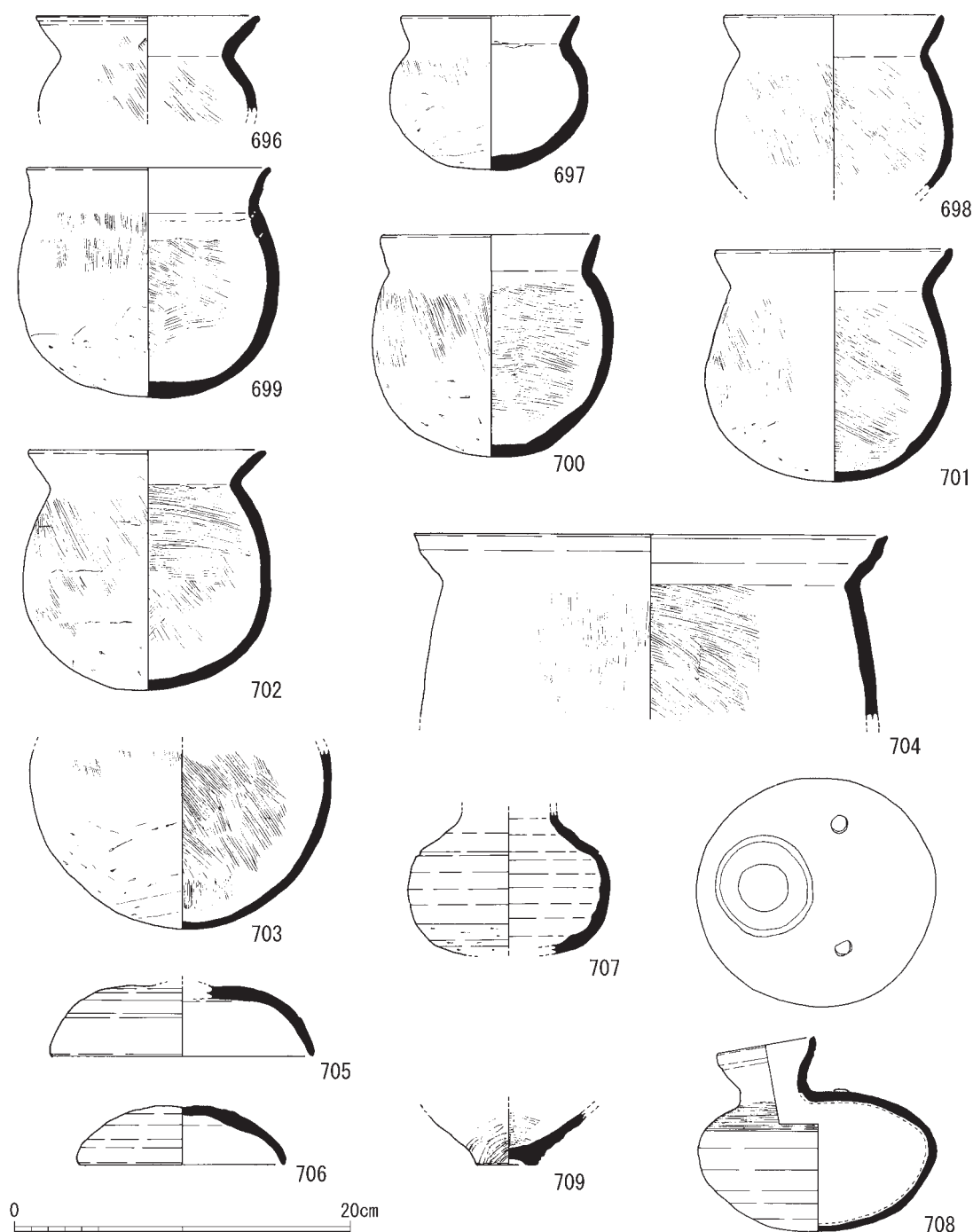
(高野陽子)

2)古墳時代後期～飛鳥時代の遺物

(1)A地区出土土器

井戸S E 112(第132図696～709) 696～704は、土器甕^(注68)である。法量から小型品1点(697)、中型品7点(696・698～703)、大型品1点(704)がある。中型品のうち696は小型品に近いと想定

され、703は他の中型品よりやや大きい。696や704は体部最大径から下半部を、698は底部を欠損する。また、703は体部最大径よりも上部を欠損する。696・704を除く甕では体部の形態が円形に近いもの(697・699・700・703)と、体部下半に最大径がくる下膨れ状を呈するもの(698・701・702)とがある。甕の口縁部の形状については、704が口縁部中位でわずかに屈曲して受け口状を呈し、口縁端面が内傾する形態をとるほかは、おおむね単純「く」字状を呈し、口縁部が斜



第132図 出土遺物実測図58 土器(1/4)
696~709: A地区S E112

め上方に延びるものやわずかに外反するもの、あるいはわずかに内湾するものがある。いずれの甕も調整はほぼ統一されており、口縁部はヨコナデ、体部外面上半部はハケ、体部外面下半～底部はケズリ、体部内面は全面にハケがそれぞれ施されている。このような特徴を持つ甕は、城陽市域を含む山城地域のみならず、近江地域から大和北部地域にかけて分布する。^(注69) 上半部を欠損する696は697～703と同一の特徴を有する甕と思われる。また、704は長胴甕である。

705は須恵器高杯蓋と推定される。頂部破断か所につまみがついていた痕跡が確認できる。外面中位付近に沈線を施し、口径が大きいことから高杯の蓋と判断した。706は須恵器杯H蓋である。口径12.2cmで、頂部の調整がヘラキリ後不調整であることから、飛鳥Ⅰ^(注70)ないしやや先行する資料に相当しよう。707は須恵器短頸壺である。708は須恵器平瓶である。頂部外面に直径1cm前後のボタン状の粘土粒を2か所貼り付けている。また、頂部にはカキメを施す。口縁部外面には沈線が1条巡る。

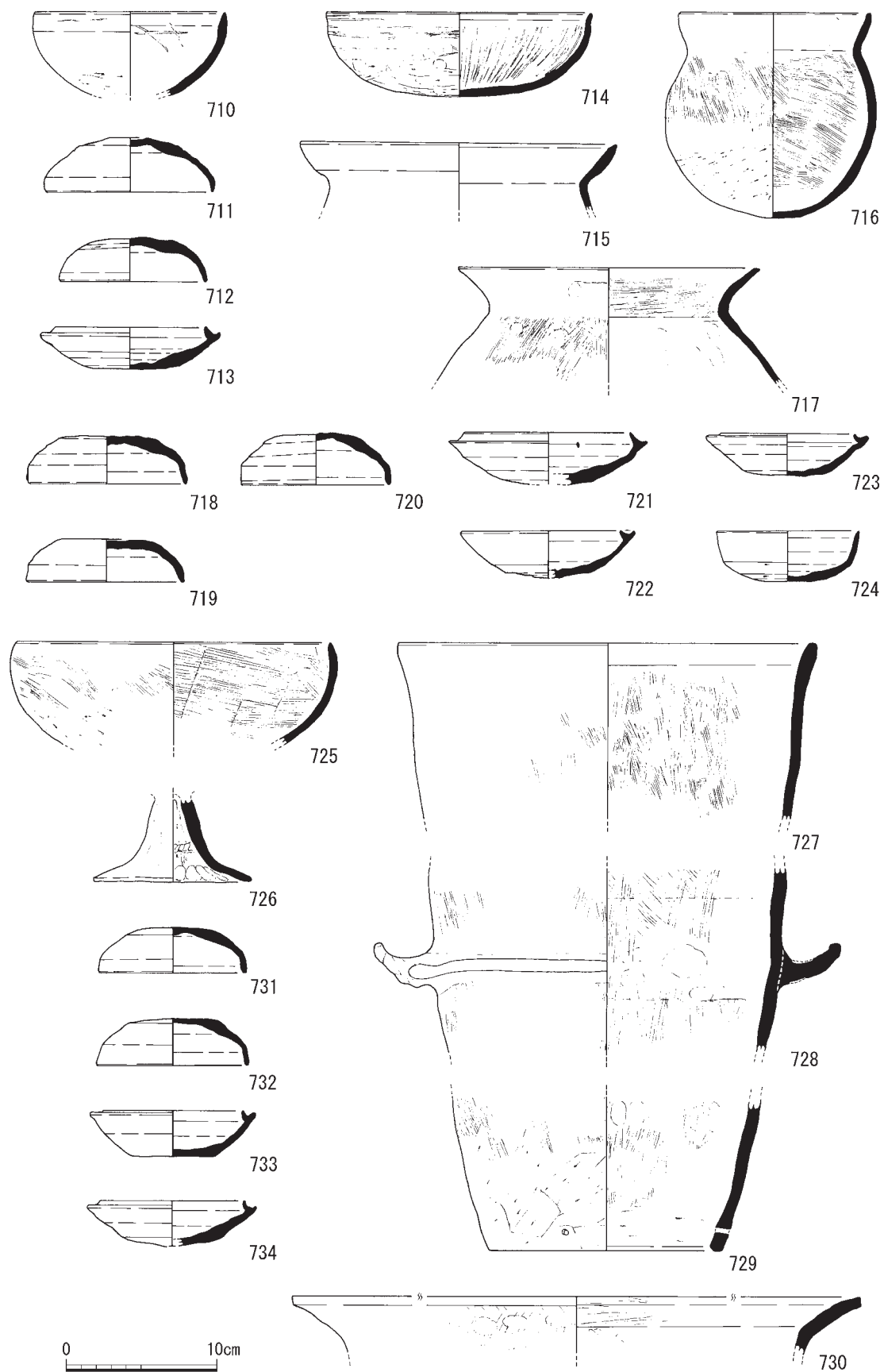
709は弥生土器甕の底部の破片である。外面にタタキを施すもので、下層遺構に伴う遺物が混入したものと考えられる。

土坑S K 352(第133図710～713) 710は土師器杯である。全体に椀状を呈するが、口縁部は内傾気味の面をもち、端部はやや尖りながら丸く納める。形態的には在地系のものであろう。711・712は須恵器杯H蓋である。頂部はどちらもヘラキリ後ナデを施す。713は須恵器杯Hである。底部外面はヘラキリ後ナデを施す。710の時期は不明であるが、711～713から飛鳥Ⅰないし飛鳥Ⅱに相当しよう。

土坑S K 354(第133図714～724) 714は土師器杯Cである。内面に1段放射状暗文を施す。外面上半に横方向のミガキを施す。外面下半～底部にかけてはケズリを施す。器形的な特徴等から宮都系の土器と考えられる。径高指数が31であることや、精緻な放射状暗文などから飛鳥Ⅱ前後に相当しよう。715～717はそれぞれ器形が異なる土師器甕である。715は単純「く」字状の口縁部を呈する。頸部の器厚は薄い、口縁部そのものの器厚はやや厚くなり、口縁端部を丸く納める。716は上述の井戸S E 112から出土した中型の甕(699～702)とほぼ同形同大で、調整も共通する。717は口縁部が単純「く」字状で、わずかに外反気味となり、斜め上方にまっすぐ延びる。端部はやや面を持つ。

718～720は須恵器杯H蓋である。口径10cm前後で、頂部はヘラキリ後不調整もしくはナデである。飛鳥Ⅰの新段階に相当する。721～723は須恵器杯Hである。口径9～11cmで、底部外面はヘラキリ後不調整もしくはナデであることから飛鳥Ⅰに相当しよう。724は須恵器杯Gである。底部が丸みをもつように回転ヘラケズリで仕上げられており、杯Gでも古相の特徴が見られるものである。これも飛鳥Ⅰに相当しよう。

土坑S K 335(第134図725～734) 725は土師器鉢である。口縁端部にヨコナデを施す。外面上半部はハケ、下半部はケズリを施す。また、内面にハケを密に施す。調整のあり方は697～703・716などの中型甕に類似する。726は土師器高杯脚部である。脚柱部は摩滅のため不明瞭であるが、面取りを施すようである。727～729は土師器甗である。接合しないが、同一個体の可能性もある



第133図 出土遺物実測図59 土器(1/4)

710～713：A地区SK352 714～724：A地区SK354 725～734：A地区SK335

ことからまとめて報告する。口縁部にヨコナデを施し、体部の内外面にはハケを施す、体部外面の中位には埴輪のような突帯を巡らし、把手を貼り付ける。内面にはユビオサエも認められる底部外面は縦方向にケズリを施す。底部付近に直径3mm程度の小穿孔が認められる。残存状況が限られるため、棧の有無は確認できなかった。730は土師器鍋の口縁部である。口縁部内外面はハケを施した後にナデを施す。

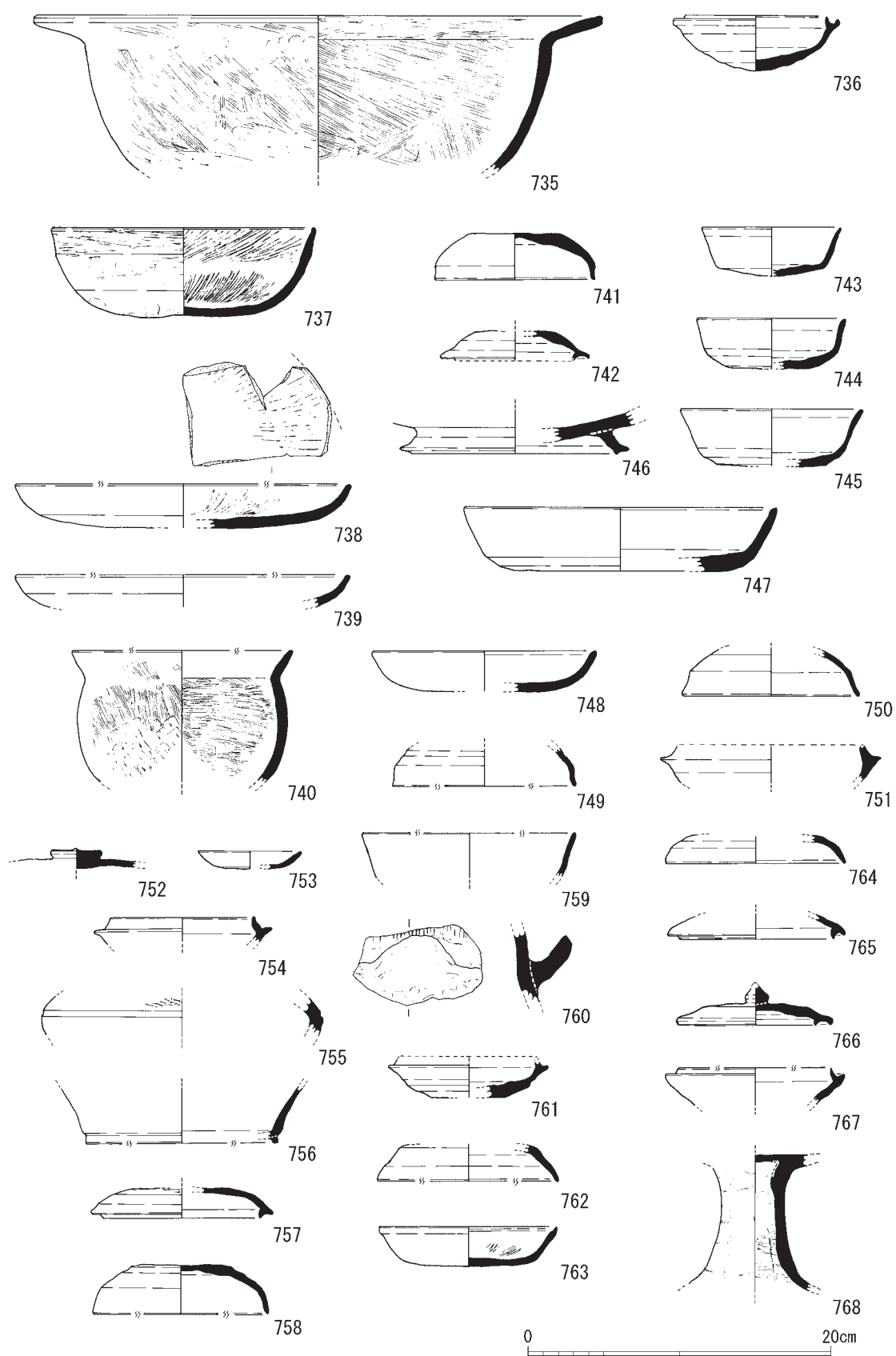
731・732は須恵器杯H蓋、733・734は須恵器杯Hである。両者の調整は共通する点が多く、頂部または底部はヘラキリ後未調整もしくはナデで、口径が10cm前後のものとなる。このような特徴は拙稿^(注71)でも指摘したように山城地域における杯Hの終焉段階に当たると考える。飛鳥Ⅱに相当しよう。

土坑S K 239(第134図735・736) 735は土師器鍋である。口縁部はヨコナデを施す、体部内外面はハケを施し、底部はケズリを施す。736は須恵器杯Hである。口径は10cmを少し超える程度である。飛鳥Ⅰ新相ないし飛鳥Ⅱに相当しよう。

土坑S K 197(第134図737～747) 737は土師器杯Aである。内面に2段放射暗文を施す。外面上半に横方向のミガキを施し、外面下半～底部にかけてはケズリを施す。器形的な特徴等から714と同じく宮都系の土器と考えられる。径高指数が35であることや精緻な放射状暗文などから飛鳥Ⅲ前後に相当しよう。738・739は土師器皿Aである。口縁端部は内傾する。738は内面に1段放射状暗文を施すが、739は施さない。738は底部外面にナデを施して仕上げている。皿の出現時期を考慮するとこれらは飛鳥ⅢないしⅣに相当しよう。740は土師器甕である。体部外面はハケ、体部下半から底部にかけてはケズリ、内面はハケで仕上げられており、これまで報告している697～703などと同じ特徴を有する。

741は須恵器杯H蓋である。口径は10cm前後で頂部はヘラキリ後未調整である。742は須恵器杯G蓋である。つまみ等を欠損するが、頂部には回転ヘラケズリを施す。743・744は須恵器杯Gである。745は須恵器杯Aである。746は須恵器壺の底部と考えられる。747は須恵器皿ないし杯である。全体に厚手の個体である。須恵器の時期は、杯Hや杯Gを見ると、それぞれの器種で最も最小化した段階のものと考えられ、飛鳥Ⅱに相当しよう。ただし、杯Aや皿の出現はもう少し新しい飛鳥ⅢないしⅣに相当すると考えられる。

柱穴群(第134図748～768) ここでは図示した各柱穴出土遺物について説明する。遺物の出土した柱穴は観察表を参照されたい。748は土師器皿である。口縁端部を丸く納め、やや厚手のつくりである。在地系であろう。749・750は須恵器杯H蓋である。751は須恵器杯Hで、受部付近の小破片である。752は須恵器杯B蓋のつまみである。753は土師器皿であるが小型品である。後世の混入品の可能性も否定できない。754は須恵器杯Hで、751と同じく受部付近の小破片である。755は須恵器長頸壺の体部最大径付近の小破片である。最大径付近に沈線を1条施し、その上部に刺突文を施す。756は須恵器杯Bである。口縁部がわずかに外反する。757は須恵器杯G蓋である。つまみを欠損する。758は須恵器杯H蓋である、759は須恵器杯Aまたは杯Bの口縁部の破片である。760は土師器甕等の把手である。761は須恵器杯Hである。口縁端部を欠損する。762は



第134図 出土遺物実測図60 土器(1/4)

735・736：A地区S K239 737～747：A地区S K197 748～768：柱穴群

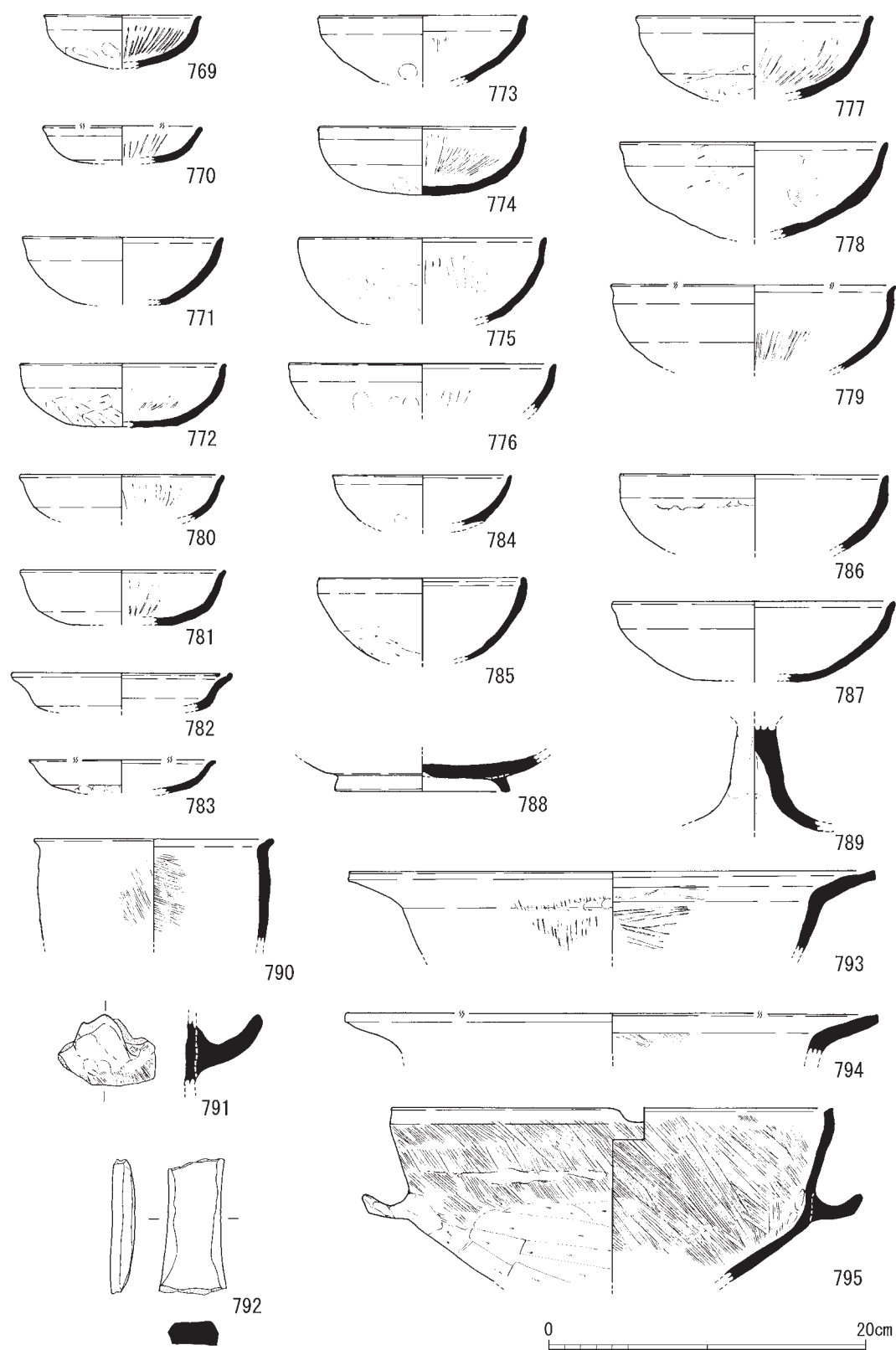
須恵器杯H蓋と考えるが、杯等の口縁部の可能性もある。763は土師器杯Aである。内面に1段斜放射状暗文を施す。764は須恵器杯H蓋と考えられるが、やや扁平であることから他の器種の可能性もある。765・766は須恵器杯G蓋である。765はつまみを含む頂部を欠損するが、766はおおむね全容を知ることができる。767は須恵器杯Hの小破片である。768は土師器高杯の脚部である、外面には面取りの痕が明瞭に認められる。

以上の土器群は、先に報告した土坑出土資料、あるいは後述する遺物包含層出土資料とほぼ同時期のものである。個々の遺物の時期比定は行わないが、おおむね飛鳥時代を通じて、一部は奈良時代の初め頃までの時間幅に収まるもので、遺構の項でも報告したように、この限られた時間のなかで柱穴の掘削が繰り返されたと考えられる。

東部遺物包含層(第135～138図769～862) A地区の調査では、遺構に伴わない土器が大量に出土した。これらの遺物は、島畑の下層に遺存していた、遺物包含層もしくは整地層と理解しているが、この層位の形成については十分に明らかにできなかった。なお、東部遺物包含層としたものは島畑31の下層で確認したものである。

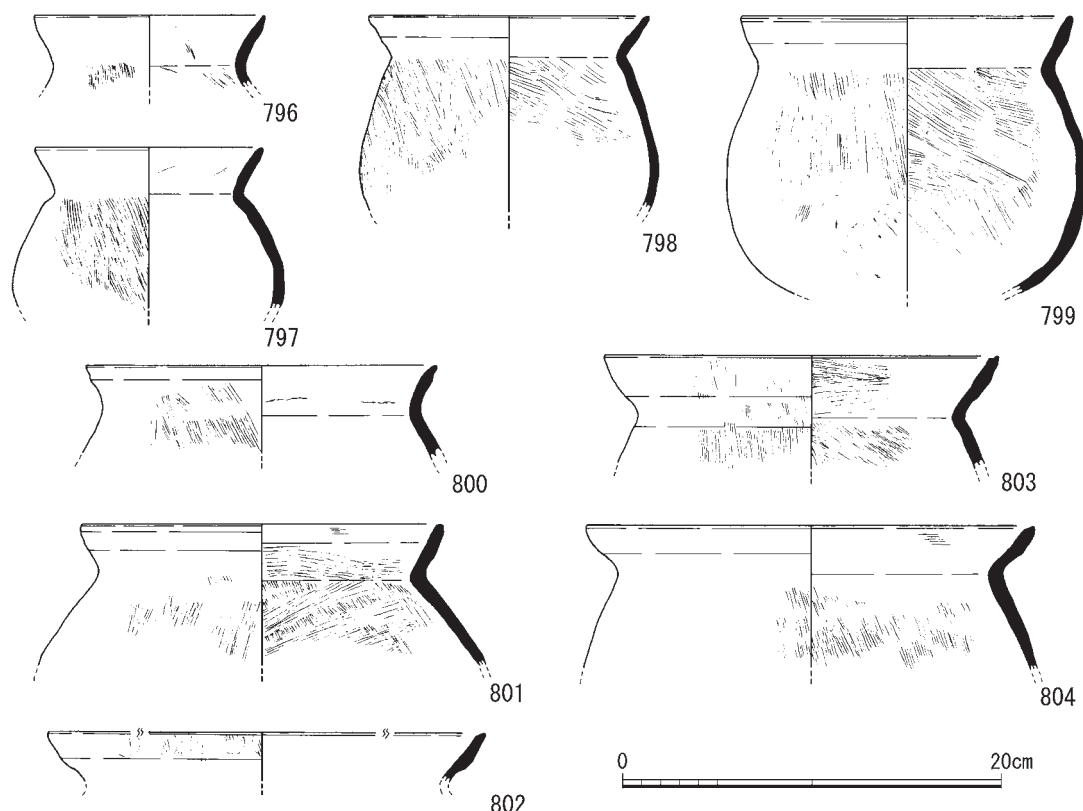
769～779は土師器杯Cもしくはそれに類似する器形のものである。基本的には法量による区分が可能である。原則として内面に1段斜放射状暗文を施す。口縁部は端部を丸く納めるか、内方に傾斜する面を有するものが多い。外面の調整は、下半にケズリを施すものやナデを施すものがある。778は口縁部直下から底までケズリを施すようである。780～783は土師器杯Aもしくはそれに類似する器形のものである。法量的には小型のもののみ確認した。口縁端部はわずかに肥厚し、口縁部が外反気味ないし外反するものである。784～787は土師器碗である。小型の784・785は口縁部内面に沈線を施す。また、784の外面はナデで仕上げるが、785は外面下半にケズリを施す。大型の786・787は、内外面ともナデで仕上げており、786の外面には粘土接合痕が残る。788は杯Bの底部である。高さ1cm程度の高台を貼り付ける。789は土師器高杯の脚部である。脚柱部外面に面取りを施す。790は土師器壺あるいは甗と推定される。直立気味の体部に、大きく外方に屈曲する口縁部を有する。791は土師器の把手で、甗または鍋に付けられていたものであろう。792は土師器甗の底の栈である。各面をケズリで仕上げている。793～795は土師器鍋であるが大きく2形態ある。793・794は口縁部が大きく外方に延びる形態のものである。一方、795は口縁部がほぼ上方に立ち上がるもので、片口である。また、把手を有する。体部下半にケズリを施す点で、後述する799や先述の井戸SE112出土の696～703などの甗の特徴に近い。796～804は土師器甗である。いずれも口縁部が単純「く」字状を呈するものである。796・800は口縁端部付近の内外面にやや強めのヨコナデを施す。頸部は緩やかに外反する。797～799は体部中位よりも下部が最大径となる器形を呈すると考えられる。797・798は不明であるが、799は体部下半から底部にかけてケズリを施す。801～804は頸部が強く「く」字状に屈曲するもので、801は口縁端部はわずかに丸みを持つ。802～804は口縁端部が内傾ないしわずかに凹む形状となる。また、頸部には強めのヨコナデを施す。

805～820は須恵器杯H蓋である。口径12cm前後ものから9.3cm前後のものまで確認できる。し



第135図 出土遺物実測図61 土器(1/4)

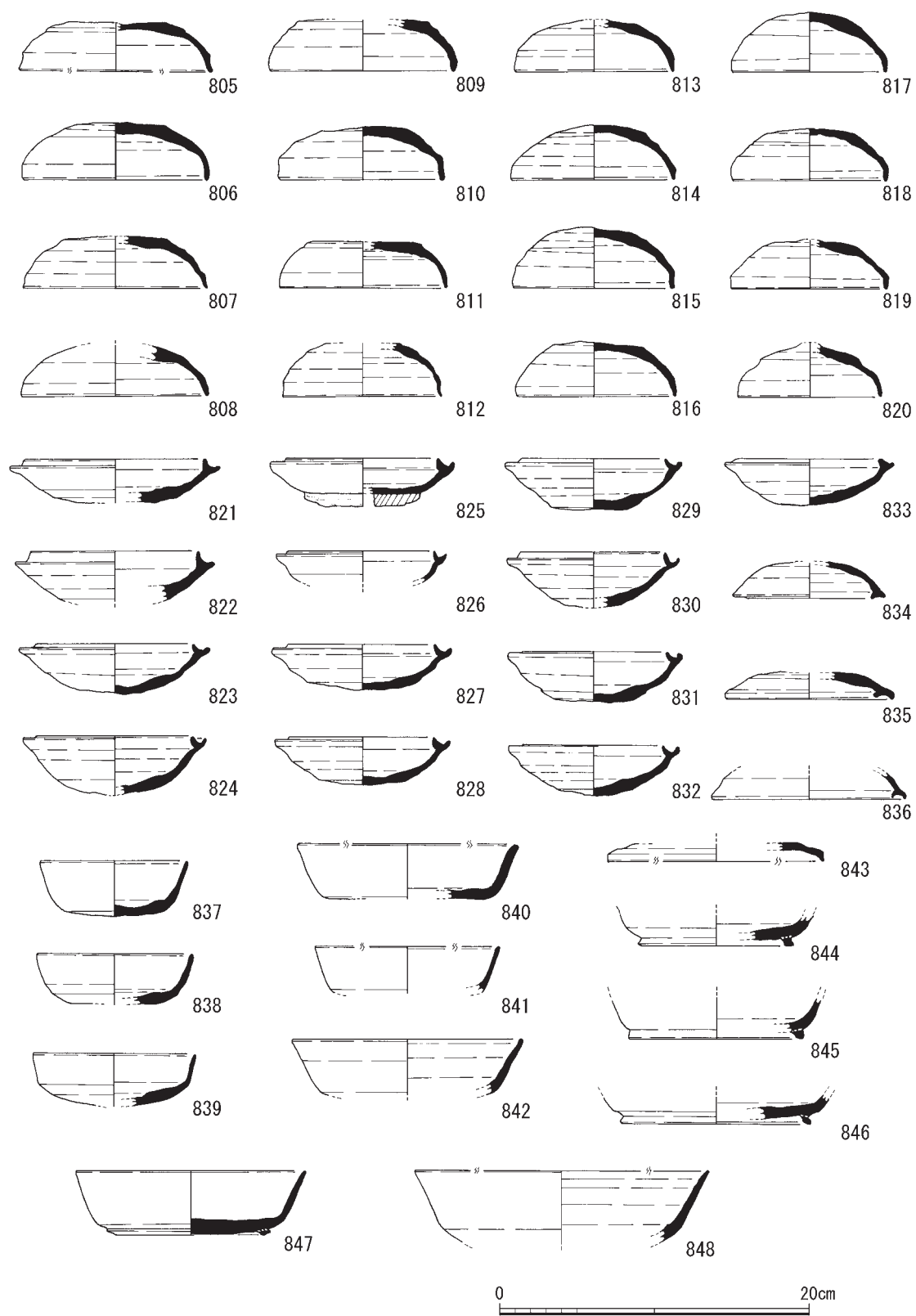
769～795：A地区東部遺物包含層1



第136図 出土遺物実測図62 土器(1/4)

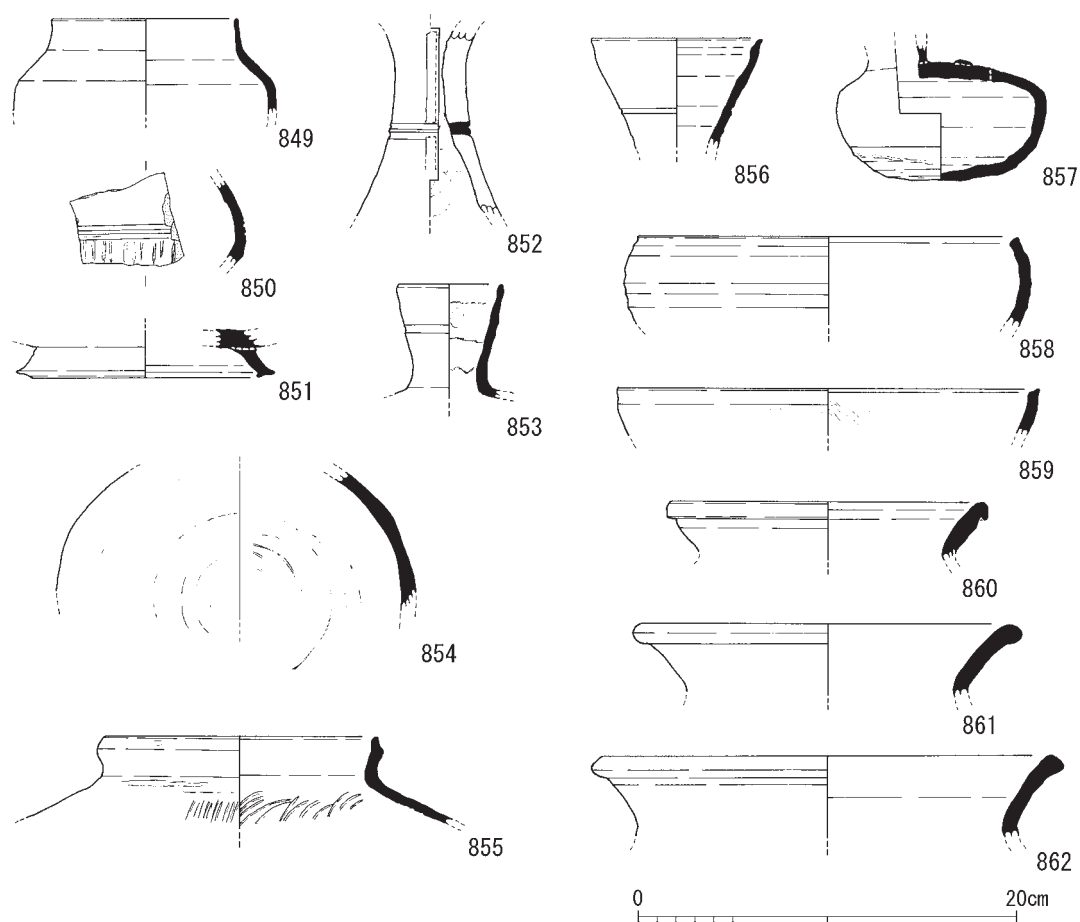
796～804：A地区東部遺物包含層2

かし、頂部に回転ヘラケズリを施すものはみられず、確認できるものはヘラキリ後ナデもしくは不調整である。これらの資料は飛鳥Ⅰの古相から飛鳥Ⅱにかけて相当しよう。821～833は須恵器杯Hである。口径12.5cm前後から10.5cm前後のものがあ、おおむね上記杯H蓋と対応している。杯H蓋と同様に、回転ヘラケズリを施すものはみられず、確認できるものはヘラキリ後ナデもしくは不調整である。口縁部の立ち上がりも受部上端よりも大きく突出しない。834～836は須恵器杯G蓋である。完形品がないため全容は不明であるが、口径が8.5～11.8cmとやや幅がある。頂部の調整は不明であるが、回転ヘラケズリが施されている可能性がある。837～839は須恵器杯Gである。口径が9.5～10.4cmである。底部外面はヘラキリ後ナデもしくは不調整である。840は須恵器杯Aで、やや厚手の製品である。841・842は須恵器杯であるが高台を有するかどうかは不明である。842は口縁部内面をやや強くなでて、わずかに凹んでいる。843は須恵器杯B蓋である。内面にかえりは認められない。844～847は須恵器杯Bである。847はおおむね全容が分かるが、ほかは底部の破片である。高台の断面形状は、内面が接地するものや外面が接地するものがあり、丁寧に作られている。848は須恵器碗もしくは稜碗である。中位よりもやや下部に稜を持ち、口縁部がほぼ斜め上方にまっすぐ延びる。843～848は器形からみると、奈良時代前半のものを含む可能性がある。なお、杯類は出土量の点からみると、杯H、杯H蓋の資料が圧倒的に多く、杯G、杯G蓋、杯A、杯B、杯B蓋はいずれも少量であり、杯H等に遠くおよばない。したがって、A地区に形成された遺物包含層の主体的な時期は飛鳥時代と考えて良いだろう。849は須恵器壺で



第137図 出土遺物実測図63 土器(1/4)

805～848：A地区東部遺物包含層3

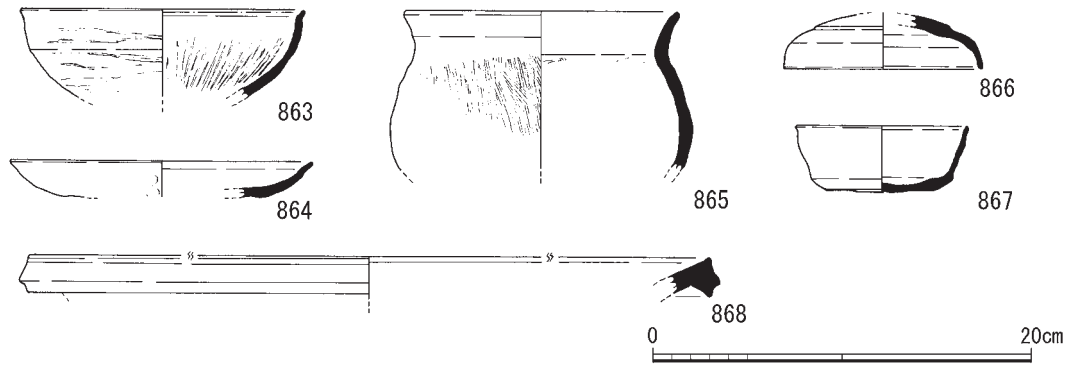


第138図 出土遺物実測図64 土器(1/4)

849～862：A地区東部遺物包含層4

ある。口縁部がほぼ垂直に立ち上がる。850は須恵器長頸壺の体部最大径付近の破片と思われる。最大径付近に沈線を2条施し、その直下にヘラ状工具による刺突文を施す。851は須恵器壺の底部と思われる。高さ1.5cmほどの高台の内端面が接地する。852は高杯脚部である。古墳時代後期に通有の長脚二段スカシの脚部であり、B地区のS D 22の上部で確認した43層を中心に出土している須恵器杯身や杯蓋と共伴するものであろう。853は須恵器提瓶の口縁部、854は須恵器提瓶の体部の一部である。両者が同一個体かどうか判断できないが、これらもB地区S D 22上部の43層出土の須恵器杯身や杯蓋と共伴するものであろう。855は須恵器甕もしくは横瓶の口縁部の破片である。体部の外面にタタキ痕が、内面に当て具痕がそれぞれみられる。856は須恵器長頸壺の口縁部である。口縁端部は内傾する面をなし、やや肥厚気味となる。857は小型の須恵器平瓶である。口縁部を欠損するが、体部上面にボタン状の粘土粒が1個貼り付けられる。底部外面には回転ヘラケズリを施す。858は須恵器鉢Aである。いわゆる鉄鉢形の鉢と推定される。口縁端部は内傾する面を有する。859～862は須恵器甕または壺の口縁部と考えられる。859のみ口縁部の形状が異なる。

西部遺物包含層(第139図863～868) 島畑32の下層で確認した遺物包含層である。863は土師器



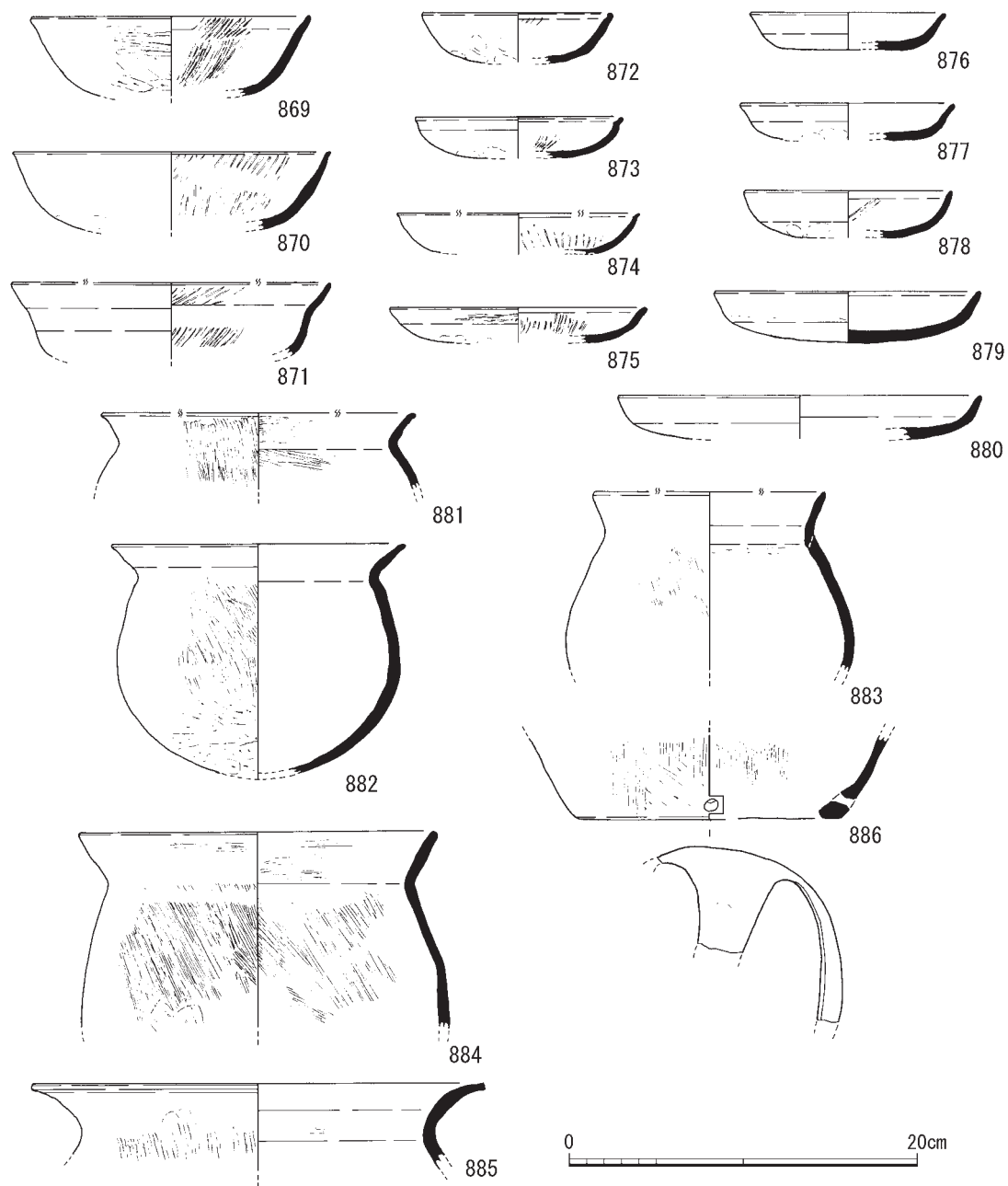
第139図 出土遺物実測図65 土器(1/4)
863～868：A地区西部遺物包含層

杯Cである。内面に1段斜放状射暗文を施す。外面は口縁部の上部にミガキを、下部から底部にかけてケズリをそれぞれ施す。これも宮都系の土器と推定される。864は土師器皿である。内面に暗文等は確認できない。865は土師器甕である。口縁部が単純「く」字状を呈するもので、体部中位よりもやや下が最大径となる器形を呈すると考えられる。

866は須恵器杯H蓋である。口径10.4cmで、頂部の調整はヘラキリ後ナデである。外面に自然釉が付着する。867は須恵器杯Gである。口径9.0cmで、底部の調整はヘラキリ後ナデである。やや薄手のつくりである。868は須恵器甕の口縁部と推定される。866・867の特徴から飛鳥Ⅱに相当しよう。

(2) B地区出土土器

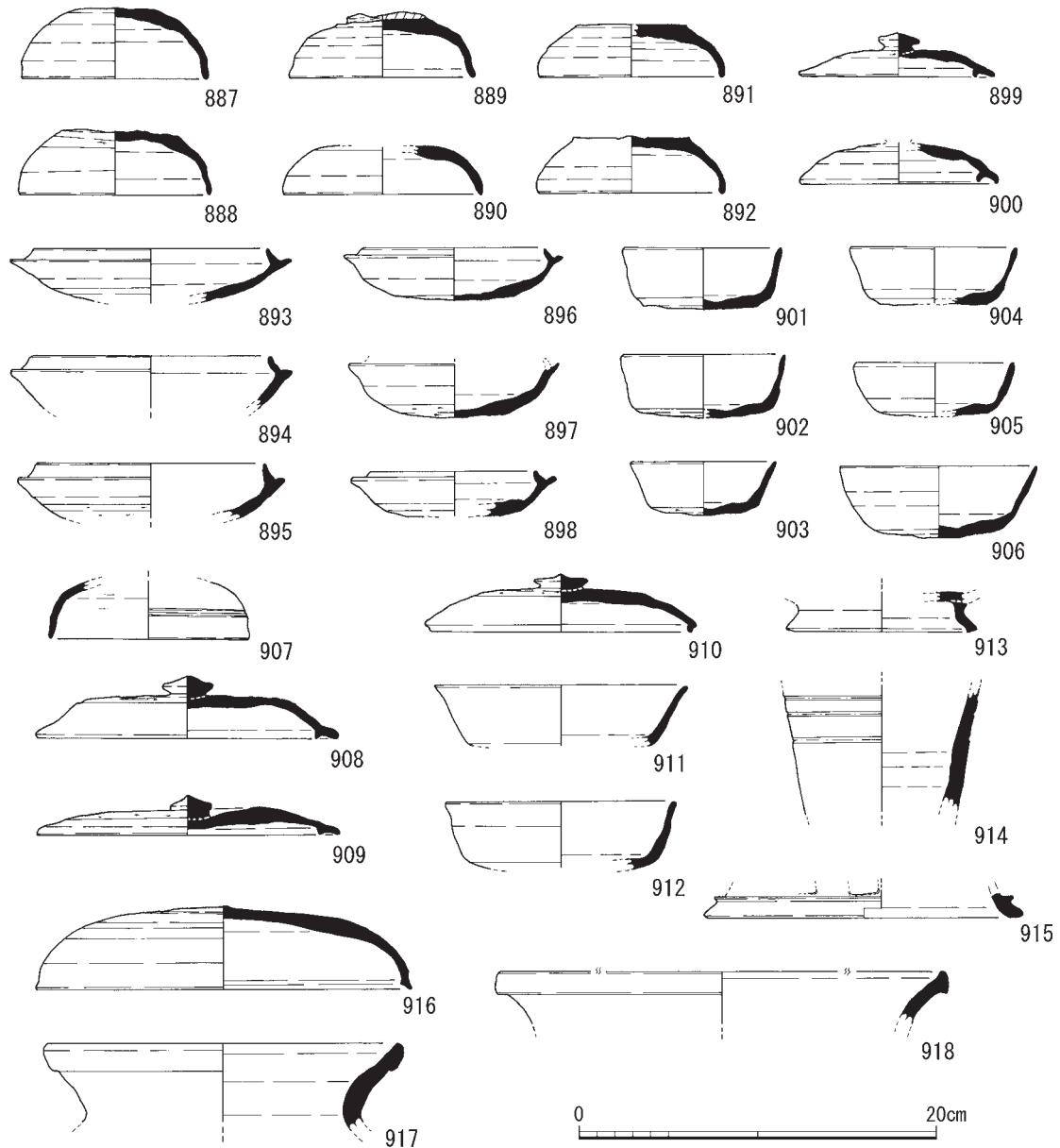
土坑S K 17(第140～143図869～918) 869は土師器杯A、870は土師器杯C、871は土師器杯で、いずれも内面に2段斜放射状暗文を施す。869は底部にケズリを施すが、870・871はナデを施すようである。871は中位付近で口縁部が大きく開くような器形となる。杯Aに類似するが、口縁端部の形状が異なる。869・870は宮都系の土器である可能性が高い。872は土師器杯Aである。小型品で内面に斜放射状暗文を施すが、1段なのか2段なのか、不明である。底部外面はナデやユビオサエで仕上げる。873～875は土師器杯Cである。いずれも内傾気味の口縁端部を有する。内面に1段斜放射暗文を施す。876～878は口縁端部を丸く納める土器でおおむね平底に近い形態である。10はやや深手である。879は土師器皿である。端部には杯Aの特徴がみられるが、全般に厚手の土器で、内面に暗文を施さないことから在地系の土器であろう。880も土師器皿である。879とは口縁部の形状や器厚などが異なるものの、内面に暗文を施さないことから、同じく在地系の土器であろう。881～885は土師器甕である。いずれも口縁部が単純「く」字状を呈する。882・883は体部下半が最大径となる器形を呈する。882は体部下半から底部にかけてはケズリを施す。883は体部下半以下を欠損するため、調整は不明である。884は体部下半以下を欠損するが、体部は長胴形を呈する可能性がある。885は他の個体にくらべ口縁部がやや長く、かつ大きく外反するのが特徴である。886は土師器甕の底部である。栈の一部が遺存し、2孔を穿つタイプと考えられる。



第140図 出土遺物実測図66 土器(1/4)

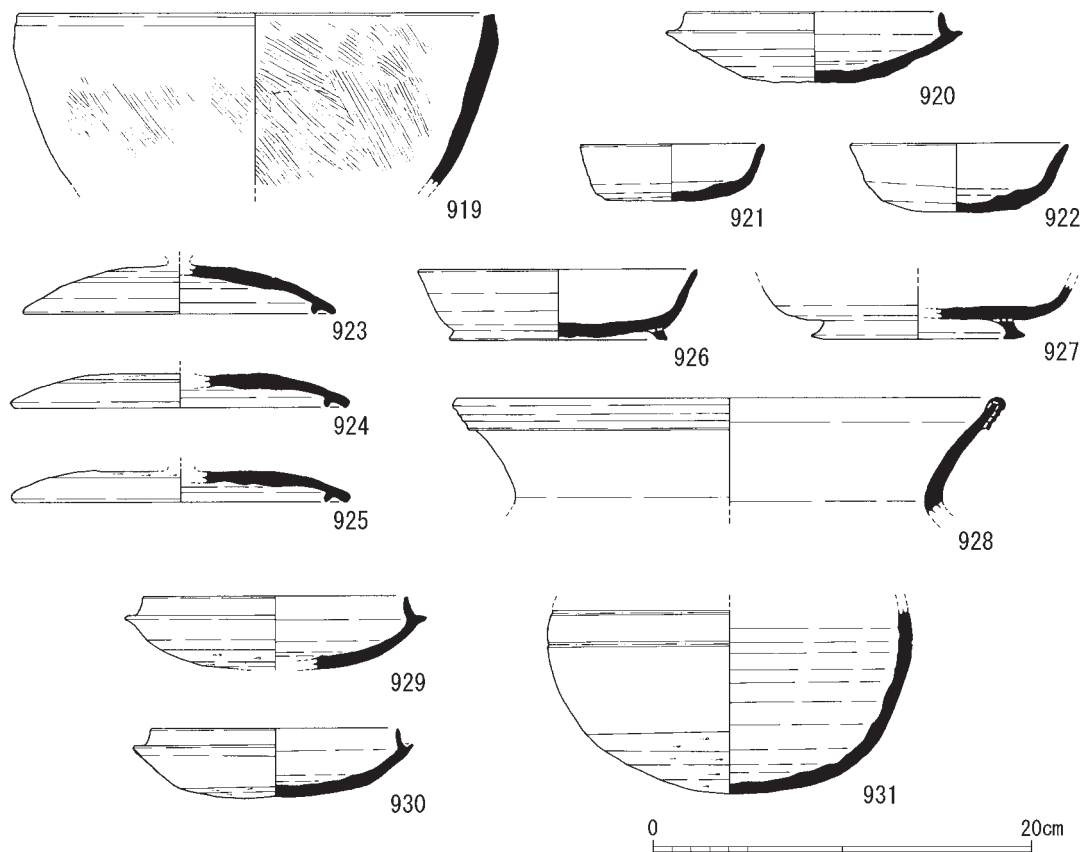
869～886：B地区S K17

887～892は須恵器杯H蓋である。口径11cm前後から10cm前後までのものが確認できる。頂部に回転ヘラケズリを施すものはみられず、確認できるものはいずれもヘラキリ後ナデもしくは不調整である。893～898は須恵器杯Hである。このうち口径が14cm前後の893～895は、古墳時代後期のものであろう。893・895は底部に回転ヘラケズリが確認できる。一方、896～898は口径10cm前後のもので、おおむね上記杯H蓋と対応している。897は回転ヘラケズリ調整を施すものの、896・898はヘラキリ後ナデもしくは不調整である。口縁部の立ち上がりも893～895にくらべると低くなっている。899・900は須恵器杯G蓋である。口径が9.5～10cmである。901～905は須



第141図 出土遺物実測図67 土器(1/4)
887～918：B地区SK17

恵器杯Gである。口径は8.0cm前後から9.0cm前後までの幅がある。底部外面に回転ヘラケズリを施すものと、ヘラキリ後ナデもしくは不調整というものがある。ここで報告した杯H・同蓋、杯G・同蓋は、いずれも飛鳥Ⅰ新相ないし飛鳥Ⅲに相当しよう。906は須恵器杯Gまたは杯Aであろう。口径11.0cm、器高4.0cmと、901～905にくらべ一回り大きい。907は須恵器高杯杯部と推定される。外面に2条の沈線を施す。908～910は須恵器杯B蓋である。908・909は口縁部内面にかえりを有する。また、頂部に回転ヘラケズリを施す。910は口縁部内面にかえりを有さない。また、頂部に回転ヘラケズリを施す。911・912は須恵器杯であるが、高台の有無は確認できない。これらの資料は時期的には7世紀第4四半期を中心とした時期に位置づけられ、8世紀代には至らない可能性が高い。913は壺等の高台と推定される。器形等は不明である。914は長頸壺の頸部

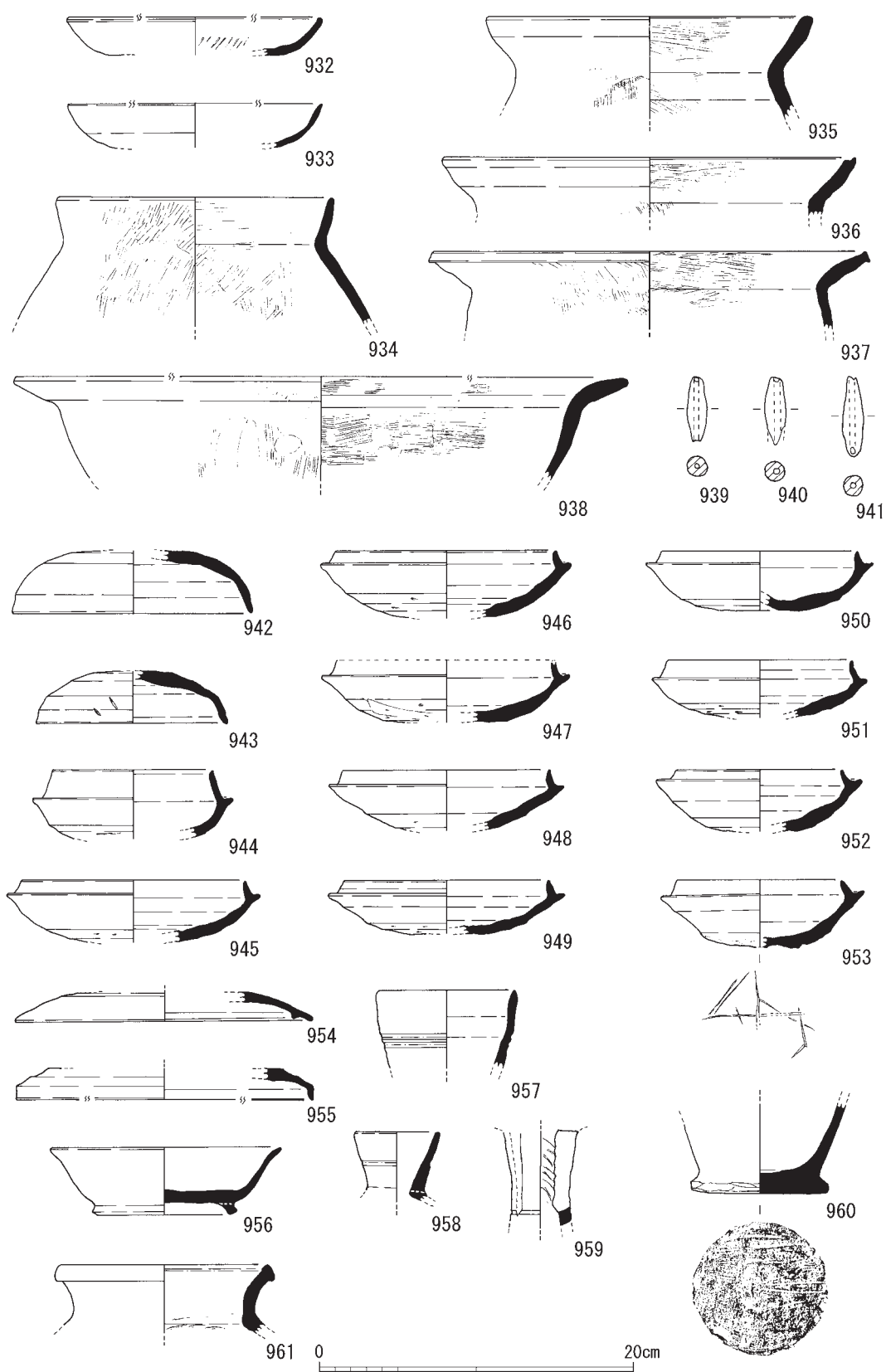


第142図 出土遺物実測図68 土器(1/4)
919～928：B地区S D16 929～931：S K19

と推定される。外面に沈線を3条施す。915は円面硯の脚端部の破片である。方形のスカシが複数確認できる。916はやや大型品であるが、高杯蓋、もしくは甕等の蓋の可能性がある。口縁端部は傾斜する面を持つ。頂部につまみを有する可能性が高い。後述する43層出土の須恵器杯身・杯蓋と共伴するものであろう。917・918は須恵器甕または壺の口縁部である。48は小型品、49は中型品で、体部の破片等も出土しているが、全容は不明である。

溝S D16(第142図919～928) 919は鉢と推定される。内湾気味に立ち上がる口縁部に、端部がわずかに内傾する面をなす。内外面ともハケを施す。920は須恵器杯Hである。後述する921～927よりも古相のものであることから混入の可能性もある。口径が15cmほどに達することから古墳時代後期後半のものと推定される。921・922は須恵器杯Gもしくは杯Aである。923～925は須恵器杯B蓋である。いずれもほぼ同一法量の資料で、内面にかえりを有し、頂部に回転ヘラケズリを施す。926・927は須恵器杯Bである。926はやや踏ん張り気味の高台に緩やかに外反気味となる口縁部を有する。927はやや高めで、踏ん張り気味の高台に、底部から口縁部への立ち上がりが丸みを持つ器形である。古相の杯Bの特徴に近い。928は須恵器甕の口縁部で、口縁部を肥厚させて文様帯を作り、そこに沈線を3条施す。

土坑S K19(第142図929～931) 929・930は須恵器杯身である。上述の920よりも器高が高く、口縁部の立ち上がりも鋭い。ただ、時期的には若干古く位置づけられ、TK43型式に併行するも



第143図 出土遺物実測図69 土器(1/4)
932～961：B地区遺物包含層(43層)

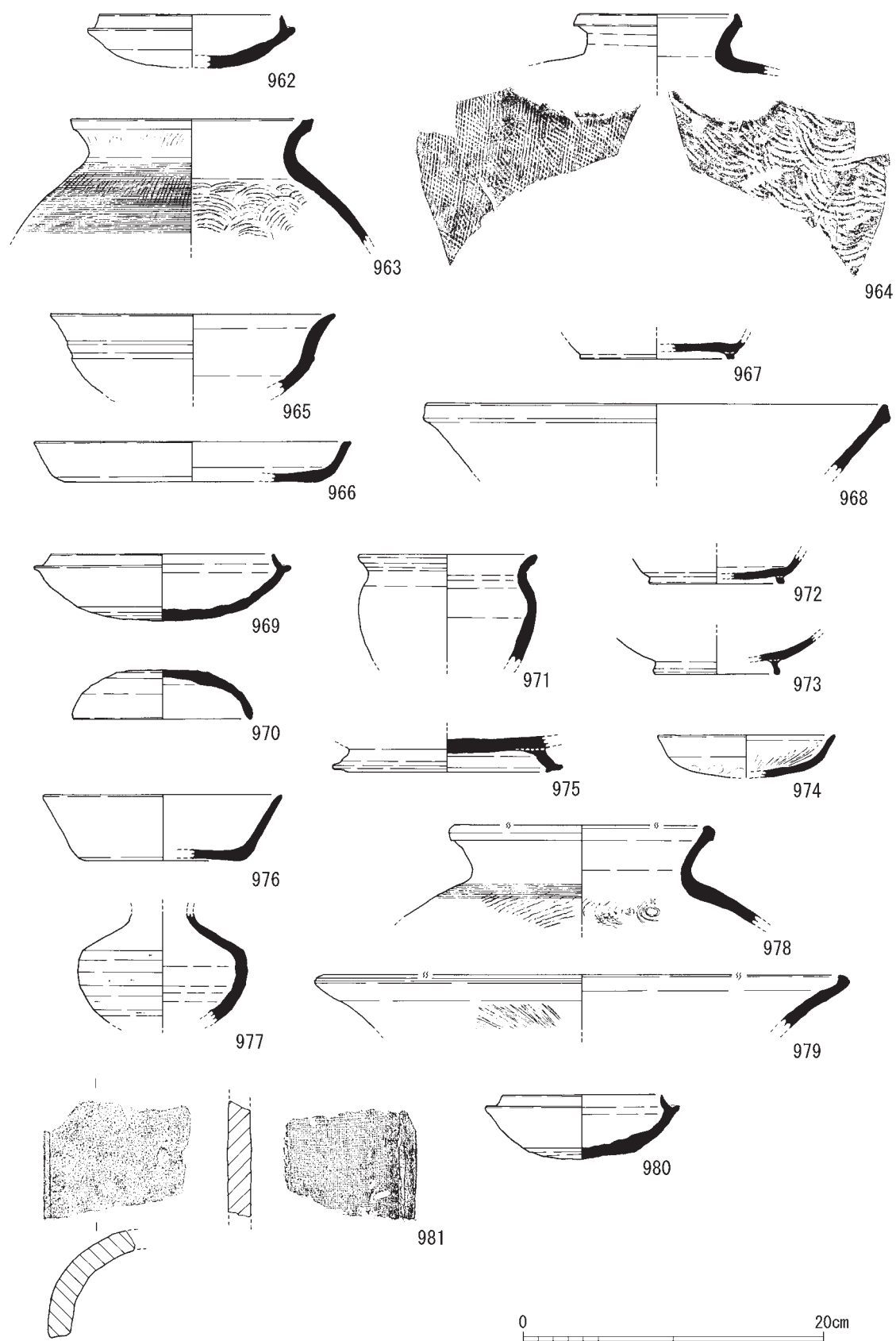
のであろう。931は脚台や高台を有さない長頸壺の体部下半と考えられる。体部中位に沈線を2条施す。底部外面にはケズリ調整を施すが、範囲はやや狭い。

遺物包含層(第143～144図932～981) B地区の遺物包含層出土遺物については、現地調査時にできるだけ出土層位を記録するように務めた。以下の記述での層番号は第18図に対応している。932～961は43層出土の土器群である。出土土器の概要から古墳時代後期末から飛鳥時代末頃の堆積層と推定される。932・933は土師器杯または皿である。932は内面に1段斜放射状暗文が施されるが、口縁部の形態から宮都系とは断定しにくい。933は内外面ともナデで仕上げられており、在地系の土器であろう。934～937は土師器甕の口縁部である。934は口縁部があまり開かず直線的に上方へ延びる。935は口縁部が緩やかに内湾気味に延び、口縁端部に面を持つ。936の口縁部も935とほぼ同様の形態を呈するが、口縁端部の面がわずかに凹む。937は口縁部がほぼ直線的に斜め上方に延び、口縁端部に面をもつ。端部の面はわずかに上下に拡張されている。なお、937は長胴の甕と推定される。938は土師器鍋である。口縁端部は丸く納められている。939～941は土錐である。

942・943は須恵器杯蓋である。どちらも頂部に回転ヘラケズリを施すが、法量が異なることから、942は古墳時代後期後半、943は古墳時代後期末頃のものと推定される。944は古墳時代中期の須恵器杯身である。45層出土の第79図106～108と同型式であろう。下層のものが混入したのであろう。945～953は須恵器杯身もしくは杯Hである。口径14cm前後から10cm前後のものがある。945～950は底部に回転ヘラケズリ調整を施し、951～953は底部がヘラキリ後不調整である。952・953はやや厚手の個体である。953の底部にはヘラ記号と思われる線刻が認められる。954は須恵器杯B蓋である。口縁部内面にかえりを有する。頂部には回転ヘラケズリを施す。955も須恵器杯B蓋と推定されるが、口縁部内面にかえりは有さない。頂部はほぼ扁平となり、回転ヘラケズリを施す。956は須恵器杯Bである。口縁部はやや外反する。954と同時期のものであろう。957は壺あるいは提瓶などの口縁部と推定される。中位付近に沈線を2条施す。958は提瓶あるいは平瓶の口縁部と推定される。中位付近に沈線を1条施す。959は須恵器高杯脚部の破片である。長脚二段スカシの脚部の上段と推定され、下部に沈線が認められる。また、内面にシボリ痕跡が認められる。上述杯身の945～953と同時期のものであろう。960は須恵器鉢Fである。いわゆる練り鉢であろう。意図的かどうかは不明であるが、底部外面にヘラ状工具による条痕が施される。961は小型の須恵器壺の口縁部である。

962～964は42層出土の土器群である。出土土器の概要から飛鳥時代前半の堆積層と推定される。962は須恵器杯Hである。やや厚手の個体で、底部外面はヘラキリ後不調整である。963は須恵器甕である。体部外面にはタタキの後カキメを施す。内面には当て具痕が明瞭に残る。964は須恵器横瓶である。外方に短くのびる口縁部で、端部付近を上下にやや拡張している。

965・966は40層出土の土器群である。出土土器の概要から飛鳥時代後半～奈良時代の堆積層と推定される。965は須恵器稜椀と推定される。内湾気味に立ち上がったのち、中位付近に稜を形成して口縁部が外反するものである。稜の上部に沈線を2条施す。966は須恵器皿Dである。平



第144図 出土遺物実測図70 土器(1/4)

962～974：B地区遺物包含層(42～35層) 975～981：B地区遺物包含層(その他)

底の底部から口縁部が斜め上方にまっすぐのび、口縁端部は水平な面をなす。

967・968は36層出土の土器群である。出土土器の概要から奈良時代以降の堆積層と推定される。967は須恵器杯Bの底部である。高台は断面方形である。968は須恵器鉢である。直線的な口縁部に端部が上方に立ち上がる。

969～971は35層出土の土器群である。出土土器の概要から奈良時代以降の堆積層と推定される。969は須恵器杯身である。古墳時代後期のもので、43層などの下層遺物が混入したものであろう。970は須恵器杯H蓋である。飛鳥時代前半のもので、969と同様、43層などの下層遺物が混入したものであろう。976は須恵器杯Aである。平底に、斜め上方に直線的に延びる口縁部からなる。971は須恵器壺である。口縁部が短く外上方に延び、口縁端部を丸く納める。体部は下半部を欠損するが、上部に最大径がある。調整は基本的に回転ナデである。あまり類例をみない器形である。972は須恵器杯Bの底部である。973は灰釉陶器碗の底部である。高台の端部付近が肥厚気味となる。

975は上層の溝状遺構S D02から出土した須恵器壺の底部である。やや長めの高台をもち、内端面が接地する。外端部側はやや外方へひねり出す。底部外面は回転ヘラケズリのちナデを施す。

974・977・978は精査中の出土である。974は土師器杯Cと推定される。口縁部がやや外反気味である。内面に1段斜放射状暗文を施す。977は円孔は確認できないが、須恵器甕の頸部から体部にかけての破片と推定される。体部最大径付近より下半は回転ヘラケズリを施す。978は須恵器甕である。口縁部は外上方に延びたのち、広端部外面側が肥厚するものである。端部内面もやや肥厚しながら丸く納める。体部外面はタタキを施したのち、方部の最上部にカキメを施す。内面には当て具痕がみられる。

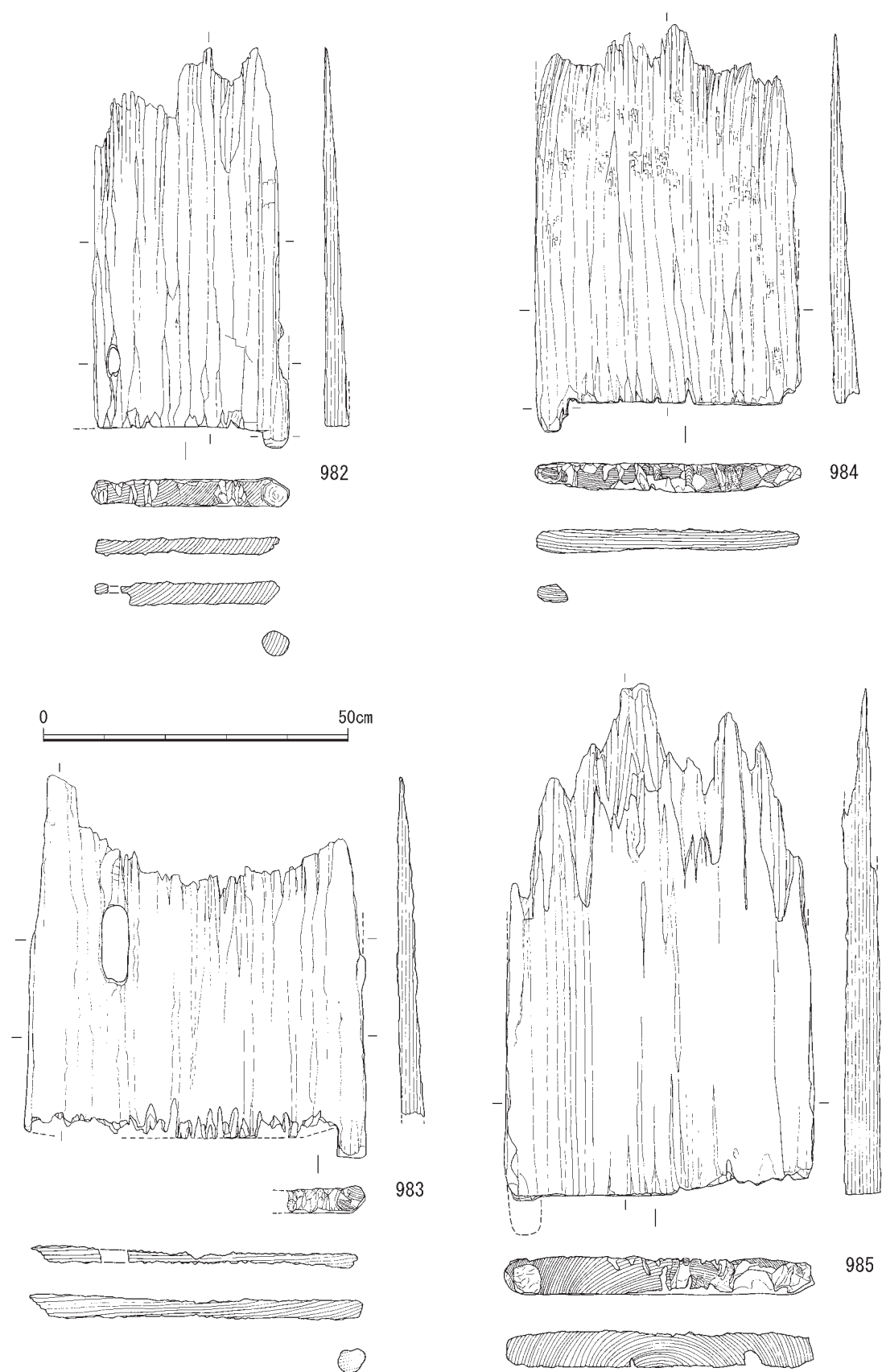
979は島畑34の断ち割り出土した須恵器甕である。口縁部のみの破片であるが、口縁端部付近の内面に強い回転ナデを施して、内上方に向かって口縁端部をつまみ出す。口縁部外面にか工具による刺突文を施す。

980・981は出土地点不明のものである。980は須恵器杯Hである。厚手の個体で、底部外面に粗い回転ヘラケズリを施す。法量から古墳時代末ないし飛鳥時代初めのものであろう。981は丸瓦の破片である。面取りされた側縁の一部が残存する。凸面はナデで仕上げ、凹面には布目痕跡が残る。

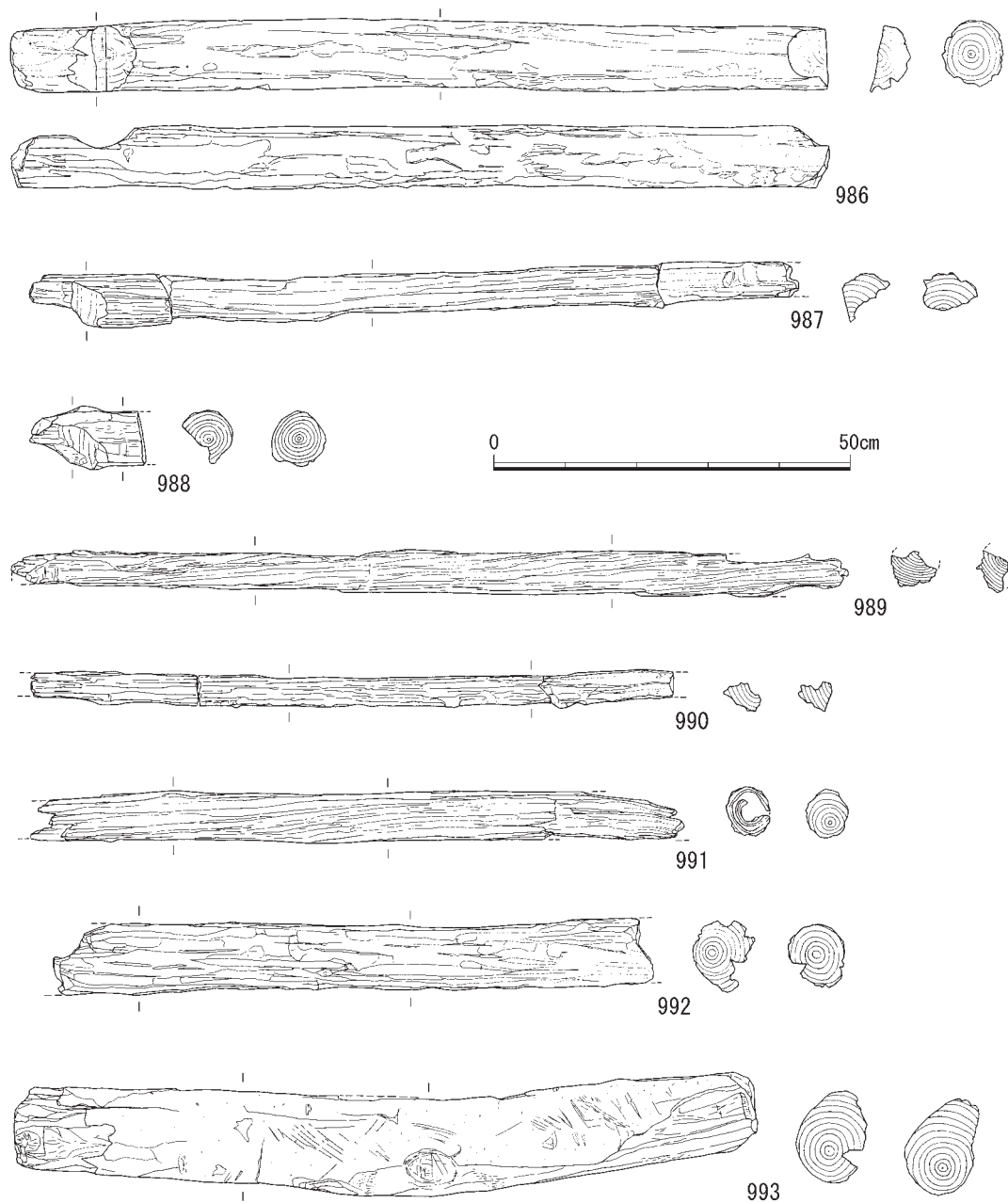
(3)木製品

ここではA地区の井戸S E 112の井戸枠を構成していた部材及びS E 112から出土した木製品等について報告する。

井戸枠材(第145～147図982～994・997～999、第148図1001、第149図1006・1007) 982～985は、井戸枠の縦板に再利用された扉板である。985は欠損しているものの、いずれも扉の軸を確認することができる。いずれも上部側が腐植によって失われているため、本来の長さは不明である。また、983～985では若干の腐植が見られるものの、扉材としての幅がほぼ確認できる(43.5～56cm)。軸は直径5cm前後で982・984は先端が丸みを帯びている。これに対して983の軸は方形



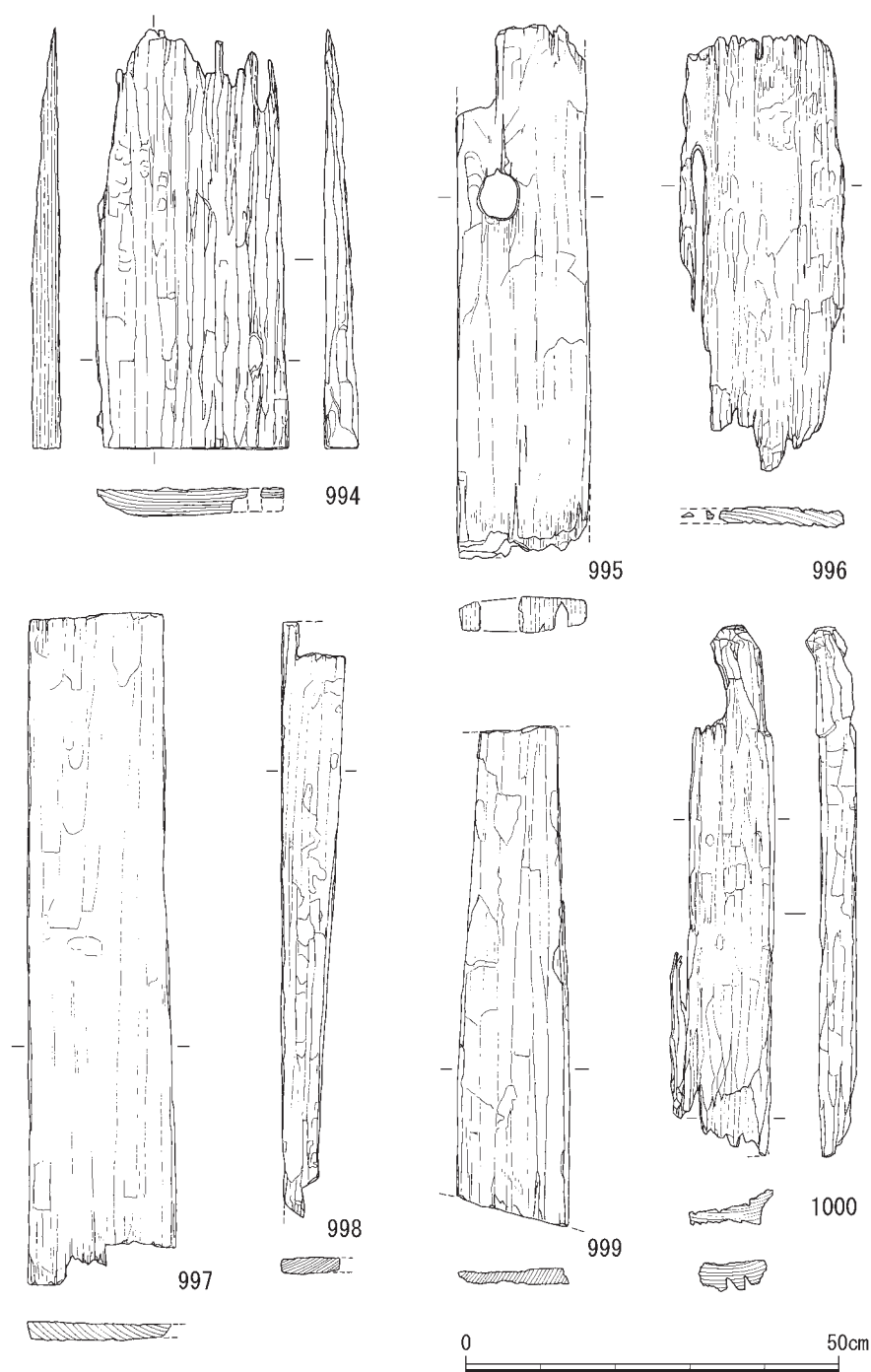
第145図 出土遺物実測図71 木製品(1/10)
982~985: A地区S E 112



第146図 出土遺物実測図72 木製品(1/10)
986～993：A地区S E112

に近い形状である。厚さは遺存状態の良好な985で約6cmである。994・1006・1007も縦板として用いられていたものである。994は形状や厚さなどから982～985と同じく扉板の転用材の可能性がある。一方、1006・1007は上下とも欠損し、端部の形状等が不明であるが、幅が扉板よりも狭いことから、板材を転用した可能性が考えられる。

986～992は井戸枠の基部を構成していた部材のうち、丸太材を図示している。986は一部を欠損するものの、両端に幅9cm、深さ3cmの割り込みが認められる。これは上部に来る丸太材を井桁状に組むための割り込みで、987や988にも同様の割り込みないし切り取った部分が認められ

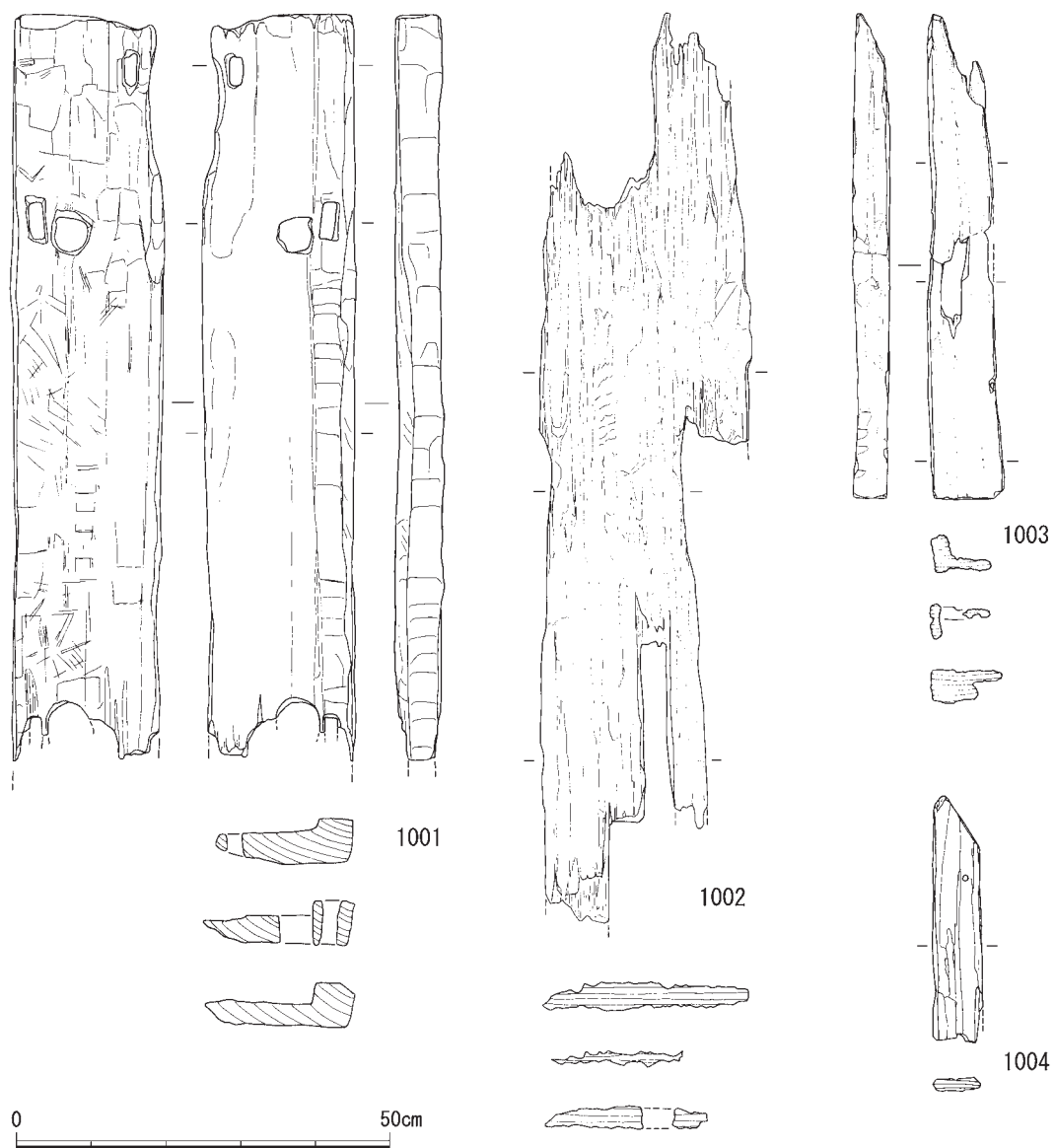


第147図 出土遺物実測図73 木製品(1/10)

994～1000：A地区S E112

る。一方、これらに載る丸太材には削り込みが認められない。削り込みのあるものとなないものを交互に配置して基部を構成してる。

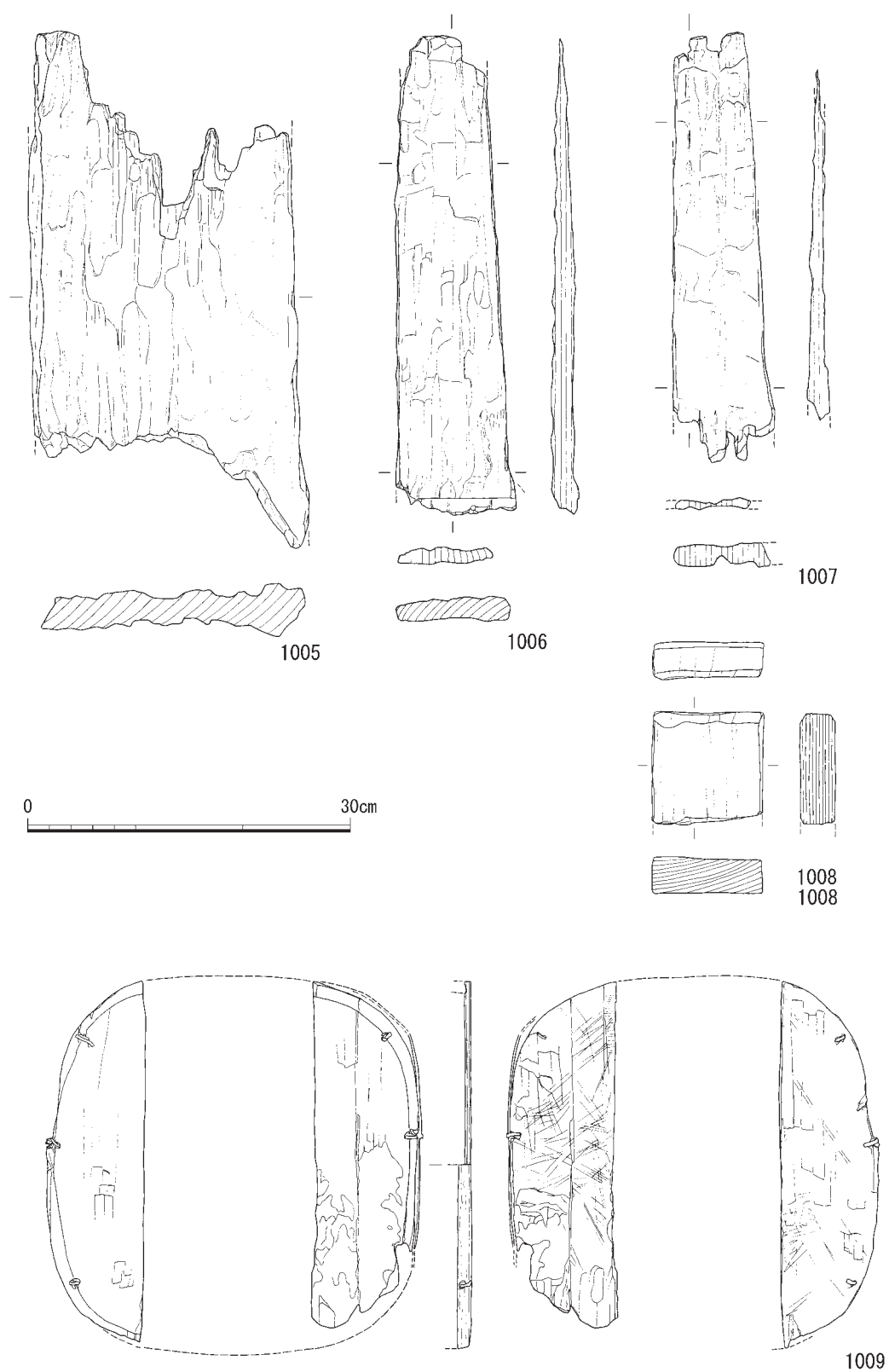
993・997～999・1001は井戸枠の基部のうち、最下部を構成していた部材である。993はやや大型の丸太材で樹皮が残っていた。997～999は、板材である。982～985など異なり、薄い板材である。999は下端を斜めに切断している。998も図示した下側は割れではなく加工痕が認められる。



第148図 出土遺物実測図74 木製品(1/10)
1001～1004：A地区S E112

1001は断面が「L」字形となるやや厚手の部材で、短く立ち上がる部分に長方形の穴が開けられている。また、水平の部分にも直径5cm程度の円形の穴が開けられている。また、欠損部にもほぼ同様の長方形と円形の穴が開けられていることがわかる。円形の穴の心心間の距離は65cmである。円形の穴は軸を受ける穴、短く立ち上がる部分は扉当たりと考えられることから蹴放しと考えられる。これも、建築部材の転用である。

その他の木製品(第147図995・996・1000、第148～149図1002～1005・1008・1009) 井戸枠内からは板材が多数出土した。995や996、1002・1005などはやや大型の板材であることから、井戸枠を構成する縦板として利用されていたものが、井戸内に転落したものかもしれない。1000や1003は断面形が「L」字形を呈するなど、建築部材の可能性もあるが、詳細は不明である。1004



第149図 出土遺物実測図75 木製品(1/6)
1005～1009：A地区S E112

も上端を斜めに切断するなど、加工痕が認められる。

1008は欠損するものの、面取りをして四角く加工した木材である。詳細は不明であるが、建築部材等の一種であろうか。1009は曲げ物の底板である。底板の残りの部分や側板は確認できなかったので、破損した底板のみを投棄したものと思われる。

なお、腐植等が進んでいたことなどからすべての部材を図示できていない。

(筒井崇史)

6. 総括

新名神高速道路整備事業の城陽JCT・ICの建設に伴う下水主遺跡・水主神社東遺跡の発掘調査は、平成23年度に着手し、平成27年度に現地での調査を終了した。その後、整理作業を継続して実施し順次報告書を刊行してきたところである。平成29年度に2冊の報告書の刊行をもって同JCT・ICの建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査事業はすべて完了する。

本書は、城陽JCT・ICの建設に伴う下水主遺跡・水主神社東遺跡の発掘調査の報告書としては3冊目に当たる。本報告書では、調査対象地の南端部に位置するA～C地区で検出された弥生時代中期や古墳時代前期ならびに飛鳥時代の遺構と遺物を対象にした。A～C地区は、下水主遺跡・水主神社東遺跡の発掘調査全体からみると、決して広範囲の調査を実施したわけではないが、大量の遺構・遺物が出土した点で注目される。ここではA～C地区において検出した遺構・遺物についての成果を中心にまとめるとともに、対象となった2遺跡の時期別変遷についてもまとめておきたい。なお、時期別変遷については、城陽JCT・ICの発掘調査と並行して実施された国道24号に関する改良事業に伴う発掘調査の成果も^(注72)含めて言及したい。

なお、新名神高速道路整備事業に伴う下水主遺跡・水主神社東遺跡の発掘調査は今後本線部分を対象とした調査に移行する予定である。

以下、今回の城陽JCT・IC建設に伴うA～C地区の調査を中心に、主要遺構とその性格について述べる。

1) 下水主遺跡第4・6次調査の主要遺構とその評価

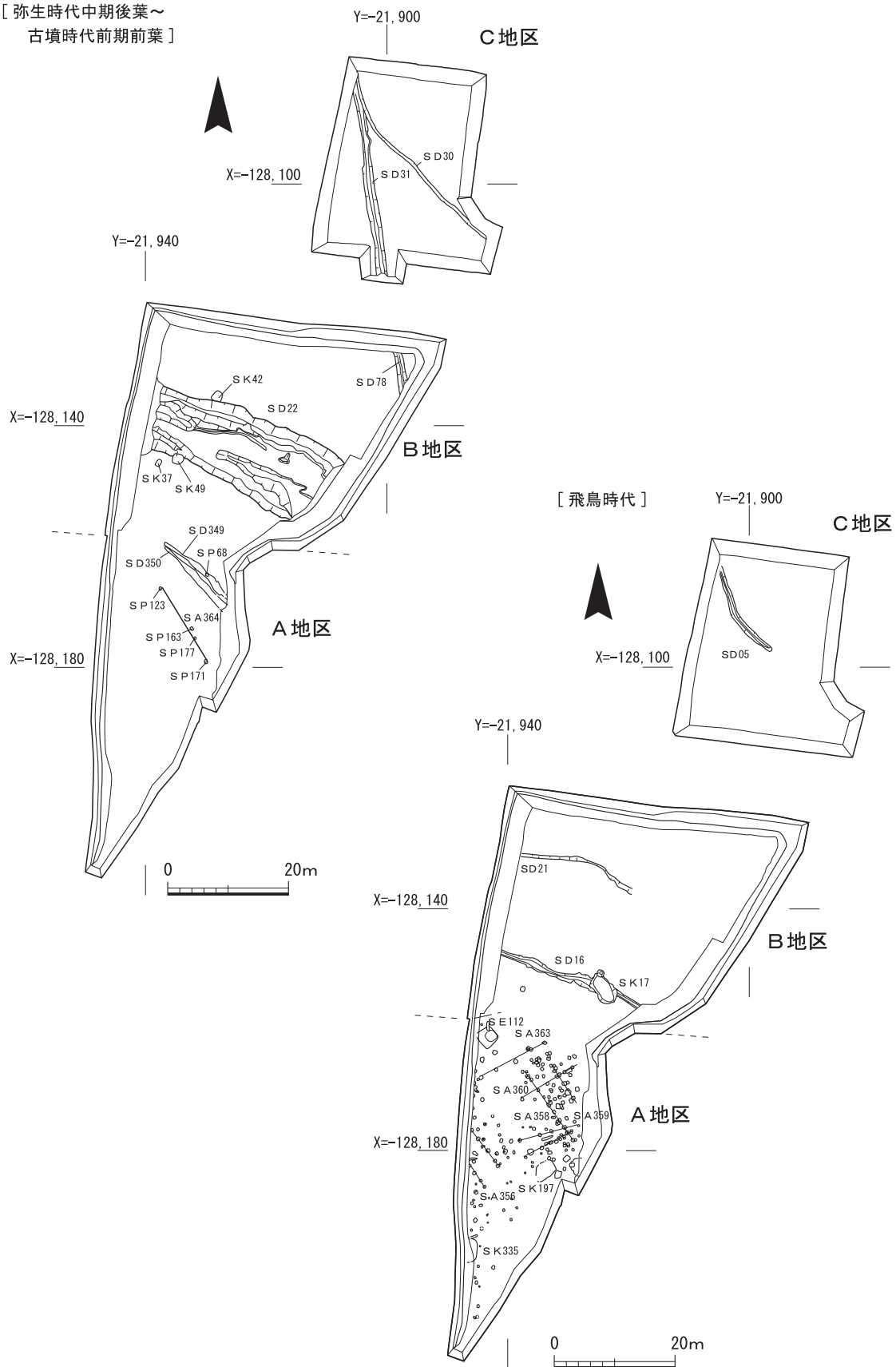
(1) 飛鳥時代

今回の調査では、A～C地区の全域で、中世の島畑を検出したほか、弥生時代から飛鳥時代にかけての多くの遺構を検出した。その主要な遺構として、まず上層から、A地区で検出した飛鳥時代の多数の柱穴群と、同時期の井戸をあげることができる。飛鳥時代の柱穴群は、規模の大きな方形のものを含み、柱穴列を復元できるものの、掘立柱建物としては復元には至らなかった。また、井戸は縦板横^(注73)棧組の精巧なつくりの井戸である。これら検出した遺構群から、一帯に飛鳥時代の集落が広がっていた可能性が高いと思われる。柱穴から出土する遺物は、おおよそ飛鳥Ⅰ・Ⅱに併行する7世紀前半～中頃の須恵器を中心とする。柱穴は重複が著しく、一部は整地層の上層と下層で検出されるなど、今回検出した遺構群は、短期間のうちに何度も掘削されたと推定される。また、同時期には、隣接するB地区では、後述するSD22上層の窪地を大規模に埋め立て、整地していることも明らかになった。A地区で検出した飛鳥時代の遺構群は、居住に適さない河川周辺の低地部を大規模に開発して形成されたものであり、これらの遺構群は木津川の河川交通に関連する遺構群の可能性が考えられよう。

(2) 古墳時代

古墳時代の遺構としては、B地区北部で、弥生時代の流路SD22とほぼ同じ位置で古墳時代初頭～前期前葉の幅10m以上の規模をもつと推定される溝SD22を検出した。SD22は、古墳時代中期にも再掘削され、断絶期間を含みながらも、集落の基幹水路としての役割を果たした大溝と

[弥生時代中期後葉～
古墳時代前期前葉]



第150図 下水主遺跡A～C地区主要遺構変遷図(弥生時代～中世)(1/1000)

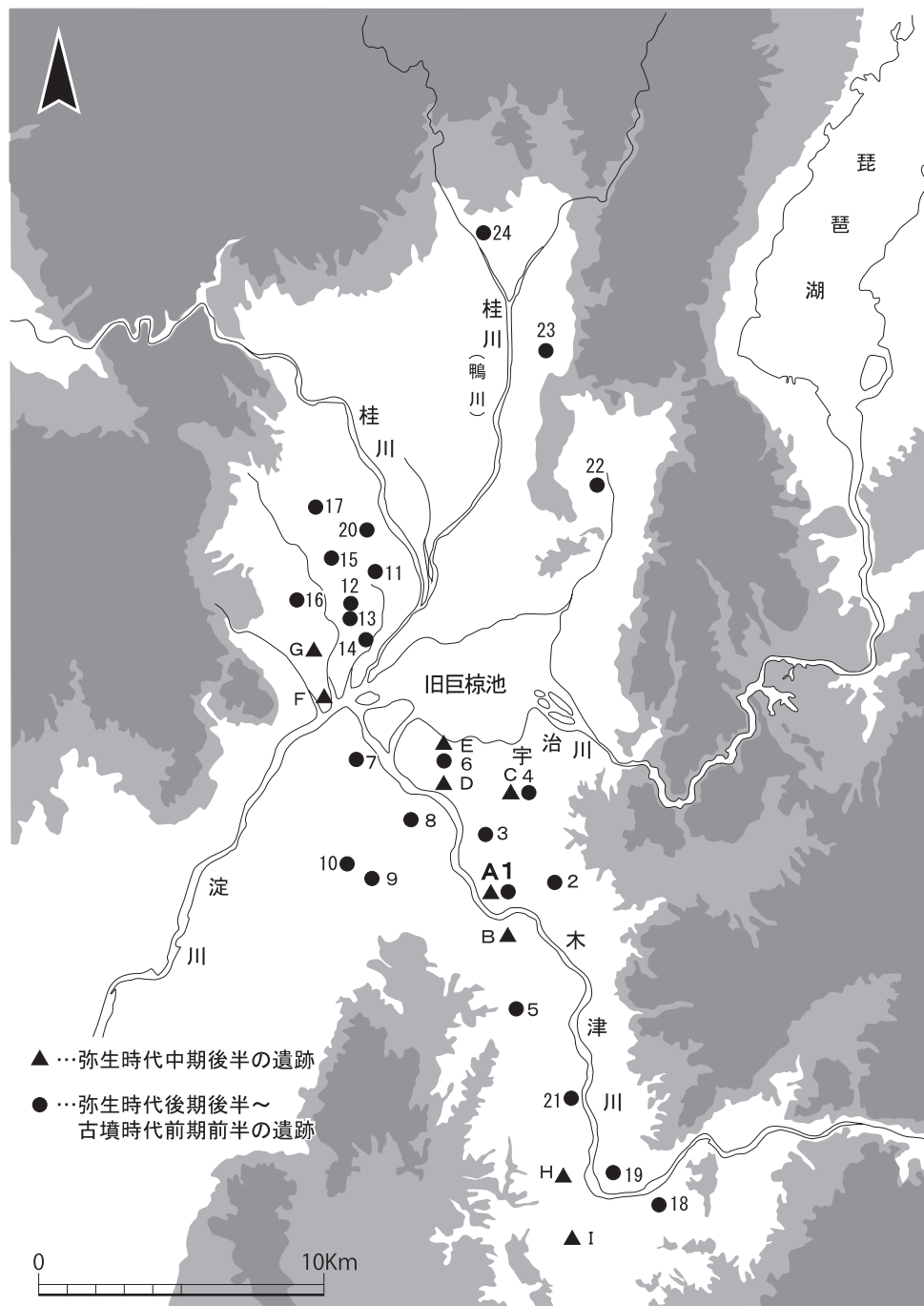
みられる。古墳時代前期の遺構としては、溝 S D 22に加えて、A 地区では古墳時代前期前葉の溝 S D 349と再掘削された溝 S D 350を検出し、これらの溝に平行する柵列 S A 364を確認した。多量の土器が出土した溝 S D 349は集落を画する境界溝の可能性があり、これに並行する柵列 S A 364も同様な性格をもつものであろう。A～C 地区の調査では、古墳時代前期の住居は確認されず、居住域は明らかではないが、柵列 S A 364から調査区外の南東部へ向けて安定した高台となることから、集落はおもに調査地外の南西部に広がる可能性が高い。B 地区 S D 22の底部で確認された土器群も、南岸から投棄されていることから集落が南部に展開することが窺える。また、A～C 地区の調査では、古墳時代中期以降の遺構は、中期後葉に再掘削された溝 S D 22と素掘りの井戸を確認するのみである。

以下、古墳時代初頭～前期の主要遺構である溝 S D 22の性格についてみておきたい。

古墳時代初頭の水路と開発主体 溝 S D 22は、古墳時代初頭(佐山Ⅱ－1式、庄内式古段階併行)に人為的に再掘削された大溝であり、杭列等の水制遺構を伴う大規模な水路である。弥生時代中期後葉の流路 S D 22と同じく、古墳時代初頭における再掘削の深さは基盤層の緑灰色粘土層まで及び、弥生時代の流路の北岸は、古墳時代初頭の再掘削のために完全に失われている。

古墳時代初頭の溝 S D 22の埋土には、現在、遺跡の約300m西に南北に流れる木津川本流に由来するとみられる砂層が多く堆積していることが明らかとなった。^(注74)洪水時には木津川から逆流して砂層が埋積したことを示し、溝 S D 22が木津川本流とつながる大溝であったことを裏付けるものである。溝 S D 22が再掘削される佐山Ⅱ－1式の段階は、庄内式古段階に相当する。この時期には畿内各地の遺跡にみる地域間の土器交流はまだ限定的なものである。しかしながら、溝内からは、吉備系の高杯や東海系の壺類や高杯など、遠隔地からの搬入土器や外来系土器が出土し、古墳時代初頭の畿内のなかでも極めて早い段階に遠隔地との土器交流がみられる地域として注目される。木津川流域では、弥生時代後期末～庄内式古段階の京田辺市門田遺跡や精華町棕ノ木遺跡などでも東海系土器の流入が特徴的に認められる。下水主遺跡は溝の規模や出土遺物から、物資の流通や人的交流の中核となる遺跡であることが明らかであり、こうした木津川流域に点在する集落の交流拠点として、川津の機能を持っていたと推定される。溝 S D 22は、古墳時代前期前葉まで継続する大溝であるが、東海系土器が再掘削の当初から出土し、外来系土器の主体を占めることは、河川交通を基軸とした地域の開発と東海地域との関係性を示すものと言える。舟運の利用を可能にした大規模な水路は、庄内式併行期を通じて、古墳時代前期初葉まで水路としての機能を維持したと考えられる。その開発は、水系を支配した地域首長によって主導されたとみられるが、下水主遺跡の東方約2kmには、庄内式新段階に前方後方墳(全長80m)の城陽市芝ヶ原古墳が出現しており、その被葬者が河川交通を基軸とした地域開発に関わった可能性を指摘することができよう。芝ヶ原古墳は、副葬品や出土土器から東海地域との関係性が強いことは示唆的であると言えるだろう。

なお、溝が再掘削された古墳時代初頭の層位(4区Ⅵ層)から出土した木材1点を酸素同位体比年輪年代分析の対象とし、A D.162年の分析値を得た(付編2参照)。さらにこの層位から出土し



[弥生時代中期後半の遺跡]

A. 下水主 B. 稲葉 C. 若林 D. 佐山尼垣外 E. 市田齊当坊
F. 下植野南 G. 神足 H. 畑の前 I. 大畠

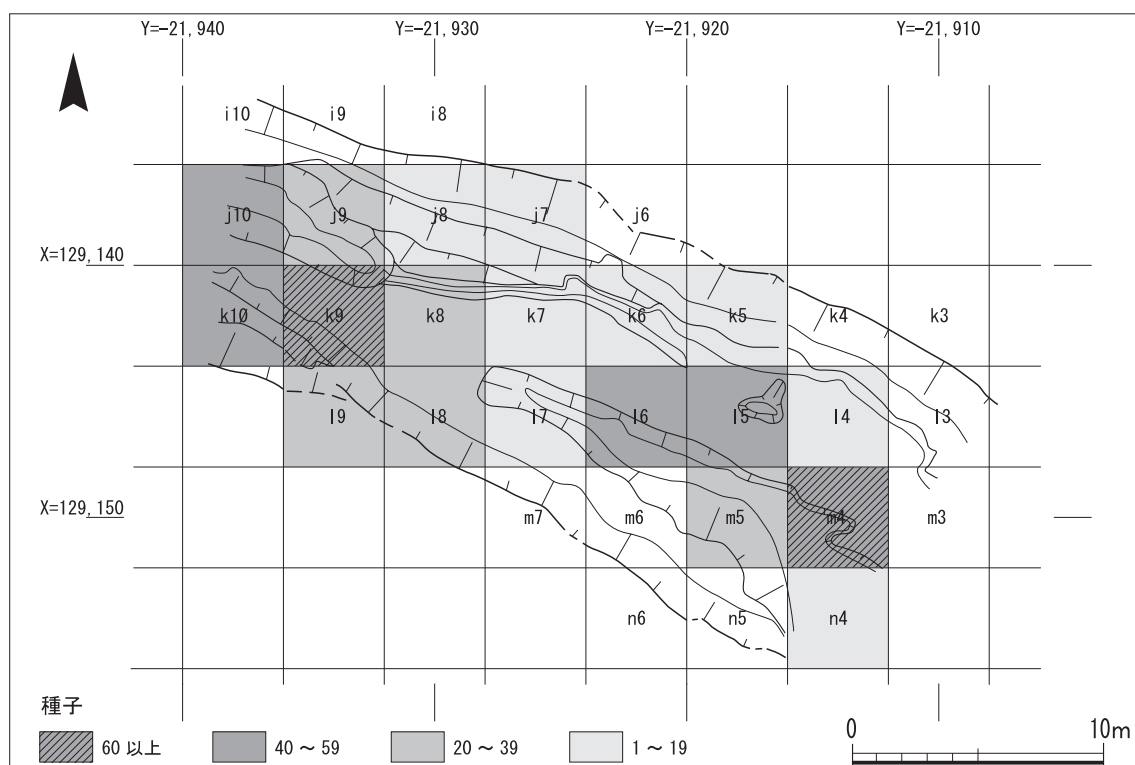
[弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の遺跡]

1. 下水主 3. 塚本東 2. 森山 4. 若林 5. 田辺天神山 6. 佐山
7. 木津川河床 8. 内里八丁 9. 宮ノ背 10. 備前 11. 東土川西 12. 鴨田
13. 馬場 14. 水垂 15. 森本 16. 今里 17. 中海道 18. 燈籠寺
19. 上狛西 20. 大藪 21. 棕ノ木 22. 中臣 23. 岡崎 24. 植物園北

第151図 山城盆地における弥生時代中期後半～古墳時代前期前半の主要遺跡分布図

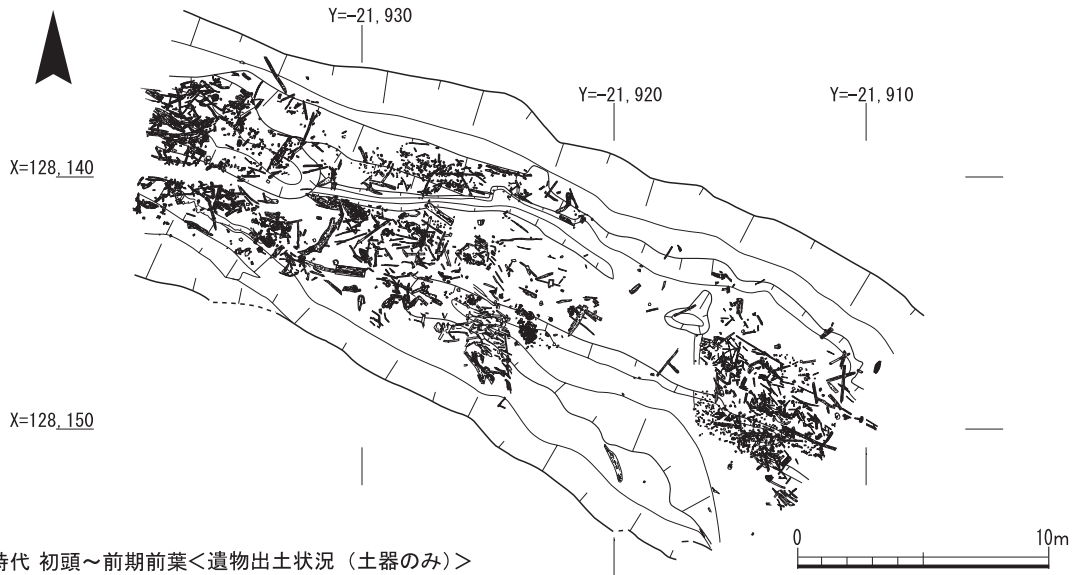
た佐山Ⅱ－1式併行とみる古墳時代初頭の甕1点(第85図175)の外面に付着していた炭化物をAMS加速器年代分析のウイグルマッチングの対象とし、65－176calAD(91.0%)の分析値を得た。

古墳時代前期の水辺の祭祀 溝SD22からは、多量の土器や木製品が出土しているが、その多くは佐山Ⅱ－4式(布留式最古段階)から佐山Ⅲ－1式(布留式古段階)にいたる、古墳時代前期初葉～前期前葉を中心とする資料である。とくに佐山Ⅲ－1式段階には、溝の東西に拡がる土器溜まりSX23、SX24、SX51や、SW61などが確認され、大量の土器や木製品が出土した。この時期には、溝の埋積が進み、舟運を可能とする水路の機能はすでに失われ、水流は溝の底部を中心に流れる程度であったと推定される。出土遺物は、出土状況から南岸から溝底へ向けて投棄されたとみられる。出土遺物のなかには、意図的に穿孔された土器や頸部が破碎された土器、赤彩された土器などの祭式土器や、舟形木製品・陽物形木製品などの祭祀具とされる木製品が含まれ、大溝の最終段階に至って、いわゆる水辺の祭祀が行われたと推定される。また、土器や木製品とともに、古墳時代以降の栽培種とされるモモの種子が多量に出土した点も注目されるところである。水洗作業等により、溝全体から出土したモモ核の総量は、約600点以上を数える。出土地点は、土器溜まりを検出した地点に集中する(第152図)。また、モモ核には、意図的に打撃を加えたとみられるものも含まれることから(付編5)、多量の土器や木製品を使用した水辺の祭祀に、モモ核が用いられたと推定される。土器溜まりのなかでも、とくにSX51からは、燃えさしや一部が焦げたチップ類が水洗作業の過程で多く出土していることから、こうした祭祀行為が夜半に行われたことを示す資料とみることができる。溝SD22は、水量が低下し、水路としての機能を失っ

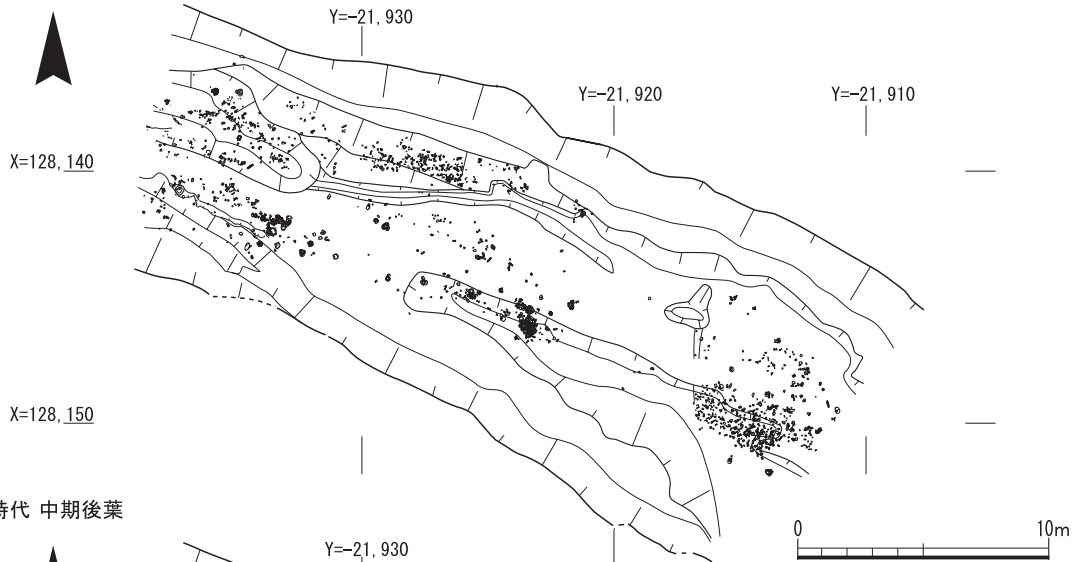


第152図 SD22内種子(モモ種実)出土分布図(1/300)

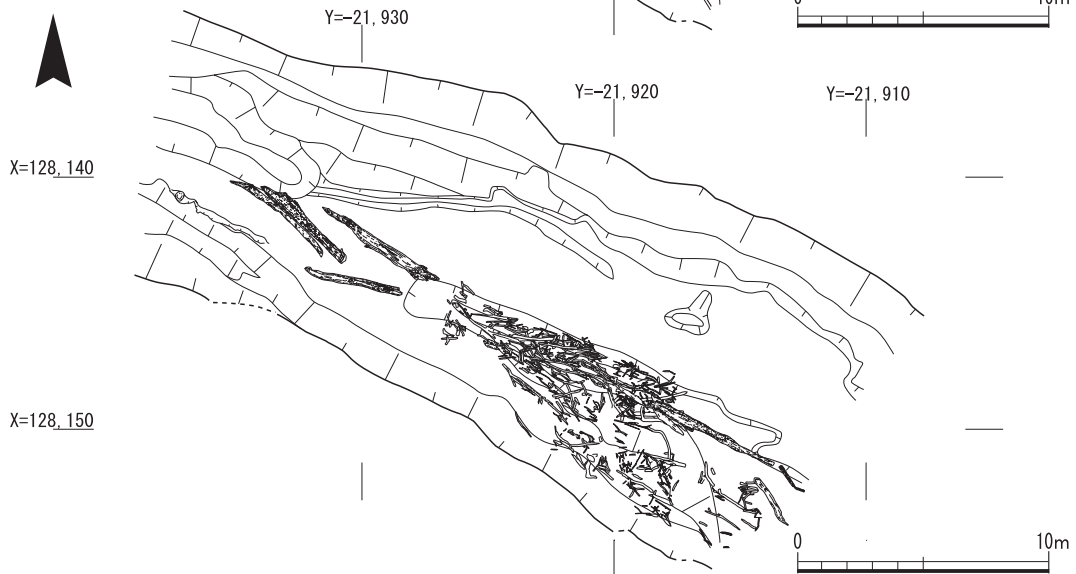
古墳時代 初頭～前期前葉＜遺物出土状況（木製品・土器）＞



古墳時代 初頭～前期前葉＜遺物出土状況（土器のみ）＞

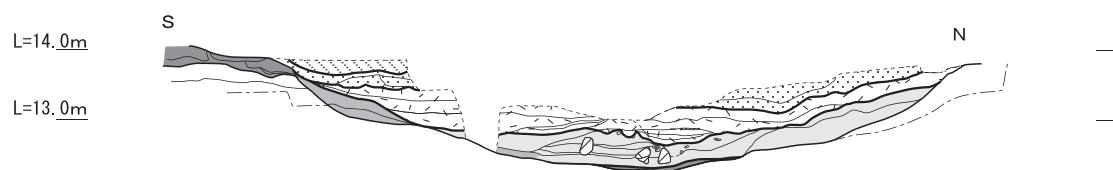


弥生時代 中期後葉



第153図 S D22変遷図(弥生時代中期後葉～古墳時代前期前葉) (1/300)

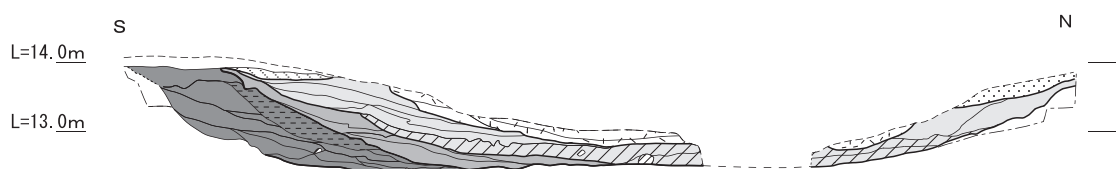
[西壁土層断面]



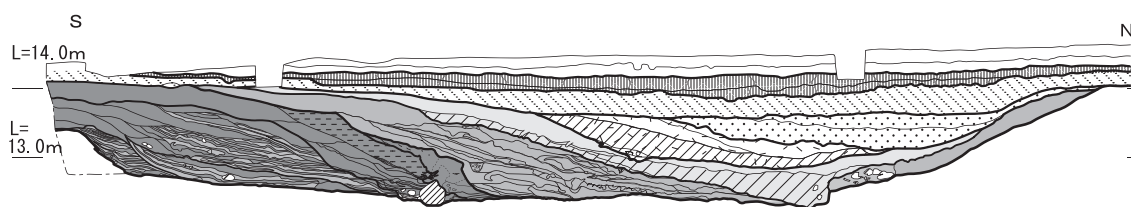
[断面 1]



[断面 2 図]

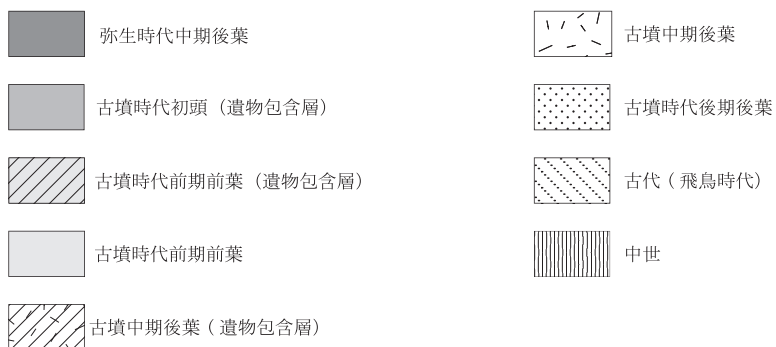


[断面 3 図]



盛土 (法面覆土)

0 5m



第154図 S D22時期別堆積土層図

た最終段階において、基幹水路として溝を管理してきた地域首長のもとで、水辺の祭祀が行われたと推定される。

古墳時代中期の大溝と子持勾玉 古墳時代中期の溝 S D 22 は、古墳時代前期前葉以降、埋積が進み、終息したとみられるが、古墳時代中期後葉に再び人為的に大規模に掘削されている。古墳時代中期における溝 S D 22 の掘削は、前期よりもやや北に移動し、前期の溝の北岸を再掘削によって完全に削平している。しかしながら、その底部は基盤面まで掘削された前期の溝底に到達しておらず、古墳時代前期の溝よりもやや規模を縮小し、東部で幅約 5 m 以上、検出面からの深さ 1.2 m を測る。溝の最下層から、おおよそ陶器 T K 23 型式に併行する須恵器が出土し、再掘削の時期は古墳時代中期後葉と推定される。溝内からの出土遺物は須恵器を中心とするが、その総量は限られたものである。一方、S D 22 からは、出土層位は不明であるが、第 1 次調査で滑石製の子持勾玉が出土している。子持勾玉は、半割するように片面が欠損しているが、丸みをもった重厚なつくりのものであり、おおよそ古墳時代中期後半に帰属する資料とみられる。子持勾玉は、他の玉類と異なり、集落祭祀に用いられたとされる玉であり、古墳時代中期の再掘削の段階に、子持勾玉を用いた集落祭祀が、水路を管理する地域首長によって行われた可能性を示すものと言える。古墳時代中期後葉以降、再び溝は埋積し、古墳時代後期には、シルト層がおもに堆積し、人為的な管理はなされず、増水時には流路となるが、基本的には沼状の地形を呈していたとみられる。

(3) 弥生時代中期

A～C 地区の調査において、弥生時代のおもな遺構は、B 地区の流路 S D 22 と、北西から S D 22 へ流れ込み、S D 22 に合流する溝と推定される C 地区の S D 18 を挙げることができる。集落を構成する住居等は調査区内では検出されておらず、弥生中期後葉の土坑 1 基を B 地区 S D 22 の北岸で検出したのみである。流路 S D 22 は、弥生時代中期後葉から、古墳時代中期にいたるまで、浚渫や掘削が繰り返された水路であるが、なかでも弥生時代中期後葉には、大規模な護岸施設を構築していることが明らかとなった。以下には、弥生時代の流路 S D 22 の構造について述べることにしたい。

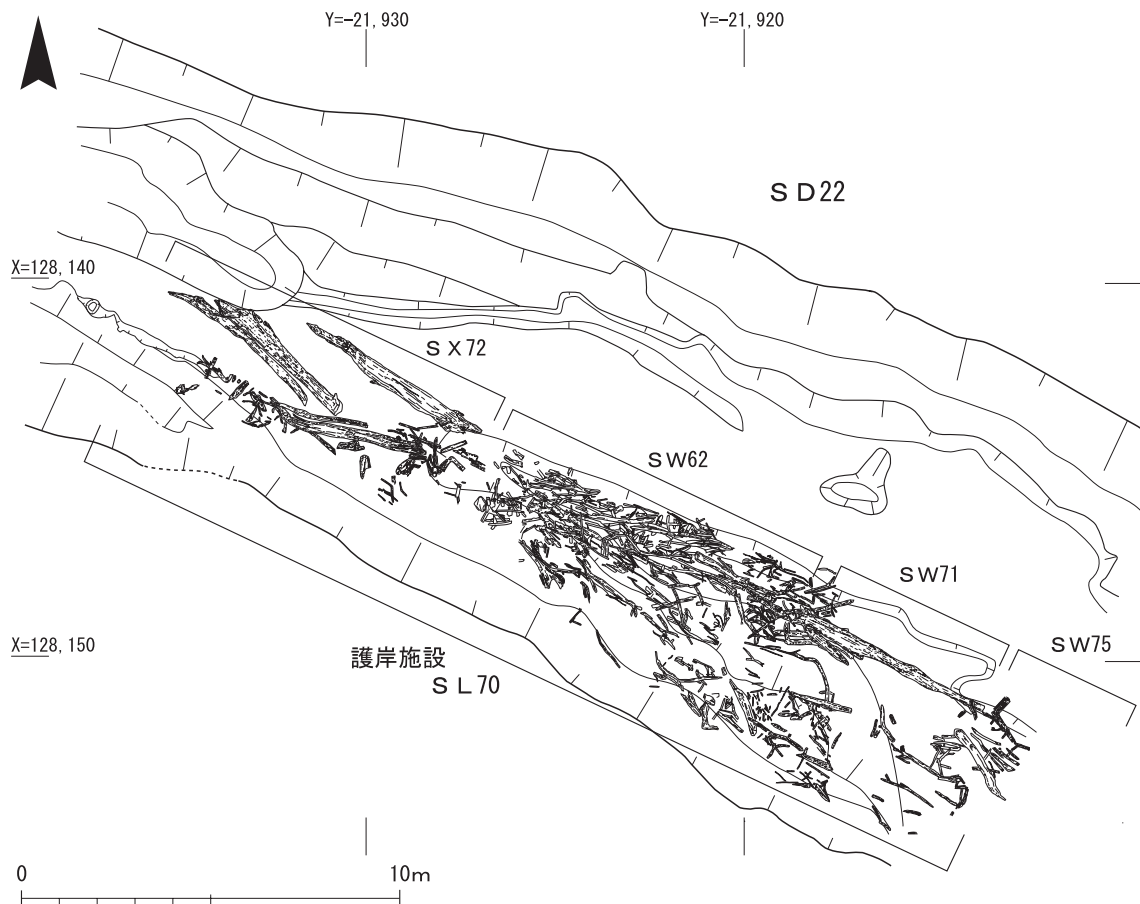
S D 22 は、調査地の西に位置する木津川の周囲に形成された「氾濫流路」の一つであり（付編 1 参照）、弥生時代中期の自然流路の一部を護岸して水路としたものである。調査区の東西に長さ約 30 m にわたって検出し、その規模は、幅約 10 m 以上、深さ約 1.8 m を測る。底面は、上流側の東端 12.4 m、下流部の西端 12.3 m と傾斜勾配は緩いが、地勢に沿って東から西へ緩やかに流下し、木津川本流に合流した流路とみられる。S D 22 は、これまでの下水主遺跡の調査で確認された弥生時代の流路や溝のなかで、最大の規模をもち、弥生時代中期後葉における集落の基幹水路であったとみられる。

護岸施設の構造 流路 S D 22 の調査で検出した護岸遺構 S L 70 は、S D 22 の南岸に盛土によって構築された遺構で、復元長約 30 m 以上を測る大規模な護岸施設である。

護岸施設 S L 70 の構造は、いくつかの盛土部分から構成される。流路東部には、大形樹木を流

路基底に沈めて護岸材とした盛土遺構 S W71が確認できる。その東西に、木葉や草本、粗朶を用いながら盛土がなされた盛土遺構 S W62や同 S W75を検出した。さらに、流路の西側では、大形護岸材の集積 S X72を確認した。S X72は、4～6 mの大形木材の枝を打ち払い、一部加工した材4本(A～D)の集積だが、これらの材は弥生時代中期後葉の護岸施設 S L70の構造材とみられるものである。古墳時代初頭における流路の再掘削において、その一部が露出し、原位置からずれたり、移動しているとみられるものが含まれる。しかしながら、直立杭で一端を固定した材(C)も含まれ、S W71の護岸材とほぼ直線上に並ぶことから、大形護岸材を東西に埋置した盛土遺構を構成する材であったと推定される。以上のように、護岸施設 S L70の復元規模は、検出した S D22のほぼ南岸すべての部分に及び、西壁断面や東壁の断面の観察から、さらに東西にのびる可能性が高い大規模なものである。護岸施設 S L70のなかで、とくに良好な遺存状況を残していたのは、大形樹木を沈め護岸材とした護岸材 Eの周辺部 S W71であり、古墳時代以降の再掘削の影響を受けず、弥生時代中期後葉の埋置された当初の状況を残すことが明らかとなった。

護岸材の敷設と法面覆土 S D22の南東に構築された S W71は、長さ5.5mの大形護岸材(護岸材 E)を基底の構造材として埋置した盛土遺構である。護岸材 Eは攪乱を受けず、原位置を保っており、盛土の構造を知ることができる遺構である。その盛土構造は、断面3で示したとおり(第35図、巻頭図版6)、まず基盤面を浅く掘り窪めて、護岸材 Eを設置したのち、背面側のシルト

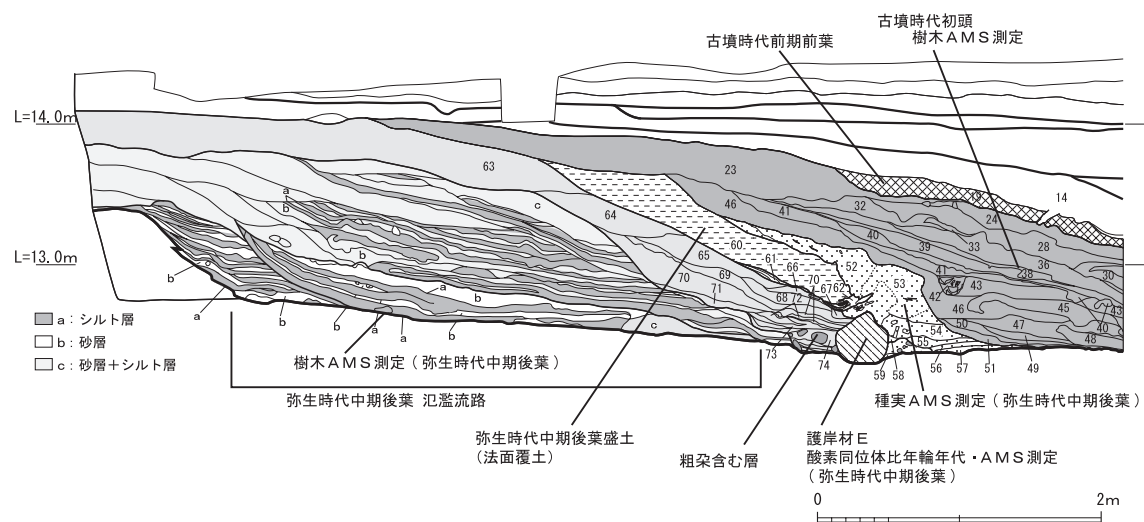


第155図 S D22実測図(弥生時代中期)(1/200)

層に護岸材と平行に多量の粗朶を埋め込み、護岸材を固定し、盛土下層を補強したものである。護岸材Eの攻撃面側には、護岸材を直立杭で固定した箇所が部分的に確認され、護岸材Eは基盤面に杭を打設して固定されたものとみられる。枕木状に基盤面上に据え置かれた護岸材Eの上層には、シルト層や砂層からなる厚さ約0.3～0.4mの盛土がなされ、最後に、緑灰色粘土層（「法面覆土」）を約0.4mの厚さで全体に突き固めて、護岸法面の仕上げとしている。この法面覆土と呼ばれる粘土層については、西側に約10m離れた地点で設定した断面2でも確認しており、鍵層となり、広範囲に盛土が行われたことが確認できる。

盛土遺構にみる「敷葉工法」 護岸材Eを構造材とする盛土遺構SW71の西側流路中央部では、草本や木葉を敷いたうえに細木の粗朶を構造材として盛土したSW62が構築されている。盛土遺構SW62は、大形護岸材は使用していないが、SW71と同様、古墳時代以降のSD22の再掘削の影響を受けず、構築当初の良好な状態が遺存していたものである。SW62は、基盤面を浅く掘り窪めたのちに、草本や木葉を敷き、その上に幹径2～5cm程度の粗朶とともにシルト層と砂層を互層状に積み上げて盛土下層を補強し、上層に幹径5～20cm程度の枝を打ち払った粗朶を構造材として盛土を構築した遺構である。いわゆる「敷葉工法」であり、高含水比の軟弱地盤上に草本や木葉を敷くことで、地盤を補強し、盛土層と地盤の摩擦力を高め、盛土のすべり破壊を防ぎ、その安定性や強度を高めたとみられる^(注75)。また、盛土層に構造材として多くの粗朶を組み入れることによって、粗朶層に生じる間隙に土が入り込み、盛土の強度を増したものと考えられる。「敷葉工法」は、SL70のなかでは、流路の上流側となる盛土遺構SW75でも確認した。SW75は、幅約4～5mの規模をもって広がるSD22南東隅の盛土遺構である。その最下層に木葉や木片などを含む層があり、その上層に粗朶を含むシルト層と砂層を互層状に盛土し、盛土層の補強と強化が図られている。

護岸施設の二つの工法 以上のように、護岸施設SL70は、盛土あるいは地盤補強の工法として2種あり、大形護岸材を流路基底に据え置き、その上層に盛土をする、盛土遺構SW71や、同



第156図 S D 22土層断面3 南部拡大図

様な構造が推定される木材集積 S X72の工法(工法A)と、大形護岸材を用いず、最下層に木葉や草本を敷き上層に粗朶を含むシルトや砂層を盛土する工法(工法B)である。木葉を用いる工法は、従来、奈良時代の大阪府狭山池の調査や平城京の道路遺構やで明らかになったいわゆる「敷葉遺構」の原初的形態と言えるものであり、軟弱地盤において、基盤面上に木葉層を敷設することにより摩擦力を得て、盛土のすべり破壊を防ぐ地盤強化法である^(注76)。

護岸施設の類例とその機能 今回の調査で確認された、弥生時代の盛土の施工については、全国的にみても明らかにされた事例は極めて少ない。九州西方の壱岐島における原の辻遺跡では、「魏志倭人伝」にみられる一支国の拠点と目される遺跡であるが、その船着き場跡とされる出島状の突堤は、「敷粗朶工法」によるとされ、基礎部分に木材や玄武岩礫を敷き、横崩れを防ぐための杭が打たれ補強されたものである。基礎部分上層には、さらに樹皮を敷いた上に、盛土が施され、石や樹皮を貼り付けて土塁を構築したもの^(注77)とされる。原の辻遺跡の船着き場跡の構築時期は、弥生時代中期前葉とされ、「敷粗朶工法」が確認される最古の事例である。一方、基盤の敷素材に草本や木葉、木片などを用いた「敷葉工法」は、岡山県上東遺跡の弥生時代後期初頭の波止場状遺構とされる土手状遺構の基盤の工法に見ることができる^(注78)。上東遺跡の波止場状遺構は、長さ45m、幅5～14m、高さ2m弱の断面台形の土手状を呈する遺構であり、最古の「敷葉工法」による遺構とされている。

下水主遺跡の調査で検出した護岸施設 S L70の一部である盛土遺構 S W62は、出土した数片の土器から弥生時代中期後葉(畿内第Ⅳ様式3段階、第4章参照)に位置付けられるとともに、構造材の酸素同位体比年輪年代分析(付編2)や加速器放射性炭素年代分析(付編3)において、おおよそ弥生時代中期後葉に比定できる年代値が得られている。こうした点から、盛土遺構 S W62にみる工法Bとした基盤における草本や木葉の使用は、弥生時代中期後葉に位置づけられる最古段階の原初的な「敷葉工法」^(注79)とみることが可能である。

盛土遺構 S W62は、大形護岸材 E を構築材とする S W71よりも、その基底が流路の攻撃面側に拡張しており、護岸施設 S L70のなかでも張り出し部を形成した可能性が高い部分である。この部分が突堤的な性格をもち、舟の接岸を可能とする形状を呈し、船着き場としての性格を有していたと推定する。下水主遺跡における大規模な護岸施設は、大形護岸材を枕木状に盛土の基礎に使用する工法Aや、いわゆる「敷葉工法」とされる工法Bなど、地盤補強と盛土築盛において極めて高い土木技術のもとに構築された遺構であり、弥生時代中期における木津川の川港に形成された船着き場の護岸遺構として評価すべきものと言えよう。

今回の調査では、大形護岸材(A・B・D・E)や S W62の粗朶を酸素同位体比年輪年代分析の対象とし、さらに原位置と保つとみられる護岸材 E についてはAMS加速器放射性炭素年代分析のウイグルマッチングの対象とした。また、大形護岸材Aや、大形護岸材E直上の層位から出土した種子類、さらに S X75の敷葉遺構から出土した木葉などをAMS加速器放射性炭素年代分析の対象とした。その結果、酸素同位体比年輪年代分析では護岸材Eは、AD.1年とされ、AMSウイグルマッチング分析でもほぼ近い年代値を得た。また、護岸材Bや、種子や木葉について

も、おおそ弥生時代中期後半に相当する年代値を得ている(付編2・3参照)。

2) 下水主遺跡の時期別変遷

一連の発掘調査では、縄文時代晩期から中・近世にかけての遺構・遺物を検出した。これらの検出地点は、調査対象地で広く検出された島畑を除くと、時代ごとに遺構や遺物が集中する地点には偏りがみられる。また、出土遺物も時期別にみると偏りがあり、いずれの調査地点においても時代を超えて、長期にわたって遺構が営まれたことを示す例がほとんどない。したがって各遺構群は、断続的に形成されているといえる。ここでは時期ごとの遺構・遺物の変遷とその評価について述べる。

(1) 縄文時代晩期

この時期の遺構・遺物は調査対象地内に散見されるが、特に、L地区では氾濫流路や焼土、落ち込みなどの自然地形や遺構とともに大量の土器が出土した(『報告集』第174冊)。L地区では、出土した遺物点数が多く、調査地近隣に集落本体が存在した可能性は高い。ただし、調査地内では焼土を1基確認したのみで、顕著な遺構は確認していない。このほか、下水主遺跡H地区や水主神社東遺跡B・C地区などで、遺物包含層や落ち込みから同時期の縄文土器が少量出土している(『報告集』第163・167・174冊)。遺物の分布が広範囲におよぶのが下水主遺跡の縄文時代晩期の特徴である。

(2) 弥生時代前期

この時期の遺構は確認していないものの、水主神社東遺跡A地区(A3区)出土遺物の中にこの時期のものと推定される破片資料がある(『報告集』第167冊所収第22図21)。周辺ではこの時期の遺構・遺物は出土していないため、その存在には注意する必要がある。

(3) 弥生時代中期後半から後期初め

この時期の遺構は対象地の北部と南部に大きく分かれて検出した。いずれにしても前期から中期前半にかけて資料は未確認である。

北部では下水主遺跡L～N地区で検出した。当該期の遺構はほとんどが土坑で、比較的多数の遺物が出土した。出土した弥生土器は中期後半から後期初めにかけてのものである(『報告集』第170・174冊)。当該調査区では竪穴建物は検出していないが、多数の土坑の存在や出土遺物の量、これまで明らかになっている地形的な観点などを加味すると、L地区で検出した縄文時代晩期の氾濫流路の付近を南限とし、その北側に当該期の遺構の広がる可能性が高い。その北限は下水主遺跡の北端部からさらにその北側に広がっていた可能性も考えられる。

一方、南部では、B・C地区で土坑2基、溝2条のほか、護岸を施した自然流路1条がある(本報告書)。これらの詳細については本文で詳述したとおりである。当該期の遺構・遺物は古墳時代前期の遺構との重複が顕著であることから、検出数は少ないが、下水主遺跡の北端部で検出した一群との間の空間には、この時期の遺構や遺物がまったくみられない。このことから、弥生時代中期後半から後期初頭にかけては、下水主遺跡の北部と南部で別々の集落が形成されていた可

〈弥生時代中期〉

X=-127.200

X=-127.400

X=-127.600

X=-127.800

X=-128.000

X=-128.200

0 200m

- SH: 竪穴建物
SB: 掘立柱建物
SK: 土坑
SE: 井戸
SD: 溝・流路
SX: 落ち込み

Y=-21.800

Y=-21.600

Y=-21.400

Y=-21.200

Y=-21.000

Y=-20.800

Y=-20.600

Y=-20.400

Y=-20.200

Y=-20.000

Y=-19.800

Y=-19.600

Y=-19.400

Y=-19.200

Y=-19.000

Y=-18.800

Y=-18.600

Y=-18.400

Y=-18.200

Y=-18.000

Y=-17.800

Y=-17.600

Y=-17.400

Y=-17.200

Y=-17.000

Y=-16.800

Y=-16.600

Y=-16.400

Y=-16.200

Y=-16.000

Y=-15.800

Y=-15.600

Y=-15.400

Y=-15.200

Y=-15.000

Y=-14.800

Y=-14.600

Y=-14.400

Y=-14.200

Y=-14.000

Y=-13.800

Y=-13.600

Y=-13.400

Y=-13.200

Y=-13.000

Y=-12.800

Y=-12.600

Y=-12.400

Y=-12.200

Y=-12.000

Y=-11.800

Y=-11.600

Y=-11.400

Y=-11.200

Y=-11.000

Y=-10.800

Y=-10.600

Y=-10.400

Y=-10.200

Y=-10.000

Y=-9.800

Y=-9.600

Y=-9.400

Y=-9.200

Y=-9.000

Y=-8.800

Y=-8.600

Y=-8.400

Y=-8.200

Y=-8.000

Y=-7.800

Y=-7.600

Y=-7.400

Y=-7.200

Y=-7.000

Y=-6.800

Y=-6.600

Y=-6.400

Y=-6.200

Y=-6.000

Y=-5.800

Y=-5.600

Y=-5.400

Y=-5.200

Y=-5.000

Y=-4.800

Y=-4.600

Y=-4.400

Y=-4.200

Y=-4.000

Y=-3.800

Y=-3.600

Y=-3.400

Y=-3.200

Y=-3.000

Y=-2.800

Y=-2.600

Y=-2.400

Y=-2.200

Y=-2.000

Y=-1.800

Y=-1.600

Y=-1.400

Y=-1.200

Y=-1.000

Y=-0.800

Y=-0.600

Y=-0.400

Y=-0.200

Y=0.000

Y=0.200

Y=0.400

Y=0.600

Y=0.800

Y=1.000

Y=1.200

Y=1.400

Y=1.600

Y=1.800

Y=2.000

Y=2.200

Y=2.400

Y=2.600

Y=2.800

Y=3.000

Y=3.200

Y=3.400

Y=3.600

Y=3.800

Y=4.000

Y=4.200

Y=4.400

Y=4.600

Y=4.800

Y=5.000

Y=5.200

Y=5.400

Y=5.600

Y=5.800

Y=6.000

Y=6.200

Y=6.400

Y=6.600

Y=6.800

Y=7.000

Y=7.200

Y=7.400

Y=7.600

Y=7.800

Y=8.000

Y=8.200

Y=8.400

Y=8.600

Y=8.800

Y=9.000

Y=9.200

Y=9.400

Y=9.600

Y=9.800

Y=10.000

Y=10.200

Y=10.400

Y=10.600

Y=10.800

Y=11.000

Y=11.200

Y=11.400

Y=11.600

Y=11.800

Y=12.000

Y=12.200

Y=12.400

Y=12.600

Y=12.800

Y=13.000

Y=13.200

Y=13.400

Y=13.600

Y=13.800

Y=14.000

Y=14.200

Y=14.400

Y=14.600

Y=14.800

Y=15.000

Y=15.200

Y=15.400

Y=15.600

Y=15.800

Y=16.000

Y=16.200

Y=16.400

Y=16.600

Y=16.800

Y=17.000

Y=17.200

Y=17.400

Y=17.600

Y=17.800

Y=18.000

Y=18.200

Y=18.400

Y=18.600

Y=18.800

Y=19.000

Y=19.200

Y=19.400

Y=19.600

Y=19.800

Y=20.000

Y=20.200

Y=20.400

Y=20.600

Y=20.800

Y=21.000

Y=21.200

Y=21.400

Y=21.600

Y=21.800

Y=22.000

Y=22.200

Y=22.400

Y=22.600

Y=22.800

Y=23.000

Y=23.200

Y=23.400

Y=23.600

Y=23.800

Y=24.000

Y=24.200

Y=24.400

Y=24.600

Y=24.800

Y=25.000

Y=25.200

Y=25.400

Y=25.600

Y=25.800

Y=26.000

Y=26.200

Y=26.400

Y=26.600

Y=26.800

Y=27.000

Y=27.200

Y=27.400

Y=27.600

Y=27.800

Y=28.000

Y=28.200

Y=28.400

Y=28.600

Y=28.800

Y=29.000

Y=29.200

能性が考えられる。ここで想定される集落の実態は不明であるが、出土遺物の様相から、両集落とも中期末ないし後期初頭には廃絶していると考えられる。

(4) 弥生時代後期

この時期の遺構は、調査地の南部を中心に散見されるが、後期前半に属するものはほとんどなく、いずれも後半から末葉にかけてのものである。したがって、後期初頭から後期後半までの集落が営まれた場所は、調査対象地外と想定される。この段階の遺構として下水主遺跡F地区で竪穴建物2棟のほか、土坑や土器溜まりなど検出した(『報告集』第168冊)。これらの遺構の立地は、木津川に沿った微高地上に展開していると考えられることから、F地区周辺が弥生時代後期の集落の一画であったことが予想される。ただ、F地区の遺構群も、古墳時代前期の庄内式～布留式段階までは存続しないことから、弥生時代後期末には廃絶していると考えられる。このほか、F地区に隣接するD地区やI地区で同時期の遺物の出土がわずかであるが確認でき、当該期の遺構が東に広がる可能性もある。

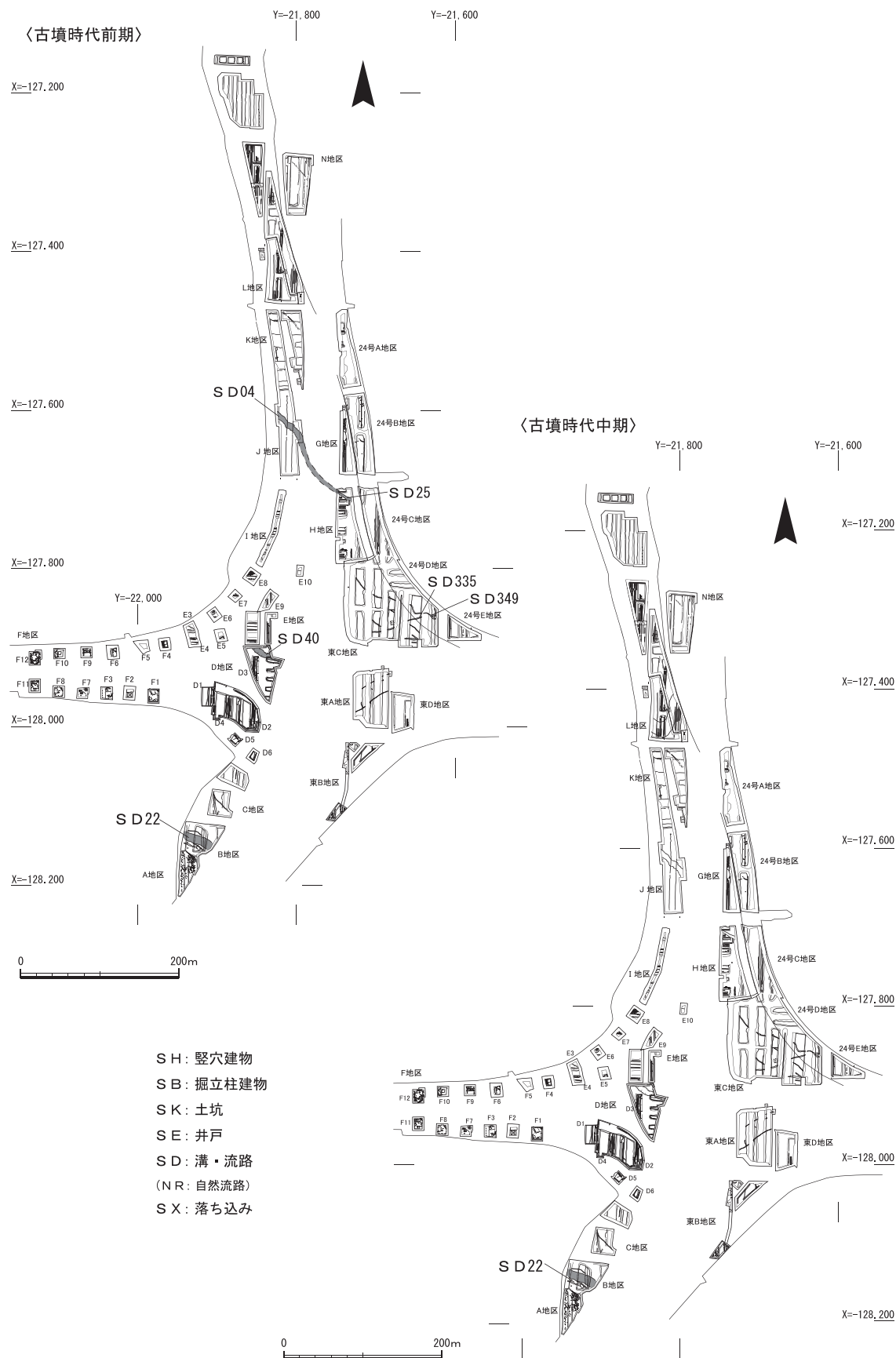
(5) 古墳時代前期

古墳時代前期になると、下水主遺跡B地区を中心に広く遺構の形成と遺物の出土が確認できる。まずB地区では大規模な溝S D22を検出した(本報告書)。この詳細については本文に詳述したが、弥生時代中期の自然流路を再掘削して利用したもので、幅が10m以上の大規模なものである。この溝は、古墳時代初頭に木津川本流と結ぶ水路として再掘削されたとみられる。古墳時代前期前葉には、水路としての機能は低下し、土器や木製品を伴ういわゆる水辺の祭祀が行われている。埋没過程で廃棄や投棄された大量の遺物の詳細については本報告書で詳述したとおりである。

このS D22の同時期の遺構が、隣接するA地区をはじめ、D・H・J・L地区、あるいは水主神社東遺跡C地区などでも確認されている。このうち、H地区で検出した溝S D25と、同一の溝と推定されるJ地区で検出した溝S D04は、建築部材と推定される木製品が多く出土するとともに、溝の一部を塞ぎ止めるなどして水を溜めた遺構と思われるものを確認している。詳細については『報告集』第174冊で行っているが、溝S D22とは機能等が異なると考えられる。建築部材が出土している点も考慮すれば、B地区周辺の遺構群とは異なった性格の遺構群の存在をJ地区やH地区の近隣に想定することもできよう。

このほか、水主神社東遺跡のC地区や下水主遺跡のL地区などでは古墳時代前期の土器を伴う性格不明の溝を確認している(『報告集』第168・174冊)。やや深さのある溝で、遺物が少ないため詳細は不明であるが、正方位に対して斜行しているのが一般的である。これらの溝は弥生時代後期に遡るものも含まれるかもしれないが、水主神社東遺跡A地区付近から下水主遺跡N地区付近まで多数確認できる。その性格は不明であるが、調査地周辺では西側よりも東側の方が低いいため、そこに滞水した水を西側に抜くために掘削されたのではないかと考えられる。なお、溝の多くがH地区のS D25と同一方位であることは留意される。これらの溝群にくらべS D25は規模の点では大きく異なることから基幹水路的な性格も考えられる。

このように古墳時代前期の遺構・遺物は、調査対象地内で多く確認できる。ただし、集落の実



第158図 下水主遺跡遺構変遷図2 (古墳時代) (1/7,500)

態を示すような遺構が確認できないため、集落本体の所在地は不明である。ただ、調査地最南端のA・B地区で多数の土器が出土していることから、A・B地区よりも南ないし南東側、特に水主神社の所在するあたりに集落の中心部分を想定することができるのではないかと考える。

(6)古墳時代中・後期

当該期の遺構は明瞭ではないが、B地区で検出した溝S D22の上層に当たる溝や近接して検出した土坑S K19が確実な遺構である(本報告書)。また、このS D22上層埋土からは古墳時代中・後期の遺物が出土しており、古墳時代を通じてこの溝が機能、ないし存在したことを示している。そして、後述するS D22最上層の飛鳥時代を中心とした遺物を包含する整地層(本報告書第19図43層)の存在からこのころにS D22が完全に埋没していたことが明らかになっている。

このほか、下水主遺跡F 2区出土の甕(『報告集』第168冊第13図13)やL地区中層遺物包含層出土の須恵器杯蓋の破片(『報告集』第174冊第55図119・120)など、少量であるが当該期の遺物が対象地内の各所で散見される。確実な遺構はS D22上層に限られるので、古墳時代中・後期に恒常的に集落が営まれた可能性は低いと考えられる。一方、少量の土器片が調査対象地内に散見されるということは、当該期にさまざまな活動が行われていたことを示しているともいえる。

(7)飛鳥時代

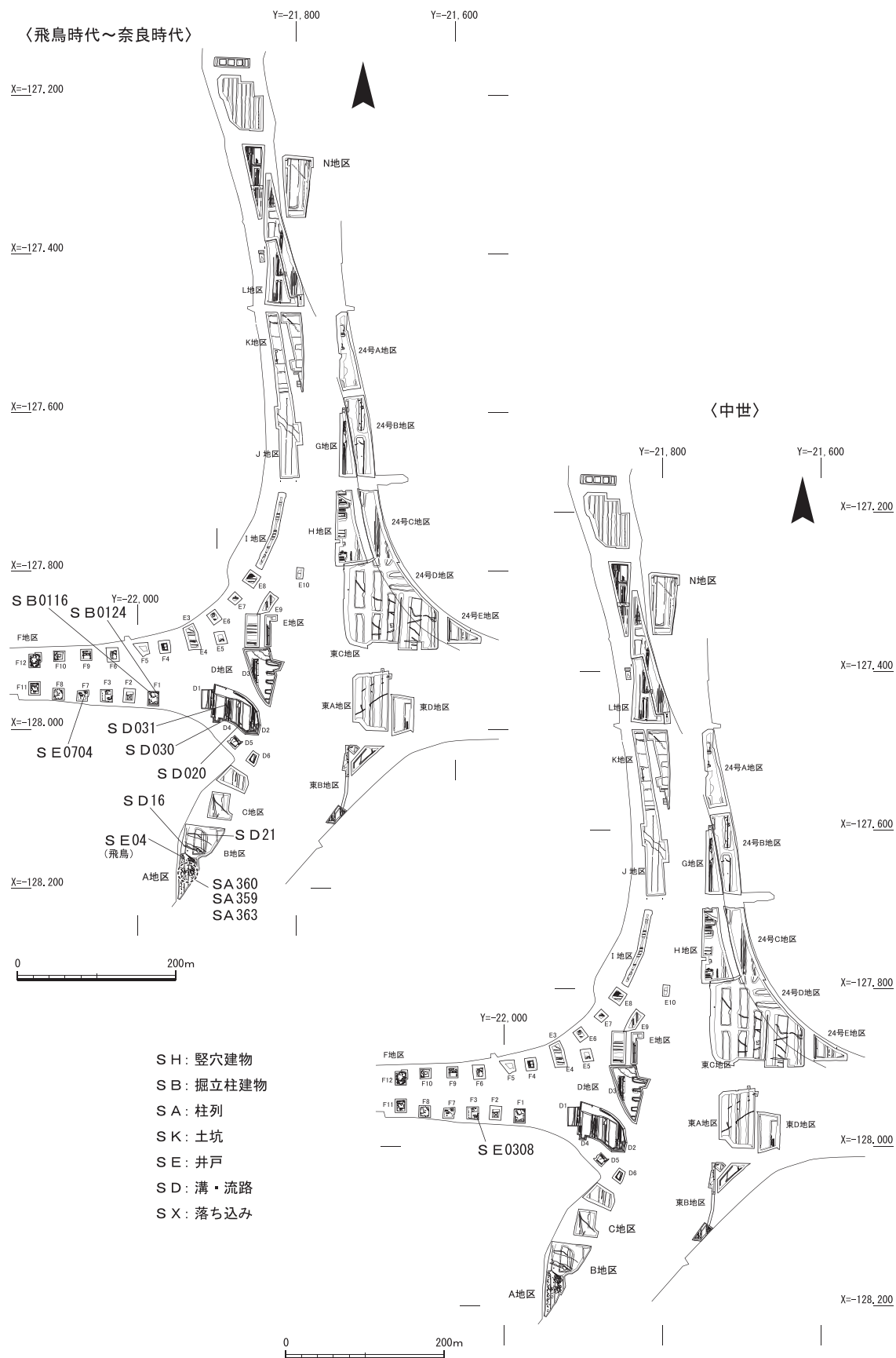
当該期の遺構は、おもにA・B地区で検出した。ただ、両調査区の状況は大きく異なっており、A地区では井戸1基はじめ、土坑や多数の柱穴などの遺構を検出した。これに対して、B地区では溝や土坑などの遺構のほか、上述の溝S D22の最上層部分で多数の遺物を含む層序を確認した。これらはS D22を最終的に埋めて、周辺一帯を平坦にした、整地層と考えられる。したがって、A地区は遺構が密集して展開する空間であるが、B地区は整地を行い、若干の遺構が展開するものの、広い空地として位置づけることが可能と考える。以下、当該期の遺構や遺物について、調査地点ごとにやや詳しくみていくことにしたい。

①A地区について

A地区で検出した遺構のうち、土坑については整地に伴う単位の一部である可能性もあり、かならずしも遺構として断定はできない可能性を示した。これに対して、柱穴は列状をなすものが多数確認できたが、掘立柱建物として復元することができるものはなかった。このためA地区で検出した柱穴群の性格については明らかにできていない。

しかし、柱穴列の多くが北に対して35°前後西に振るものが大半を占めることや、柱穴列が四方に認められ、一定の空間領域を圍繞している可能性が考えられることから、中心的な施設は確認できないものの、閉鎖的な空間を設けるため、こうした柱穴列が設けられたと考えられる。こうした施設として、閉鎖的な空間という点を重視し、中心的な施設は未確認であるものの、宗教的な空間であった可能性を指摘したい。ただ、一連の調査においてA地区周辺では宗教的な行為を示すような遺物の出土は確認しておらず、あくまでも推測の域を出ない。また、重複関係も多く確認できることから、頻繁に建て替え等が行われた可能性が高い。

一方、井戸S E112は方形掘形を持つが、その四辺は柱穴列群とおおむね同じく、北に対して



第159図 下水主遺跡遺構変遷図3(飛鳥時代～中世)(1/7,500)

40°ほど西に振っており、この井戸も一連のものであったと考えられる。井戸は井戸枠を持つもので、その部材として扉材などを再利用しており、上記柱穴列群に囲まれた中心的な施設で使用されていたものが転用されたのかもしれない。

なお、これらの遺構から出土した土器の大半が7世紀代に限られ、8世紀まで下るものはごくまれにしかない。したがって、B地区のS D22を最終的に埋め立てたと考えられる整地層の時期を上限とし、ほぼ7世紀代のおよそ100年ほどに限定してA地区の遺構群は形成されたものと考えられる。

②B地区について

B地区では溝2条と土坑1基のほか、溝S D22の最上層に当たる暗灰色粘質土(本報告書第19図43層)からは古墳時代後期後半から飛鳥時代にかけて遺物が多数出土しており、単なる遺物包含層、もしくは自然堆積層とは考えにくく、ほぼ同時期の遺構がA地区やB地区の一部で確認されることから、A地区の遺構が形成される過程で、北側に存在したS D22を埋め立てた際の整地層ではないかと想定される。この整地層の造成によってA地区の遺構群に対して北側に広い空間を確保していると考えたい。

また、B地区で検出した遺構のうち溝2条(S D16・21)については、S D22の埋め立てによって困難となる、調査地周辺の排水のために掘削された可能性がある。また、土坑S K17については、S D16の埋土との区別が困難であるため、排水に当たっての水量等を調整するためのものであった可能性もあろう。

③その他の調査区

当該期で注意される遺物として、下水主遺跡F 7区で検出した井戸S E0704の掘形から出土した川原寺式もしくは藤原宮式の軒丸瓦がある(『報告集』第168冊第45図244)。遺構そのものは平安時代中期のものであるが、この軒丸瓦が、奈良県飛鳥地域へ運搬される途中であったのか、あるいは調査地近隣にこうした軒丸瓦を使用した施設が存在したのか、現段階では検討するための材料が少なく、今後の検討課題である。

また、同じく下水主遺跡F 1区では、掘立柱建物2棟を検出した(『報告集』第168冊)。出土した土師器片から古代の可能性が高いものの、詳細な時期は不明である。ただ、A地区の柱穴列とは一致しないが、建物の主軸が北に対して25°前後西に振るので、当該期の可能性も考えられる。

(8)平安時代中期

奈良時代になると、遺構はまったくと言っていいほど確認できない状況となるが、奈良時代の遺物と推定されるものが少量出土している。こうした状況から下水主遺跡では奈良時代の遺構は存在しなかった可能性が高いと考える。この状況は平安時代前期においても同じであるが、平安時代中期(10世紀代)になると、少量であるが、遺構や遺物を確認することができる。

まず、F 7区では井戸1基(S E0704)を検出した。出土遺物に黒色土器碗が含まれるため、当該期の遺構であることが明らかである。また、B地区の土坑S K15からも黒色土器碗が出土しており、当該期の遺構と考えられる。このほか、緑釉陶器や灰釉陶器の破片などもF地区などでも

確認できる。ただ、遺構の検出数は少なく、平安時代の土地利用は不明な点が多い。ややまとまった遺構が確認できたF地区やB地区は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構分布と重複するところがあることから、やはり木津川沿いの微高地上に集落が展開していた可能性を考えることができる。

さらに下水主遺跡の北半部に当たるL地区やN地区では、平安時代の可能性がある軒瓦が出土しており、この付近に当該期の遺構群が広がっていた可能性が予想される。

(9)中世

中世になると、調査対象地一帯には島畑が形成された。これは、中世前半にあたる12～13世紀の土器が島畑の素掘り溝や溝状遺構から出土するようになることから、島畑の形成時期がこのころまで遡ると考えられる。島畑の形成とその後の展開については、『報告集』第174冊で検討を行っているが、調査対象地内だけで100基を超える島畑を検出した。これらの多くは安定した基盤層を整形して最初期の島畑を形成していることが指摘できる。その後、溝状遺構の埋没と再掘削、島畑への盛土等が繰り返し行われている。こうした島畑の形成がいつまで続くのか、明確に断言できないが近世末期、あるいは近代まで継続していた可能性もある。

一方、多くの調査区で、溝状遺構が砂層の堆積によって埋没し、合わせて島畑もこうした砂層に覆われている例を確認することができた。この砂層は木津川の氾濫等による洪水砂の可能性が高く、また、洪水の回数も一度に限らず複数回、発生したと考えられる。こうした洪水に対する対処も行いつつ、やがて島畑から水田を主体とする作付けの変化に至ったものと考えられる。

さらに注目される点として、現在の水田を区画する畦畔と島畑の分布を重ねあわせてみると、水田の中央に島畑が形成されており、畦畔の位置に溝状遺構が存在していることが明らかになった。この点は、島畑や溝状遺構の土層断面観察からも、両遺構がほぼ同一地点で長期にわたって維持されていたことと一致しており、両遺構が時間の経過とともに垂直方向への展開を見せるものの、水平方向への変化は必ずしも多くなかったことを示している。このように、現在の水田景観が、中世段階の島畑の形成にまで遡って規定されていた事実が確認された。この点において、多数の島畑を調査し、現在とのつながりを明らかにできた意義は大きい。

おわりに

本報告では、弥生時代中期における木津川の川港に形成された船着き場の護岸遺構や、古墳時代の木津川河川交通を背景とする大規模な基幹水路の存在を明らかにすることができた。さらに、こうした基幹水路を掌握した地域首長が関わったとみられる古墳時代前期の水辺の祭祀や、古墳時代中期後葉における子持勾玉を用いた集落祭祀、さらに河川交通に関係するとみられる飛鳥時代集落の存在を明らかにするなど、各時代の大きな調査成果を得ることができた。いずれも、木津川の河川交通とここを拠点にした地域首長層に深く関わるものとして注目される。

調査地の南東には約300mの地点には、現在、木津川の河川交通に深く関わる古代の氏族、水主直が管掌したと伝承される延喜式内社の水主神社が所在する。下水主遺跡の周辺は、木津川中

流域にあって、川筋が大きく曲流する地点にあり、洪水被害が多くみられる一方、砂州が広く形成され、木津川の対岸との渡しが最も容易であった地点であり、古代から木津川の河川交通の要衝であった。木津川を挟んで、下水主遺跡対岸の京田辺市大住には、水主神社に遷宮された延喜式内社樺井月神社が所在したとされ、『古事記』安康記の「菟羽井渡」や延喜式の「泉河樺井渡瀬」の記述が示すとおり、下水主遺跡はまさに木津川の川渡の拠点に立地する遺跡であると言える。今回、弥生時代中期の大規模な護岸施設の検出など、新名神高速道路整備事業の城陽JCT・ICの建設に伴う調査で明らかとなった木津川の河川交通に深く関わる遺構群の発見は、下水主遺跡の古代から続く、川津としての性格をあらためて浮き彫りにするものと言える。本書に示した調査成果が、地域の歴史復元に広く活用されることを願って、本報告を完了する。

(高野陽子・筒井崇史)

本書を作成するにあたり、各種分析について、次にあげる方々からご教示、ご寄稿いただいた。記して、深く謝意を表したい。

第5章 長友朋子(立命館大学文学部教授)

吉村慎太郎(立命館大学大学院文学研究科博士課程前期)

高橋 悠(元立命館大学大学院文学研究科博士課程前期)

付編1 増田富士雄(京都大学名誉教授・当センター理事)

付編2 中塚 武・李 貞・對馬あかね・佐野雅規(総合地球環境学研究所)

付編3 伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadze・小林克也(株パレオ・ラボ AMS測定チーム)

付編4 能代修一(明治大学黒耀石研究センター、元森林総合研究所)・村上由美子(京都大学総合博物館)・佐々木由香(明治大学黒耀石研究センター)・小林和貴(東北大学植物園)・鈴木三男(東北大学植物園)

付編5 西原和代(京都大学大学院文学研究科博士後期課程)・岡田麻衣子(立命館大学大学院文学研究科博士課程前期)・鶴来航介(京都大学大学院文学研究科博士後期課程)・高橋 悠・柳原麻子(大津市教育委員会)・浦 蓉子(奈良文化財研究所)・村上由美子・佐々木由香

付編6 佐々木由香・バンダリスダグシヤン(株パレオ・ラボ)

また、現地調査及び整理事業を通じて、ご教示、ご協力いただいた方々を記し、深く謝意を表す。

一瀬和夫・石崎善久・市村慎太郎・奥田 尚・小村真理・木沢直子・久住 猛・小泉浩司・古閑正浩・小山田宏一・神野 恵・辰巳和弘・辻本裕也・中居和志・中塚 良・西村公助・林比佐子・菱田哲郎・平井典子・広瀬和雄・福島孝行・穂積裕昌・米田敏幸・森岡秀人・若林邦彦(以上、五十音順、敬称略)

注1 平成20年度以降に調査に着手した新名神高速道路整備事業に伴い刊行した発掘調査報告書は以下の通りである。

- ①村田和弘・松尾史子「女谷横穴群第10・11次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第137冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010
- ②引原茂治・松尾史子「女谷横穴群第11・12次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第142冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2011
- ③古川 匠「美濃山廃寺下層遺跡第8次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第148冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2012
- ④石井清司・伊野近富・筒井崇史・村田和弘・関広尚世・大高義寛「美濃山廃寺第6次・美濃山廃寺下層遺跡第9次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第154冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2013
- ⑤奈良康正・筒井崇史・山崎美輪「新名神高速道路整備事業関係遺跡平成23・24年度発掘調査報告 女谷・荒坂横穴群第13次調査」(『京都府遺跡調査報告集』第157冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2014
- ⑥村田和弘「新名神高速道路整備事業関係遺跡平成23・24年度発掘調査報告 荒坂遺跡第5次」(『京都府遺跡調査報告集』第157冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2014
- ⑦伊野近富・筒井崇史・村田和弘「新名神高速道路整備事業関係遺跡平成23～25年度発掘調査報告 門田遺跡第3～5次」(『京都府遺跡調査報告集』第161冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2015
- ⑧村田和弘・大高義寛「新名神高速道路整備事業関係遺跡平成23～25年度発掘調査報告 西村遺跡第2・3次」(『京都府遺跡調査報告集』第161冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2015
- ⑨筒井崇史・村田和弘「新名神高速道路整備事業関係遺跡平成23～25年度発掘調査報告 向谷遺跡第3・4次」(『京都府遺跡調査報告集』第161冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2015
- ⑩戸原和人・岡崎研一・筒井崇史・関広尚世・福山博章・深澤麻衣「新名神高速道路整備事業関係遺跡平成23～25年度発掘調査報告 水主神社東遺跡第1・2・5次」(『京都府遺跡調査報告集』第167冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2016
- ⑪戸原和人・筒井崇史・村田和弘・関広尚世・福山博章・深澤麻衣「新名神高速道路整備事業関係遺跡平成23～25年度発掘調査報告 下水主遺跡第1・4次」(『京都府遺跡調査報告集』第167冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2016
- ⑫筒井崇史・高野陽子・岡田健吾「新名神高速道路整備事業関係遺跡平成25・27・28年度発掘調査報告 下水主遺跡第4次(F地区)」(『京都府遺跡調査報告集』第168冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2017

注2 下水主遺跡の範囲については、京都府教育委員会が試掘調査を実施され、遺跡の拡がりを確認された。福島孝行「下水主遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査報告 平成25年度』京都府教育委員会) 2014
福島孝行「下水主遺跡第7次調査」(『埋蔵文化財発掘調査報告 平成26年度』京都府教育委員会) 2015

注3 地理的環境の執筆にあたっては下記文献を参照した。

- ①平凡社編『日本歴史地名体系 26 京都府の地名』(平凡社 1981)
- ②「角川地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典 京都府』(角川書店 1982)
- ③城陽市史編さん委員会編『城陽市史』第1巻(城陽市 2002)

- 注4 歴史的環境の執筆にあたっては下記文献を参照した。
- ①城陽市史編さん委員会編『城陽市史』第1巻(城陽市 2002)
- ②城陽市史編さん委員会編『城陽市史』第3巻(城陽市 2002)
- 注5 注1⑪文献参照
- 注6 注1⑩～⑫文献参照
- 注7 岡崎研一・筒井崇史・山崎美輪・渡邊拓也・桐井理揮「新名神高速道路整備事業関係遺跡平成26・27年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第174冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2018
- 注8 増田孝彦・岡崎研一・黒坪一樹・引原茂治・酒井健治「一般国道24号金尾交差点改良事業関係遺跡」(『京都府遺跡調査報告集』第163冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2015
- 注9 島畑の周囲には島畑よりも低く掘り込まれた部分は滞水するものの、流れがあるわけではないので「溝」という表現は適切ではない。しかし、形態的には溝に類似することから、本報告では「溝状遺構」という名称を使用する。また、溝状遺構の幅は島畑の斜面の落ち込みが始まる部分の間の長さとする。
- 注10 増田富士雄「付編1」参照。
増田富士雄氏(京都大学名誉教授、当センター理事)から、現地指導の際、S D22の堆積状況や下水主遺跡周辺の堆積環境全般について、ご教示を得た。
- 注11 高野陽子「弥生時代後期～古墳時代の土器様相」(『京都府遺跡調査報告書 佐山遺跡』第33冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003
- 注12 「氾濫流路」の基底には、粗粒な河床物質(ラグ堆積物)が認められないことが特徴とされる(注10文献参照)。
- 注13 現地調査において、S D22の堆積状況や堆積土のサンプリングの方法に関して、中塚良氏(公益財団法人向日市埋蔵文化財センター)、辻本裕也氏からご教示を得た。
- 注14 中塚武・李貞・對馬あかね・佐野雅規「酸素同位体比年輪年代測定」(本書付編2)
中塚武氏(総合地球環境学研究所)から、酸素同位体比年輪年代測定や測定に適する樹種等、またサンプリングについて、ご教示を得た。
- 注15 「放射性炭素年代測定」パレオ・ラボAMS年代測定グループ(伊藤茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadze・小林克也)(本書付編3)
小林克也氏((株)パレオ・ラボ)から、較正年代の問題や、サンプリングについてご教示を得た。
- 注16 注14文献参照
- 注17 有機質遺物研究会(西原和代・浦蓉子・鶴来航介)・柳原麻子・佐々木由香「下水主遺跡S D22土壌サンプルの水洗と種実の同定」(本書付編4)
現地において、佐々木由香氏、村上由美子氏から、層中における有機質遺物についてご教示を得た。
- 注18 増田富士雄氏から、現地調査において、ご教示を得た。
- 注19 「敷葉工法」は、考古学の調査事例から命名された用語である。盛土や地盤上に草本、樹皮、粗朶などを敷設し、その安定と強化を図る工法とされる。
工楽善通「古代築堤における「敷葉工法」」(『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所)1995
- 注20 小山田宏一氏は、「土層の間に補強材を入れてすべりに対する抵抗力を高める」盛土の補強土工法を敷葉遺構として総称し、天然素材で補強した土構造物の種類と施工箇所を分類している。本書で報告する下水主遺跡の護岸施設は、軟弱地盤と盛土という、土質の異なる2層を分離して相互の混入を防ぎ、不同沈下を防止する「護岸の根固め工」に分類されるとみられる。

- 小山田宏一「天然材料を敷設する河川工法の系譜」(『考古学ジャーナル』3 No639 2013
同「古代の開発と治水」(『狭山池』論考編 狭山池調査事務所)1999
同「敷設工法の再検討―天然素材を用いた土構造物の補強―」(『季刊 考古学』第102号 雄山閣
2007
- 注21 現地調査において、能代修一氏から、護岸材ほか各層から出土する木製品や樹木の樹種、山城地域の植生等についてご教示を得た。また、辻本裕也氏から樹種とサンプリングの方法について、ご教示を得た。
- 注22 現地調査において、木沢直子氏から、すべての護岸材が枝木を除去した加工木であるとするご教示を得た。また、護岸材C(芯持ち丸木)と護岸材D(ミカン割り状)は同種の樹木であり、同一の材を分割して使用している可能性が高いとされたが、実際の分析においても、護岸材CとDは、コナラ属アカガシ亜族であり、年輪数が20年と一致することが判明した。
- 注23 本書では、木材や杭、樹木・草本・木葉等の土木材を使用した盛土遺構や、水流を調整する遺構を、治水・利水に関連する施設として、「水制遺構」として報告する(略記号はS Wとする)。
- 注24 角閃石を多量に含む胎土を特色とする古墳時代初頭の大形壺は、讃岐産と河内産があるが、古墳時代前期前葉に大きく移動しているものは、讃岐産が主体である。
- 注25 モモについては、古墳時代以降の栽培植物とされ、奈良県纏向遺跡において多量に出土し、祭祀関連遺物として指摘されるところである。こうした視点に基づき、S D22においても、土器溜まりS X24、S X51周辺等、人力掘削作業中に、特に多く出土する傾向がみられる地点について、周辺の土砂を土納袋約200袋に採取して洗浄した。その分布傾向は、第152図に示すとおりである。また、洗浄作業の過程で、モモとともにクルミが顕著に含まれる傾向があることが判明しており、クルミに関しても、モモと同様に信仰の対象となる可能性を示すものである。
- 注26 複数の盛土遺構(略記号S W)からなる「護岸施設」を総称する場合に、略記号S Lを用いる。
- 注27 注19文献・注20文献参照。
- 注28 現地調査において、広瀬和雄氏から「敷設遺構」についてご教示を得た。
広瀬和雄「古代の開発」(『考古学研究』30巻-2号 考古学研究会) 1983
- 注29 S W62の構造材として用いられている樹木については、上層に大形材を置き、中層から下層に細木を多く確認されるが、いずれも枝木を除去した加工材を用いている。
- 注30 高野陽子「山城の庄内式甕をめぐる二、三の問題」(『京都府埋蔵文化財論集』第6集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010
- 注31 小形丸底鉢と小形丸底壺の区分については、以下文献分類に従った。
寺沢薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県橿原考古学研究所 1986
- 注32 注11文献・注30文献参照。
- 注33 神野恵氏(奈良国立文化財研究所)からご教示を得た。
- 注34 赤塚次郎「廻間式土器」(『廻間遺跡』調査報告書第23集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター) 1990
同「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」(『西上免遺跡』調査報告書台73集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター) 1997
- 注35 佐山遺跡では、庄内形甕に、大・中・小の法量分化がみられる。そのうち小形の庄内形甕においてのみ、左上がりのタタキが確認されることから、小形品にみる左上がりタタキは、地域的な特色でなく、持ち手の在り方による技法上の問題とみる。注11文献参照。

- 注36 第Ⅴ様式系甕にみるタタキ成形技法は、畿内では右上がりのタタキ痕を基調とするが、左上がりのタタキ痕は、摂津から播磨の地域において、他地域よりもより高い出現頻度で確認される。
高野陽子「庄内式甕の出現」（『京都府埋蔵文化財情報』第92号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）2004
- 注37 高野陽子「丹後」（『丹後地域－擬凹線文土器系土器の様式と変遷－』財団法人大阪府埋蔵文化財センター）2006
- 注38 高橋護「弥生土器－山陽1～2」（『月刊考古学ジャーナル』173・175・179・181号 考古学ジャーナル社）1980
同「弥生時代終末期の土器編年」『岡山県立博物館研究報告』Ⅰ 1988
- 注39 柳瀬昭彦・江見正己・中野雅美「川入・上東」（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』）16 1977
- 注40 注34文献参照。
- 注41 注11文献参照。
- 注42 口縁部内面にみる炭化物の吸着は、阿波系二重口縁壺や、讃岐系複合口縁壺などに特徴的に認められるものである。器壁への水分の浸透を防ぐものであるのか否か、検討課題である。
- 注43 菅原康夫『黒谷川郡頭遺跡Ⅱ』（徳島県教育委員会）1987
同「阿波弥生時代終末期社会の特質」（『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ）1992
- 注44 注30文献参照。
- 注45 関川尚功・石野博信『纏向遺跡』（奈良県立橿原考古学研究所・桜井市教育委員会）1976
- 注46 注31文献参照。
- 注47 注39文献参照。
- 注48 高木真光ほか『昭和53・54年度文化財調査年報』（八尾市教育委員会）1980
- 注49 田中元浩「（2）東土川西遺跡出土土器の検討」（『長岡京跡発掘調査研究所調査報告』長岡京跡発掘調査研究所・（財）向日市埋蔵文化財センター）2003
- 注50 宮崎幹也「坂田郡における受口状口縁甕を中心として」（『庄内式土器研究』Ⅱ 庄内土器研究会）1992
- 注51 森岡秀人「山城地域」（『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社）1990
- 注52 若林邦彦「近畿地方の土器」（『考古資料大観』第1巻 小学館）2003
同「近畿」（『弥生土器』ニューサイエンス社）2005
- 注53 松野元宏「市田齊当坊遺跡出土弥生土器の検討」（『京都府埋蔵文化財調査報告書』第36冊、京都府埋蔵文化財調査研究センター）2004
- 注54 佐原眞「畿内地方」（『弥生式土器集成』本編2）1968
- 注55 長友朋子「文様の地域性－弥生時代における凹線文を素材として－」（『古文化談叢』九州古文化研究会）2003
- 注56 國下多美樹「東土川西遺跡の弥生土器－乙訓地域の第Ⅴ様式～庄内式土器の変遷－」（『向日市資料館紀要』創刊号）1986
國下多美樹「乙訓地域における土器の交流拠点」（『庄内式土器研究』ⅩⅩ 庄内式土器研究会）1999
- 注57 注51文献参照。
- 注58 吹田直子「－山城地域－」（『古式土師器の年代学』（（財）大阪府埋蔵文化財センター）2006
- 注59 注11文献参照。

注60 注31文献参照。

注61 米田敏幸「中河内の庄内式と搬入土器について」(『考古学論集』1) 1985

米田敏幸「土師器の編年1 近畿」(『古墳時代の研究(土師器・須恵器)』第6巻 雄山閣) 1991

注62 注61文献参照。

注63 注31文献参照。

注64 注48参照。

注65 上原真人編『木器集成図録 近畿原始編』9(『奈良国立文化財研究所史料』第36冊) 1993

注66 樋上昇『木製品から考える地域社会－弥生から古墳へ－』雄山閣 2010

注67 河野一隆「石製模造品」(『考古資料大観9 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器』小学館) 2002

注68 飛鳥・奈良時代の土器の器種名には、原則として奈良文化財研究所が使用しているものを使用する。ただし、在地系等、奈良文化財研究所の型式分類に存在しないものについて適宜一般的な名称を使用する。

小笠原好彦・西弘海・吉田恵二「土器」(奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告VII』(『奈良国立文化財研究所学報』第26冊)) 1976

安田龍太郎・巽淳一郎・沢田正昭「土器」(奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告XI－第1次大極殿地域の調査－』(『奈良国立文化財研究所学報』第40冊)) 1981

神野恵「土器類」(奈良文化財研究所編『平城宮発掘調査報告XVI－兵部省地区の調査－』(『奈良文化財研究所学報』第70冊)) 2005

注69 三好美穂「都城の煮炊具」、小森俊寛「近畿北部の煮炊具」(『古代の土器研究 律令の土器様式の西・東4 煮炊具』古代の土器研究会)1996

注70 飛鳥・奈良時代の土器編年や年代観については、原則として奈良文化財研究所が使用しているものを使用する。

奈良国立文化財研究所編『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II』(『奈良国立文化財研究所学報第』第31冊 1978)、

同『飛鳥・藤原宮発掘調査報告IV』(『奈良国立文化財研究所学報』第55冊) 1996

『平城宮発掘調査報告VII』(『奈良国立文化財研究所学報』第26冊 1977)

同『平城宮発掘調査報告XIV』(『奈良国立文化財研究所学報』第51冊) 1993

同『平城宮発掘調査報告XVI』(『奈良文化財研究所学報』第70冊) 2005など

注71 筒井崇史「飛鳥時代須恵器杯Hの地域性について」(『京都府埋蔵文化財論集』第5集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006

注72 石井清司・増田孝彦・筒井崇史・竹村亮仁・渡邊拓也・橋本稔・田原葉月「一般国道24号城陽IC関連寺田地区改良事業関係遺跡平成26・27年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第170冊 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2017

注73 宇野隆夫「井戸考」(『史林』第65号第5号 京都大学史学研究会) 1982

注74 増田富士雄氏から、石英・長石などの花崗岩起源の鉱物を主とする木津川の河川砂とのご教示を得た(付編1参照)。

注75 注20文献参照。

小山田宏一氏は、天然素材で補強した土構造物の種類と施工箇所を分類している。本例は、軟弱地盤と盛土という、土質の異なる2層を分離して相互の混入を防ぎ、不同沈下を防止する護岸の根固

め工に分類されよう。

- 注76 小山田宏一「東アジアの敷葉工法」(『国づくりと研修』97(財)全国建設研修センター) 2002
国内では、弥生時代の事例は、粗朶を用いる長崎県原の辻遺跡(弥生時代中期前半)や、木葉を用いた岡山県上東遺跡(弥生時代後期初頭)の例に留まる。韓国においても、韓国金海市鳳凰台遺跡船着き場跡、同官洞里遺跡波止場遺構、全羅北道金堤市碧骨堤など、原三国時代の事例があるが、原の辻遺跡の事例はこれらよりも現状では先行し、渡来系とされてきたこうした技術について、その系譜が問題となるところである。
- 注77 長崎県教育委員会『原の辻遺跡・鶴田遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第33集 1998
長崎県教育委員会『原の辻遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第33集、1998 同第36集 2006
安楽勉「一支国の船着き場遺構」(『季刊 考古学』第102号 雄山閣) 2007
- 注78 下澤公明・渡邊恵理子ほか「下庄遺跡 上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』157 2001
下澤公明「上東遺跡波止場状遺構の再検討」(『古文化談叢』52) 2005
渡邊恵理子「上東遺跡の「波止場状遺構」」(『季刊 考古学』第102号 雄山閣) 2007
- 注79 小山田宏一氏は、天然素材を用いる補強工法について、福岡水城の「敷粗朶」、大阪狭山池の「敷葉工法」が広く使用されているが、補強材の種類や土構造物の種類や施工箇所によって様々であり、誤解を与えやすい用語であるとし、草本・粗朶・樹皮などの天然素材を用いる各種補強工法を、「古代のジオテクスタイル工法」と総称することを提唱している。注20文献(2007文献)参照。

参考文献

- 神戸市教育委員会編『松野遺跡発掘調査概報』1983
- 岐阜県教育文化財団『柿田遺跡』岐阜県埋蔵文化財保護センター調査報告書 第92集 2005
- 田辺昭三『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ 1966
- 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- 伴野幸一「近江地域－野洲川流域を中心に－」(『古式土師器の年代学』(財)大阪府埋蔵文化財センター) 2006
- 森岡秀人・西村歩「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題－最新年代学を基礎として－」(『古式土師器の年代学』(財)大阪府埋蔵文化財センター) 2006
- 中居和志「古墳出現前後の近江地域－土器編年を中心に－」(『立命館大学考古学論集 v』立命館大学考古学論集刊行会) 2010

付表6 下水主遺跡SD22出土木材・種子 年代分析一覧

資料名	次数	地区割	形状	SD22 区割	層位	SD22内 遺構	樹種分析	酸素同 位体分 析適合 性	年輪数	酸素同 位体・年 輪年代 分析	酸素同位体 資料所見	AMS	備考
護岸材 A	6次	k9・k8	残存長4.7m、 最大径19cm (芯持材)	1区		護岸材	ムクロジ (落葉広葉 樹)	○	73	AD64	樹皮直下で はない	○	
護岸材 B	6次	k8・k7	残存長5.45m、 最大径33cm (芯持材)	2区		護岸材	カエデ属 (落葉広葉 樹)	○	104	BC30	樹皮とは違 う?複雑に 捻れている	○	
護岸材 C	6次	l8・k8	残存長4.4m、 直径27cm(芯 持丸木)	2区		護岸材	コナラ属ア カガシ亜属 (常緑広葉 樹)	対象外		樹種不 適(年輪 幅大)			
護岸材 D	6次	k9・k8	残存長4.45 m、半径27cm (ミカン割状)	1区・ 2区		護岸材	コナラ属ア カガシ亜属 (常緑広葉 樹)	対象外		樹種不 適(年輪 幅大)			
護岸材 E	6次	m5・m4	残存長5.6m、 35cm(芯持材)	3区・ 4区	原位置	護岸材	エノキ属 (落葉広葉 樹)	○	115	AD1	最外部は年 輪と斜交、 最外年輪は 別にある?	◎	
護岸材 F	6次	n4	残存長2.3m、 ※図径20cm (芯持丸木)	4区		護岸材	(落葉広葉 樹)	×			ほぼ樹皮直 下		
①	6次	l6l7		3区		SW62		△	29	BC66※	樹皮付き		
②	6次	l6・l7		3区		SW62		△	25	A D 32 ※	樹皮直下	◎	
③	6次	l6・l7		3区		SW62		△	25	BC171※	樹皮直下		
④	6次	l6・l7		3区		SW62	ツバキ属能 代 SMZ-464	×		年代決 定不可	樹皮近く		
⑤	6次	l6・l7		3区		SW62		○	88	BC400	樹皮遠い?		
⑥	6次	k6a・d		3区		SX56		×		年代決 定不可	樹皮直下		
⑦	6次	l6・g6		3区	上層			×		年代決 定不可	樹皮直下		
⑧	6次	l4b・m 4a		4区		S X 61	チドリノキ 能代 SMZ-436	△	34		樹皮付き	◎	
⑩	6次	l4b・m 4a		4区		SX61		△	20	BC204 ※	樹皮直下		
⑪	6次	m4a		4区	VI層		ヒノキ 能代 SMZ-341	○	81	AD162	樹皮近く	◎	SX51の下 層であり SD22-4区 6層
⑫	6次	m4a		4区	IV層下 層			×		年代決 定不可	樹皮近い?		実測NoB-33 地区割修正
⑬	6次	m4	種子	4区		護岸材F 直上		×	—	—	—	◎	E材直上シ ルト混砂層 に種子集積
⑭	6次		土器炭化物	4区	VI層	土器175				再測定	樹皮遠い?	○	

付編 1 京都府南部、城陽市下水主遺跡の発掘調査で見いだされた弥生時代の氾濫流路とその埋積物

増田富士雄(京都大学名誉教授)

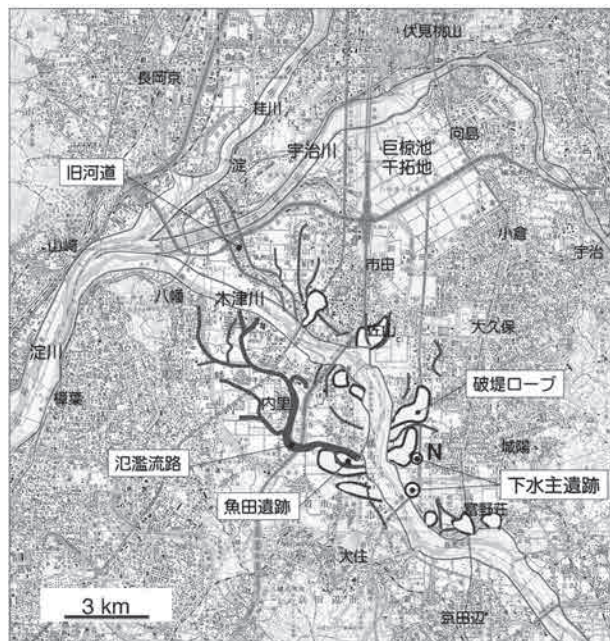
1. はじめに

京都府の南部、城陽市の「下水主遺跡」は、木津川下流の右岸近くの低地に位置する(第1図)縄文時代から古墳時代、飛鳥時代、中世から近世の遺跡である(京都府埋蔵文化財調査研究センター2014、2015)。下水主遺跡において2014年の発掘調査の際に見いだされた長さ33m、幅10～11mの溝とその堆積物を調べた結果、この溝は弥生時代の河川洪水の氾濫流が低地上を流れた流路跡、「氾濫流路」で、その後古墳時代までの堆積物で埋積されており、その一部は人の手が加わった堆積物であることがわかった。この報告では、これまでわが国では報告が少ない氾濫流路について木津川下流域のものを含めて紹介し、調査結果から判った堆積物の特徴と埋積様式について述べる。

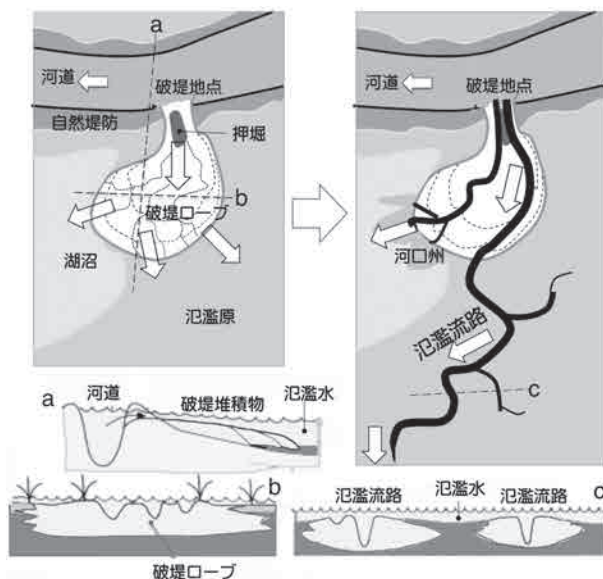
2. 氾濫流路

(1) 氾濫流路の堆積モデル

河川の増水によって河岸の堤防を越えて洪水流が溢れ出したり(越流)、時には堤防が決壊し(破堤)、そこから洪水流が氾濫原の低地に流れ出したりする(氾濫)。破堤した堤防の土砂は、破堤したすぐ近くの内水域に舌状の高まりをつくって堆積する(第2図)。この堆積地形を破堤ローブ(crevasse splay lobe)と呼ぶ。破堤地形の堆積モデルはPerez-Arlucea and Smith (1999) や Bristow et al. (1999) などによって示され、Bridge (2003) や Bridge and Demicco (2008) などの地形の教科書に紹介されている。これらのモデルは大陸の河川洪水による氾濫、すなわち氾濫が長時間継続する洪水を対象につくられているため、破堤地形の氾濫原側が水域として表示され、その水域に土砂がデルタ状に堆積するモデルにな



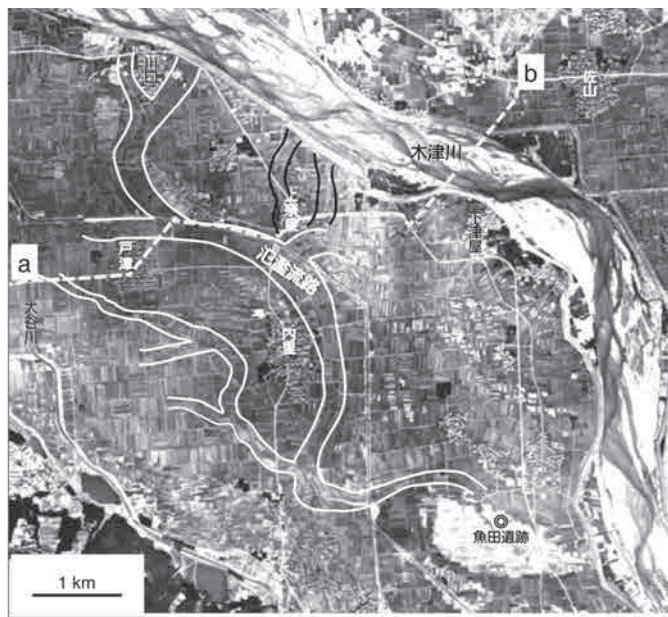
第1図 木津川下流域の流路際の微高地(白色部)と低地に残る氾濫流路跡(濃灰色曲線)と下水主遺跡の位置(丸印地点) 流路跡は、大矢・久保(1993)、辰巳(1996)、植村(1999)から作成。国土地理院発行2.5万分の1図幅に加筆。



第2図 破堤に伴って形成される地形発達モデル
破堤ロープや氾濫流路が特徴。Perez-Arlucea and Smith
(1999)を改変。断面図のスケールは平面図と一致しない。

(2) 木津川の氾濫流路

木津川は古くから氾濫が頻繁に起こる暴れ川として知られ、特に大きく屈曲する下水主遺跡のある付近ではその痕跡や記録が多い(水戸1990、大矢・久保1993、植村ほか2007、鈴木2008)。現在でも木津川では河道の屈曲部で土砂の堆積作用が著しく、破堤し易い状況にある(増田ほか2016)。江戸時代の破堤修築は、破堤した堤防の内水側に新しい堤防を鉤状や円弧状に構築する方法で行った(伊藤1994)。木津川をみると堤防が鉤状になって内水側に出っ張った修築箇所と思



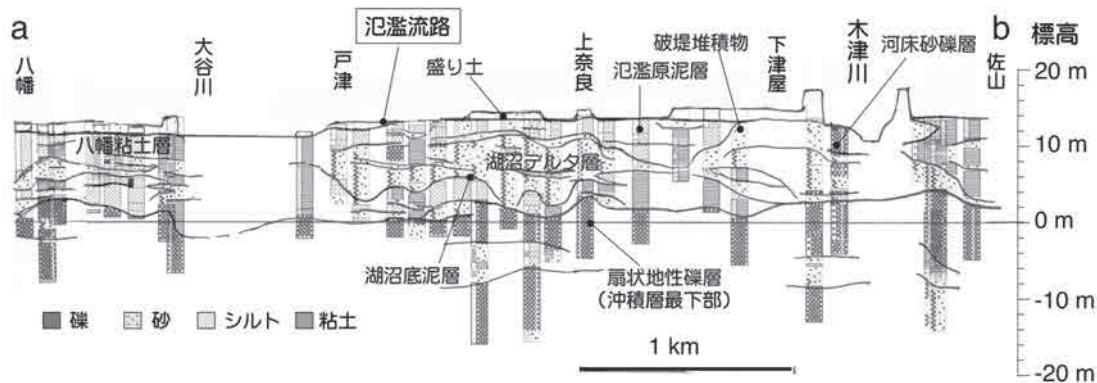
第3図 木津川下流左岸の破堤ロープと氾濫流路跡
1948年撮影の空中写真に加筆。破堤ロープ上には魚田遺跡がある。氾濫流路跡のトレース(白色曲線)。a-b(白色破線)は第4図の地質断面位置。

っている。わが国の場合、洪水氾濫流の流出は短時間に集中するので、氾濫時には氾濫原は冠水するものの短期間で水は引いてしまう。この場合、氾濫流はその一部に流れが集中して、そこが溝状に侵食して「氾濫流路」(crevasse channel)ができる。氾濫流路は蛇行や分岐して流れ、先細りになって消滅する(第2図)。氾濫流路にはその後、決壊箇所の堤防が再構築されるまで、増水のたびに繰り返し氾濫流が流れる。そして堤防の修復あるいは自然現象による破堤箇所での土砂堆積や流路の変更によって流路への氾濫が止まり、流路跡が低地に残される。

われるところがみられる(第1図)。

植村(2007)は木津川下流部には氾濫でできたと考えられる砂礫堆が複数認められることを示している(第1図、河道脇の白色部分)。その多くは破堤ロープだと思われる。また、東ほか(2009)は下水主遺跡のすぐ北西の微高地(第1図)を破堤地形として報告している。

1948年撮影の空中写真では、京田辺市大住の北方の木津川左岸の破堤部の修築と考えられる鉤状の堤防の内水側に、写真での反射率が高い(水はけが良い、砂礫や砂からなる)破堤ロープ地形が認められる(第3図)。この破堤ロープ上には魚田遺跡があり、その発掘調査



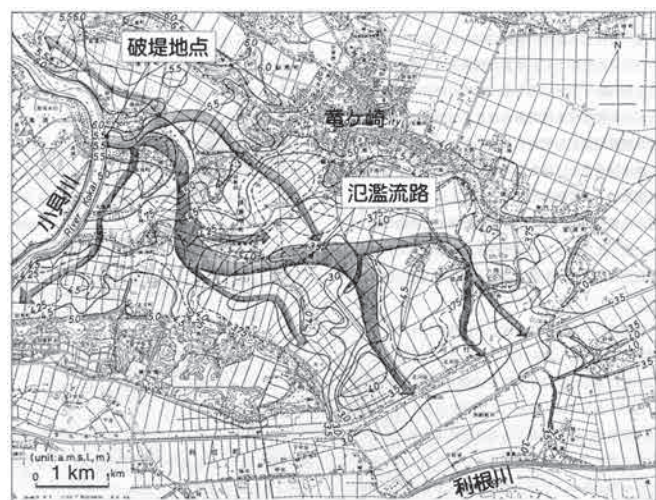
第4図 氾濫流路跡の地下表層地質断面図

断面位置は第3図のa-b(白色破線)に表示。木津川の地下には厚い砂礫層があるのに対し、氾濫流路の地下には氾濫原泥層が分布する。関西圏地盤情報データベースから作成。

では特徴的な破堤堆積物が報告された(増田ほか2008)。このロープ地形は大峰砂堆(植村2007)と呼ばれる。その形成時期について、大矢・久保(1993)は1860(万延元)年の“大住切レ”(巨椋池土地改良区1962)に、植村ほか(2007)は江戸時代後期かそれ以降、田辺町教育委員会(1997)は1896(明治29)年の大洪水でつくられたとしている。

この破堤ロープからは蛇行して北西流する流路跡が、条里割とは異なった水田の配置などから識別される(第1・3図)。この流路跡は地形分類や土地利用図では「旧河道」、すなわち昔に木津川がそこを流れていた痕跡とされている(辰巳1996、大矢・久保1993、植村1999)。この地域の地下地質を、地盤情報データベース(関西圏地盤情報ネットワーク・関西圏地盤情報協議会提供)を用いて調べると、旧河道とされた地下には泥層が分布し、現在の木津川の地下に分布する厚い砂礫層のようなものは見当たらない(第4図)。このことからこの流路跡は旧河道ではなく、洪水流がつくりだした氾濫流路だといえる(増田ほか2008、Ito et al., 2011)。この流路が木津川本流の痕跡でないことは、その蛇行波長が800～1000mと本流のそれより短いことからいえる。なぜなら、河川の蛇行波長はその洪水流量や平均流量と関係するので、この流路をつくった水量は本流の洪水流量よりも小さかったといえるからである。

ちなみに明治元年に付け替えられるまでの旧木津川の最下流部(第1図参照)の地下には砂礫が厚く分布し、逆に新しい河道の地下には砂礫が認められない。また、氾濫流路が発達した地下、標高3～10mにみられる断面がレンズ状で細長く屈曲して分布する砂礫層(第4図)は、中世以前の巨椋池が広く浅か



第5図 1981年茨城県小貝川の破堤に伴った氾濫流の主流路
田口・吉川(1983)による。第1図の木津川
下流域の流路跡にスケールや形態が似る。

った時期に発達した鳥趾状三角州の流路跡である(Ito and Masuda,2012)。

氾濫流がどのように流れるかは良く知られていない。田口・吉川(1983)は1981年8月に茨城県の小貝川が堤防決壊した際の氾濫流の主流を図示している(第5図)。その形態やスケールをみると、木津川の氾濫流路とよく似ていることがわかる。その特徴は、蛇行すること、流路が分岐すること、先細りして先端が不鮮明になる(浅くなる?)ことなどである。

3. 下水主遺跡の氾濫流路

(1) 流路形態

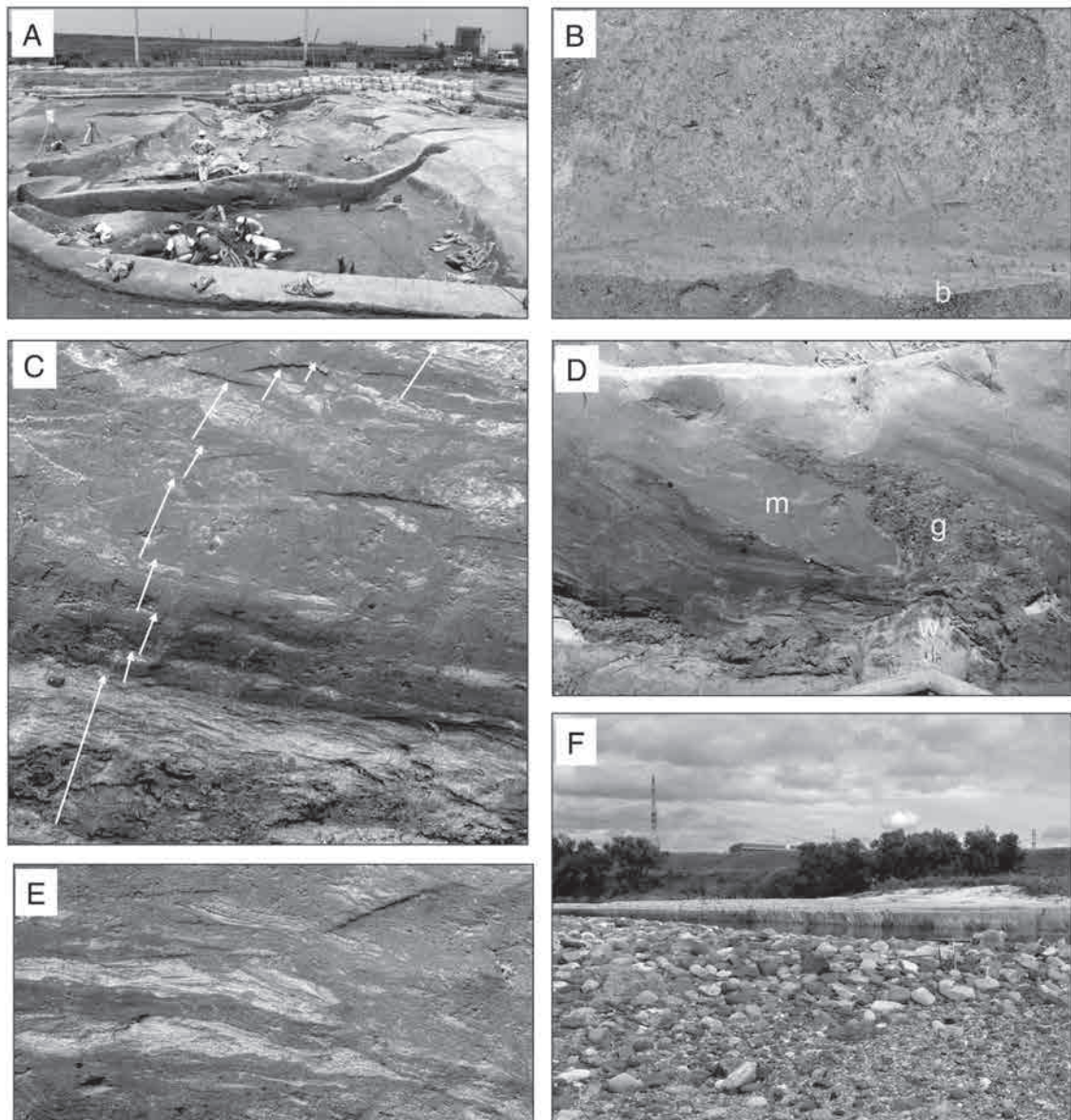
城陽市水主倉貝・宮馬場の下水主遺跡(第1図丸印地点)の第4・6次調査で見いだされた溝は、長さ33m、幅10～11m、溝底の幅5～5m、深さは約2mの舟底状を示す(第6図A)(京都府埋蔵文化財調査研究センター2014)。溝は東西に延び、西端は北北西から東端は南東へと北に凸の緩いカーブを描く流路である。埋積物の堆積構造(葉理構造)から推定したこの流路における流れの方向は、西から東である。すなわち、100m程すぐ西を流れる木津川に注ぎ込む支流河川の流路ではなく、木津川から東に流れでた氾濫流路と考えられるのである。従って、発掘地での流路は南側(右岸)が滑走斜面、北側(左岸)が攻撃斜面にあたる。

(2) 埋積様式

流路の南北断面(第6図Aの流路内に残された土層断面)(第7図A)で、その埋積層の構造をみると、埋積は南側から北側に順次、側方付加されている。この様式は河川の滑走斜面での堆積様式(増田1988)と同じである。すなわち、この流路の屈曲部ではその滑走斜面を覆うように堆積が行われていったことがわかる。

しかし、この堆積は一般的な河道のそれとは異なることが、その内部構造(地層境界のトレース)からわかる(第7図B・C)。氾濫原泥層を削剥した最初の破堤洪水流からの堆積層(第7図Cの1a層)には流木や粗粒砂や細礫が含まれており、この部分がいちばん粗粒となっている。そして上位に向かっては中粒砂層から極細粒砂層を含む泥質層になっている(第7図Cの1b層)。ここではこうした堆積ユニットがさらに2つ重なり(第7図Cの2a・2b層と3a・3b層)、どのユニットでも下部が粗粒になっていてそこに流木などが含まれる(第6図C)。このことは最初の破堤による洪水流で氾濫流路ができ、増水のたびに浮遊した砂が流れ込みそれが滑走斜面上で小さなうねり地形のカレント・リップルをつくり(第6図C・E)、その上を浮遊泥が覆って埋積していったことを示している。また、これらの各層は泥層の堆積から始まる上方粗粒化(逆グレーディング)層となっており(第6図B・C)、河川の洪水氾濫堆積物の特徴(増田・伊勢屋1985、増田1999、鈴木2000)を示している。

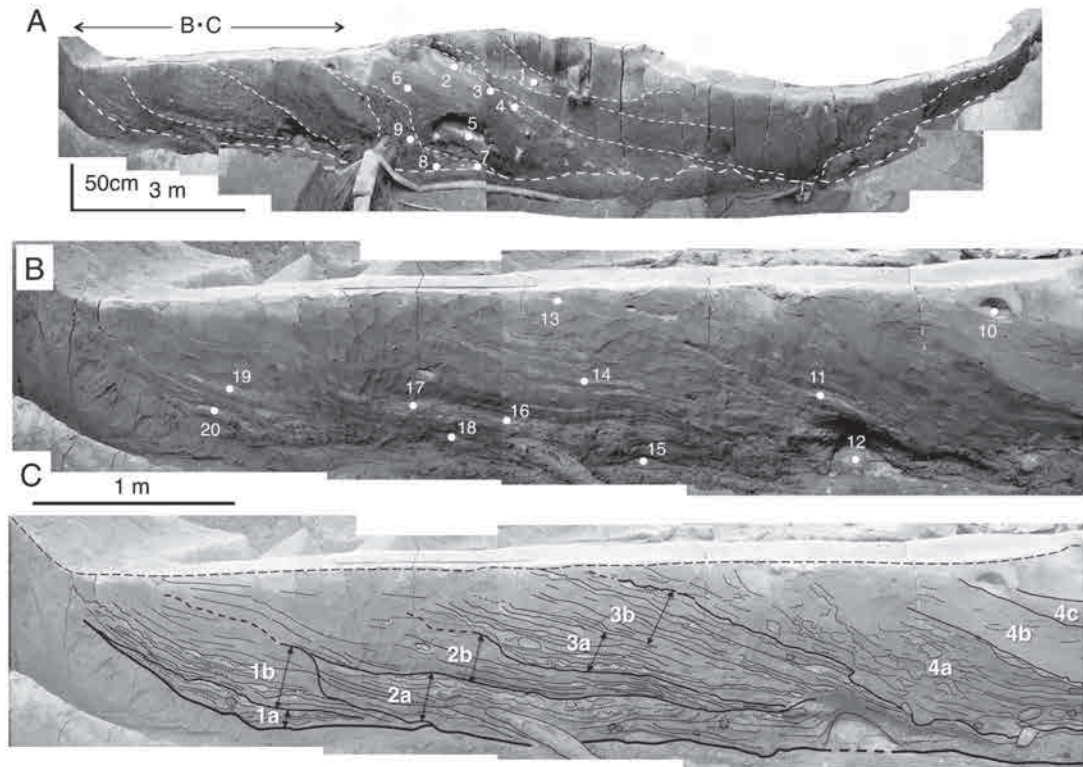
ところがこうした自然状態での堆積様式は途中(第7図Cの4層)から変化する。そこでは増水時に浮遊して自然堆積した逆グレーディングを示す砂層を含む(例えば、第7図Cの4a層下部や第7図Aの砂分析試料採取地点6付近)が、地層面が不自然に凸凹で、堆積物全体が攪乱されたり、突き固められたりしたような粘土層(第6図Dのm、第7図Cの4b層)や、流路底に護岸のため



第6図 下水主遺跡の流路と堆積物

A：見いだされた氾濫流路の様子。B：氾濫原泥層に挟む逆グレーディング構造を示す氾濫砂層。泥層にはアシの根跡（斑点）がみられる。写真の横幅は約55cm、C：上方粗粒化層の重なり（白矢印）からなる氾濫流路の埋積物。第7図の2aから2bの部分。写真の横幅は約70cm。D：人工改変が行われたと考えられる部分。mは突き固められた粘土層。gは折られた小枝が密集した層。wは護岸のため沈められた樹木。写真の横幅は約2.4m。E：カレント・リップル葉理細粒砂層。写真の横幅は45cm。F：下水主遺跡近く（京田辺の近鉄橋下流）の木津川本流部の砂礫堆。中礫を含む砂礫からなる。

に敷設されたと思われる樹木（第6図Dのw）や短い枝が密集した層（第6図Dのg）などがみられる。それらの樹木は護岸材として、枝を打ち払って流れに平行に沈めて置かれたり、枝や葉を盛り土下層に敷いたり（敷葉工法）したものと推定されている（京都府埋蔵文化財調査研究センター2018）。また、極端に凹凸した地層境界面の上に、基盤の氾濫原泥層がブロック状になって取り込まれ（例えば、第6図Aの攻撃斜面基部）、自然状態の堆積でないことがわかる。すなわち、この部分から北側の埋積後半の堆積物には人の手が加わっていると思われる。このことは流路の断面形（第7図A）をみてもわかる。南側の滑走斜面の堆積物の傾斜からすると、北側の攻撃斜面は



第7図 氾濫流路の自然堆積部分の構造

A: 氾濫流路の断面. 第6図Aの流路中央の断面. 縦・横スケールが異なることに注意. B・C: 自然堆積部分(AのB・C矢印範囲)のトレースと地層区分. A・B中の小さな数字(1~20)付の白丸は, 粒度分析試料の採取地点.

もっと急角度で非対称になるのが一般的である(増田・岡崎1983、増田・伊勢屋1985、増田1988)。しかし、この断面では攻撃斜面側が緩い傾斜で、全体が舟底型の対称的な形になっている。それは、人の手で護岸をして流路を河川への水路(舟だまりなど)として確保するため(?)、流路底を浚渫し流路の北側を拡幅した(流路幅を数m広げた)結果と想像できる。だが最後にはその流路も氾濫浮遊土砂(泥)で埋もれ、水路が保持できずに放棄したのであろう。流路の埋積物のほとんどが浮流物質からなる細粒物質であることから考えると、自然状態の氾濫流路ではその形は最初の大きな氾濫時にはほぼ出来上がり、流路の側方移動(蛇行の発達)はなかったと思われる。

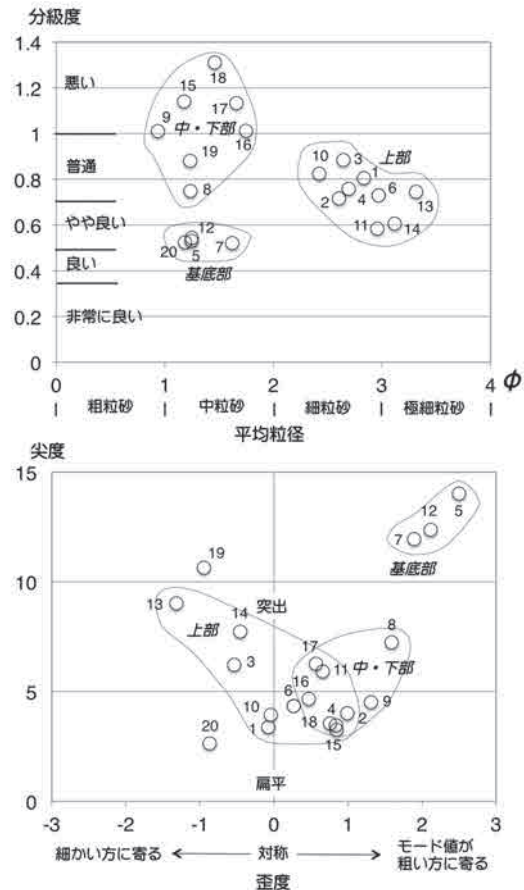
氾濫流路のみられる層準の上位には、厚さ1m程の泥層がみられる。その泥層には厚さ数cm以下の氾濫堆積物の逆グレーディング層(増田・伊勢屋1985)が水平に挟まれる。この氾濫原堆積物にはアシの茎や根の痕跡が残る(第6図B)。また堆積した氾濫砂を水田に戻す土地改良である“天地返し”の痕跡も認められる。この水平堆積した泥層は木津川の河道での土砂堆積に伴い人間が堤防をかさ上げし補強した結果、越流はするが破堤しにくくなり、氾濫原での厚い泥層の形成という堆積様式に変化した結果である。木津川の河床上昇に伴う堤防のかさ上げは、江戸時代前期以降、活発に行われた(増田2007)。その結果、破堤を特徴としていた氾濫様式が変化し、いったん破堤すると、木津川下流左岸の氾濫原にみられるような大規模な破堤と氾濫流路形成という現象になったのである。弥生時代の頃の木津川は堤防も江戸時代以降ほど高くなかったといえるので、破堤や氾濫の頻度は多く、小さな増水でも氾濫したと思われる。

今回調査した氾濫流路の堆積物や遺物の年代(京都府埋蔵文化財調査研究センター2018)から推定すると、弥生時代中期後半に発生した洪水破堤でつくられたこの氾濫流路は、増水のたびに埋積されていき、次第に木津川に繋がる水路として確保するのが厳しくなり、弥生時代中期末には人の手で護岸や拡幅が行われたが、古墳時代初頭には埋積し放棄されてしまったといえる。このことは、この木津川地域では自然状態ならば、この規模の氾濫流路は数100年以下で埋積してしまうことを示している。ちなみに、下水主遺跡の今回の調査地域の約600m北方の調査地(第1図のN地点)で見いだされた縄文時代の氾濫流路(京都府埋蔵文化財調査研究センター2015)では、幅約30m、深さ3m程の大きな蛇行した流路が700年程度で埋積されており、氾濫流路の埋積は意外と速いことがわかる。

(3) 堆積物の粒度特性

この流路が破堤による氾濫流でつくられたことは、堆積物からもいえる。発掘地点付近の木津川は砂礫堆が発達し(第6図F)、河床物質は中礫を含む砂礫で、その平均粒径 $-4.5 \sim -3.5\phi$ ($2 \sim 3\text{cm}$)である。それに対してこの流路では、泥が卓越し、粗粒堆積物としては、基底にまれに細礫が散在するが、ほとんどが中粒砂(平均粒径 0.5mm 以下)で、埋積物の上部はさらに小さい細粒から極細粒砂(平均粒径 $0.2 \sim 0.1\text{mm}$)しか見いだすことができない(第8図)。すなわち、流路底堆積物を含めて全体が泥質細粒物質からなる埋積物であるということから考えても、この流路は河道跡ではないことがわかる。しかも、流路底の砂は分級度が小さく粒径が良く揃い、モード値が粗い方に寄って尖度が大きい特徴的な粒度特性を示す砂である(第8図)。これは本流での掃流運搬されたものではなく、破堤に伴ったある程度の強さの流れで浮流した砂から沈積したものと説明できる。滑走斜面でカレント・リップル葉理を構成する砂は、浮遊から沈積しそこで掃流運搬された、と考えられる分級度がやや悪く、やや粗い方にモード値が寄る砂分布を示し(第8図の中下部)、洪水時にイベント的に運ばれたことを示している。

これまでに述べてきたような氾濫流路の埋積様式やその堆積物は、河川の三日月湖などの放棄流路の埋積(増田・伊勢屋1985、増田1988)に似ている。しかし決定的に違うのは、流路底に残留



第8図 氾濫流路の堆積物の粒度特性

平均粒径、分級度、歪度、尖度の表示は、沈降型自動粒度分析の結果から、Fork and Ward (1957)の方法で求めた粒度特性値。数字(1~20)のサンプル採取位置は第7図に表示。埋積層の基底部、中下部、上部で粒度特性に違いが認められる。

するラグ堆積物の砂礫層の存在の有無である。放棄流路の場合は、放棄される以前はその流路が本流の河道であったということ、氾濫流路の場合は破堤によって氾濫原上に氾濫流が流れてつくられたため、流路底に河床(砂礫堆)を構成するような粗粒物質が見られないということである。

4. おわりに

京都府南部の木津川河畔低地にある下水主遺跡の発掘調査で見いだされた溝は、わが国ではほとんど報告例がない河川の「氾濫流路」跡である。ここではその堆積物や埋積様式について報告した。氾濫流路は蛇行し、分岐し、先端は細く浅くなって消滅すること、蛇行流路では、初期には側方付加によって上方粗粒化(逆グレーディング)層の洪水堆積物が増水のたびに累積し、次第に細粒化して埋積され、蛇行の側方成長はなかったこと、氾濫流路の基底にはかつての粗粒な河床物質(ラグ堆積物)が認められないことなどが特徴である。また、幅10m程度の氾濫流路は数100年という比較的短い時間に埋積されてしまうことがわかった。

こうした氾濫流路はわが国の河川には多くみられることが期待される。それは自然堤防が発達した下流域の河川ではなく、急激な増水と大きな土砂流出して氾濫が発生する中流域の河川に多いと思われる。これまで旧河道として扱われてきた各地の流路跡を再検討する必要があるだろう。

謝辞

表層地質の解析に用いた地盤情報データベースの利用許可を頂いた関西圏地盤情報データベース運営機構に謝意を表します。

引用文献

- 東 良慶・関口秀雄・釜井俊孝(2009)埋没水害地形の同定：非破壊物理探査法の適用。土木学会論文集, B, 65(2), 141-150.
- Bristow, C.S., Skelly, R.L. and Ethridge, F.G. (1999) Crevasse splays from the rapidly aggrading, sand bed, braided Niobrara River, Nebraska: effect of base-level rise. *Sedimentology*, 46, 1029-1047.
- Bridge, J.S. (2003) *Rivers and Floodplains*. Blackwell Publishing, 491p.
- Bridge, J.S. and Demicco, R.V. (2008) *Earth Surface Processes, Landforms and Sediment Deposits*. Cambridge University Press, 815p.
- Fork, R.L. and Ward, W., 1957, Brazos river bar: a study in the significance of grain size parameters. *Journal of Sedimentary Petrology*, 31, 514-529.
- 伊藤安男(1994)治水思想の風土—近世から現代へ。古今書院, 336 p.
- Ito, Y. and Masuda, F. (2012) Reconstruction of the lacustrine delta and lake level change analyzing subsurface geology and geomorphology: changes that occurred during the Holocene in the Oguraike reclaimed land area, southern Kyoto, Japan. *Open Journal of Geomorphology*, 2, 203-211.
- Ito, Y., Masuda, F. and Oguchi, T. (2011) Crevasse splays and channels in the lower reaches of the Kizu River, Southern Kyoto, Central Japan. *Transactions, Japanese Geomorphological Union*, 32-2, 172-178.

- 京都府埋蔵文化財調査研究センター(2014)下水主遺跡現地説明会資料, 2p.
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター(2015)下水主遺跡第8次調査現地説明会資料, 2p.
- 京都府埋蔵文化財調査研究センター(2018)本報告書, 50-88.
- 増田富士雄・岡崎浩子(1983)筑波台地およびその周辺台地の第四系中にみられる方向を示す構造. 筑波の環境研究, 7C, 99-110.
- 増田富士雄・伊勢屋ふじこ(1985)“逆グレーディング構造”: 自然堤防帯における氾濫原洪水堆積物の示相堆積構造. 堆積学研究会報, 22/23, 108-116.
- 増田富士雄(1988)ダイナミック地層学—古東京湾域の堆積相解析から—「その1基礎編」. 応用地質, 29(4), 312-321.
- 増田富士雄(1999)透水層・滞水層のトレース: ダイナミック地層学からのアプローチ. 地下水技術, 41(10), 1-15.
- 増田富士雄(2007)昔の人が作った「天井川」を今の人が「廃川」にするまで. 人と水(連携研究「人と水」研究連絡誌), 4, 11-14.
- 増田富士雄, 藤原 暁, 村上純子, 福本有里子, 坂本隆彦(2016)京都府南部, 木津川下流～中流域における1965年から2008年の河床高変動. 同志社大学ハリス理化学研究報告, 56(4), 213-222.
- 増田富士雄, 伊勢屋ふじこ(1985)“逆グレーディング構造”: 自然堤防帯における氾濫原洪水堆積物の示相堆積構造. 堆積学研究会報, 22/23, 108-116.
- 増田富士雄, 伊藤有加, 坂本隆彦, 佐藤智之(2008)京都府京田辺市魚田遺跡付近の地形と洪水破堤堆積物. 京都府遺跡調査報告集, 133-5, 京都府埋蔵文化財調査研究センター.
- 水戸政満(1990)近世木津川水害と年貢収納—川底の上昇による水害の深刻化. 立命館文学, 518, 197-253.
- 巨椋池土地改良区(1962)巨椋池干拓誌. 巨椋池土地改良区, 828p.
- 大矢雅彦, 久保純子(1993)淀川水害地形分類図・説明書. 淀川工事事務所, 130p.
- Perez-Arlucea, M. and Smith, N.D. (1999) Deposition patterns following the 1870' s avulsion of the Saskatchewan River (Cumberland Marshes, Saskatchewan). Journal Sedimentary Research, 69, 62-73.
- 鈴木一久(2000)洪水氾濫の堆積学. 地団研専報(地学団体研究会), 48, 69p.
- 鈴木一久(2008)近世における山城地域の水害. 近畿大学教職教育部紀要, 20(1), 37-58.
- 田口雄作, 吉川清志(1983)小貝川破堤(1981年8月)による浸水流の挙動について. 地理学評論, 56(11), 769-779.
- 田辺町教育委員会(1997)京都府田辺町魚田遺跡第1次・第2次発掘調査概報—大住地区は場整備事業地内の調査 その1. 田辺町埋蔵文化財調査報告書, 22, 1-11.
- 辰巳 勝(1996)木津川下流平野の地形環境と水害. 京都地域研究, 11, 95-109.
- 植村善博(1999)京都の地震環境. ナカニシヤ出版, 118p.
- 植村善博(2007)京都盆地南部における堤内池沼の地形的・防災的意義. 歴史都市防災論文集, 1, 67-74.
- 植村善博・小林善仁・木村大輔・進藤美奈・山中健太・浅子里絵・杉山純平・三宅智志・山下博史(2007)木津川・宇治川低地の地形と過去400年間の水害史. 京都歴史災害研究, 7, 1-24.

付編 2 酸素同位体比年輪年代測定

中塚 武・李 貞・對馬あかね・佐野雅規(総合地球環境学研究所)

は じ め に

下水主遺跡の弥生・古墳時代の地層からは、広葉樹と針葉樹のさまざまな樹種からなる大量の木材が出土しており、それらの木材の年輪年代を、新しく開発された酸素同位体比年輪年代法(中塚2015)を使って、1つ1つ決定することができれば、当該遺跡の構築年代やその継続期間を総合的に明らかにしていく上で、極めて重要な情報が得られる可能性がある。酸素同位体比年輪年代法とは、例えば近畿地方から中部地方といった広域の地域内において、木材の年輪に含まれるセルロースの酸素同位体比が、当該地域内の夏の降水量(正確には相対湿度と降水の酸素同位体比という2つの気象学的因子)の経年変動を反映して、樹木の種類や個体の違いに関わらず、極めて良く似た経年変動パターンを示すことを基本原理とする、新しい年輪年代法である。この方法を使えば、例えば京都府の樹齢数十年の広葉樹材の年輪酸素同位体比の経年変動パターンを、年輪年代が既に分かっている長野県の樹齢の長い針葉樹材から得られた年輪酸素同位体比の経年変動パターンと比べることで、その年輪年代を決定することができる。実際、近畿地方から中部地方では、ヒノキやコウヤマキなどの針葉樹の現生木及び埋没木を使って、過去2千数百年間に亘って、既に年輪酸素同位体比の標準変動曲線が作られてきており、京都府の下水主遺跡における出土木材の年輪年代の決定に利用できる状況が整っていた。

第1項 分析に供した木材資料と分析の方法

年輪セルロース酸素同位体比の分析に供した出土材は、「護岸材」と認定された大径木4点と、「護岸材以外」の木材12点である。表1に、分析に供した資料の発掘状況などの情報の一覧を示す。木材は全て円盤の形で提供された。「護岸材以外」の12点の中で、樹皮や樹皮直下の年層が確認できたものについては、中心から樹皮直下の年層までを分析に供し、確認できなかったものについては、年輪の形状からみて最も外側に位置すると判断できる年層までを分析の対象とした。「護岸材」の4点については、大径木であり円盤断面の研磨ができなかったので、年輪の形状が全体的に不明瞭であった。それゆえ、「中心」と「中心からの距離が一番離れている外周部」を結ぶ線上の年輪を全て分析の対象とした。「護岸材」の中で、最終的に認定できた年層の中には、樹皮もしくは樹皮直下の年層は含まれていなかったが、年輪円盤の形状がほぼ円形に近かったこと、及び、計数できた総年輪数がそれぞれ百年程度であったことを考慮すると、護岸材の分析最外年層から実際の樹皮までの間に、数十年以上の時間の間隙はないものと推定できる。

各年輪円盤からは、中心から外周までを含む短冊状のブロックを鋸で切り出したあと、各ブロックから木口面(木材繊維の方向に直角な面)に平行な厚さ1mmの木材薄板を切り出し、年輪の

表1 酸素同位体比年輪年代分析に供した下水主遺跡の出土材のリスト

資料名	字数	地区割	形状	SD22 小区	SD22 内 遺構・層位	樹種分析	酸素同位体比測定 資料の所見
護岸材 A	6次	k9 k8	残存長 4.7m 最大径 19cm (芯持材)	1区	護岸材	ムクロジ (落葉広葉樹)	樹皮直下ではない
護岸材 B	6次	k8 k7	残存長 5.45m 最大径 33cm (芯持材)	2区	護岸材	カエデ属 (落葉広葉樹)	樹皮とは違う？ 複雑に捻れている
護岸材 E	6次	m5 m4	残存長 5.6 m 35cm (芯持材)	3区・4区	護岸材 (原位置)	エノキ属 (落葉広葉樹)	最外部は年輪と斜 交、最外年輪は別 にある？
護岸材 F	6次	n4	残存長 2.3 m ※図径 20cm (芯持丸木)	4区	護岸材	(落葉広葉樹)	ほぼ樹皮直下
①	6次	—		3区	SW62 A		樹皮付き
②	6次	—		3区	SW62 B		樹皮直下
③	6次	—		3区	SW62		樹皮直下
④	6次	—		3区	SW62 C	能代 SMZ-464	樹皮近く
⑤	6次	—		3区	SW62		樹皮遠い？
⑥	6次	k6		3区	SX56		樹皮直下
⑦	6次	l6 g6		3区	上層		樹皮直下
⑧	6次	m4		4区	SW61 Ⅵ層①	能代 SMZ-436	樹皮付き
⑩	6次	m4		4区	SW61		樹皮直下
⑪	6次	m4		4区	※ SX51 下層 SD22 4区Ⅵ層	能代 SMZ-341	樹皮近く
⑫	6次	m4		4区	SX51 Ⅳ層下層		樹皮近い？
⑬	6次	n4		4区			樹皮遠い？

形状を確認するため、まず木材薄板の画像を取得した。そのあと、Kagawa et al. (2015)の方法で、亜塩素酸ナトリウム溶液による「リグニンの分解」と水酸化ナトリウム溶液による「ヘミセルロースとリグニン分解物の除去」を行った後、セルロースだけとなった薄板を中和してから、凍結乾燥によって薄板の水分を除去した。その後、再びセルロース薄板の画像を取得して、年輪の形状を再確認し、精密カッターナイフを用いて顕微鏡下で、セルロースだけとなった年層をそれぞれ100–300 μ g になるように1年輪ずつ切り出し、銀箔に包んで、酸素同位体比測定用の試料とした。化学処理の前後で取得した各木材資料の画像を、図1～16に示す。銀箔に包まれたセルロースの酸素同位体比は、サーモフィッシャーサイエンティフィック社の熱分解元素分析計と同位体比質量分析計のオンライン装置(TCEA/Delta V)を用いて測定した。各サンプルの酸素同位体比($^{18}\text{O}/^{16}\text{O}_{\text{SAMPLE}}$)は、国際標準物質であるIAEAのVSMOW (Vienna Standard Mean Ocean Water)の酸素同位体比($^{18}\text{O}/^{16}\text{O}_{\text{VSMOW}}$)に対する千分偏差の形で、以下のように表す。

$$\delta^{18}\text{O} = [(^{18}\text{O}/^{16}\text{O})_{\text{SAMPLE}} / (^{18}\text{O}/^{16}\text{O})_{\text{VSMOW}} - 1] \times 1000 (\text{‰})$$

第2項 年代決定のためのデータ解析

年輪セルロースの酸素同位体比から、年輪年代を決定するためには、その経年変動パターンを年代があらかじめ正確に分かっている年輪酸素同位体比の標準変動曲線(マスタークロノロジー)と比較して、両者が一致する年代を見つける必要がある。具体的には、対象資料の年輪酸素同位体比の変動パターンをマスタークロノロジーの上に重ね、前者を後者の上で1年ずつずらしながら、両者の一致度を相関係数と言う形で計算していく「移動相関解析」と言う方法をとる。両者が一致しているかどうかの判定は、照合年輪数(n)と相関係数(r)から計算される統計量である t

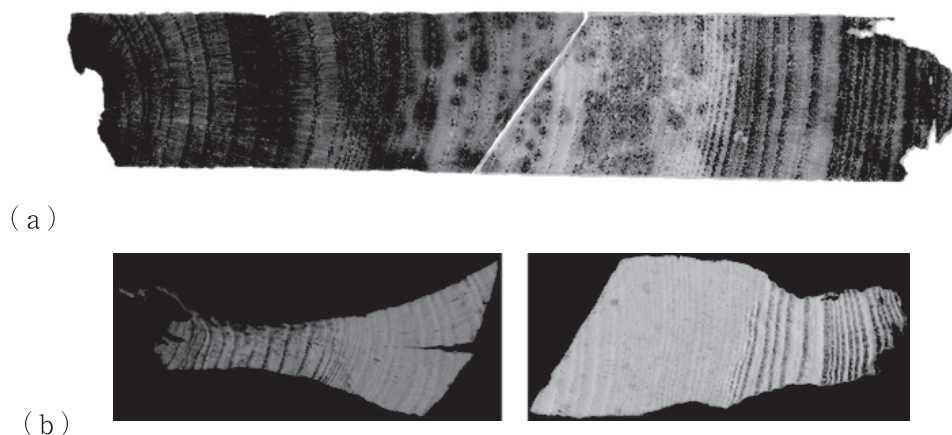


図1 護岸材Aの木材薄板 (a) とセルロース板 (b)
資料が大きかったので、2つに分けて処理

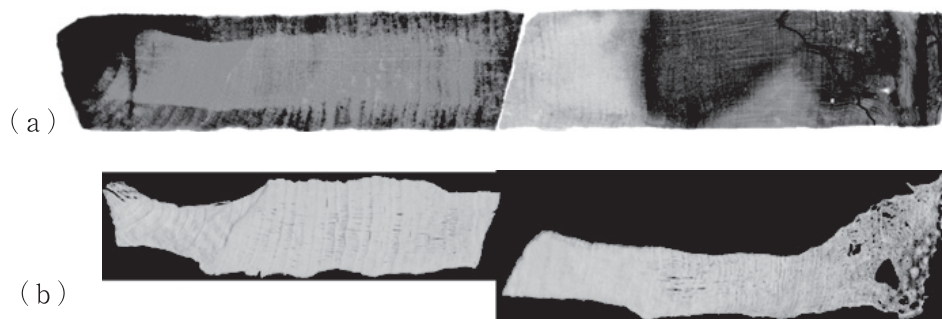


図2 護岸材Bの木材薄板 (a) とセルロース板 (b)
資料が大きかったので、2つに分けて処理

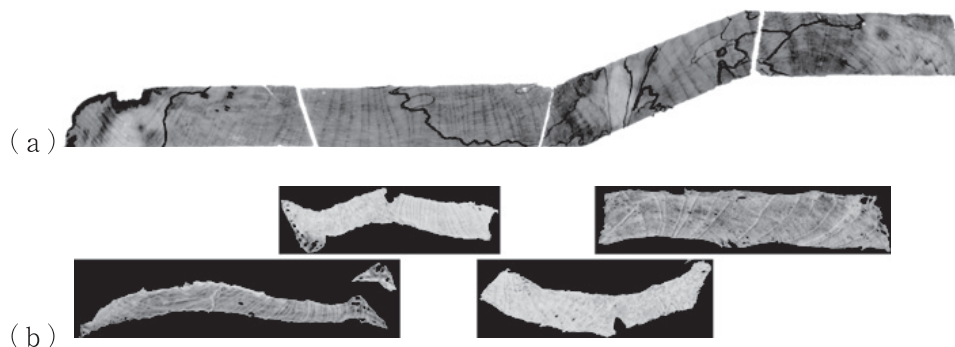


図3 護岸材Eの木材薄板 (a) とセルロース板 (b)
資料が大きかったので、4つに分けて処

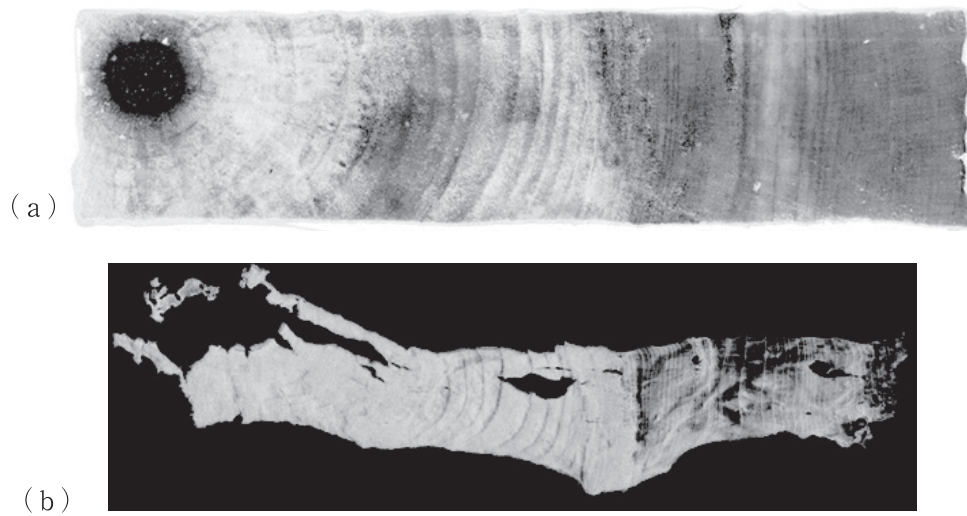


図4 護岸材Fの木材薄板(a)とセルロース板(b)

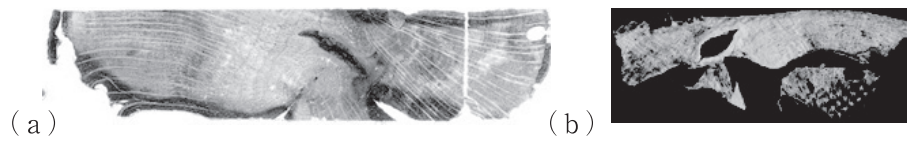


図5 護岸材以外①の木材薄板(a)とセルロース板(b)

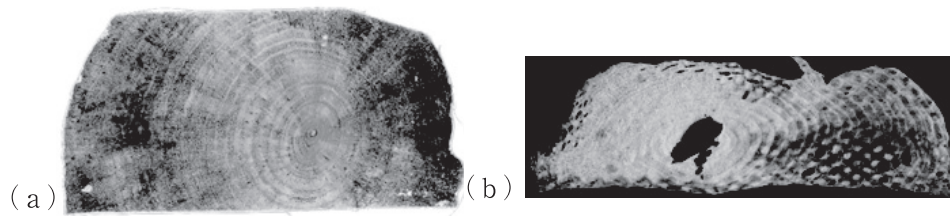


図6 護岸材以外②の木材薄板(a)とセルロース板(b)

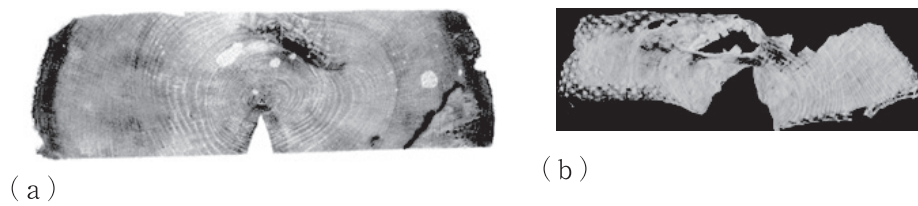


図7 護岸材以外③の木材薄板(a)とセルロース板(b)

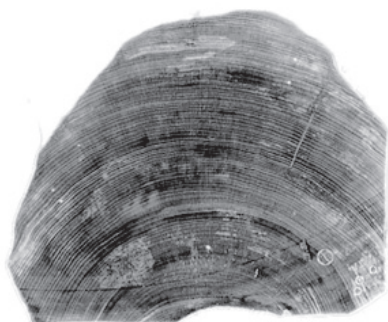


(a)

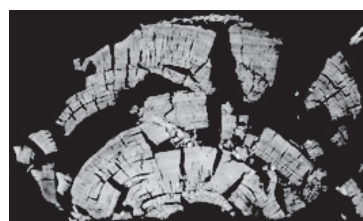


(b)

図8 護岸材以外④の木材薄板 (a) とセルローズ板 (b)

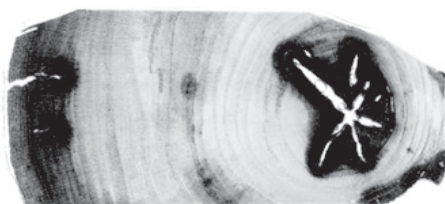


(a)

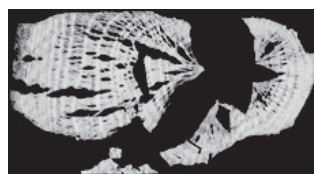


(b)

図9 護岸材以外⑤の木材薄板 (a) とセルローズ板 (b)

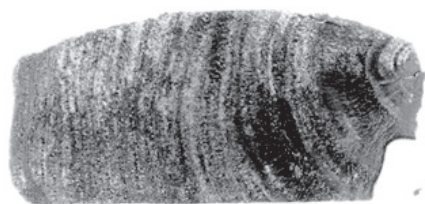


(a)

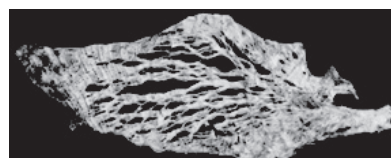


(b)

図10 護岸材以外⑥の木材薄板 (a) とセルローズ板 (b)

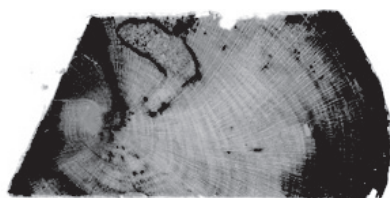


(a)

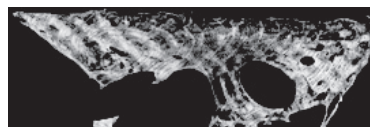


(b)

図11 護岸材以外⑦の木材薄板 (a) とセルローズ板 (b)

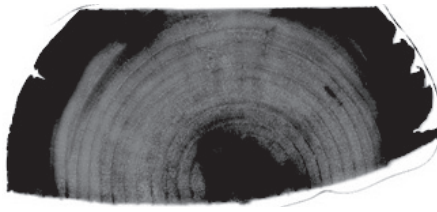


(a)

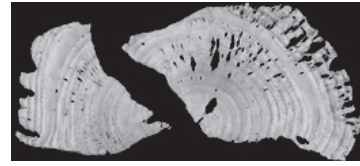


(b)

図12 護岸材以外⑧の木材薄板 (a) とセルローズ板 (b)

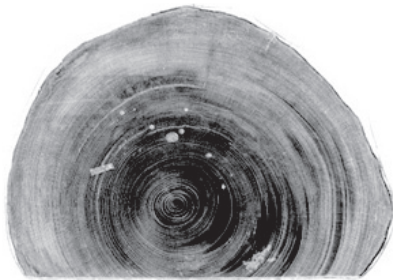


(a)



(b)

図13 護岸材以外⑩の木材薄板 (a) とセルローズ板 (b)

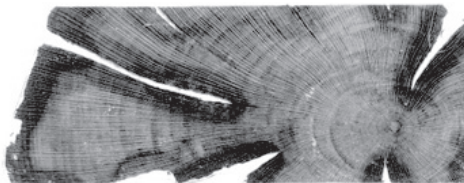


(a)

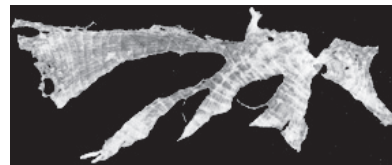


(b)

図14 護岸材以外⑪の木材薄板 (a) とセルローズ板 (b)

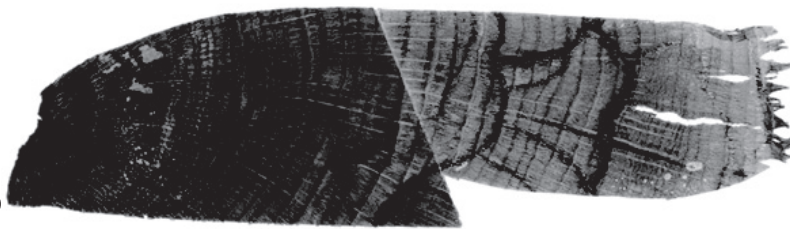


(a)



(b)

図15 護岸材以外⑫の木材薄板 (a) とセルローズ板 (b)



(a)



(b)

図16 護岸材以外⑬の木材薄板 (a) とセルローズ板 (b)
資料は、2つに分けて処理

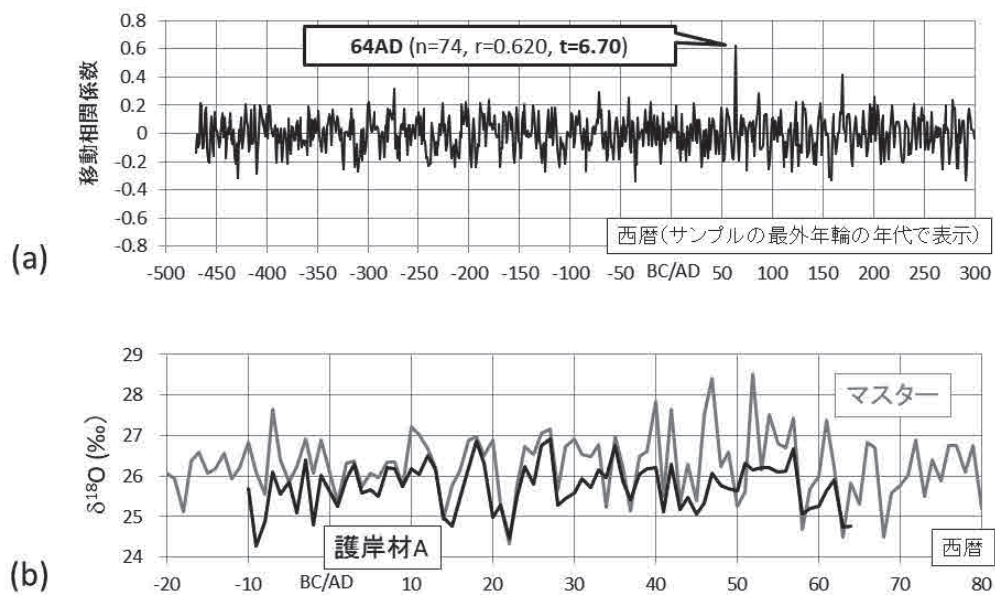


図17 護岸材Aとマスターの移動相関(a)と一致年代での両者の変動パターン(b)

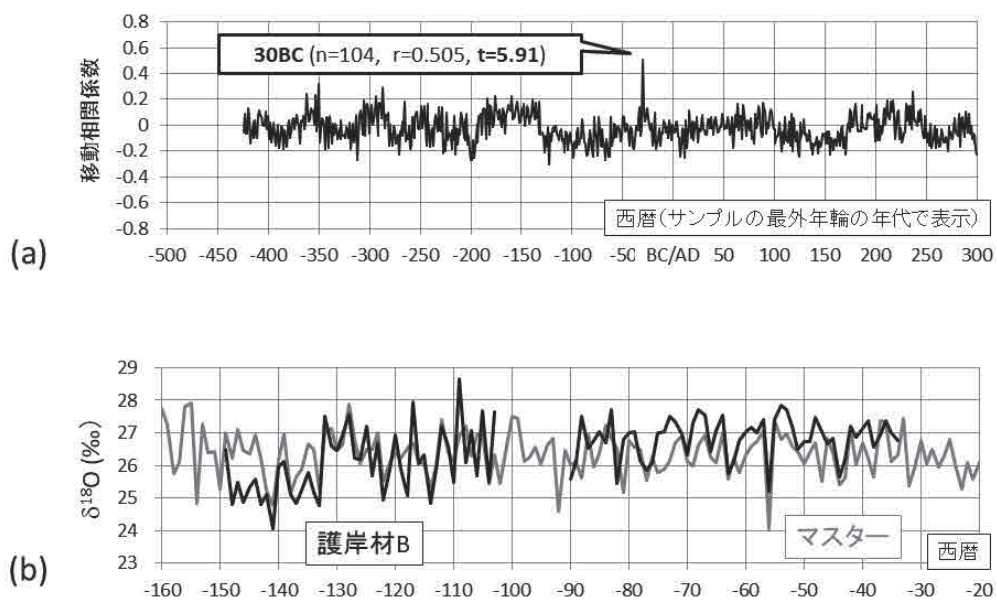


図18 護岸材Bとマスターの移動相関(a)と一致年代での両者の変動パターン(b)

値が5を越えているかどうかを基準とし、まとめの表2に示すように、護岸材のうち3点、護岸材以外の木材のうち2点が、その基準をクリアした。図17～21にそれら5点についての移動相関解析の結果、及び一致年代におけるマスタークロノロジーとサンプルの年輪酸素同位体比の変動パターンを重ねて表示する。尚、マスタークロノロジーには、これまで近畿・中部の広域から得

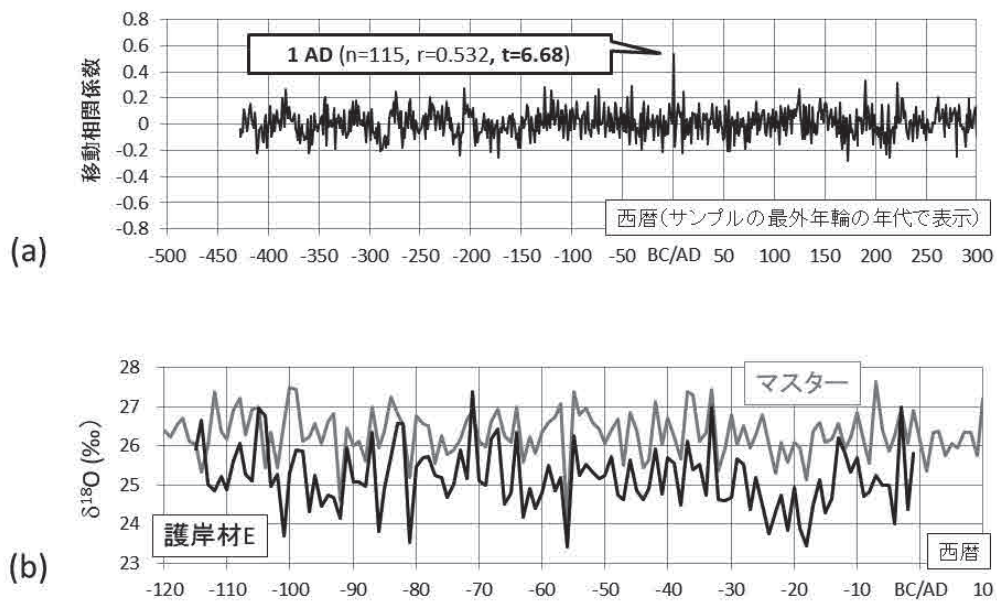


図19 護岸材Fとマスターの移動相関(a)と一致年代での両者の変動パターン(b)

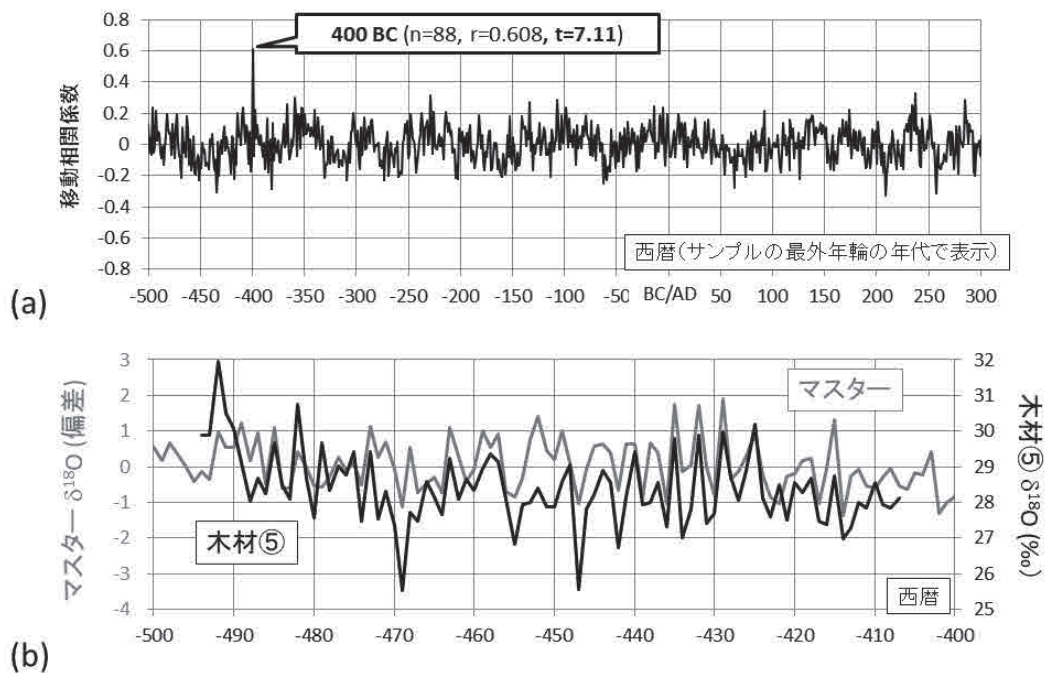


図20 護岸材以外⑤とマスターの移動相関(a)と一致年代での両者の変動パターン(b)

られている針葉樹のデータを統合したものをを用い、各図(a)の年代には、マスタークロノロジーの上にサンプルのデータを重ね合わせた状態でのサンプルの最外年輪の年代の位置を表示した。これら5点以外の木材資料は、(1)年輪数(n)が少なく、相関係数が最も高くなる年代における相対的に高い相関係数(r)が、偶然の一致ではないことが統計的に確認できなかった、(2)年輪

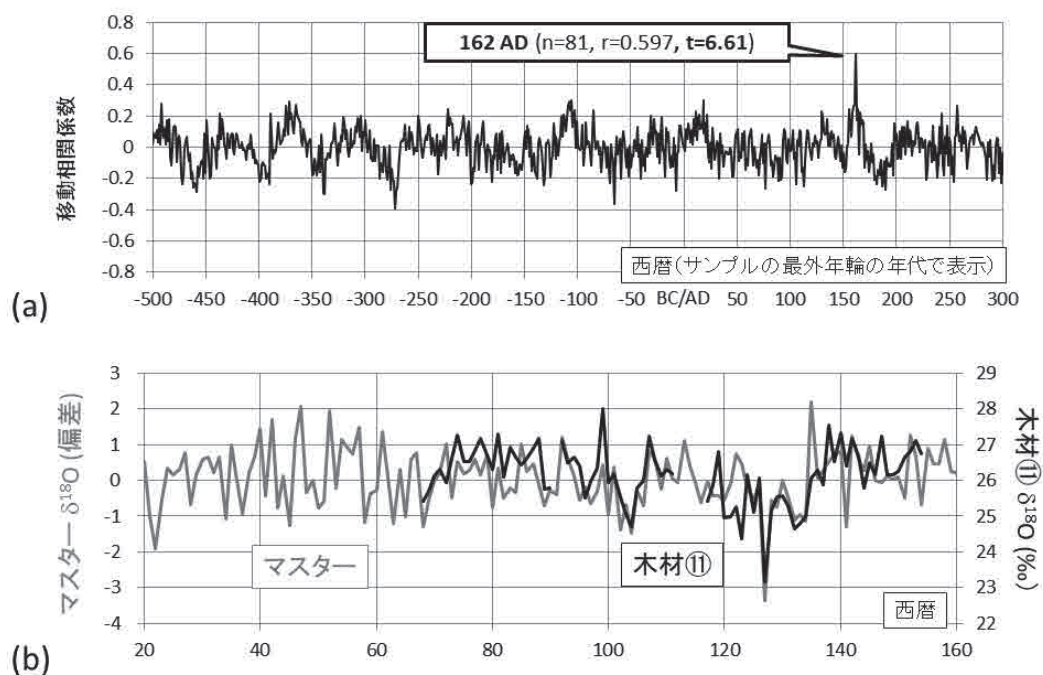


図21 護岸材以外⑪とマスターの移動相関(a)と一致年代での両者の変動パターン(b)

数(n)は多いものの、年輪の認定が難しく、誤った年輪認定をしてしまったため、真の年代における相関係数(r)が低くなってしまった、のいずれかの理由から、今回は年代決定には至らなかったものと考えられる。

図18において、一致年代における最外年輪の年代30BC (a)と、資料データの最新の年代34BC (b)が異なるのは、最外年輪付近の資料の状態が悪く、年輪セルロースが取得できなかったからであるが、その年輪の存在自体は確認できている。以下の図19～21でも、同様である。

表2. 下水主遺跡の出土材の酸素同位体比年輪年代決定の結果のまとめ(斜体は参考データ)

資料名	マスタークロノロジーとの相関係数が最大になる年代(最外年輪の年代)	最大相関係数	測定した年輪数	t 値
護岸材 A	64 AD	0.620	74	6.70
護岸材 B	30 BC	0.505	104	5.91
護岸材 E	1 AD	0.532	115	6.68
護岸材 F	-	-	-	-
①	<i>66 BC</i>	<i>0.622</i>	<i>29</i>	<i>4.13</i>
②	<i>32 AD</i>	<i>0.647</i>	<i>25</i>	<i>4.07</i>
③	<i>171 BC</i>	<i>0.721</i>	<i>25</i>	<i>4.99</i>
④	-	-	-	-
⑤	400 BC	0.608	88	7.11
⑥	-	-	-	-
⑦	-	-	-	-
⑧	<i>200 AD</i>	<i>0.609</i>	<i>34</i>	<i>4.34</i>
⑩	<i>204 BC</i>	<i>0.700</i>	<i>20</i>	<i>4.16</i>
⑪	162 AD	0.597	81	6.61

ま と め

酸素同位体比年輪年代法で、今回年代が決まった(マスタークロノロジーとの対比において、 t 値が5を越えた)のは分析した17点中、5点に留まったが、表2には移動相関係数(r)の最大値の年代において、 t 値が4を越えた資料の情報も参考までに表示した。酸素同位体比年輪年代法は未だ発展途上の年代決定法であるが、表2の護岸材Eと木材⑪については、 ^{14}C ウィグルマッチング法によっても年代が測定され、それぞれ54BC~10AD、89~135AD(2σ)の年代が得られている。この年代値は、護岸材Eの酸素同位体比年代(1 AD)と完全に一致し、木材⑪の酸素同位体比年代(162AD)とも1~2世紀の日本における放射性炭素年代の特殊性(国際標準の ^{14}C 較正曲線を用いると年代が50年程度古く出てしまう)を考慮すると、やはり完全に一致する。酸素同位体比年輪年代法は、年単位の年輪年代が計算できることはもちろん、 ^{14}C 較正曲線の未確定な状況なども考え合わせると、木材年輪年代の決定法として ^{14}C ウィグルマッチング法と比べて、文字通り、勝るとも劣らない方法であることが、確認された。

参考文献

- 中塚 武(2015)：酸素同位体比がもたらす新しい考古学研究の可能性. 考古学研究, 62, 17-30.
- Akira Kagawa, Masaki Sano, Takeshi Nakatsuka, Tsutomu Ikeda and Satoshi Kubo (2015) : An optimized method for stable isotope analysis of tree rings by extracting cellulose directly from cross-sectional laths, Chemical Geology, 393?394, 16?25.

付編 3 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹

小林紘一・Zaur Lomtadze・小林克也

1. はじめに

京都府城陽市の下水主遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

年代測定は、ウィグルマッチングを行った試料が2点、単体の放射性炭素年代測定を行った試料が6点の、計8点である。いずれもS D22から出土している。

ウィグルマッチングでは、護岸材E（試料No.1）の樹種はエノキ属、年輪数は116年で、最終形成年輪は残っていなかった。年代測定は外側から1～5年輪目（PLD-34405）、外側から56～60年輪目（PLD-34406）、外側から111～115年輪目（PLD-34407）の3か所について行った。

また遺物No.①の生材（試料No.2）の年輪数は144年で、最終形成年輪は残っていなかったが辺材部が残っていた。年代測定は外側から1～5年輪目（PLD-34408）、66～70年輪目（PLD-34409）、136～140年輪目（PLD-34410）の3か所について行った。

単体の放射性炭素年代測定は、護岸材背後（南）下層から出土した生の葉（試料No.3：PLD-34344）、断面3護岸材直上から出土した生の種実（試料No.4：PLD-34345）、断面3から出土した生材（試料No.5：PLD-34656）、S X62断割東壁南部上層から出土した生材（試料No.6：PLD-34657）、護岸材B（試料No.7：PLD-346578）、4区VI下層から出土した壺胴部外面付着炭化物（試料No.8：PLD-34659）の6点である。なお、試料No.7の樹種はカエデ属であった。生材である試料No.5と6は、最終形成年輪が残っていたが、試料No.7では最終形成年輪が残っていなかった。

年代については、試料No.1・2・7では酸素同位体比測定も行われており、試料No.1の最外年輪はAD1年、試料No.2の最外年輪はAD162年、試料No.7の最外年輪はBC30年を示している（酸素同位体比測定の項参照）。

測定試料の情報、調製データは表1・2のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 15S DH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3. 結果

表3・4に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、ウィグルマッチング結果を、表5に単体試料の暦年較正結果を、図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の実験誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正、ウィグルマッチング法の詳細は以下のとおりである。

[暦年較正]

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.2(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

[ウィグルマッチング法]

ウィグルマッチング法とは、複数の試料を測定し、それぞれの試料間の年代差の情報を用いて試料の年代パターンと較正曲線のパターンが最も一致する年代値を算出することによって、高精度で年代値を求める方法である。測定では、得られた年輪数が確認できる木材について、1年毎或いは数年分をまとめた年輪を数点用意し、それぞれ年代測定を行う。個々の測定値から暦年較正を行い、得られた確率分布を最外試料と当該試料の中心値の差だけずらしてすべてを掛け合わせるにより最外試料の確率分布を算出し、年代範囲を求める。

4. 考察

以下、 2σ 暦年代範囲(確率95.4%)に着目して結果を整理する。

ウィグルマッチングを行った、護岸材E(試料No.1: PLD-34405~34407)は、56 cal BC-8 cal AD (95.4%)であった。これに2年を加えて、最終形成年輪は54 cal BC-10 cal AD (95.4%)で、紀元前1世紀中頃~紀元後1世紀初頭の暦年代を示した。これは、弥生時代中期後葉~後期初頭に相当する。

酸素同位体比測定の結果では、試料No.1の最外年輪はAD 1年を示しており、測定結果と整合

的である。なお、この試料は最終形成年輪が残っていなかった。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回の試料は古木効果の影響を受けていると考えられ、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代であると考えられる。

遺物No.⑪の生材(試料No.2:PLD-34408~34410)は、89-135 cal AD (95.4%)であった。これに2年を加えて、最終形成年輪は91-137 cal AD (95.4%)で、紀元後1世紀末~2世紀前半の暦年代を示した。これは、弥生時代中期後葉~弥生時代後期に相当する。

酸素同位体比測定の結果では、試料No.2の最外年輪はAD162年を示しており、測定結果よりも新しい年代を示した。放射性炭素年代測定では、1世紀から3世紀は日本産樹木が数十~100 ^{14}C yr、系統的に古い炭素年代を示すことが知られている(Sakamoto2003;尾寄2009)。そのため今回、IntCal13(欧米産樹木で作成)で較正した暦年代範囲は、実際の年代よりも数十~100年程度古いと考えられる。よって放射性炭素年代測定では、酸素同位体比の結果よりも古い値を示したと考えられる。なお、この試料は最終形成年輪が残っていなかったが、辺材部は残っていた。そのため、わずかに古木効果の影響を受けていると考えられる。

単体の放射性炭素年代測定は、護岸材背後(南)下層から出土した試料No.3(PLD-34344)は39 cal BC-63 cal AD (95.4%)で、紀元前1世紀後半~紀元後1世紀後半の暦年代を示した。これは、弥生時代中期後葉~後期前葉に相当する。なお、試料は生の葉であり、測定結果は落葉年代に相当する。

Section3護岸材直上から出土した試料No.4(PLD-34345)は37-10 cal BC (10.5%)および3 cal BC-68 cal AD (84.9%)で、紀元前1世紀後半~紀元後1世紀後半の暦年代を示した。これは、弥生時代中期後葉~後期前葉に相当する。試料は生の種実であり、測定結果は結実年代に相当する。

南アゼ南1から出土した試料No.5(PLD-34656)は41 cal BC-57 cal AD (95.4%)で、紀元前1世紀中頃~紀元後1世紀中頃の暦年代を示した。これは、弥生時代中期後葉~後期前葉に相当する。試料は生材で、最終形成年輪を含めて測定が行われており、測定結果は枯死もしくは伐採年代に相当する。

S X62断割東壁南部上層から出土した試料No.6(PLD-34657)は36-30 cal BC (1.4%)、22-10 cal BC (4.0%)、3 cal BC-77 cal AD (90.0%)で、紀元前1世紀後半~紀元後1世紀後半の暦年代を示した。これは、弥生時代中期後葉~後期前葉に相当する。試料は生材で、最終形成年輪を含めて測定が行われており、測定結果は枯死もしくは伐採年代に相当する。

護岸材B(試料No.7:PLD-346578)は153-142 cal BC (1.7%)および112 cal BC-18 cal AD (93.7%)で、紀元前2世紀中頃~紀元後1世紀前半の暦年代を示した。

酸素同位体比測定の結果では、試料No.7の最外年輪はBC30年を示しており、測定結果と整合的である。なお、この試料は最終形成年輪が残っていなかった。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回の試料は古木効果の影響を受けていると考

えられ、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代であると考えられる。

4区6層下層から出土した壺胴部外面付着炭化物(試料No.8:PLD-34659)は65-176 cal AD (91.0%)および191-212 cal AD (4.4%)で、紀元後1世紀後半～3世紀前半の暦年代を示した。これは、弥生時代後期の暦年代を示した。なお、測定結果は紀元後1世紀後半～3世紀前半であり、実際の年代よりも数十～100年程度古いと考えられる。

参考文献

- Bronk Ramsey, C., van der Plicht, J., and Weninger, B. (2001) 'Wiggle matching' radiocarbon dates. Radiocarbon, 43(2A), 381-389.
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- 尾寄大真(2009)日本版校正曲線の作成と新たな課題. 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」: 4-8, 雄山閣.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.
- Sakamoto, M., Imamura, M., van der Plicht, J., Mitsutani, T. and Sahara, M. (2003) Radiocarbon Calibration for Japanese Wood Samples. Radiocarbon, 45, 81-89.

表1 測定資料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-34405	試料No.1 遺物No.護岸材E 調査区: 3区・4区 遺構: SD22	採取位置: 外側から1～5年輪目 (最終形成年輪以外 部位不明)	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-34406	位置: 原位置 種類: 生材(エノキ属) 器種: 護岸材	採取位置: 外側から56～60年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-34407	試料の性状: 最終形成年輪以外 部位不明 年輪数: 116年 状態: wet	採取位置: 外側から111～115年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-34408	試料No.2 遺物No.⑩ 調査区: 4区(D) 遺構: SD22	採取位置: 外側から1～5年輪目 (辺材部)	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-34409	層位: VI 種類: 生材	採取位置: 外側から66～70年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-34410	試料の性状: 辺材部 年輪数: 144年 状態: wet	採取位置: 外側から136～140年輪目	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

表2 測定資料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-34344	試料No.3 遺構：SD22 位置：護岸材背後(南)下層	種類：生の葉 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-34345	試料No.4 遺構：SD22 位置：Section3護岸材直上 遺物No.植物遺体ブロック	種類：生の種実(コナラ属殻斗) 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-34656	試料No.5 遺構：SD22 位置：南アゼ3南1	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-34657	試料No.6 遺構：SD22 位置：SX62断割東壁南部上層	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-34658	試料No.7 遺構：SD22 調査区：2区 位置：護岸材B	種類：生材(カエデ属) 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：wet	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)
PLD-34659	試料No.8 遺構：SD22 調査区：4区 層位：6層下層	種類：土器付着炭化物 器種：壺 部位：胴部外面 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N)

表3 試料No.1の放射性炭素年代測定・暦年較正・ウィグルマッチングの結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-34405 試料No.1 外側から1～5年輪目	-28.65 ± 0.14	2030 ± 21	2030 ± 20	51 cal BC- 3 cal AD (68.2%)	96 cal BC-27 cal AD (94.9%) 43-47 cal AD (0.5%)
PLD-34406 試料No.1 外側から56～60年輪目	-27.51 ± 0.12	2078 ± 20	2080 ± 20	150-140 cal BC (8.2%) 113- 51 cal BC (60.0%)	166-46 cal BC (95.4%)
PLD-34407 試料No.1 外側から111～115年輪目	-30.70 ± 0.13	2098 ± 20	2100 ± 20	167- 92 cal BC (68.2%)	179-51 cal BC (95.4%)
最外試料年代				46-21 cal BC (47.7%) 11 cal BC- 1 cal AD (20.5%)	56 cal BC- 8 cal AD (95.4%)
最外年輪年代				44-19 cal BC (47.7%) 9 cal BC- 3 cal AD (20.5%)	54 cal BC-10 cal AD (95.4%)

表4 試料No.2の放射性炭素年代測定・暦年較正・ウィグルマッチングの結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-34408 試料No.2 外側から1～5年輪目	-28.34 ± 0.14	1887 ± 21	1885 ± 20	81-130 cal AD (68.2%)	65-176 cal AD (91.0%) 191-212 cal AD (4.4%)
PLD-34409 試料No.2 外側から66～70年輪目	-29.03 ± 0.13	1951 ± 21	1950 ± 20	25-74 cal AD (68.2%)	2- 88 cal AD (91.7%) 104-121 cal AD (3.7%)
PLD-34410 試料No.2 外側から136～140年輪目	-25.68 ± 0.12	2012 ± 20	2010 ± 20	42 cal BC- 6 cal AD (68.2%)	51 cal BC-52 cal AD (95.4%)
最外試料年代				95-105 cal AD (26.6%) 115-129 cal AD (41.6%)	89-135 cal AD (95.4%)
最外年輪年代				97-107 cal AD (26.6%) 117-131 cal AD (41.6%)	91-137 cal AD (95.4%)

表5 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-34344 試料No.3 護岸材背後(南)下層 生の葉	-29.81 \pm 0.15	1983 \pm 18	1985 \pm 20	2-53 cal AD (68.2%)	39 cal BC-63 cal AD (95.4%)
PLD-34345 試料No.4 Section3護岸材直上 生の種実	-29.48 \pm 0.11	1977 \pm 18	1975 \pm 20	5-53 cal AD (68.2%)	37-10 cal BC (10.5%) 3 cal BC-68 cal AD (84.9%)
PLD-34656 試料No.5 南アゼ3南1サンプル 生材	-30.19 \pm 0.16	1990 \pm 20	1990 \pm 20	34-31 cal BC (2.3%) 21-11 cal BC (9.9%) 2 cal BC-30 cal AD (41.0%) 38-51 cal AD (15.0%)	41 cal BC-57 cal AD (95.4%)
PLD-34657 試料No.6 SX62断割東壁南部上層 生材	-29.25 \pm 0.19	1967 \pm 21	1965 \pm 20	16-65 cal AD (68.2%)	36-30 cal BC (1.4%) 22-10 cal BC (4.0%) 3 cal BC-77 cal AD (90.0%)
PLD-34658 試料No.7 2区 護岸材B 生材	-29.55 \pm 0.14	2043 \pm 20	2045 \pm 20	89-75 cal BC (13.7%) 58-20 cal BC (43.3%) 12-1 cal BC (11.2%)	153-142 cal BC (1.7%) 112 cal BC-18 cal AD (93.7%)
PLD-34659 試料No.8 4区 6層下層 壺胴部外面付着炭化物	-29.16 \pm 0.14	1887 \pm 21	1885 \pm 20	81-130 cal AD (68.2%)	65-176 cal AD (91.0%) 191-212 cal AD (4.4%)

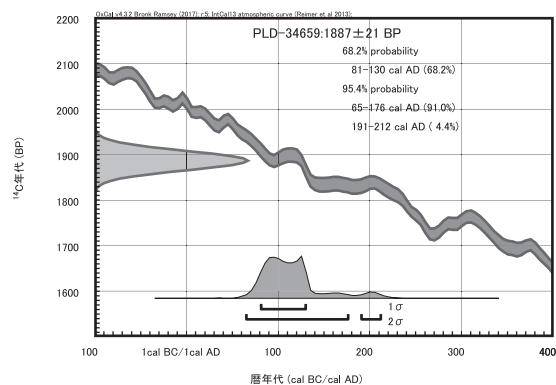
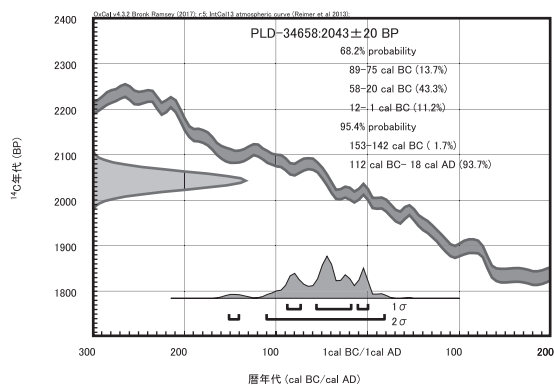
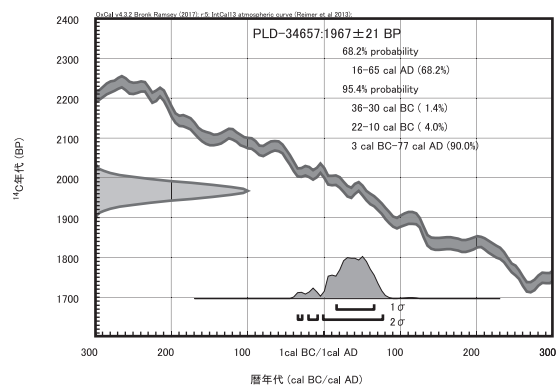
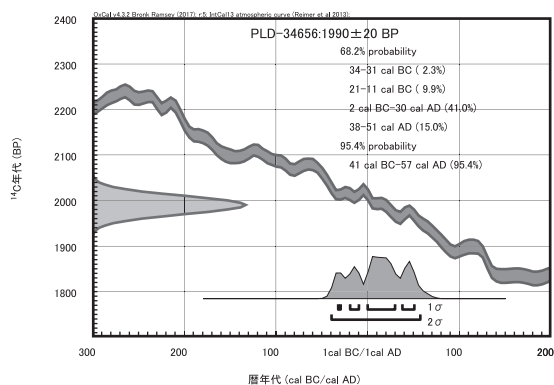
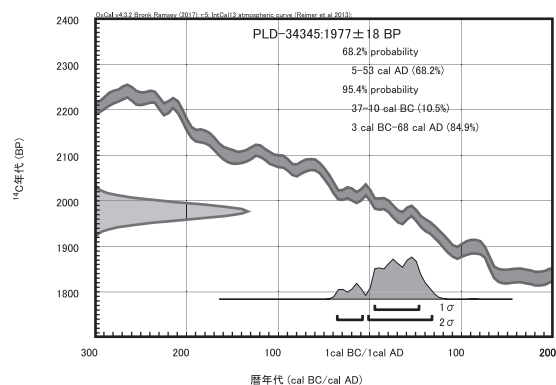
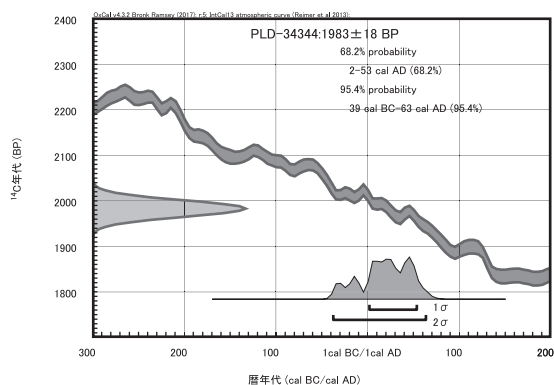
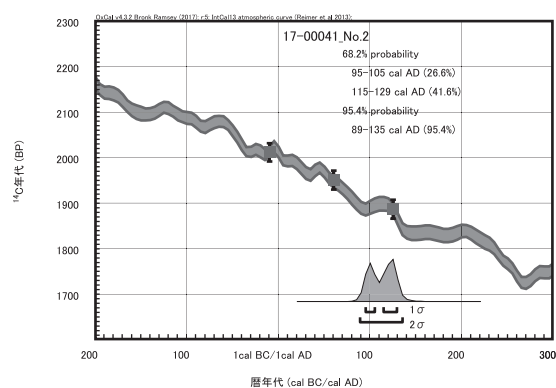
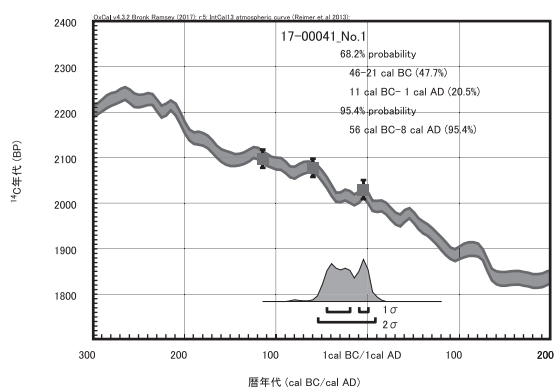


図 暦年校正結果

付編 4 下水主遺跡から出土した弥生時代から 古墳時代前期の木製品類と自然木の樹種

能城 修一(明治大学黒耀石研究センター)

村上由美子(京都大学総合博物館)

佐々木由香(明治大学黒耀石研究センター)

小林 和貴(東北大学植物園)

鈴木 三男(東北大学植物園)

1. はじめに

京都府城陽市に所在する下水主遺跡から出土した弥生時代から古墳時代前期の木製品類と自然木の樹種を報告する。当遺跡は木津川の自然堤防から後背湿地に位置しており、木製品類はB地区の大溝 S D22から出土した。資料の内訳は、木製品類292点、自然木170点、不明61点、樹皮素材2点の合計525点である。

2. 試料と方法

樹種同定は、木取りを観察した後、木製品類は出土木材から直接、自然木はブロックサンプルから、片刃カミソリをもちいて横断面、接線断面、放射断面の切片を切り取り、それをガムクロラル（抱水クロラル50g、アラビアゴム粉末40g、グリセリン20ml、蒸留水50mlの混合物）で封入しておこなった。各プレパラートにはSMZ-1～561の番号（但しSMZ-466～500は欠番）を付して標本番号とした。標本は、森林総合研究所の木材標本庫に保管されている。

3. 同定結果

同定不能のものを除いた試料512点中には、針葉樹7分類群と広葉樹44分類群の計51分類群が認められた(表1)。以下には、各分類群の解剖学的な記載をおこない、代表的な標本の光学顕微鏡写真を載せて同定の根拠を示す。

1. モミ属 *Abies* マツ科 図1 : 1a, 1c(枝・幹材, SMZ-384)

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材の量が多い。分野壁孔はごく小型のヒノキ型～スギ型で1分野に3～4個、放射柔細胞の垂直壁には単壁孔が著しい。

2. コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Siebold et Zucc. コウヤマキ科 図1 : 2c(枝・幹材, SMZ-32)

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やか。分野壁孔は孔口が水平に大きく開く窓状で1分野に普通1個。

3. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図1 : 3a, 3c(枝・幹材, SMZ-16)

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材の量は少ない。早材の終りから晩材に樹脂細胞が散在する。分野壁孔は中型のトウヒ型で1分野に普通2個。

4. スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don ヒノキ科 図1 : 4a, 4c(枝・幹材, SMZ-228)

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材の量はやや多い。早材の終りから晩材に樹脂細胞が散在する。分野壁孔は大型のスギ型で1分野に普通2個。

5. アスナロ *Thujopsis dolabrata* (L.f.) Siebold et Zucc. ヒノキ科 図1 : 5a, 5c(枝・幹材, SMZ-389)

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材の量は少ない。早材の終りから晩材に樹脂細胞が散在する。分野壁孔はごく小型のヒノキ型～スギ型で1分野に2～3個、放射柔細胞はしばしば褐色の樹脂をもつ。

6. イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight ex Forbes) K.Koch イヌガヤ科 図1 : 6a, 6c(枝・幹材, SMZ-375)

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材の量は少ない。年輪内に樹脂細胞が散在する。仮道管の内壁にはらせん肥厚がある。分野壁孔はごく小型のヒノキ型で1分野に2～3個。

7. カヤ *Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc. イチイ科 図1 : 7a, 7c(枝・幹材, SMZ-234)

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかで晩材の量は少ない。樹脂細胞はない。仮道管の内壁には2～3本ずつ走るらせん肥厚がある。分野壁孔は小型のヒノキ型で1分野に2～3個。

8. クスノキ *Cinnamomum camphora* (L.) J.Presl クスノキ科 図1 : 8a-8b(枝・幹材, SMZ-31)

大型～小型で丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向に複合して年輪内で小型化しながら疎らに散在する半環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織と放射組織には大型の油細胞をもつ。放射組織は異性で2～3細胞幅、ときに層階状となる。

9. クスノキ科 *Lauraceae* クスノキ科 図1 : 9a(枝・幹材, SMZ-366)

やや厚壁で小型の丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向に複合して疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織と放射組織には油細胞をもつ。放射組織は異性で普通2細胞幅。

10. カツラ属 *Cercidiphyllum* カツラ科 図2 : 10a-10b(枝・幹材, SMZ-24)

小型でやや角張った道管がほぼ単独で密に散在する散孔材。道管の穿孔は30段ほどの階段状。放射組織は異性で2細胞幅。

11. ユズリハ属 *Daphniphyllum* ユズリハ科 図2 : 11a-11b(枝・幹材, SMZ-446)

ごく小型でやや角張った道管がほぼ単独でやや疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は20～30段ほどの階段状。放射組織は異性で2細胞幅。

12. ツタ *Parthenocissus tricuspidata* (Siebold et Zucc.) Planch. ブドウ科 図2 : 12a-12b(枝・幹材, SMZ-439)

大型で丸い道管が単独あるいは2～3個複合して早材に密に散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、道管相互壁孔は階段状。放射組織は同性で10細胞幅前後となり、高さは数mmに達する。

13. クズ *Pueraria lobata* (Willd.) Ohwi マメ科 図2：13a-13b(枝・幹材, SMZ-314)

大型で丸い道管がほぼ単独でやや疎らに散在し、その間には小型の道管が集合して放射方向にのびる塊をなす半環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で10～20細胞幅以上となり、高さは3mm以上となる。

14. モモ *Amygdalus persica* L. バラ科 図2：14a-14b(枝・幹材, SMZ-456)

中型で丸い道管が単独あるいは2～3個複合して年輪の始めに2列ほど配列し、晩材では小型で丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向に複合して斜めに連なる傾向をみせて散在する半環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で5細胞幅位。

15. サクラ属(広義) *Prunus* s.l. バラ科 図2：15a(枝・幹材, SMZ-231)

小型で丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向に複合して斜めに連なる傾向をみせて散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で3細胞幅位。

16. バラ属 *Rosa* バラ科 図2：16a-16b(枝・幹材, SMZ-444)

やや小型～ごく小型で丸い道管が単独あるいは2～3個複合して疎らに散在する半環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で10細胞幅以上で高さが2mm以上となる。

17. キイチゴ属 *Rubus* バラ科 図2：17a-17b(枝・幹材, SMZ-379)

小型で丸い道管が単独あるいは2～3個複合して接線方向に並ぶ傾向をみせて散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は直立細胞からなる同性で5細胞幅位、高さは数mmとなる。

18. ニレ属 *Ulmus* ニレ科 図2・3：18a-18b(枝・幹材, SMZ-8)

大型で丸い道管がほぼ単独で年輪の始めに2列ほど配列し、晩材では急に小型化した道管が集まって接線方向の帯をなす環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は同性で6細胞幅位。

19. ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図3：19a-19b(枝・幹材, SMZ-129)

中型で丸い道管がほぼ単独で年輪の始めに1列に配列し、晩材では急に小型化した道管が集まって斜め方向の帯をなす環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は上下端の1列が直立する異性で8細胞幅位、直立部にはしばしば大型の菱形結晶をもつ。

20. ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. アサ科 図3：20a-20b(枝・幹材, SMZ-93)

中型で厚壁の丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向に複合して疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材で翼状?連合翼状。放射組織は異性で3?4細胞幅、直立部にしばしば菱形結晶をもつ。

21. エノキ属 *Celtis* アサ科 図3：21a-21b(枝・幹材, SMZ-308)

中型で丸い道管がほぼ単独で年輪の始めに1～2列配列し、晩材では急に小型化した道管が集まって斜めに連なる傾向をみせる環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で10細胞幅位、不規則な鞘細胞をもつ。

22. コウゾ属 *Broussonetia* クワ科 図3 : 22a-22b(枝・幹材, SMZ-318)

中型で丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向に複合して早材に疎らに散在し、晩材ではごく小型の道管が集まって斜め?接線方向に連なる傾向をみせる環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は上下端の1列が直立する異性で8細胞幅位。

23. クワ属 *Morus* クワ科 図3 : 23a-23b(枝・幹材, SMZ-342), 24a(根材, SMZ-269)

やや大型で丸い道管が単独あるいは2～3個複合して早材に疎らに散在し、晩材では徐々に小型化した道管が数個ずつ丸い塊をなして斜めに連なる傾向をみせる環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は上下端の1～2列が直立する異性で5細胞幅位。

根材は、年輪幅が不規則に変化し、年輪内での道管の径の変化が小さく半環孔材となる。

24. クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 図3 : 25a-25b(枝・幹材, SMZ-73)

ごく大型の孤立道管が早材に数列配列し、晩材では徐々に小型化した孤立道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材で歪な接線状。放射組織は単列同性。

25. ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky ブナ科 図3 : 26a-26b(枝・幹材, SMZ-153)

中型で丸い道管が数個ずつ年輪の始めに集まって断続的に配列し、晩材ではやや急に小型化した孤立道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は歪な接線状。放射組織は同性で、単列の小型のものと集合状?複合状の大型のものともつ。

27. スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T. Yamaz. et Mashiba ブナ科 図4 : 27a(枝・幹材, SMZ-390)

ツブラジイに似る環孔材で、放射組織は単列同性のみで、集合状～複合状のものは持たない。

28. コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図4 : 28a-28b(枝・幹材, SMZ-385)

大型で丸い道管がほぼ単独で年輪の始めに3列ほど配列し、晩材では徐々に小型化した厚壁で丸い孤立道管が放射方向に配列する環孔材。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、単列の小型のものと複合状の大型のものとなる。

29. コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図4 : 29a(枝・幹材, SMZ-462)

クヌギ節に似る環孔材で、晩材の孤立道管は薄壁で小さく、火炎状に配列する。

30. イチイガシ *Quercus gilva* Blume ブナ科 図4 : 30a-30b(枝・幹材, SMZ-11)

直径220 μ m以上の大型で丸い孤立道管が放射方向に配列する放射孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織はいびつな接線状。放射組織は同性で、単列の小型のものと複合状の大型のものとなる。

31. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図4 : 31a(枝・幹材, SMZ-71), 32a(根材, SMZ-357)

イチイガシに似る放射孔材で、道管径は200 μ m以下。

根材は道管が小さく、放射方向の配列が不規則である。

32. オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Komatsu.) Kitam. クルミ科 図4 : 33a-33b(枝・幹材, SMZ-123)

やや大型～中型で丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向に複合して疎らに散在する半環孔

材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は接線状。放射組織は同性で4細胞幅位。

33. ハンノキ属ハンノキ節 *Alnus* sect. *Gymnothyrsus* **カバノキ科** 図4：34a-34b(枝・幹材, SMZ-445)

小型で丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向に複合して密に散在する散孔材。道管の穿孔は20～30段ほどの階段状。放射組織は同性で単列の小型のものと集合状の大型のものとなる。

34. クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus* sect. *Eucarpinus* **カバノキ科** 図4：35a-35b(枝・幹材, SMZ-392)

小型で丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向に複合して密に散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で3細胞幅位の小型のものと集合状の大型のものとなる。

35. ヤナギ属 *Salix* **ヤナギ科** 図4：36a-36b(枝・幹材, SMZ-135)

小型で丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向に複合して密に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は単列異性。

36. キブシ *Stachyurus praecox* Siebold et Zucc. **キブシ科** 図5：37a-37b(枝・幹材, SMZ-251)

小型でやや角張った孤立道管がやや疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は30～40段ほどの階段状。放射組織は異性で4細胞幅位。

37. ヤマハゼ *Toxicodendron sylvestre* (Siebold et Zucc.) Kuntze **ウルシ科** 図5：38a-38b(枝・幹材, SMZ-278)

中型～小型で丸い道管が単独あるいは2～5個ほど放射方向に複合して年輪内で小型化しながら疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で2～3細胞幅。

38. チドリノキ *Acer carpinifolium* Siebold et Zucc. **ムクロジ科** 図5：39a-39b(枝・幹材, SMZ-156)

小型で丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向に複合して疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある。木繊維は雲紋状を呈する。放射組織は同性で、単列の小型のものから20細胞幅前後で高さが1.5mmほどになるものまで変化が大きい。

39. カエデ属 *Acer* **ムクロジ科**

チドリノキに似る散孔材で、放射組織は4細胞幅位、高さは0.6mm以下。

40. トチノキ *Aesculus turbinata* Blume **ムクロジ科** 図5：40a-40b(枝・幹材, SMZ-321)

小型で丸い道管が単独あるいは2～4個放射方向に複合して密にやや不規則に散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は単列同性で、しばしば層階状に配列する。

41. ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. **ムクロジ科** 図5：41a-41b(枝・幹材, SMZ-453)

大型で丸い道管が年輪の始めに3列ほど配列し、晩材ではやや急に小型化した道管が数個ずつ放射方向にのびる塊をなして散在する環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。木部柔組織は晩材で連合翼状。放射組織は同性で4細胞幅位。

42. キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. **ミカン科** 図5：42a-42b(枝・幹材, SMZ-14)

大型で丸い道管が単独あるいは2個複合して年輪の始めに2列ほど配列し、晩材ではやや急に小型化した道管が集まって接線方向の帯をなす環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁には

らせん肥厚がある。放射組織は同性で4細胞幅位。

43. サカキ *Cleyera japonica* Thunb. サカキ科 図5: 43a-43b(枝・幹材, SMZ-353)

ごく小型で角張った孤立道管がやや疎らに均一に散在する散孔材。道管の穿孔は30~40段ほどの階段状。放射組織は単列異性。

44. ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. サカキ科 図5: 44a-44b(枝・幹材, SMZ-254)

小型で角張った孤立道管が密に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は30~40段ほどの階段状。放射組織は単列で2細胞幅。

45. モッコク *Ternstroemia gymnanthera* (Wight et Arn.) Bedd. サカキ科 図6: 45a-45b(枝・幹材, SMZ-541)

小型で角張った孤立道管がやや疎らに均一に散在する散孔材。道管の穿孔は30~40段ほどの階段状。放射組織は異性で2~3細胞幅。

46. ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 図6: 46a-46b(枝・幹材, SMZ-464)

小型~ごく小型の孤立道管が年輪内で小型化しながら均一に散在する半環孔材。道管の穿孔は10~20段ほどの階段状。放射組織は異性で2~3細胞幅、直立部にしばしば大型の菱形結晶をもつ。根材は年輪幅が不規則に変化し、早材と晩材の道管径がほぼ同様の散孔材となる。

47. ハイノキ属 *Symplocos* ハイノキ科 図6: 47a-47b(枝・幹材, SMZ-67)

ごく小型で角張った孤立道管がやや疎らに均一に散在する散孔材。道管の穿孔は40段前後の階段状。放射組織は異性で3細胞幅位。

48. アセビ *Pieris japonica* (Thunb.) D.Don ex G.Don subsp. *japonica* ツツジ科 図6: 48a-48b(枝・幹材, SMZ-112)

ごく小型の孤立道管が密に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は数段の階段状。放射組織は同性で2細胞幅位。

49. シャシャンボ *Vaccinium bracteatum* Thunb. ツツジ科 図6: 49a-49b(枝・幹材, SMZ-276)

小型で角張った孤立道管が年輪内でやや小型化しながら散在する散孔材。道管の穿孔は単一あるいは10段ほどの階段状で、道管要素の末端にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で、単列で小型のものと8細胞幅位で高さ2mmほどになる大型のものとは異なる。

50. ムラサキシキブ属 *Callicarpa* シソ科 図6: 50a-50b(枝・幹材, SMZ-413)

小型で丸い道管が単独あるいは2~3個放射方向に複合してやや疎らに均一に散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で2~3細胞幅。

51. ニワトコ *Sambucus racemosa* L. レンブクソウ科 図6: 51a-51b(枝・幹材, SMZ-434)

ごく小型で丸い道管が2?3個放射方向に複合して接線方向に連なって散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で5細胞幅位、鞘細胞をもつ。

52. サクラ属(広義) *Prunus* s.l. バラ科 図6: 52b(樹皮, SMZ-93)

横断面では接線方向に長い長方形の細胞が隙間なく並び、放射断面では方形~長方形の細胞が密にあり成長輪がみえる。放射断面では細長い紡錘形の細胞が水平方向に隙間無く配列する。

53. 広葉樹 Dicotyledonous tree 図6 : 53b(樹皮, SMZ-506)

篩細胞の帯と柔細胞の帯のなかに径の大きな線維細胞の塊が不規則に散在し、放射組織は単列のものと10細胞幅以上で背が1 mmを越える大型のものからなる。

4. 考察

木製品類では、ヒノキとスギ、モミ属が合わせて50%を占めており、針葉樹の占める割合が高い(表1)。広葉樹では、イチイガシを含むアカガシ亜属と、クリ、クワ属、ツブラジイ、ムクノキなどが目立つが、ひじょうに多様な樹種が見いだされている。

器種ごとにみると、泥除けを含む鋤鍬ではイチイガシがもっぱら選択されていた。原材ではヒノキとアカガシ亜属が多く、鋤鍬の原材のほかに他の器種の原材も含んでいる。容器は槽を主体としており、ヒノキとキハダが選択されていた。その他の製品では、祭祀具に針葉樹が、櫓にアカガシ亜属が、腰掛けと木錘にコナラ節が、横鍬の膝柄にクワ属が、丸木舟にクスノキが選択されていたが、半数以上は用途不明の製品であり、明瞭な樹種選択は把握できない。建築材では、梯子にヒノキが、杭にクリが、垂木にはアセビやスダジイが選択されている。板材にはヒノキとスギが多く、割材や棒、加工木ではヒノキやモミ属、ムクノキ、クワ属、クリ、ツブラジイ、アカガシ亜属、チドリノキを含むカエデ属が多い。

木製品類の樹種と比較すると自然木の樹種は大きく異なっており、イチイガシを含むアカガシ亜属がもっとも多く、それ以外ではムクノキやクワ属、カエデ属、トチノキが目立つものの、それ以外の樹種も多く、多様性が高い森林が当遺跡の周辺に成立していたと考えられる(表1)。全体的にみると、アカガシ亜属やシイノキ属、針葉樹といった常緑樹は3分の1ほどを占め、それ以外は落葉広葉樹であり、明るい落葉広葉樹林が広がる中に針葉樹が点在し、所々に照葉樹林の林分があるような景観であったと想定される。実際、中国原産のモモや、蔓植物のツタやクズ、林縁や草地に多いバラ属やキイチゴ属、コウゾ属などが出土しており、人為的に森林が開かれた場所があったと想定される。一方、トチノキやカエデ属の存在は川沿いの立地環境を示唆しているが、ハンノキ節やヤナギ属の出土は低率であり、水域からはやや離れていたことを示している。

木製品類と自然木を比較すると、ヒノキとスギは自然木に比べて木製品類の比率が圧倒的に高く、遠方から運んできたことは明らかである。広葉樹では、クリとイチイガシは自然木よりも高率に使われており、素材を周辺で意識的に収集していたと考えられる。それ以外の樹種は、ほぼ木製品類の比率と自然木の比率がひとしく周辺の森林中で素材を調達したと想定される。

従来、鋤鍬の素材はアカガシ亜属と同定されていたが(伊東・山田2012)、アカガシ亜属の中でイチイガシだけは木材組織から特定できることが近年の研究で明らかになった(Noshiro & Sasaki, 2011)。その結果、イチイガシは、鋤鍬の素材として弥生時代から古墳時代にもっぱら選択されていたことが関東地方における研究で解明されており(能城ほか2012)、近畿地方でも唐古・鍵遺跡での研究で最近確認されている(能城ほか2016)。当遺跡の成果は、イチイガシが近畿地方でも鋤鍬の素材として選択されていたことを示す二つ目の例である。

この分析は、科学研究費補助金基盤研究（A）「縄文時代前半期における森林資源管理・利用体系の成立と植物移入の植物学的解明」（代表：能城修一）（研究課題番号：15H01777）

引用文献

伊東隆夫・山田昌久編. 2012. 木の考古学：出土木製品用材データベース. 449p. 海青社, 大津.

Noshiro, S. & Sasaki, Y. 2011. Identification of Japanese species of evergreen *Quercus* and *Lithocarpus* (Fagaceae). IAWA Journal 32: 383-393.

能城修一・佐々木由香・鈴木三男・村上由美子. 2012. 弥生時代から古墳時代の関東地方におけるイチイガシの木材資源利用. 植生史研究21: 29-40p.

能城修一・鈴木三男・小林和貴・佐々木由香・村上由美子. 2016. 唐古・鍵遺跡とその周辺遺跡で出土した木製品の樹種. 田原本町文化財調査年報No.24, 143-157p.

表1 下水主遺跡から出土した弥生時代から古墳時代前期の木製品類と自然木の樹種

樹種名	SR	鋤鉋	原材	容器	他製品	舟	建築材	板材	割材	棒	加工木	樹皮素材	不明	計	%	自然木	%
モミ属	S				3		1	1	3	1	5		2	16	4.6%	6	3.7%
コウヤマキ	S								1				1	2	0.6%		
ヒノキ	S	1	4	4	10		10	21	23	11	18		22	124	35.6%	7	4.3%
スギ	S		1	1			1	5	1	3	4		9	25	7.2%		
アスナロ	S													0		1	0.6%
イヌガヤ	S												1	1	0.3%	2	1.2%
カヤ	S								2		1			3	0.9%	1	0.6%
クスノキ	S					1					1		2	4	1.1%		
クスノキ科	S								1		2			3	0.9%	4	2.4%
カツラ属	S			1					1					2	0.6%		
ユズリハ属	S													0		1	0.6%
ツタ	S													0		1	0.6%
クズ	S													0		2	1.2%
モモ	S													0		1	0.6%
サクラ属(広義)	S										1			1	0.3%		
	樹皮											1		1	0.3%		
バラ属	S													0		2	1.2%
キイチゴ属	S													0		1	0.6%
ニレ属	S										1			1	0.3%		
ケヤキ	S									1				2	0.6%		
ムクノキ	S						1		7		5		1	14	4.0%	12	7.3%
エノキ属	S												1	1	0.3%	6	3.7%
コウゾ属	S													0		1	0.6%
クワ属	S			1	2		2		2		8		2	17	4.9%	14	8.5%
	R													0		1	0.6%
クリ	S				2		6	1	6	1	9			25	7.2%	4	2.4%
ツブラジイ	S		2				2	1	2	1	5		2	15	4.3%	4	2.4%
スダジイ	S						2		1		3			6	1.7%	3	1.8%
コナラ属クスギ節	S								1					1	0.3%		
コナラ属コナラ節	S				2								1	3	0.9%	2	1.2%
イチイガシ	S	6	1		2			1					4	14	4.0%	1	0.6%
イチイガシ?	S						1						1	2	0.6%		
コナラ属アカガシ亜属	S	2	4		1		1	1	10	1	5		2	27	7.8%	31	18.9%
	R													0		1	0.6%
コナラ属	樹皮													0		1	0.6%
オニグルミ	S										1			1	0.3%		
ハンノキ属ハンノキ節	S													0		3	1.8%
クマシデ属イヌシデ節	S													0		1	0.6%
ヤナギ属	S				1									1	0.3%	1	0.6%
キブシ	S								1					1	0.3%		
ヤマハゼ	S								1					1	0.3%	1	0.6%
チドリノキ	S								1		4			5	1.4%	3	1.8%
カエデ属	S										2			2	0.6%	10	6.1%
トチノキ	S	1							1				1	3	0.9%	14	8.5%
ムクロジ	S		1						1				1	3	0.9%	2	1.2%
キハダ	S			2						1			1	4	1.1%	1	0.6%
サカキ	S										2		1	3	0.9%	7	4.3%
ヒサカキ	S								1		1			2	0.6%		
モッコク	S												1	1	0.3%		
ツバキ属	S				1				1				2	4	1.1%	6	3.7%
	R													0		1	0.6%
ハイノキ属	S						1				1			2	0.6%		
アセビ	S						1							1	0.3%		
シャシャンボ	S				1				1					2	0.6%		
ムラサキシキブ属	S													0		1	0.6%
ニワトコ	S													0		3	1.8%
広葉樹	樹皮												1	1	0.3%		
樹皮												1		1	0.3%		
総計		10	13	9	25	1	29	31	69	20	79	2	60	348		164	

S：枝・幹材，R：根材

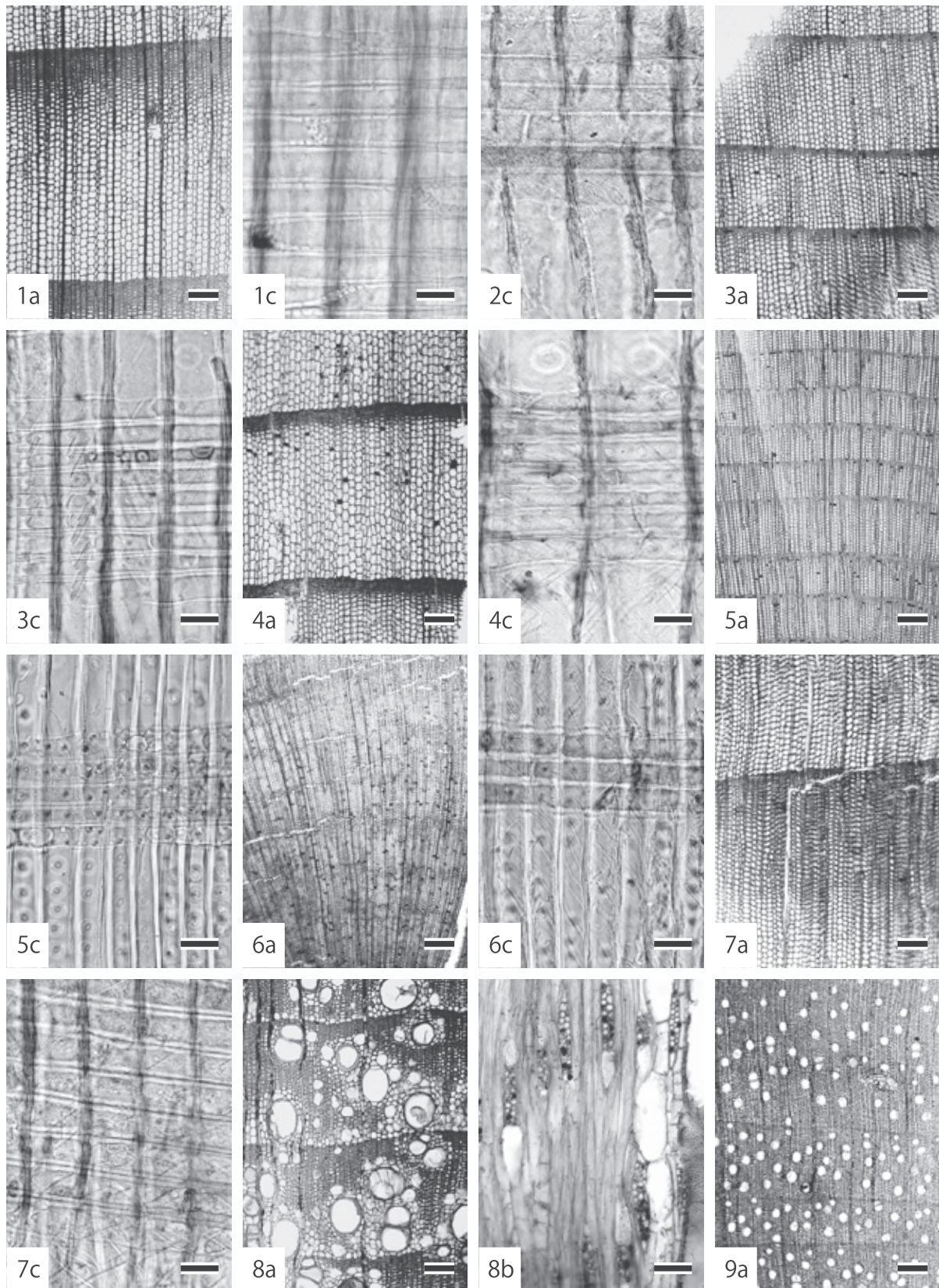


図1. 下水主遺跡出土の古墳時代前期の木製品類と自然木の顕微鏡写真(1)

1a, 1c: モミ属(枝・幹材, SMZ-384), 2c: コウヤマキ(枝・幹材, SMZ-32), 3a, 3c: ヒノキ(枝・幹材, SMZ-16), 4a, 4c: スギ(枝・幹材, SMZ-228), 5a, 5c: アスナロ(枝・幹材, SMZ-389), 6a, 6c: イヌガヤ(枝・幹材, SMZ-375), 7a, 7c: カヤ(枝・幹材, SMZ-234), 8a?8b: クスノキ(枝・幹材, SMZ-31), 9a: クスノキ科(枝・幹材, SMZ-366). a: 横断面(スケール = 200 μ m), b: 接線断面(スケール = 100 μ m), c: 放射断面(スケール = 25 μ m).

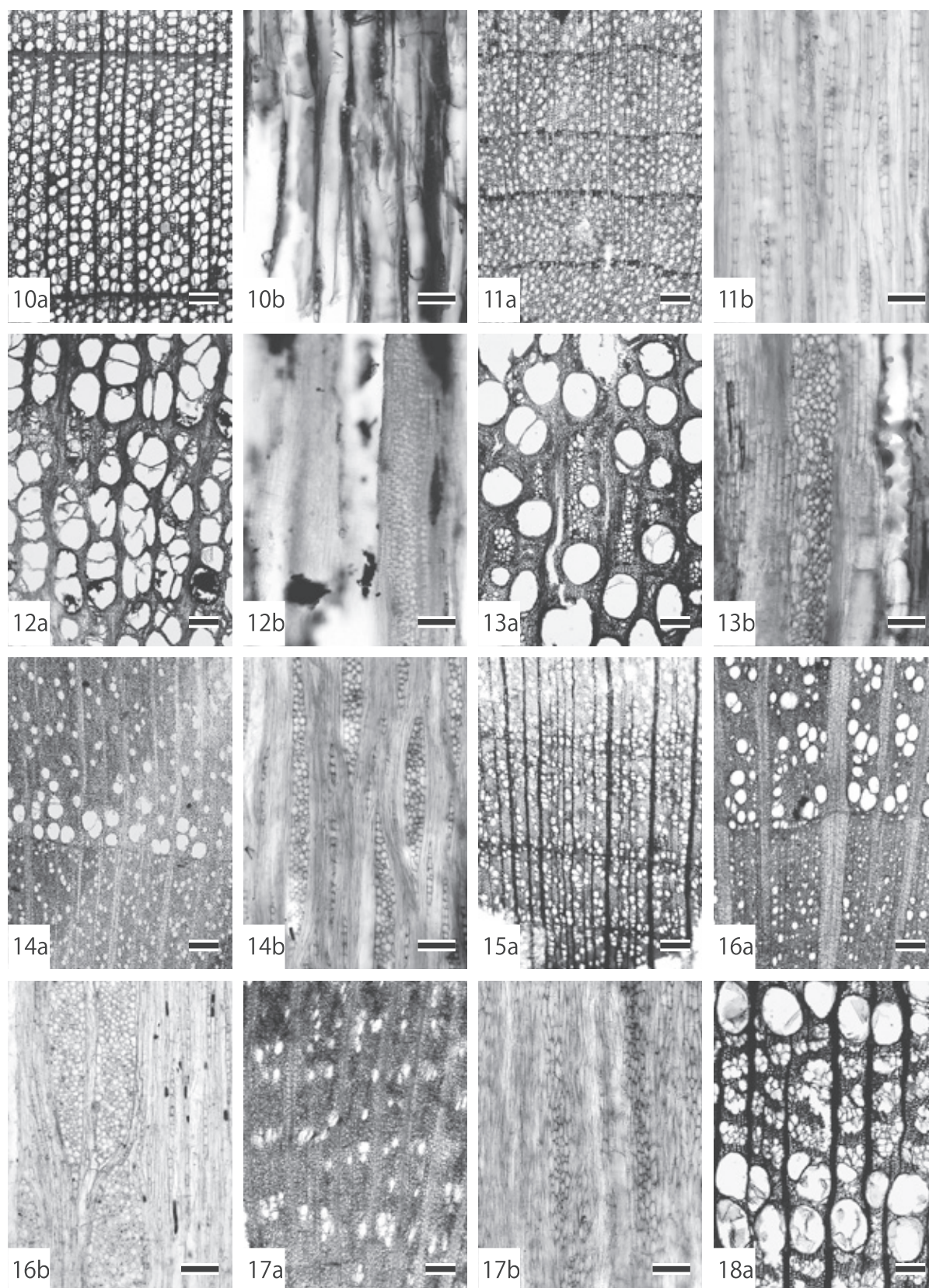


図2. 下水主遺跡出土の古墳時代前期の木製品類と自然木の顕微鏡写真(2)

10a?10b: カツラ属(枝・幹材, SMZ-24), 11a?11b: ユズリハ属(枝・幹材, SMZ-446), 12a?12b: ツタ(枝・幹材, SMZ-439), 13a?13b: クズ(枝・幹材, SMZ-314), 14a?14b: モモ(枝・幹材, SMZ-456), 15a: サクラ属(広義)(枝・幹材, SMZ-231), 16a?16b: バラ属(枝・幹材, SMZ-444), 17a?17b: キイチゴ属(枝・幹材, SMZ-379), 18a: ニレ属(枝・幹材, SMZ-8). a: 横断面(スケール= 200 μ m), b: 接線断面(スケール= 100 μ m).

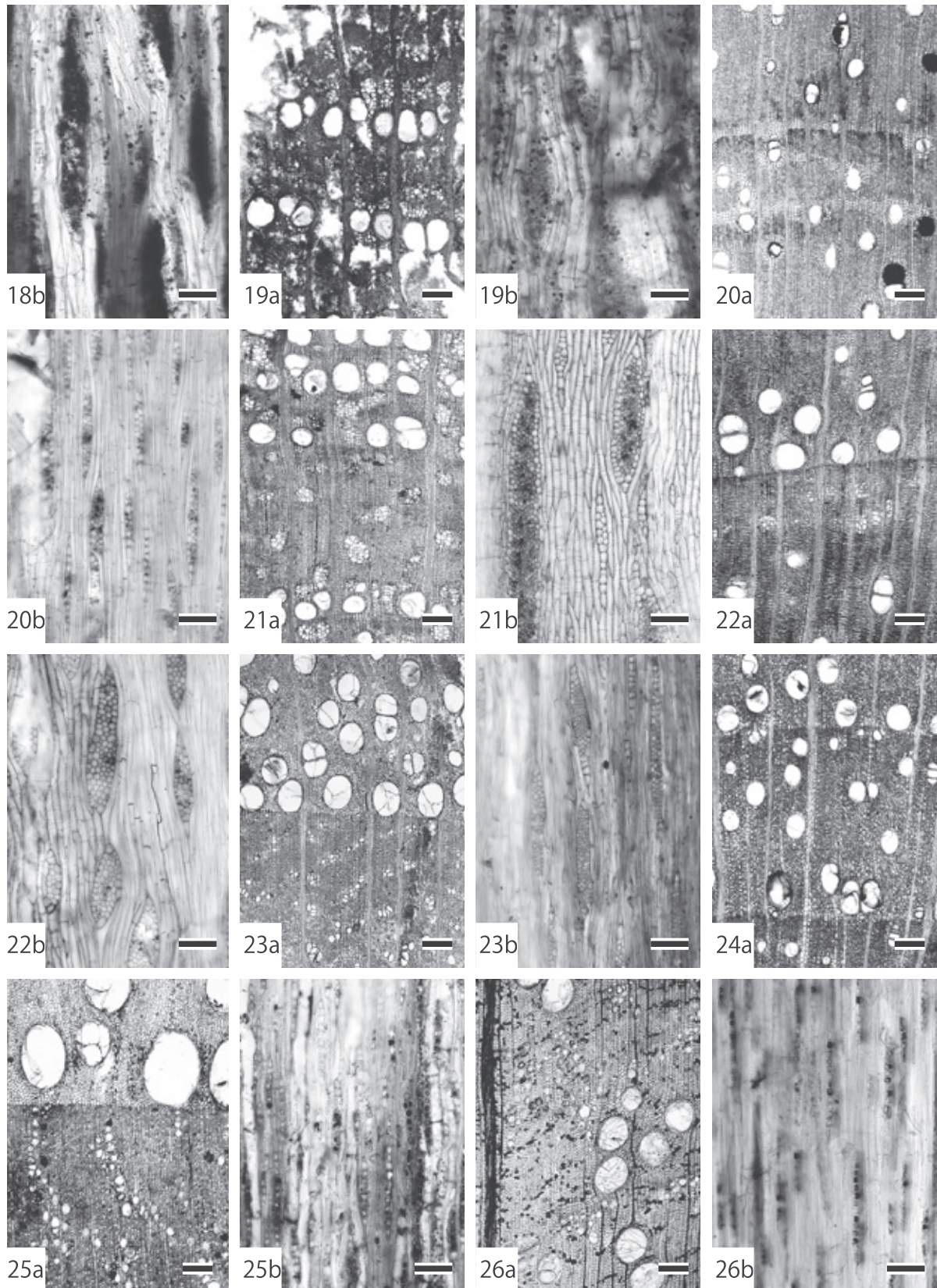


図3. 下水主遺跡出土の古墳時代前期の木製品類と自然木の顕微鏡写真(3)

18b：ニレ属(枝・幹材，SMZ-8)，19a?19b：ケヤキ(枝・幹材，SMZ-129)，20a?20b：ムクノキ(枝・幹材，SMZ-93)，
21a?21b：エノキ属(枝・幹材，SMZ-308)，22a?22b：コウゾ属(枝・幹材，SMZ-318)，23a-23b：クワ属(枝・幹材，
SMZ-342)，24a：クワ属(根材，SMZ-269)，25a?25b：クリ(枝・幹材，SMZ-73)，26a?26b：ツブラジイ(枝・幹材，
SMZ-153)。a：横断面(スケール＝200 μ m)，b：接線断面(スケール＝100 μ m)。

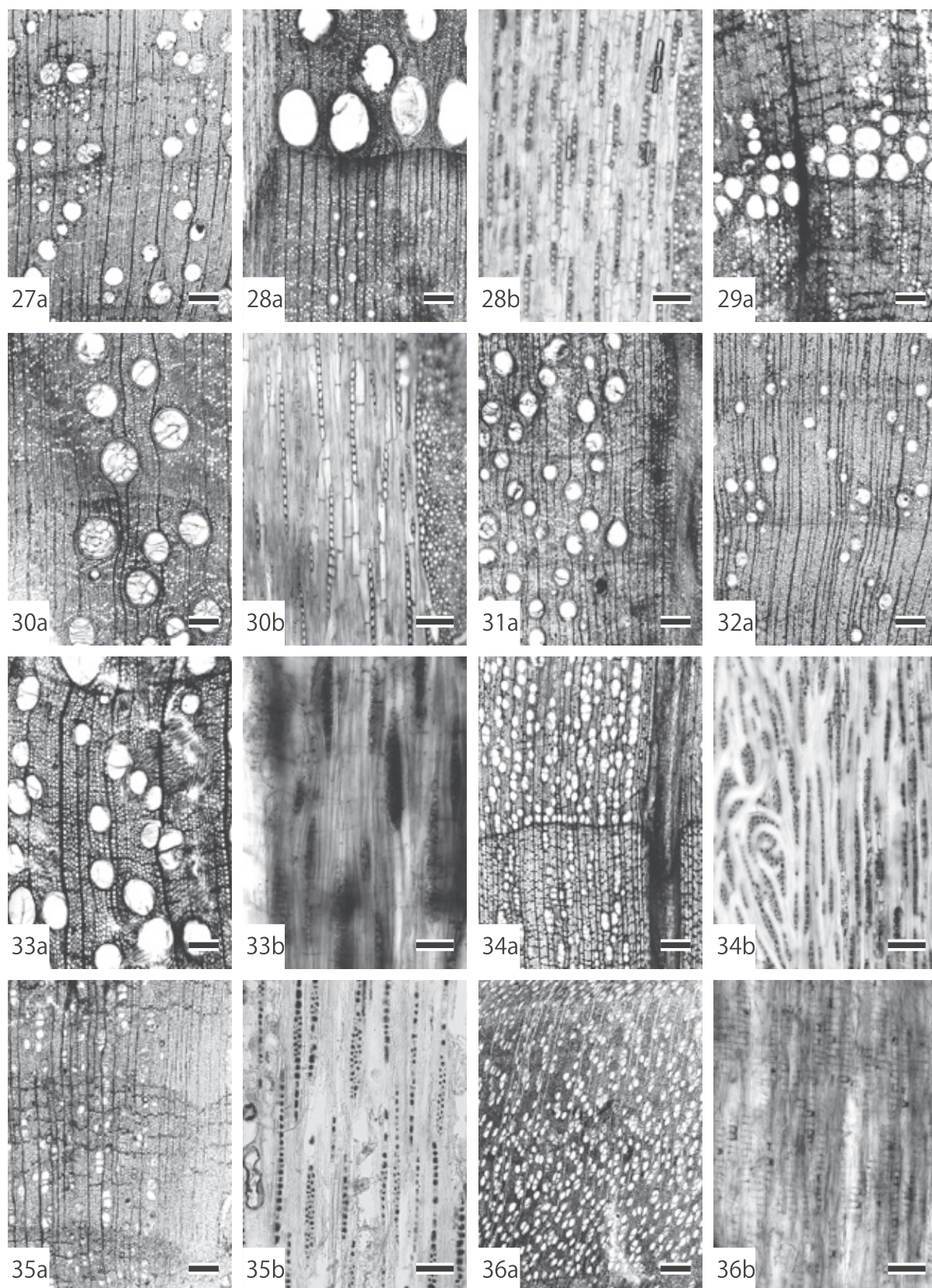


図4. 下水主遺跡出土の古墳時代前期の木製品類と自然木の顕微鏡写真(4)

27a: スダジイ(枝・幹材, SMZ-390), 28a?28b: コナラ属クヌギ節(枝・幹材, SMZ-385), 29a: コナラ属コナラ節(枝・幹材, SMZ-462), 30a?30b: イチイガシ(枝・幹材, SMZ-11), 31a: コナラ属アカガシ亜属(枝・幹材, SMZ-71), 32a: コナラ属アカガシ亜属(根材, SMZ-357), 33a?33b: オニグルミ(枝・幹材, SMZ-123), 34a?34b: ハンノキ属ハンノキ節(枝・幹材, SMZ-445), 35a?35b: クマシデ属イヌシデ節(枝・幹材, SMZ-392), 36a?36b: ヤナギ属(枝・幹材, SMZ-135). a: 横断面(スケール= 200 μ m), b: 接線断面(スケール= 100 μ m).

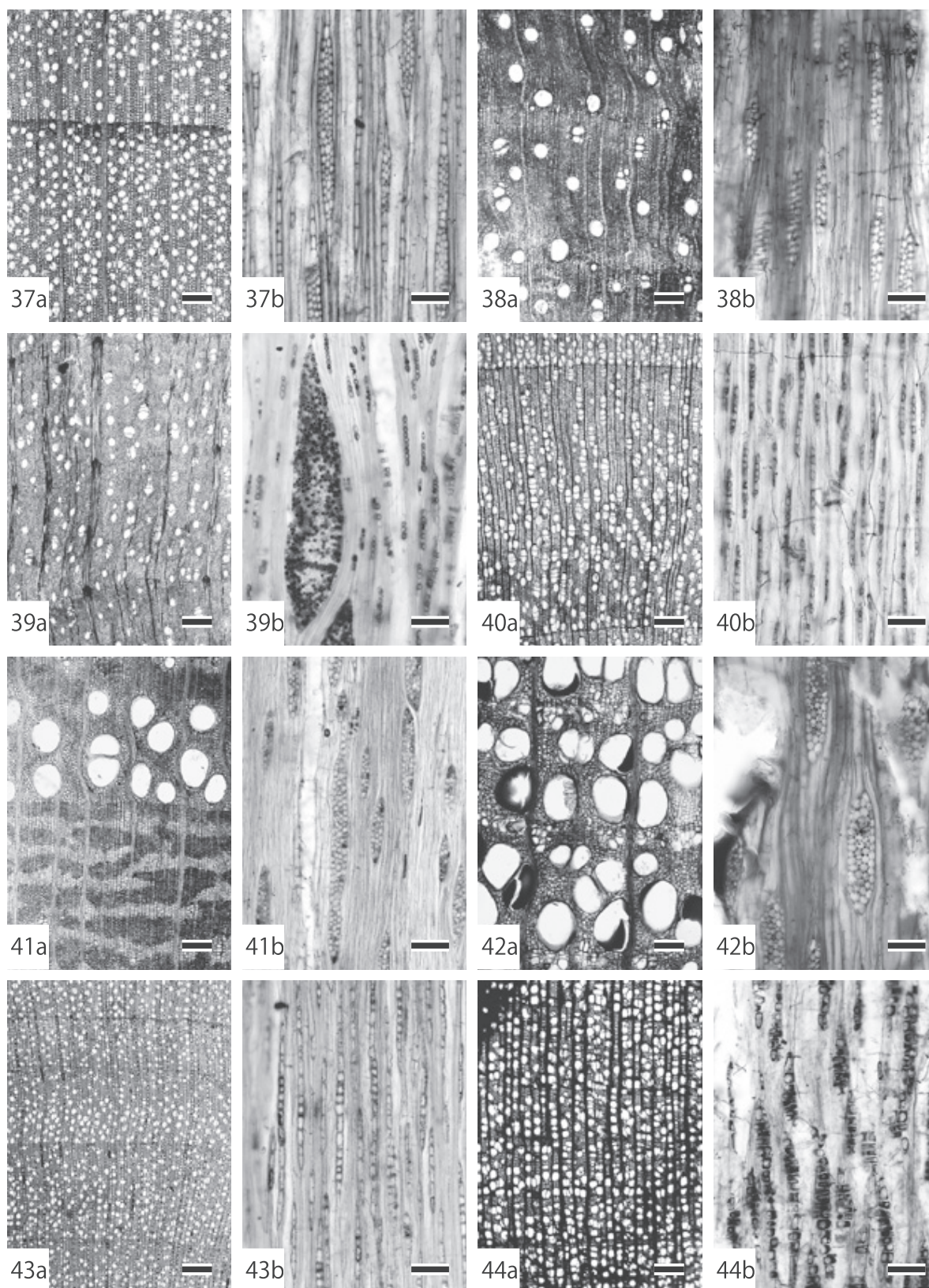


図5. 下水主遺跡出土の古墳時代前期の木製品類と自然木の顕微鏡写真(5)

37a-37b: キブシ(枝・幹材, SMZ-251), 38a-38b: ヤマハゼ(枝・幹材, SMZ-278), 39a-39b: チドリノキ(枝・幹材, SMZ-156), 40a-40b: トチノキ(枝・幹材, SMZ-321), 41a-41b: ムクロジ(枝・幹材, SMZ-453), 42a-42b: キハダ(枝・幹材, SMZ-14), 43a-43b: サカキ(枝・幹材, SMZ-353), 44a-44b: ヒサカキ(枝・幹材, SMZ-254). a: 横断面(スケール = 200 μ m), b: 接線断面(スケール = 100 μ m).

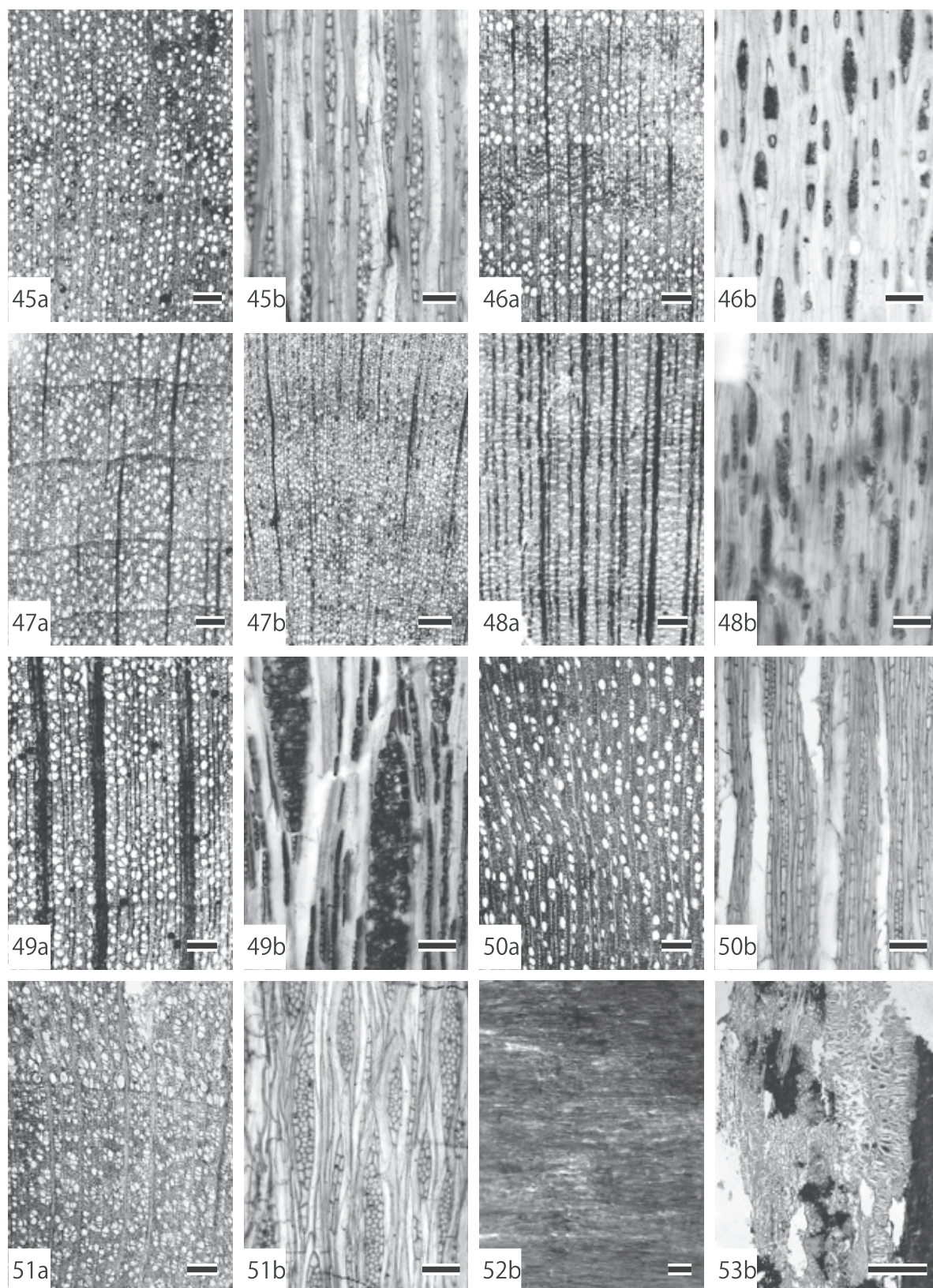


図6. 下水主遺跡出土の古墳時代前期の木製品類と自然木の顕微鏡写真(6)

45a?45b: モッコク(枝・幹材, SMZ-541), 46a?46b: ツバキ属(枝・幹材, SMZ-464), 47a?47b: ハイノキ属(枝・幹材, SMZ-67), 48a?48b: アセビ(枝・幹材, SMZ-112), 49a?49b: シヤシャンボ(枝・幹材, SMZ-276), 50a?50b: ムラサキシキブ属(枝・幹材, SMZ-413), 51a?51b: ニワトコ(枝・幹材, SMZ-434), 52a: サクラ属(広義)(樹皮, SMZ-93), 53a: 広葉樹(樹皮, SMZ-506). a: 横断面(スケール = 200 μ m), b: 接線断面(スケール = 100 μ m).

京都府遺跡調査報告集 第173冊

No	樹種	種別	器種集計	器種	報告番号	No	樹種	種別	器種集計	器種	報告番号
SMZ－1	クワ属	工具	他製品	膝柄横鋏	664	SMZ－71	コナラ属 アカガシ亜属	その他	加工木	加工木	598
SMZ－2	モミ属	祭祀具	他製品	陽物形	604	SMZ－72	モミ属	土木材	建築材	矢板	613
SMZ－3	ヒノキ	祭祀具	他製品	舟形木製品	602	SMZ－73	クリ	板材	板材	板材	616
SMZ－4	イチイガシ	農具	鋤鋏	又鋏	481	SMZ－74	ヒノキ	板材	板材	板材	645
SMZ－5	イチイガシ	農具	鋤鋏	泥除け	477	SMZ－75	ヒノキ	建築部材	建築材	板材	511
SMZ－6	イチイガシ	農具	鋤鋏	曲柄又鋏	600	SMZ－76	ヒノキ	杭	建築材	杭	565
SMZ－7	コナラ属 コナラ節	農具	他製品	木錘	482	SMZ－77	クリ	用途不明	他製品	不明	593
SMZ－8	ニレ属	不明	加工木	不明	573	SMZ－78	クワ属	杭	建築材	杭	659
SMZ－9	サクラ属 (広義)	その他	樹皮素材	樹皮材		SMZ－79	ヒノキ	その他	割材	割材	648
SMZ－10	コナラ属 アカガシ亜属	漁撈具	他製品	櫂	484	SMZ－80	クリ	杭か	建築材	割れ杭	647
SMZ－11	イチイガシ	農具	鋤鋏	横鋏	476	SMZ－81	ヒノキ	板材	板材	板材	529
SMZ－12	コナラ属 コナラ節	雑具	他製品	組み合わせ腰 かけ	496	SMZ－82	ヒノキ	板材	板材	板材	651
SMZ－13	イチイガシ	農具	鋤鋏	曲柄又鋏	478	SMZ－83	クスノキ科	その他	割材	割材	
SMZ－14	キハダ	容器	容器	槽	493	SMZ－84	ヒノキ	建築部材	建築材	不明	626
SMZ－15	ヒノキ	容器	容器	槽	492	SMZ－85	シャシャンボ	用途不明	他製品	不明	632
SMZ－16	ヒノキ	雑具	他製品	腰掛	497	SMZ－86	コナラ属 アカガシ亜属	板材	板材	板材	646
SMZ－17	スダジイ	建築部材	建築材	垂木	508	SMZ－87	モミ属	雑具	棒	棒材	619
SMZ－18	ヒノキ	建築部材	建築材	梯子	503	SMZ－88	ヒノキ	その他	加工木	残材	668
SMZ－19	イチイガシ	農具	鋤鋏	泥除け	599	SMZ－89	ヒノキ	板材	板材	板材	642
SMZ－20	キハダ	容器	容器	槽	493	SMZ－90	ヒノキ	建築部材	建築材	不明	510
SMZ－21	ヒノキ	容器	容器	盒子	491	SMZ－91	ヒノキ	板材	板材	板材	643
SMZ－22	ヒノキ	容器	容器	盒子		SMZ－92	クリ	不明	加工木	不明	653
SMZ－23	クリ	その他	加工木	加工木	582	SMZ－93	ムクノキ	不明	加工木	不明	595
SMZ－24	カツラ属	容器	容器	脚付盤	490	SMZ－94	ヒノキ	不明	加工木	不明	566
SMZ－25	ヒノキ	建築部材	建築材	梯子	504	SMZ－95	ヒノキ	建築部材	建築材	不明	652
SMZ－26	ヒノキ	建築部材	建築材	梯子	504	SMZ－96	クリ	建築部材	建築材	不明	597
SMZ－27	クワ属	その他	加工木	残材		SMZ－97	ヒノキ	雑具	棒	棒材	
SMZ－28	ヒノキ	雑具	棒	もえさし	621	SMZ－98	ヒノキ	雑具	棒	棒材	549
SMZ－29	ヒノキ	雑具	棒	もえさし	620	SMZ－99	スギ	雑具	棒	棒材	546
SMZ－30	ヒノキ	雑具	棒	もえさし	553	SMZ－100	サカキ	その他	加工木	加工木	579
SMZ－31	クスノキ	運搬具	舟	丸木舟	513	SMZ－101	ヒノキ	板材	板材	板材	609
SMZ－32	コウヤマキ	その他	割材	割材		SMZ－102	クリ	用途不明	他製品	不明	596
SMZ－33	ムクノキ	その他	加工木	加工木	572	SMZ－103	ハイノキ属	その他	加工木	加工木	627
SMZ－34	ヒノキ	その他	加工木	角材		SMZ－104	ヒノキ	その他	割材	割材	543
SMZ－35	ヒノキ	その他	割材	割材		SMZ－105	カヤ	不明	加工木	不明	
SMZ－36	ヒノキ	その他	割材	割材		SMZ－106	×	その他	割材	割材	
SMZ－37	ヒノキ	用途不明	他製品	不明	568	SMZ－107	ヒノキ	その他	割材	割材	556
SMZ－38	ヒノキ	用途不明	他製品	不明	550	SMZ－108	ヒノキ	その他	割材	割材	583
SMZ－39	モミ属	用途不明	他製品	不明		SMZ－109	ヒノキ	その他	割材	割材	
SMZ－40	ヒノキ	用途不明	他製品	不明		SMZ－110	ヒノキ	杭か	建築材	杭か	
SMZ－41	ヒノキ	板材	板材	板材	535	SMZ－111	ヒノキ	板材	板材	板材	526
SMZ－42	スギ	容器か	容器	不明	519	SMZ－112	スギ	板材	板材	板材	564
SMZ－43	ヒノキ	板材	板材	板材	521	SMZ－113	アセビ	建築部材	建築材	垂木	509
SMZ－44	ツブラジイ	板材	板材	板材	520	SMZ－114	ヒノキ	その他	割材	割材	586
SMZ－45	スギ	板材か	板材	板材か		SMZ－115	ヒノキ	板材か	板材	板材か	588
SMZ－46	クワ属	容器か	容器	不明		SMZ－116	クリ	杭	建築材	杭	558
SMZ－47	モミ属	その他	割材	割材	522	SMZ－117	クワ属	杭	建築材	柱杭	658
SMZ－48	ヒノキ	その他	割材	割材	570	SMZ－118	クワ属	杭	建築材	柱杭	657
SMZ－49	クリ	その他	割材	割材	589	SMZ－119	コナラ属 アカガシ亜属	その他	割材	割材	585
SMZ－50	ヒノキ	板材	板材	板材	525	SMZ－120	コナラ属 アカガシ亜属	農具か	鋤鋏	不明	663
SMZ－51	イチイガシ	用途不明	他製品	不明	537	SMZ－121	モミ属	その他	加工木	不明	
SMZ－52	ツブラジイ	建築部材	建築材	垂木か	581	SMZ－122	キハダ	雑具	棒	棒材	665
SMZ－53	ヒノキ	建築部材	建築材	垂木か	631	SMZ－123	コナラ属 アカガシ亜属	その他	割材	割材	
SMZ－54	カヤ	その他	割材	割材	571	SMZ－124	オニグルミ	その他	加工木	不明	
SMZ－55	カツラ属	その他	割材	割材		SMZ－125	ヒノキ	その他	加工木	木屑	
SMZ－56	ツブラジイ	その他	原材	原材か		SMZ－126	ムクノキ	その他	加工木	加工木	650
SMZ－57	ツブラジイ	雑具	棒	有頭棒	540	SMZ－127	ムクノキ	その他	加工木	加工木	
SMZ－58	クワ属	楽器	他製品	琴／箱	635	SMZ－128	モミ属	不明	加工木	不明	
SMZ－59	トチノキ	伐採木	自然木	—		SMZ－129	×	板材	板材	板材	
SMZ－60	ヒノキ	用途不明	他製品	不明	661	SMZ－130	ケヤキ	雑具か	棒	部材	580
SMZ－61	ヒノキ	板材	板材	板材	641	SMZ－131	ヒノキ	板材	板材	板材	531
SMZ－62	ヒノキ	板材	板材	板材	610	SMZ－132	モミ属	板材	板材	板材	534
SMZ－63	ヒノキ	雑具	棒	棒材	545	SMZ－133	クリ	その他	割材	割材	
SMZ－64	ヒノキ	農具	鋤鋏	目盛板	605	SMZ－134	コナラ属 アカガシ亜属	杭	建築材	杭	
SMZ－65	スギ	雑具	棒	棒材	547	SMZ－135	×	棒材か	樹皮素材	棒材か	
SMZ－66	ヒノキ	用途不明	他製品	不明	567	SMZ－136	ヤナギ属	用途不明	他製品	不明	
SMZ－67	ハイノキ属	杭	建築材	杭	563	SMZ－137	クリ	その他	加工木	加工木	
SMZ－68	ツブラジイ	杭	建築材	杭	562	SMZ－138	コナラ属 アカガシ亜属	その他	加工木	加工木	
SMZ－69	クリ	杭	建築材	杭	654	SMZ－139	クリ	その他	加工木	加工木	
SMZ－70	スギ	杭	建築材	杭	629	SMZ－140	カエデ属	その他	加工木	加工木	
						SMZ－141	コナラ属 アカガシ亜属	その他	加工木	加工木	
						SMZ－142	クスノキ科	その他	加工木	加工木	
							クリ	その他	加工木	加工木	

新名神高速道路関係遺跡発掘調査報告

No	樹種	種別	器種集計	器種	報告番号	No	樹種	種別	器種集計	器種	報告番号
SMZ - 143	コナラ属 アカガシ亜属	その他	割材	割材か		SMZ - 207	スダジイ	その他	加工木	加工木か	
SMZ - 144	ヒノキ	その他	加工木	残材		SMZ - 208	ヒノキ	その他	加工木	残材	
SMZ - 145	クスノキ科	その他	加工木	木屑		SMZ - 209	スギ	板材か	板材	板材か	
SMZ - 146	ヒノキ	その他	原材	原材 / 割材		SMZ - 210	スギ	その他	原材	原材か	
SMZ - 147	モミ属	その他	加工木	木屑		SMZ - 211	コナラ属 アカガシ亜属	その他	原材	原材か	
SMZ - 148	ヒノキ	その他	原材	原材 / 割材		SMZ - 212	イチイガシ	板材か	板材	板材か	
SMZ - 149	コナラ属 アカガシ亜属	その他	原材	原材 / 割材		SMZ - 213	コナラ属 アカガシ亜属	その他	原材	原材か	
SMZ - 150	クワ属	その他	加工木	加工木か		SMZ - 214	ヒノキ	その他	加工木	加工木	611
SMZ - 151	チドリノキ	その他	加工木	加工木か		SMZ - 215	ヒノキ	板材か	板材	板材か	
SMZ - 152	チドリノキ	その他	加工木	加工木か		SMZ - 216	クワ属	その他	加工木	加工木	
SMZ - 153	ツブラジイ	その他	加工木	加工木か		SMZ - 217	モミ属	用途不明	他製品	不明	
SMZ - 154	クワ属	その他	加工木	加工木か		SMZ - 218	サカキ	その他	加工木	加工木	
SMZ - 155	ツブラジイ	その他	加工木	加工木か		SMZ - 219	スギ	板材か	板材	—	
SMZ - 156	チドリノキ	その他	加工木	加工木か		SMZ - 220	クリ	割材	割材	—	
SMZ - 157	チドリノキ	その他	加工木	加工木か		SMZ - 221	ヒノキ	雑具	棒	棒材	618
SMZ - 158	ツブラジイ	その他	原材	原材 / 割材		SMZ - 222	ヒノキ	加工木	加工木	—	
SMZ - 159	コナラ属 アカガシ亜属	その他	加工木	残材		SMZ - 223	イチイガシ	用途不明	他製品	不明	617
SMZ - 160	スダジイ	その他	加工木	残材		SMZ - 224	ヒノキ	板材	板材	板材	
SMZ - 161	クワ属	その他	加工木	木屑		SMZ - 225	ヒノキ	板材	板材	板材	
SMZ - 162	ツブラジイ	その他	加工木	木屑		SMZ - 226	ヒノキ	用途不明	他製品	不明	
SMZ - 163	クワ属	その他	加工木	木屑		SMZ - 227	ヒノキ	その他	加工木	加工木	
SMZ - 164	ヒノキ	その他	加工木	木屑		SMZ - 228	スギ	その他	加工木	加工木	612
SMZ - 165	ヒノキ	その他	加工木	木屑		SMZ - 229	スギ	その他	加工木	加工木	
SMZ - 166	カエデ属	その他	加工木	加工木		SMZ - 230	ムクノキ	その他	割材	割材	
SMZ - 167	スダジイ	その他	加工木	残材		SMZ - 231	サクラ属 (広義)	その他	加工木	加工木	
SMZ - 168	コナラ属 アカガシ亜属	その他	加工木	加工木		SMZ - 232	スギ	その他	加工木	板材 / 割材	
SMZ - 169	クワ属	その他	加工木	残材		SMZ - 233	ヒノキ	その他	割材	割材	
SMZ - 170	ヒノキ	その他	原材	原材 / 割材		SMZ - 234	カヤ	その他	割材	割材か	
SMZ - 171	ヒノキ	その他	割材	割材		SMZ - 235	ヒノキ	その他	加工木	加工木	
SMZ - 172	モミ属	その他	自然木	伐採木		SMZ - 236	ヒノキ	その他	加工木	加工木か	
SMZ - 173	ヒノキ	その他	自然木	伐採木		SMZ - 237	ヒノキ	その他	割材	割材	
SMZ - 174	サカキ	その他	自然木	伐採木		SMZ - 238	スダジイ	杭	建築材	杭	628
SMZ - 175	クリ	その他	加工木	残材		SMZ - 239	ムクノキ	その他	割材	割材	
SMZ - 176	コナラ属 アカガシ亜属	その他	割材	割材		SMZ - 240	スギ	その他	割材	割材	
SMZ - 177	トチノキ	その他	割材	割材		SMZ - 241	スギ	その他	加工木	残材	
SMZ - 178	クリ	その他	割材	割材		SMZ - 242	クスノキ	その他	加工木	加工木	
SMZ - 179	ムクロジ	その他	原材	原材		SMZ - 243	ヒノキ	雑具か	棒	棒材か	624
SMZ - 180	クリ	その他	加工木	加工木	574	SMZ - 244	スギ	雑具か	棒	火鋸杵	603
SMZ - 181	ヒノキ	その他	加工木	残材		SMZ - 245	ヒノキ	板材	板材	板材	607
SMZ - 182	クリ	杭	建築材	柱杭	633	SMZ - 246	ヒノキ	雑具か	棒	棒材か	
SMZ - 183	コナラ属 アカガシ亜属	その他	自然木	伐採木		SMZ - 247	ヒノキ	雑具か	棒	棒材か	
SMZ - 184	コナラ属 アカガシ亜属	その他	割材	割材		SMZ - 248	ヒノキ	その他	割材	割材	
SMZ - 185	ニワトコ	その他	自然木	伐採木		SMZ - 249	ヒノキ	その他	割材	割材	
SMZ - 186	イチイガシか	杭	建築材	柱杭	512	SMZ - 250	ヒサカキ	その他	加工木	加工木	
SMZ - 187	サカキ	その他	自然木	伐採木		SMZ - 251	キブシ	その他	割材	割材	
SMZ - 188	サカキ	その他	自然木	伐採木		SMZ - 252	ヒノキ	雑具か	棒	棒材か	625
SMZ - 189	コナラ属 アカガシ亜属	その他	自然木	伐採木		SMZ - 253	ムクノキ	その他	割材	割材	
SMZ - 190	クワ属	その他	加工木	加工木		SMZ - 254	ヒサカキ	その他	割材	割材	
SMZ - 191	ヒノキ	その他	割材	割材		SMZ - 255	ヒノキ	その他	加工木	残材	
SMZ - 192	コナラ属 アカガシ亜属	その他	割材	割材		SMZ - 256	クリ	その他	割材	割材	
SMZ - 193	ヒノキ	その他	割材	割材		SMZ - 257	ヒノキ	板材か (未製品)	板材	—	615
SMZ - 194	コナラ属 アカガシ亜属	その他	割材	割材		SMZ - 258	スギ	板材	板材	板材	608
SMZ - 195	モミ属	その他	割材	割材		SMZ - 259	イチイガシ	その他	原材	原材	614
SMZ - 196	ヒノキ	その他	原材	原材 / 割材		SMZ - 260	モミ属	その他	割材	割材	
SMZ - 197	スダジイ	その他	割材	割材		SMZ - 261	ツブラジイ	その他	割材	割材	
SMZ - 198	ヒノキ	その他	割材	割材		SMZ - 262	ヒノキ	その他	割材	割材	
SMZ - 199	ヒノキ	板材	板材	板材	515	SMZ - 263	ヒノキ	その他	加工木	残材	
SMZ - 200	ツブラジイ	その他	割材	割材		SMZ - 264	ツバキ属	用途不明	他製品	不明	601
SMZ - 201	クリ	雑具	棒	棒材	630	SMZ - 265	×	その他	割材	割材	
SMZ - 202	ヒノキ	その他	加工木	残材		SMZ - 266	コナラ属 アカガシ亜属	その他	割材	割材	
SMZ - 203	モミ属	その他	加工木	木屑		SMZ - 267	ムクロジ	その他	割材	割材	
SMZ - 204	×	その他	割材	割材		SMZ - 268	トチノキ	農具か	鋤鍬	不明	
SMZ - 205	コナラ属 アカガシ亜属	雑具	棒	棒材	623	SMZ - 269	クワ属	伐採木か	自然木	—	666
SMZ - 206	ヒノキ	板材	板材	板材	606	SMZ - 270	クワ属	その他	割材	割材	
						SMZ - 271	クワ属	その他	割材	割材	
						SMZ - 272	ムクノキ	その他	割材	割材	
						SMZ - 273	ヒノキ	その他	割材	割材	
						SMZ - 274	コナラ属 アカガシ亜属	その他	割材	割材	
						SMZ - 275	チドリノキ	その他	割材	割材	
						SMZ - 276	シャシャンボ	その他	割材	割材	
						SMZ - 277	コナラ属 アカガシ亜属	その他	割材	割材	
						SMZ - 278	ヤマハゼ	その他	割材	割材	

京都府遺跡調査報告集 第173冊

No	樹種	種別	器種集計	器種	報告番号	No	樹種	種別	器種集計	器種	報告番号
SMZ - 279	ヒノキ	容器	容器	不明		SMZ - 343	ハンノキ属 ハンノキ節	自然木	自然木	—	
SMZ - 280	クリ	その他	加工木	残材		SMZ - 344	スダジイ	自然木	自然木	—	
SMZ - 281	ヒノキ	用途不明	他製品	不明		SMZ - 345	ツブラジイ	不明	加工木	—	
SMZ - 282	ヒノキ	その他	割材	割材		SMZ - 346	モミ属	自然木	自然木	—	
SMZ - 283	ツバキ属	その他	割材	割材		SMZ - 347	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—	
SMZ - 284	コナラ属 アカガシ亜属	農具	鋤鉞	又鉞	480	SMZ - 348	ヒノキ	その他	割材	割材か	
SMZ - 285	ヒノキ	その他	割材	割材		SMZ - 349	ヒノキ	自然木	自然木	—	
SMZ - 286	ムクノキ	その他	割材	割材		SMZ - 350	トチノキ	自然木	自然木	—	
SMZ - 287	ヒノキ	その他	加工木	加工木		SMZ - 351	カヤ	自然木	自然木	—	
SMZ - 288	ヒノキ	用途不明	他製品	不明	532	SMZ - 352	ヒノキ	自然木	自然木	—	
SMZ - 289	ツブラジイ	その他	加工木	加工木		SMZ - 353	サカキ	自然木	自然木	—	
SMZ - 290	ヒノキ	その他	割材	割材		SMZ - 354	スダジイ	自然木	自然木	—	
SMZ - 291	ムクノキ	その他	割材	割材		SMZ - 355	×	自然木	自然木	—	
SMZ - 292	コナラ属 アカガシ亜属	その他	原材	原材		SMZ - 356	×	自然木	自然木	—	
SMZ - 293	ムクノキ	その他	割材	割材		SMZ - 357	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—	
SMZ - 294	×	その他	割材	割材		SMZ - 358	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—	
SMZ - 295	×	その他	割材	割材		SMZ - 359	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—	
SMZ - 296	ムクノキ	その他	加工木	加工木		SMZ - 360	ツバキ属	自然木	自然木	—	
SMZ - 297	ムクノキ	杭	建築材	柱杭		SMZ - 361	クリ	その他	加工木	木端	
SMZ - 298	ヒノキ	その他	割材	割材		SMZ - 362	(欠番)				
SMZ - 299	コナラ属 アカガシ亜属	その他	割材	割材		SMZ - 363	×	自然木	自然木	—	
SMZ - 300	モミ属	不明	加工木	不明		SMZ - 364	トチノキ	自然木	自然木	—	
SMZ - 301	トチノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 365	イチイガシ	自然木	自然木	—	
SMZ - 302	カエデ属	自然木	自然木	—		SMZ - 366	クスノキ科	自然木	自然木	—	
SMZ - 303	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—		SMZ - 367	クワ属	自然木	自然木	—	
SMZ - 304	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—		SMZ - 368	ヒノキ	自然木	自然木	—	
SMZ - 305	カエデ属	自然木	自然木	—		SMZ - 369	クリ	自然木	自然木	—	
SMZ - 306	クスノキ科	自然木	自然木	節		SMZ - 370	ツブラジイ	自然木	自然木	—	
SMZ - 307	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—		SMZ - 371	ツバキ属	自然木	自然木	—	
SMZ - 308	エノキ属	自然木	自然木	—		SMZ - 372	ツバキ属	自然木	自然木	—	
SMZ - 309	エノキ属	自然木	自然木	—		SMZ - 373	クワ属	自然木	自然木	—	
SMZ - 310	カエデ属	その他	自然木	自然木		SMZ - 374	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—	
SMZ - 311	サカキ	自然木	自然木	—		SMZ - 375	イヌガヤ	自然木	自然木	—	
SMZ - 312	サカキ	自然木	自然木	—		SMZ - 376	カエデ属	自然木	自然木	—	
SMZ - 313	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—		SMZ - 377	コナラ属	自然木	自然木	—	
SMZ - 314	クズ	自然木	自然木	—		SMZ - 378	クリ	自然木	自然木	—	
SMZ - 315	クワ属	自然木	自然木	—		SMZ - 379	キイチゴ属	自然木	自然木	—	
SMZ - 316	ムクノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 380	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—	
SMZ - 317	カエデ属	自然木	自然木	—		SMZ - 381	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—	
SMZ - 318	コウソウ属	自然木	自然木	—		SMZ - 382	クワ属	自然木	自然木	—	
SMZ - 319	クワ属	自然木	自然木	表皮		SMZ - 383	キハダ	自然木	自然木	—	
SMZ - 320	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—		SMZ - 384	モミ属	自然木	自然木	—	
SMZ - 321	トチノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 385	コナラ属 クスギ節	その他	割材	割材	
SMZ - 322	モミ属	自然木	自然木	—		SMZ - 386	ハンノキ属 ハンノキ節	自然木	自然木	—	
SMZ - 323	チドリノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 387	クリ	自然木	自然木	—	
SMZ - 324	ヒノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 388	カエデ属	自然木	自然木	—	
SMZ - 325	カエデ属	自然木	自然木	—		SMZ - 389	アスナロ	自然木	自然木	—	
SMZ - 326	トチノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 390	スダジイ	自然木	自然木	—	
SMZ - 327	クズ	自然木	自然木	—		SMZ - 391	イヌガヤ	自然木	自然木	—	
SMZ - 328	トチノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 392	クマシデ属 イヌシデ節	自然木	自然木	—	
SMZ - 329	×	自然木	自然木	—		SMZ - 393	ツブラジイ	自然木	自然木	—	
SMZ - 330	カエデ属	自然木	自然木	—		SMZ - 394	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—	
SMZ - 331	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—		SMZ - 395	バラ属	自然木	自然木	—	
SMZ - 332	トチノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 396	ツブラジイ	自然木	自然木	—	
SMZ - 333	ムクノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 397	モミ属	自然木	自然木	—	
SMZ - 334	クスノキ科	自然木	自然木	—		SMZ - 398	サカキ	自然木	自然木	—	
SMZ - 335	ヒノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 399	エノキ属	自然木	自然木	—	
SMZ - 336	エノキ属	自然木	自然木	—		SMZ - 400	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—	
SMZ - 337	クワ属	自然木	自然木	—		SMZ - 401	エノキ属	自然木	自然木	—	
SMZ - 338	ムクノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 402	クワ属	自然木	自然木	—	
SMZ - 339	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—		SMZ - 403	ツバキ属	自然木	自然木	—	
SMZ - 340	クワ属	自然木	自然木	—		SMZ - 404	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—	
SMZ - 341	ヒノキ	自然木	自然木	—							
SMZ - 342	クワ属	自然木	自然木	—							

新名神高速道路関係遺跡発掘調査報告

No	樹種	種別	器種集計	器種	報告番号	No	樹種	種別	器種集計	器種	報告番号
SMZ - 405	ヤナギ属	自然木	自然木	—		SMZ - 462	コナラ属 コナラ節	自然木	自然木	—	
SMZ - 406	クワ属	自然木	自然木	—		SMZ - 463	クリ	自然木	自然木	—	
SMZ - 407	ムクノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 464	ツバキ属	自然木	自然木	—	
SMZ - 408	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—		SMZ - 465	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—	
SMZ - 409	カエデ属	自然木	自然木	—		SMZ-466 ~ 500 (欠番)					
SMZ - 410	ヤマハゼ	自然木	自然木	—		SMZ - 501	コナラ属 アカガシ亜属		不明		
SMZ - 411	ツブラジイ	自然木	自然木	—		SMZ - 502	クスノキ		不明		
SMZ - 412	ムクノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 503	クワ属		不明		
SMZ - 413	ムラサキシキ ブ属	自然木	自然木	—		SMZ - 504	トチノキ		不明		
SMZ - 414	トチノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 505	エノキ属		不明		
SMZ - 415	トチノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 506	広葉樹		不明		
SMZ - 416	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—		SMZ - 507	ムクノキ		不明		669
SMZ - 417	ニワトコ	自然木	自然木	—		SMZ - 508	キハダ		不明		634
SMZ - 418	カエデ属	自然木	自然木	—		SMZ - 509	イチイガシ		不明		638
SMZ - 419	ムクノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 510	クワ属		不明		655
SMZ - 420	ムクノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 511	ヒノキ		不明		530
SMZ - 421	クワ属	自然木	自然木	—		SMZ - 512	ヒノキ		不明		533
SMZ - 422	トチノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 513	ヒノキ		不明		551
SMZ - 423	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—		SMZ - 514	スギ		不明		506
SMZ - 424	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—		SMZ - 515	ヒノキ		不明		505
SMZ - 425	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—		SMZ - 516	イチイガシ		不明		479
SMZ - 426	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—		SMZ - 517	コナラ属 アカガシ亜属		不明		485
SMZ - 427	ムクノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 518	ヒノキ		不明		555
SMZ - 428	クワ属	自然木	自然木	—		SMZ - 519	ヒノキ		不明		507
SMZ - 429	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—		SMZ - 520	スギ		不明		495
SMZ - 430	ツバキ属	自然木	自然木	—		SMZ - 521	スギ		不明		494
SMZ - 431	チドリノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 522	コナラ属 コナラ節		不明		578
SMZ - 432	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—		SMZ - 523	ヒノキ		不明		569
SMZ - 433	コナラ属 コナラ節	自然木	自然木	—		SMZ - 524	イチイガシ		不明		527
SMZ - 434	ニワトコ	自然木	自然木	—		SMZ - 525	ヒノキ		不明		541
SMZ - 435	クワ属	自然木	自然木	—		SMZ - 526	スギ		不明		516
SMZ - 436	チドリノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 527	クスノキ		不明		518
SMZ - 437	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—		SMZ - 528	スギ		不明		517
SMZ - 438	クワ属	自然木	自然木	—		SMZ - 529	ヒノキ		不明		552
SMZ - 439	ツタ	自然木	自然木	—		SMZ - 530	スギ		不明		544
SMZ - 440	ムクノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 531	ヒノキ		不明		576
SMZ - 441	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—		SMZ - 532	ヒノキ		不明		514
SMZ - 442	×	自然木	自然木	—		SMZ - 533	ツバキ属		不明		560
SMZ - 443	モミ属	自然木	自然木	—		SMZ - 534	ヒノキ		不明		499
SMZ - 444	バラ属	自然木	自然木	—		SMZ - 535	ヒノキ		不明		554
SMZ - 445	ハンノキ属 ハンノキ節	自然木	自然木	—		SMZ - 536	スギ		不明		523
SMZ - 446	ユズリハ属	自然木	自然木	—		SMZ - 537	モミ属		不明		501
SMZ - 447	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—		SMZ - 538	×		不明		539
SMZ - 448	エノキ属	自然木	自然木	—		SMZ - 539	ツバキ属		不明		559
SMZ - 449	ムクノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 540	ツブラジイ		不明		557
SMZ - 450	トチノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 541	モッコク		不明		561
SMZ - 451	ツバキ属	自然木	自然木	—		SMZ - 542	ヒノキ		不明		644
SMZ - 452	クスノキ科	自然木	自然木	—		SMZ - 543	ヒノキ		不明		640
SMZ - 453	ムクロジ	自然木	自然木	—		SMZ - 544	ヒノキ		不明		639
SMZ - 454	ムクロジ	自然木	自然木	—		SMZ - 545	スギ		不明		528
SMZ - 455	ムクノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 546	ヒノキ		不明		500
SMZ - 456	モモ	自然木	自然木	—		SMZ - 547	スギ		不明		577
SMZ - 457	×	自然木	自然木	—		SMZ - 548	イチイガシ		不明		487
SMZ - 458	コナラ属 アカガシ亜属	自然木	自然木	—		SMZ - 549	イヌガヤ		不明		649
SMZ - 459	トチノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 550	ムクロジ		不明		590
SMZ - 460	ムクノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 551	コウヤマキ		不明		594
SMZ - 461	トチノキ	自然木	自然木	—		SMZ - 552	ヒノキ		不明		591
						SMZ - 553	サカキ		不明		488
						SMZ - 554	ケヤキ		不明		489
						SMZ - 555	ヒノキ		不明		486
						SMZ - 556	イチイガシ		不明		660
						SMZ - 557	ヒノキ		不明		636
						SMZ - 558	ツブラジイ		不明		542
						SMZ - 559	ヒノキ		不明		
						SMZ - 560	モミ属		不明		483
						SMZ - 561	ヒノキ		不明		498

付編5 下水主遺跡 S D 22 土壌サンプルの種実の同定

第1節 土壌水洗の方法

西原和代・岡田麻衣子・鶴来航介・高橋悠・柳原麻子・浦蓉子(有機質遺物研究会)
村上由美子(京都大学総合博物館)・佐々木由香(明治大学黒耀石研究センター)

1. はじめに(報告の経緯)

下水主遺跡は木器を含む有機質遺物が多く出土した低湿地遺跡である。近年、低湿地遺跡の発掘において土壌水洗は盛んにされるようになってきたものの、関東以北の実施件数に比べると、京都府を含む関西圏ではやや低調である。低湿地遺跡の土壌水洗を行うことで、肉眼では検出困難な動植物遺体の検出が可能になり、古環境の理解の助けとなることは広く認識されているものの、手間や時間の関係で優先順位が高くなく、後回しになっているのが現状であろう。

本節では、下水主遺跡の種実同定分析の前処理として実施した土壌水洗の方法について報告する。本報告では、発掘調査現場でも少ない物品で可能な「試し洗い」と、その後本格的な水洗が決定した後に行う定量での水洗選別法の両方について手順を示す。現場で試し洗いを行うことで、その後量を増やして水洗するかを決定することができ、時間の節約になるだけでなく、水洗作業を遺跡発掘者がすることで遺跡についての理解をより深めることができる。また、最終的に検出した動植物遺存体を専門家に分析依頼する際にも、土壌水洗と出土種実の抽出がある程度完了していることで費用の削減が可能になる。

有機質遺物研究会では、低湿地遺跡における土壌水洗による古環境復元の手法を学び、関西でまだ取り組みの少ない同手法を普及する必要があると考え、下水主遺跡の土壌水洗を実施した。

2. 作業の手順

(1) 作業を始める前に

[土層の観察]

土壌水洗前に、試料の層位及び特徴を確認し層序と採取場所を記載する。対象とする下水主遺跡の層位は、B地区 S D 22の断面3、護岸材E上層で柱状に採取した種実を多量に含む層位である。

[物品準備]

土壌水洗では表1の物品を使用した。これらは一般の小売店で容易に購入することができる。また簡易な方法であるため作業の全てを一人で行うことも可能である。

表1 用意する物品のリスト

共通して必要な物品(※)	金属フルイ(目が2mm、1mm、0.5mmのものそれぞれ1ヶ)、排水溝用水切りネット(0.5mm程度)、洗面器、水切りザル、茶こし、洗浄ビン、紙コップ、アルミ製ピンセット、チャック付きポリ袋、プラカップ、計量カップ、小スコップ、ブラシ(フルイ洗い用)、密閉タッパーウェア、スプーン、実体顕微鏡、ビニール手袋、ガラス皿など
試し洗い・水源がない場合	(※に加えて)洗面器(追加で2ヶ程度)
本格的な水洗作業	(※に加えて)ゴムホース、コンテナ

[分析試料の採取]

試料は、発掘調査現場で層序が確認できる柱状サンプル(写真1)で採取する場合と、分層後の各層位からブロックサンプルとして採取する場合がある。土壌採取量の目安は微小種実が多い堆積物の場合、100～500cc程度である〔奈良文化財研究所埋蔵文化財センター2014〕。

土壌水洗のほか、花粉分析や珪酸体分析等を予定している場合や将来的に分析できる余地を残すため、余分に堆積物を採取しておく。

(2) 試し洗い

試し洗いは、各層から100cc分のみ採取して行った。方法は(3)に示す。

現場では試し洗いを先に行うことで、本格的に水洗作業をするべき堆積物かどうか、またする際にどのような遺体が出て来る可能性があるかの目星をつけることができる。

(3) 土壌水洗

土壌水洗の手順は以下のとおりである。

1. 1000ccが計量可能な計量カップに800ccの水を入れ、少しずつ堆積物を入れ、全体が900ccになるまで続け、体積100ccを計算する(写真2)。

2. 1の計量カップをかき混ぜ、よく水と堆積物が混ざるようにする。その後、上に浮いてきた大きな遺体を茶こしですくうか、軽く水洗いしてよけておく(写真3)。浮遊物は層位名を書いたラベルと共に炭化物は水切りゴミ袋、生の植物遺体ならチャック付きポリ袋に入れ保管しておく。



写真1 柱状サンプル



写真2 堆積物の計量

3. 1の計量カップの水をよくかき混ぜながら、2mm、1mm、0.5mmの篩を重ねて上から通す。下に置いた洗面器で通した水を受ける。水道が使える場合は、ホースやシャワーを使い計量カップに水を入れながらこの工程を行う。

4. 計量カップに沈殿物が残らなくなるまで、複数回、工程3を繰り返す。

5. 目の粗い篩から順に、コンテナか洗面器の中で水を入れ、ゆすぐようにして泥をよく落とす(写真4)。泥が落ち水が透明になってくるまでよく洗う。目の粗い篩をゆすいだ後は順次細かい篩を通すようにし、動植物遺体を逃さないように注意する。

6. 泥が綺麗に落ちたら、篩の裏からホースや洗浄ビンで水を流し、篩ごとにチャック付きポリ袋やプラスチックカップへ全て移す(写真5)。ポリ袋に試料採取日、ふるい日、層位、篩の目の粗さ等を記入し保管する。

なお、下水主遺跡S D22の土壌水洗作業では、水洗に1400cc分で合計17人時かかっている。目の粗い篩より細かい篩、砂層よりシルト層の方が時間がかかる等、個別の要素による変動はあるためおよその値だが、100ccを洗うのに1.2人時かかることになり、不慣れな者でも2～3人で25～35分程度で100ccを水洗できる計算になる。



写真3 浮遊物の抽出



写真4 堆積物の洗浄



写真5 堆積物の選別

(4) 種実の抽出

S D22土壌サンプルからの種実の抽出は、肉眼及び実体顕微鏡下で行った。各層100cc分の試し洗い分について、種実の抽出を行い、各層位の産出傾向を確認した。試し洗い分では各層から種実が一定量検出されたため、本格的な水洗作業に移ることとなった。

抽出の際、シャーレ等が用意できない場合は紙コップ等の底を2cm程度の高さに切り、水をいれて観察すると便利であった。種実の抽出時には通常のピンセットでは脆弱になった種実を潰してしまうため、アルミ製ピンセットを使用するとよい。

本項における種実の抽出は試し洗い→定量洗いの段階まで専門家ではない学生を主体として行われ、その後、実体顕微鏡下での簡易な抽出ののち、抽出物とその残滓を含め全てについて、分

析同定者がチェックした。抽出作業では発見できなかったものが残滓から検出する例も多々あり、専門家によるダブルチェックは必須である。

土壌水洗の手順は(2)と同様だが、今回は最も採取出来る量の少ない層に合わせ、試し洗いの100cc分に追加して、各層200ccを洗うこととした。その結果については第2節に記載している。

なおここでもおおよその作業時間をあげておくと、1400cc分の種実の抽出を行うのに48.5人時、100ccあたり約3.5時間かかった。

(5)土壌・種実の保存

水洗対象外の堆積物は、層位の再確認や今後の再検査のため、可能であれば柱状ブロックのまま冷暗所にて保存しておくのが望ましい。しかし、保管場所の問題のため、S D22サンプルは残存堆積物を小分けにし、タッパーウェアで冷蔵庫にて保管した。

種実は種実同定までの間、ブロックの採取日、ふるい日、層位、篩の目の粗さ別に小分けにして密閉チャック袋に少量の水とともにいれて直射日光のあたらない室内で常温保管した。水洗が充分でなく水が濁ってきた試料は水を入れ替えた。

種実同定後は種別に分け、水とともにサンプル容器などの密閉容器で保管している。

(6)その他

使った物品は写真6のとおりである(複数個あるものは省略している)。

作業当初は素手で作業していたが、爪の間に種実が入ったりすることがあるため、ビニール手袋を常時して作業した。物品準備にかかった費用のうち紙コップ、チャック付きポリ袋等の消耗品は5,000円弱であった。この金額には篩・実体顕微鏡は含まれない。



写真6 使用物品一覧

(7)まとめ

今回大型植物遺体分析を実施した下水主遺跡のように、種実をはじめ有機質遺物が遺存していることが予想される遺跡においては、本節で述べた簡易な水洗選別法による試し洗いで、発掘調査現場でも出土する動植物遺体の量・種類の一定の目安をつけることができる。これによりその後の洗いを実施するかを検討可能になる。

また、その後の本格的な定量的水洗を一定の手順にのっとり実施して、簡便に種実の種類を分けておくだけでも、専門家へ依頼したあとの工程が減ることになる。注意点として、水洗前の層序の確認や層毎の特徴の記録・篩の目の粗さ・層位を記録すること、また専門家でない作業員によって抽出されたもの以外も残滓としてまとめておき、専門家によるチェックを依頼することもある。

本節では、最終的にチェックを依頼する専門家との連携をもちつつ、現場や設備の乏しい場所でも、経験のない作業主体で十分に行えることを示すため、実際の作業量や物品購入費に関してもあえて提示している。下水主遺跡の種実同定分析の前処理である土壌水洗方法について報告した今回の事例が、今後水洗を試みる方々の参考になれば幸いである。

参考文献

独立行政法人国立奈良文化財機構 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 2014『現場のための環境考古学』埋蔵文化財ニュース 155

第2節 S D22から出土した大型植物遺体

柳原麻子・佐々木由香・岡田麻衣子・鶴来航介・高橋悠・西原和代・浦蓉子

1. はじめに

以下では、第1節に示した方法で下水主遺跡の堆積物より得られた大型植物遺体を同定し、遺跡周辺の環境や植物利用について考察した。

2. 試料と方法

大型植物遺体を検討した堆積物は、平成26年度調査時に検出されたS D22で弥生時代中期後葉から古墳時代前葉の層位より柱状に採取したものである。それをA1層(粘土ブロック・粘砂)・A2層(粘質土)・A2層下(シルト～細砂)・A3層(砂層)・B1層(ラミナ層)・B2層(砂質土)・B3層(砂質土・木片混る)に分層し、層相ごとに300ccずつ水洗した。A層は粘質土から砂、B層はラミナ層から砂質土であり、それぞれ古墳時代初頭から前葉と、弥生時代中期後葉に属する。水洗方法は第1節を参照されたい。

抽出した試料は、図鑑や現生標本と比較して、実体顕微鏡下で同定と計数作業を行った試料は、層位とふるいの目ごとに分け、水漬けの状態で管理し、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターに保管している。

3. 結果

同定した結果、木本植物21分類群と草本植物21分類群の大型植物遺体やその他の有機物片が確認できた(表1)。以下に、堆積物より採取した大型植物遺体の一覧と形態を示し、同定の根拠とする。

木本植物では、針葉樹のヒノキ葉と、モミ葉、ツガ葉の3分類群、広葉樹のブドウ属種子と、キイチゴ属核、ムクノキ核、クワ属核、ミズナラ～ナラガシワ幼果、イチイガシ葉・果実、コナ

ラ属アカガシ亜属果実・幼果・殻斗、コナラ属果実、アカメガシワ種子、イタヤカエデ種子、ミツデカエデ種子、トチノキ種子、キハダ種子、ミズキ核、エゴノキ核、マタタビ属種子、ニワトコ核、タラノキ核の18分類群が得られた。

草本植物では、スゲ属アゼスゲ節果実と、スゲ属果実、ホタルイ属果実、ヒエ属有ふ果、イネ籾殻、アワ炭化種子、エノコログサ属有ふ果、ハギ属果実、タネツケバナ属種子、ミズヒキ果実、ヤナギタデ果実、サナエタデ・オオイヌタデ果実、オランダイチゴ属・ヘビイチゴ属果実、カラムシ属果実、ノミノフスマ種子、ウシハコベ種子、アカザ属種子、ヤマゴボウ種子、ナス属種子、メハジキ属果実、メナモミ属果実の21分類群が得られた。

次に記載を行う。植物の分類群名は、米倉・梶田(2007)に準拠した。

- (1) ヒノキ *Chamaecyparis obtuse* (Sieb. et Zucc.) Endl. 葉 ヒノキ科

黒～茶褐色である。鱗片状の葉をもつ。茎の先端まで葉が密着する。残存長1.5～8.0mm、幅0.8～2.0mm。

- (2) モミ *Abies firma* Siebold et Zucc. 葉 マツ科

黒～茶褐色である。先端が2つに分かれ、基部は吸盤状である。長さ13.7mm、幅2.1mm。

- (3) ツガ *Tsuga sieboldii* Carrière 葉 マツ科

黒～茶褐色である。先端が2つに分かれる。長さ7.1mm、幅1.5mm。

- (4) ブドウ属 *Vitis* sp. 種子 ブドウ科

茶褐色で木質、完形ならば側面観は広卵形。先端は尖る。残存長1.5mm、残存幅3mm。

- (5) キイチゴ属 *Rubus* sp. 核 バラ科

茶褐色で、側面観は半横広卵形。背面は鈍い三角形の突起が中心線の両側に1列ずつ並ぶ。腹面には浅い溝がある。長さ1.7mm、幅1.3mm。

- (6) クワ属 *Morus* sp. 核 クワ科

黄褐色で、側面観が楕円形で先端が尖るものと、側面観が半広卵形で背面が丸みを帯びるものがある。表面には幅広い浅い凹みがある。長さ1.5～2.0mm、幅1.0～1.5mm。

- (7) ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. 核 アサ科

黒～茶褐色で、完形ならば広倒卵形。表面はざらつく。残存長3.5～4.0mm、残存幅3.0～3.5mm。

- (8) ミズナラ・ナラガシワ *Quercus crispula* Blume / *Quercus aliena* Blume 幼果 ブナ科

茶褐色で、果実は殻斗に包まれている。殻斗は覆瓦状の鱗片に覆われる。高さ4.7mm、幅6.9mm。

- (9) イチイガシ *Quercus gilva* Blume 果実 ブナ科

黒褐色で、側面観は楕円形。へそが大きく膨らむ。高さ11.5mm、幅8.8mm。幼果も産出した。殻斗に包まれている状態であり、花柱の首は太い。柱頭は4つに分裂する。幼果の果実と殻斗の表面は平滑である。高さ7.1mm、幅4.5mm。

- (10) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* 果実・幼果・殻斗 ブナ科

果実は黒褐色で、完形ならば側面観は楕円形。表面は平滑。残存高3.1mm、残存幅7.4mm。

殻斗は茶褐色で、椀状。輪状紋をもつためアカガシ亜属と同定した。残存幅11.7mm。

(11) コナラ属 *Quercus* sp. 果実 ブナ科

茶褐色で、完形ならば側面観は楕円形。長軸に平行する浅い溝がある。

(12) アカメガシワ *Mallotus japonicus* (L.f.) Müll.Arg. 種子 トウダイグサ科

黒色で、側面観は広楕円状円形。表面は凸凹が激しく、ざらつく。長さ3.0~3.5mm、幅3.0~3.5mm。

(13) イタヤカエデ *Acer pictum* Thunb. 種子 ムクロジ科

黒褐色で、側面観は両端が尖る長楕円形。背面には稜がある。表面はざらつく。長さ10.8mm、幅5.6mm。

(14) ミツデカエデ *Acer cissifolium* (Siebold et Zucc.) K.Koch 種子 ムクロジ科

茶褐色で、側面観は両端が尖る倒卵形。表面はざらつく。長さ6.8mm、幅4.4mm。

(15) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 種子 ムクロジ科

黒褐色で、完形ならば球形。表面は上半部分が平滑であり、下半部分はざらつく。残存長10.5mm、残存幅15.1mm。

(16) キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. 種子 ミカン科

黒色で、完形ならば側面観は横卵形。先端は尖る。表面には浅い凹みによる網目模様がある。残存長2.3mm、残存幅1.5mm。

(17) ミズキ *Cornus controversa* Hemsl. 核 ミズキ科

茶褐色で、側面観は偏球形。縦方向に浅く溝が走る。中央には着点である大きな凹みがある。長さ4.5mm、幅4.7mm。

(18) エゴノキ *Styrax japonica* Sieb.et Zucc. 核 エゴノキ科

黒色で、完形ならば側面観は狭楕円体。端には着点がある。表面はざらつく。残存長6.5mm、残存幅4.1mm。

(19) マタタビ属 *Actinidia* spp. 種子 マタタビ科

茶褐色~黒色で、側面観は狭楕円形、腹面には稜がある。表面には円形の凹みによる網目模様がある。長さ1.4~1.6mm、幅1.3mm。

(20) ニワトコ *Sambucus racemosa* L. subsp. *Sieboldiana* (Miq.) Hara 核 レンブクソウ科

黄色~暗淡赤色で、側面観は狭楕円、上面観は楕円形。表面にはいぼ状の隆条が並ぶ。腹面には着点である凹みがある。長さ2.2~2.7mm、幅1.2~1.6mm。

(21) タラノキ *Aralia elata* (Miq.) Seem. 核 ウコギ科

淡い茶褐色で、完形ならば側面観は長楕円形。表面はスポンジ状で、小さな凸凹が多くある。残存長2.3mm、幅1.3mm。

(22) スゲ属アゼスゲ節 *Carex* sect. *Carex* sp. 果実 カヤツリグサ科

黒色で、側面観は広卵形、上面観はやや扁平。逆刺が生える。長さ1.9mm、幅1.3mm。

(23) スゲ属 *Carex* sp. 果実 カヤツリグサ科

黒色で、側面観は楕円形、上面観は三稜形。表面はややざらつく。長さ2.1mm、幅1.0mm。

(24) ホタルイ属 *Scirpus* spp. 果実 カヤツリグサ科

黒色で、側面観は広卵形、上面観は平凸レンズ形。逆刺が生える。表面はざらつく。長さ1.7～1.9mm、幅1.4～1.8mm。

(25) ヒエ属 *Echinochloa* spp. 有ふ果 イネ科

黄褐色で、側面観は楕円形、上面観はやや扁平。背面はやや膨らみ、先端がやや尖る。表面は平滑。長さ2.2mm、幅1.4mm。

(26) イネ *Oriza sativa* L. 粃殻 イネ科

黄褐色で、側面観は狭楕円形、上面観は扁平。先端は尖る。縦方向に2本溝が走る。長さ7.5mm、幅1.4mm。

(27) アワ *Setaria italica* (L.) P.Beauv. 炭化種子 イネ科

いびつな球形。背面には浅い縦溝がある。胚は長さ0.3mmほどである。長さ1.2mm、幅1.2mm。

(28) エノコログサ属 *Setaria* sp. 有ふ果 イネ科

褐色～茶褐色で、側面観は楕円形、上面観は扁平。表面には畝状の顆粒状突起があるため、野生のエノコログサに近い種類である。長さ2.5～2.7mm、幅1.5～1.6mm。

(29) ハギ属 *Lespedeza* sp. 果実 マメ科

茶褐色で、側面観は広卵形、上面観は扁平。先端がやや尖る。表面は平滑で、わずかに脈状の模様がある。長さ2.9mm、幅2.2mm。

(30) タネツケバナ属 *Cardamine* sp. 種子 アブラナ科

黄褐色で、側面観は楕円状の長方形、上面観は扁平。表面には細かい網目模様がある。長さ1.2mm、幅0.9～1.0mm。

(31) ミズヒキ *Persicaria filiformis* (Thunb.) Nakai ex W.T.Lee 果実 タデ科

黒色で、側面観は卵形、上面観は扁平。先端は尖る。長さ3.1～3.5mm、幅2.3～2.5mm。

(32) ヤナギタデ *Persicaria hydropiper* (L.) Delarbre 果実 タデ科

茶褐色～黒色で、側面観は広卵状円形または楕円形、上面観は狭卵形。背面には鈍い稜がある。表面には細かい網目模様がある。長さ2.6～3.5mm、幅1.6～2.3mm。

(33) サナエタデ－オオイヌタデ *Persicaria scabra* (Moench) Mold/P. *lapathifolia* (L.) S.F.Gray
果実 タデ科

黒色で、側面観は広卵形、上面観はやや扁平。背面は膨らみ、腹面は平坦。下端には太く短い突起状の花柱基部がある。基部から伸びる逆刺が残る個体もある。表面は平滑。長さ2.6mm、幅1.6～1.7mm。

(34) オランダイチゴ属－ヘビイチゴ属 *Fragaria* sp./ *Duchesnea* sp. 果実 バラ科

黄褐色で、側面観は非対称の横広卵形、上面観は楕円形。腹面の中央には着点がある。表面は

平滑。長さ1.8mm、幅0.6mm。

(35) カラムシ属 *Boehmeria* sp. 果実 イラクサ科

淡黄褐色で、側面観は広卵形、上面観は紡錘状。先端は尖る。表面はざらつく。長さ0.6mm、幅0.5mm。

(36) ノミノフスマ *Stellaria alsine* Grimm var. *undulate* (Thunb.) 種子 ナデシコ科

茶褐色で、円形。表面にはいぼ状の突起がある。長さ0.7mm、幅0.7mm。

(37) ウシハコベ *Myosoton aquaticum* (L.) Moench 種子 ナデシコ科

黒色で、側面観は円形、上面観は扁平。表面にはいぼ状の突起が密生する。長さ1.0mm、幅0.6mm。

(38) アカザ属 *Chenopodium* spp. 種子 ヒユ科

黒色で、側面観は円形～楕円形、上面観は扁平。表面は平滑で、光沢がある。長さ1.0～1.3mm、幅0.8～1.1mm。

(39) ヤマゴボウ *Phytolacca acinosa* Roxb. 種子 ヤマゴボウ科

黒色で、完形ならば側面観は円形。表面には着点を中心とした細線状隆状による同心円状の模様がある。光沢がある。残存長2.2mm、残存幅1.9mm。

(40) ナス属 *Solanum* sp. 種子 ナス科

黄褐色で、側面観は腎臓状円形、上面観は扁平。表面には網目模様がある。長さ2.0mm、幅1.7mm。

(41) メハジキ属 *Leonurus* sp. 果実 シソ科

黒色で、腹面には中央の縦の稜線がある。表面はややざらつく。長さ2.0mm、幅1.2mm。

(42) メナモミ属 *Sigesbeckia* spp. 果実 キク科

黒褐色で、三角状菱形。表面には細かい縦溝や、細かいいぼ状の突起がある。長さ2.5mm、幅1.2mm。

(43) 不明 Unknown 芽

茶褐色～黒褐色である。縦方向に繊維状の筋が走る。長さ2.8～5.5mm。

4. 環境の遷移

以下では大型植物遺体の産出状況を層相ごとにまとめ、調査地の植生の変化について考察した。

B3層：木本植物7分類群、草本植物10分類群が得られた。木本植物には針葉樹のヒノキとモミ、ツガ、落葉高木のキハダとミズキ、落葉低木のキイチゴ属とタラノキが産出した。草本植物は湿地や水辺に生息するスゲ属アゼスゲ節や、ホタルイ属、ヤナギタデが多く、次いで路傍や空き地に生息するエノコログサ属やサナエタデ・オオイヌタデ、アカザ属、山野などに生息するメナモミ属などが産出した。

B2層：木本植物3種類、草本植物1種類が得られた。他の層位と比較して植物遺体の分類群数と産出数は少なかった。木本植物として落葉樹のムクノキとキイチゴ属、クワ属が、栽培植物

としてアワが産出した。

B1層：ラミナ層である。木本植物7種類、草本植物2種類が得られた。木本植物は針葉樹のモミ、落葉高木のムクノキとクワ属、落葉つる植物のマタタビ属などが産出した。草本植物はスゲ属、湿地や水辺に生息するヤナギタデが産出した。

A3層：木本植物10種類、草本植物2種類が得られた。木本植物の分類群が増加する。B層で見られた針葉樹のヒノキや落葉高木のムクノキに加え、イタヤカエデや、ミズナラーナラガシワ、常緑高木であるイチイガシやアカガシ亜属が見られるようになる。一方で草本植物の分類群は少なく、荒地や路傍に生息するオランダイチゴ属ーヘビイチゴ属とウシハコベが産出した。

A2層下：木本植物9種類、草本植物3種類が得られた。木本植物には針葉樹のモミとツガ、落葉高木のムクノキとイタヤカエデ、アカメガシワ、クワ属、常緑高木のイチイガシやコナラ属アカガシ亜属が見られた。A3層と組成は大きく変わらないが、陽樹のアカメガシワが加わる。草本植物には、荒地や路傍に生息するエノコログサ属やアカザ属が産出した。

A2層：木本植物9種類、草本植物3種類が得られた。木本植物には針葉樹のヒノキとモミ、常緑高木のイチイガシやアカガシ亜属、落葉つる性植物のマタタビ属、落葉低木のニワトコが産出した。B2層からA2層まで多産したムクノキは見られなくなる。草本植物には湿地や荒れ地に生息するタネツケバナ属や林縁に生育するミズヒキ、栽培植物のイネが産出した。

A1層：木本植物8種類、草本植物8種類が得られた。木本植物には針葉樹のヒノキとモミ、ツガ、常緑高木のイチイガシとコナラ属アカガシ亜属、落葉高木のアカメガシワ、落葉つる植物のマタタビ属、落葉低木のニワトコが産出した。草本植物には林縁に生息するミズヒキや、荒地や路傍に生息するカラムシ属やノミノフスマ、メハジキなどが産出した。

層相ごとの植物遺体の検出状況からは、次のような植生の遷移が見られた。まず、B3～B1層では草本植物の産出数や分類群数が多く、特にB3層を中心にスゲ属やホタルイ属、ヤナギタデなどの湿地性の植物が多く産する。木本植物の分類群は少なく、ニワトコやキイチゴ属などの中低木が目立つ。一方でA3～A1層では木本植物の分類群が多様になる傾向にある。特にB3～B1層では針葉樹と落葉樹が主体的であったが、これに常緑高木であるイチイガシやアカガシ亜属が加わる。草本植物では湿地に生息する植物が減少し、荒地や路傍に生息する植物が目立つようになる。

このことから、B3～B1層の時期では湿地や水辺であったのに対し、A3～A1層の時期に水際が後退し、溝周辺の乾いた場所に二次林であるイチイガシやニワトコ、アカメガシワなどの樹木の分布が拡大したことが推定できる。B1層はラミナも見られる。B1層の時期に何らかの環境変化があったことも考えられる。

5. 弥生時代中期後葉～古墳時代前期前葉の植物利用

木本植物には、イチイガシなどの常緑樹や、トチノキ、ミズナラーナラガシワなどの落葉樹、ヒノキやモミ、ツガなどの針葉樹などがあり、草本植物にはホタルイ属やヤナギタデなど水辺や

湿地に近い地点に生息する植物や、タネツケバナ属やウシハコベなどの荒地や路傍に生息する植物があり、溝の近辺が多種類の植物に囲まれていたことがわかる。

今回出土した植物遺体で、果実が食用できるものには、ブドウ属とムクノキ、キイチゴ属、クワ属、マタタビ属がある。またタラノキは若芽を食することもでき、タネツケバナ属やアカザ属、ヤナギタデには葉を食することのできる種類もある。

イネやアワなどの栽培植物や、ヒエ属などの栽培の可能性の高い植物も確認できた。特に、シルト～細砂のA2層の堆積中より検出されたイネは現地で利用された可能性が高いと考えられる。

植物遺体の出土状況からは、確実に食用されていたかは不明であるが、下水主遺跡は周辺で生活する人々が多様な植物を獲得しやすい環境であったと推定される。

6. おわりに

下水主遺跡の植物遺体の分析からは、遺跡が草本植物の多い湿地・水辺の環境から次第に木本植物の多い環境に変化したと推定され、また分析試料には多種類の有用植物が含まれることが明らかとなった。このことから、下水主遺跡に住む人々が森林地や湿地などの多種類の植物が生息する環境を利用し、多様な植物利用を行っていた可能性が高いと推定できた。

この分析は、科学研究費補助金科学研究費補助金基盤研究(A)「縄文時代前半期における森林資源利用体系の成立と植物移入の植物学的解明」(代表：能城修一)(研究課題番号：24240109)の一部を使用して実施した。

引用・参考文献

- 佐竹義輔ほか編1982『日本の野生植物 草本1・2』平凡社
佐竹義輔ほか編1989『日本の野生植物 木本1・2』平凡社
植物文化研究会編1996『花と樹の大事典』柏書房
鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文編2012『草木の種子と果実』誠文堂
中山至大・井之口希秀・南山忠志編2004『日本植物種子図鑑(改訂版)』東北大学出版会
米倉浩司・梶田忠(2003)「BG Plants 和名-学名インデックス」(YList)<http://ylist.info>

<追記> 分析資料は、S D22の4区護岸材Eの上層から採取したサンプルである。A1～3層は、断面3(本文第34・35図参照、巻頭図版第6参照)の古墳時代初頭～前期前葉の層位に、B1～3層は弥生時代中期後葉の層位に対応する。なお、護岸材E直上の植物遺体が多く含まれるB3層(第36図53層に対応)から出土した種実については、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を実施し37-10 cal BC (10.5%) および3 calBC-68 cal AD (84.9%) の暦年代が得られている(付編3参照、巻頭図版第6参照)。

表1 下水主遺跡から出土した大型植物遺体(括弧内は破片数)

分類群	整理番号	A-1	A-2	A-2下	A-3	B-1	B-2	B-3下
ヒノキ	葉	3	4		10			(++)
モミ	葉	(1)	(1)	(1)	1 (1)	(2)		4
ツガ	葉	1		1				5
ブドウ属	種子				(1)			
キイチゴ属	核						1	1
ムクノキ	核			(16)	(7)	(13)	(9)	
クワ属	核		1	2	2	1 (1)	1	
ミズナラ-ナラガシワ	幼果				1			
イチイガシ	葉	(3)	(1)	(1)	(1)			
	果実	1						
	果実	1 (3)	(2)	(2)				
コナラ属アカガシ亜属	幼果				1			
	殻斗				1			
コナラ属	果実			(1)	(1)	(2)		
アカメガシワ	種子	(1)		2				
イタヤカエデ	果実			1	2			
	種子			(1)				
ミツデカエデ	果実		1					
トチノキ	種子		(1)					
キハダ	種子							(1)
ミズキ	核							(2)
エゴノキ	核					(1)		
マタタビ属	種子	1	(1)			2		
ニワトコ	核	(1)	3 (1)			1		
タラノキ	核							(1)
スゲ属アゼスゲ節	果実							1
スゲ属	果実					1		1
ホタルイ属	果実							3
ヒエ属	有ふ果	1						1
イネ	籾殻		(3)					
アワ	炭化種子						1	
エノコログサ属	有ふ果			1				2
ハギ属	果実							1
タネツケバナ属	種子	1	1					
ミズヒキ	果実	1	1					
ヤナギタデ	果実					2		8 (1)
サナエタデ-オオイヌタデ	果実							2
オランダイチゴ属-ヘビイチゴ属	果実				1			
カラムシ属	果実	1						
ノミノフスマ	種子	1						
ウシハコベ	種子				1			
アカザ属	種子	1		2				4
ヤマゴボウ	種子	(1)						
ナス属	種子			1				
メハジキ属	果実	1						
メナモミ属	果実		1					(1)
不明	芽	(++)	(++)	(++)	(+)	(++)		
	種子	12	1					
昆虫		(+)	(++)	(+)	(++)	(+)	(+)	(++)

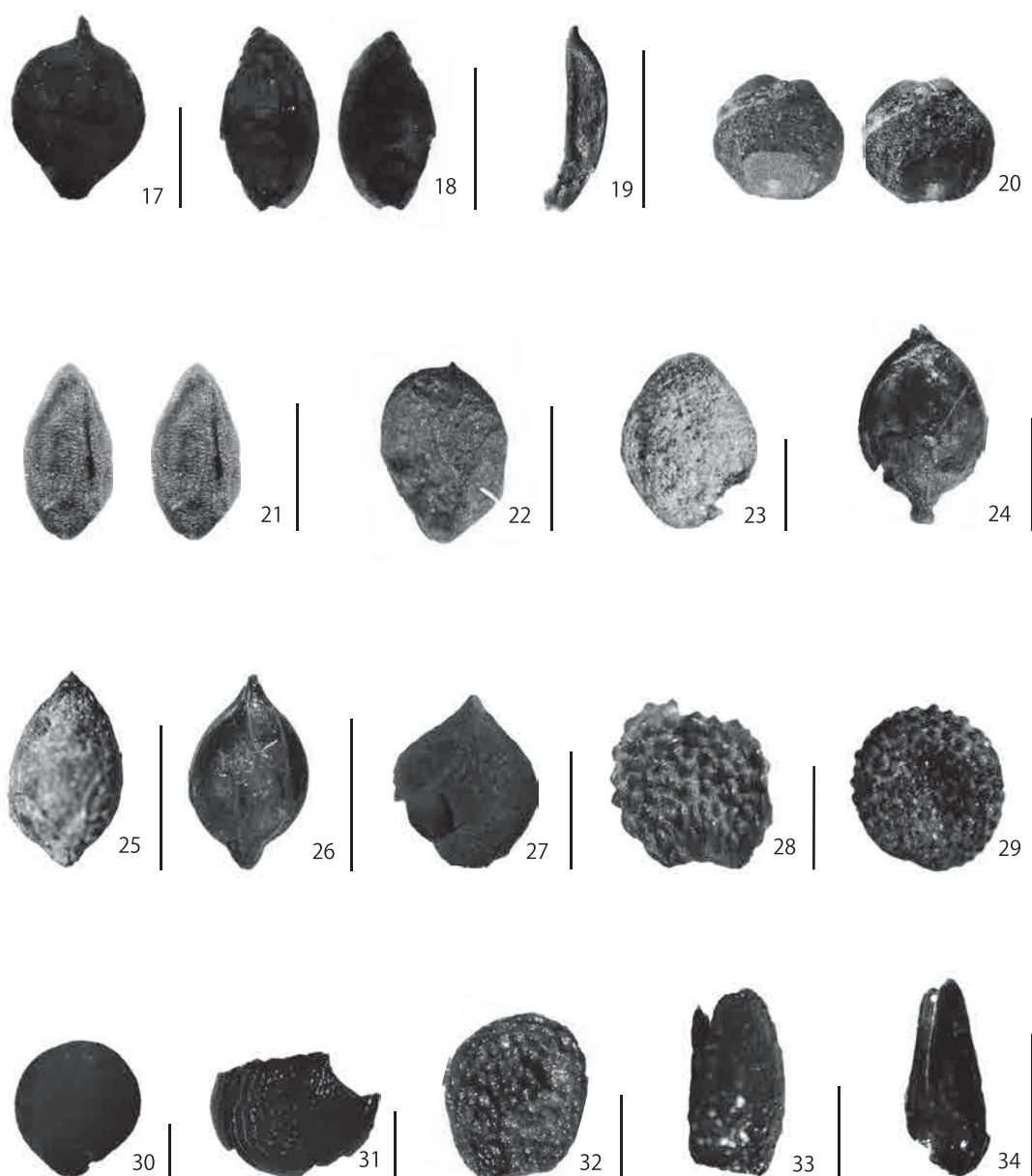
+:1-9、++:10-49



スケール 1mm : 4,6,14,15,16 3mm : 10,13 5mm : 1,2,3,5,7,8,9,11,12

図版1 下水主遺跡から出土した大型植物遺体（木本植物）

1. ヒノキ葉（B3層） 2. モミ葉（B3層） 3. ツガ葉（B3層） 4. キイチゴ属核（B1層） 5. ムクノキ核（B1層）
 6. クワ属核（A3層） 7. ミズナラ・ナラガシワ幼果（A3層） 8. イチイガシ果実（A1層） 9. イチイガシ幼果（A1層）
 10. アカメガシワ果実（A2下層） 11. イタヤカエデ果実（A2下層） 12. ミツデカエデ果実（A2層）
 13. ミズキ核（B3下層） 14. マタタピ属種子（A1層） 15. ニワトコ核（A2層） 16. タラノキ核（B3下層）



スケール 0.5 mm : 23,27,28,29,30 1 mm : 17,19,20,31,32,33 2 mm : 18,21,22,24,25,26,34 5 mm : 19

図版2 下水主遺跡から出土した大型植物遺体(草本植物)

17. スゲ属アゼスゲ節果実 (B3 下層) 18. ヒエ属有ふ果 (A1 層) 19. イネ籾殻 (A2 層) 20. アワ炭化種子 (B2 層) 21. エノコログサ属有ふ果 (B3 下層) 22. ハギ属果実 (B3 層下) 23. タネツケバナ属種子 (A2 層) 24. ミズヒキ果実 (A1 層) 25. ヤナギタデ果実 (B1 層) 26. サナエタデ-オオイスタデ果実 (B3 下層) 27. カラムシ属果実 (A1 層) 28. ノミノフスマ種子 (A1 層) 29. ウシノハコベ種子 (A3 層) 30. アカザ属種子 (B3 下層) 31. ヤマゴボウ種子 (A1 層) 32. ナス属種子 (A2 下層) 33. メハジキ属果実 (A1 層) 34. メナモミ属果実 (B3 層下)

付編 6 下水主遺跡から出土した大型植物遺体

佐々木由香(明治大学黒耀石研究センター)

バンダリ スダルシャン(パレオ・ラボ)

1. はじめに

京都府城陽市に位置する下水主遺跡は、木津川右岸の低地に立地する南北約1200m、東西約540mの範囲に広がる縄文時代から近世にかけての集落跡である。ここでは、木津川沿いの微高地に流れる弥生時代中期後葉から古墳時代初頭の溝から得られた大型植物遺体の同定を行い、当時の植生や利用植物の一端を明らかにする。

2. 試料と方法

試料は、堆積物2試料(以下、堆積物試料)と、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターで水洗された大型植物遺体(以下、水洗済試料)である。堆積物試料は、第6次調査で検出されたSD22の2区断面2のⅥ層下層(古墳時代初頭)と、東壁の木葉集積部(弥生時代中期後葉)の下層の葉遺体を多く含む箇所から採取された(採取位置は別項参照)。木葉集積部は敷葉遺構と考えられている。

堆積物試料の水洗は、パレオ・ラボにて行った。Ⅵ層下層は300ccの堆積物を、最小0.5mm目の篩で水洗した。木葉集積部下層は堆積物中に含まれる葉を全て抽出した。

水洗済試料は、水洗済試料のうち、袋の単位で9試料を抽出し、全点を同定した。試料の時期は、弥生時代中期後葉～古墳時代初頭である。水洗量や水洗方法は不明である。

抽出・計数・同定は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え、1個体に満たないものは破片とした。葉は破片であっても、葉柄が残存している場合は1個体として計数した。計数が困難な分類群は、記号(+)で示した。同定された試料は、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターで保管されている。

3. 結果

[堆積物試料]

木本植物では針葉樹のモミ葉の1分類群、広葉樹のフジ属葉とサクラ属サクラ節核、キイチゴ属核、ムクノキ核、エノキ属核、クワ属核、イチイガシ葉・果実・殻斗、コナラ属アカガシ亜属幼果・未熟殻斗、アカメガシワ種子、ウルシ属ノルデ内果皮、ミツデカエデ果実、イタヤカエデ果実・種子、カエデ属果実、トチノキ果実・未熟果・種子、ムクロジ種子、キハダ種子、カラスザンショウ種子、ミズキ核、サカキ種子、エゴノキ核、マタタビ属種子、ムラサキシキブ属核、

ニワトコ核、タラノキ核の24分類群、草本植物ではミクリ属核と、スゲ属A果実、スゲ属B果実、ヒエ属有ふ果、エノコログサ属有ふ果、ノブドウ種子、カナムグラ核、スマレ属種子、ヤナギタデ果実、サナエタデーオオイヌタデ果実、ムラサキケマン種子、ウシハコベ種子、アカザ属種子、ヤマゴボウ属種子、ナス種子、ナス属種子、ニガクサ属果実、ヤブジラミ総苞の18分類群の、計43分類群が見いだされた。種実以外の芽は不明芽に一括した。大型植物遺体以外には、子囊菌と昆虫が得られた(表1)。

[水洗済試料]

木本植物では、針葉樹のイヌガヤ種子の1分類群、広葉樹のホオノキ種子と、アワブキ属核、ブドウ属種子、モモ核・炭化核、サクラ属サクラ節核、スモモ核、ヤマモモ核、ムクノキ核、クリ炭化果実、スダジイ果実、コナラ果実・幼果・殻斗、コナラ属コナラ節果実・幼果・殻斗・未熟殻斗、イチイガシ果実・未熟果・殻斗付果実・炭化子葉、コナラ属アカガシ亜属未熟果・幼果・殻斗・未熟殻斗、コナラ属果実、オニグルミ核・炭化核、サワグルミ果実、アカメガシワ種子、トチノキ果実・未熟果・種子・未熟種子・子葉、ムクロジ種子・未熟種子、サンショウ種子、カラスザンショウ種子、ミズキ核、エゴノキ核、ハクウンボク核、クサギ核の26分類群、草本植物ではコウホネ種子・炭

表1 堆積物試料から出土した大型植物遺体(括弧内は破片数)

		遺構	SD22
		区	2区
		採取位置	断面2 東壁
		遺構名	- 木葉集積部
		層位	VI層下層 下層
			B C
分類群	水洗量 (cc)	300	-
モミ	葉	(2)	
フジ属	葉		(++++)
サクラ属サクラ節	核	(1)	
キイチゴ属	核	1	
ムクノキ	核	2 (27)	
エノキ属	核	1 (12)	
クワ属	核	13 (7)	
イチイガシ	葉	58 (++++)	
	果実	3 (1)	
	殻斗	2	
コナラ属アカガシ亜属	幼果	6	
	未熟殻斗	(2)	
アカメガシワ	種子	2 (11)	
ウルシ属ーヌルデ	内果皮	1	
ミツデカエデ	果実	1	
イタヤカエデ	果実	1 (1)	
	種子	2 (1)	
カエデ属	果実	1	
トチノキ	果実	(1)	
	未熟果	2	
		(2)	
ムクロジ 種子	種子	1 (3)	
キハダ	種子	1 (3)	
カラスザンショウ	種子	(1)	
ミズキ	核	(1)	
サカキ	種子	(1)	
エゴノキ	核	1 (2)	
マタタビ属	種子	3 (3)	
ムラサキシキブ属	核	1	
ニワトコ	核	3 (2)	
タラノキ	核	1	
ミクリ属	核	1	
スゲ属A	果実	1	
スゲ属B	果実	1	
ヒエ属	有ふ果	2	
エノコログサ属	有ふ果	4	
ノブドウ	種子	4	
カナムグラ	核	(3)	
スマレ属	種子	1	
ヤナギタデ	果実	4	
サナエタデーオオイヌタデ	果実	2 (1)	
ムラサキケマン	種子	1	
ウシハコベ	種子	2	
アカザ属	種子	1	
ヤマゴボウ属	種子	1	
ナス	種子	1	
ナス属	種子	1	
ニガクサ属	果実	1	
ヤブジラミ	総苞	1	
不明	芽	(+++)	
子囊菌		1	
昆虫		(++)	

+:1-9, ++:10-49, +++:50-99, ++++:100以上

化種子と、ミクリ属核、イネ炭化粒・炭化種子、ノブドウ種子、ダイズ属炭化種子、アサ核、カナムグラ核、メロン仲間種子、サナエタデーオオイヌタデ果実、イヌタデ属果実、ウナギツカミ果実、ツリフネソウ属種子の12分類群の、合計39分類群が得られた。このほか科以上の詳細な同定ができなかった不明芽と、科以上に同定可能な識別点が残存していない同定不能炭化種実は、一括した(表2)。

表2 水洗済試料から出土した大型植物遺体(括弧内は破片数)

分類群	調査年次										下水⑥
	遺構										
	小地区										
	層位・小遺構	1区		2区		3区	4区	-	-	-	4区
		VII層南	北	中央部	VIII層	IV層最下層	SW62	断層2南	②	IV層	
時期	弥生時代中期中葉～古墳時代初頭										
イヌガヤ	種子	1				1 (2)	(1)	1			
ホオノキ	種子						3				
アワブキ属	核					1					
ブドウ属	種子	1					3	10			
モモ	核 (完形)					11	4				
	核 (半割)					(5)	(4)	(2)			
	核 (動物食痕)					6	3				
	核 (破片)					(2)		(1)			
	炭化核					1	(1)				
サクラ属サクラ節	核							1			
スモモ	核					1					
ヤマモモ	核						4	5 (1)			
ムクノキ	核	32 (9)	9			4	1		4	3	
クリ	炭化果実						1				
スダジイ	果実							1			
コナラ	果実	2 (1)							1		
	幼果	2	1						1		
	殻斗					1		2			
コナラ属コナラ節	果実					2					
	幼果					6	2				
	殻斗					(2)					
	未熟殻斗					(1)					
イチイガシ	果実	8 (1)	2	4	10	12	1		41 (3)	1	
	未熟果					2			6		
	殻斗付果実					3		3	2		
	炭化子葉									(5)	
コナラ属アカガシ亜属	未熟果	1		4							
	幼果	32 (1)	9	46	2	32		16	30	5	
	殻斗	5		5		1	4	2	2		
	未熟殻斗	3		4	1	(1)		2	9 (1)		
コナラ属	果実	(12)		(1)		(1)	(1)	3 (2)	(32)		
オニグルミ	核 (完形)	1				2					
	核 (半割)					(1)		(1)	(1)		
	核 (動物食痕)					2 (1)			1		
	核 (打撃痕)					(1)	(1)		(1)		
	核 (破片)					(1)			(1)		
	炭化核										
サワグルミ	果実					2					
アカメガシワ	種子	7	10	1			11 (6)				
トチノキ	果実					1					
	未熟果	(1)	1	8 (8)	(2)	(1)		4 (1)	2 (3)		
	種子	1	(1)	(4)		1 (4)			1 (22)		
	未熟種子					1		1	1		
	子葉	(1)									
ムクロジ	種子	2 (1)	1	1		3 (2)		4	2 (3)		
	未熟種子	1									
サンショウ	種子					1					
カラスザンショウ	種子						1				
ミズキ	核	2		2		6					
エゴノキ	核	8 (2)	2	22 (6)		10 (1)		4	8 (2)	8	
ハクウンボク	核					1 (1)					
クサギ	核	6	2					2 (3)			
コウボネ	種子					1	5				
	炭化種子						1				
ミクリ属	核						2				
イネ	炭化籾						1				
	炭化種子						6 (1)				
ノブドウ	種子	6	2	1	1	33 (3)	25 (14)				
ダイズ属	炭化種子						2				
アサ	核						6 (1)				
カナムグラ	核	6 (4)	2			1	7	27 (19)			
メロン仲間	種子	1 (2)					(1)	4 (2)			
サナエタデーオオイヌタデ	果実						1				
イヌタデ属	果実						1				
ウナギツカミ	果実						1 (1)				
ツリフネソウ属	種子					1	3				
不明	芽	(+)	(+)	(+)	(+)	1	3	1			
同定不能	炭化種実					(3)					

1-9:+

以下、堆積物試料について、大型植物遺体を記載する(不明芽は除く)。

SD22、6層下層：イチイガシが非常に多く、ムクノキとエノキ属、クワ属、アカメガシワが少量、コナラ属アカガシ亜属とイタヤカエデ、トチノキ、ムクロジ、キハダ、マタタビ属、ニワト

コ、エノコログサ属、ノブドウ、ヤナギタデがわずかに得られた。それ以外の分類群は3点以下の産出数であった。3点以下の栽培植物として、ナスが得られた。

SD22、木葉集積部下層：フジ属が非常に多く得られた。

水洗済試料については、SD22で一括して記載する。

水洗済試料SD22: イチイガシとアカガシ亜属が多く、コナラ属とトチノキ、エゴノキ、ノブドウ、カナムグラがやや多く、ブドウ属とモモ、ヤマモモ、ムクノキ、コナラ、コナラ属コナラ節、オニグルミ、アカメガシワ、ムクロジ、ミズキ、クサギ、メロン仲間が少量得られた。その他は10点未満であった。10点未満の栽培植物では、スモモとイネ、ダイズ属、アサが得られた。

次に、得られた主要な分類群の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は、米倉・梶田(2003-)に準拠し、APGⅢリストの順とした。

(1) モミ属 *Abies* sp. 葉 マツ科

茶褐色で、破片であるが完形ならば針形。背面の中央部には縦方向の溝があり、腹面には幅の広い二列の気孔条がある。先端わずかにV字形を呈す。基部は残存していない。残存長6.7mm、幅2.3mm。

(2) フジ属 *Wisteria* spp. 葉 マメ科

黄褐色で、狭卵形または長楕円形、全縁。太く短い葉柄がある。長さ73.6mm、幅29.6mm(図版1-2)、残存長51.4mm、幅26.8mm(図版1-3)、長さ49.4mm、幅10.6mm(図版1-4)。

(3) サクラ属サクラ節 *Prunus* sect. *Pseudocerasus* sp. 核 バラ科

暗褐色で、上面観は円形に近い楕円形、側面観は楕円形。下端に大きくくぼんだ着点がある。表面は平滑。核皮は厚く硬い。残存長4.4mm、残存幅3.5mm。

(4) キイチゴ属 *Rubus* sp. 核 バラ科

暗赤褐色で、上面観は幅広の両凸レンズ形、側面観は先端が湾曲した腎形。表面には不定形な多角形状の稜による網目状隆線がある。長さ1.4mm、幅0.8mm。

(5) クワ属 *Morus* spp. 核 クワ科

赤褐色で、側面観はいびつな広倒卵形または三角状倒卵形、断面は卵形または三角形。背面は稜をなす。表面にはゆるやかな凹凸があり、厚くやや硬い。基部に嘴状の突起を持つ。長さ1.9mm、幅1.6mm。

(6) イチイガシ *Quercus gilva* Blume 葉・果実・殻斗 ブナ科

葉縁は上半部に鋭い鋸歯がある。先端は急に尖り、基部は次第に狭くなり鈍形。裏面は黄褐色の星状毛が密生している。10~14対でまっすぐに斜上して葉縁に達し、明瞭に並行する。主脈は裏面に隆起する。長さ60.3mm、幅22.0mm(図版1-8)、残存高55.9mm、幅27.6mm(図版1-9)、高さ57.0mm、幅16.5mm(図版1-10)、残存高44.0mm、幅13.4mm(図版1-11)。果実の側面観は楕円形~長楕円形で、突出部(首)は円柱状ないし円錐状で輪状紋がある。柱頭は短く横を向く。果実の上部とその付近には毛が密生する。高さ19.4mm、幅13.5mm。殻斗は円錐形で、鱗片は合着して輪状に並ぶ。高さ8.5mm、幅13.4mm。

(7) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* spp. 幼果 ブナ科

黒色で、深い碗形。鱗片は輪状。単体で産出する。太い柱頭を持つ果実が内部にあるため、イチイガシ以外のアカガシ亜属である。高さ7.5mm、幅6.8mm。

(8) ウルシ属-ヌルデ *Toxicodendron* spp. - *Rhus javanica* L. 内果皮 ウルシ科

赤褐色で、上面観は中央がやや膨らむ扁平、側面観は中央がややくびれ、片側が膨らんだようになる広楕円形。表面は平滑でやや光沢がある。表面および断面構造の詳細な検討が行えなかったため、ウルシ属-ヌルデの同定に留めた。形状はヌルデに近い。長さ3.2mm、幅3.9mm。

(9) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 果実・未熟果・種子 ムクロジ科

果実は黒色で、完形ならば上面観はいびつな円形、側面観は円形～倒卵形。表面はざらつく。成熟果では表面に皮目状の斑点が明瞭にある。3片に分かれる構造で、その単位で破片になりやすい。壁は厚くやや弾力があるが、柔らかい。残存高15.2mm、残存幅6.8mm。未熟果は高さ9.2mm、幅6.4mm。種子の下半部は暗褐色で光沢がなく、上半部は黒褐色で光沢がややある。ゆがんだ楕円形。上下の境目の下に少し突出した着点がある。種皮は薄くやや硬い。種皮表面には指紋状の微細模様が密にある。残存高6.7mm、残存幅5.5mm。

(10) ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. 種子 ムクロジ科

黒色で、球形。表面は平滑で木質。基部は残存しないが、平らでやや凹み、果実着痕が縦方向の溝となってみられる。長さ11.6mm、幅15.6mm。

(11) マタタビ属 *Actinidia* spp. 種子 マタタビ科

赤褐色で、上面観は長楕円形、側面観は倒卵形または楕円形。表面には五角形や六角形、円形、楕円形などの窪みが連なる規則的な網目状隆線がある。壁は薄く硬い。長さ1.9mm、幅1.4mm。サルナシやマタタビなど、種までの同定には至らなかった。

(12) ニワトコ *Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana* (Miq.) H.Hara var. *sieboldiana* Miq. 核 レンブクソウ科

赤褐色で、上面観は扁平、側面観は楕円形で基部がやや尖る。基部に小さな着点があり、縦方向にやや反る。波状の凹凸が横方向に走る。長さ2.9mm、幅1.5mm。

(13) タラノキ *Aralia elata* (Miq.) Seem. 核 ウコギ科

暗赤色で、完形ならば上面観は扁平、側面観は半月形。稜に沿って網目状の構造がある。残存長2.1mm、幅1.4mm。

(14) スゲ属A *Carex* sp. A 果実 カヤツリグサ科

褐色で、側面観は狭倒卵形、断面は三稜形。先端と着点がやや突出する。長さ1.7mm、幅1.1mm。

(15) スゲ属B *Carex* sp. B 果実 カヤツリグサ科

黒褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は広倒卵形。基部が肥厚する。長さ1.9mm、幅1.4mm。

(16) ヒエ属 *Echinochloa* spp. 有ふ果 イネ科

暗褐色で、紡錘形。縦方向に細かい筋がある。壁は薄く、弾力がある。長さ2.0mm、幅1.2mm。

(17)エノコログサ属 *Setaria* spp. 有ふ果 イネ科

黒褐色で、上面観は楕円形、側面観は紡錘形。アワよりも細長く、乳頭突起が畝状を呈する。長さ2.4mm、幅1.5mm。

(18)ナス *Solanum melongena* L. 種子 ナス科

赤褐色で、上面観は長楕円形、側面観は楕円形。着点は明瞭に窪む。表面には畝状突起が覆瓦状となる細かい網目状隆線がある。長さ2.1mm、幅2.6mm。

(19)ナス属 *Solanum* sp. 種子 ナス科

赤褐色で、上面観は扁平、側面観は楕円形。表面には細かい畝状突起をもつ粗い網目状隆線がある。長さ1.7mm、幅1.7mm。

4. 考察

古墳時代初頭のSD22のⅥ層下層から出土した大型植物遺体を同定した結果、葉や種実を中心とした大型植物遺体が得られた。食用可能な種実として、堅果類ではイチイガシとコナラ属アカガシ亜属、トチノキが得られ、ベリー類としてはサクラ属サクラ節とキイチゴ属、ムクノキ、エノキ属、クワ属、キハダ、ミズキ、カラスザンショウ、キハダ、マタタビ属、ニワトコ、草本類ではヒエ属やアカザ属、ナスが得られた。ムクロジは食用のほか石鹸などに利用される。ウルシ属－ヌルデは、栽培種のウルシと野生種のヤマウルシやツタウルシ、ヌルデなどの両方の可能性があるが、外部形態からは種レベルの同定はできなかった。形態はヌルデに近い。詳細な同定には、内果皮の断面構造などの検討が必要である。ウルシ属－ヌルデは食用のほか、ウルシならば中果皮の蠟を利用可能である。カラスザンショウは油や防虫剤などとして利用された可能性もある。

アカガシ亜属のうち、イチイガシは生食可能な種である。ただし食用部位である果実以外に葉が多く、殻斗も含まれるため、SD22周辺に生育していた樹木から堆積した可能性がある。コナラ属アカガシ亜属にはイチイガシも含まれている可能性があるが、幼果や未熟殻斗であり、これらも周辺に生育していた樹木から堆積したと考えられる。同様にトチノキも、産出数はわずかであるが食用できない果実や未熟果が含まれており、河畔林に生育していた樹木から堆積した可能性がある。

木本植物からⅥ層下層の堆積段階の植生を推定すると、モミなどの針葉樹やイチイガシやアカガシ亜属、サカキなどの常緑広葉樹が含まれるが、主体は落葉広葉樹で、アカメガシワやカラスザンショウ、ニワトコ、タラノキといった陽樹が多く、SD22周辺は明るい陽の当たる環境で、二次林を形成していた可能性がある。特に食用としても木材としても有用なイチイガシの葉が良好な状態で多く堆積しており、ごく近くの微高地にイチイガシが生育していた可能性がある。

栽培植物では、畑作物のナスが得られた。流路内には抽水植物のミクリ属などが生育していたと思われるが、水生植物はほとんど見られなかった。溝周辺のやや湿った場所にはヤナギタデや

ムラサキケマンなど、道端や乾いた草地にはエノコログサ属やカナムグラ、ウシハコベ、アカザ属などが生育し、木材にはノブドウなどのツル植物が絡み、半日陰となった場所にはニガクサ属などが生育していたと推定される。

弥生時代中期後葉の木葉集積部下層から同定できた葉は、全てフジ属であった。フジ属は林縁や明るい樹林内に生育するため、周辺に生育していたと考えられる。フジ属の葉は羽状複葉で、小葉はヤマフジの場合4～6対となる。考古学的な所見では、葉は敷葉に用いられたと推定されている。特定の樹種の葉のみが堆積しており、組成からも人為による堆積の可能性が考えられる。

弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の水洗済試料からは、木本植物主体の種実が得られた。堆積物試料では得られなかった食用になる堅果類として、クリとスダジイ、コナラ、コナラ属コナラ節、オニグルミが得られた。クリは炭化果実、イチイガシは炭化子葉、オニグルミは人為的な打撃によって割られた個体があり、利用されたものも含まれていた。コナラとコナラ属コナラ節は食用となる果実以外に幼果と殻斗も含まれており、ごく近辺に生育していたと考えられる。木本植物の栽培植物としては、果樹であるモモとスモモが得られた。特にモモは産出量が多く、祭祀などの目的でSD22に持ち込まれた可能性がある。また、食用可能なベリー類としては、ブドウ属とヤマモモ、ムクノキ、サンショウ、カラスザンショウ、ミズキが得られた。

水洗済試料の草本植物では、特徴的な植物として、栽培植物のイネとアサ、メロン仲間が得られた。メロン仲間は長さ8.0mmで、モモデイルカメロンの大きさであった。またダイズ属は大きさからは栽培植物か否かの判断はできなかったが、炭化しているため、少なくとも利用された可能性がある。また浮葉植物であるコウホネが得られており、滞水していた場所があったと推定される。

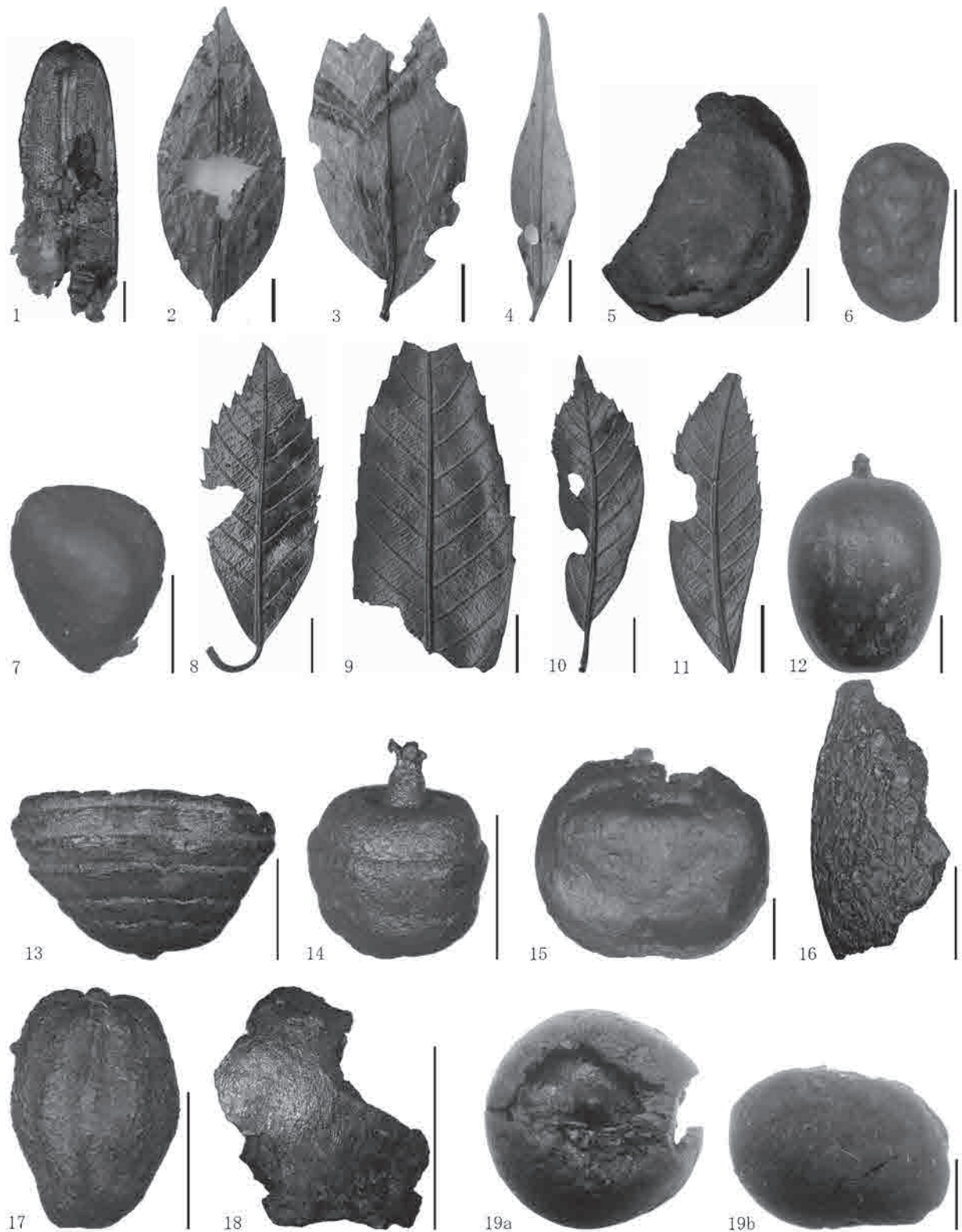
下水主遺跡の弥生時代中期後葉から古墳時代初頭には落葉と常緑の堅果類と、ベリー類、マメ類に、果樹のモモとスモモ、水田作物のイネ、畑作物のアサとメロン仲間、ナスが確認され、多様な森林資源と栽培植物の双方が利用されていたと考えられる。

謝辞 現地調査において、京都大学総合博物館村上由美子氏、明治大学黒耀石研究センターの能城修一氏にご協力いただいた。この分析は、科学研究費補助金科学研究費補助金基盤研究(A)「縄文時代前半期における森林資源管理・利用体系の成立と植物移入の植物学的解明」(代表：能城修一)(研究課題番号：15H01777)を使用して実施した。

引用文献

米倉浩司・梶田 忠(2003-)BG Plants 和名－学名インデックス(YList), <http://ylist.info>

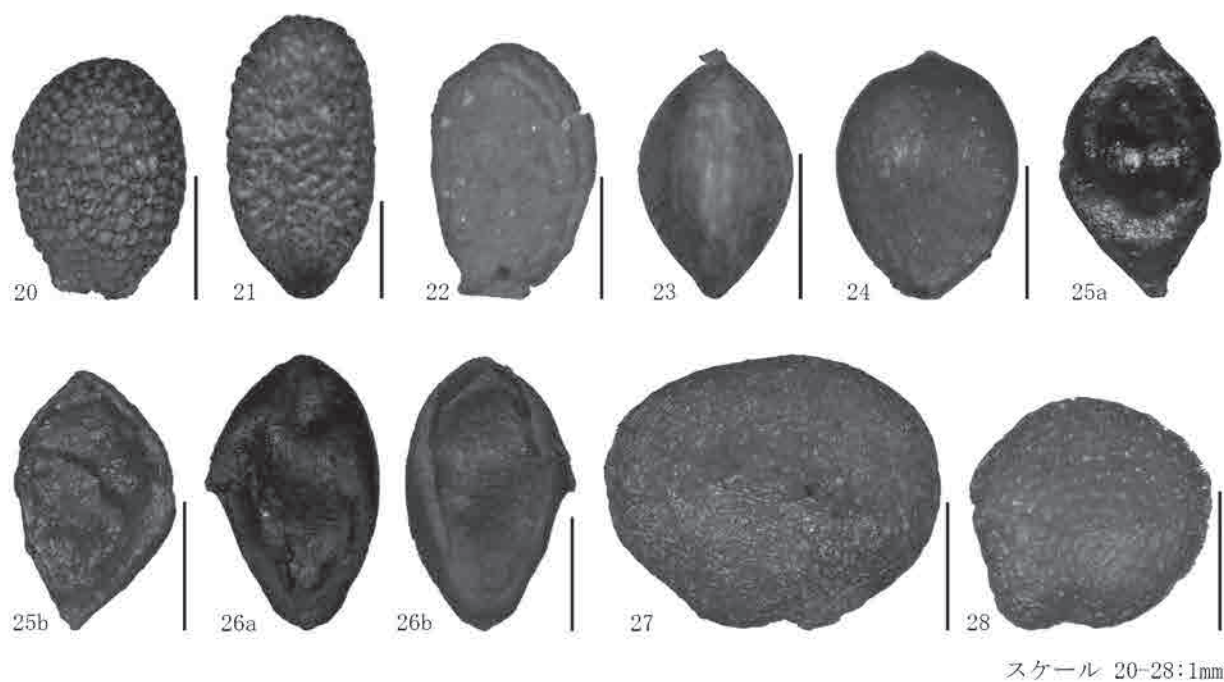
<追記> 分析された大型植物遺体は、現地調査の際、各種微細遺物の採取のために実施した堆積物の水洗によって得られた資料である。採取した層位の時期は、主に古墳時代前期である。SD22の各地点から約250袋を採取し、2mmメッシュの金属フルイを用いて全量を水洗した。



スケール 1, 5-7, 15:1mm, 2-4, 8-11:10mm, 12-14, 16-19:5mm

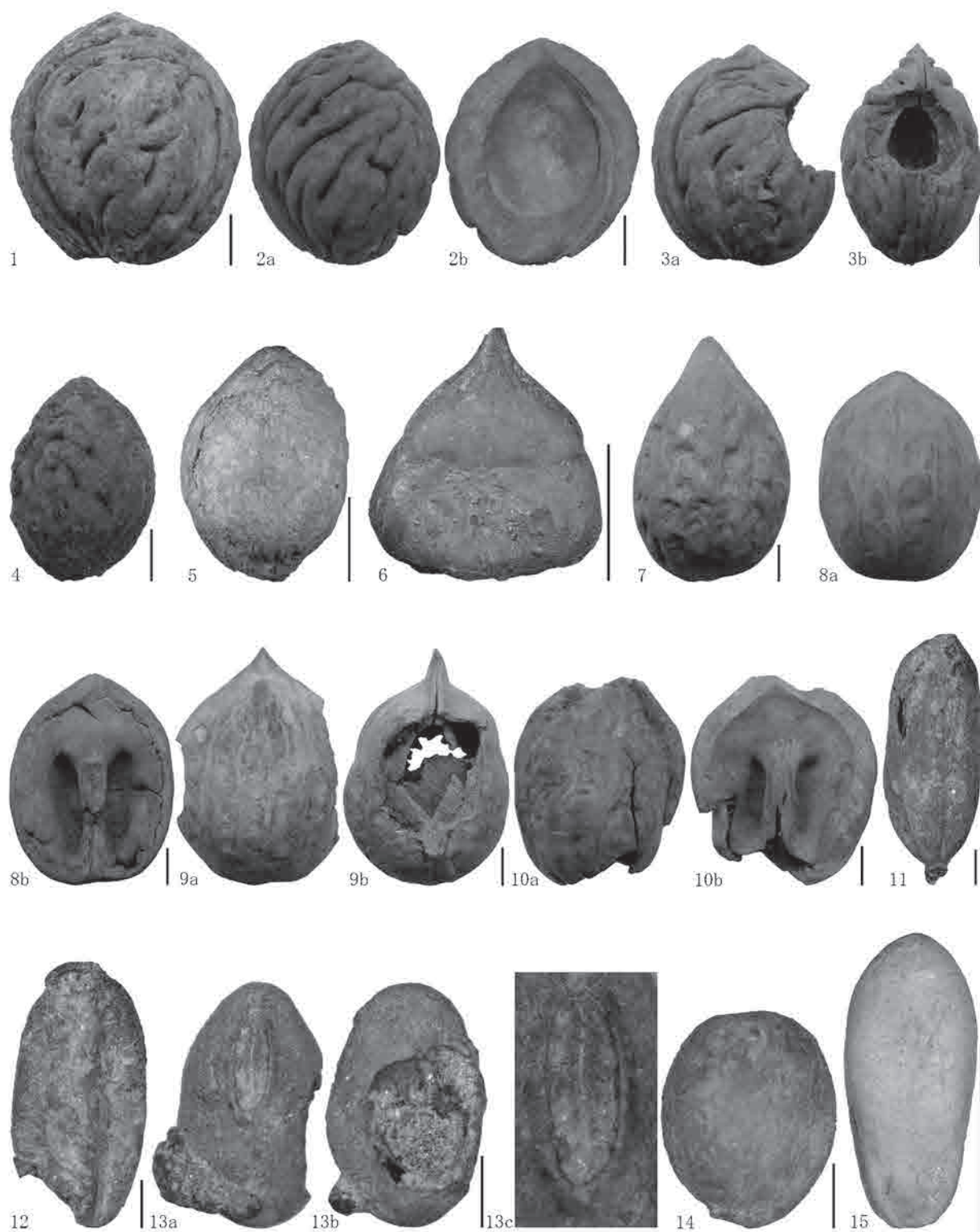
図版1 下水主遺跡から出土した大型植物遺体 (1)

1. モミ葉 (SD22、6層下層)、2・4. フジ葉 (SD22、下層)、5. サクラ属サクラ節核 (SD22、6層下層)、6. キイチゴ属核 (SD22、6層下層)、7. クワ属核 (SD22、6層下層)、8・11. イチイガシ葉 (SD22、6層下層)、12. イチイガシ果実 (SD22、6層下層)、13. イチイガシ殻斗 (SD22、6層下層)、14. コナラ属アカガシ亜属幼果 (SD22、6層下層)、15. ウルシ属ヌルデ内果皮 (SD22、6層下層)、16. トチノキ果実 (SD22、6層下層)、17. トチノキ未熟果 (SD22、6層下層)、18. トチノキ種子 (SD22、6層下層)、19. ムクロジ種子 (SD22、6層下層)



図版2 下水主遺跡から出土した大型植物遺体 (2)

20. マタタビ属種子 (SD22、6層下層)、21. ニワトコ核 (SD22、6層下層)、22. タラノギ核 (SD22、6層下層)、
23. スゲ属 A 果実 (SD22、6層下層)、24. スゲ属 B 果実 (SD22、6層下層)、25. ヒエ属有ふ果 (SD22、6層下
層)、26. エノコログサ属有ふ果 (SD22、6層下層)、27. ナス種子 (SD22、6層下層)、28. ナス属種子 (SD22、6層下層)



スケール 1-10, 15:5mm, 11-13a-b, 14:1mm, 13cは任意

図版3 下水主遺跡水洗済試料から出土した大型植物遺体

1. モモ核完形 (SD22、4層最下層)、2. モモ核半割 (SD22、4層最下層)、3. モモ核動物食痕 (SD22、SX61)、4. モモ炭化核 (SD22、4層最下層)、5. スモモ核 (SD22、4層最下層)、6. クリ炭化果実 (SD22、SX61)、7. オニグルミ核完形 (SD22、4層最下層)、8. オニグルミ核半割 (SD22、4層最下層)、9. オニグルミ核動物食痕 (SD22、4層最下層)、10. オニグルミ核打撃痕 (SD22、4層最下層)、11. イネ炭化糲 (SD22、SX61)、12. イネ炭化種子 (SD22、SX61)、13. ダイズ属炭化種子 (SD22、SX61)、14. アサ核 (SD22、SX61)、15. メロン仲間種子 (SD22、SX61)

付編 7 下水主遺跡出土木材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

下水主遺跡は、木津川右岸の氾濫低地に位置する、東西約540m、南北約980mの広がりを持つ縄文時代から近世にかけての集落跡である。今回の調査区は、遺跡南部の沖積リッジ上に位置し、発掘調査の結果、弥生時代中期後葉の護岸施設を伴う流路、古墳時代前期～中期の溝、飛鳥時代・中世～近世の各種遺構が検出されている。今回の分析調査では、弥生時代中期後葉とされるSD22の護岸施設に利用されている木材の樹種や樹齢に関する情報を得ることを目的として、樹種同定および年輪計測を実施する。

1. 試料

SD22の護岸施設は、西側斜面に構築されている。護岸施設は人為的営力により形成された盛土からなり、盛土下部には大型・小型の木材が芯材として利用されている。このうち、大型の木材は、概ね溝の縦断方向に配置されている。今回の分析調査では、大型の木材5点(A～E)について樹種同定、Aについては、樹齢情報を得るために年輪計測を実施する。各木材試料は、現地にて最も残り良い部分について幅10cm程度の輪切で採取した。

2. 分析方法

(1) 樹種同定

輪切りから年輪計測に影響が出ない部分で木片を採取する。剃刀を用いて木片から木口(横断面)・柁目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を採取する。切片は、エタノール50%、70%、90%、95%、100%、ブタノール：エタノール＝1：1、ブタノール100%、ブタノール：キシレン＝1：1、キシレン100%の順で脱水し、ビオライトで封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995、1996、1997、1998、1999)を参考にする。

(2) 年輪計測

輪切りの表面をポリッシャーで30番、120番、240番の順に研磨する。実体顕微鏡を用いて年輪の位置を確認し、5年置きにピンを立てて、年輪の数を計数する。

3. 結 果

樹種同定結果および年輪計測結果を表1に示す。木材は、広葉樹5分類群(コナラ属アカガシ亜属・エノキ属・カエデ属・ムクロジ・トチノキ)に同定された。年輪計測は、環孔材で年輪界が明瞭な2点(A,E)では計数できたが、残る3点は散孔材や放射孔材などで年輪界が不明瞭であり、読み取れない部分もある。

同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属アカガシ亜属(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、道管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・エノキ属(*Celtis*) ニレ科

環孔材で、孔圏部は1～3列、孔圏外でやや急激に径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～50細胞高で鞘細胞が認められる。

・カエデ属(*Acer*) カエデ科

散孔材で、道管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～30細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・ムクロジ(*Sapindus mukorossi* Gaertn.) ムクロジ科ムクロジ属

環孔材で、孔圏部は1列、孔圏外で急激に径を減じたのち、塊状に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～40細胞高。柔組織は周囲状～連合翼状、帯状およびターミナル状。

・トチノキ(*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

散孔材で、道管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高で層階状に配列する。

一方、輪切試料A～Eの形状をみると、試料Aは、残存する最大径が19cm、樹齢61年の芯持材である。観察した範囲では、不自然な部分は認められない。試料Bは残存する最大径33cmの芯持材である。試料Bについては、自然に割れたとするにはやや不自然な形状をしており、加工の可能性がある。試料Cは、樹皮の残る直径27cmの芯持丸木である。試料Dは、残存する最大半径27cmのミカン割状の木材である。いずれもアカガシ亜属で、大きさから樹齢は20年以上と考えられるが、年輪が不明瞭なために詳細は不明である。これらについては、輪切りの形状をみる限

表1 樹種同定・年輪計測結果

遺構	時期	試料名	形状	最大径	年輪数	種類
S D 22	弥生時代中期後葉	A	芯持材	19cm	61本	ムクロジ
		B	芯持材	33cm	70本<	カエデ属
		C	芯持丸木	直径 27cm	20本<	コナラ属アカガシ亜属
		D	ミカン割状	半径 27cm	20本<	コナラ属アカガシ亜属
		E	芯持材	35cm	75本<	エノキ属
		東の材G	破片	—	—	トチノキ
		西の材C	破片	—	—	コナラ属アカガシ亜属

りでは、不自然な状態は認められない。試料Eは、残存する最大径35cmの芯持材であるが、年輪をみると、確認できる樹芯を中心とする同心円状の年輪とは異なる方向の年輪が外側に認められることから、二股ないし三股に分岐していた可能性がある。観察した範囲では不自然な形状は認められない。

4. 考 察

弥生時代中期後葉のSD22の護岸施設に利用されている大型の木材は、常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属、落葉広葉樹のエノキ属・カエデ属・ムクロジに同定された。常緑広葉樹のアカガシ亜属は、暖温帯性常緑広葉樹林の主要構成要素で、現在では安定した山地斜面などに分布している。ただし、過去においては、京都盆地北西部の白川扇状地に位置する北白川追分遺跡では、縄文時代晩期の遺跡近辺にトチノキ・カエデ属などの温帯性落葉広葉樹林要素とイチイガシなどの暖温帯林要素が近接して生育していたことが確認されている(南木ほか1987)。また、桂川の氾濫低地に位置する長岡京域でも、縄文時代晩期から弥生時代にかけての氾濫低地においてアカガシ亜属の埋没樹が確認されている(パリノ・サーヴェイ2003、2004など)。このようにアカガシ亜属は、現在では開発によって平地で林分を確認できないものの、過去には氾濫低地でも安定した場所を中心に生育していたことが示唆される。落葉広葉樹のムクロジ、エノキ属、カエデ属は、いずれも河畔林の構成要素ないしその種を含む分類群である。以上の各樹種の生態性を踏まえると、護岸施設に利用されている大型の木材は、当時の調査地点周辺の氾濫低地に生育していた可能性が充分考えられる。氾濫低地の植生は、河川の洪水等の影響を受けながら更新・再生するが、試料Aのムクロジの樹齢が61年であったことを考慮すると、当時の氾濫低地には比較的安定した植生の立地条件が存在したことが推定される。

一方、大型の木材の材質等をみると、アカガシ亜属は重硬で強度が高い材質を有する。カエデ属やムクロジも比較的重硬で強度が高い部類に入り、エノキ属は、やや重硬な部類に入る。このように護岸施設の用材として、大型のものは重硬なものが利用されている可能性があるが、利用種類数のバラツキがあることから、入手しやすい木材を利用している可能性が強いように思われる。

引用文献

- 林 昭三1991『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載」Ⅰ 『木材研究・資料』31 京都大学木質科学研究所、pp81-181
- 伊東隆夫1996「日本産広葉樹材の解剖学的記載」Ⅱ 『木材研究・資料』32 京都大学木質科学研究所、pp66-176
- 伊東隆夫1997「日本産広葉樹材の解剖学的記載」Ⅲ 『木材研究・資料』33 京都大学木質科学研究所、pp83-201
- 伊東隆夫1998「日本産広葉樹材の解剖学的記載」Ⅳ 『木材研究・資料』34 京都大学木質科学研究所、pp30-166
- 伊東隆夫1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載」Ⅴ 『木材研究・資料』35 京都大学木質科学研究所、pp47-216
- 南木睦彦・島地 謙・林 昭三・伊東隆夫・宮武頼夫・清水芳裕・五十川伸矢・森本 晋1987「第2章 北白川追分町遺跡の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 第Ⅰ部 昭和59年度京都大学構内遺跡発掘調査報告』,57長岡宮跡第.
- パリオ・サーヴェイ株式会社2003「自然科学分析」『向日市埋蔵文化財調査報告書第60集 久々相遺跡・中海道遺跡』財団法人向日市埋蔵文化財センター、pp256-273
- パリオ・サーヴェイ株式会社2004「自然科学分析」『向日市埋蔵文化財調査報告書第62集（第1分冊） 長岡京跡ほか』財団法人向日市埋蔵文化財センター、pp192-206
- 島地 謙・伊東 隆夫1982『図説木材組織』地球社、p176
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編)1998『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修)』海青社、p122 [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .

付表7 出土土器観察表(弥生時代～古墳時代)

報告 番号	次数	調査区	遺構	層位・ 地点	器種	器形	口径	器高	残存 率	色 調	焼成	備 考
1	4次	A地区	SP68	—	土師器	小形丸 底鉢	13.0	5.4	1/6	橙 5YR7/6	良好	
2	4次	A地区	SP123	—	土師器	甕	3.1	2.4	1/6	(外) におい黄橙 10YR7/3 (内) 浅黄橙 10YR8/3	良好	
3	4次	A地区	SP163	—	土師器	高杯	—	6.8	1/12	におい橙 7.5YR7/4・7/6	良好	
4	4次	A地区	SP171	—	土師器	高杯	—	6.6	1/12	橙 7.5YR7/6	良好	
5	4次	A地区	SP177	—	土師器	小形丸 底鉢	—	3.6	1/12 以下	(外) 明黄橙褐 10YR6/8 (内) 明黄褐 10YR7/6	良好	
6	4次	A地区	SP248	—	土師器	小形丸 底鉢	—	4.5	1/12 以下	(外) 橙 5YR7/6 明黄褐 10YR7/6 (内) 灰白 10YR8/2	良好	
7	4次	A地区	SP238	—	土師器	甕	—	3.3	1/12 以下	におい黄橙 10YR7/4	良好	
8	6次	A地区	SD349 SD350	—	土師器	壺	16.7	4.9	1/12	浅黄 2.5Y7/42.5Y7/4	良好	
9	6次	A地区	SD349	—	土師器	壺	9.4	3.0	1/12	(外) におい橙 7.5YR7/6 (内) 橙 7.5YR7/6	良好	近江系
10	6次	A地区	SD349	—	土師器	甕	14.2	15.7	1/6	(外) 灰褐 10YR4/1・灰黄褐 10YR4/2・におい黄橙 10YR7/4 (内) におい黄橙 10YR7/4	良好	
11	6次	A地区	SD349	—	土師器	甕	16.0	5.3	1/4	(外) 浅黄橙 7.5YR8/4・10YR8/3 (内) 浅黄橙 7.5YR8/3	良好	
12	6次	A地区	SD349	—	土師器	甕	18.0	4.6	1/6	(外) 橙 7.5YR7/6・におい黄橙 10YR7/4 (内) 浅黄橙 10YR8/4	良好	
13	6次	A地区	SD349	—	土師器	甕	15.0	6.3	1/3	におい褐 7.5YR6/3	良好	
14	6次	A地区	SD349	—	土師器	甕	14.0	3.6	1/3	(外) 浅黄橙 10YR8/3・8/4 (内) 浅黄橙 7.5YR8/3	良好	
15	6次	A地区	SD349	—	土師器	甕	17.8	4.1	1/6	浅黄橙 10YR8/4	やや軟	
16	6次	A地区	SD349	—	土師器	甕	12.8	4.1	1/4	におい橙 7.5YR7/4	良好	
17	6次	A地区	SD349	—	土師器	甕	15.6	10.0	1/6	(外) 浅黄橙 10YR8/2 (内) 灰白 10YR8/2	良好	
18	6次	A地区	SD349	—	土師器	甕	13.3	2.1	1/3	(外) 灰白 7.5YR8/2 (内) 浅黄橙 7.5YR8/4	良好	吉備系
19	6次	A地区	SD349 SD350	—	土師器	甕	12.6	2.3	1/12	浅黄橙 10YR8/3	良好	近江系
20	6次	A地区	SD349	—	土師器	甕	33.0	15.8	1/6	におい黄橙 10YR7/3	良好	山陰系
21	6次	A地区	SD349	—	土師器	小形丸 底鉢	13.0	6.4	1/12	におい橙 7.5YR7/4	良好	
22	6次	A地区	SD349	—	土師器	小形丸 底鉢	16.0	5.5	3/4	赤褐 10R5/6	良好	
23	6次	A地区	SD349	—	土師器	小形丸 底鉢	14.6	5.0	1/12	(外) 橙 5YR6/6 におい黄橙 10YR6/4 (内) 橙 5YR6/6	良好	
24	6次	A地区	SD349	—	土師器	小形丸 底鉢	15.7	3.8	1/6	におい橙 7.5YR7/4	良好	
25	6次	A地区	SD349	—	土師器	小形丸 底鉢	14.0	4.8	1/12	明赤褐色 2.5YR5/6	良好	
26	6次	A地区	SD349	—	土師器	小形器 台	12.8 (底部)	5.2	1/12	におい黄橙 10YR6/4	良好	穿孔4か所 あり
27	6次	A地区	包含層	—	土師器	甕	14.8	6.2	1/3	(外) 灰白 2.5Y8/2 (内) 浅黄 2.5Y7/3	良好	煤付着 近江系
28	1次	A・B 地区	包含層	—	弥生土器	台付鉢	17.2 (体部)	(15.5)	1/3	におい橙 5YR6/4	良	
29	1次	A・B 地区	包含層	—	弥生土器	鉢	17.3	6.4	1/12	(外) におい赤褐 5YR4/3 (内) 灰黄褐 10YR6/2	良好	河内産
30	1次	A・B 地区	包含層	—	弥生土器	器台	27.6 (底部)	9.3	1/12 以下	におい橙 10YR7/4	良	
31	1次	B地区	SD22	SX23	土師器	壺	12.9	17.6	1/4	(外) におい黄橙 10YR6/3 (内) 灰黄 2.5YR7/2	良好	口縁部打ち 欠きか
32	1次	B地区	SD22	SX23	土師器	壺	17.4	30.0	5/12	(外) 浅黄 2.5Y7/3 (内) 灰黄 2.5Y7/2	良	体部下半打 ち欠き穿孔 か
33	1次	B地区	SD22	SX23	土師器	壺	12.0	30.0	—	浅黄橙 7.5YR8/4	良好	口縁部打ち 欠きか
34	1次	B地区	SD22	SX23	土師器	壺	11.2 (頸部)	(31.0)	—	橙 2.56/6	やや軟	体部穿孔
35	1次	B地区	SD22	SX22	土師器	甕	15.6	12.8	1/4	灰黄 2.5Y7/2	良好	
36	1次	B地区	SD22	SX23下 層	土師器	甕	16.7	25.3	3/4	浅黄 2.5Y7/3 2.5Y7/3	良好	
37	1次	B地区	SD22	SX23	土師器	甕	23.2	17.0	3/4	灰白 7.5YR8/2	やや軟	
38	1次	B地区	SD22	SX23	土師器	甕	15.0	12.3	1/2	浅黄 2.5Y 7/4	良好	
39	1次	B地区	SD22	SX23	土師器	甕	15.0	4.9	1/4	(外) におい黄橙 10YR7/3 (内) 灰白 10YR8/2	良好	

報告 番号	次数	調査区	遺構	層位・ 地点	器種	器形	口径	器高	残存 率	色 調	焼成	備 考
40	1 次	B 地区	SD22	SX23 下 層	土師器	甕	14.4	4.1	1/2	(外) にぶい黄橙 7.5YR7/3 (内) にぶい黄橙 10YR6/3	良好	
41	1 次	B 地区	SD22	SX23	土師器	甕	15.3	6.3	1/6	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
42	1 次	B 地区	SD22	SX23	土師器	甕	14.4	(4.9)	1/4	灰白 5YR8/1	軟	
43	1 次	B 南半	SD22	SX23	土師器	甕	11.7	14.9	ほぼ 完形	(外) 浅黄褐橙 10YR8/3 (内) 浅黄橙 10YR8/4	良好	
44	1 次	B 地区	SD22	SX23 下 層	土師器	甕	15.0	22.0	3/4	—	良好	体部中位に 穿孔
45	1 次	B 地区	SD22	SX23	土師器	複合口 縁甕	26.6	24.7	4.5/5	灰白 10YR8/2	良	山陰系
46	1 次	B 地区	SD22	SX23	土師器	高杯	15.1	5.5	1/12	にぶい橙 7.5YR7/4	良好	山陰系
47	1 次	B 地区	SD22	SX23	土師器	小形丸 底鉢	9.9	(5.4)	1/4	にぶい黄橙色 10YR7/3	良	
48	1 次	B 地区	SD22	SX23 下 層	土師器	小形丸 底鉢	10.0	5.2	1/3	(外) 黄灰 2.5Y6/1 (内) にぶい黄橙 10YR7/3	良好	
49	1 次	B 地区	SD22	SX23	土師器	小形丸 底鉢	16.6	5.5	—	橙 5YR6/6	良好	
51	1 次	B 地区	SD22	SX24 下 層	土師器	短頸直 口壺	18.2	6.6	1/4	灰黄 2.5Y 7/2	良好	口縁内部に 煤付着
52	1 次	B 地区	S D 22	SX24 下 層	土師器	甕	15.4	20.1	1/4	浅黄 2.5YR7/3	良好	
53	1 次	B 地区	SD22	SX24	土師器	甕	12.4	16.2	3/4	浅黄橙 10YR8/3	良	煤付着
54	1 次	B 地区	SD22	SX24	土師器	甕	(15.0) 頸部	(6.1)	1/6	(外) 灰白 10YR8/2 (内) 灰白 7.5YR8/2	良	
55	1 次	B 地区	SD22	SX24	土師器	甕	15.0	(3.8)	1/3	淡赤橙 2.5YR7/4	やや軟	
56	1 次	B 地区	SD22	SK24	土師器	甕	12.7	(13.9)	1/2	明褐灰 7.5YR7/2	良好	煤付着
57	1 次	B 地区	SD22	SX24	土師器	甕	14.7 ~ 15.0	17.2	1/3	にぶい黄橙 10YR7/3	良好	
58	1 次	B 地区	SD22	SX24	土師器	甕	31.9	(14.7)	1/4	灰白 7.5YR8/2	やや軟	煤付着 山陰系
59	1 次	B 地区	SD22	SX24	土師器	高杯	(3.2)	(7.2)	1/6	淡黄橙 10YR8/3	良好	
60	1 次	B 地区	SD22	SX24	土師器	高杯	(2.7) 基部	(7.3)	1/6	灰白 7.5YR8/2	良	山陰系
61	1 次	B 地区	SD22	SX24	土師器	壺	—	(13.0)	1/6	褐 7.5YR4/3	良好	河内あるいは 讃岐産
62	1 次	B 地区	SD22	SX25	土師器	壺	19.4		2/5	(外) にぶい橙 7.5YR 7/3 (内) 灰 5Y 6/1	良好	
63	1 次	B 地区	SD22	SX25	土師器	壺	19.0	5.4	1/6	灰黄褐 10YR5/1	良好	
64	1 次	B 地区	SD22	SX25	土師器	甕	12.7	6.0	1/4	(外) にぶい黄橙 10YR6/4 (内) にぶい黄橙 10YR7/2	良	
65	1 次	B 地区	SD22	SX25	土師器	甕	14.0	(4.2)	1/12	淡赤橙 2.5YR7/3	良	
66	1 次	B 地区	SD22	SX29	土師器	甕	16.6	19.2	2/3	灰 N8/0	甘め	
67	1 次	B 地区	SD22	SX29	土師器	甕	15.2	18.9	1/2	にぶい黄橙 10YR7/3	良好	煤付着
68	1 次	B 地区	SD22	SX29	土師器	甕	17.3	13.8	1/4	にぶい黄橙 10YR7/3	良好	
69	1 次	B 地区	SD22	SX29	土師器	甕	16.2	9.3	1/4	にぶい黄橙 10YR7/3	良好	
70	1 次	B 地区	SD22	SX29	土師器	甕	15.0	7.0	1/3	灰黄色 2.5Y6/2	良	
71	1 次	B 地区	SD22	SX29	土師器	甕	11.9	8.9	1/3	(外) にぶい橙 5YR7/4 (内) 橙 5YR6/8	良好	
72	1 次	B 地区	SD22	SX29	土師器	高杯	17.9	5.6	1/6	橙 5YR7/6	良好	
73	1 次	B 地区	SD22	47 層	土師器	壺	9.0 (頸部)	(5.1)	1/4	褐灰 10YR6/1	良好	近江以东か
74	1 次	B 地区	SD22	47 層	土師器	壺	15.2 (体部)	12.4	1/4	灰黄 2.5Y7/2	良好	体部小穿 孔、口縁部 打ち欠き、 山陰系
75	1 次	B 地区	SD22	47 層	土師器	甕	14.5	5.7	1/12 以下	にぶい黄褐 10YR6/3	良好	
76	1 次	B 地区	SD22	47 層	土師器	甕	15.8	6.2	1/4	灰黄 2.5Y6/2	良	
77	1 次	B 地区	SD22	47 層	土師器	甕	14.5	(3.3)	1/6	明褐灰 7.5YR7/2	良	煤付着
78	1 次	B 地区	SD22	47 層	土師器	甕	11.1	3.2	1/6	(外) 褐 10YR5/1 (内) 黒 2/0	良好	
79	1 次	B 地区	SD22	47 層	土師器	甕	17.0	4.2	1/12	灰黄褐 10YR6/2	良好	
80	1 次	B 地区	SD22	47 層	土師器	甕	13.2	(3.4)	1/4	にぶい黄橙 10YR6/2	良好	
81	1 次	B 地区	SD22	47 層	土師器	甕	12.9	(3.7)	1/12	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
82	1 次	B 地区	SD22	47 層	土師器	高杯	11.9	8.0	1/4	にぶい黄橙 10YR7/4	良好	
83	1 次	B 地区	SD22	47 層	土師器	小形丸 底鉢	13.0	7.0	1/6	橙 5YR7/6	良	
84	1 次	B 地区	SD22	47 層	土師器	甕	10.5	(2.4)	1/12	にぶい褐 7.5YR6/3	良好	東海系
85	1 次	B 地区	SD22	46 層	土師器	壺	19.9	3.5	1/12 以下	黄灰 2.5YR5/1	良好	阿波系
86	1 次	B 地区	SD22	46 層	土師器	甕	15.5	5.8	1/4	にぶい黄橙 10YR7/3	良好	
87	1 次	B 地区	SD22	46 層	土師器	甕	15.0	(3.8)	1/6	明褐灰 7.5YR7/2	良	

報告 番号	次数	調査区	遺構	層位・ 地点	器種	器形	口径	器高	残存 率	色 調	焼成	備 考
88	1次	B地区	SD22	46・47 層	土師器	甕	14.2	5.0	1/4	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
89	1次	B地区	SD22	46層	土師器	甕	14.4	(3.1)	1/6	にぶい黄橙 10YR7/2	良	煤付着
90	1次	B地区	SD22	46層	土師器	甕	14.1 (頸部)	4.5	1/4	灰白 2.5Y8/1	良好	
91	1次	B地区	SD22	46層	土師器	甕	14.6	(3.2)	1/12 以下	灰白 10YR8/2	良好	煤付着
92	1次	B地区	SD22	46層	土師器	甕	14.8	3.8	1/12	灰白 2.5Y 8/1	良好	
93	1次	B地区	SD22	46層	土師器	甕	—	4.0	1/12	赤橙 10YR6/6	良好	
94	1次	B地区	SD22	46層	土師器	甕	15.0	(3.8)	1/12 以下	にぶい黄橙 10YR6/4	良好	煤付着
95	1次	B地区	SD22	46層	土師器	甕	14.0	(3.8)	1/12	灰白 7.5YR8/1	良好	
96	1次	B地区	SD22	46層	土師器	甕	12.4	9.9	1/4	(外) 明赤褐色 5YR 5/8 (内) 橙色 5YR6/6	良好	東海以東か
97	1次	B地区	SD22	46層	土師器	甕	—	3.8	1/12 以下	灰白 2.58/2	良好	
98	1次	B地区	SD22	46層	土師器	壺	17.1	4.6	1/4	にぶい褐色 7.5YR6/3	良好	河内産か
99	1次	B地区	SD22	45層	土師器	壺	9.0	16.3	1/4	明赤褐色 2.5YR5/8 橙色 7.5YR7/6	良	煤付着
100	1次	B地区	SD22	45層	土師器	甕	16.0	(4.9)	1/4	灰白 7.5YR8/2	良	
101	1次	B地区	SD22	45層	土師器	甕	14.7	(6.3)	1/12	褐灰 10YR6/1	良好	煤付着
102	1次	B地区	SD22	45・46 層	土師器	甕	11.8	(3.8)	1/4	灰白 5YR8/1	良好	煤付着
103	1次	B地区	SD22	45層	土師器	甕	15.3	7.2	1/4	(外) 黄灰 2.5Y5/1 (内) 淡黄 2.5Y8/3	良	
104	1次	B地区	SD22	45層	土師器	小形丸 底鉢	14.1	4.5	1/4	にぶい黄橙 10YR6/4	良好	
105	1次	B地区	SD22	45層	須恵器	杯蓋	12.1	4.9	1/5	(外) 灰 N5/0	堅緻	
106	1次	B地区	SD22	45層	須恵器	杯身	9.9	4.5	1/5	(外) 灰 N5/0 (内) 灰白 N7/0	堅緻	
107	1次	B地区	SD22	45層	須恵器	杯身	10.6	5.5	1/4	灰 N5/0	堅緻	
108	1次	B地区	SD22	45層	須恵器	杯身	10.3	5.0	1/4	灰 N5/1	堅緻	
109	1次	B地区	SD22	43～45 層	土師器	壺	17.4	7.2	1/8	にぶい橙 7.5YR7/4	良好	煤付着
110	1次	B地区	SD22	43層	弥生土器	鉢	29.6	7.0	1/12 以下	灰黄 2.5Y7/2	良好	
111	1次	B地区	SD22	43層	弥生土器	器台	31.4 (脚部)	7.7	1/6	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
112	1次	B地区	SD22	43層	弥生土器	器台	11.9 (頸部)	10.9	1/4	にぶい黄橙 10YR7/3	良	
113	1次	B地区	SD22	43層	弥生土器	台形 土器	12.8	7.8	1/3	(外) 浅黄橙 10YR8/4 (内) 灰 2.5Y7/1	良	
114	1次	B地区	SD22	43層	土師器	甕	12.4	10.0	1/3	にぶい黄橙 10YR7/3	良	
115	1次	B地区	SD22	43層	土師器	甕	17.2	(3.8)	1/6	淡黄橙 7.5YR8/3	良	
116	1次	B地区	SD22	43層	土師器	甕	12.9	5.5	1/3	にぶい橙 10YR7/3	良	
117	1次	B地区	SD22	43層	土師器	甕	13.0	(4.5)	1/4	灰白 7.5YR8/2	良	煤付着
119	1次	B地区	SD22	43層	土師器	高杯	3.1 (基部)	6.6	1/6	橙 7.5YR7/6	良好	
120	1次	B地区	SD22	43層	土師器	甕	14.4	10.0	1/4	灰黄褐 10Y5/2	良	
121	1次	B地区	SD22	43層	土師器	甕	9.1	5.6	1/12	灰黄 2.5Y7/2	良	
122	1次	B地区	SD22	43層	土師器	杯	13.8	3.6	1/12 以下	にぶい橙 5 YR7/4	良好	
123	1次	B地区	SD22	43層	須恵器	杯蓋	13.6	3.4	1/4	灰白 N7/	良好	
124	1次	B地区	SD22	43層	須恵器	杯身	15.0	3.6	1/12	(外) 灰 5Y6/1 (内) 灰白 10YR8/1	堅緻	
125	1次	B地区	SD22	35層 SK17	弥生土器	壺	22.4	6.9	1/4	にぶい黄橙 10YR7/3～5YR7/4	良好	
126	1次	B地区	SD22	—	弥生土器	壺	14.1 最大	(5.0)	1/12	灰白 10YR8/1	やや軟	
127	1次	B地区	SD22	—	弥生土器	甕	23.0	(3.2)	1/12	にぶい黄橙 10YR7/3	良	
128	1次	B地区	SD22	—	弥生土器	甕	24.2	3.8	1/12	灰白 10YR8/2	良好	
129	1次	B地区	SD22	南半	弥生土器	高杯	14.4	7.2	3/4	(外) 橙 2.5YR7/6 (内) 灰黄褐 10YR 6/2	やや甘	
130	1次	B地区	SD22	南半	弥生土器	高杯	16.2	9.8	1/12	灰白 10YR8/2	良	
131	1次	B地区	SD22	南半	土師器	甕	16.4	(3.2)	1/12	灰黄褐	良	煤付着
132	1次	B地区	SD22	南半	土師器	甕	13.3	(3.7)	1/12	浅黄橙 7.5YR8/3	良好	煤付着
133	1次	B地区	SD22	南半	土師器	甕	12.0	(3.1)	1/12	灰白 10YR8/2	良好	
137	1次	B地区	SD22	南半	土師器	甕	16.0	(4.1)	1/12	灰白 7.5YR8/2	良	
138	1次	B地区	SD22	南半	土師器	甕	13.7	(5.0)	1/12	暗灰黄 2.5Y5/2	良	煤付着
139	1次	B地区	SD22	南半	土師器	甕	13.8	(3.1)	1/6	明褐灰 7.5YR7/2	良好	煤付着
140	1次	B地区	SD22	南半	土師器	甕	12.4	(3.6)	1/12	明褐灰 7.5YR7/1	軟	煤付着

報告 番号	次数	調査区	遺構	層位・ 地点	器種	器形	口径	器高	残存 率	色 調	焼成	備 考
141	1 次	B 地区	SD22	南半	土師器	小形丸 底壺	10.0 9.6 (体部)	4.45 7.0	1/4	にぶい黄 2.5Y6/3	良	
142	1 次	B 地区	SD22	SX23	土師器	埴	13.0	7.3	1/3	橙 7.5YR6/6	良好	
143	1 次	B 地区	SD22	40・43 層	土師器	高杯	9.6 (底部)	6.2	1/6	(外) 橙 5YR7/6 (内) にぶい黄橙 10YR7/3	良	
144	1 次	B 地区	SD22	南西断 ち割り	須恵器	壺	11.5	4.4	1/4	灰白 N7/0	堅緻	
145	4 次	B 地区	SD22	SK42	弥生土器	甕	24.1	45.2	—	にぶい橙 7.5YR7/3	やや軟	煤付着
146	6 次	B 地区	SD22	下層	弥生土器	壺	19.8	(6.5)	1/3	内外面とも淡黄色 2.5Y7/3	良好	
147	6 次	B 地区	SD22	下層	弥生土器	壺	(16.4)	(6.0)	1/6	灰白 10YR8/2	良好	
148	6 次	B 地区	SD22	SX73 下層	弥生土器	壺	(14.4)	(6.8)	1/12	(外) 橙 7.5YR7/6 煤付着 (内) 鈍い黄橙 10YR7/4	良好	
149	6 次	B 地区	SD22	SX73 下層	弥生土器	甕	(12.0)	(6.3)	1/12	にぶい黄橙 10YR6/4	良好	
150	6 次	B 地区	SD22	SX73 東 最下層	弥生土器	甕	31.2	(10.6)	1/12	にぶい黄橙 10YR7/3	良好	
151	6 次	B 地区	SD22	SX73 東 最下層	弥生土器	甕	—	(17.5)	1/12 以下	(外) 黄灰 2.5YR4/1・7/2 (内) 黄 灰 2.5YR4/1 黄褐 2.5YR5/3	良好	
152	6 次	B 地区	SD22	3 区中 層	縄文土器	深鉢	—	(3.3)	1/12	橙 7.5YR6/6	良好	
153	6 次	B 地区	SD22	—	弥生土器	壺	14.0	(5.8)	1/6	橙 7.5YR7/6	良好	
154	4 次	B 地区	SD22	k 7-d 下 層	弥生土器	壺	15.0	(5.7)	1/6	浅黄 2.5Y7/3	良好	
155	4 次	B 地区	SD22	下層	弥生土器	壺	—	(11.2)	1/12	(外) 浅黄 2.5Y7/3 (内) にぶい黄橙 10YR7/4	良好	
156	4 次	B 地区	SD22	k 9-d 下 層	弥生土器	壺	23.8	4.3	1/6	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
157	4 次	B 地区	SD22	上層	弥生土器	壺	25.0	3.4	1/6	(外) にぶい褐 7.5YR7/4 (内) にぶい橙 7.5YR6/3	やや軟	
158	6 次	B 地区	SD22	下層	弥生土器	壺	19.7	6.2	1/12	浅黄橙 10YR8/3	良好	
159	6 次	B 地区	SD22	下層	弥生土器	壺	18.4 (頸部)	(5.5)	1/12	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
160	6 次	B 地区	SD22	1 3 区 中層	弥生土器	甕	—	3.2	1/12 以下	灰白 7.5YR8/1	良好	
161	6 次	B 地区	SD22	1 7-b 下層	弥生土器	甕	19.8	(7.8)	1/12	淡黄橙 10YR8/3	良好	
162	6 次	B 地区	SD22	j 10-a j 9-d	弥生土器	甕	33.4	8.0	1/12 以下	にぶい黄橙 10YR7/3	良好	
163	6 次	B 地区	SD22	—	弥生土器	甕	(35.7)	(8.1)	1/12	明褐灰 7.5YR7/2	良好	
164	4 次	B 地区	SD22	j 8-b 下 層	弥生土器	甕か壺	6.6 (底部)	8.5	1/3	にぶい黄橙 10YR6/3	良好	
165	4 次	B 地区	SD22	k 8-b 下 層	弥生土器	甕か壺	6.2 (底部)	(4.8)	1/3	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	煤付着
166	6 次	B 地区	SD22	1 区最 下層	弥生土器	高杯	19.0	(4.1)	1/12	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
167	4 次	B 地区	SD22	k 4 上 層	弥生土器	器台	—	2.7	1/6	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
168	1 次	B 地区	SD22	南北断 割り東 精査	弥生土器	器台か 高杯	20.3	2.6	1/6	(外) にぶい黄橙 10YR6/3 (内) 灰黄 2.5Y 7/2	良	
169	6 次	B 地区	SD22	4 区VI 層下層	土師器	壺	13.2	5.4	1/3	にぶい橙 7.5YR6/4	良好	
170	6 次	B 地区	SD22	4 区VI 層下層	土師器	壺	12.8	(2.2)	1/12	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	東海系
171	6 次	B 地区	SD22	4 区VI 層下層	土師器	壺	12.8	(5.0)	1/12	灰白 10YR7/1	やや軟	東海系
172	6 次	B 地区	SD22	4 区VI 層下層	土師器	壺	8.2	(4.1)	1/12	褐灰 10YR6/1	良	
173	6 次	B 地区	SD22	4 区VI 層下層	土師器	甕	12.2	(5.1)	1/4	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
174	6 次	B 地区	SD22	4 区VI 層下層	土師器	甕	15.0	(5.5)	1/12	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
175	6 次	B 地区	SD22	4 区VI 層下層	土師器	甕	(19.4)	(21.0)	1/6	灰白 5YR8/2	良好	AMS 測定
176	6 次	B 地区	SD22	4 区VI 層下層	土師器	甕	11.0 (頸部)	(5.0)	1/12	灰褐 7.5YR5/2	良好	煤付着
177	6 次	B 地区	SD22	4 区VI 層下層	土師器	甕	17.1 (頸部)	(5.6)	1/12	灰白 10YR8/2	良好	
178	6 次	B 地区	SD22	4 区VI 層下層	土師器	手焙形	17.4	(6.5)	1/4	灰白 7.5YR8/2	良	近江以東か
179	6 次	B 地区	SD22	4 区VI 層下層	土師器	甕	3.7 (底部)	(4.1)	1/3	にぶい黄橙 10YR7/2	良	

報告 番号	次数	調査区	遺構	層位・ 地点	器種	器形	口径	器高	残存 率	色 調	焼成	備 考
180	6次	B地区	SD22	4区Ⅵ 層下層	土師器	甕	4.5 (底部)	(3.3)	1/6	灰褐 5YR6/2	良好	
181	6次	B地区	SD22	4区Ⅵ 層下層	土師器	甕	4.4 (底部)	(3.0)	1/2	褐灰 10YR5/1	良	
182	6次	B地区	SD22	4区Ⅵ 層下層	土師器	甕	4.4 (底部)	(3.9)	1/4	褐灰 10YR6/1	良	
183	6次	B地区	SD22	4区Ⅵ 層	土師器	壺	8.8 (頸部)	(4.0)	1/6	(外) 橙 7.5YR6/8 (内) におい黄橙 10YR6/3	良好	近江以東か
184	6次	B地区	SD22	4区Ⅵ 層	土師器	甕	13.8	(3.9)	1/12	におい黄橙 10YR7/3	良好	
185	6次	B地区	SD22	4区Ⅵ 層	土師器	甕	18.1	(5.3)	1/6	灰白 10YR7/1	良好	
186	6次	B地区	SD22	4区Ⅵ 層	土師器	甕	(11.0)	(10.9)	1/6	灰黄 2.5Y7/2	良好	
187	6次	B地区	SD22	4区Ⅵ 層	土師器	甕	14.2	(6.8)	1/12	におい黄橙 10YR7/2	良好	
188	6次	B地区	SD22	4区Ⅵ 層	土師器	甕	17.6	(2.8)	1/12	灰白 10YR7/1	良好	内側に煤付 着
189	6次	B地区	SD22	4区Ⅵ 層	土師器	甕	4.0 (底部)	(3.2)	1/6	(外) 褐灰 10YR4/1 (内) 灰白 10YR8/1	良好	
190	6次	B地区	SD22	4区Ⅵ 層	土師器	甕	5.4 (底部)	(2.3)	—	黒褐 2.5Y3/1	良好	
191	6次	B地区	SD22	4区Ⅵ 層	土師器	甕	5.0 (底部)	(3.2)	1/6	黄灰 2.5Y6/1	良	
192	6次	B地区	SD22	4区	土師器	甕	17.0	(4.6)	1/12 以下	におい橙 7.5YR7/3	良好	煤付着 北近畿系
193	4次	B地区	SD22	m 6-a	土師器	壺	8.6	16.2	ほぼ 完存	赤橙 10YR6/8	良好	煤付着 東海系
194	6次	B地区	SD22	護岸材	土師器	甕	13.8	(9.1)	1/6	灰白 2.5Y7/1	良好	
195	6次	B地区	SD22	k 7-b SX66	土師器	甕	(13.7) 体部	(5.3)	1/6	灰黄褐 10YR6/2	良	煤付着
196	6次	B地区	SD22	k 7-b SX66	土師器	甕	17.3	(2.8)	1/12	におい黄橙 10YR7/3	良好	
197	6次	B地区	SD22	k 7-b SX66	土師器	壺	(17.6)	(8.0)	1/12	灰褐 7.5YR5/2	良好	
198	6次	B地区	SD22	k 7-b SX66	土師器	高杯	22.3	(7.7)	1/12	におい黄橙 10YR7/2	良好	東海系
199	6次	B地区	SD22	SX66・ k 7-b	土師器	高杯	14.9 (脚)	(8.5)	1/6	におい黄橙 10YR7/2	良好	198と同一 か
200	6次	B地区	SD22	2区	土師器	高杯	(12.3)	(3.2)	1/6	におい黄橙 10YR7/3	良好	
201	6次	B地区	SD22	最下層	土師器	小形丸 底鉢	16.6	6.9	1/12	(外) 灰黄褐 10YR6/2 (内) におい黄褐 10YR5/4	良好	
202	6次	B地区	SD22	最下層	土師器	壺	11.5	14.7	2/3	橙 7.5YR7/6	良好	東海系
203	6次	B地区	SD22	下層(Ⅳ 層)	土師器	壺	14.8	(3.7)	1/4	におい橙色 2.5YR6/4	良好	
204	6次	B地区	SD22	下層(Ⅳ 層)	土師器	甕	15.9	(3.2)	1/6	灰白 10YR8/2 断面黒色を呈す	良好	近江系
205	6次	B地区	SD22	下層(Ⅳ 層)	土師器	壺	20.2	6.0	1/12	褐灰 10YR6/1	良好	
206	6次	B地区	SD22	下層(Ⅳ 層)	土師器	壺	(15.8)	(5.7)	1/6	(外) におい黄褐 10YR5/3 (内) におい黄橙 10YR7/3	良好	
207	6次	B地区	SD22	下層(Ⅳ 層)	土師器	壺	16.0	5.0	1/12	灰黄褐 10YR6/2	良好	
208	6次	B地区	SD22	下層(Ⅳ 層)	土師器	甕	15.2	(14.8)	1/3	灰白 7.5YR8/2	やや軟	煤付着 吉備系
209	6次	B地区	SD22	下層(Ⅳ 層)	土師器	甕	16.8	(14.6)	ほぼ 完存	浅黄橙 7.5YR8/3	良	
210	6次	B地区	SD22	下層(Ⅳ 層)	土師器	甕	16.4	(16.9)	1/12	灰白 10YR8/2	良	
211	6次	B地区	SD22	下層(Ⅳ 層)	土師器	甕	16.3	(7.0)	1/4	灰白 10YR8/2	良好	
212	6次	B地区	SD22	下層(Ⅳ 層)	土師器	甕	20.8	4.8	1/12	明褐灰 7.5YR7/1	良好	
213	6次	B地区	SD22	下層(Ⅳ 層)	土師器	甕	18.2	4.2	1/4	灰白 10YR8/2	やや軟	
214	6次	B地区	SD22	下層(Ⅳ 層)	土師器	甕	18.8	(4.2)	1/12	灰白 5YR8/1	軟	
215	6次	B地区	SD22	下層(Ⅳ 層)	土師器	甕	13.0	4.2	1/12	灰黄 2.5Y7/2	良好	
216	6次	B地区	SD22	下層(Ⅳ 層)	土師器	甕	16.0	4.0	1/12	灰白 10YR8/2	やや軟	
217	6次	B地区	SD22	下層(Ⅳ 層)	土師器	甕	16	3.9	1/12	灰白 7.5YR8/1	やや軟	

報告 番号	次数	調査区	遺構	層位・ 地点	器種	器形	口径	器高	残存 率	色 調	焼成	備 考
218	6 次	B 地区	SD22	下層(Ⅳ層)	土師器	甕	15.2	(15.7)	ほぼ 完形	淡橙 5YR8/ 3	やや軟	煤付着
219	6 次	B 地区	SD22	下層(Ⅳ層)	土師器	甕	13.8	3.7	1/3	灰白 10YR8/2	やや軟	
220	6 次	B 地区	SD22	下層(Ⅳ層)	土師器	甕	10.1	(4.6)	1/12	灰白 10YR7/1	良好	東海系
221	6 次	B 地区	SD22	下層(Ⅳ層)	土師器	高杯	13.8	11.9	1/6	(外) 浅黄橙 7.5YR 8/3 (内) にぶい黄橙 10YR6/4	良好	
222	6 次	B 地区	SD22	下層(Ⅳ層)	土師器	高杯	(16.8)	(5.8)	1/4	にぶい黄橙 10YR6/4	良好	
223	6 次	B 地区	SD22	下層(Ⅳ層)	土師器	小形丸 底鉢	11.8	6.5	1/12	(外) にぶい黄橙 10YR6/3 (内) 橙 5YR6/6	良好	
224	6 次	B 地区	SD22	下層(Ⅳ層)	土師器	小形丸 底鉢	12.0	7.0	1/4	(外) にぶい褐 7.5YR6/3 (内) にぶい褐 7.5YR6/3	良好	
225	6 次	B 地区	SD22	下層(Ⅳ層)	土師器	小形丸 底鉢	(14.0)	(4.0)	1/6	灰 10YR8/2	やや軟	
227	4 次	B 地区	SD22	j 9-d 下層	土師器	壺	15.4	4.9	7/12	淡橙 5YR8/ 3	良好	
228	4 次	B 地区	SD22	j 9-c 下層	土師器	壺	15.6	(2.8)	1/6	明赤褐 5YR5/6	良好	
229	4 次	B 地区	SD22	j 9-c 下層・j 8-b 下層	土師器	壺	21.1	10.3	1/12	褐灰 10YR6/1	良好	阿波系
230	4 次	B 地区	SD22	j 9-c 下層	土師器	壺	24	2.9	1/12	にぶい橙 7.5YR6/4	良好	阿波系
231	4 次	B 地区	SD22	k 7-d 下層	土師器	壺	16	(7.4)	1/12 以下	灰黄 2.5Y7/2	良好	
232	1 次	B 地区	SD22	k 10-a 中層	土師器	壺	15.6	8.3	1/2	(外) にぶい橙 7.5YR7/3 (内) にぶい黄橙	良好	
233	1 次	B 地区	SD22	2 区 j 9-d 下層	土師器	壺	—	(7.7)	1/12 以下	灰黄 2.5Y7/2	良好	
234	4 次	B 地区	SD22	k 8-b 中層	土師器	壺	15.6	7.7	1/2	灰白 7.5YR8/2	良好	
235	4 次	B 地区	SD22	k 8-b 中層	土師器	壺	15.5	23.5	1/2	にぶい黄橙 10YR7/3	良好	
236	4 次	B 地区	SD22	j 9-d	土師器	壺	14.2	26.0	ほぼ 完存	浅黄橙 10YR8/3	良	
237	4 次	A 地区	SD22	土器 37	土師器	壺	18.0	7.1	1/6	浅黄橙 10YR8/4	良好	
238	6 次	B 地区	SD22	4 区下層	土師器	壺	13.7	(5.0)	1/6	橙 2.5YR7/6	良好	山陰系
239	6 次	B 地区	SD22	2 区Ⅶ層	土師器	壺	—	4.9	1/6	明褐 7.5YR5/6	良好	搬入品
240	4 次	B 地区	SD22	k 7-b 3 区Ⅰ層	土師器	壺	20.0	(3.8)	1/12	暗灰黄 2.5Y5/2	良好	淡路系か
241	4 次	B 地区	SD22	k 8 下層	土師器	壺	4.55 (底部)	5.7	1/6	灰黄 2.5Y7/2	良好	
242	4 次	B 地区	SD22	j 10-a 下層	土師器	甕	15.6	11.4	1/2	灰白 2.5Y8/2	良好	
243	4 次	B 地区	SD22	k 7-c 下層	土師器	甕	15.7	6.4	1/6	明褐 7.5YR7/2	良好	
244	1 次	B 地区	SD22	i 9-10 下層・j 9-10 下層	土師器	甕	15.8	3.1	1/12	灰黄褐 10YR6/2	良好	
245	4 次	B 地区	SD22	j 10-ab 下層	土師器	甕	11.4	6.5	1/12	にぶい黄橙 10YR6/4	良好	煤付着
246	4 次	B 地区	SD22	j 10-ab 下層	土師器	甕	14.4	3.7	1/6	褐灰 7.5YR4/1	良好	
247	—	B 地区	SD22	下層	土師器	甕	12.8 (頸部)	(2.0)	1/6	にぶい黄橙 10YR7/3	良好	近江系
248	—	B 地区	SD22	k7-d 下層	土師器	甕底部	5.6 (底部)	(4.0)	1/6	にぶい赤褐 5YR4/4	良好	
249	—	B 地区	SD22	i 9-c 下層	土師器	甕底部	3.8 (底部)	(2.0)	1/12	にぶい赤褐 2.5YR5/4	良好	
250	6 次	B 地区	SD22	1 区Ⅳ層	土師器	甕	16.0	5.6	1/6	にぶい黄橙 10YR7/3	良好	
251	6 次	B 地区	SD22	2 区Ⅲ層	土師器	甕	12.8 (頸部)	(3.2)	1/12	淡赤橙 2.5YR7/4	良	近江系
252	6 次	B 地区	SD22	1 区Ⅳ層	土師器	甕	15.2	(2.0)	1/12	明褐灰 7.5YR7/2	良	近江系

報告 番号	回数	調査区	遺構	層位・ 地点	器種	器形	口径	器高	残存 率	色 調	焼成	備 考
253	4 次	B 地区	SD22	j10-b 下 層	土師器	台付甕	9.4	11.5	1/6	灰黄褐 10YR6/2	良好	近江・東海 系
254	4 次	B 地区	SD22	3 区	土師器	甕	16.6	(4.1)	1/12	灰黄褐 10YR6/2	良好	近江系
255	1 次	B 地区	SD22	j 8-b c	土師器	甕	14.6	2.8	1/6	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	北陸系
256	4 次	B 地区	SD22	j 7-b 下 層	土師器	甕	14.0	3.4	1/12	にぶい褐 7.5YR6/3	良好	阿波系 煤付着
257	4 次	B 地区	SD22	k 7-b 下 層	土師器	甕	17.0	(4.8)	1/6	暗灰 N3/0	良好	
258	4 次	B 地区	SD22	j10-a	土師器	甕	11.8	(12.0)	1/6	褐灰 10YR6/1	良好	大和産か
259	4 次	B 地区	SD22	j 9-d 下 層	土師器	甕	16.4	23.3	5/6	にぶい黄橙 10YR6/3	良好	煤付着
260	4 次	B 地区	SD22	k 8 下 層	土師器	甕	16.6	19.8	1/6	明褐灰 5YR7/2	良好	煤付着
261	1 次	B 地区	SD22	j 9-c 下 層	土師器	甕	11.4	12.1	5/12	明褐灰 7.5YR7/1	良好	
262	4 次	B 地区	SD22	j 10-b	土師器	甕	14.8	4.0	1/12 以下	(外) 灰白 2.5Y8/1 (内) 灰白 5Y8/1	良好	
263	4 次	B 地区	SD22	j 9-a 下層	土師器	甕	14.6	5.2	1/6	明褐灰色 7.5YR7/2	良好	煤付着
264	1 次	B 地区	SD22	j 9-d	土師器	甕	15.0	4.9	1/12	(外) 灰白 7.5YR8/2 (内) 灰 N6/0	良好	
265	4 次	B 地区	SD22	k 7-b 下 層	土師器	甕	15.3	3.4	1/6	灰黄 2.5Y8/2	良好	煤付着
266	4 次	B 地区	SD22	下層	土師器	甕	16.2	(3.0)	1/12 以下	褐灰 10YR6/1	やや軟	煤付着
267	1 次	B 地区	SD22	j 9-d 下 層	土師器	甕	15.0	8.0	1/12	(外) 浅黄橙 10YR8/3 (内) 黄灰 2.5YR6/1	良好	
268	1 次	B 地区	SD22	j 9-a	土師器	甕	15.8	4.0	1/4	灰白 10YR8/1	良好	
269	1 次	B 地区	SD22	j 8-d 下 層	土師器	甕	15.0	5.3	1/6	淡黄 2.5YR8/3	良好	
270	1 次	B 地区	SD22	k 7-d 中 層・k 7-d 下層	土師器	甕	15.1	4.0	1/6	(外) 灰白 10YR8/2	良好	
271	—	B 地区	SD22	j 8-b 下 層・k 8-a 下層	土師器	甕	16.0	4.5	1/12 以下	(外) にぶい黄橙 10YR7/2 (内) 灰白 10YR8/2	良好	
272	—	B 地区	SD22	k 7-d 下 層	土師器	甕	16.9	(3.7)	1/6	淡黄橙 7.5YR8/3	良好	煤付着
273	—	B 地区	SD22	k 7-a 下 層	土師器	甕	14.3	(3.0)	1/6	にぶい黄橙 10YR7/3	良好	
274	—	B 地区	SD22	k 7-c 下 層	土師器	甕	19.0	4.1	1/12 以下	灰白 10YR8/1	良好	
275	4 次	B 地区	SD22	j 7-c 下 層	土師器	甕	18	(3.7)	1/6	灰白 5YR8/2	良	
276	4 次	B 地区	SD22	j 7-c 下 層	土師器	甕	16.3	4.3	1/6	(外) 灰白 10YR8/1 (内) 暗灰黄 2.5Y	良好	
277	4 次	B 地区	SD22	k 7-c 下 層	土師器	甕	15.0	6.0	1/6	灰白 7.5YR8/1	良好	
278	—	B 地区	SD22	k 9-b 下 層	土師器	甕	14.8	3.5	1/12	にぶい黄橙 10YR7/3	良好	
279	4 次	B 地区	SD22	j 10-b 下層	土師器	甕	14.0	3.8	1/12	にぶい黄橙 10YR6/4	良好	
280	1 次	B 地区	SD22	j 9-d 下 層	土師器	甕	14.5	6.8	1/12	灰褐 7.5Y6/2	良好	
281	4 次	B 地区	SD22	j 9-c b 下層	土師器	甕	15.0	7.8	1/4	(外) 黒 2.5Y2/1 (内) 黒褐 2.5Y3/1	良好	
282	—	B 地区	SD22	k 7-d 下 層	土師器	甕	16.1	3.5	1/6	浅黄 2.5Y7/3	良好	
283	1 次	B 地区	SD22	j 9-d 下 層	土師器	甕	11.1	2.9	1/6	にぶい橙 YR7/3	良好	
284	4 次	B 地区	SD22	—	土師器	甕	13.0	3.5	1/6	にぶい橙 5YR6/4	良好	
285	4 次	B 地区	SD22	j 9-c 下 層	土師器	甕	15.8	16.9	—	灰白 7.5YR8/1	良好	煤付着
286	—	B 地区	SD22	j 8-b 下 層	土師器	甕	13.6	(3.5)	1/6	にぶい橙 YR7/3	良	煤付着
287	1 次	B 地区	SD22	j 8-d 下 層	土師器	甕	12.8	3.2	1/6	灰白 2.5Y7/1	良好	煤付着
288	1 次	B 地区	SD22	j 9-d 下 層	土師器	甕	13.9	(12.2)	1/12 以下	(外) 灰白 10YR8/2 (内) 灰白 10YR8/1	良好	
289	1 次	B 地区	SD22	j 9-d 下 層	土師器	甕	12.0	7.7	1/12	淡赤橙 2.5YR7/4	良好	

報告 番号	次数	調査区	遺構	層位・ 地点	器種	器形	口径	器高	残存 率	色 調	焼成	備 考
290	1 次	B 地区	SD22	j 8-d 下 層	土師器	甕	17.0	3.6	1/12	灰白 10YR8/2	良好	
291	—	B 地区	SD22	k 7-d 下 層	土師器	甕	—	5.7	1/6	にぶい黄橙 10YR6/4	良好	
292	4 次	B 地区	SD22	k 6-d 下 層	土師器	甕	12.0	13.3	1/6	灰白 10YR8/1	良好	
293	4 次	B 地区	SD22	k 10-a 下層	土師器	高杯	15.6	5.0	3/4	灰白 10YR8/1	良好	
294	4 次	B 地区	SD22	j 8-d 下 層	土師器	高杯	—	(7.6)	1/6	(外) 灰黄 2.5Y7/2 にぶい橙 7.5YR7/4 (内) 浅黄 2.5YR7/2 黄褐 10YR7/6	良好	
295	—	B 地区	SD22	9 区	土師器	高杯	3.2 (基 部)	(8.0)	1/6	橙色 2.5YR6/8	良好	
296	4 次	B 地区	SD22	j 9-a 下 層・ l 8-b 下層	土師器	高杯	—	2.4	1/6	(外) 褐灰 10YR4/1 (内) にぶい黄橙 10YR7/3	良好	山陰系
297	4 次	B 地区	SD22	k 10-a 下層	土師器	高杯	—	1.3	1/4	(外) 灰白 2.5Y8/1 (内) 浅黄色 7.5YR8/4	良好	山陰系
298	—	B 地区	SD22	k 10-a 下層	土師器	高杯	10.7 (底部)	8.4	3/4	浅黄橙 7.5YR8/3	良好	
299	—	B 地区	SD22	i 9- b 下 層	土師器	高杯	17.2	3.9	1/6	にぶい黄橙 10YR6/4	良好	
300	—	B 地区	SD22	j 9-c 下 層	土師器	高杯	18.0	5.0	1/6	淡黄橙 7.5YR8/3	良好	吉備系
301	4 次	B 地区	SD22	j 10-a 下層	土師器	小形丸 底鉢	13.0	7.8	1/2	淡橙 5YR8/4	やや軟	漆とみられる 黒色樹脂 付着
302	—	B 地区	SD22	j 8-b 下 層	土師器	小形丸 底鉢	9.8	5.5	1/4	灰 10YR8/2	良好	
303	1 次	B 地区	SD22	j 9-d 下 層	土師器	小形丸 底鉢	8.9	8.9	1/12	にぶい黄橙	良	
304	—	B 地区	SD22	k 7-d 下 層	土師器	小形丸 底鉢	12.2	4.2	1/12	(外) 灰白 10YR7/1 (内) 灰白 10YR8/2	良好	
305	4 次	B 地区	SD22	j a - d 下層	土師器	小形丸 底鉢	8.8	6.8	1/12	灰白 2.5Y8/1 淡赤橙 2.5YR7/4	良	
306	1 次	B 地区	SD22	k 7-d 中 層・ l 8-b 下層	土師器	小形丸 底鉢	17.4	4.0	1/6	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
308	4 次	B 地区	SD22	j 9-a 下層	土師器	小形丸 底鉢	18.0	3.5	1/12	明黄褐 10YR7/6	良好	
309	—	B 地区	SD22	k 7- d か層	土師器	小形丸 底鉢	17.0	2.4	1/12	にぶい橙 7.5YR7/4	良好	
310	4 次	B 地区	SD22	j 9-b 下 層	土師器	小形丸 底鉢	14.0	4.8	1/4	にぶい橙 2.5YR6/3	良好	
311	—	B 地区	SD22	k 7-d 下 層	土師器	小形丸 底鉢	14.4	4.0	1/12	(外) 淡橙 5YR8/3 (内) 灰白 7.5YR8/1	良好	
312	1 次	B 地区	SD22	j 9-d 下 層	土師器	壺か小 形丸底 鉢	14.5	2.3	1/6	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
313	4 次	B 地区	SD22	下層	土師器	器台	12.0	4.9	1/6	にぶい橙 7.5YR4/6	良好	
314	4 次	B 地区	SD22	l 7-a 下層	土師器	手焙形 土器	12.4 (頸部)	16.7	ほぼ 完存	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
315	—	B 地区	SD22	j 10-a 下 層	土師器	手焙形 土器	2.8 (頸部)	(6.0)	1/12	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
316	6 次	B 地区	SD22	2 区	土師器	手焙形 土器	—	5.0 残 存長)	1/12 以下	灰黄褐 10YR6/2	良好	近江系
317	—	B 地区	SD22	k7-d 下 層	土師器	手焙形 土器	—	3.2 (残 存長)	1/12 以下	にぶい黄橙色 10YR7/2	良好	近江系
318	6 次	B 地区	SD22	4 区IV 層	土師器	甕	10.8	(8.5)	1/3	浅黄 2.5YR7/3 内外面黒く光沢あり	良	
320	6 次	B 地区	SD22	4 層	土師器	甕	15.7	5.1	1/12	灰黄 2.5YR6/2	良好	
321	6 次	B 地区	SD22	4 層	土師器	高杯	16.1	4.9	1/12	にぶい橙 7.5YR7/4・橙 5YR6/6	良好	
322	6 次	B 地区	SD22	4 層	土師器	高杯	—	6.4	1/12	にぶい黄橙 10YR7/3	良好	
323	6 次	B 地区	SD22	4 区IV 層	土師器	高杯	25.2	(9.9)	5/6	橙 2.5YR6/8	良	
323	6 次	B 地区	SD22	3 区IV 層	土師器	高杯	14.3 (脚部)	(5.0)	1/12	橙 2.5YR6/8	良好	
324	6 次	B 地区	SD22	3 区IV 層	土師器	壺	12.6	(9.4)	1/12 以下	浅黄 2.5Y7/3	良好	
325	—	B 地区	SD22	3 区IV 層	土師器	壺	12.0 (頸部)	(5.8)	1/12	(外) にぶい黄橙 10YR7/2 (内) 灰黄 2.5Y	良好	
326	—	B 地区	SD22	4 区最 下層	土師器	壺	6.6 (底部)	(4.0)	1/2	(外) 黒褐 10YR6/3 (内) 黒褐 10YR3/1	良好	

報告 番号	次数	調査区	遺構	層位・ 地点	器種	器形	口径	器高	残存 率	色 調	焼成	備 考
327	6次	B地区	SD22	3区Ⅳ層	土師器	甕	14.0	6.1	1/4	浅黄 2.5Y7/3	良好	
328	6次	B地区	SD22	k 6-b3区	土師器	甕	14.1	4.2	1/3	淡黄 2.5Y8/4	良好	
329	6次	B地区	SD22	3区Ⅳ層	土師器	甕	13.7	5.4	1/4	(外) にぶい黄灰 10YR7/2 (内) 灰白 2.5Y8/2	良好	
330	6次	B地区	SD22	j 7-c3区	土師器	甕	(15.6)	(3.8)	1/12	灰黄褐 10YR	良好	
331	—	B地区	SD22	k 7-ad3区	土師器	甕	—	(4.1)	1/12以下	灰白 10YR8/1	良好	
332	—	B地区	SD22	k 6-b3区	土師器	甕	(14.4)	(2.9)	1/12	明褐灰 7.5YR7/2	良好	
333	—	B地区	SD22	3区Ⅳ層	土師器	甕	15.5	(3.8)	1/4	灰黄褐 10YR	良好	
334	6次	B地区	SD22	4区下層	土師器	甕	13.8	7.8	1/6	(外) 白灰 10YR7/1 (内) にぶい橙 7.5YR7/3	良好	
335	6次	B地区	SD22	3区	土師器	甕	(16.6)	(3.4)	1/4	にぶい黄橙 10YR6/4	良好	
336	—	B地区	SD22	3区Ⅳ層	土師器	甕	17.0	(4.2)	1/6	浅黄 2.5Y7/3	良好	
337	—	B地区	SD22	3区Ⅳ層	土師器	甕	(19.6)	(3.3)	1/12	灰白 10YR8/1	良好	
338	6次	B地区	SD22	4区下層	土師器	甕	14.8	4.0	1/6	灰黄 2.5YR6/2	良好	
339	6次	B地区	SD22	k 6-c 1 6-d 3区	土師器	高杯	12.9	4.2	1/3	明黄褐色 10YR7/6・6/6	良好	
340	6次	B地区	SD22	4区下層	土師器	高杯	16.9	5.9	1/12	(外) にぶい黄 2.5Y6/3 (内) にぶい黄 6/4	良好	山陰系
341	6次	B地区	SD22	k 6-cd 3区	土師器	高杯	15.8	(5.6)	1/3	浅黄橙 7.5YR8/4	良好	山陰系
342	7次	B地区	SD22	j 10-b	土師器	高杯	—	1.9	1/12	灰白 10YR8/1	良好	山陰系
344	8次	B地区	SD22	j 7-bc 3区	土師器	鉢	—	(4.4)	1/12以下	(外) にぶい橙 7.5YR7/3 (内) にぶい赤褐 5YR5/4	良好	
345	9次	B地区	SD22	4区最下層	土師器	小形丸底鉢	13.8	5.2	1/12	(外) 橙 7.5YR6/6 (内) にぶい黄橙 10YR	良好	
346	10次	B地区	SD22	k7-ad 3区	土師器	小形丸底鉢	(16.4)	(4.3)	1/12以下	にぶい橙 7.5YR7/4	良好	
348	6次	B地区	SD22	k6-b c 3区Ⅰ層	土師器	壺	(10.6)	(3.6)	1/4	灰黄褐 10YR6/2	良好	阿波系
349	—	B地区	SD22	m 3中層・m 4中層	土師器	壺	13.6	5.6	3/12	灰白 7.5YR8/2	良好	
350	—	B地区	SD22	l 4中層・l 5中層	土師器	壺	32	(11.4)	1/12以下	にぶい黄橙 10YR7/2	やや軟	讃岐系
351	—	B地区	SD22	k 4上層・中層	土師器	甕	12.5	3.2	1/12	灰黄褐 10YR6/2	良好	
352	—	B地区	SD22	l 3中層・l 4中層	土師器	甕	13.3	4.2	1/6	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
353	—	B地区	SD22	l 4	土師器	甕	13.2	3.0	1/12	灰白 10YR8/2	良好	
354	—	B地区	SD22	m 5中層	土師器	甕	13.1	4.7	1/6	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
355	6次	B地区	SD22	1層	土師器	甕	14.6	(7.3)	3/4	灰白 10YR8/2	良好	
356	—	B地区	SD22	m 3中層	土師器	甕	15.0	7.8	1/3	(外) 橙 2.5YR6/6 (内) 淡橙 5YR8/4	やや軟	
357	—	B地区	SD22	j 10-b下層	土師器	甕	17.8	14.3	1/6	灰白 10YR8/1	良好	
358	—	B地区	SD22	3区Ⅲ層	土師器	甕	(15.4)	(3.1)	1/12	にぶい黄橙 10YR6/3	良好	
359	1次	B地区	SD22	k 7-d中層	土師器	甕	12.2	3.3	—	灰白 2.5Y8/1	良好	山陰系
360	—	B地区	SD22	m 3中層	土師器	甕	22.0 (体部)	4.0	—	明褐灰 7.5YR7/2	良	近江系
361	6次	B地区	SD22	3区Ⅰ層	土師器	高杯	16.0	(5.1)	ほぼ 完形	にぶい橙 5YR7/3	良好	山陰系
362	—	B地区	SD22	m 4中層	土師器	小形壺	8.0	7.1	1/12	橙 5YR6/6	良好	山陰系
363	1次	B地区	SD22	k 7-d中層	土師器	小形丸底鉢	10.4	(5.4)	1/6	灰白 N8/0 一部暗灰	良好	

報告 番号	次数	調査区	遺構	層位・ 地点	器種	器形	口径	器高	残存 率	色 調	焼成	備 考
364	一	B 地区	SD22	m-3 区 中層	土師器	小形丸 底鉢	15.0	5.0	1/4	灰黄 2.5YR7/2	やや軟	
365	6 次	B 地区	SD22	4 層	土師器	壺	14.0	(22.3)	1/2	にぶい橙 7.5YR7/3	良好	
366	4 次	B 地区	SD22	中層	土師器	小形丸 底鉢	10.0	7.0	1/4	灰白 10YR8/2	良好	
367	4 次	B 地区	SD22	SX51 下 層	土師器	甕	21.0	7.7	1/12	灰黄褐 10YR6/2	良好	
368	6 次	B 地区	SD22	SX51	須恵器	杯身	11.1	(4.8)	1/12	青灰 5PB 5/1	堅緻	
369	4 次	B 地区	SD22	1 3 上 層	須恵器	甕	6	(5.5)	1/12	暗灰 N3/0	堅緻	
370	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	壺	12.9	12.8	ほぼ 完形	にぶい黄橙 10YR7/2	堅緻	
371	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	壺	15.4	7.0	1/6	灰白 2.5YR8/1	良好	
372	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	壺	17.0	7.8	5/12	(外) 灰褐色 7.5YR6/2 (内) にぶい橙 7.5YR7/3	良好	
373	一	B 地区	SD22	SX51	土師器	壺	(18.4)	(6.6)	1/12	浅黄 2.5Y7/3	良好	
374	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	壺	13.4	(5.5)	1/12	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	山陰系
375	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	壺		(5.5)	1/12	7.5YR7/2	良好	山陰系
376	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	13.6	6.3	1/4	(外) にぶい赤褐 10YR6/4 (内) 明褐灰 7.5YR7/2	やや軟	
377	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	12.4	5.7	1/4	(外) 浅黄橙 7.5YR4/8 (内) 明褐灰 7.5YR7/1	良好	
378	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	14.8	9.7	1/6	灰黄 2.5YR7/2 にぶい橙 5YR7/4	良好	煤付着
379	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	15.0	3.5	1/12	灰白 10YR8/2	良好	煤付着
380	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	13.0	4.8	1/4	(外) 明褐灰 7.5YR7/2 (内) 明褐灰 5YR7/2	良好	
381	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	15.6	4.8	1/4	にぶい黄褐 10YR7/3	良好	煤付着
382	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	15.6	9.1	3/4	にぶい黄橙 10YR6/3	良好	煤付着
383	6 次	B 地区	SD22	SX51 下 層	土師器	甕	14.5	(15.7)	1/4	灰白 7.5YR8/2	良好	
384	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	12.2	7.4	1/4	(外) 浅黄橙 7.5YR8/3 (内) 灰白 10YR8/2 にぶい橙 5YR7/4	良好	煤付着
385	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	13.4	4.5	1/2	にぶい黄橙 10YR7/3	良好	
386	4 次	B 地区	SD22	SX51 下 層	土師器	甕	16.6	10.8	1/4	にぶい黄橙 10YR7/3 浅黄 2.5Y7/3	良好	煤付着
387	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	15.0	3.7	1/2	(外) にぶい橙 7.5YR7/2 (内) 浅黄橙 10YR8/2	良好	煤付着
389	一	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	42.4	10.7	1/12	にぶい黄橙 10YR7/4	良好	
390	一	B 地区	SD22	SX51 下 層	土師器	甕	—	(5.7)	1/12 以下	浅黄 2.5YR7/3	良好	
391	2 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	13.8	10.3	1/3	内外面とも灰白 10YR8/2	やや軟	
392	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	12.8	8.6	1.5/12	黒 2.5Y2/1	良好	煤付着
393	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	13.4	6.5	1/2	灰黄褐 10YR6/2	良好	煤付着
394	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	13.4	6.7	1/2	にぶい黄橙 10YR7/3	良好	
395	6 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	15.0	5.9	1/6	(外) N1.5/0 (内) にぶい黄橙 10YR6/3	良好	
396	6 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	14.3	(8.9)	1/3	淡赤橙 2.5YR7/3	良	
397	6 次	B 地区	SD22	SX51 下 層	土師器	甕	16.2	7.2	1/3	(外) 浅黄 2.5YR7/3 (内) 浅黄橙 10YR8/2	良好	
398	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	13.9	11.7	1/3	(外) 浅黄橙 1 0 YR8/3 (内) 浅黄橙 10YR7/3	良好	煤付着
399	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	15.6	9.2	1/4	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	煤付着
400	6 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	13.9	17.8	1/3	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	北陸系か
401	6 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	—	4.4	1/12	(外) にぶい橙 7.5YR6/4 (内) にぶい橙 5YR7/4	良好	
402	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	19.0	4.3	1/12	(外) 褐 7.5YR4/3 (内) にぶい褐 7.5YR5/4	良好	山陰系
403	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	甕	26.5	32.5	1/4	灰褐色 7.5YR4/2	良好	山陰系 煤付着
404	4 次	B 地区	SD22	SX51 下 層	土師器	碗形高 杯	12.3	4.7	1/6	にぶい黄橙 10YR6/4	良好	
405	4 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	高杯	14	(4.8)	1/6	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
406	6 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	高杯	18.8	4.3	1/12	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
407	6 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	高杯	(2.2)	3.4	1/12	(外) 橙 5YR6/6 (内) 橙 7.5YR7/6	良好	山陰系
408	6 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	高杯	—	3.2	1/12	(外) 黒 2.5YR2/1 (内) 灰黄 2.5Y6/2	良好	
409	6 次	B 地区	SD22	SX51 下 層	土師器	高杯	3.0	10.0	1/4	浅黄橙 7.5YR8/4	良好	
410	6 次	B 地区	SD22	SX51	土師器	高杯	—	8.3	1/12	にぶい黄橙 10YR7/3	良好	

報告 番号	次数	調査区	遺構	層位・ 地点	器種	器形	口径	器高	残存 率	色 調	焼成	備 考
411	6次	B地区	SD22	SX51	土師器	小形丸 底鉢	13.0	(7.7)	1/4	橙 7.5YR7/6	良好	
412	6次	B地区	SD22	SX51	土師器	小形丸 底鉢	11.6	7.2	ほぼ 完形	橙 7.5YR7/6	良好	
414	6次	B地区	SD22	SX51	土師器	小形丸 底鉢	11.8	6.9	1/4	橙 7.5YR7/6	良好	
415	—	B地区	SD22	SX51 下 層	土師器	小形丸 底鉢	11.4	7.1	1/2	にぶい黄橙 10YR6/3	良好	
416	4次	B地区	SD22	SX51	土師器	小形丸 底鉢	12.4	7.5	ほぼ 完形	にぶい黄橙 10YR7/3 7/6	良好	
417	6次	B地区	SD22	SX51 下 層	土師器	小形丸 底鉢	11.1	(7.2)	1/4	にぶい赤褐 5YR5/3	良好	
418	—	B地区	SD22	SX51	土師器	小形丸 底鉢	—	5.8	1/12 以下	明赤褐 2.5YR5/8	良好	
419	—	B地区	SD22	SX51	土師器	小形丸 底鉢	11.8	5.5	1/6	にぶい黄橙 10YR7/3 7/6	やや軟	
420	—	B地区	SD22	SX51	土師器	小形丸 底鉢	—	5.4	1/6	橙 7.5YR6/6	良好	
421	4次	B地区	SD22	SX51	土師器	小形丸 底鉢	9.5	4.9	1/4	にぶい黄橙 10YR7/3 7/6	堅緻	
422	4次	B地区	SD22	SX51	土師器	小形丸 底鉢	—	4.7	1/6	灰黄色 2.5Y6/2	良好	
423	—	B地区	SD22	SX51	土師器	小形丸 底鉢	—	(4.3)	1/12 以下	浅黄色 2.5Y7/3	良好	
424	6次	B地区	SD22	SX51	土師器	小形丸 底鉢	—	4.2	1/12 以下	(外) にぶい黄橙 10YR7/3 7/6 (内) にぶい黄橙 10YR7/3	良好	
425	4次	B地区	SD22	SX51	土師器	小形丸 底鉢	12.4	5.9	1/3	にぶい赤褐 5YR5/3	やや軟	
426	4次	B地区	SD22	SX51	土師器	小形丸 底鉢	13.1	4.9	1/6	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
427	4次	B地区	SD22	SX51	土師器	小形丸 底鉢	—	4.4	1/12 以下	灰黄褐 10YR6/2	良好	
428	—	B地区	SD22	SX51	土師器	小形丸 底鉢	21.0	2.1	1/12	明赤褐 5YR5/6	良好	
429	—	—	—	SX51	土師器	小形丸 底鉢	16.4	(5.4)	5/6	橙 5YR6/6	良好	
430	4次	B地区	SD22	SX51	土師器	小形丸 底鉢	15.2	3.9	1/12 以下	(外) 灰白 10YR8/2 (内) にぶい橙 7.5YR7/4	良好	煤付着
431	1次	B地区	SD22	SX51	土師器	小形丸 底鉢	16.4	4.5	5/6	にぶい橙 7.5YR6/4	良好	
432	4次	B地区	SD22	SX51	土師器	小形丸 底鉢	17.0	4.0	1/6	橙 5YR6/6	良好	
433	—	B地区	SD22	SX51	土師器	小形丸 底鉢	14.6	4.0	1/6	灰 2.5Y8/2	良好	煤付着
434	4次	B地区	SD22	SX51	土師器	小形丸 底鉢	16.4	3.5	2.5/12	にぶい黄橙 10YR7/3	良好	
435	4次	B地区	SD22	SX51	土師器	小形壺	9.2	5.9	1/12	橙 5YR6/6	良好	
436	4次	B地区	SD22	SX51	土師器	小形 器台	12.4 (底部)	9.2	完存	にぶい橙 7.5YR6/4	良好	
437	6次	B地区	SD22	k 7-ab3 区 SX56 最下層	土師器	壺	14.8	(8.7)	1/3	灰白 7.5YR8/1	良好	
438	6次	B地区	SD22	—	土師器	壺	16.6	(7.5)	1/6	浅黄 2.5YR7/3	良好	
439	6次	B地区	SD22	4区IV 層 SX51	土師器	壺	17.6	(13.7)	3/4	(外) 灰白 5YR8/2 (内) 灰黄 2.5YR7/2	良好	
440	6次	B地区	SD22	k 6-b 3 区 SX56	土師器	壺	13.8	(4.5)	1/2	にぶい橙 7.5YR7/4	良好	
441	6次	B地区	SD22	k 6-b 下 層 3 区	土師器	壺か甕	7.2 (底部)	3.3	2/3	灰白 10YR8/2	良好	東海系 (伊勢)
442	6次	B地区	SD22	j 7-c 3 区 SX56	土師器	甕	13.5	5.6	1/4	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
443	—	B地区	SD22	SX56 最 下層	土師器	甕	18.8	4.0	1/6	灰白 10YR8/1	良好	
444	6次	B地区	SD22	SX56	土師器	甕	13.3	(3.5)	1/6	(外) 灰白 7.5YR8/2 (内) 灰白 5YR8/2	良好	
445	6次	B地区	SD22	SX56 最 下層	土師器	甕	—	(3.0)	1/12 以下	灰白 10YR7/1	良好	煤付着
446	6次	B地区	SD22	SX56 最 下層	土師器	甕	(18.0)	(3.6)	1/12	黄灰 2.5YR6/0	良好	
447	6次	B地区	SD22	SX56 最 下層	土師器	甕	—	(4.6)	1/12	(外) 褐灰 10YR6/1 (内) 灰黄褐 10YR6/2	良好	
448	6次	B地区	SD22	SX56 最 下層	土師器	甕	14.8	2.5	1/12	橙 7.5YR6/6	良好	

報告 番号	次数	調査区	遺構	層位・ 地点	器種	器形	口径	器高	残存 率	色 調	焼成	備 考
450	6 次	B 地区	SD22	SX56 最 下層	土師器	低脚杯	11.2	3.0	1/4	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	山陰系
451	6 次	B 地区	SD22	SX56 最 下層	土師器	小形丸 底鉢	14.3	4.8	1/4	(外) 浅黄橙 7.5YR8/3 (内) 淡黄 2.5YR8/3	良好	
452	6 次	B 地区	SD22	SX56 最 下層	土師器	小形器 台	12.2 (底部)	5.2	1/4	(外) 橙 7.5YR7/6 (内) にぶい橙 7.5YR7/5	良好	
453	6 次	B 地区	SD22	SX57	土師器	甕	13.4	(2.8)	1/12	灰黄褐 10YR6/2	良好	煤付着
454	6 次	B 地区	SD22	SX57	土師器	甕	(16.2)	(2.6)	1/1	黄灰 2.5Y5/1	良好	
455	6 次	B 地区	SD22	SX57	土師器	甕	33.4	(7.7)	3/4	(外) 灰白 10YR8/2 (内) 淡橙 5YR8/3	良好	
456	6 次	B 地区	SD22	SX57	土師器	壺底部 か	5.0 (底部)	(3.3)	1/6	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	煤付着
457	6 次	B 地区	SD22	SW60	土師器	甕	4.7 (底部)	(22.1)	1/12	浅黄 2.5Y7/3	良好	底部穿孔 葉脈痕
458	6 次	B 地区	SD22	SW61	土師器	甕	17.8	(4.1)	1/12	灰白 10YR8/210YR8/2	良好	
459	6 次	B 地区	SD22	SW61	土師器	甕	15.6	(3.6)	1/6	灰白 10YR8/2	良好	
460	6 次	B 地区	SD22	SW61	土師器	甕	13.9	4.5	1/4	浅黄橙 10YR8/3	良好	
461	6 次	B 地区	SD22	SW61	土師器	甕	14.6	3.8	1/3	(外) にぶい黄橙 10YR7/2 (内) にぶい橙 7.5YR7/3	良好	
462	6 次	B 地区	SD22	SW61	土師器	甕	14.2	3.4	1/4	灰白 2.5YR8/2	良好	
463	6 次	B 地区	SD22	SW61	土師器	甕	16.6	6.5	1/4	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
464	6 次	B 地区	SD22	SW61	土師器	甕	13.8	7.3	1/6	(外) にぶい黄橙 (内) 灰白 10YR8/2	良好	
465	6 次	B 地区	SD22	SW61	土師器	小形 器台	9.2	8.5	1/3	(外) 橙 5YR7/6 灰白 5YR8/2 (内) 明赤褐 5/6	良好	
466	6 次	C 地区	SD31	—	弥生土器	壺	19.0	22.8	1/4	灰黄 2.5YR7/2	良好	
467	6 次	C 地区	SD31	—	弥生土器	壺	14.2	4.8	1/5	浅黄橙 7.5YR8/3	良好	
468	6 次	C 地区	SD31	—	弥生土器	壺	17.3	2.1	1/6	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
469	6 次	C 地区	SD31	—	弥生土器	壺	20.0	49.7	1/3	灰白 10YR8/1	良好	
470	6 次	C 地区	SD31	—	弥生土器	甕	17.0	14.7	1/6	にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
471	6 次	C 地区	SD31	—	弥生土器	甕	14.2	2.0	1/12	灰白 10YR8/2	良好	
472	6 次	C 地区	SD31	—	弥生土器	甕底部	5.1	3.3	1/6	灰白 10YR8/2	良好	
473	6 次	C 地区	SD31	—	弥生土器	高杯	8.1	7.8	1/4	にぶい黄橙 10YR7/ 1	良好	
474	6 次	C 地区	SD31	—	弥生土器	水差形	8.8	5.1	1/3	灰白 10YR8/1	良好	
475	6 次	C 地区	SD31	—	弥生土器	壺	30.0	9.1	1/12 以下	(外) オリーブ黒 5Y3/1 (内) 灰白 2.5Y8/1	良好	

付表 8 出土木製品観察表

報告 番号	出土遺構・ 層位	地区	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	樹種	木取り	残存 率 (%)	備 考
476	SD22 下層	1 区 j9-d.c	農具	直柄横鉞	(28.5)	(16.1)	2.4	イチイガシ	柁目	70	横鉞身、放射径 16.1cm
477	SD22 下層	1 区 j10-a	農具	泥除け	(28.4)	20.5	0.6	イチイガシ	柁目	80	『木器集成図録』分類Ⅲ。使用 による摩滅で柄孔が広がる。放 射径 20.5cm
478	SD22 下層	3 区	農具	曲柄又鉞	(49.4)	(7.4)	0.4	イチイガシ	柁目	70	ナスビ形鉞身。『木器集成図録』 分類 D。放射径 18cm
479	SD22 下層	2 区 k7-c	農具	曲柄又鉞	(22.3)	1.8 ~ 4.0	0.9	イチイガシ	柁目	40	ナスビ形鉞身。放射径 10cm
480	SD22 下層	2 区	農具	又鉞	(19.5)	(2.6)	0.8	コナラ属ア カガシ亜属	柁目	40	又鉞の刃先
481	SD22 下層	3 区	農具	又鉞	(11.4)	2.2	0.5	イチイガシ	柁目	30	又鉞の刃先
482	SD22 下層	3 区 l6-d	農具	木錘	13.2	7.4	6.5	コナラ属 コナラ節	芯持丸木	100	作業台として転用か。側面に刃 が当たる。放射径 3.3cm
483	SD22 下層	4 区	漁撈具	網杵	(28.4)	杵: (23.2) 柄:2.0 ~2.7	杵:1.85、 柄:0.8 ~ 1.0	モミ属	枝材	60	網かけの孔 3 か所。網かけの使用 痕不明瞭。又木部分加工痕あ り
484	SD22 下層	3 区 l7-b	漁撈具	櫂	(78.8)	柄:2.4 身:7.4	柄:1.0 身:1.2	コナラ属ア カガシ亜属	柁目	80	一木式。放射径 7.2cm
485	SD22 下層	2 区 k8-b	漁撈具	櫂	(33.5)	3.3 ~ 5.5	0.8 ~ 2.0	コナラ属ア カガシ亜属	柁目	50	柄の一部。加工痕あり。放射径 6cm
486	SD22 下層	1 区 j10-b	漁撈具	櫂	(24.2)	(3.2 ~ 4.5)	1.8 ~ 2.4	ヒノキ	板目	40	炭化。片側の側面に加工痕。
487	SD22 下層	3 区 k7-b	漁撈具	櫂	(15.5)	5.7	1.0	イチイガシ	柁目	40	先端を斜めに削る。先端に加工 痕。放射径 5.7cm

報告 番号	出土遺構・ 層位	地区	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	樹種	木取り	残存 率 (%)	備 考
488	SD22 下層	1 区 j10-b	工具	縦斧膝柄	斧台 :120 握り : (5.6)	斧台 :33 握り :2.0	斧台 :3.2 ～ 1.2 握り :2.0	サカキ	枝材	50	細かな加工痕
489	SD22 下層	3 区	容器	盤	径 : 32.0 ～ 34.0	(6.5)	1.2	ケヤキ	横木取り	40	口縁に面取りあり。底部にかけてくびれる
490	SD22 下層	3 区	容器	盤	30.2	18.7	1.7	カツラ属	横木取り	70	底部に脚
491	SD22 下層	1 区 k9-d	容器	盒子	(7.8)	(5.5)	0.7	ヒノキ	追粧目	30	底板
492	SD22 下層	3 区 l5-d	容器	槽	48.2	(14.8)	1.8	ヒノキ	横木取り	70	補修痕あり
493	SD22 下層	1 区 k9-d	容器	槽	82.0	(19.8)	0.5～1.5	キハダ	横木取り	40	
494	SD22 下層	1 区 k10-a	容器	槽	(43.8)	(9.5)	0.4～1.7	スギ	横木取り	40	裏炭化
495	SD22 下層	1 区 10a-d	容器	槽	(40.0)	(9.7)	1.8	スギ	横木取り	40	裏炭化
496	SD22 下層	1 区 j9-d	雑具	指物椅子	(26.5)	12.5	2.0	コナラ属 コナラ節	柁目	90	脚部。柄孔穿孔。柄欠損
497	SD22 下層	3 区	雑具	指物椅子	20.0	23.5	2.4	ヒノキ	板目	70	脚部。柄あり。放射径 12.5cm
498	SD22 下層	—	楽器	琴	(45.0)	(6.8)	1.5	ヒノキ	板目	50	上板。樹皮による綴じ。
499	SD22 下層	1 区 k9-c	発火具	火錐臼	(45.0)	4.6	3.1	ヒノキ	板目	50	火錐孔 3 か所。端部炭化
500	SD22 下層	3 区 k6-d	祭祀具	剣形	(28.8)	3.8	1.2	ヒノキ	板目	60	板状に加工。先端鋭角
501	SD22 下層	3 区	武具	盾	(25.2)	(4.2)	1.3	モミ属	板目	60	等間隔に穿孔。紐痕残る。孔内に紐残存。
502	SD22 下層	—	武具	盾	26.5	18.5	0.35～ 1.0	—	板目	30	等間隔に穿孔。紐痕残る。
503	SD22 下層	3 区	建築部材	梯子	(60.2)	14.6	8.4～3.5	ヒノキ	板目	40	被熱により炭化
504	SD22 下層	3 区	建築部材	梯子	(57.2)	17.4	2.2～5.2	ヒノキ	板目	30	放射径 10.9cm
505	SD22 下層	1 区 j9-d	建築部材	梯子	(11.5)	14.0	5.0	ヒノキ	板目	40	梯子の足掛け部
506	SD22 下層	1 区 j9-d	建築部材	部材	(44.0)	2.0～ (5.5)	1.8～2.7	スギ	板目	60	加工による窪みあり。組合せるものか
507	SD22 下層	2 区 k7-c	建築部材	部材	(19.0)	5.5～ 7.5	0.9～1.2	ヒノキ	追粧目	60	板状で窪み状の加工。2 か所穿孔。樹皮による綴じ。
508	SD22 下層	2 区 k8-b	建築部材	垂木	(41.5)	4.4	4.4	スダジイ	芯持丸木	60	使用痕あり。放射径 2.2cm
509	SD22 下層	1 区 k9-d	建築部材	垂木	(94.1)	5.8	5.8	アセビ	芯持丸木	60	放射径 2.9cm
510	SD22 下層	1 区	建築部材	部材	(69.1)	22.0	0.5	ヒノキ	柁目	80	細かい木目。柄孔 1 か所。放射径 2.2cm
511	SD22 下層	2 区	建築部材	壁材	117.2	33.3	2.2	ヒノキ	板目	80	片側に穿孔 3 か所。加工痕明瞭
512	SD22 下層	3 区	建築部材	柱根	(45.5)	24.0	14.5	イチイガシ か	割材	50	柱根
513	SD22 下層	—	運搬具	舟	(49.8)	(12.7)	1.8	クスノキ	板目	50	舷側。柄孔 3 か所
514	SD22 下層	3 区	加工木	板材	(36.5)	11.6	2.0	ヒノキ	板目	60	側面加工あり
515	SD22 下層	1 区	加工木	板材	(52.2)	23.2	3.5	ヒノキ	板目	50	
516	SD22 下層	1 区 j9-d	加工木	板材	(25.2)	12.3	2.0	スギ	板目	60	割れた板材。中央にヒビ
517	SD22 下層	3 区 k6-d	加工木	板材	(27.7)	10.4	2.4	スギ	板目	60	裏は摩耗。中央から端部に欠けて木目が詰まる
518	SD22 下層	3 区 k6-d	加工木	板材	(32.7)	7.8	3.6	クスノキ	板目	60	両端小口面加工
519	SD22 下層	1 区 j10-b	加工木	板材	(8.9)	2.7～ 2.2	0.8～0.4	スギ	追粧目	30	放射径 2.7～2.2cm
520	SD22 下層	2 区 k7-d	加工木	板材	(19.1)	5.6	0.2	ツブラジイ	板目	20	
521	SD22 下層	1 区 j10-b	加工木	板材	(8.9)	2.7～ 2.2	0.8～0.4	ヒノキ	追粧目	30	放射径 2.7～2.2cm
522	SD22 下層	3 区 j7-c	加工木	板材	(9.1)	3.2～ 1.9	0.5～0.3	モミ属	板目	20	
523	SD22 下層	3 区	加工木	板材	(36.4)	12.4	2.3	スギ	板目	50	加工痕明瞭。片面端部炭化
524	SD22 下層	1 区 j9-a	加工木	板材	(31.5)	(6.5)	1.2	—	柁目	50	表裏に加工痕明瞭
525	SD22 下層	4 区	加工木	板材	31.5	15.0	1.7	ヒノキ	板目	80	加工痕明瞭
526	SD22 下層	2 区 k7-c	加工木	板材	(56.2)	4.8	2.1	ヒノキ	柁目	40	放射径 4.8cm
527	SD22 下層	—	加工木	板材	(56.7)	(13.5)	3.5	イチイガシ	板目	60	側面一部炭化。農具原材か。加工痕明瞭。放射径 13.5cm

報告 番号	出土遺構・ 層位	地区	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	樹種	木取り	残存 率 (%)	備 考
528	SD22 下層	2 区 k7-c	加工木	板材	(57.0)	4.0	0.8	スギ	板目	50	薄い板。節持ち材
529	SD22 下層	1 区 j9-c	加工木	板材	(67.3)	7.0	2.6	ヒノキ	板目	30	
530	SD22 下層	3 区 l7-b	加工木	板材	(73.5)	6.5	1.2	ヒノキ	板目	70	加工痕明瞭
531	SD22 下層	1 区	加工木	板材	(47.3)	8.0	1.5	ヒノキ	柃目	60	加工痕明瞭。放射径 8.0cm
532	SD22 下層	2 区 j8-b k8-a	加工木	板材	(72.2)	5.6 ~ 3.5	0.4	ヒノキ	板目	60	
533	SD22 下層	1 区 j9-b	加工木	板材	(71.0)	13.2	1.4	ヒノキ	板目	50	加工痕明瞭
534	SD22 下層	3 区	加工木	板材	(66.8)	8.0	1.6	モミ属	板目	60	
535	SD22 下層	3 区 j7-c	加工木	板材	(48.9)	(7.9)	1.0	ヒノキ	板目	80	
536	SD22 下層	4 区 l5-a,b	加工木	板材	(35.4)	(5.2)	2.2	—	板目	50	節持ち材。端部炭化。裏は炭化なし
537	SD22 下層	—	加工木	板材	(31.2)	18.2	1.8	イチイガシ	柃目	50	農具原材か。作業の刃痕か。放射径 18.2cm
538	SD22 下層	—	加工木	板材	(21.4)	3.2 ~ 4.5	0.9	—	板目	70	くびれ部加工
539	SD22 下層	2 区	雑具	有頭棒	(19.5)	4.0	3.0	—	芯持丸木	60	くびれ部加工
540	SD22 下層	1 区	雑具	有頭棒	(22.0)	3.4	2.2	ツブラジイ	芯持丸木	70	放射径 1.7cm
541	SD22 下層	1 区 j10-b	雑具	有頭棒	(37.0)	3.7	1.8	ヒノキ	柃目	60	端部に使用痕か。放射径 3.7cm
542	SD22 下層	1 区 j10-a	雑具	有頭棒	(74.5)	2.5	2.0	ツブラジイ	芯持丸木	60	くびれ部に使用痕。端部に加工痕
543	SD22 下層	—	不明	棒材	(98.0)	2.1	1.5	ヒノキ	割材	80	
544	SD22 下層	1 区 j9-a	不明	棒材	(44.8)	1.1 ~ 1.7	0.5 ~ 1.4	スギ	割材	50	
545	SD22 下層	3 区 l7-b,c	不明	部材	(75.5)	3.0	2.4	ヒノキ	割材	80	柄孔穿孔
546	SD22 下層	2 区 k7-c	不明	部材	67.8	3.5	2.3	スギ	割材	70	柄孔穿孔
547	SD22 下層	3 区	不明	部材	51.1	2.2	1.4	スギ	割材	70	先端に段あり
548	SD22 下層	—	雑具	もえさし	42.5	1.8 ~ 4.2	2.5 ~ 3.0	—	割材	90	端部被熱により炭化
549	SD22 下層	1 区 j9-b	雑具	もえさし	(64.6)	3.9	2.1	ヒノキ	割材	60	端部被熱により炭化
550	SD22 下層	2 区	雑具	もえさし	25.2	1.6	1.8	ヒノキ	割材	100	端部被熱により炭化
551	SD22 下層	1 区 j9-d	雑具	もえさし	29.4	1.8	0.8	ヒノキ	割材	100	端部被熱により炭化
552	SD22 下層	2 区 k7-c	雑具	もえさし	36.3	2.9	1.0	ヒノキ	割材	90	両端部被熱により炭化
553	SD22 下層	3 区	雑具	もえさし	50.4	1.8	1.1	ヒノキ	割材	100	端部被熱により炭化
554	SD22 下層	4 区	雑具	もえさし	15.4	1.2	0.5	ヒノキ	割材	100	端部被熱により炭化
555	SD22 下層	2 区 k8	雑具	もえさし	20.5	1.1 ~ 1.8	0.9 ~ 1.3	ヒノキ	割材	100	端部被熱により炭化
556	SD22 下層	2 区 k7-c	杭	杭	106.6	6.1	2.9	ヒノキ	割材	70	節持ち材。枝を払う
557	SD22 下層	4 区	杭	杭	95.4	2.5 ~ 7.7	2.2 ~ 5.8	ツブラジイ	芯持丸木	70	節持ち材。枝を払う
558	SD22 下層	1 区 j9-a	杭	杭	77.8	6.8	4.9	クリ	芯持丸木	70	放射径 3.4cm
559	SD22 下層	3 区 l6-a,b	杭	杭	(58.4)	5.7	5.0	ツバキ属	芯持丸木	70	枝を払う。樹皮残存
560	SD22 下層	2 区 k8-d	杭	杭	48.1	3.0 ~ 6.7	6.0	ツバキ属	芯持丸木	80	全面に明瞭な複数の加工痕。樹皮残存
561	SD22 下層	2 区	杭	杭	(24.2)	4.1	3.8	モッコク	芯持丸木	80	樹皮残存
562	SD22 下層	2 区 j8-b	杭	杭	(61.4)	9.3	4.2	ツブラジイ	割材	60	
563	SD22 下層	1 区	杭	杭	(58.1)	7.8	4.6	ハイノキ属	芯持丸木	60	放射径 7.8cm
564	SD22 下層	1 区 k10-a, k9-c, d	杭	杭	(110.5)	7.2	3.3	スギ	割材	40	
565	SD22 下層	1 区 j9-a,b	杭	杭	(167.2)	6.7	5.2	ヒノキ	割材	60	先端の加工痕に刃こぼれ痕。放射径 3.35cm
566	SD22 下層	3 区	不明	部材	(94.4)	5.1	2.8	ヒノキ	板目	50	
567	SD22 下層	1 区	不明	部材	(84.7)	3.1	2.5 ~ 0.2	ヒノキ	割材	80	
568	SD22 下層	2 区 j7-c	不明	部材	(62.2)	7.2	1.8	ヒノキ	割材	70	放射径 7.2cm

報告 番号	出土遺構・ 層位	地区	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	樹種	木取り	残存 率 (%)	備 考
569	SD22 下層	2 区 k8	不明	部材	61.0	1.7 ~ 4.2	0.4 ~ 2.2	ヒノキ	割材	60	先端加工。柄孔穿孔か
570	SD22 下層	1 区 j10-b	不明	部材	(40.5)	3.6	2.2	ヒノキ	割材	40	
571	SD22 下層	3 区	加工木	棒材	57.6	2.5	2.1	カヤ	割材	80	
572	SD22 下層	—	加工木	板材	(9.8)	(7.7)	(3.4)	ムクノキ	柾目	30	放射径 7.7cm
573	SD22 下層	—	加工木	みかん割 材	14.5	8.5	3.3	ニレ属	割材	30	放射径 8.5cm
574	SD22 下層	1 区 k10-a	加工木	芯持材	13.0	6.8	5.5	クリ	芯持丸木	90	木垂か。放射径 3.4cm
575	SD22 下層	—	加工木	割材	13.0	1.1 ~ 6.3	2.8 ~ 3.4	—	割材	90	
576	SD22 下層	3 区	加工木	みかん割 材	28.8	4.5	2.0	ヒノキ	割材	70	加工痕明瞭。みかん割～柾目材 の加工段階か。樹皮残存
577	SD22 下層	3 区 k7-b	加工木	棒材	(41.2)	2.3 ~ 3.8	2.3 ~ 3.2	スギ	割材	70	柄か。節残る。先端から滑らな な段あり
578	SD22 下層	1 区 j10-a	加工木	みかん割 材	(50.5)	6.6	0.2 ~ 2.1	コナラ属 コナラ節	割材	60	みかん割～柾目材の加工段階
579	SD22 下層	2 区 k8-b	加工木	芯持材	(61.4)	4.5	3.2	サカキ	芯持丸木	60	端部のみ加工。樹皮残存。放射 径 2.25cm
580	SD22 下層	3 区	加工木	芯持材	(61.3)	14.0 ~ 8.8	5.5	ケヤキ	芯持丸木	70	小口面加工。放射径 7.0 ~ 4.4cm
581	SD22 下層	3 区	加工木	芯持材	(54.9)	6.5	3.7	ツブラジイ	芯持丸木	60	垂木もしくは天秤棒か。放射径 3.2cm
582	SD22 下層	1 区 k9-d	加工木	芯持材	(30.1)	5.0	5.0	クリ	芯持丸木	60	小口面加工。放射径 2.5cm
583	SD22 下層	3 区 l6-d	加工木	割材	94.9	3.0	1.9	ヒノキ	割材	70	加工痕残存
584	SD22 下層	1 区 k9-d	加工木	芯持材	(103.0)	6.0 ~ 7.8	5.6	—	芯持丸木	60	端部加工あり。枝を払う。
585	SD22 下層	1 区 k9-d	加工木	芯持材	(64.9)	9.4	7.1	クリ	芯持丸木	60	枝を払う
586	SD22 下層	3 区 k6-d	加工木	割材	(77.2)	5.2	3.0	ヒノキ	割材	70	
587	SD22 下層	1 区 j10-b	加工木	割材	(17.6)	4.0	3.5	—	割材	30	裏割れ
588	SD22 下層	1 区 j10-a	加工木	みかん割 材	82.2	11.3	4.4	ヒノキ	割材	70	原木 1 / 2 分割
589	SD22 下層	1 区 j10-a,d	加工木	みかん割 材	(37.7)	6.0	3.9	クリ	割材	70	原木の樹皮側
590	SD22 下層	3 区 l7-d	加工木	みかん割 材	(35.0)	3.1 ~ 11.8	8.5	ムクロジ	割材	50	原木 1 / 4 分割
591	SD22 下層	2 区 k8-d	加工木	みかん割 材	(27.7)	12.1	7.2	ヒノキ	割材	50	原木 1 / 4 分割
592	SD22 下層	1 区 j10-b, j9-c	加工木	みかん割 材	(37.4)	11.2	3.6	—	割材	60	原木 1 / 4 分割
593	SD22 下層	3 区 l6-a,b	加工木	みかん割 材	(135.6)	23.8	8.8	クリ	割材	40	原木 1 / 2 分割
594	SD22 下層	3 区 l7-b	加工木	みかん割 材	(37.1)	16.6	3.8	コウヤマキ	割材	50	原木の樹皮側
595	SD22 下層	—	加工木	芯持材	(75.2)	13.1	11.3	ムクノキ	芯持丸木	60	放射径 6.55cm
596	SD22 下層	2 区 k7-d	加工木	芯持材	(87.8)	6.8	5.2	クリ	芯持丸木	60	枝を払う。放射径 3.4cm
597	SD22 下層	3 区 l6-a,b	加工木	芯持材	102.4	11.8	9.3	クリ	芯持丸木	60	枝を払う。放射径 5.9cm
598	SD22 下層	1 区 k9-b	加工木	芯持材	83.3	8.7	9.4	コナラ属ア カガシ亜属	芯持丸木	70	枝を払う。樹皮残存。放射径 4.35cm
599	SD22 下層 SX51	4 区	農具	泥除け	28.9	(22.5)	0.2	イチイガシ	柾目	70	『木器集成図録』分類Ⅲ。側面 湾曲。放射径 22.5cm
600	SD22 下層 SX51	4 区	農具	曲柄又鋏	(24.5)	(7.7)	1.4	イチイガシ	柾目	70	ナスビ形鋏身。放射径 7.7cm
601	SD22 下層 SX51	4 区	農具	堅杵	(45.6)	7.8 ~ 2.4	5.2 ~ 2.4	ツバキ属	芯持丸木	60	放射径 3.9 ~ 1.2cm
602	SD22 下層 SX51	4 区	祭祀具	舟形 木製品	27.8	5.4	2.3	ヒノキ	横木取り	100	川舟模造か
603	SD22 下層 SX51	4 区	雑具	火錐杵	(21.8)	0.8	0.7	スギ	割材	90	使用により先端炭化
604	SD22 下層 SX51	4 区	祭祀具	陽物形	6.4	2.4	2.1	モミ属	芯持丸木	100	細かい加工痕。鋭い切断痕。放 射径 1.2cm
605	SD22 下層 SX51	4 区	農具	目盛板	(120.6)	11.3	2.3	ヒノキ	板目	70	節持ち材。目盛り 4 か所

報告 番号	出土遺構・ 層位	地区	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	樹種	木取り	残存 率 (%)	備 考
606	SD22 下層 SX51 下層	4 区	加工木	板	34.0	7.9	1.9	ヒノキ	板目	60	一部樹皮残存
607	SD22 下層 SX51	4 区	加工木	板	(48.3)	5.9 ~ 5.2	2.8 ~ 1.5	ヒノキ	追柁	70	加工痕明瞭
608	SD22 下層 SX51 下層	4 区	加工木	板	(50.2)	7.0	4.1	スギ	板目	70	
609	SD22 下層 SX51	4 区	加工木	板	57.5	8.5	2.0	ヒノキ	追柁	80	加工精度高い
610	SD22 下層 SX51 下層	4 区	加工木	板	58.3	8.3	2.0	ヒノキ	板目	90	加工精度高い
611	SD22 下層 SX51 下層	4 区	加工木	板材	(34.0)	4.6 ~ 1.4	1.2 ~ 0.3	ヒノキ	板目	50	
612	SD22 下層 SX51 下層	4 区	加工木	板材	(22.0)	2.8	1.3	スギ	柁目	50	放射径 2.8cm
613	SD22 下層 SX51	4 区 m4-d	加工木	板材	(63.4)	11.6	0.7	モミ属	板目	50	矢板か
614	SD22 下層 SX51	4 区	加工木	板材	(47.5)	11.5	2.0 ~ 0.6	イチイガシ	柁目	50	農具原材か。放射径 11.5cm
615	SD22 下層 SX51 下層	4 区	加工木	板材	(43.9)	7.1	1.5	ヒノキ	追柁	60	節持ち材
616	SD22 下層 SX51 下層	4 区	加工木	板材	(38.9)	12.8	2.4	クリ	柁目	40	加工途中。放射径 12.8cm
617	SD22 下層 SX51 下層	4 区	加工木	不明	(16.9)	(4.9)	2.0	イチイガシ	柁目	40	容器の蓋か。底板か
618	SD22 下層 SX51 下層	4 区	加工木	棒材	(42.6)	4.7	1.9	ヒノキ	板目	70	加工途中
619	SD22 下層 SX51	4 区	加工木	棒材	77.7	2.7	2.7	モミ属	芯持丸木	80	一部樹皮残存。放射径 1.35cm
620	SD22 下層 SX51	4 区	雑具	もえさし	40.6	1.5 ~ 2.7	0.3	ヒノキ	割材	80	端部被熱により炭化
621	SD22 下層 SX51	4 区	雑具	もえさし	(26.2)	2.3	1.5	ヒノキ	板目	90	端部被熱により炭化
622	SD22 下層 SX51	4 区	加工木	棒材	(29.5)	2.0	1.4	—	割材	90	
623	SD22 下層 SX51 下層	4 区	加工木	棒材	(33.1)	2.5	1.8	コナラ属ア カガシ亜属	芯持丸木	60	放射径 1.25cm
624	SD22 下層 SX51	4 区	加工木	棒材	(11.7)	2.5	2.0	ヒノキ	割材	40	火鍬臼か
625	SD22 下層 SX51	4 区	加工木	棒材	(12.4)	2.3	1.5	ヒノキ	割材	40	火鍬臼か
626	SD22 下層 SX51	4 区	加工木	板	(125.3)	13.7 ~ 6.2	4.0	ヒノキ	板目	80	
627	SD22 下層 SX51	4 区	加工木	棒材	104.7	5.2	3.8	ハイノキ属	芯持丸木	80	一部樹皮残存。放射径 2.6cm
628	SD22 下層 SX51 下層	4 区	杭	杭	(26.1)	4.4	3.5	スダジイ	芯持丸木	50	放射径 2.2cm
629	SD22 下層 SX51	4 区 m4-d	杭	杭	(55.0)	7.8	2.9	スギ	割材	60	
630	SD22 下層 SX51 下層	4 区	加工木	棒材	(33.2)	4.9 ~ 3.6	4.0	クリ	割材	50	
631	SD22 下層 SX51 下層	4 区	加工木	芯持材	44.7	8.3	8.3	ヒノキ	芯持丸木	90	建築部材か放射径 4.2cm
632	SD22 下層 SX51 下層	4 区 l4-b m4-a	加工木	芯持材	83.2	8.6	7.6	シャシャン ボ	芯持丸木	70	伐採痕残存。放射径 4.3cm
633	SD22 下層 SX51 下層	4 区	加工木	芯持材	(57.2)	14.0	10.2	クリ	芯持丸木	60	小口面加工。放射径 7.0cm
634	SD22 下層 SW61	4 区	容器	槽	(31.8)	(18.2)	先端 3.8 底部 1.6	キハダ	横木取り	40	底部から立ち上がり残存
635	SD22 下層 SW61	—	不明	不明	(8.0)	(2.4)	1.4	クワ属	板目	5	紐孔部分
636	SD22 下層 SW61	4 区	武器	剣鞘	(15.8)	3.8	0.6 ~ 1.0	ヒノキ	柁目	40	端部に段を作り出す。二枚合わせ式の鞘
637	SD22 下層 SW61	4 区	雑具	もえさし	(24.3)	2.1	0.8	—	割材	60	端部被熱により炭化
638	SD22 下層 SW61	4 区	農具	横槌	30.6	1.7 ~ 9.0	1.7 ~ 7.7	イチイガシ か	割材	90	『木器集成図録』分類 D。放射 径 7.5cm
639	SD22 下層 SW61	4 区	加工木	棒材	(37.8)	2.8	2.4	ヒノキ	芯持	60	窪み状に加工。組み合わせる部 材か
640	SD22 下層 SW61	3 区 m4-a	加工木	棒材	(48.0)	2.3	0.7	ヒノキ	割材	50	平たい棒材か。一部炭化。加工 痕あり
641	SD22 下層 SW61	4 区 l5-d	加工木	板	45.4	5.3	1.2	ヒノキ	柁目	80	加工精度高い

報告 番号	出土遺構・ 層位	地区	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	樹種	木取り	残存 率 (%)	備 考
642	SD22 下層 SW61	4 区 l3-c,d	加工木	板	61.8	13.4	0.6	ヒノキ	板目	80	加工精度高い
643	SD22 下層 SW61	4 区	加工木	板	(47.1)	16.6	0.4	ヒノキ	板目	60	加工精度高い
644	SD22 下層 SW61	4 区 m4- a,b	加工木	板	(26.6)	8.2	1.0	ヒノキ	柃目	50	放射径 8.2cm
645	SD22 下層 SW61	4 区	加工木	板材	(52.6)	14.5	4.5	ヒノキ	板目	50	平面に段差を作り出す。屋根材か
646	SD22 下層 SW61	4 区	加工木	割材	(72.0)	11.5	2.4	コナラ属ア カガシ亜属	割材	70	
647	SD22 下層 SW61	4 区	加工木	割材	(80.1)	9.4 ~ 3.7	3.4	クリ	割材	40	全面に被熱を受け炭化。一部樹皮残存
648	SD22 下層 SW61	4 区	加工木	割材	(81.7)	11.2	5.8	ヒノキ	割材	70	小口面加工
649	SD22 下層 SW61	4 区	加工木	芯持材	36.0	6.4	4.8	イヌガヤ	芯持	90	両端に加工痕。炭化。節持ち材
650	SD22 下層 SW61	4 区	加工木	芯持材	(22.0)	4.8	4.9	ムクノキ	芯持丸木	70	小口面に伐採痕。放射径 2.4cm
651	SD22 下層 SW61	4 区	加工木	板材	(101.7)	12.4	2.4	ヒノキ	板目	70	
652	SD22 下層 SW61	4 区	加工木	割材	(121.5)	9.8	7.1	ヒノキ	割材	60	建築部材の転用か。二次加工あり
653	SD22 下層 SW61	4 区	杭	杭	(102.8)	10.2	4.4 ~ 7.0	クリ	芯持丸木	60	放射径 5.1cm
654	SD22 下層 SW61	4 区 l3-b	杭	杭	(61.2)	14.7	9.5	クリ	芯持丸木	60	放射径 7.35cm
655	SD22 下層 SW61	4 区 m3-d	杭	杭	(91.2)	10.8	11.0	クワ属	芯持丸木	60	先端に丹念な加工。
656	SD22 下層 SX61	4 区	杭	杭	86.8	9.4 ~ 11.2	7.8 ~ 10.3	—	芯持丸木	60	
657	SD22 下層 SX61	4 区	杭	杭	(85.1)	16.2	10.8	クワ属	芯持丸木	60	一部樹皮残る。放射径 8.1cm
658	SD22 下層 SW61	4 区	杭	杭	(81.8)	11.4	11.3	クリ	芯持丸木	60	放射径 5.7cm
659	SD22 下層 SW61	4 区	杭	杭	(86.6)	5.2	5.7	クワ属	芯持丸木	70	放射径 2.6cm
660	SD22 下層 SX56	3 区 k7-a	農具	曲柄鋏	(14.0)	3.5	0.6	イチイガシ	柃目	40	ナスビ形鋏身。放射径 3.5cm
661	SD22 下層 SX56	3 区	加工木	割材	(80.1)	3.8	2.7	ヒノキ	割材	50	
662	SD22 下層 SK68	3 区	加工木	割材	(12.9)	2.4 ~ 3.7	0.9 ~ 1.4	—	割材	20	
663	SD22 下層 SW69	4 区	加工木	割材	(25.1)	(6.2)	1.8	コナラ属ア カガシ亜属	割材	50	杭として使用。放射径 6.2cm
664	SD22 下層 SW62	3 区 m5-d	工具	横斧膝柄	斧台 :13.3 握り : (11.6)	斧台 : 4.4 握り : 3.8	斧台 :2.1 握り :2.0	クワ属	枝材	50	斧台に加工痕
665	SD22 下層 SW62	3 区	加工木	棒材	(35.1)	4.8	(3.3)	キハダ	芯持丸木	40	節持ち材。放射径 2.4cm
666	SD22 下層 SW62	3 区	加工木	芯持材	(59.7)	6.7 ~ 3.0	3.6 ~ 1.8	クワ属	芯持丸木	60	小口面に切断痕
667	SD22 下層 SW62	3 区	加工木	芯持材	61.0	4.4 ~ 14.8	4.8 ~ 7.2	—	芯持丸木	100	小口面に切断痕
668	SD22 下層 SW62	3 区	加工木	棒材	(110.4)	6.7	(5.2)	ヒノキ	芯持丸木	60	放射径 3.35cm
669	SD22 下層 SW62	3 区	加工木	芯持材	(130.0)	9.5 ~ 8.1	8.0	ムクノキ	芯持丸木	60	柱根か

付表9 出土土器観察表(古墳時代～中世)

報告 番号	次数	調査区	遺構	層位・ 地点	器種	器形	口径	器高	残存率	色調	焼成	備 考
696	6次	A地区	SE112	最下層	土師器	甕	(13.4)		2/12	灰黄2.5Y7/2	良好	
697	6次	A地区	SE112	－	土師器	甕	10.6	10.2	ほぼ 完 形	にぶい黄橙10YR7/2	良	
698	6次	A地区	SE112	中層～下 層	土師器	甕	13.0		4/12	(外)褐灰7.5YR5/1 (内)灰黄褐10YR6/2	良	
699	6次	A地区	SE112	－	土師器	甕	14.4	13.7	5/12	灰黄10YR6/2	良	
700	6次	A地区	SE112	－	土師器	甕	12.9	13.3	11/12	にぶい黄橙10YR7/2	良	
701	6次	A地区	SE112	－	土師器	甕	14.0	13.9	11/12	灰白10YR8/2	良	
702	6次	A地区	SE112	－	土師器	甕	14.1	14.3	ほぼ 完 形	浅黄橙10YR8/3	良	
703	6次	A地区	SE112	－	土師器	甕				(外)にぶい黄2.5Y6/3 (内)黒褐2.5Y3/2	良	
704	6次	A地区	SE112	－	土師器	甕						
705	6次	A地区	SE112	中層～下 層	須恵器	杯蓋	(15.8)	(4.2)	4/12	灰白N7/0	良好	
706	6次	A地区	SE112	－	須恵器	杯H蓋	(12.4)	(3.5)	2/12	灰黄2.5Y8/1	堅緻	
707	6次	A地区	SE112	－	須恵器	壺				灰N7/0	堅緻	
708	6次	A地区	SE112	－	須恵器	平瓶	(5.8)	11.7	ほぼ 完 形	灰N6/0	堅緻	
709	6次	A地区	SE112	－	弥生土器	甕	3.4(底 部)	3.2	12/12	(外)にぶい黄褐 10YR5/3黒5Y2/1(内) 浅黄2.5YR7/4	良好	
710	6次	A地区	SK352	－	土師器	杯	12.7	5.6	5/12	内外面ともに浅黄橙 10YR8/3	良好	
711	4次	A地区	SK352	－	須恵器	杯H蓋	(11.2)	3.6	3/12弱	灰N6/1	堅緻	
712	4次	A地区	SK352	－	須恵器	杯H蓋	9.8	3	5/12強	(外)灰5Y4/1 (内)灰 白5Y7/1	堅緻	
713	4次	A地区	SK352	－	須恵器	杯H	(10.1)	12	2/12	(外)灰7.5Y6/1 (内) 灰黄2.5Y	軟	
714	6次	A地区	SK354	－	土師器	杯C	17.6	5.6	5/12	橙5YR6/8	良好	
715	6次	A地区	SK354	－	土師器	甕	(21.2)	4.4	2/12強	内外面ともに浅黄橙 10YR8/4	良好	
716	6次	A地区	SK354	－	土師器	甕	12.6	13.7	ほぼ 完 形	(外)にぶい橙5YR7/4 にぶい橙7.5YR7/4浅 黄橙10YR8/3灰黄褐 10YR4/2(内)浅黄橙 10YR8/4にぶい黄橙 10YR7/2	良好	
717	6次	A地区	SK354	－	土師器	甕	(10.2)	(7.8)	2/12強	(外)にぶい黄橙 10YR6/3(内)にぶい 黄橙10YR7/4	良好	
718	6次	A地区	SK354	－	須恵器	杯H蓋	10.5	3.2	9/12	灰N6/1	堅緻	
719	6次	A地区	SK354	－	須恵器	杯H蓋	10.4	2.9	6/12強	灰N5/0	堅緻	
720	6次	A地区	SK354	－	須恵器	杯H蓋	9.9	3.5	6/12	内外面ともに灰白 2.5YR8/1・8/2	軟	
721	6次	A地区	SK354	－	須恵器	杯H	11.5	3.5	4/12	(外)灰白5Y7/1 (内) 灰白10YR7/1	堅緻	(外)自然袖付 着
722	6次	A地区	SK354	－	須恵器	杯H	9.6	3.15	6/12	(外)灰N6/1 (内)灰 5Y6/1	堅緻	
723	6次	A地区	SK354	－	須恵器	杯H	9.0	3.4	6/12強	内外面ともに灰N7/0	良好	
724	6次	A地区	SK354	－	須恵器	杯G	(9.5)	3.4	3/12	内外面ともに灰N6/0	堅緻	
725	6次	A地区	SK335	－	土師器	鉢	21.0	(6.8)	8/12	浅黄2.5Y7/3内外面と もに黒斑有り	良好	
726	6次	A地区	SK335	－	土師器	高杯脚部	底10.6	(5.6)	底7/12	橙5YR6/6	良	
727	6次	A地区	SK335	－	土師器	甕	(24.0)	11.7	2/12	浅黄橙10YR8/3	軟	
728	6次	A地区	SK335	－	土師器	甕	(27.8)	12.2	1/12強	灰白10YR8/2	やや軟	
729	6次	A地区	SK335	－	土師器	甕	(15.6)	10.3	2/12	にぶい黄橙10YR7/3	良	
730	6次	A地区	SK335	－	土師器	鍋	38.0～ 40.0	3.8	1/12以下	にぶい黄橙10YR7/4 橙7.5YR7/6黒褐 7.5YR3/1	良	
731	6次	A地区	SK335	－	須恵器	杯H蓋	(10.0)	3	1/12強	灰N7/1	良	
732	6次	A地区	SK335	－	須恵器	杯H蓋	10.2	3.2	10/12	灰N7/1	やや軟	
733	6次	A地区	SK335	－	須恵器	杯H	9.3	3	4/12	灰N6/0	良	

報告 番号	次数	調査区	遺構	層位・ 地点	器種	器形	口径	器高	残存率	色調	焼成	備 考
734	6次	A地区	SK335	－	須恵器	杯H	9.8	3.0	6/12弱	灰白2.5Y7/1	良	
735	6次	A地区	SK239	－	土師器	鍋	(37.2)	10.35	3/12弱		良好	
736	6次	A地区	SK239	－	須恵器	杯H	(9.4)	(3.7)	3/12	灰黄2.5Y6/2	堅緻	
737	6次	A地区	SK197	－	土師器	杯A	(17.3)	6.0	2/12	明赤褐5YR5/6	良好	
738	6次	A地区	SK197	－	土師器	皿A	(22.0)	3.0	1/12 以下	橙5YR6/6	良好	
739	6次	A地区	SK197	－	土師器	皿A	(22.0)	2.15	1/12	橙5YR6/6	良好	
740	6次	A地区	SK197	－	土師器	甕	(14.5)	8.75	1/12 以下	にぶい黄橙10YR7/3	良好	
741	6次	A地区	SK197	－	須恵器	杯H蓋	10.6	3.15	4/12	暗青灰5B3/1	良好	
742	6次	A地区	SK197	－	須恵器	杯G蓋	(10.0)	(2.0)	3/12	灰白N6/0	良好	
743	4次	A地区	SK197	Ⅶ層	須恵器	杯G	9.2	3.2	6/12	青灰5B6/0	良好	
744	4次	A地区	SK197	－	須恵器	杯G	(9.8)	3.35	1/12	灰白N7/0	良好	
745	4次	A地区	SK197	－	須恵器	杯A	(12.0)	3.8	1.5/12	灰白N7/0	良好	
746	6次	A地区	SK197	－	須恵器	壺	底13.6	(2.9)	底3/12	青灰5PB6/1	良好	
747	4次	A地区	SK197	－	須恵器	皿か杯	20.6	4.2	3/12	灰白N6/0	良好	
748	4次	A地区	SP16	－	土師器	皿			3/12			
749	4次	A地区	SP19	u11	須恵器	杯H蓋	－	(2.5)	1/12 以下	灰白N7/1	堅緻	
750	4次	A地区	SP29	－	須恵器	杯H蓋	(11.6)	(3.1)	1.5/12	内外面とも灰白2.5Y8/1	やや軟	
751	4次	A地区	SP29	－	須恵器	杯H	(14.6)	(2.5)	2/12	内外面とも灰5Y6/1	堅緻	
752	4次	A地区	SP50	－	須恵器	杯B蓋	3.5	(1.4)	－	(外)灰N6/1 (内)灰オリープ5Y5/2	堅緻	
753	4次	A地区	SP61	u8	土師器	皿			2/12			
754	4次	A地区	SP66	－	須恵器	杯H		(1.8)	1/12 以下	灰7.5Y6/1	堅緻	
755	4次	A地区	SP66	t9	須恵器	壺	－	(2.6)	体部片	灰N5/0	堅緻	
756	4次	A地区	SP66	t9	須恵器	杯B		(3.7)	1/12 以下	灰N6/1	堅緻	
757	4次	A地区	SP67	－	須恵器	杯G蓋	(10.4)	(2.1)	2.5/12	内外面とも灰N6/0	堅緻	
758	4次	A地区	SP74	－	須恵器	杯H蓋		(3.3)	1/12 以下	灰5Y6/1	堅緻	
759	4次	A地区	SP105	－	須恵器	杯		(3.0)	1/12 以下	(外)灰N5/0 (内)灰白N7/0	堅緻	
760	4次	A地区	SP105	－	土師器	把手			－			
761	4次	A地区	SP108	－	須恵器	杯H	(10.6)	(2.5)	2/12	内外面とも灰N5/0	堅緻	
762	4次	A地区	SP130	－	須恵器	杯H蓋		(2.4)	1/12 以下	灰N5/0	堅緻	
763	4次	A地区	SP138	－	土師器	杯A			5/12			
764	4次	A地区	SP164	－	須恵器	杯H蓋	(12.0)	(1.95)	1/12	灰5Y6/1	堅緻	
765	4次	A地区	SP165	－	須恵器	杯G蓋		(1.6)	1/12 以下	灰5Y6/1	堅緻	
766	4次	A地区	SP177	－	須恵器	杯G蓋	(8.0)	(2.6)	8/12	青灰5PB5/1	良好	
767	4次	A地区	SP195	－	須恵器	杯H		(2.5)	1/12 以下	灰5Y6/1	堅緻	
768	4次	A地区	SP332	－	土師器	高杯脚部		(9.2)	－	(外)橙5YR7/6(内)上方浅黄橙7.5YR8/6下方浅黄橙YR8/3	良好	
769	4次	A地区	遺物包含層	u9 上層	土師器	杯C	(9.8)	(3.3)	2/12強	明赤褐5YR5/6	良好	
770	4次	A地区	遺物包含層	u9 上層	土師器	杯C		(2.3)	1/12 以下	橙5YR6/8	良好	
771	4次	A地区	遺物包含層	q8・r8区下層	土師器	杯C	(12.6)	(4.3)	2.5/12	内外面ともに橙5YR6/6にぶい黄橙10YR7/4	良好	
772	4次	A地区	遺物包含層	－	土師器	杯C	13.0	4	6/12	橙5YR6/6	良	
773	4次	A地区	遺物包含層	u8	土師器	杯C	(13.0)	(4.2)	1.5/12	橙5YR7/6	良好	
774	4次	A地区	遺物包含層	－	土師器	杯C	(13.0)	4.3	2/12	橙5YR6/5	良	
775	4次	A地区	遺物包含層	u8	土師器	杯C	(15.6)	(4.4)	1.5/12	内外面ともに橙5YR6/8	良好	
776	4次	A地区	遺物包含層	t8	土師器	杯C	(16.8)	(3.0)	1/12強	橙2.5YR6/6	良好	

報告 番号	次数	調査区	遺構	層位・ 地点	器種	器形	口径	器高	残存率	色調	焼成	備 考
777	4次	A地区	遺物包 含層	u8	土師器	杯C	(15.0)	(5.2)	15/12	橙5YR6/6	良好	
778	4次	A地区	遺物包 含層	—	土師器	杯C	17.0	6	6/12強	橙5YR6/8	やや軟	
779	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	土師器	杯C	(18.0)	(5.3)	1/12 以 下	(外)橙2.5YR6/8明 黄褐10YR7/6(内)橙 5YR6/6	良好	
780	4次	A地区	遺物包 含層	u8	土師器	杯A	(12.8)	(2.8)	1/12強	内外面ともに橙 5YR6/8	良好	
781	4次	A地区	遺物包 含層	u8	土師器	杯A	(13.0)	(3.5)	2/12	橙5YR6/6	良好	
782	4次	A地区	遺物包 含層	q8・r8区 下層	土師器	杯A		(2.3)	1/12 以 下	内外面とも橙5YR6/6	良好	
783	4次	A地区	遺物包 含層	—	土師器	杯A		(2.1)	1/12 以 下	橙7.5YR6/6	良好	
784	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	土師器	椀	(11.2)	(2.9)	1/12強	橙5YR6/8	良好	
785	4次	A地区	遺物包 含層	u8	土師器	椀	17.0	(4.8)	3.5/12	浅黄橙10YR8/3	良好	
786	4次	A地区	遺物包 含層	u8	土師器	椀	13.0	(5.45)	6/12弱	浅黄橙10YR	良好	
787	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	土師器	椀	(17.8)	(5.05)	2/12弱	(外)橙5YR6/8橙 7.5YR7/6(内)橙 5YR6/8	やや軟	
788	4次	A地区	遺物包 含層	—	土師器	杯B	(11.0) (底部)	(2.3)	底2/12	橙5YR6/6	良好	
789	4次	A地区	遺物包 含層	—	土師器	高杯脚部	—	(6.6)	—	橙5YR6/6	良	
790	4次	A地区	遺物包 含層	u8	土師器	壺か甌	(15.0)	(6.5)	口15/12	灰白10YR8/2	良好	
791	4次	A地区	遺物包 含層	—	土師器	把手			—	明赤褐5YR5/6	良	
792	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	土師器	甌	—	—	栈のみ	(全体)浅黄橙 10YR8/4(一部)黒 N1.5/0	良好	
793	4次	A地区	遺物包 含層	u8	土師器	鍋	(33.2)	(5.25)	1/12強	内外面とも浅黄橙 10YR8/4	良好	
794	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	土師器	鍋	—	(2.5)	1/12 以 下	内外面ともに橙 2YR6/6浅黄橙 7.5YR8/4橙7.5YR8/6	良好	
795	4次	A地区	遺物包 含層	—	土師器	片口鍋	28.0	11	6/12	灰白2.5Y8/2暗灰黄 2.5Y5/2	良	
796	6次	A地区	島畑31	w9	土師器	甕	(12.2)	(3.8)	2.5/12	橙7.5YR7/6	良好	
797	4次	A地区	遺物包 含層	—	土師器	甕	(12.0)	8.5	1/12	にぶい黄橙10YR7/3	良	
798	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	土師器	甕	(14.8)	(10.4)	2.5/12	(外)浅黄橙10YR8/3 (内)灰白10YR8/2	良好	
799	4次	A地区	遺物包 含層	—	土師器	甕	(17.5)	14.7	2/12	にぶい黄橙10YR7/3	良	
800	4次	A地区	遺物包 含層	—	土師器	甕	18.6	(5.1)	3/12強	浅黄2.5Y7/3	良好	
801	4次	A地区	遺物包 含層	—	土師器	甕	(19.0)	7.5	3/12	灰白10YR8/2黄褐 10YR5/2	良	
802	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	土師器	甕		(2.7)	1/12 以 下	(外)浅黄橙10YR8/3 (内)灰白10YR8/2	良好	
803	4次	A地区	遺物包 含層	—	土師器	甕	19.7	6.0	5.5/12	灰白10YR8/2	良好	
804	4次	A地区	遺物包 含層	—	土師器	甕	(23.6)	7.7	1.5/12	灰白10YR8/2	良	
805	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	須恵器	杯H蓋		(3.2)	1/12 以 下	灰白2.5Y8/1	軟	
806	4次	A地区	遺物包 含層	—	須恵器	杯H蓋	11.9	3.7	6/12	灰白N7/0	良好	

報告 番号	次数	調査区	遺構	層位・ 地点	器種	器形	口径	器高	残存率	色調	焼成	備 考
807	4次	A地区	遺物包 含層	－	須恵器	杯H蓋	(12.0)	(3.4)	1/12	(外)灰N4/0(内)灰 N6/0	堅緻	
808	4次	A地区	遺物包 含層	u8	須恵器	杯H蓋	(12.0)	(3.3)	1/12強	灰N5/	良好	
809	4次	A地区	遺物包 含層	u8	須恵器	杯H蓋	(12.0)	(3.35)	2/12	(外)灰N5/0(内)灰 N6/0	堅緻	
810	4次	A地区	遺物包 含層	－	須恵器	杯H蓋	10.5	3.5	完形	灰白N8/0	良	
811	4次	A地区	遺物包 含層	－	須恵器	杯H蓋	(10.8)	(3.0)	2.5/12	灰10Y5/1	堅緻	
812	4次	A地区	遺物包 含層	u8	須恵器	杯H蓋	10.4	(3.5)	4/12	灰5Y6/1	堅緻	
813	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	須恵器	杯H蓋	(10.2)	(3.4)	3/12	(外)灰N5/0・6/0(内) 灰N6/0	堅緻	
814	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	須恵器	杯H蓋	10.6	3.6	9/12	内外面とも灰N7/0	堅緻	
815	4次	A地区	遺物包 含層	－	須恵器	杯H蓋	10.3	4.0	ほぼ完形	灰白N8/0	やや軟	
816	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	須恵器	杯H蓋	10.3	3.6	11/12強	灰N6/0	堅緻	
817	4次	A地区	遺物包 含層	－	須恵器	杯H蓋	9.9	3.9	10/12	灰白10YR7/1	良好	
818	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	須恵器	杯H蓋	9.9	3.4	6/12	内外面とも灰N6/0	堅緻	
819	4次	A地区	遺物包 含層	－	須恵器	杯H蓋	(10.1)	(3.2)	1/12	灰白2.5Y7/1	堅緻	
820	4次	A地区	遺物包 含層	s9	須恵器	杯H蓋	(9.4)	(3.5)	2/12	灰N6/0	堅緻	
821	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	須恵器	杯H	11.6	(2.8)	3/12強	灰5Y6/1	堅緻	
822	4次	A地区	遺物包 含層	t8	須恵器	杯H	(10.8)	(3.2)	1.5/12	灰N5/～暗灰N3/	良好	
823	4次	A地区	遺物包 含層	－	須恵器	杯H	10.2	3.3	6.5/12	灰白N7/0	良好	
824	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	須恵器	杯H	10.0	(3.8)	4/12	灰5Y6/1	堅緻	
825	4次	A地区	遺物包 含層	u8	須恵器	杯H	(9.8)	2.3	3/12	灰白N7/	良好	
826	4次	A地区	遺物包 含層	u8	須恵器	杯H	(9.6)	(2.05)	2.5/12	内外面ともに灰N6/0	堅緻	
827	4次	A地区	遺物包 含層	－	須恵器	杯H	9.5	2.95	5/12	灰白5Y8/1	良	
828	4次	A地区	遺物包 含層	－	須恵器	杯H	9.3	3.1	9/12	灰白N7/0	良好	
829	4次	A地区	遺物包 含層	－	須恵器	杯H	9.3	3.3	ほぼ完形	灰白N7/0	良好	
830	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	須恵器	杯H	(9.8)	(4.6)	2.5/12	褐灰10YR6/1	良好	
831	4次	A地区	遺物包 含層	－	須恵器	杯H	9.4	3.3	8/12	灰白5Y7/1	良	
832	4次	A地区	遺物包 含層	－	須恵器	杯H	9.1	3.25	ほぼ完形	灰白2.5Y7/1	良好	
833	4次	A地区	遺物包 含層	－	須恵器	杯H	9.3	3.0	完形	(外)灰N6/0(内)灰白 N7/0	やや軟	
834	4次	A地区	遺物包 含層	t8	須恵器	杯G蓋	(8.0)	(2.3)	3/12弱	(外)灰N6/(内)灰白 N7/	良好	
835	4次	A地区	遺物包 含層	－	須恵器	杯G蓋	(10.8)	(1.7)	3/12	灰N5/1	堅緻	
836	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	須恵器	杯G蓋	(12.5)	(1.75)	1/12強	灰N6/0	堅緻	
837	4次	A地区	遺物包 含層	t8	須恵器	杯G		(3.5)	1/12以下	内外面とも灰白	良好	
838	4次	A地区	遺物包 含層	u8	須恵器	杯G	(9.9)	(3.25)	2/12	(外)灰N7/～灰N6/ (内)灰白N7/	良好	

報告 番号	次数	調査区	遺構	層位・ 地点	器種	器形	口径	器高	残存率	色調	焼成	備 考
839	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	須恵器	杯G	(10.4)	(3.4)	1/12	(外)灰5Y6/1(内)灰白 N7/	良好	
840	4次	A地区	遺物包 含層	—	須恵器	杯A		(3.6)	1/12以下	内外面とも灰白 2.5Y8/1灰黄2.5Y7/2	軟	
841	4次	A地区	遺物包 含層	u8	須恵器	杯		(3.0)	1/12弱	灰N6/	良好	
842	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	須恵器	杯	(14.9)	(3.6)	1/12強	灰N6/1とオリープ灰 2.5GY6/1の中間色	良好	
843	4次	A地区	遺物包 含層	u8	須恵器	杯B蓋		(1.1)	1/12以下	灰7.5Y6/1	堅緻	
844	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	須恵器	杯B	(9.7) (底部)	(2.0)	3/12	(外)灰7.5Y6/1～灰 白7.5Y8/1(内)灰 7.5Y6/1	良好～や や軟	
845	4次	A地区	SD04	下層	須恵器	杯B	(11.2) (底部)	(2.6)	底2/12弱	灰黄2.5Y7/2	堅緻	
846	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	須恵器	杯B		(1.7)	1/12以下	灰N6/	良好	
847	4次	A地区	遺物包 含層	—	須恵器	杯B	(14.8) 9.7 (底部)	4.2	1/12 底完存	灰白N6/0	良好	
848	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	須恵器	碗	—	(4.7)	1/12以下	(外)灰5Y5/1(内)灰白 5Y8/1	軟	
849	4次	A地区	遺物包 含層	t8	須恵器	壺	(9.7)	(5.1)	2/12	(外)灰N4/(内)灰N6/	良好	
850	4次	A地区	遺物包 含層	u8	須恵器	壺	—	—	—	(外)灰白5Y7/1(内)灰 白N7/1	堅緻	
851	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	須恵器	壺	(12.0) (底部)	(2.5)	2/12	灰白N7/～灰N4/	良好	
852	6次	A地区	島畑31	w9	須恵器	高杯脚部	—	—	—	(外)灰N5/0(内)灰 N6/0	堅緻	
853	4次	A地区	遺物包 含層	u8	須恵器	提瓶	5.35	(7.1)	4/12強	灰7.5Y6/1		
854	4次	A地区	遺物包 含層	u9 上層	須恵器	提瓶	—	—	—	(外)灰白N7/0(内)灰 N6/0	堅緻	
855	4次	A地区	遺物包 含層	u8	須恵器	甕か横瓶	(14.4)	(4.65)	2/12強	内外面ともに灰白 2.5Y8/1淡黄2.5Y8/3	軟	
856	4次	A地区	遺物包 含層	u8	須恵器	壺	9.0	(6.8)	3.5/12	(外)灰黄2.5Y7/2黒 褐2.5Y3/1(内)灰黄 2.5Y7/2	堅緻	
857	4次	A地区	遺物包 含層	—	須恵器	平瓶	4.5 (頸部)	7.1	体部完存	灰白N7/0と灰6/0の間	良好	
858	4次	A地区	遺物包 含層	u8	須恵器	鉢A	(20.0)	(4.7)	1/12強	灰N5/0	堅緻	
859	4次	A地区	遺物包 含層	—	須恵器	甕か壺	(22.2)	(2.5)	1/12	(外)明赤褐5YR5/6 (内)灰白2.5Y8/2	良好	
860	4次	A地区	遺物包 含層	—	須恵器	甕か壺	(16.6)	(3.1)	1.5/12	灰N6/1	堅緻	
861	4次	A地区	遺物包 含層	—	須恵器	甕か壺	(19.6)	3.8	2/12	灰白N7/0	良好	
862	4次	A地区	遺物包 含層	u8	須恵器	甕か壺	(23.8)	(4.4)	2.5/12弱	灰N6/1	堅緻	
863	4次	A地区	遺物包 含層	w12上層	土師器	杯C	(15.0)	(4.75)	3/12	橙5YR6/6	良好	
864	4次	A地区	島畑32	下層	土師器	皿		(1.9)	1/12以下	橙2.5YR6/8	良好	
865	6次	A地区	遺物包 含層	—	土師器	甕			3/12	灰白N7/0		
866	4次	A地区	島畑32	下層	須恵器	杯H蓋	(10.4)	(2.9)	口2/12	灰N6/0	堅緻	
867	6次	A地区	遺物包 含層	—	須恵器	杯G	(9.0)	(3.5)	1.5/12	灰白2.5Y7/1	良好	
868	4次	A地区	島畑32	下層	須恵器	甕		(2.0)	1/12以下	内外面とも灰N5/0黒 N1.5/0	堅緻	
869	1次	B地区	SK17		土師器	杯A	(15.8)	(14.5)	1/12	橙5YR6/6	良好	
870	1次	B地区	SK17	下層	土師器	杯C	(18.2)	(4.5)	2/12	にぶい橙7.5YR7/4	やや軟	
871	1次	B地区	SK17		土師器	杯	(18.35)	(4.2)	1/12弱	橙7.5YR6/6	堅緻	
872	1次	B地区	SK17		土師器	杯A	(10.8)	2.9	2/12弱	橙5YR7/6	良好	

報告 番号	次数	調査区	遺構	層位・ 地点	器種	器形	口径	器高	残存率	色調	焼成	備 考
873	1次	B地区	SK17		土師器	杯C	(11.8)	(2.4)	1/12	橙5YR6/6	良好	
874	1次	B地区	SK17	下層	土師器	杯C	(14.0)	(2.3)	3/12	橙7.5YR6/6	良好	
875	1次	B地区	SK17		土師器	杯C	(14.8)	(2.0)	1/12	橙5YR6/6	良好	
876	1次	B地区	SK17		土師器	杯	(11.2)	2.2	2/12	にぶい橙7.5YR7/4	良好	
878	1次	B地区	SK17		土師器	杯	(11.8)	(2.8)	2/12	(外)橙7.5YR7/6に ぶい黄橙10YR7/2 (内)灰N4/0にぶい橙 5YR6/4	良好	
879	1次	B地区	SK17		土師器	皿	(15.2)	3.0	3/12	にぶい橙5YR6/4	良好	
880	1次	B地区	SK17		土師器	皿	(20.8)	(3.0)	1/12弱	橙5YR6/6	良好	
881	1次	B地区	SK17		土師器	甕	(17.8)	(4.4)	1/12	にぶい黄橙10YR7/2	良好	
882	1次	B地区	SK17		土師器	甕	(16.8)	(13.2)	1/12	にぶい橙10YR7/4	良好	
883	1次	B地区	SK17		土師器	甕	(13.2)	(10.3)	1/12	にぶい黄橙10YR7/2	良好	
884	1次	B地区	SK17	下層	土師器	甕	21.3	11.3	8/12	にぶい黄橙10YR7/3	良好	
885	1次	B地区	SK17		土師器	甕			6/12		良好	
886	1次	B地区	SK17		土師器	甕	底15.3	(5.0)	底5/12 +2/12	灰黄2.5Y7/2	良好	
887	1次	B地区	SK17	下層	須恵器	杯H蓋	10.4	4.0	口6/12	灰白N7/0	堅緻	
888	1次	B地区	SK17		須恵器	杯H蓋	(10.8)	3.7	天井ほぼ 全 口2/12	灰N6/0	堅緻	
889	1次	B地区	SK17	下層	須恵器	杯H蓋	3.3	3.3	口3/12強 全体6/12	灰白N7/	良好	
890	1次	B地区	SK17		須恵器	杯H蓋	11.0	(2.8)	3/12強	(外)灰N5(内)灰白 2.5Y8/1	やや軟	
891	1次	B地区	SK17		須恵器	杯H蓋	(12.2)	3.0	2.5/12	灰白5Y8/1	良好	
892	1次	B地区	SK17		須恵器	杯H蓋	(11.3)	3.25	3/12	灰N6/	堅緻	
893	1次	B地区	SK17		須恵器	杯H	(13.15)	(3.0)	2/12強	(外)灰N5(内)灰N6/5	堅緻	
894	1次	B地区	SK17	下層	須恵器	杯H	(13.3)	(3.0)	2/12弱	灰N7/0	良	
895	1次	B地区	SK17		須恵器	杯H	(12.8)	(3.1)	1/12 以下	灰N5/	堅緻	
896	1次	B地区	SK17		須恵器	杯H	(10.2)	2.9	2/12	青灰5PB5/1	良好	
897	1次	B地区	SK17		須恵器	杯H	(11.7)	3.0	1/12	灰N5	堅緻	
898	1次	B地区	SK17		須恵器	杯H	(9.2)	(2.5)	1.5/12	(外)灰白N5/ (内)灰 白N8/	堅緻	
899	1次	B地区	SK17		須恵器	杯G蓋	10.7	2.5	11/12強	(外)灰N5/0~6/0 (内)灰N6/0	堅緻	
900	1次	B地区	SK17		須恵器	杯G蓋	11.1	(2.2)	6/12弱	(外)灰N6/0(内)明青 灰5P6/1	堅緻	
901	1次	B地区	SK17		須恵器	杯G	8.8	3.6	9/12強	(外)灰N4/0~6/0 (内)灰N6/0	堅緻	
902	1次	B地区	SK17	下層	須恵器	杯G	9.2	3.5	5/12	灰白N7/0	堅緻	
903	1次	B地区	SK17		須恵器	杯G	(8.1)	3	1/12	灰N7/0	堅緻	
904	1次	B地区	SK17		須恵器	杯G	9.2	3.2	4/12	(外)灰N4/0灰白N7/0 (内)灰白N7/0	堅緻	
905	1次	B地区	SK17	下層	須恵器	杯G	8.8	3.0	4/12	(外)灰N4/0(内)灰 N6/0	堅緻	自然釉付着
906	1次	B地区	SK17		須恵器	杯AかG	11.0	4.0	6/12強	橙7.5YR6/6	やや軟	
907	1次	B地区	SK17		須恵器	高杯	(11.0)	3.2	3/12	灰N5/0~6/0	堅緻	
908	1次	B地区	SK17		須恵器	杯B蓋	(16.8)	(3.5)	3/12	灰N6/1	堅緻	
909	1次	B地区	SK17		須恵器	杯B蓋	17.0	2.4	9/12	灰白N7/	良好	
910	1次	B地区	SK17		須恵器	杯B蓋	(14.4)	(3.2)	1/12強	(外)灰N5(内)灰N6	堅緻	
911	1次	B地区	SK17		須恵器	杯	14.2	(3.4)	6.5/12	灰N6/1	堅緻	
912	1次	B地区	SK17		須恵器	杯	(13.0)	(3.8)	2/12	灰N7/0	堅緻	
913	1次	B地区	SK17		須恵器	壺底部 (9.8) (底部)		(1.5)	3/12	灰白2.5Y8/2	軟	
914	1次	B地区	SK17		須恵器	壺		(6.9)	頸3/12強	灰N6/1	堅緻	
915	1次	B地区	SK17		須恵器	円面硯	(17.7)	(1.4)	1.5/12	灰7.5Y6/1	堅緻	
916	1次	B地区	SK17	下層	須恵器	高杯蓋	(21.0)	4.7	2/12	灰白5Y7/1	堅緻	
917	1次	B地区	SK17		須恵器	甕か壺	19.6	(4.4)	3/12強	(外)明褐灰5YR7/1 (内)灰白10Y7/1	堅緻	
918	1次	B地区	SK17		須恵器	甕か壺	(24.8)	(3.0)	1/12弱	灰白N7/	堅緻	
919	1次	B地区	SD16		土師器	鉢	(25.0)	(9.2)	2/12	にぶい黄橙10YR7/3	良	
920	1次	B地区	SD16・ SK17		須恵器	杯H	13.4	3.7	5/12	N6/0	堅緻	
921	1次	B地区	SD16		須恵器	杯G	9.7	3	8/12	N7/0	堅緻	

報告 番号	次数	調査区	遺構	層位・ 地点	器種	器形	口径	器高	残存率	色調	焼成	備 考
922	1次	B地区	SD16		須恵器	杯G	11.5	3.6	6/12弱	(外)底7.5Y4/1(内) 底7.5Y4/1(内外)口 2.5YR4/4	堅緻	
923	1次	B地区	SD16		須恵器	杯B蓋	(16.4)	(2.6)	1/12強	灰N5/0	堅緻	断面は 7.5YR5/2
924	1次	B地区	SD16		須恵器	杯B蓋	(17.4)	1.8	2/12弱	(外)灰N5(内)灰N6	堅緻	
925	1次	B地区	SD16		須恵器	杯B蓋	(17.5)	(1.7)	2/12	(外)灰N5(内)灰N6	堅緻	
926	1次	B地区	SD16・ SK17		須恵器	杯B	14.7 底 11.6	3.8	3/12	灰N6/0	良	
927	1次	B地区	SD16		須恵器	杯B	底10.0	(2.8)	4/12	(外)灰白5Y8/1(内)灰 白5Y7/1	やや軟	
928	1次	B地区	SD16		須恵器	甕	(28.8)	(5.7)	1/12強	(外)灰N6/0～7/0(内) 灰N7/0～8/0	堅緻	
929	1次	B地区	SK19		須恵器	杯身	13.9	(3.9)	2/12	灰N6/1	堅緻	
930	1次	B地区	SK19		須恵器	杯身	13.0	3.8	9/12	灰N6/1	堅緻	
931	1次	B地区	SK19		須恵器	壺	体19.2	(9.9)	底12/12	灰白5Y8/1	良	
932	1次	B地区		43層	土師器	杯か皿	(16.0)	(2.4)	1/12	(外)にぶい黄 橙10YR7/3～橙 7.5YR6/6(内)橙 5YR6/6	やや軟	
933	1次	B地区		43層	土師器	杯か皿	(16.2)	(2.8)	1.5/12	橙5YR6/6	やや軟	
934	1次	B地区		40層・43 層	土師器	甕	(17.4)	8.0	1/12弱	灰白2.5YR8/1	良好	
935	1次	B地区		43層	土師器	甕	(20.6)	(6.6)	1/12	浅黄2.5YR7/3	良好	
936	1次	B地区		40層・43 層	土師器	甕	(26.2)	3.7	1/12	にぶい黄橙10YR7/2	良好	
937	1次	B地区		43層	土師器	長胴甕	(27.6)	(5.0)	1.5/12	浅黄橙10YR8/3	良好	
938	1次	B地区		40層・43 層	土師器	鍋	(39.0)	(6.5)	1/12	(外)浅黄橙10YR8/3 ～7/3(内)浅黄橙 10YR8/3	良好	煤付着部分 (外)灰黄褐 10YR5/2
939	1次	B地区		43層	土製品	土錘				灰白10YR8/2(部分的 に黄褐10YR5/3)	良好	
940	1次	B地区		43層	土製品	土錘				灰白2.5Y8/2	良	
941	1次	B地区		43層	土製品	土錘			完形	灰10YR8/2にぶい黄 橙10YR7/4	良好	
942	1次	B地区		43層	須恵器	杯蓋	(15.2)	(4.0)	3/12弱	灰N6/0	堅緻	
943	1次	B地区		43層	須恵器	杯H蓋	(12.2)	3.3	1/12強	灰N4/0	堅緻	
944	1次	B地区		43層	須恵器	杯身	(12.8)	(4.3)	1.5/12	灰N6/0	堅緻	
945	1次	B地区		43層	須恵器	杯身	14.1	(3.9)	5/12	灰N6/0	堅緻	
946	1次	B地区		43層	須恵器	杯身	14.0	(4.2)	6/12	灰5Y6/1とN6/0の中 間色	堅緻	
947	1次	B地区		43層	須恵器	杯身	—	(3.3)	受1.5/12	灰白7.5Y7/1とN7/0の 混合色	堅緻	
948	1次	B地区		43層	須恵器	杯身	15.0	(3.8)	4/12	灰N6/0	堅緻	
949	1次	B地区		43層	須恵器	杯身	(13.0)	3.4	1.5/12	灰白5Y7/1	堅緻	
950	1次	B地区		43層	須恵器	杯H	(12.4)	3.8	3/12	灰N7/0	堅緻	
951	1次	B地区		43層	須恵器	杯H	(11.8)	(3.6)	3/12	灰N6/1	堅緻	
952	1次	B地区		43層	須恵器	杯H	(10.5)	(3.9)	2/12強	灰N6/1	堅緻	暗緑灰 7.5GY4/1の自 然釉付着
953	1次	B地区		43層	須恵器	杯H	13.4	4.3	6/12強	灰N7/0	堅緻	
954	1次	B地区		43層	須恵器	杯B蓋	(19.0)	(1.8)	1.5/12	灰N6/0	堅緻	
955	1次	B地区		40層・43 層	須恵器	杯B蓋	—	2	1/12 以下	灰N7/0	堅緻	
956	1次	B地区		40層・43 層	須恵器	杯B	(14.8)	4.3	底12/12	(外)灰N5/0(内)灰 N6/0	堅緻	
957	1次	B地区		40層・43 層	須恵器	壺か埴瓶	8.6	(5)	12/12	(外)灰N3/0(内)灰 N5/0	堅緻	
958	1次	B地区		40層・43 層	須恵器	埴瓶か平 瓶	5.3	(4.0)	11/12	灰N6/0	堅緻	
959	1次	B地区		43層	須恵器	高杯脚部	(4.8)	(5.7)	3/12	灰N5/0	堅緻	
960	1次	B地区		43層	須恵器	鉢F	8.8 (底部)	(5.7)	底完存		堅緻	

報告 番号	次数	調査区	遺構	層位・ 地点	器種	器形	口径	器高	残存率	色調	焼成	備 考
961	1次	B地区		43層	須恵器	壺	13.2	(3.8)	4/12強	(外)灰N7/0(内)灰N4/0	堅緻	
962	1次	B地区		42層	須恵器	杯H	10.2	3.5	11/12	灰N5/0	良	
963	1次	B地区		42層	須恵器	甕	(16.0)	(8.4)	2/12	灰N6	堅緻	
964	1次	B地区		42層	須恵器	横瓶	10.8	(12.7)	5/12	(外)灰N5/0(内)灰N6/0	堅緻	
965	1次	B地区		40層	須恵器	稜椀	(18.8)	(5.4)	1/12 以下	灰白10Y7/1	やや軟	
966	1次	B地区		40層	須恵器	皿D	(21.2)	2.7	1/12 以下	(外)灰N6/0(内)灰N7/0	堅緻	
967	1次	B地区		36層	須恵器	杯B	(10.4)	(1.3)	3/12	灰N7/0	堅緻	
968	1次	B地区		36層	須恵器	鉢	(30.8)	(4.6)	口1/12	灰5Y6/1	堅緻	
969	1次	B地区		35層	須恵器	杯身	(14.8)	4.5	1.5/12	灰白2.5Y7/1	良	(外)黄灰 2.5Y6/1の部分 も見られる
970	1次	B地区		35層	須恵器	杯H蓋	(11.8)	3.3	1/12	灰N7/0	堅緻	
971	1次	B地区		35層	須恵器	壺	(11.6)	(7.2)	2/12	灰白5Y7/1	堅緻	
972	1次	B地区		—	須恵器	杯B	—	—	—	—	堅緻	
973	1次	B地区		—	灰釉陶器	椀	—	—	—	—	堅緻	
974	1次	B地区		—	土師器	杯C	11.7	2.9	4.5/12	橙7.5YR6/6	良	
975	1次	B地区	SD02	南半	須恵器	壺	(13.3) (底部)	(2.4)	底1.5/12	灰白N7/0	堅緻	
976	1次	B地区		北半 V層	須恵器	杯A	(15.8)	4.4	2/12	灰N5/0	堅緻	
977	1次	B地区		—	須恵器	臚	体最大 径11.4	(7.3)	体6/12	灰N6/1	良好	
978	1次	B地区		南半 SK17	須恵器	甕	(17.0)	(6.6)	1/12	灰N5/0	堅緻	
979	1次	B地区		南半	須恵器	甕	(34.6)	(3.6)	1/12 以下	灰白2.5Y7/1	堅緻	
980	1次	B地区		—	須恵器	杯H	10.6	4.3	7/12	青灰5PB6/1と明青灰5PB7/1の中間色	堅緻	

圖 版



調査地全景(A～C地区、北西から)



調査地全景(A～C地区、南西から)



(1) A・B地区全景(北から)



(2) A・B地区全景(西から)



(1) B地区全景(西から)



(2) B地区全景(上が南)



(1) A地区上層遺構全景(北から)



(2) A地区中層遺構面遺構検出状況(北から)



(1) A 地区島畑31護岸杭列検出状況
(南西から)



(2) A 地区島畑32土層断面
(南から)



(3) A 地区調査区西壁土層断面
(東から)



(1) A地区中層遺構面(東半部)全景(北から)



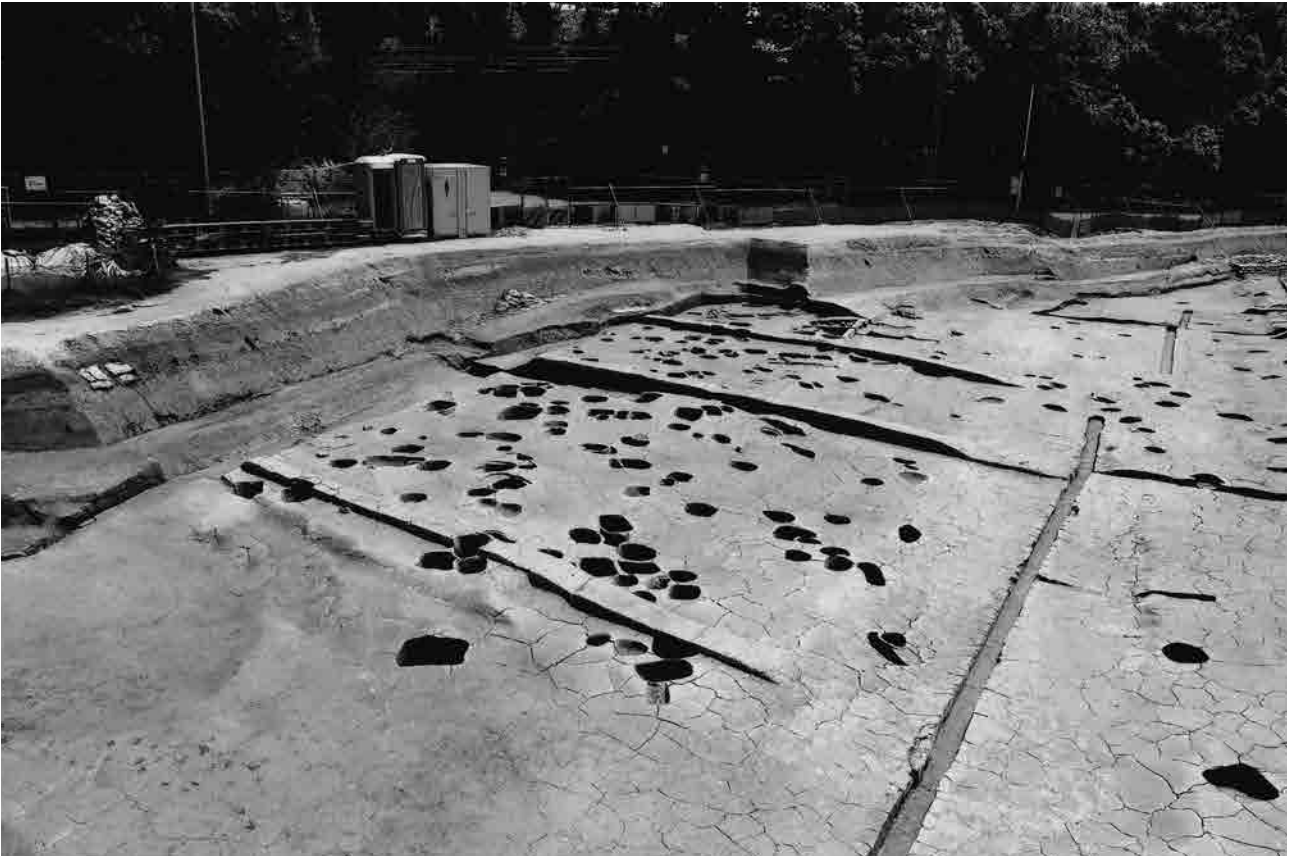
(2) A地区中層遺構面(西半部)全景(北から)



(1) A 地区中層遺構面全景(北から)



(2) A 地区中層遺構面中央部柱穴検出状況(南東から)



(1) A地区中層遺構面北東部柱穴完掘状況(北西から)



(2) A地区中層遺構面中央部柱穴完掘状況(東から)



(1) A 地区中層遺構面北西部柱穴
完掘状況(北西から)



(2) A 地区中層遺構面北東部柱穴
完掘状況(北西から)



(3) A 地区中層遺構面中央部柱穴
完掘状況(北東から)

(1) A 地区土坑 S K 239 全景
(西から)



(2) A 地区土坑 S K 235 遺物
出土状況(北西から)



(3) A 地区土坑 S K 197 掘削作業

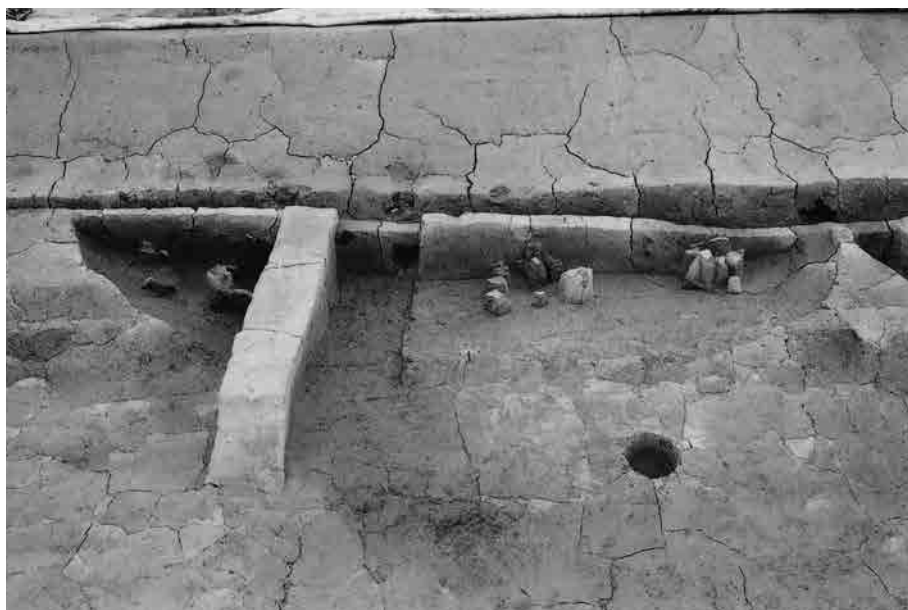




(1) A 地区土坑 S K 197 全景
(南西から)



(2) A 地区土坑 S K 335 上層遺物
出土状況(東から)



(3) A 地区土坑 S K 335 下層遺物
出土状況(東から)



(1) A 地区井戸 S E 112 上層遺物出土状況 (北東から)



(2) A 地区井戸 S E 112 下層遺物出土状況 (南東から)



(1) A 地区井戸 S E 112 下層遺物出土状況 (南東から)

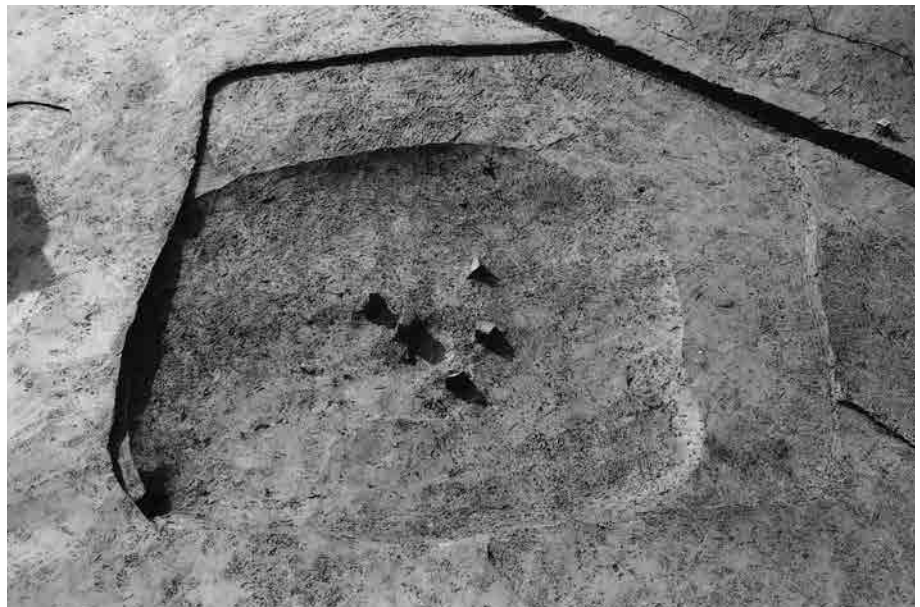


(2) A 地区井戸 S E 112 完掘状況 (南東から)

(1) A 地区 S E 112 検出状況
(北東から)



(2) A 地区 S E 112 最上層掘削状況
(北東から)



(3) A 地区 S E 112 上層土層断面
(北西から)





(1) A 地区 S E 112 上層土層断面
(南東から)



(2) A 地区 S E 112 上層遺物
出土状況(南東から)



(3) A 地区 S E 112 中層遺物
出土状況(南西から)

(1) A 地区 S E 112 中層遺物
出土状況(南東から)



(2) A 地区井戸 S E 112 下層遺物
出土状況(北西から)



(3) A 地区井戸 S E 112 下層遺物
出土状況(西から)





(1) A 地区井戸 S E 112 井戸枠全景
(南東から)



(2) A 地区井戸 S E 112 井戸枠
復元状況(南東から)



(3) A 地区井戸 S E 112 掘形
半截状況(南東から)

(1) A 地区柱穴 S P 26 土層断面
(東から)

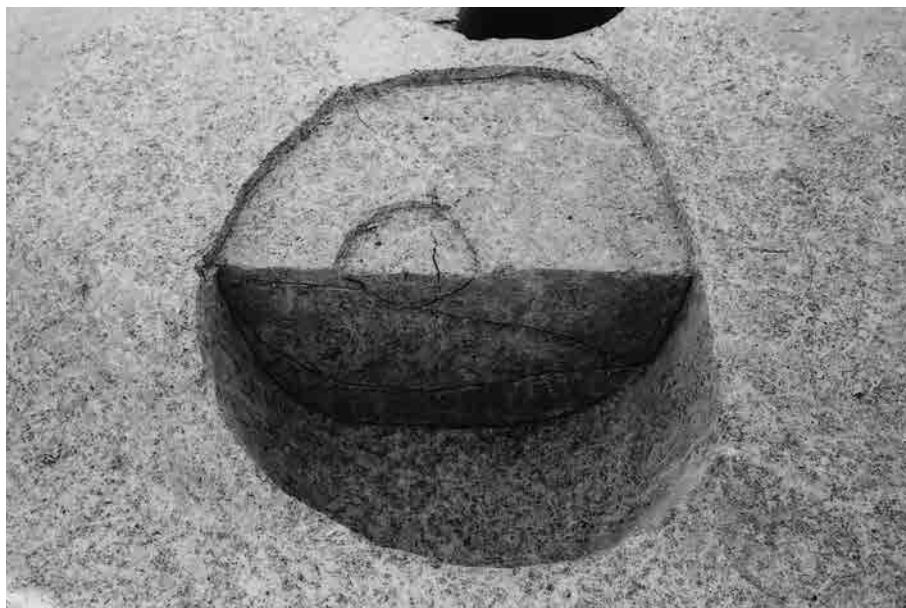


(2) A 地区柱穴 S P 94 土層断面
(北から)

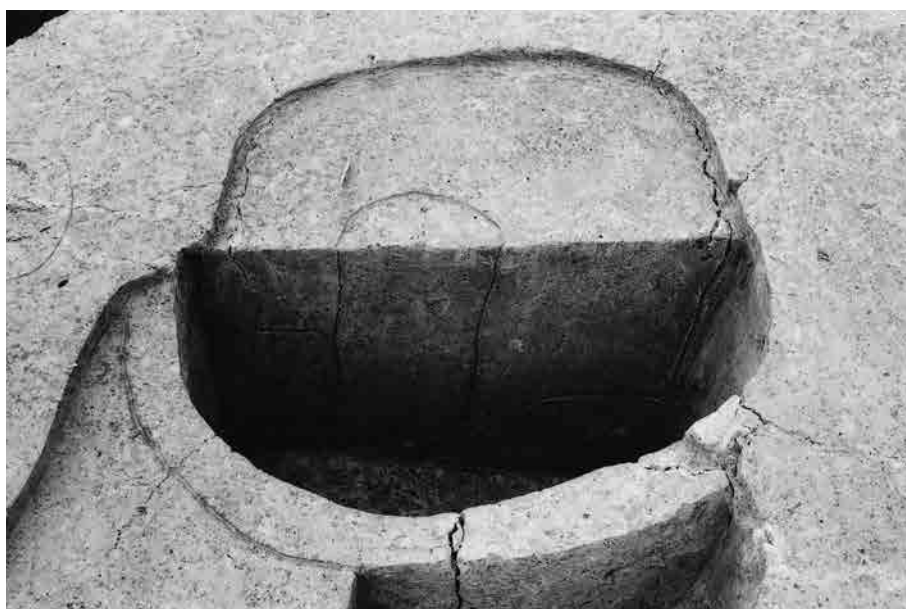


(3) A 地区柱穴 S P 317 土層断面
(西から)

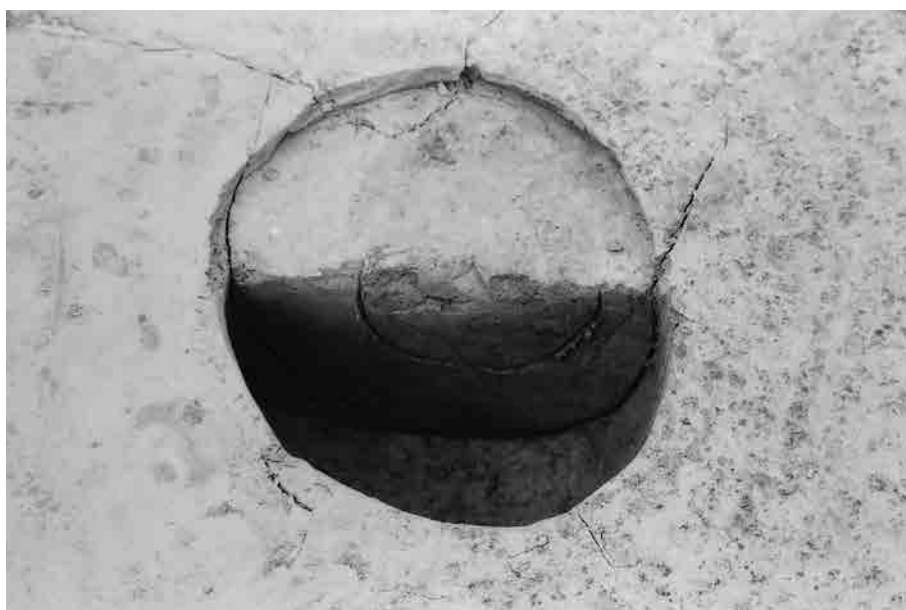




(1) A地区柱穴 S P 150土層断面
(西から)

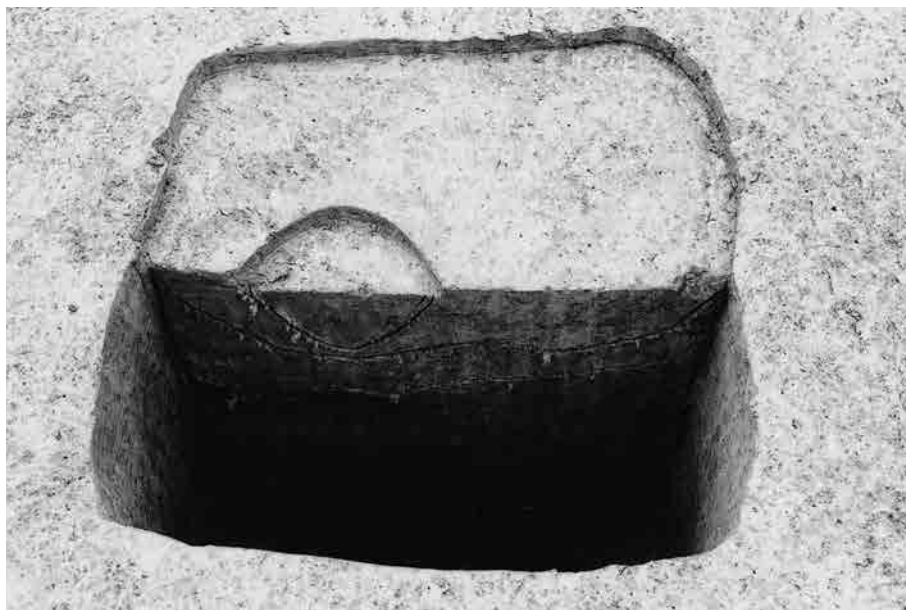


(2) A地区柱穴 S P 170土層断面
(南から)

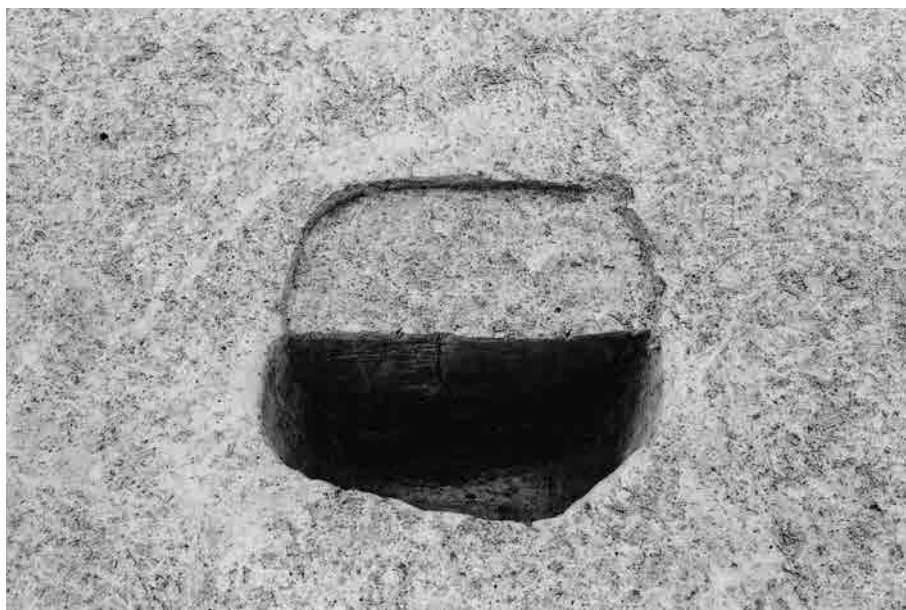


(3) A地区柱穴 S P 119土層断面
(南から)

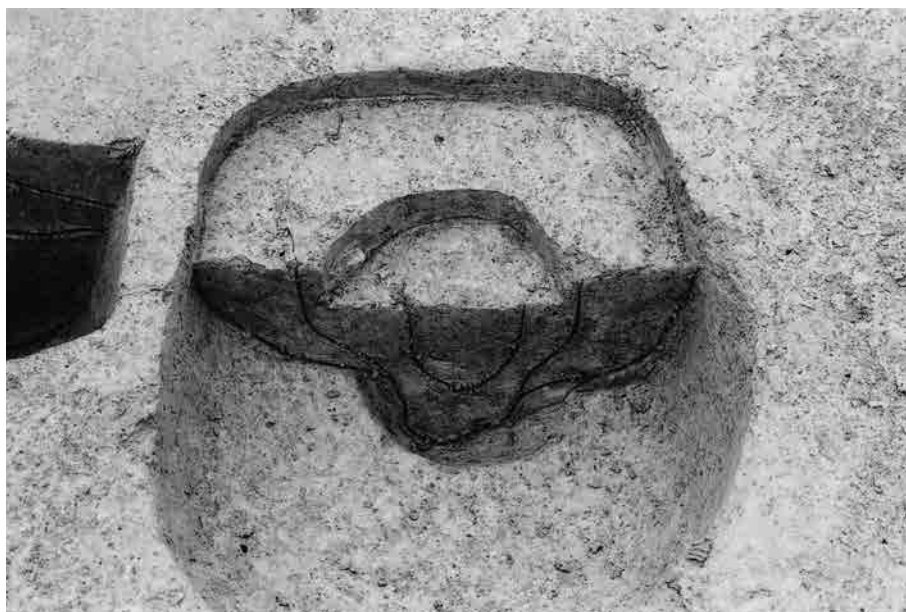
(1) A 地区柱穴 S P 152 土層断面
(南から)

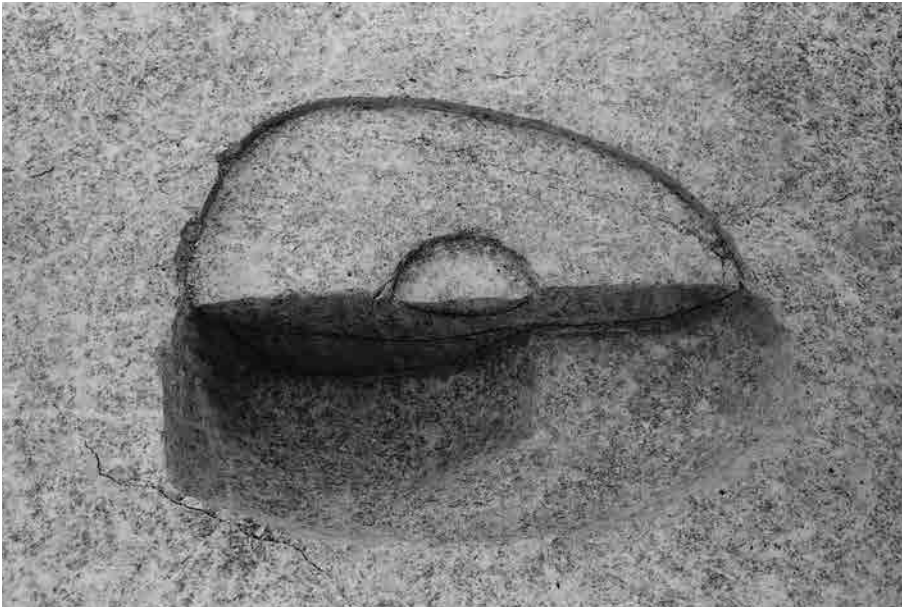


(2) A 地区柱穴 S P 166 土層断面
(東から)



(3) A 地区柱穴 S P 159 土層断面
(東から)

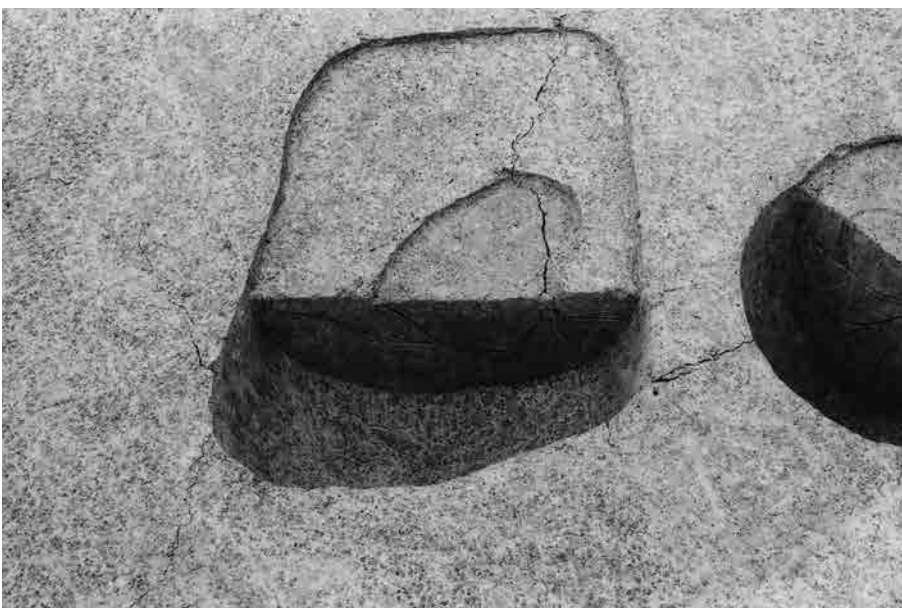




(1) A 地区柱穴 S P 158 土層断面
(西から)



(2) A 地区柱穴 S P 190 土層断面
(南から)



(3) A 地区柱穴 S P 156 土層断面
(東から)

(1) A 地区柱穴 S P 195 土層断面
(西から)



(2) A 地区柱穴 S P 198 土層断面
(南から)

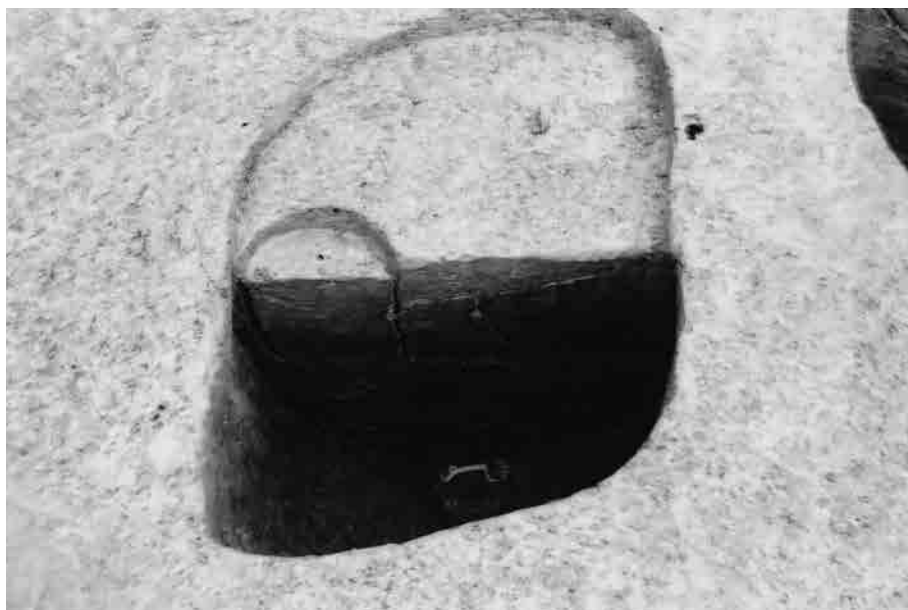


(3) A 地区柱穴 S P 204 土層断面
(南から)

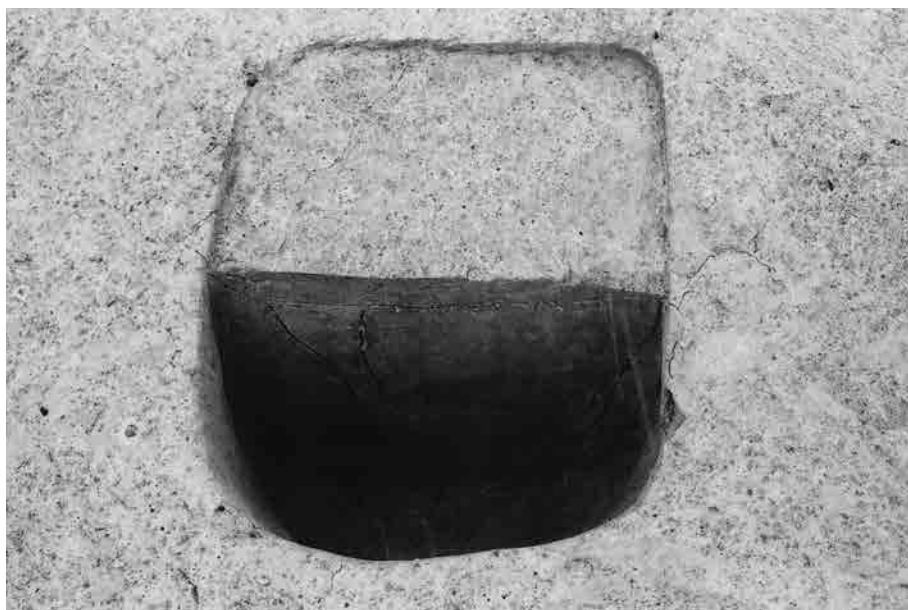




(1) A 地区柱穴 S P 172 土層断面
(東から)

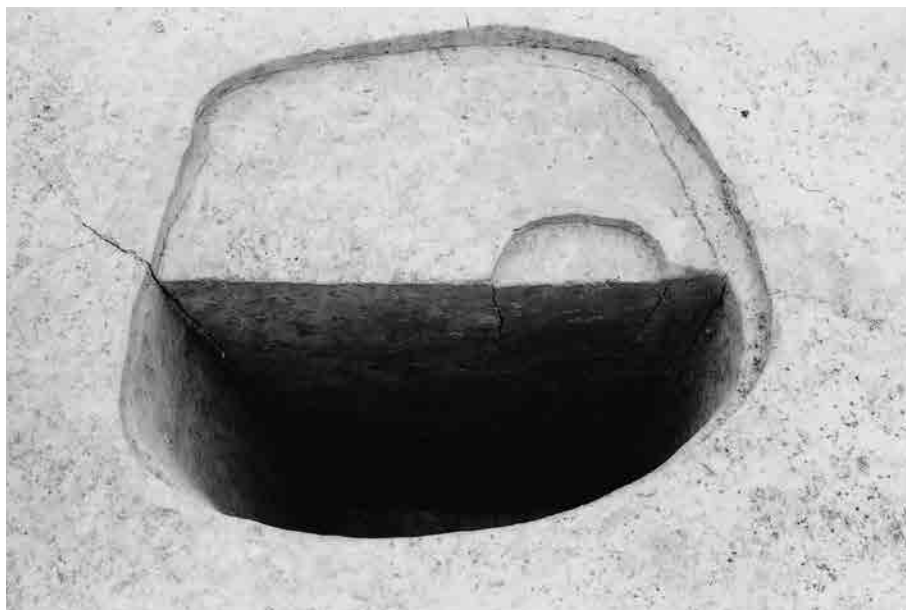


(2) A 地区柱穴 S P 232 土層断面
(西から)



(3) A 地区柱穴 S P 233 土層断面
(西から)

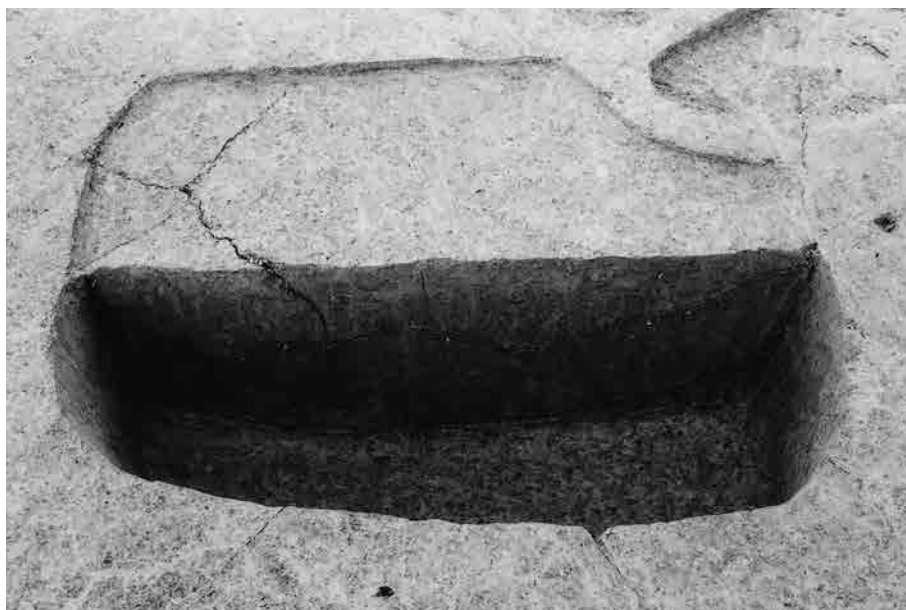
(1) A 地区柱穴 S P 246 土層断面
(南から)



(2) A 地区柱穴 S P 67 土層断面
(南から)

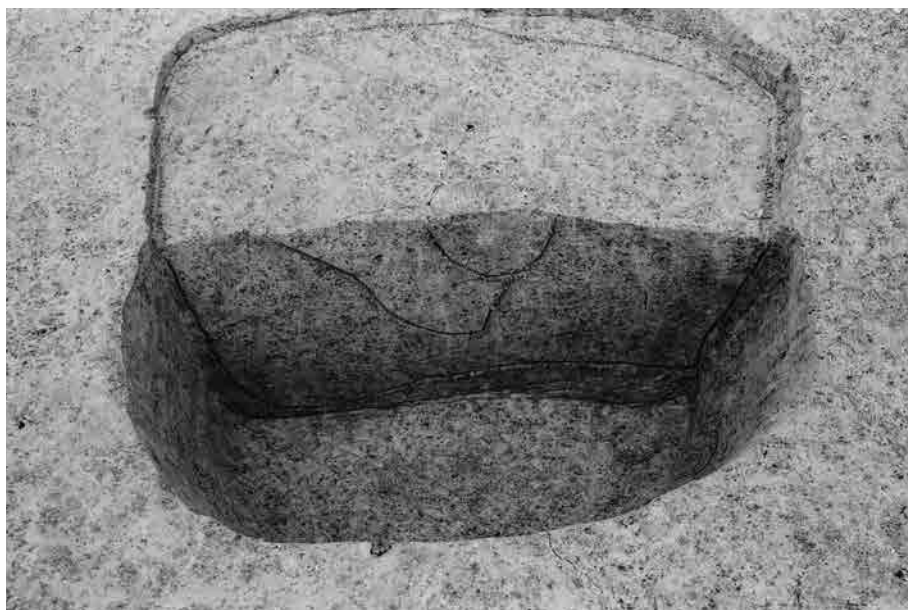


(3) A 地区柱穴 S P 103 土層断面
(南から)

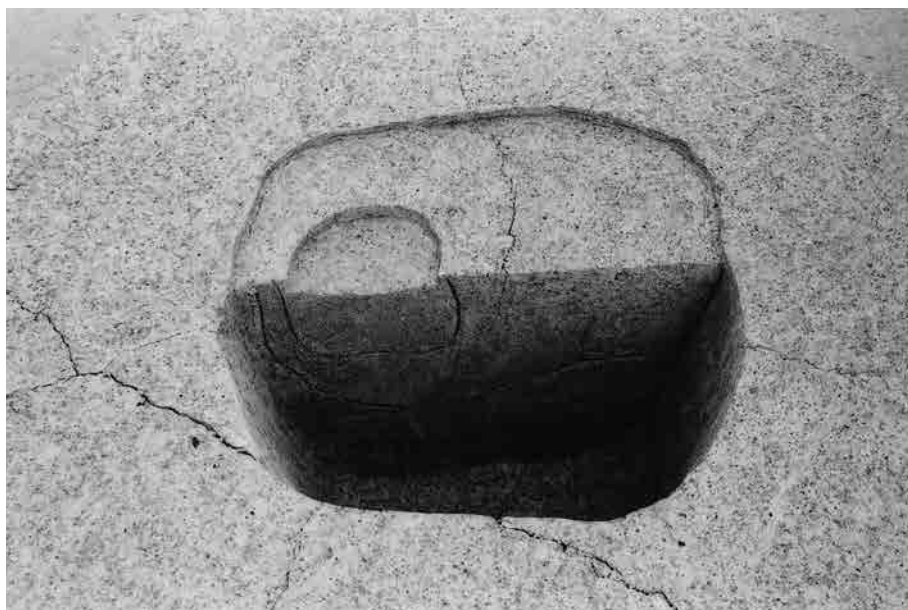




(1) A 地区柱穴 S P 126 土層断面
(東から)

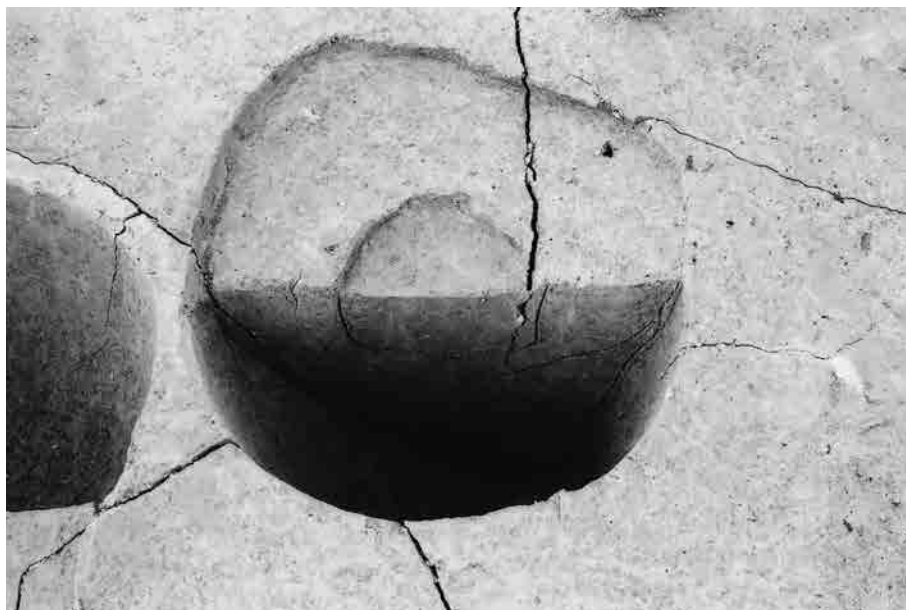


(2) A 地区柱穴 S P 235 土層断面
(西から)



(3) A 地区柱穴 S P 294 土層断面
(西から)

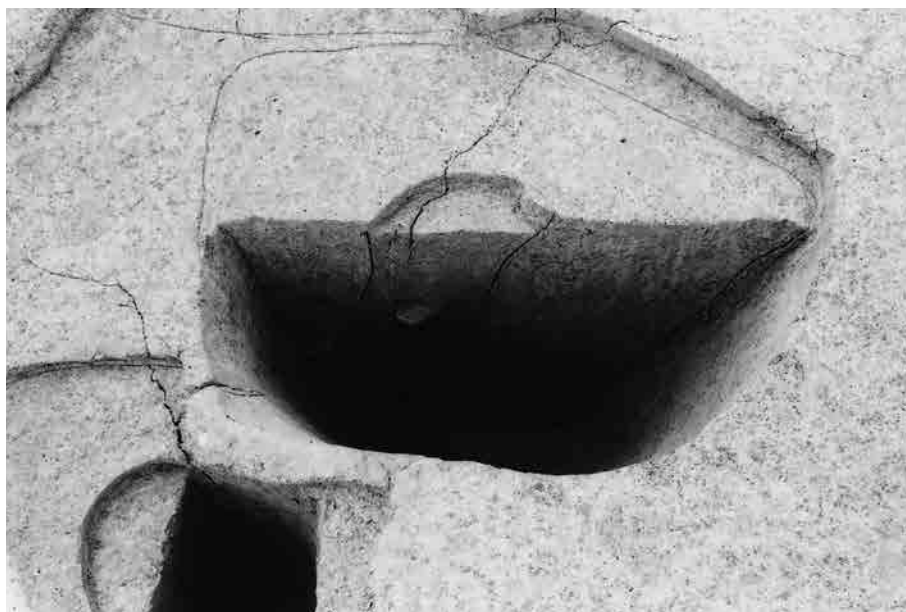
(1) A 地区柱穴 S P 248 土層断面
(南から)

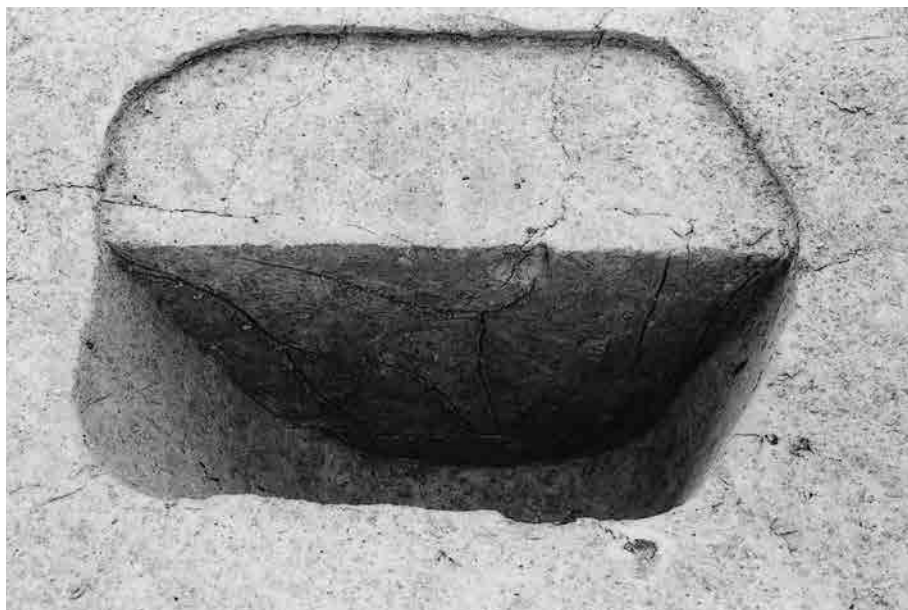


(2) A 地区柱穴 S P 250 土層断面
(南から)

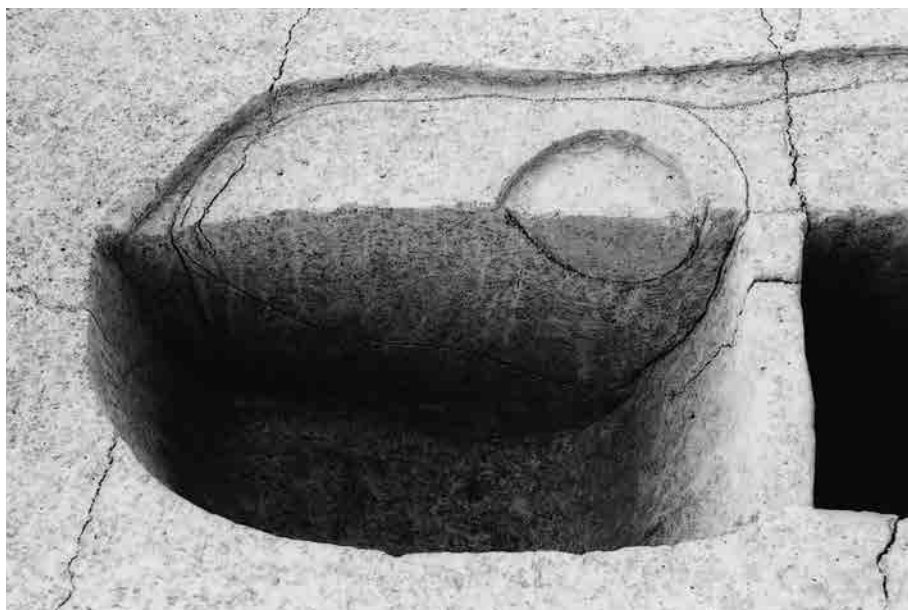


(3) A 地区柱穴 S P 251 土層断面
(北から)

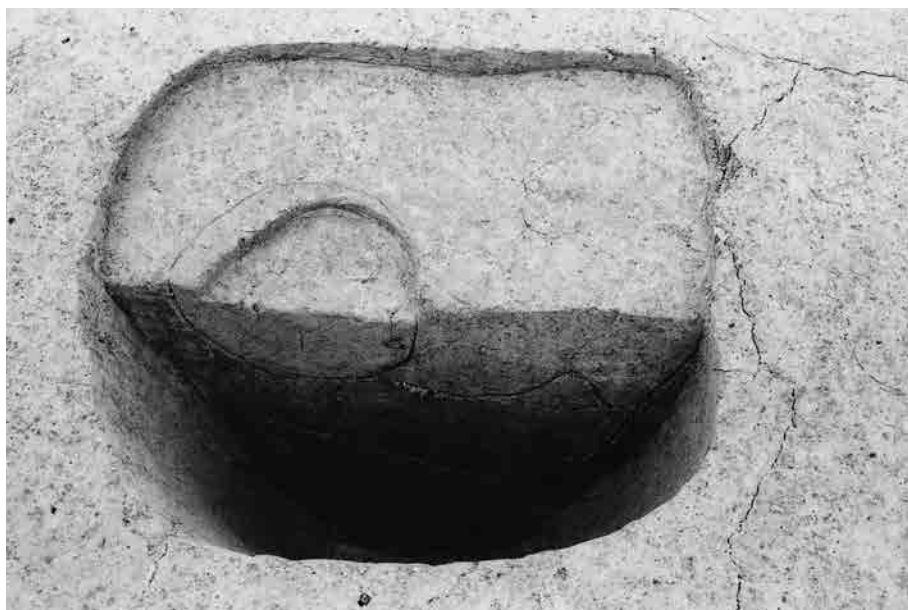




(1) A 地区柱穴 S P 256 土層断面
(西から)



(2) A 地区柱穴 S P 260 土層断面
(南から)



(3) A 地区柱穴 S P 300 土層断面
(南から)

(1) A 地区柱穴 S P 296 土層断面
(南から)

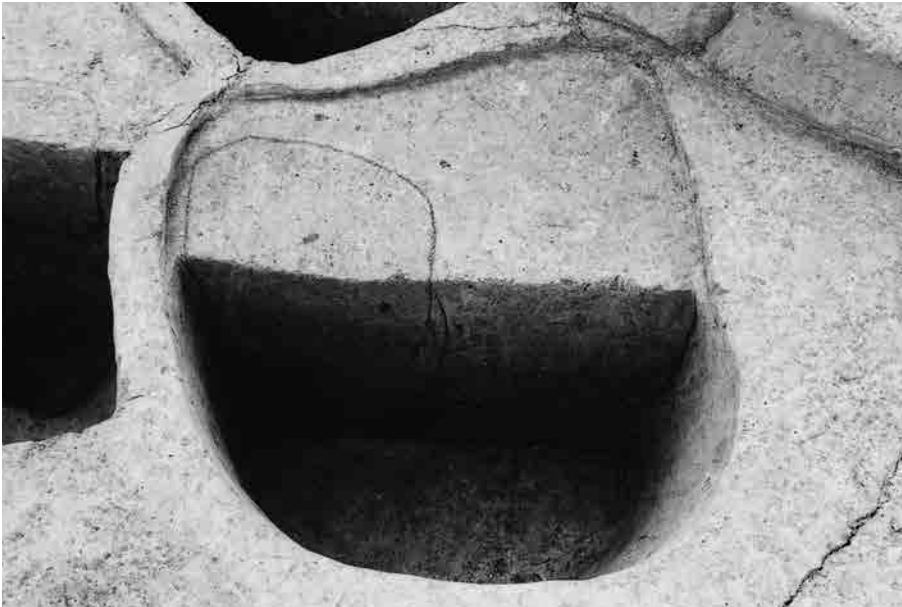


(2) A 地区柱穴 S P 289 土層断面
(南から)

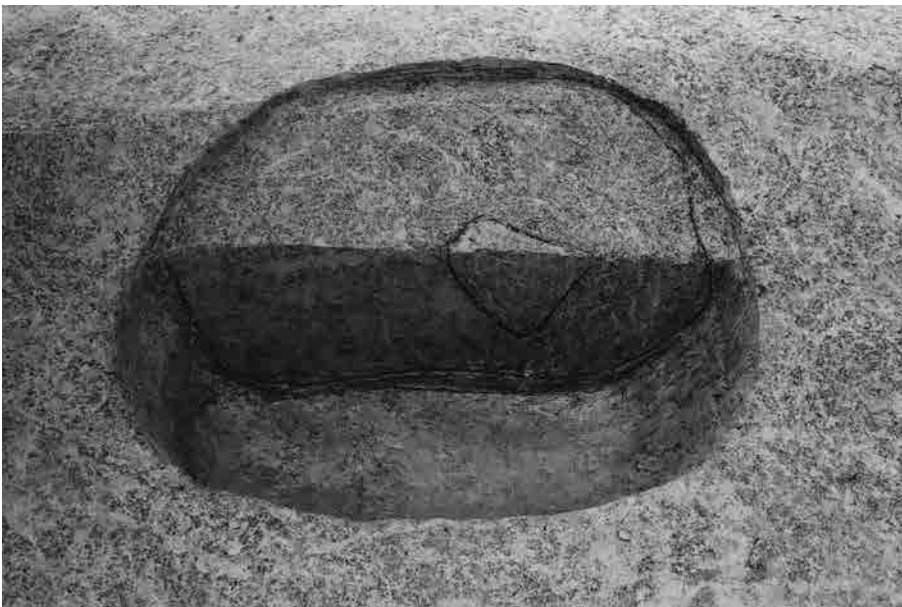


(3) A 地区柱穴 S P 319 土層断面
(南から)





(1) A 地区柱穴 S P 309 土層断面
(北から)



(2) A 地区柱穴 S P 330 土層断面
(東から)



(3) A 地区柱穴 S P 337 土層断面
(北から)



(1) A地区作業風景全景(南東から)



(2) A地区柱穴掘削作業風景
(南東から)



(3) A地区遺構平面図作成作業風景
(西から)



(1) A 地区溝 S D349・350 全景(北西から)



(2) A 地区溝 S D349・350(東半部)全景(北から)

(1) A 地区 S D 349・350 完掘状況
(南東から)



(2) A 地区 S D 349 遺物出土状況
(北から)



(3) A 地区 S D 349 遺物出土状況
(北西から)





(1) A 地区 S D 349 遺物出土状況
(北東から)



(2) A 地区 S D 350a - a' 土層断面
(北西から)



(3) A 地区 S D 350b - b' 土層断面
(南東から)



(1) A 地区 S D 351 全景 (南東から)



(2) A 地区 S D 351a - a' 土層断面
(南東から)



(3) A 地区 S D 351d - d' 土層断面
(南東から)



(1) B 地区島畑34・35全景(南東から)



(2) B 地区島畑34素掘り溝検出状況(南から)



(1) B 地区東壁土層断面(南西から)



(2) B 地区東壁土層断面(西から)



(1) B 地区島畑35検出状況(南から)



(2) B 地区島畑34検出状況(南から)



(3) B 地区島畑34護岸検出状況
(南西から)



(1) B 地区溝状遺構 S D 02土層断面
(南から)



(2) B 地区島畑34西岸護岸杭列断面
(西から)



(3) B 地区島畑35南部素掘り溝
検出状況(南から)



(1) B 地区溝 S D16・土坑 S K17 全景(東から)



(2) B 地区中層遺構面全景(南から)

(1) B 地区土坑 S K17 全景
(南東から)



(2) B 地区溝 S D16 全景 (東から)

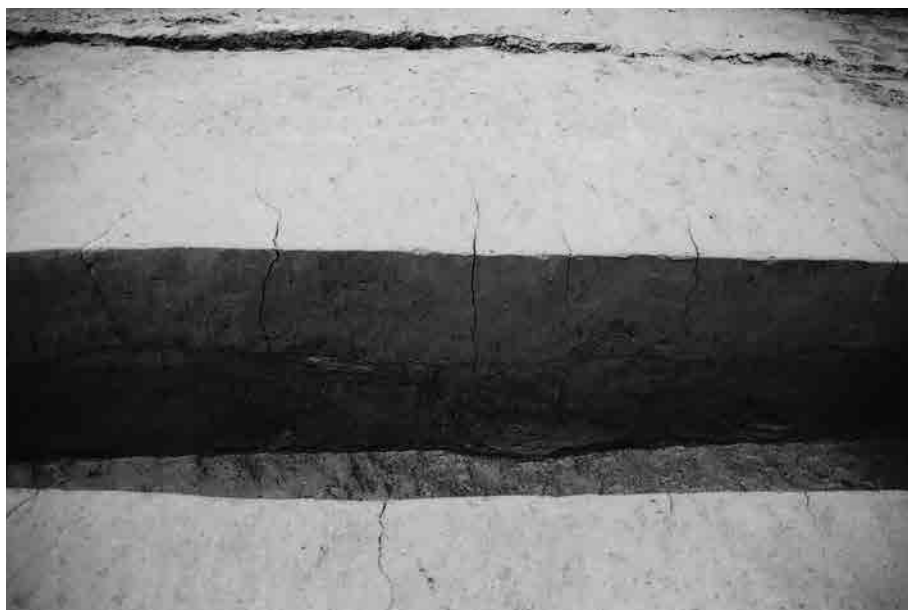


(3) B 地区土坑 S K38 遺物出土状況
(東から)





(1) B 地区島畑33土層断面
(南東から)



(2) B 地区島畑33土層断面(南から)



(3) B 地区島畑33土層断面
(北東から)



(1) B 地区下層遺構面全景(東から)



(2) B 地区溝 S D22 検出状況(東から)



(1) B 地区溝 S D 22 土層断面
(西から)



(2) B 地区土器溜まり S X 34 遺物
出土状況 (東から)



(3) B 地区土坑 S K 49 土層断面
(東から)



B 地区 S D22 全景 (西から)



B 地区 S D22 護岸材検出状況 (東から)



(1) B 地区 S D22 全景 (東から)



(2) B 地区 S D22 全景 (西から)



(1) B 地区 S D22 中央部検出状況 (北西から)



(2) B 地区 S D22 土層断面＜断面 1 南部上層＞ (北西から)



(1) B 地区 S D22土層断面＜断面 2 南部上層＞（南東から）



(2) B 地区 S D22土層断面＜断面 1 南部上層＞（東から）



(1) B 地区 S D22 土層断面＜断面 1 南部護岸材 D 検出状況＞（西から）



(2) B 地区 S D22 土層断面＜断面 3 中央＞（東から）

(1) B 地区 S D22西壁土層断面
＜北部＞（東から）



(2) B 地区 S D22西壁土層断面
＜南部＞（東から）



(3) B 地区 S D22西壁土層断面
＜南部＞（東から）





(1) B 地区 S D22土層断面
＜断面 1 南部＞（西から）



(2) B 地区 S D22土層断面
＜断面 1 南部肩部＞（西から）



(3) B 地区 S D22土層断面
＜断面 1 南部下層＞（西から）



(1) B 地区 S D 22 4 区古墳時代中期溝検出状況(東から)



(2) B 地区 S D 22 土層断面<断面 3 (古墳時代中期)>(南東から)



(1) B 地区 S D22 土層断面＜断面 3 (古墳時代中期)＞(東から)



(2) B 地区 S D22 土層断面＜断面 3 須恵器出土状況＞(東から)



(1) B 地区 S D22 土層断面<断面 3 南部>(北東から)



(2) B 地区 S D22 4 区下層検出状況(東から)



(1) B 地区 S D22土層断面＜断面 3 中央下層(古墳時代前期)＞(東から)



(2) B 地区 S D22土層断面＜断面 3 中央下層(古墳時代前期層位不整合面)＞(東から)

(1) B 地区 S D22 土層断面＜断面
1 南部断ち割り遺物出土状況＞
(西から)



(2) B 地区 S D22 土器溜まり S X23
東部土器出土状況(東から)



(3) B 地区 S D22 土器溜まり S X23
東部土器出土状況(西から)





(1) B 地区 S D22 土器溜まり S X23
出土状況(西から)



(2) B 地区 S D22 土器溜まり S X23
出土状況(上が南)



(3) B 地区 S D22 土器溜まり S X24
出土状況(北から)

(1) B 地区 S D 22 土器溜まり S X 25
出土状況(東から)



(2) B 地区 S D 22 土器溜まり S X 29
出土状況(東から)



(3) B 地区 S D 22 下層土器出土状況
(南から)





(1) B 地区 S D22土器溜まり S X51検出状況(北東から)



(2) B 地区 S D22土器溜まり S X51検出状況(南東から)



(1) B 地区 S D22 土器溜まり S X51 検出状況 (北西から)



(2) B 地区 S D22 土器溜まり S X51 土器出土状況 (北西から)



(1) B 地区 S D22 土器溜まり S X51
検出状況(北西から)

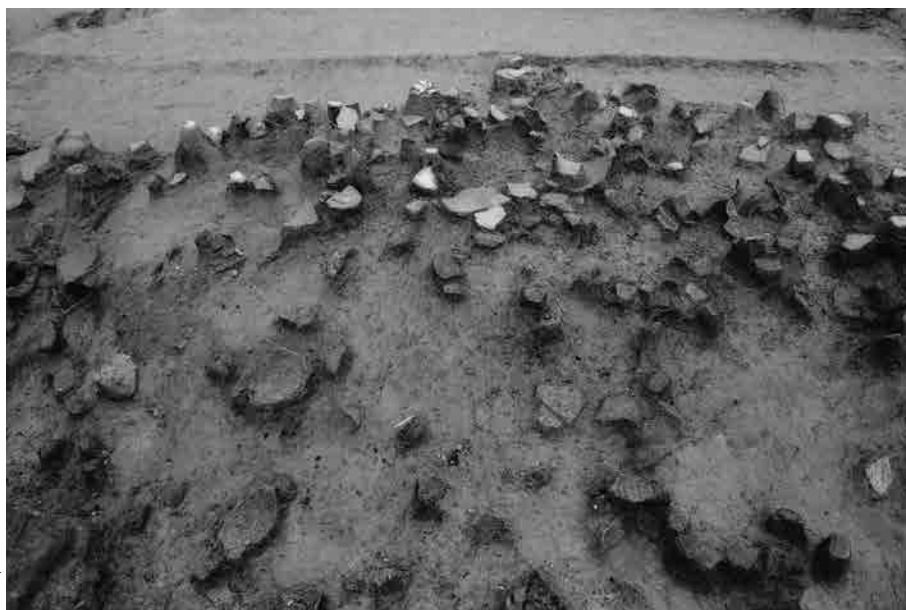


(2) B 地区 S D22 土器溜まり S X51
土器出土状況(北西から)



(3) B 地区 S D22 土器溜まり S X51
土器出土状況(南から)

(1) B 地区 S D22 土器溜まり S X51
上層土器出土状況(北から)

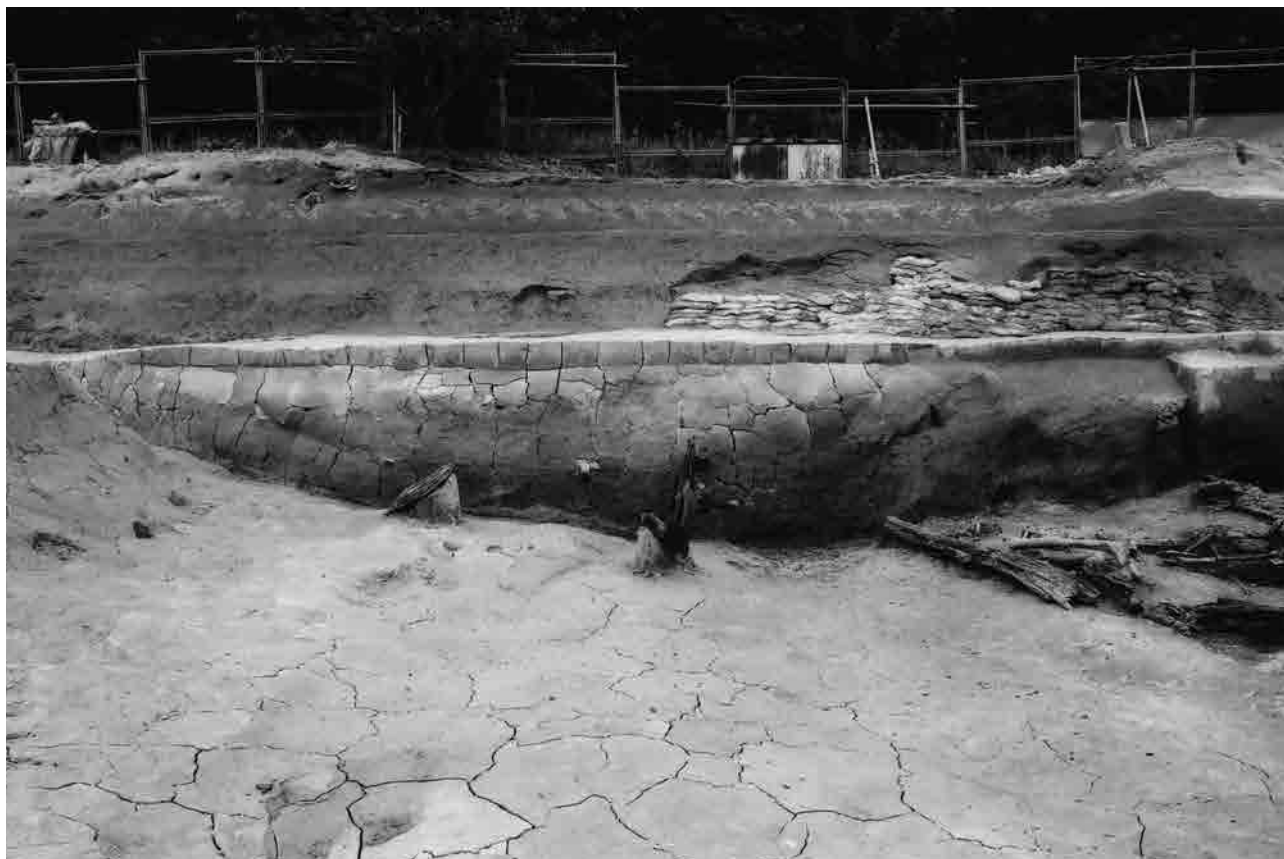


(2) B 地区 S D22 土器溜まり S X51
上層土器出土状況(南から)



(3) B 地区 S D22 土器溜まり S X51
下層土器出土状況(北から)





(1) B 地区 S D22 東壁断面(西から)



(2) B 地区 S D22 東壁中央断面<水制遺構 S W61 杭検出状況> (西から)



(1) B 地区 S D 22 4 区下層検出状況(西から)



(2) B 地区 S D 22 4 区下層検出状況(東から)



(1) B 地区 S D22水制遺構 S W61検出状況(南から)



(2) B 地区 S D22水制遺構 S W61検出状況(北西から)

(1) B 地区 S D22水制遺構 S W61
東壁杭検出状況(西から)



(2) B 地区 S D22水制遺構 S W61
東壁断ち割り(南西から)



(3) B 地区 S D22東部検出状況
(西から)





(1) B 地区 S D22 1 区下層検出状況(東から)



(2) B 地区 S D22 1 区下層検出状況(西から)



(1) B 地区 S D22 1 区護岸材 A・D 検出状況(北西から)



(2) B 地区 S D22土層断面<断面 1 北部>(西から)



(1) B 地区 S D22 土層断面＜断面 2＞(北西から)



(2) B 地区 S D22 2 区下層検出状況(北西から)



(1) B 地区 S D 22 中央南部検出状況
(北東から)



(2) B 地区 S D 22 土層断面
＜断面 2 中央＞(東から)



(3) B 地区 S D 22 土層断面
＜断面 2 (土層サンプリング)＞
(南東から)



(1) B 地区 S D22 水制遺構 S W69
検出状況(東から)



(2) B 地区 S D22 1 区中央下層
検出状況(西から)



(3) B 地区 S D22 水制遺構 S W55
検出状況(西から)



(1) B 地区 S D22水制遺構 S W55検出状況(東から)



(2) B 地区 S D22大形護岸材 B 検出状況(東から)



(1) B 地区 S D22 3 区下層遺物
出土状況(北東から)



(2) B 地区 S D22 3 区下層遺物
出土状況(東から)



(3) B 地区 S D22 3 区下層遺物
出土状況(北から)

(1) B 地区 S D22 1 区下層遺物
出土状況(西から)



(2) B 地区 S D22 1 区下層土器
(壺)出土状況(上が西)



(3) B 地区 S D22 2 区下層土器
(甕)出土状況(上が西)





(1) B地区S D22 3区下層土器
(甕)出土状況(上が南)



(2) B地区S D22 3区下層土器
(甕)出土状況(北から)



(3) B地区S D22 4区下層土器
(壺)出土状況(北東から)

(1) B 地区 S D22 3 区下層
＜Ⅵ層＞遺物(壺)出土状況
(北から)



(2) B 地区 S D22 1 区下層遺物
(甕)出土状況(東から)



(3) B 地区 S D22 2 区下層遺物
(壺)出土状況(北から)





(1) B地区S D22 4区下層<Ⅵ層
下層>土器出土状況(北西から)



(2) B地区S D22 4区下層<Ⅵ層
下層>遺物(甕)出土状況
(北東から)



(3) B地区S D22 4区下層<Ⅵ層
下層>遺物(甕)出土状況
(北西から)

(1) S D22 S X51木製品(泥除け・舟形木製品)出土状況(南から)



(2) S D22 S X51木製品(泥除け)出土状況(南から)

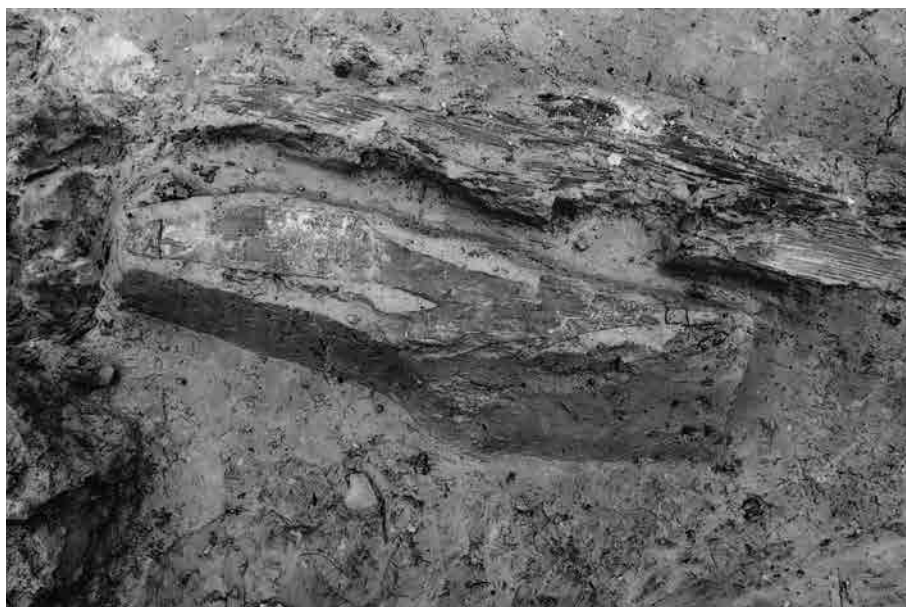


(3) S D22 S X51木製品(舟形木製品)出土状況(南から)





(1) S D22 S X51木製品
(曲柄又鍬身)出土状況(北から)



(2) S D22下層木製品
(曲柄又鍬身)出土状況(南から)



(3) S D22下層木製品
(泥除け)出土状況(北から)

(1) S D22下層木製品(櫓)出土状況
(北から)



(2) S D22下層木製品(盤)出土状況
(北東から)



(3) S D22下層木製品(盤)出土状況
(北から)





(1) S D22下層木製品(槽)出土状況
(北から)



(2) S D22下層木製品(槽)出土状況
(南から)



(3) S D22下層木製品(椅子脚部)
出土状況(西から)

(1) S D22下層木製品(建築部材)
出土状況(西から)



(2) S D22下層木製品(壁材)
出土状況(北から)



(3) S D22下層木製品(梯子)
出土状況(南から)





(1) S D 22下層木製品(板材)
出土状況(北から)



(2) S D 22下層木製品(不明木製品)
出土状況(北から)



(3) S D 22下層木製品(不明木製品)
出土状況(南から)

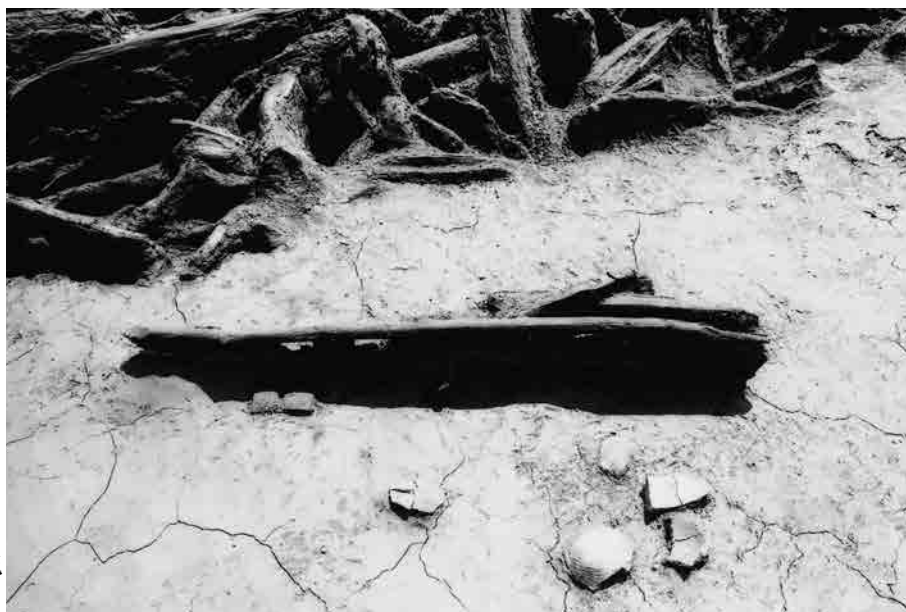
(1) S D22下層木製品(杭)出土状況
(南西から)



(2) S D22下層木製品(杭)出土状況
(東から)

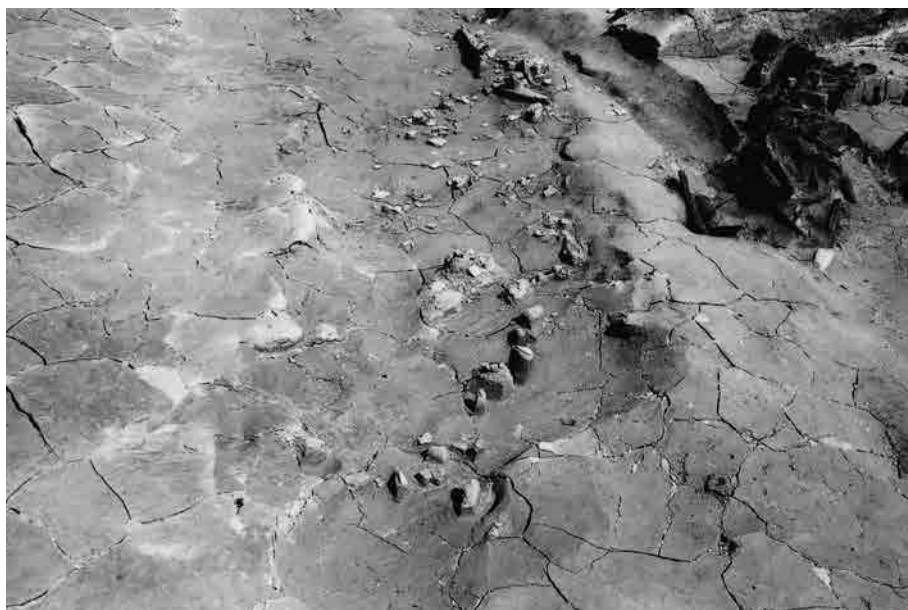


(3) S D22下層木製品(杭)出土状況
(北から)





(1) B 地区 S D22 土坑状落ち込み
S X68 検出状況 (西から)



(2) B 地区 S D22 溝状落ち込み
S X74 検出状況 (東から)



(3) B 地区 S D22 土層断面<断面 3
古墳時代最下層> (東から)

(1) B 地区 S D 22 土層断面
＜断面 3 南部肩部＞（西から）



(2) B 地区 S D 22 土層断面
＜断面 3 北部肩部立ち上がり＞
（西から）



(3) B 地区 S D 22 掘削作業（西から）





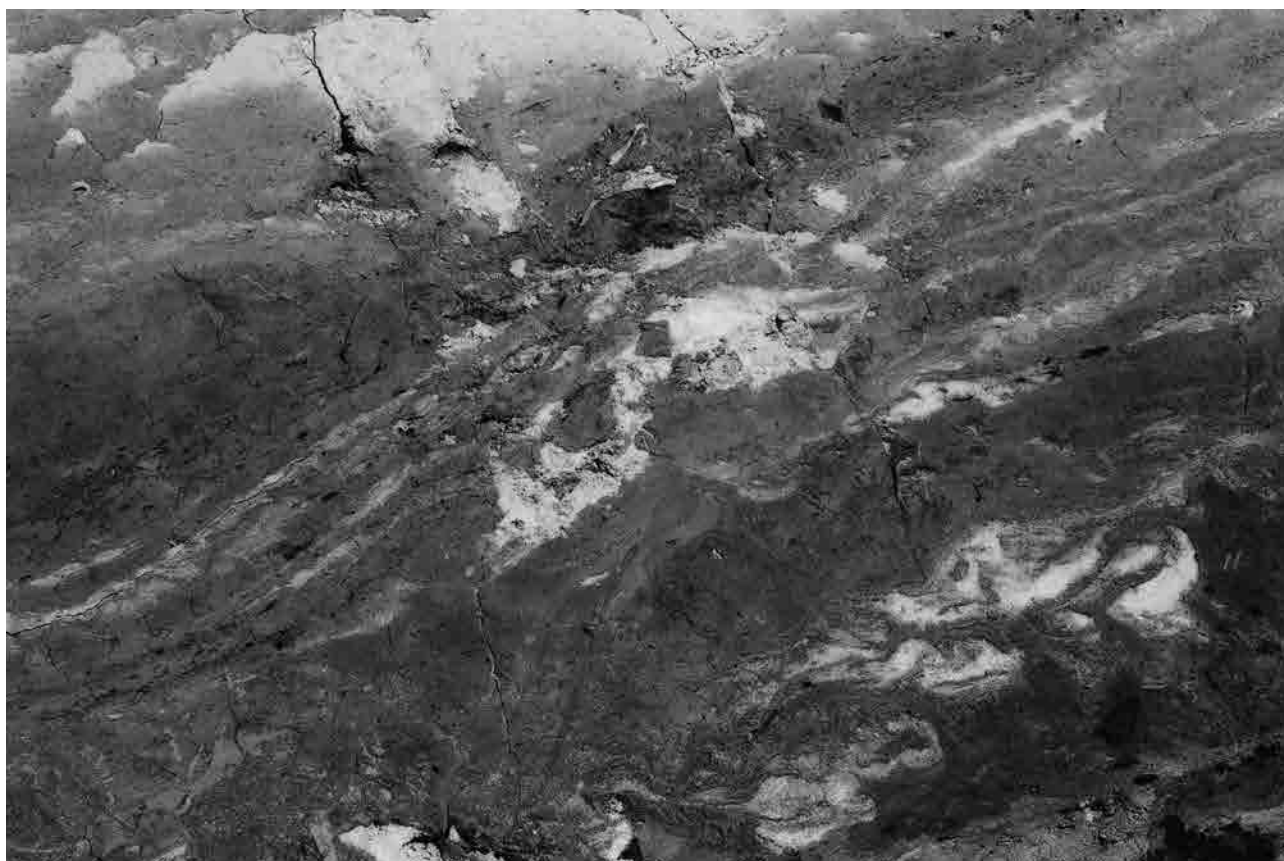
(1) B 地区 S D22 土層断面＜断面 3 南部・S X52 検出状況＞（西から）



(2) B 地区 S D22 土層断面＜断面 3 南部＞（西から）



(1) B 地区 S D22 土層断面＜断面 3 南部・氾濫流路＞(西から)



(2) B 地区 S D22 土層断面＜断面 3 南部氾濫流路堆積層＞(西から)



(1) B 地区 S D22 全景 (東から)



(2) B 地区 S D22 土層 < 断面 3 > (東から)



(1) B 地区 S D22 土層断面＜断面 1＞（西から）



(2) B 地区 S D22 土層断面＜断面 1 北部＞（西から）



(1) B 地区 S D22 全景 (西から)



(2) B 地区 S D22 全景 (西から)



(1) B 地区 S D22 1 区下層検出状況(東から)



(2) B 地区 S D22 1・2 区下層検出状況(南東から)



(1) B 地区 S D 22 1 区下層検出状況(南から)



(2) B 地区 S D 22 2 区下層検出状況(南から)



(1) B 地区 S D22大形護岸材 A・D 検出状況(北から)



(2) B 地区 S D22大形護岸材 B・C 検出状況(北から)



(1) B 地区 S D22 2 区中央部下層検出状況(西から)



(2) B 地区 S D22 2 区南部大型護岸材 C・D 検出状況(東から)



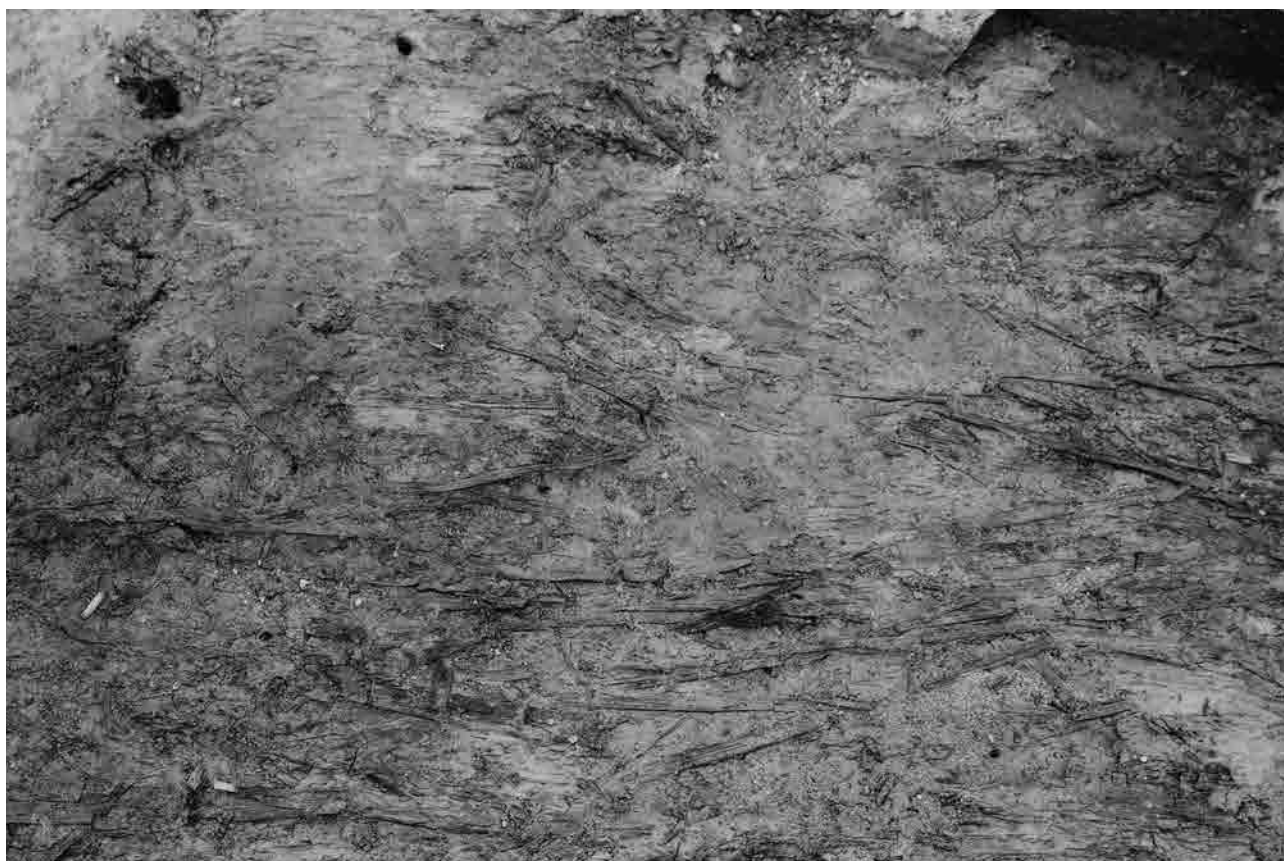
(1) B 地区 S D22 S W64 検出状況 (北から)



(2) B 地区 S D22 S W64 杭検出状況 (北から)



(1) B 地区 S D22 盛土遺構 S W62 北部基盤面上草木(上が北)



(2) B 地区 S D22 盛土遺構 S W62 北部基盤面上草木繊維(上が北)



(1) B 地区 S D22 下層東部・断面 3 検出状況(西から)



(2) B 地区 S D22 下層東部検出状況(西から)



(1) B 地区 S D22盛土遺構 S W62検出状況(北西から)



(2) B 地区 S D22盛土遺構 S W62東部断ち割り(北西から)



(1) B 地区 S D22 盛土遺構 S W62 検出状況 (北から)



(2) B 地区 S D22 盛土遺構 S W62 中央部検出状況 (北東から)



(1) B 地区 S D22 盛土遺構 S W62
東部検出状況(北から)



(2) B 地区 S D22 盛土遺構 S W62
中央部検出状況(北東から)



(3) B 地区 S D22 盛土遺構 S W62
検出状況(東から)

(1) B 地区 S D22 盛土遺構 S W62
粗朶下層(南から)



(2) B 地区 S D22 盛土遺構 S W62
斧柄出土状況(北から)



(3) B 地区 S D22 盛土遺構 S W62
斧柄出土状況(上が南)





(1) B 地区 S D22 盛土遺構 S W62 中央断ち割り (南西から)



(2) B 地区 S D22 盛土遺構 S X62 盛土下層断面 (西から)



(1) B 地区 S D22 盛土遺構 S W62 盛土下層中央北部基底断面(西から)



(2) B 地区 S D22 盛土遺構 S W62 盛土下層中央部基底断面(西から)



(1) B 地区 S D22 2 区下層
サルノコシカケ出土状況
(南東から)



(2) B 地区 S D22 盛土遺構 S W62
西部基底敷葉層(北から)



(3) B 地区 S D22 2 区下層
サルノコシカケ出土状況
(南東から)



(1) B 地区 S D22 4 区下層・大形護岸材 E 検出状況(北東から)



(2) B 地区 S D22断面 3 南部(北東から)



(1) B 地区 S D22断面 3 南部(南東から)



(2) B 地区 S D22断面 3・大形護岸材 E 検出状況(東から)



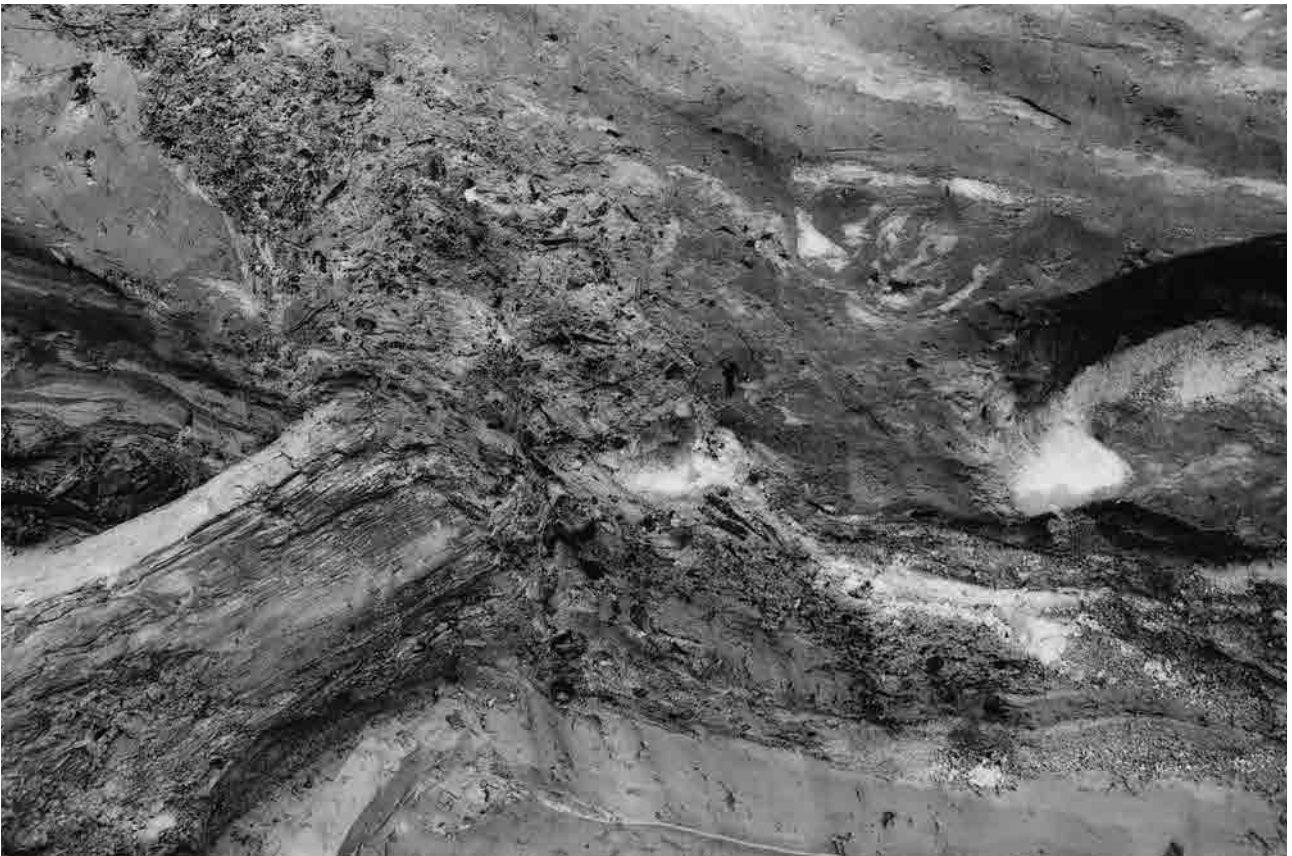
(1) B 地区 S D22断面 3・大形護岸材 E 南部断ち割り(東から)



(2) B 地区 S D22断面 3・大形護岸材 E 北部断ち割り(東から)



(1) B 地区 S D22断面 3・大形護岸材 E 直上砂層種子出土状況(東から)



(2) B 地区 S D22断面 3・大形護岸材 E 検出状況(北東から)

(1) B 地区 S D22 土層断面
＜断面 2 南部盛土層検出状況＞
（東から）



(2) B 地区 S D22 土層断面
＜断面 3 盛土層検出状況＞
（北東から）



(3) B 地区 S D22 大形護岸材 E
検出状況（東から）

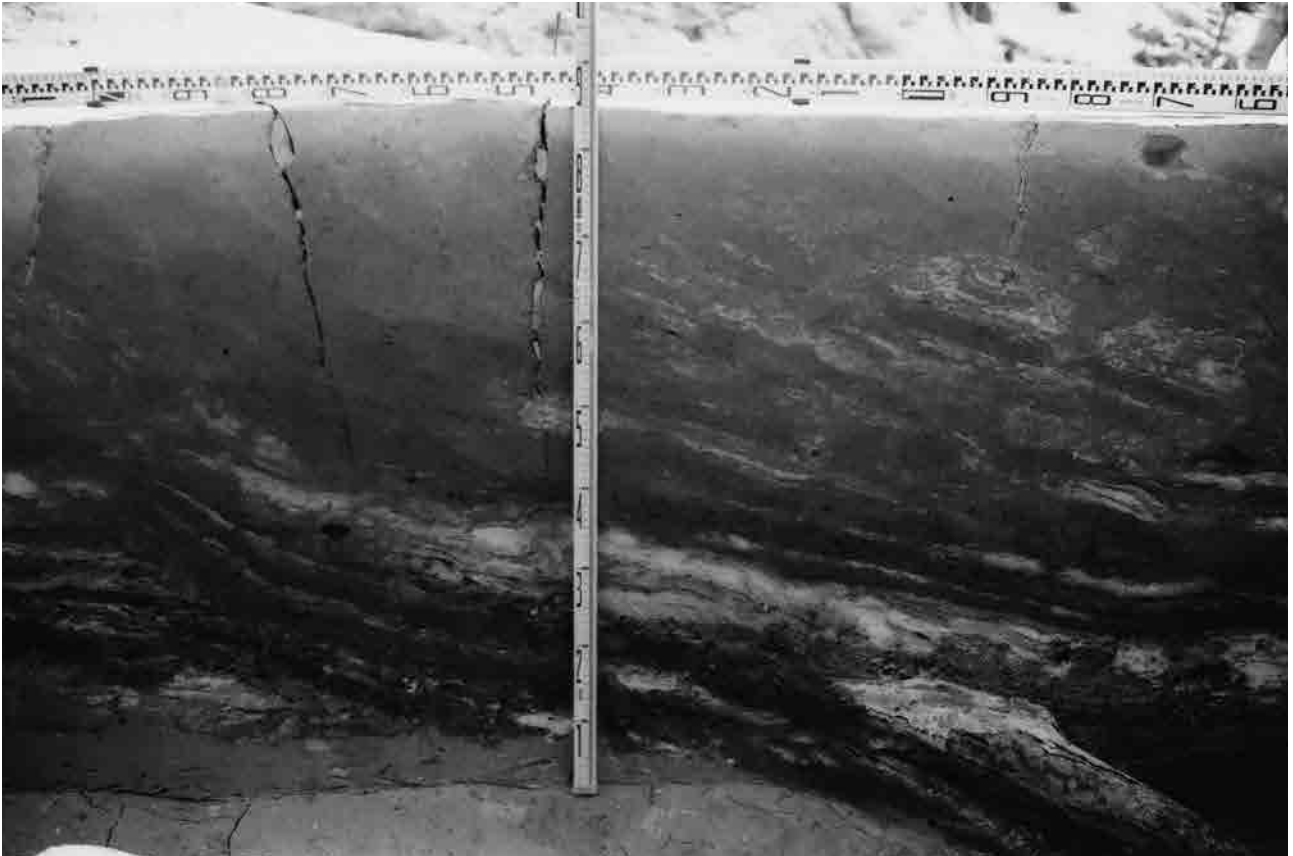




(1) B 地区 S D22 土層断面＜断面 3 南部＞（北東から）



(2) B 地区 S D22 土層断面＜断面 3 南部中央部＞（東から）



(1) B 地区 S D22 土層断面＜断面 3 南部 氾濫流路層位①＞(東から)



(2) B 地区 S D22 土層断面＜断面 3 南部 氾濫流路層位②＞(東から)



(1) B 地区 S D22 土層断面＜断面 3 南部 氾濫流路層位③＞(東から)



(2) B 地区 S D22 土層断面＜断面 3 南肩部＞(東から)



(1) B 地区 S D22 4 区南東部盛土遺構 S W75(南西から)



(2) B 地区 S D22 4 区南東部盛土遺構 S W75土層断面(西から)



(1) B 地区 S D 22 大形護岸材 E 検出状況 (北から)



(2) B 地区 S D 22 大形護岸材 E 検出状況 (東から)

(1) B 地区 S D 22 大形護岸材 E
基部検出状況(西から)



(2) B 地区 S D 22 大形護岸材 E
中央部検出状況(西から)



(3) B 地区 S D 22 大形護岸材 E
梢部検出状況(東から)





(1) B 地区 S D 22 大形護岸材 E
加工痕 (北東から)



(2) B 地区 S D 22 大形護岸材 E 基部
酸素同位体・年輪年代サンプル
位置 (北東から)



(3) B 地区 S D 22 大形護岸材 E 基部
酸素同位体・年輪年代サンプル
位置 (北から)



(1) B 地区 S D22完掘状況(西から)



(2) B 地区 S D22完掘状況(東から)



(1) B 地区 S D22 盛土遺構 S W62
中央上層粗朶 (構築材)



(2) B 地区 S D22 盛土遺構 S W62
東部上層粗朶 (構築材)



(3) B 地区 S D22 盛土遺構 S W62
中央粗朶 (構築材)



(1) B 地区 S D22 護岸材引き上げ作業(南東から)



(2) B 地区 S D22 大形護岸材



(1) B 地区 S D 22 大形護岸材 (奥から F・E・D・B・A、右中央 C)



(2) B 地区 S D 22 掘削作業 (北東から)



(3) B 地区 S D 22 掘削作業 (西から)

(1) B 地区 S D22 掘削作業
(北西から)

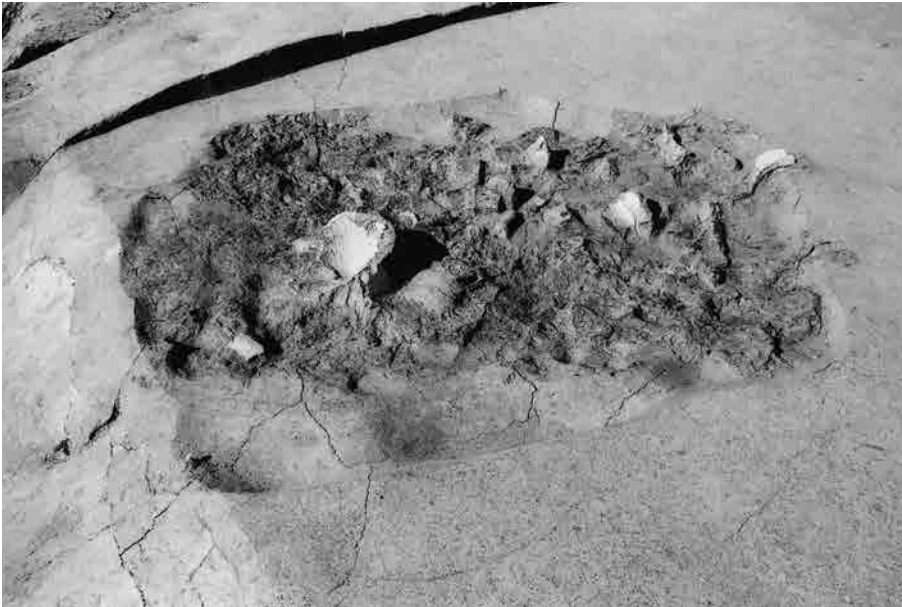


(2) B 地区 S D22 掘削作業
(南東から)



(3) B 地区 S D22 中央部掘削作業
(南東から)





(1) B 地区土坑 S K 42 検出状況
(東から)



(2) B 地区土坑 S K 42 土層断面
(北西から)

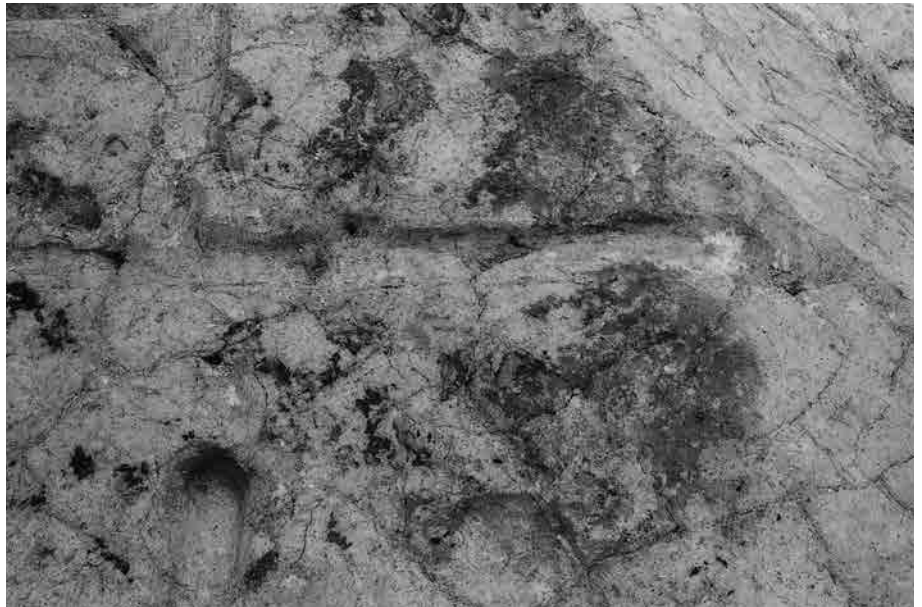


(3) B 地区土坑 S K 42 土層断面
(南東から)

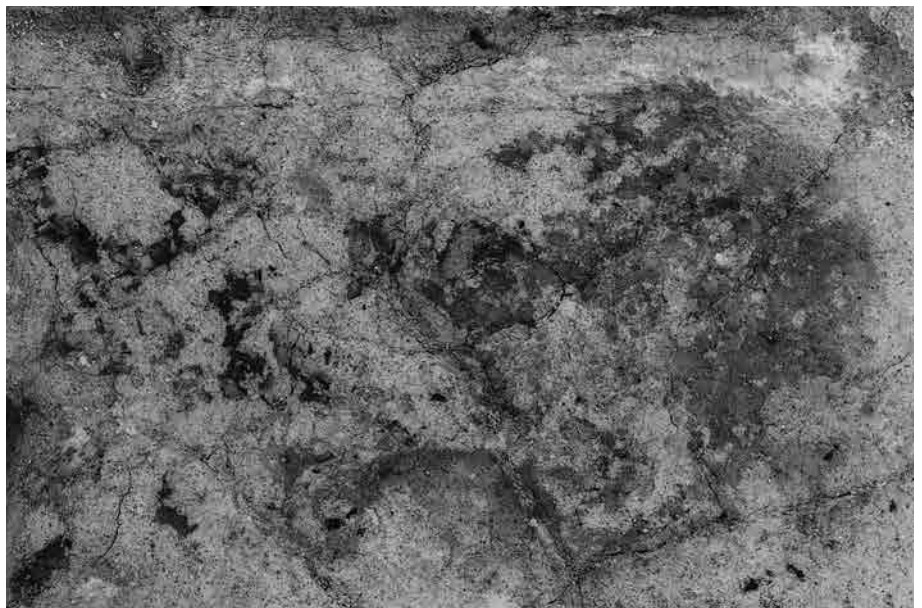
(1) B 地区土坑 S K 42(南東から)



(2) B 地区土坑 S K 42床面焼土
(南東から)



(3) B 地区土坑 S K 42床面炭化物
検出状況(上が西)





(1) B 地区 S D78(南東から)



(2) B 地区 S D78土層断面
(南東から)



(3) B 地区 S D78完掘状況
(北西から)



(1) C 1 区全景(南東から)



(2) C 1 区島畑36全景(南から)



(3) C 1 区島畑36・溝状遺構 S D02
全景(南西から)



(1) C 2区全景(西から)



(2) C 2区全景(南西から)



(3) C 2区土坑 S K06遺物出土状況
(南から)



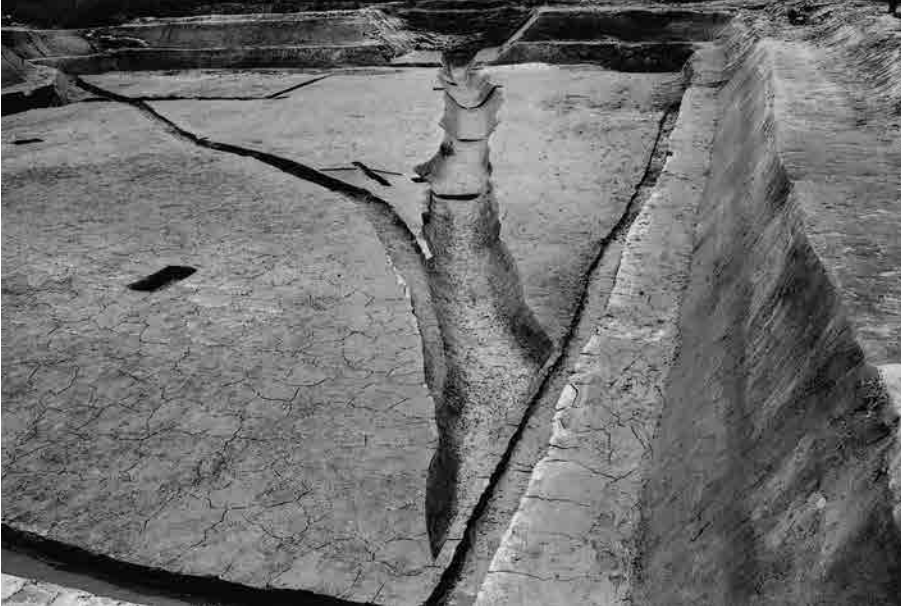
(1) C 3 区中層遺構面全景(北から)



(2) C 3 区溝 S D05 検出状況
(南東から)



(3) C 3 区溝 S D31 遺物出土状況
(南から)



(1) C 3 区溝 S D31 全景 (北西から)



(2) C 3 区溝 S D31 全景 (南東から)



(3) C 3 区溝 S D30 全景 (南東から)



(1) C 3 区溝 S D31d-d'土層断面
(南東から)



(2) C 3 区溝 S D31c-c'土層断面
(南東から)



(3) C 3 区溝 S D30f-f'土層断面
(南東から)



(1) C 2・3 区下層遺構面全景(上が南)



(2) C 2・3 区下層遺構面全景(北から)





43



52



44



56



45



53



49



51



37



67



38



68



365

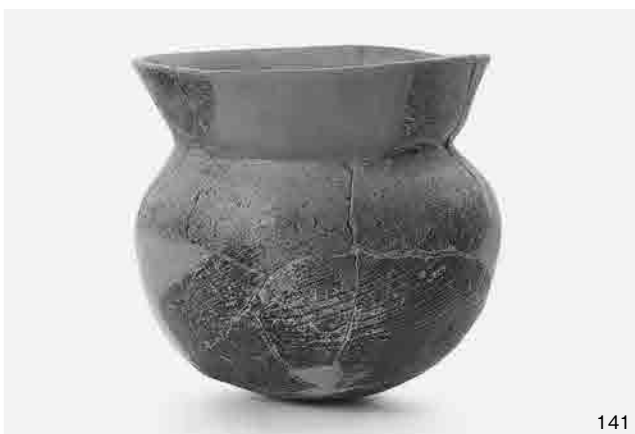


74





114



141



129



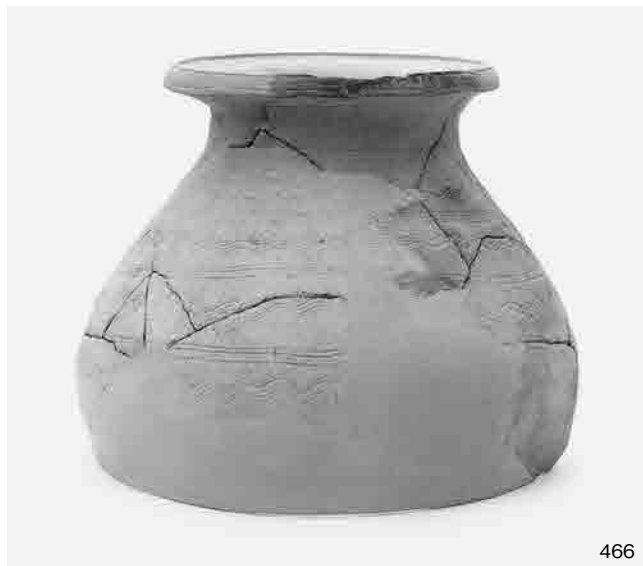
142



130



175



466



193



242



301



261



301



439



259



57



314



198



340



314



370



403



253



411



415



412



416



425



436



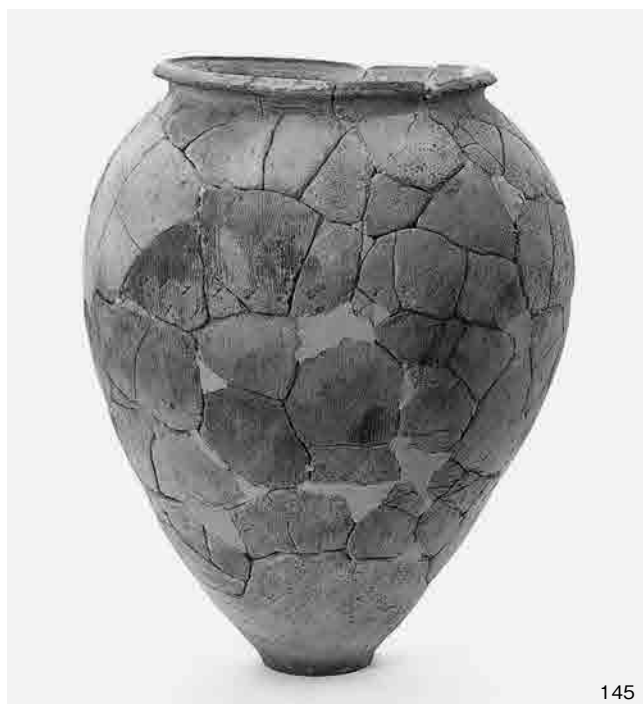
429



465



431



145



469



259



68



31



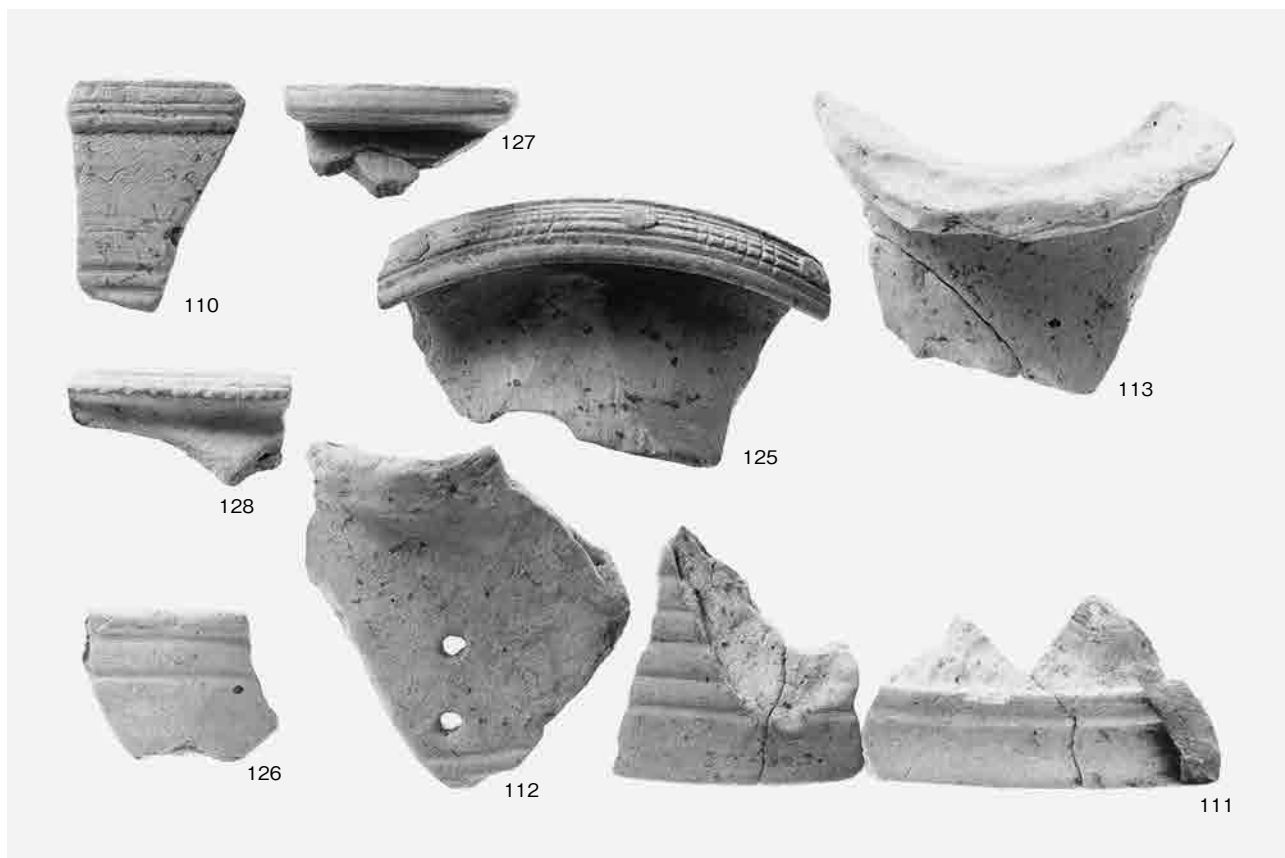
67



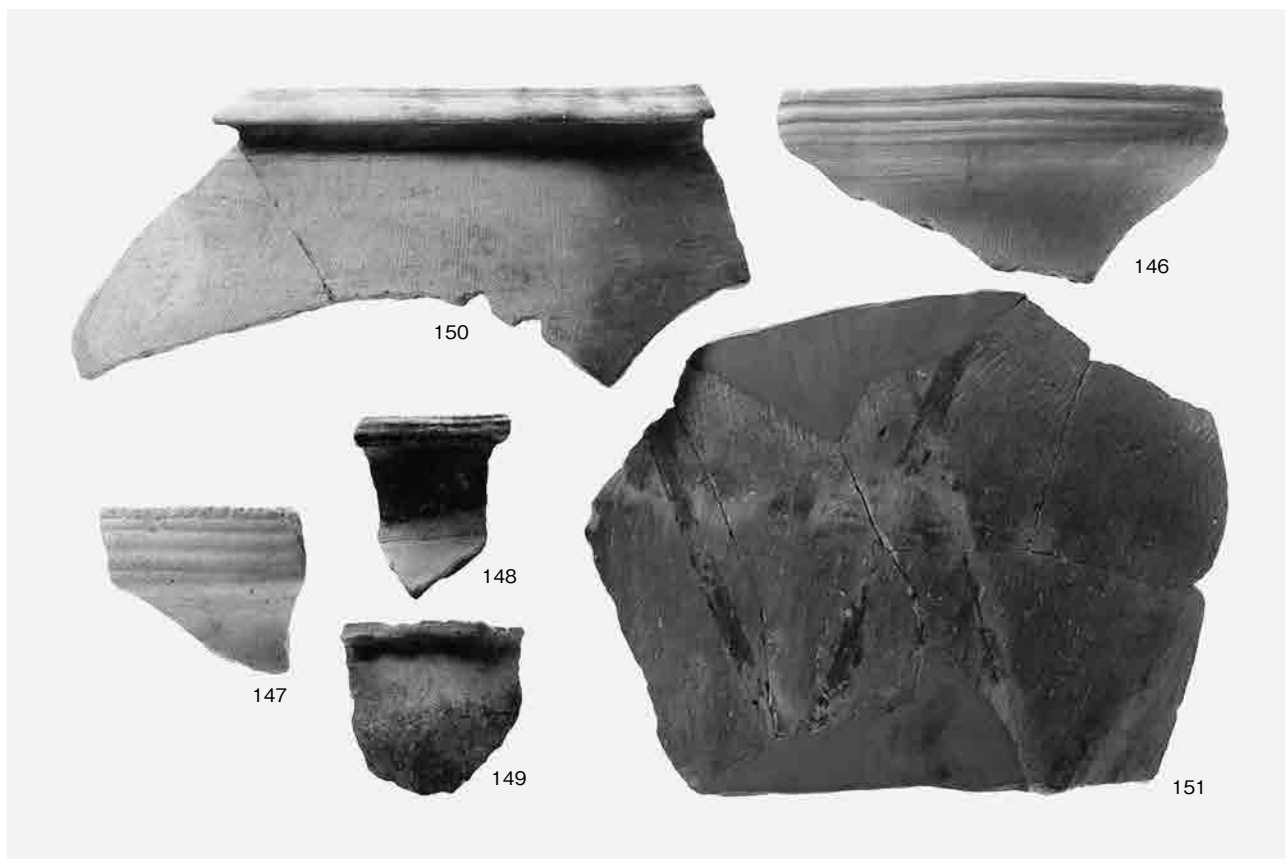
35



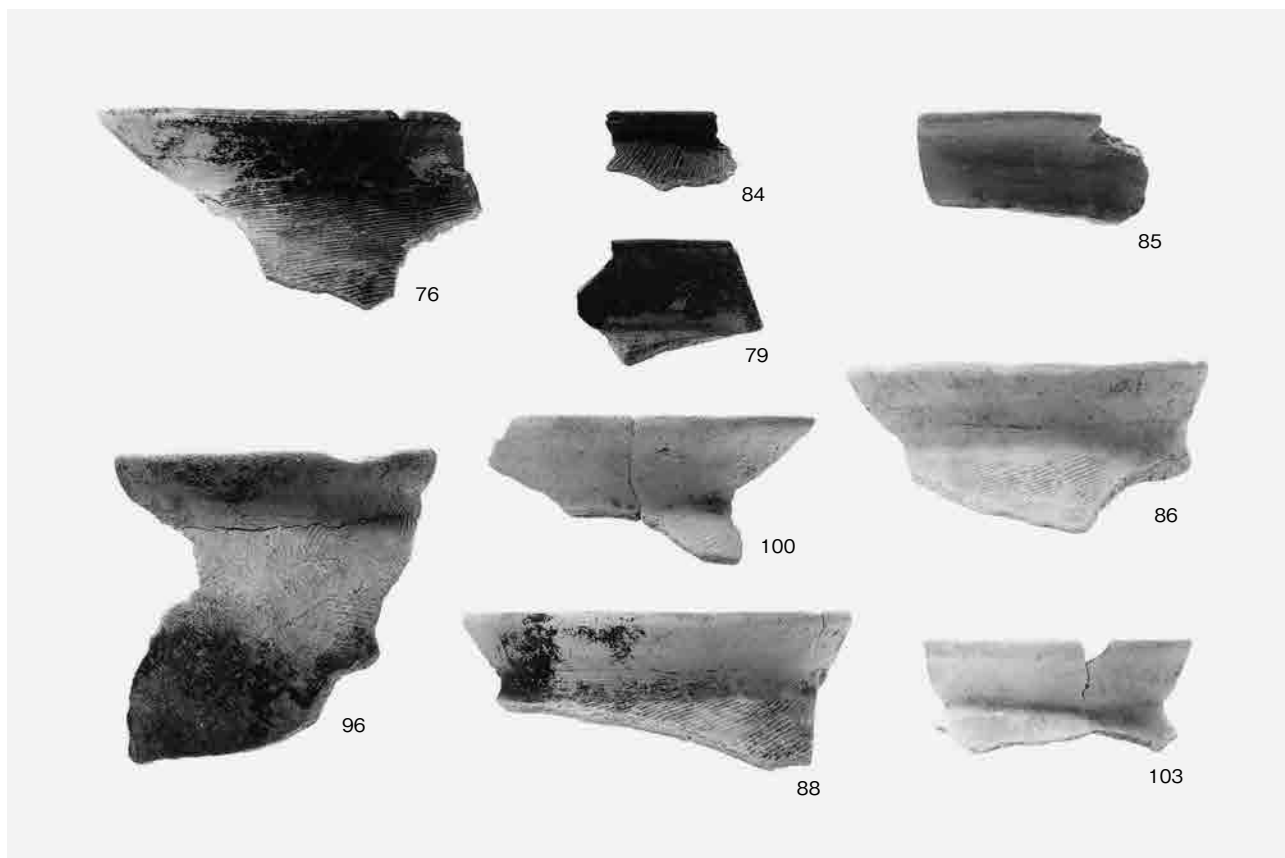
66



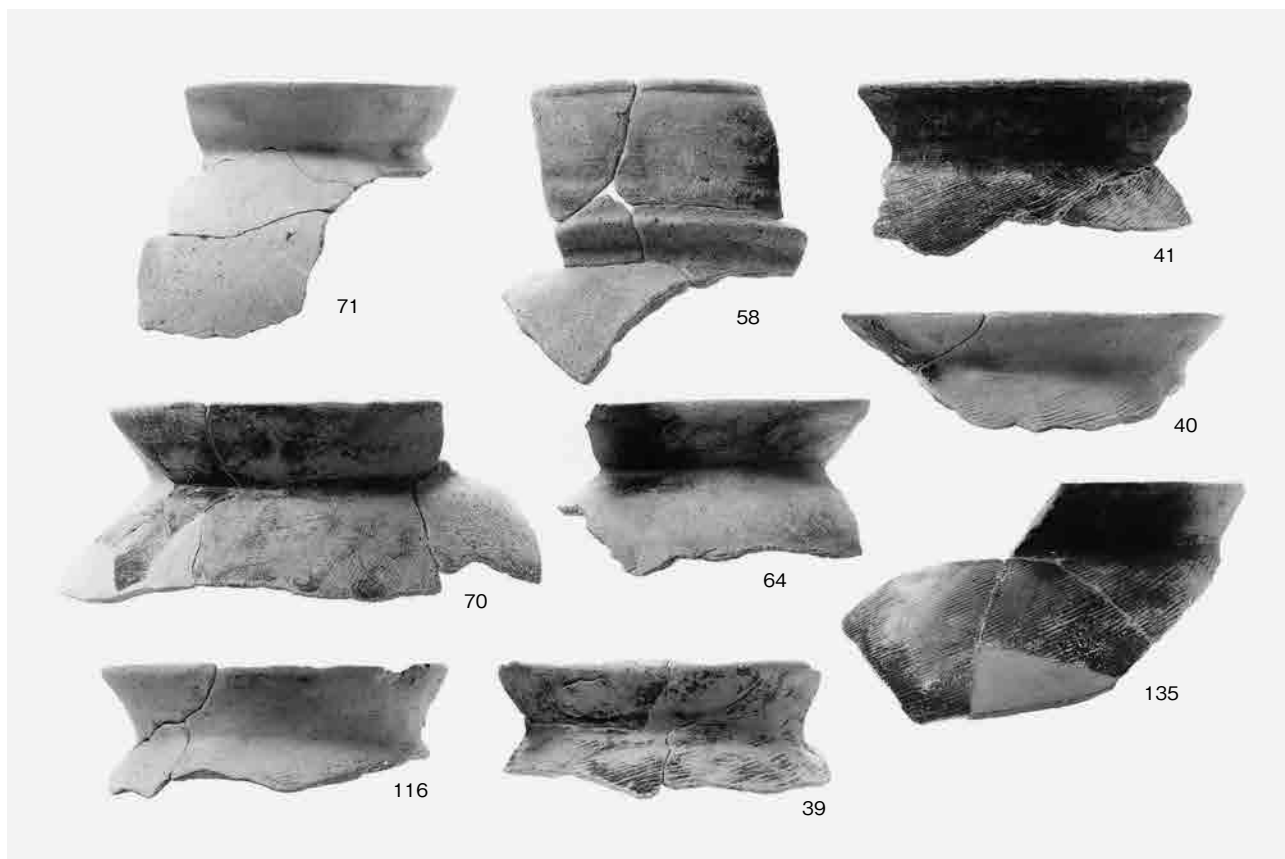
(1) 出土土器10



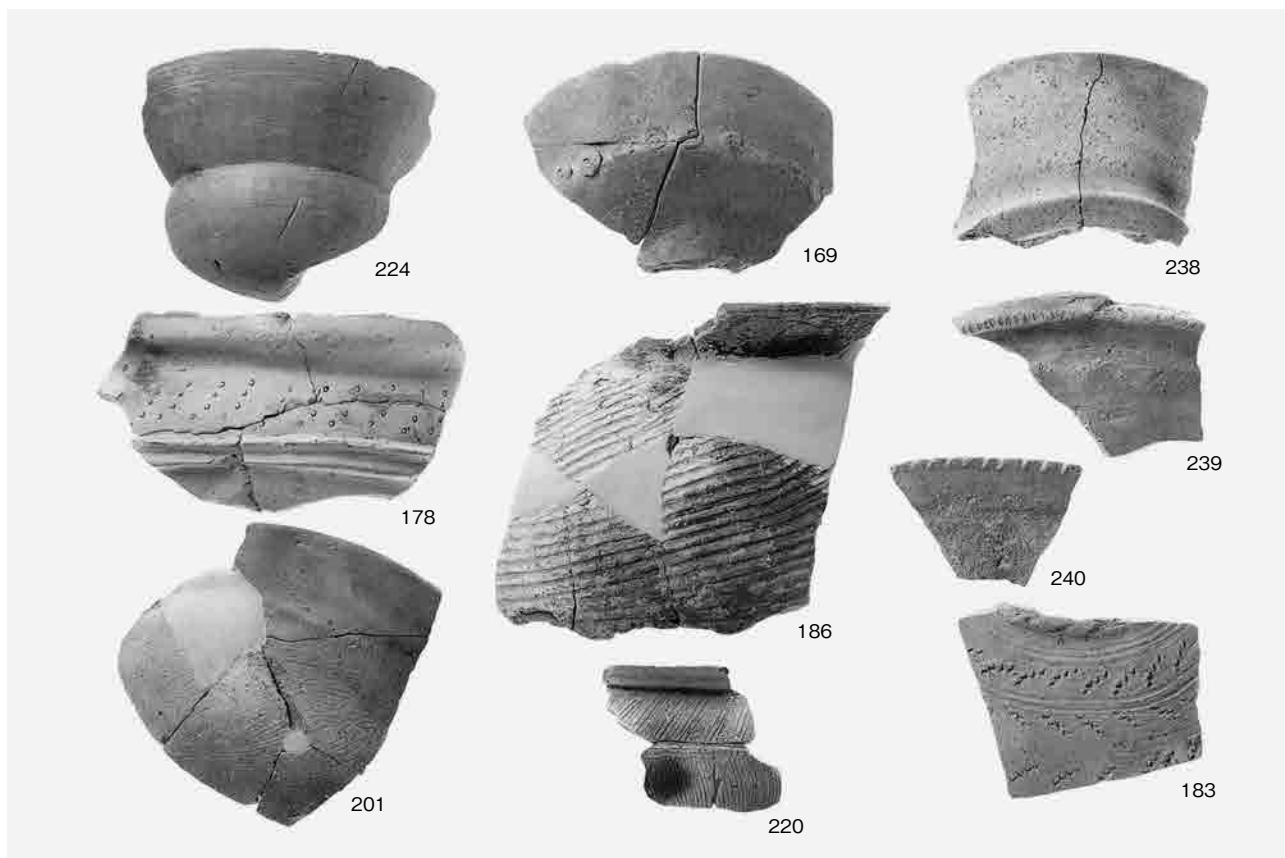
(2) 出土土器11



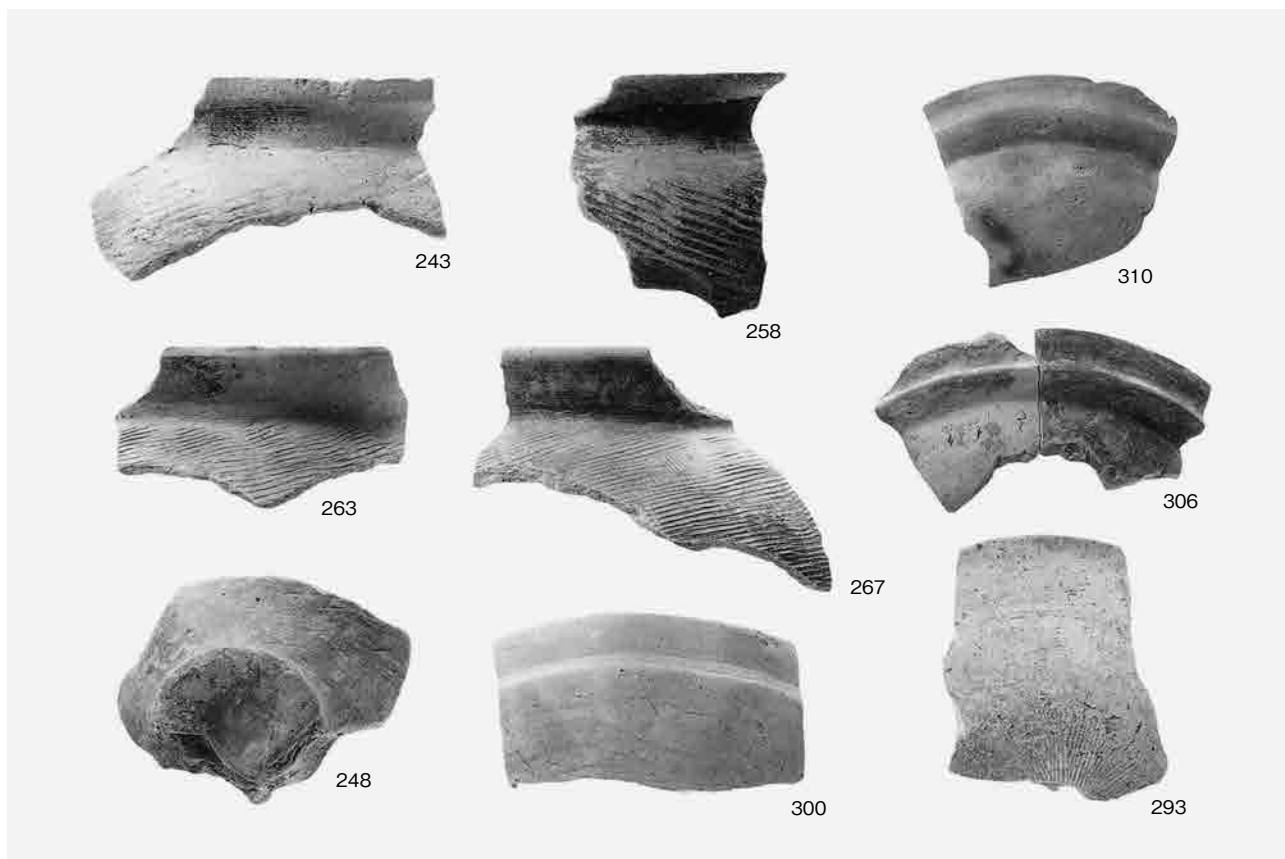
(1) 出土土器12



(2) 出土土器13



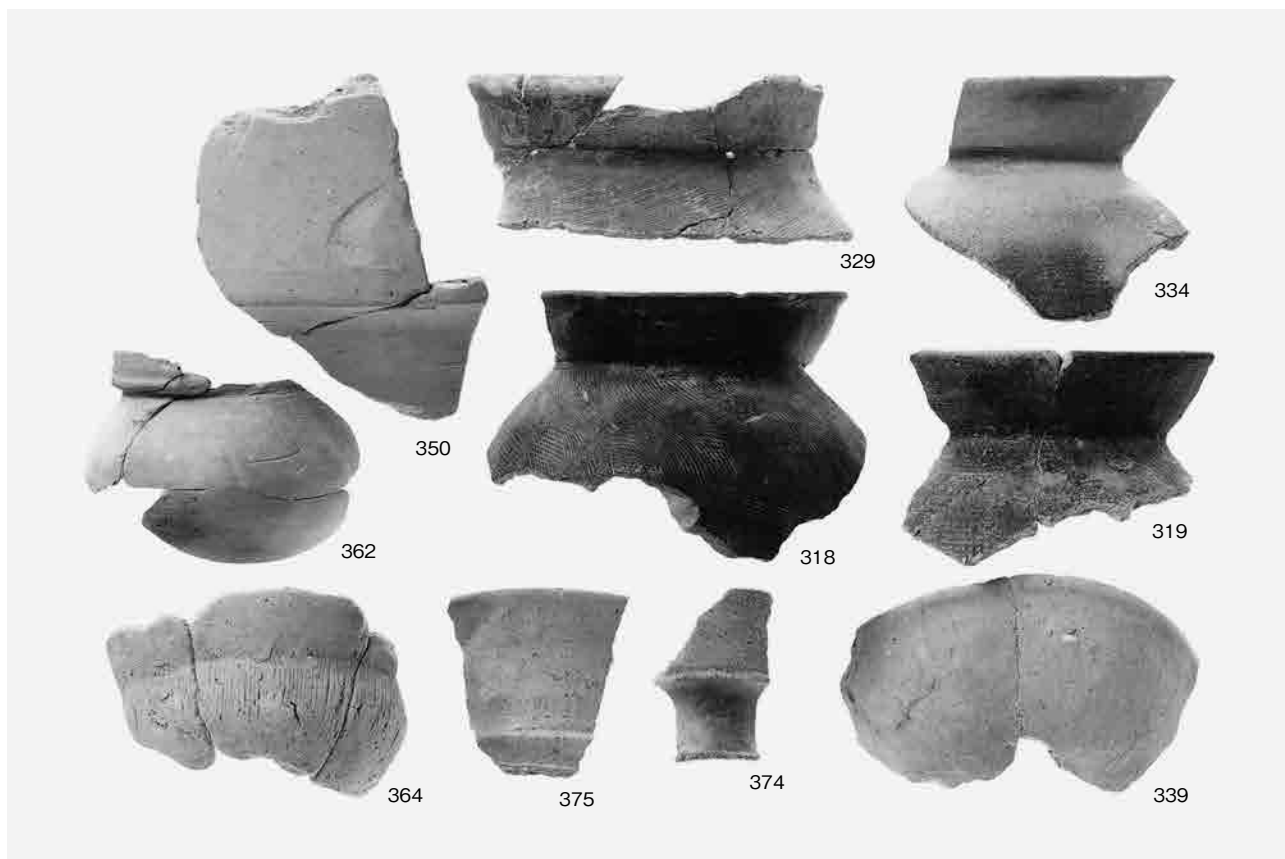
(1) 出土土器14



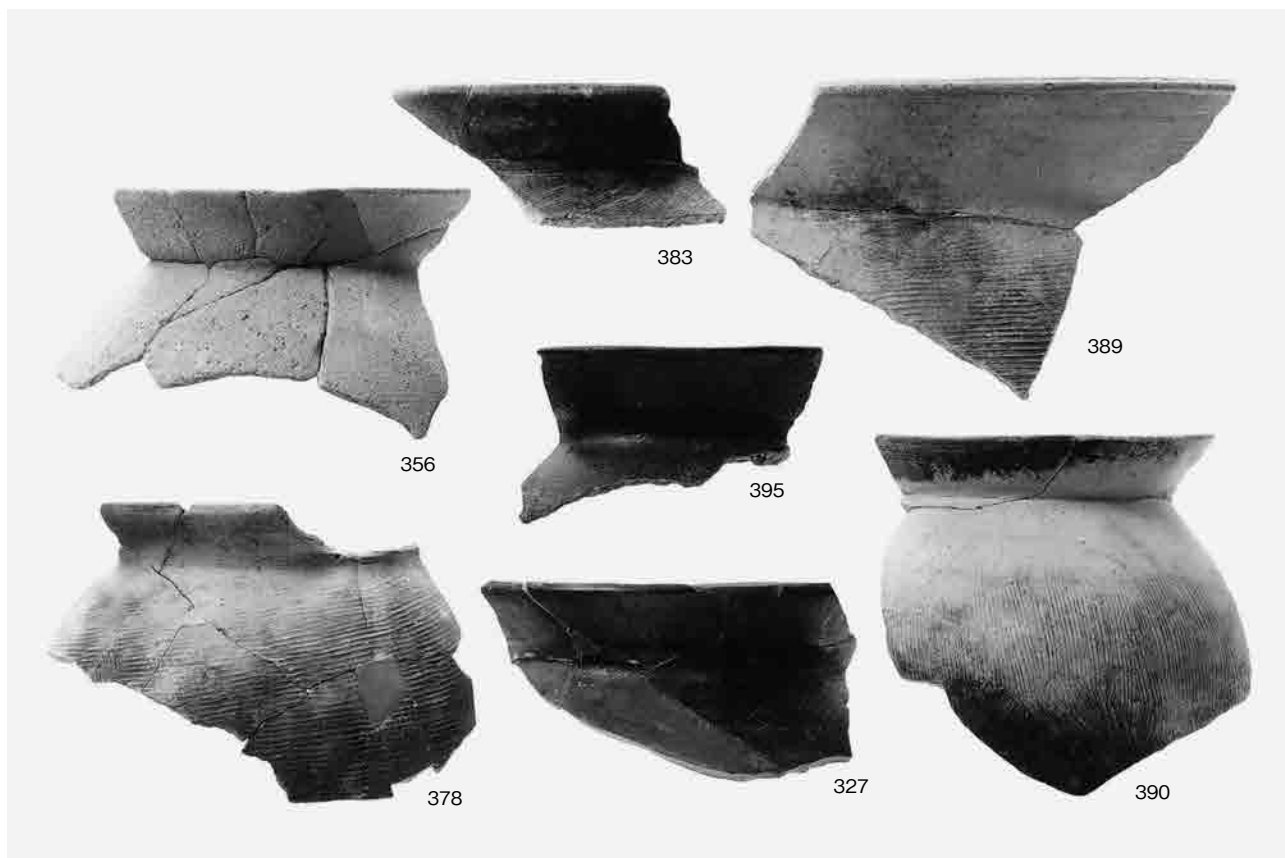
(2) 出土土器15



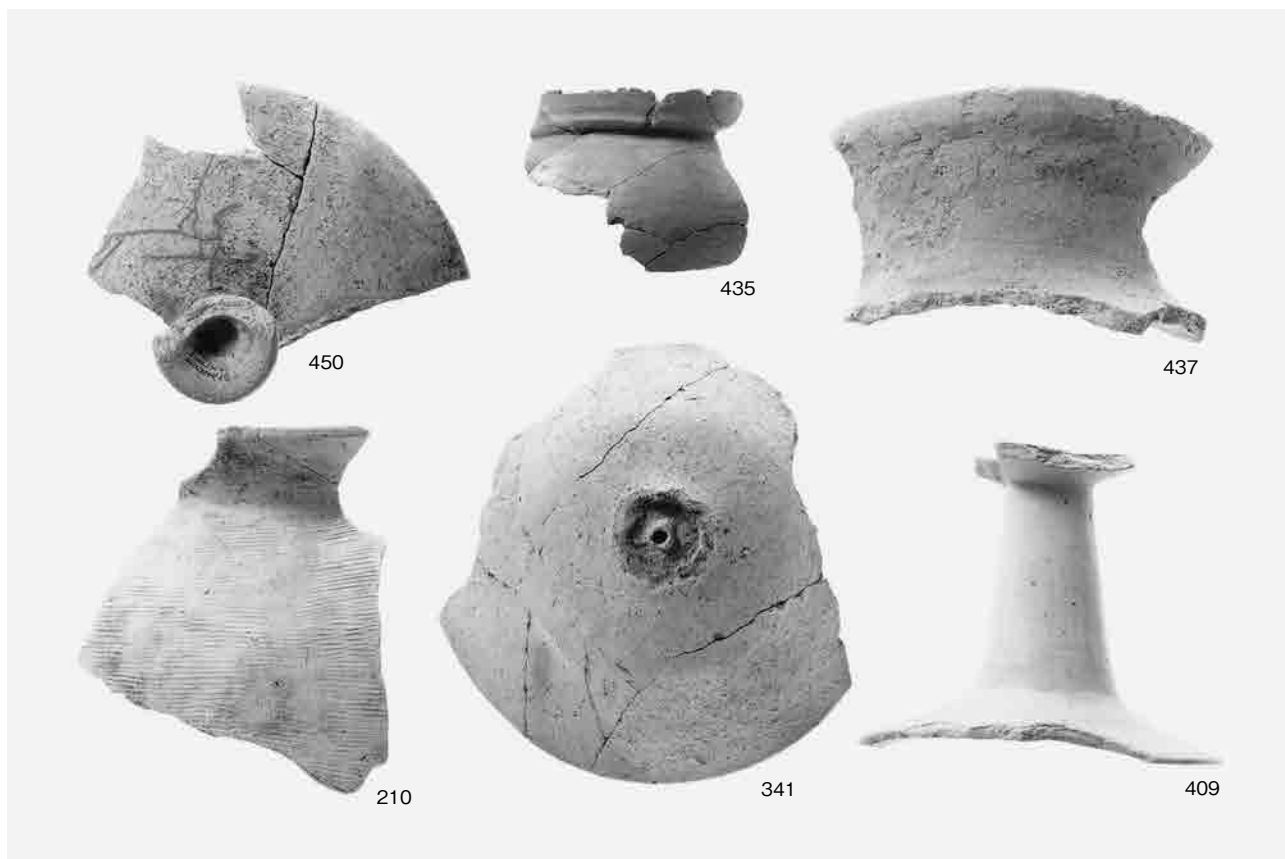
(1) 出土土器16



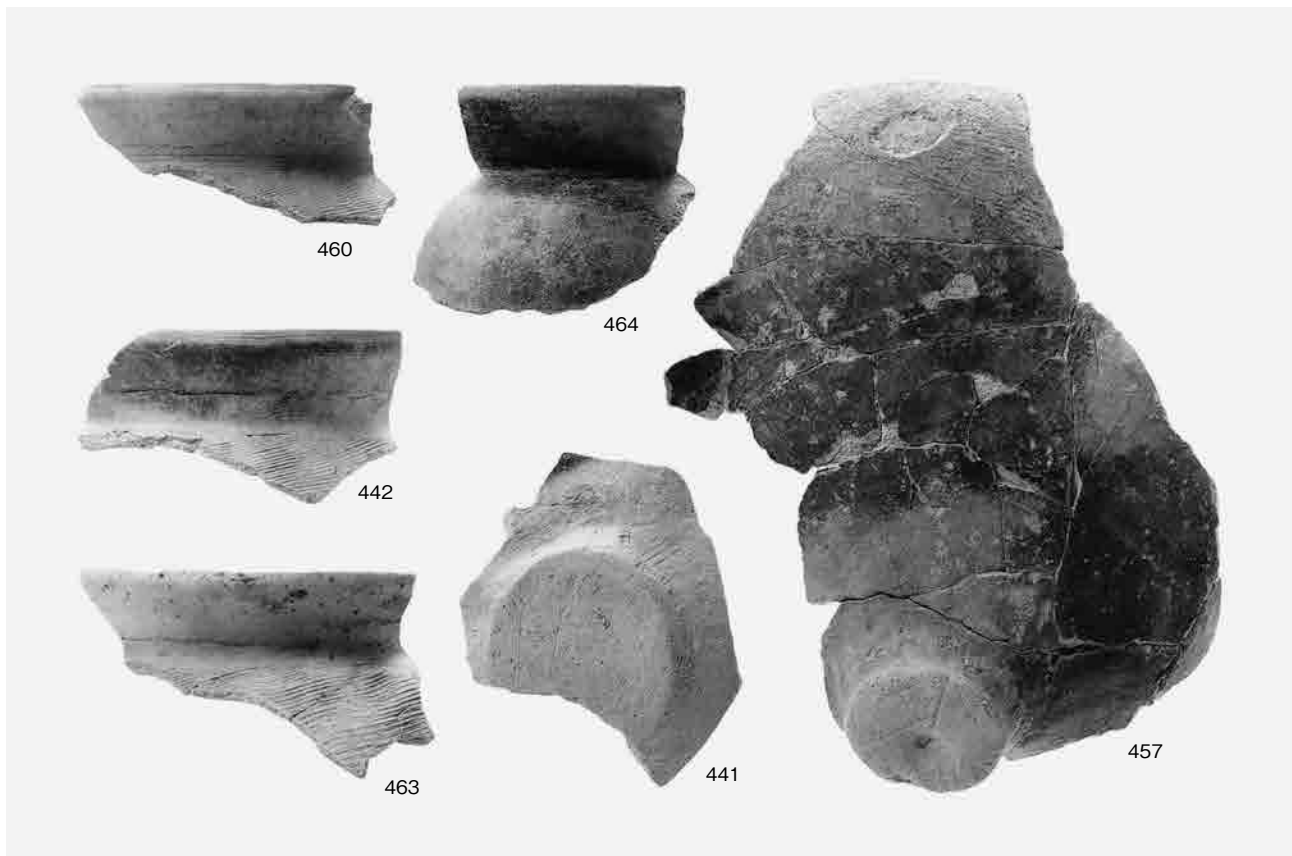
(2) 出土土器17



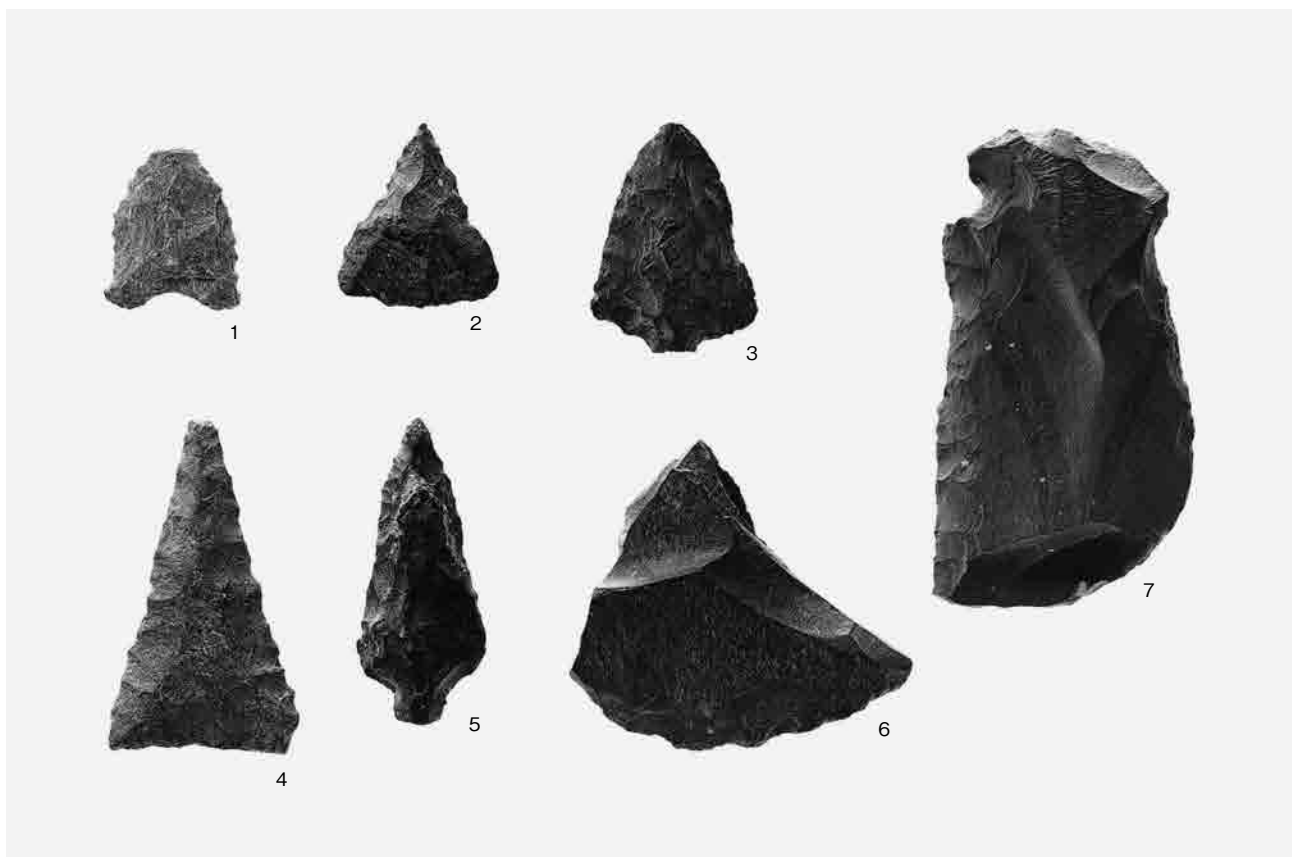
(1) 出土土器18



(2) 出土土器19



(1) 出土土器20



(2) 石製品 1 石器



677



677



678



678

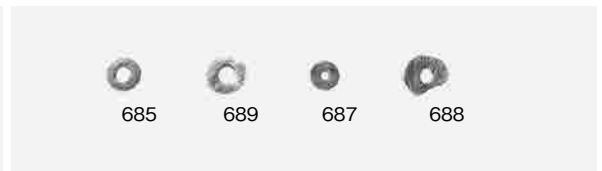
(1) 石製品 2 石器



684



684

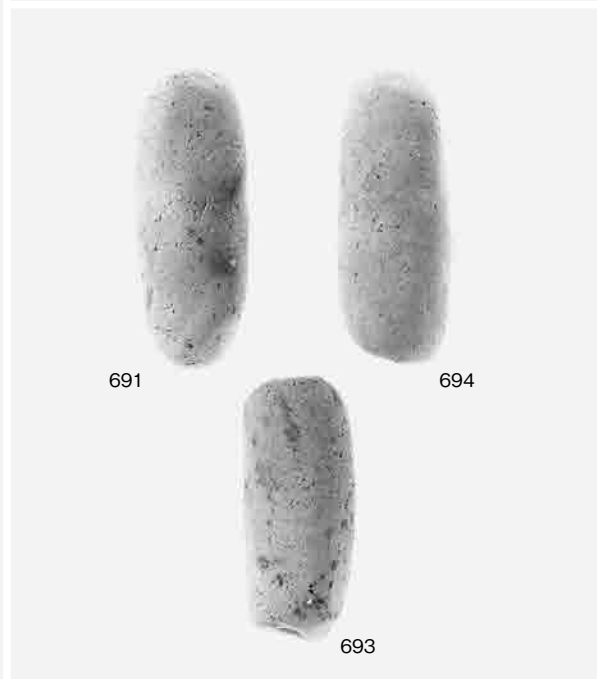


685

689

687

688

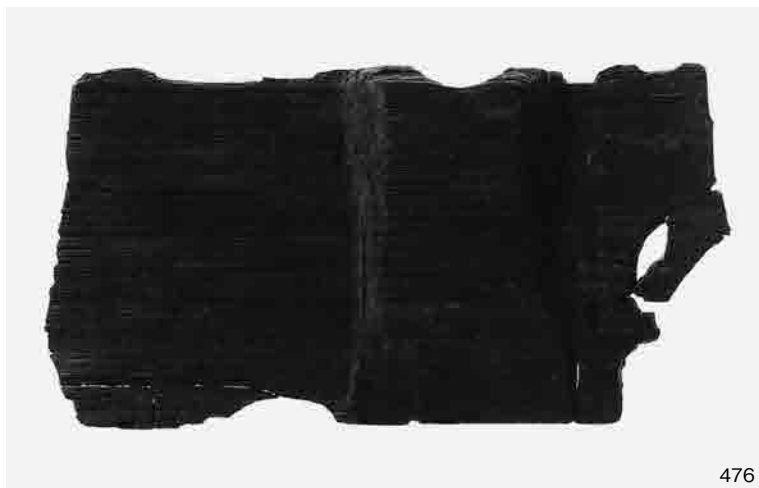


691

694

693

(2) 石製品 玉類・土製品 土錘



476



477



478



479



482



483



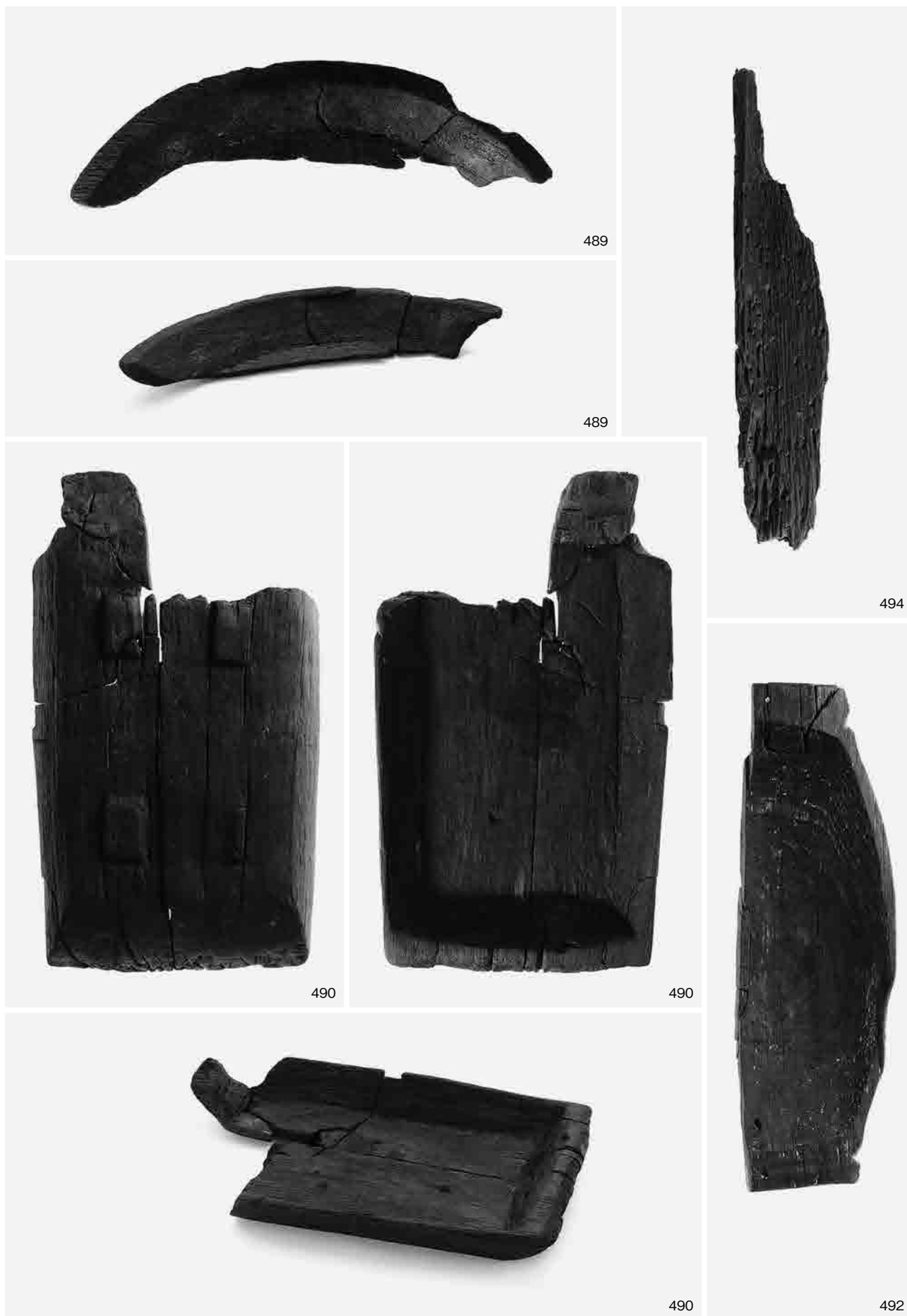
484

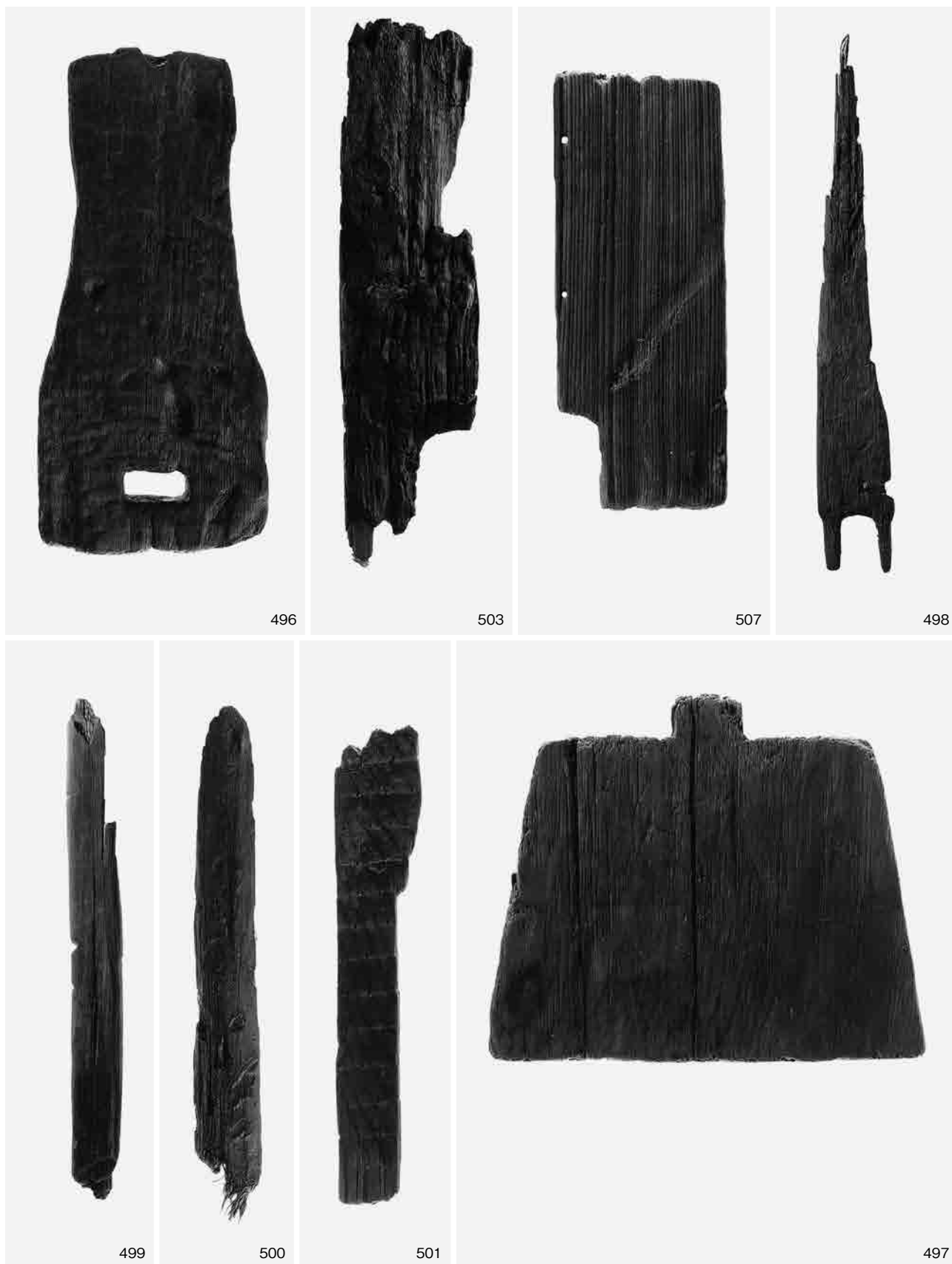


484

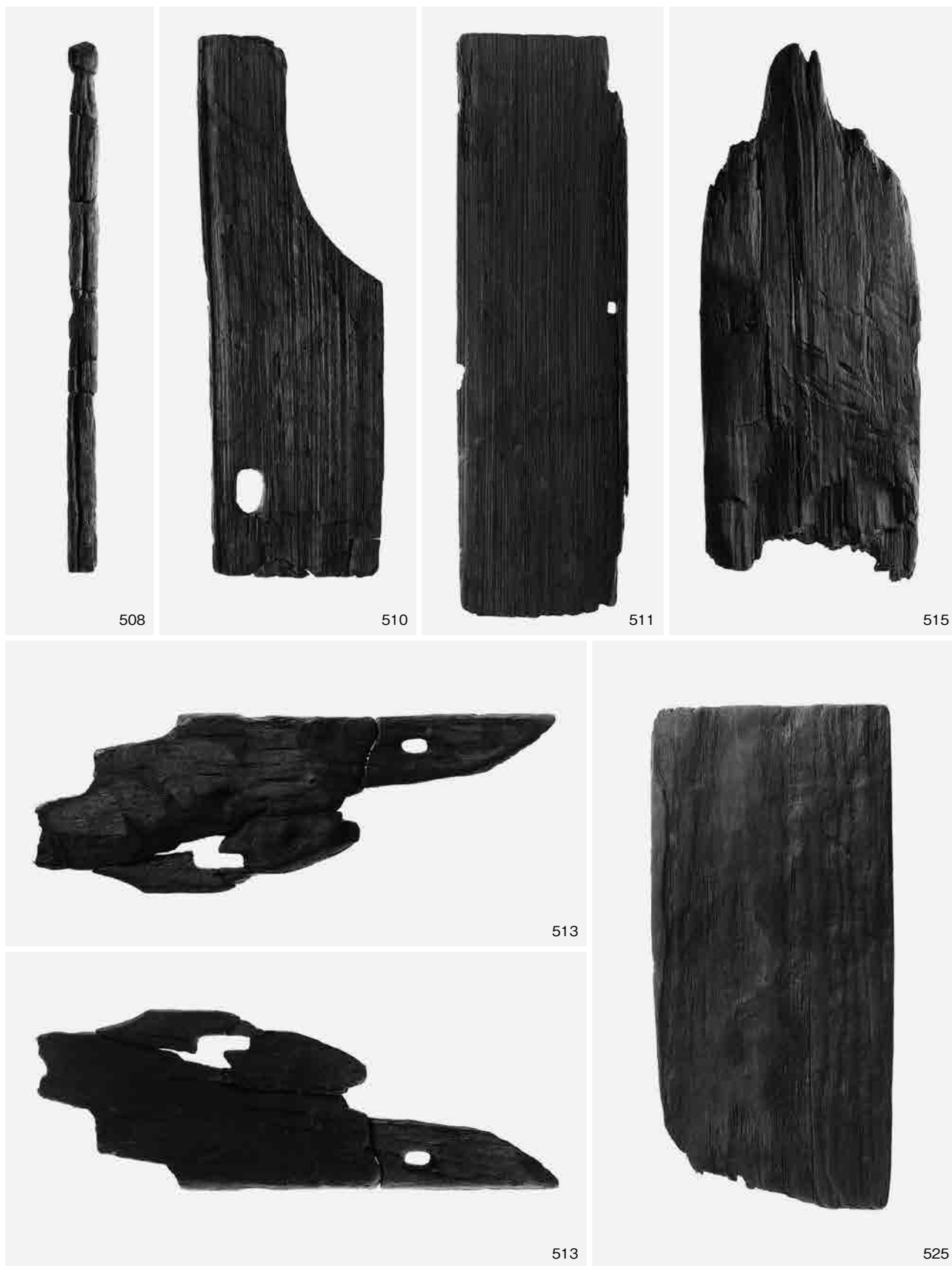


488

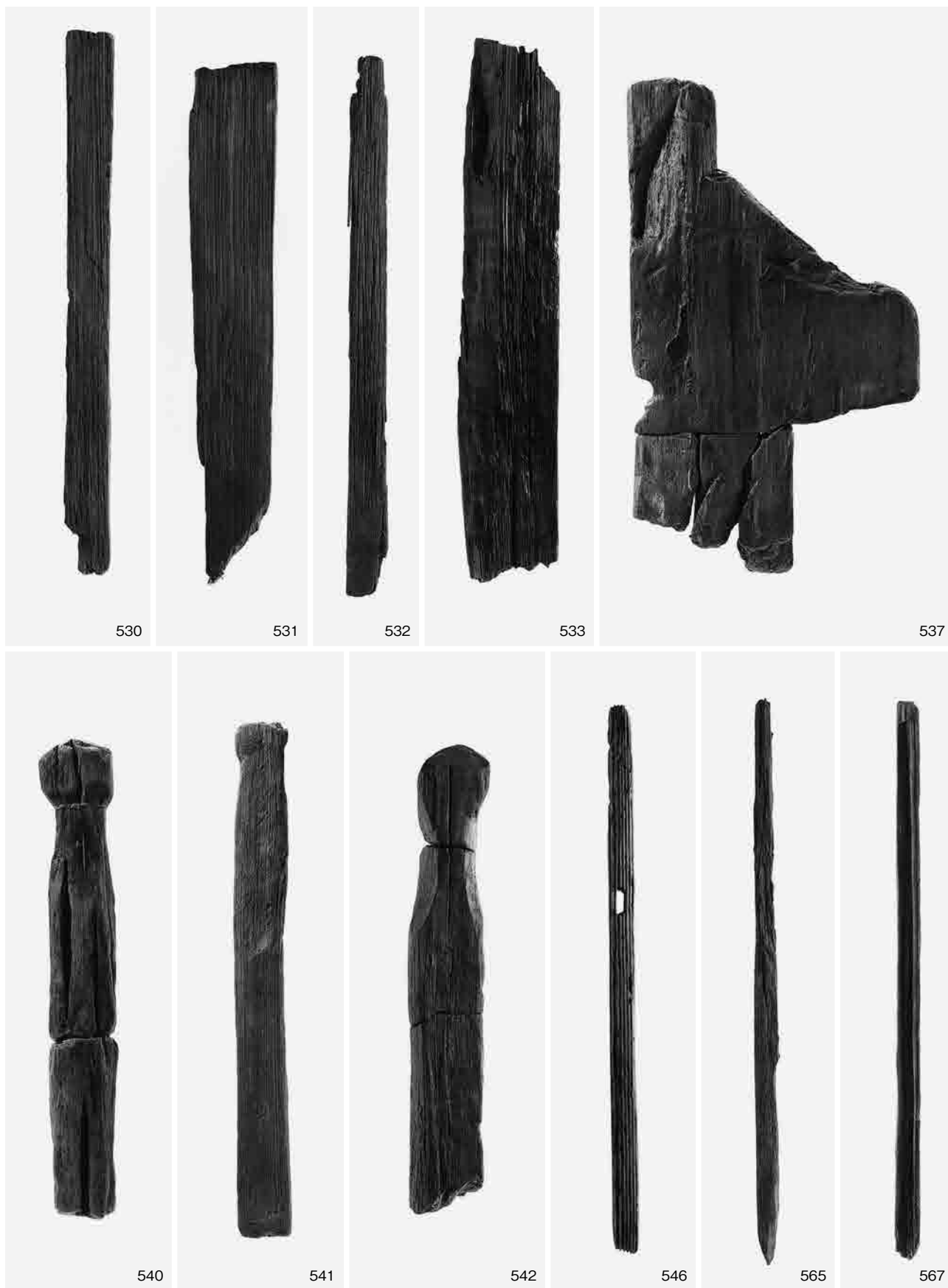




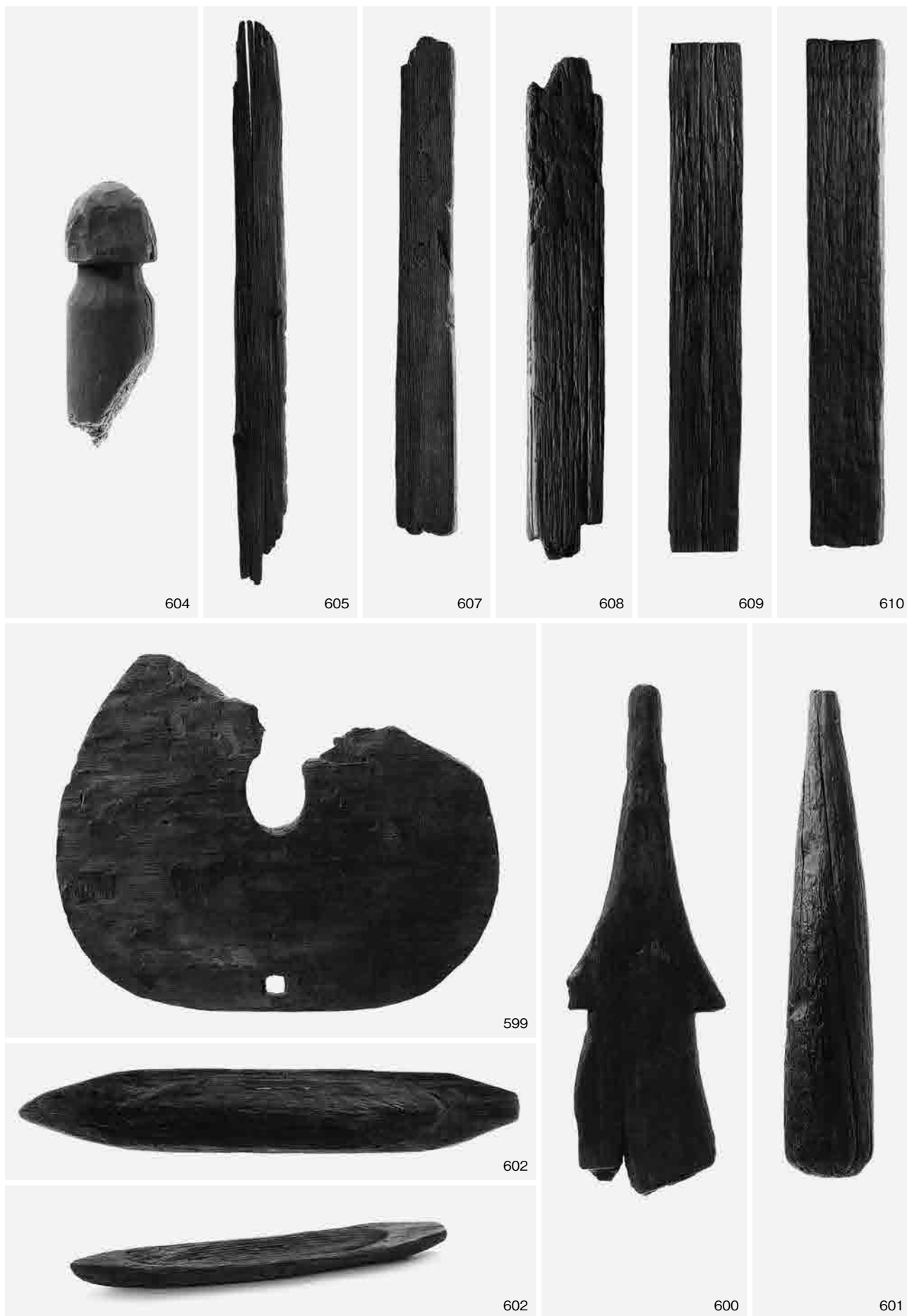
木製品 3

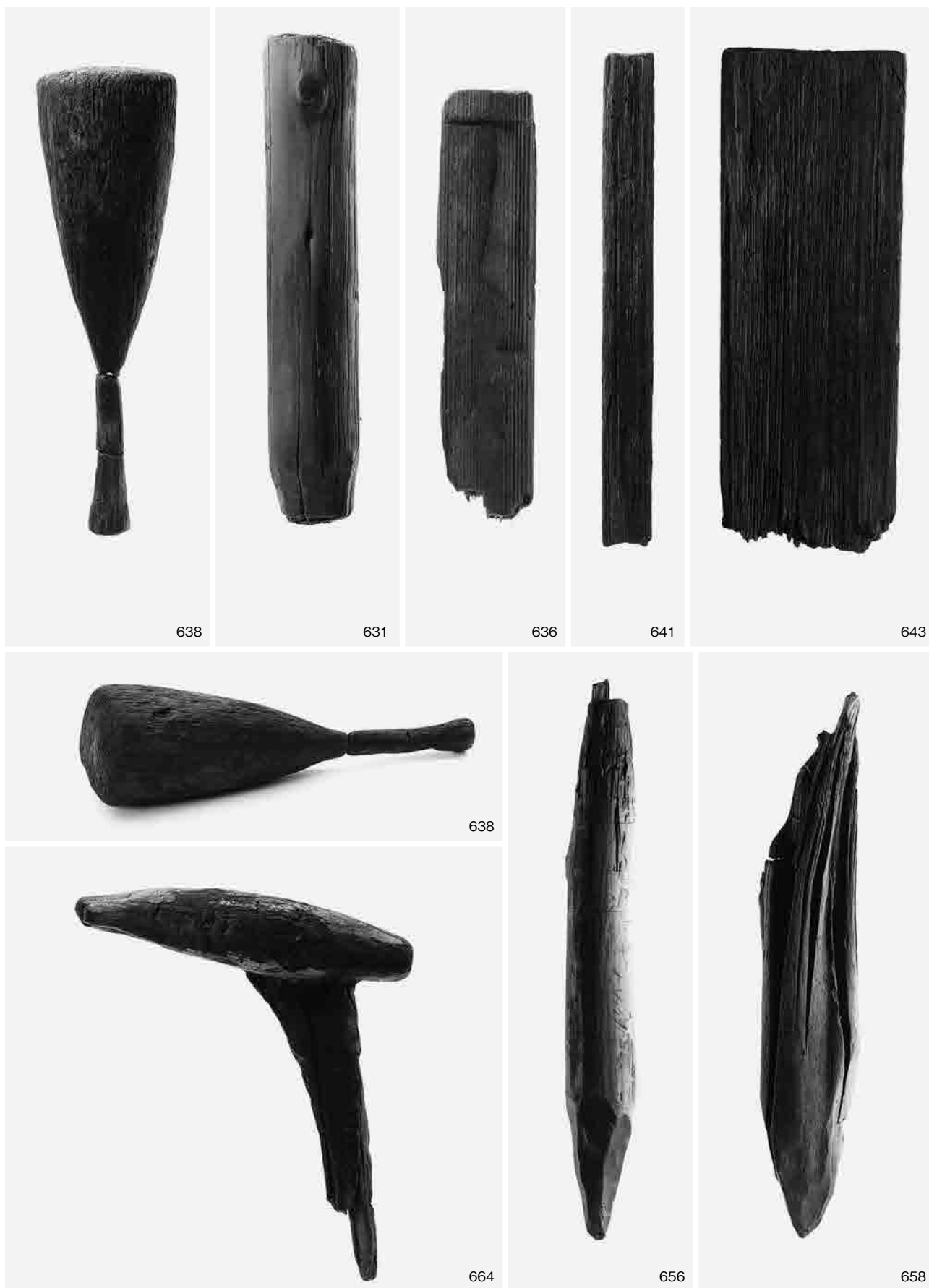


木製品 4



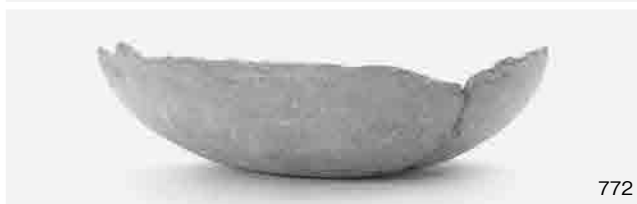
木製品 5





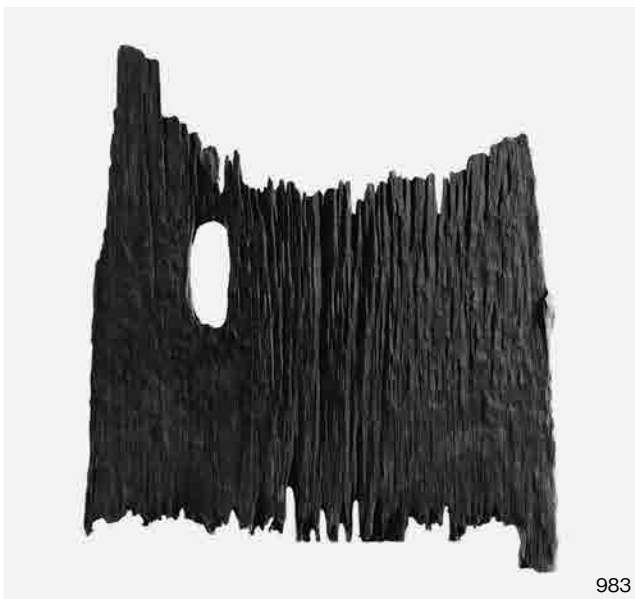


出土土器21





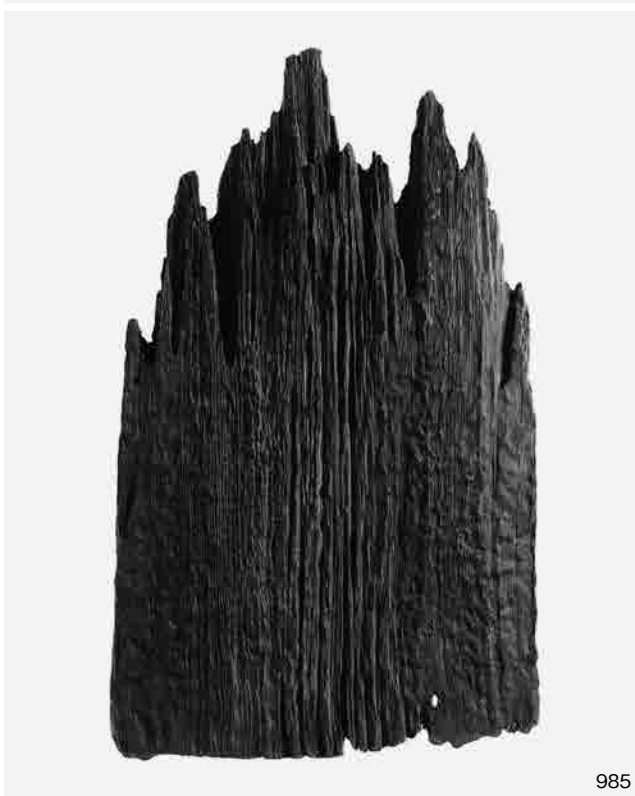
982



983



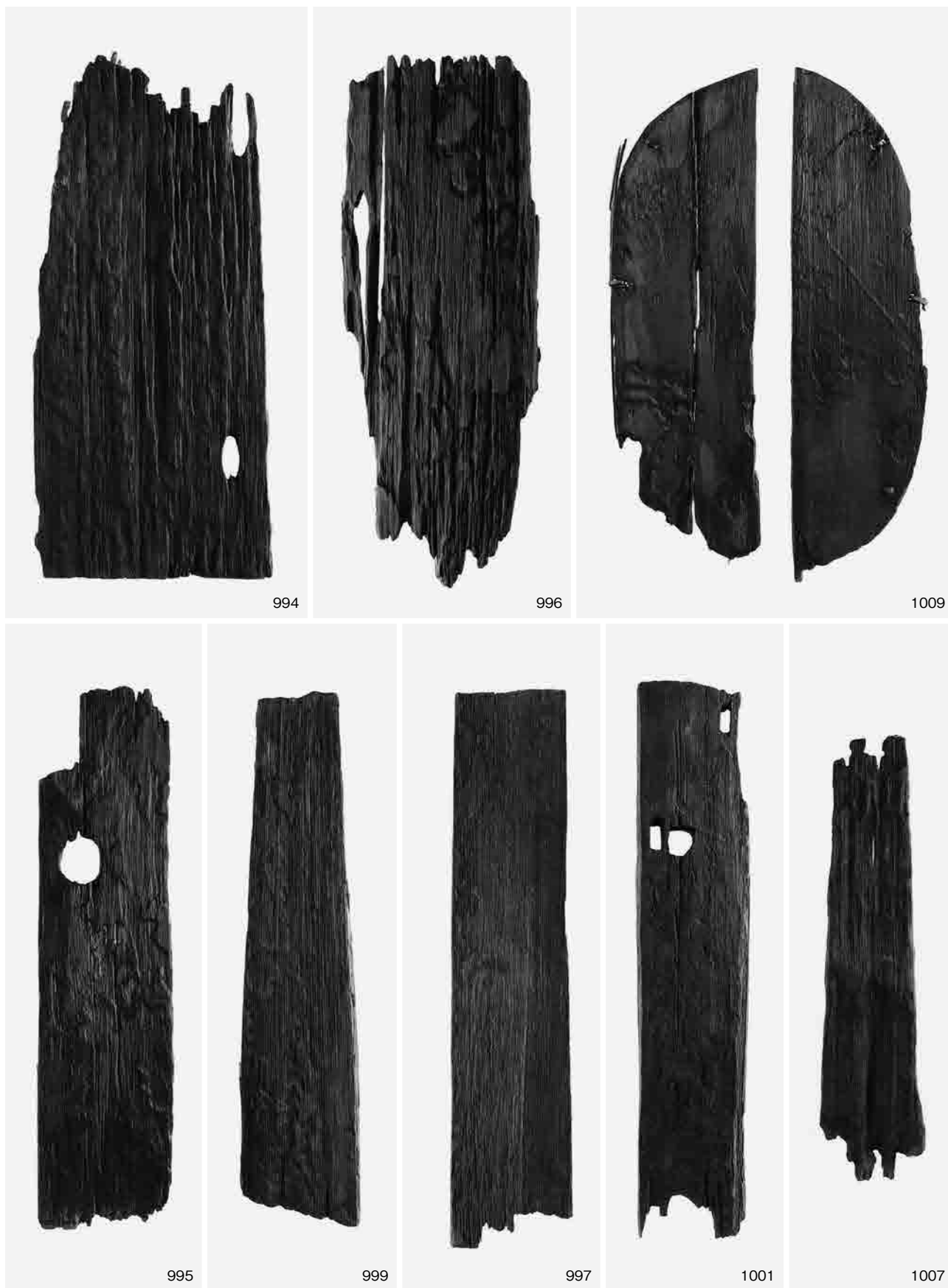
984



985

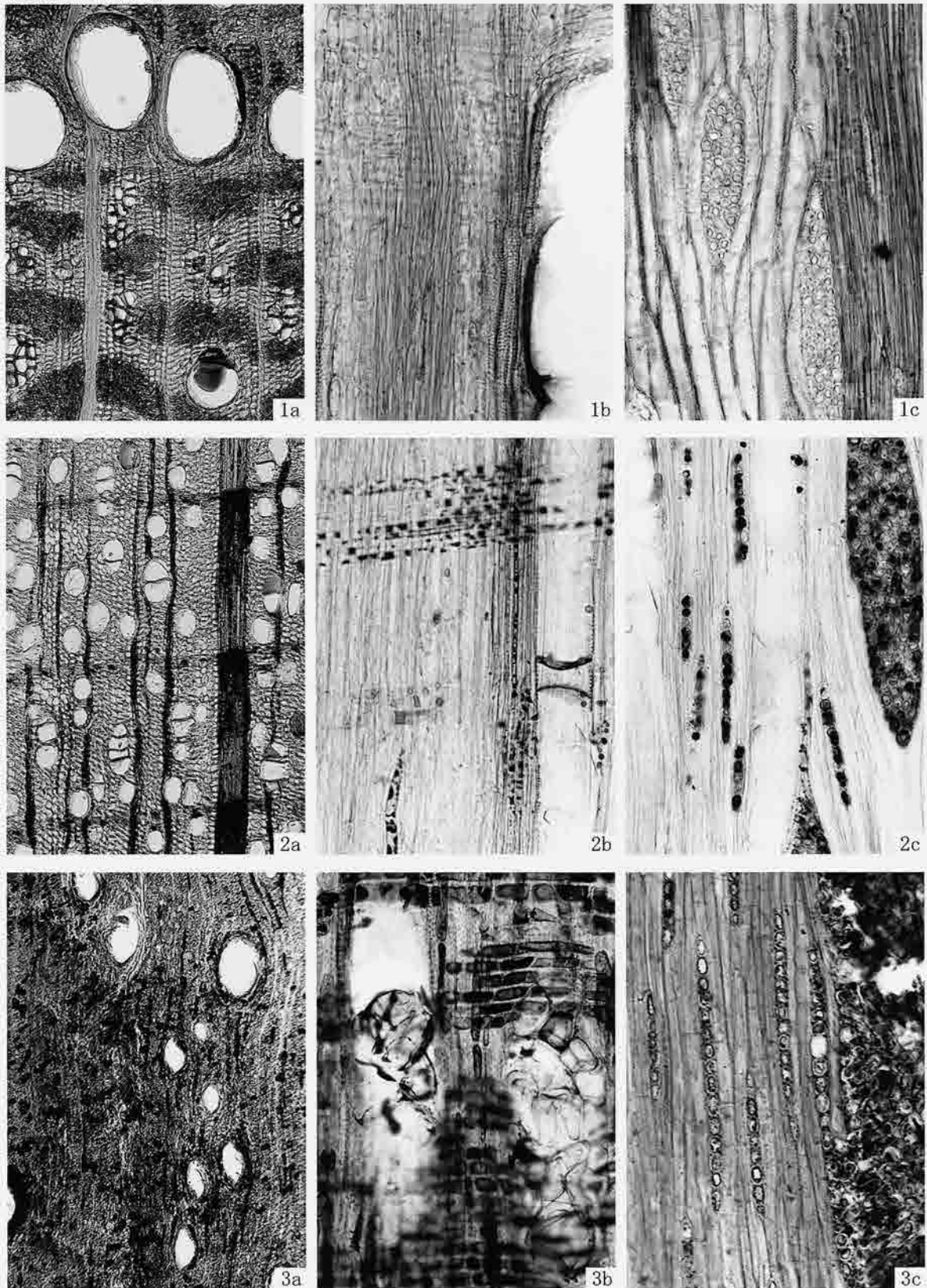


987



木製品 9

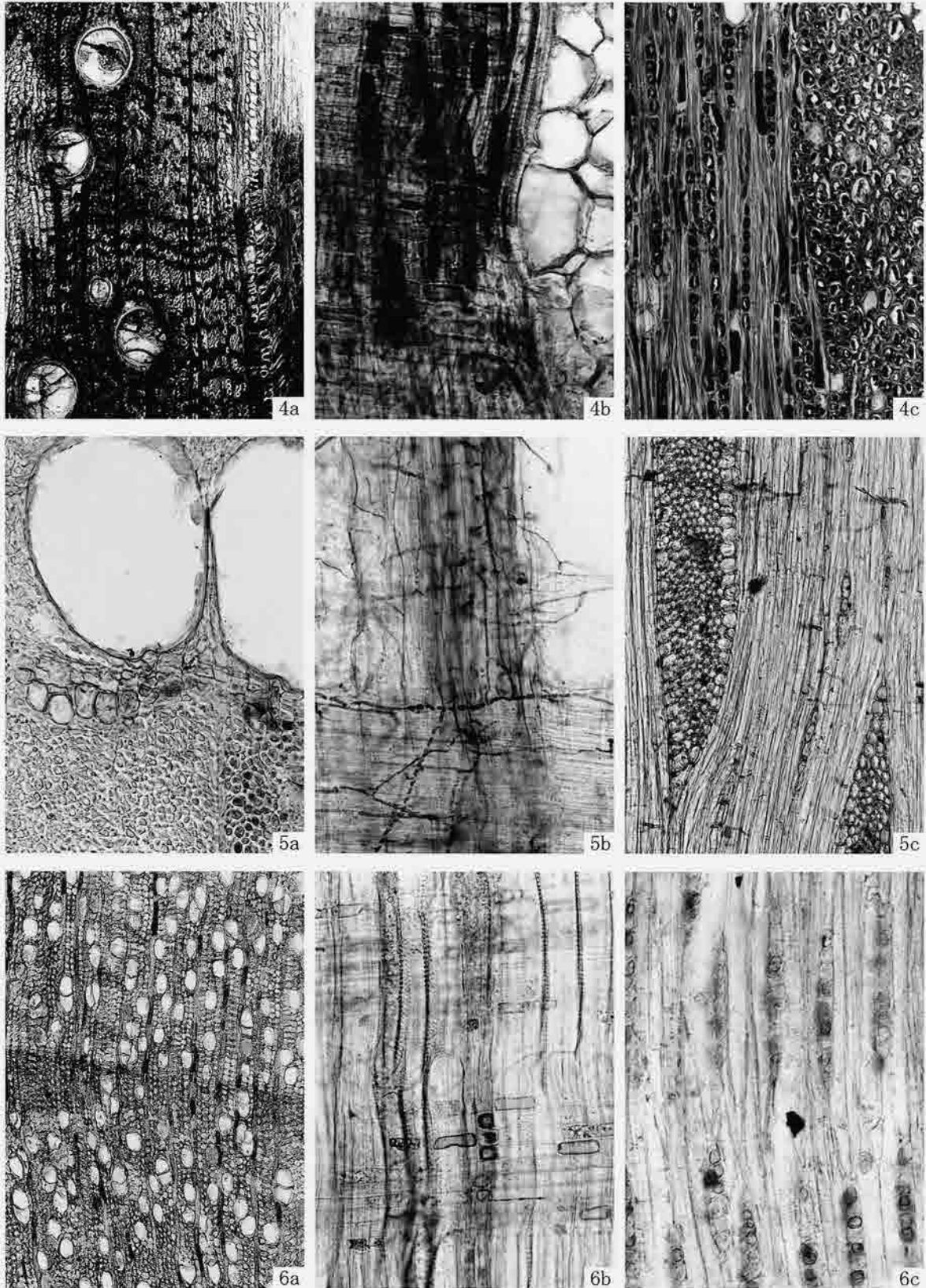
図版 1 木材(1)



1. ムクロジ(試料A)
 2. カエデ属(試料B)
 3. コナラ属アカガシ亜属(試料C)
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目

100 μ m: a
 100 μ m: b, c

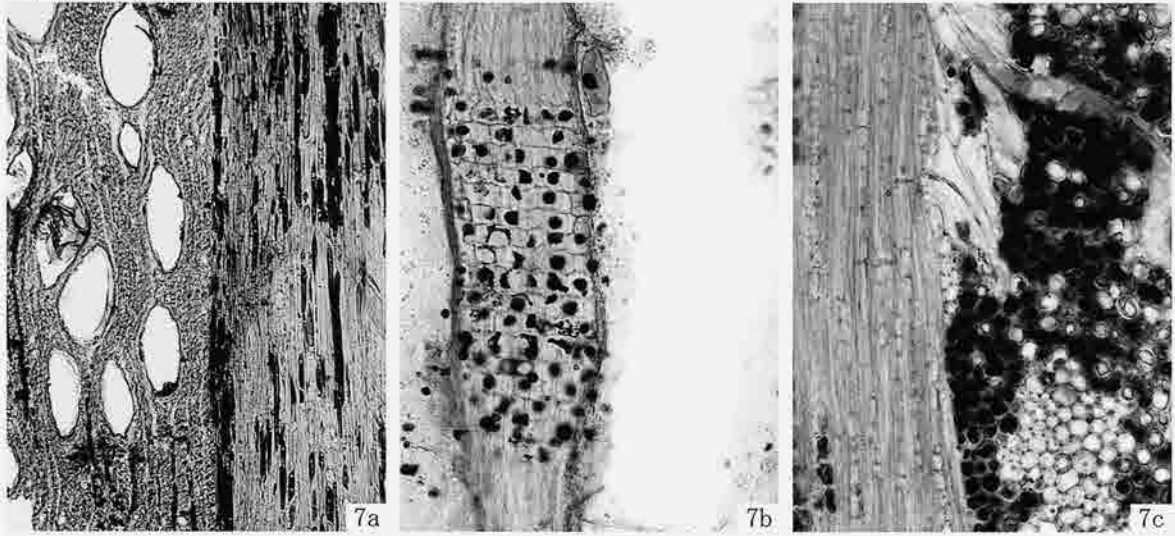
図版 2 木材(2)



4. コナラ属アカガシ亜属(試料D)
 5. エノキ属(試料E)
 6. トチノキ(南壁にささっている材)
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目

100 μ m: a
 100 μ m: b, c

図版 3 木材(3)



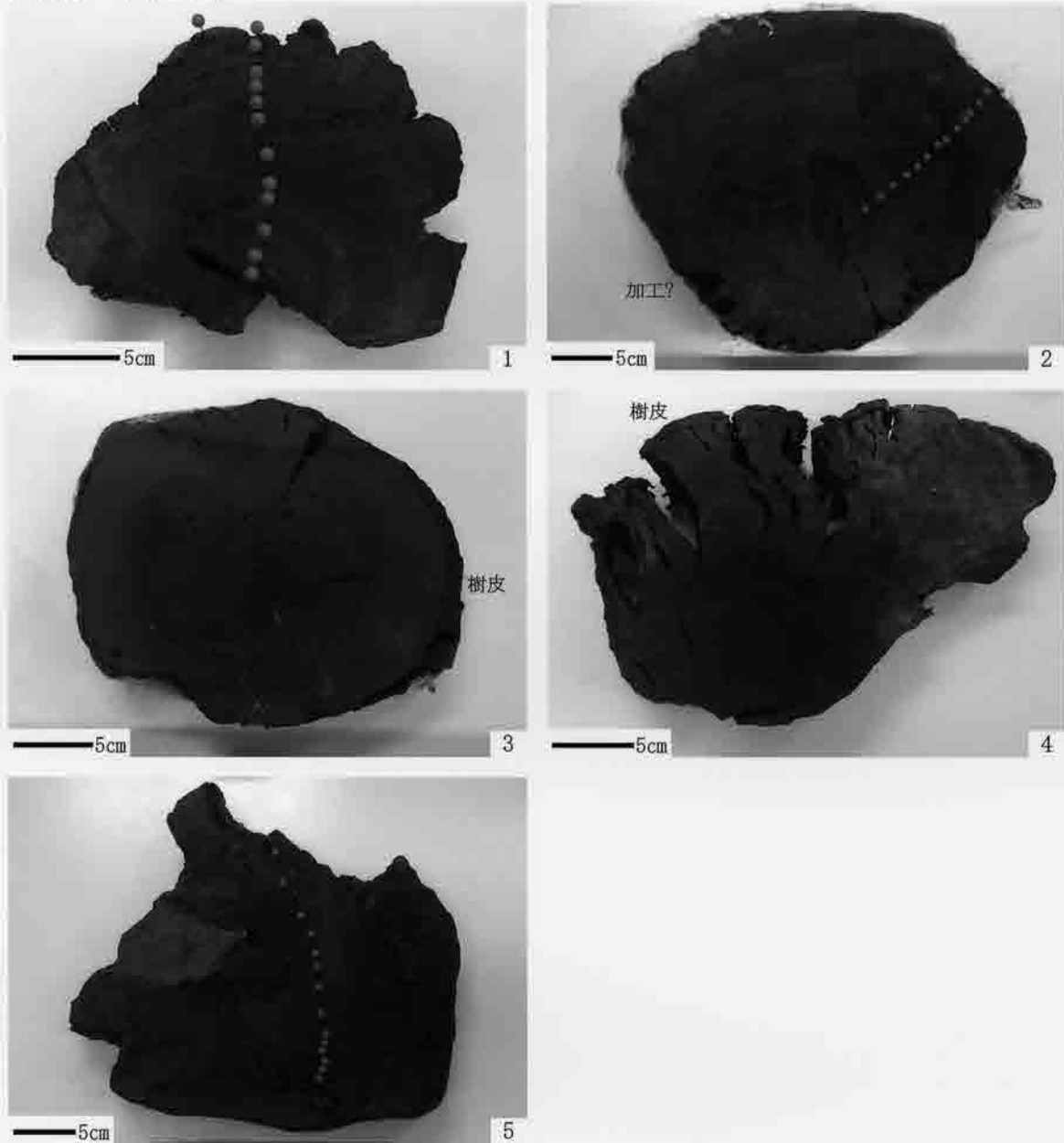
7. コナラ属アカガシ亜属(北壁にささっている材)

a: 木口, b: 柁目, c: 板目

100 μ m: a

100 μ m: b, c

図版 4 年輪の様子



1. 試料A
2. 試料B
3. 試料C
4. 試料D
5. 試料E

試料A, B, Eの赤いピンは、5年毎の年輪を示す。



(1)種実 モモ(佐々木由香氏提供)



(2)種実 クルミ(佐々木由香氏提供)

報告書抄録

ふ り が な	京都府遺跡調査報告集
書 名	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう
副 書 名	
巻 次	第173冊
シ リ ー ズ 名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第173冊
編 著 者 名	筒井崇史・高野陽子・関広尚世・福山博章・黒坪一樹・増田富士雄・桐井理揮・長友朋子・吉村慎太郎・中塚 武・李 貞・對馬あかね・佐野雅規・伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtadze・小林克也・能代修一・村上由美子・佐々木由香・小林和貴・鈴木三男・西原和代・岡田麻衣子・高橋 悠・鶴来航介・柳原麻子・浦 蓉子・バンダリスダルシャン
編 集 機 関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所 在 地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番03 Tel. 075(933) 3877
発 行 年 月 日	西暦2018年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
しもみずしいせき	きょうとふじょうようしみずしいしょうぐん・くらがい・みやのぼんば、てらだかなお・いまばし、					20120521 ～ 20130308 20130422 ～ 20140227 20140422 ～ 20150227	1,770 2,050 1,600	道路建設
下水主遺跡第1・4・6次	京都府城陽市水主大將軍・倉貝・宮馬場、寺田金尾・今橋	26207	88	34° 50' 51"	135° 45' 43"			

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下水主遺跡第1・4・6次	集落跡 生産遺跡	弥生～中世	島畑・土坑・柱穴・井戸・溝(土器溜まり・護岸遺構)	弥生土器・土師器・須恵器・石器・木製品・土製品	

所収遺跡名	要 約
下水主遺跡第1・4・6次	<p>中世の島畑の下層で、古墳時代後期～飛鳥時代の柱穴群や井戸、弥生時代の土坑・溝などを検出した。弥生時代の溝は、後期から古墳時代前期までの遺物が各層から出土し、長期間にわたって使用されたことがわかった。溝の岸には杭で護岸されていたり、再掘削されていたりしており、人間の手が加えられていることが視われる。このような溝の規模は、幅10.5～13.7mを測ることや、埋土に木津川由来の砂層が認められることから、木津川に通じる水路と判断されるものである。東海系を主体とする外来の土器が多く出土することから、水運を利用した東海地域との関係性を示すものと考えられる。古墳時代前期には溝の埋積が進み、水路の機能はすでに失われたが、穿孔された土器や赤彩された土器や、舟形木製品・陽物形木製品などの祭祀具が含まれており、水辺の祭祀が執り行われたものと判断される。</p>

京都府遺跡調査報告集 第 173 冊

平成30年 3 月31日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961 Fax (075)231-7141